

杏林大学研究業績集の発行に寄せて

杏林大学の教職員の研究成果を広く社会に向けて発信し、社会で活用していくことは、大学の重要な使命のひとつです。

本学では、教員の研究成果を公表すべく、杏林大学研究業績集を発行しています。これは本学の研究状況を公表し、学内外においての共同研究の活発化、産学連携のシーズ発掘を期待したものです。

杏林大学は研究をより前進させるため、平成 26 年 4 月 1 日より“研究推進センター”を開設しました。杏林大学研究業績集の取り纏めも、研究推進センターが行っております。研究推進センター開設により一層の研究環境改善や研究活動の活性化ができるよう取り組みを進めております。

最後に、本業績集の発行は、全学の教員の協力がなければ不可能でした。またこれを取り纏め頂いた、教員、職員の尽力は誠に大きなものでした。心より感謝申し上げます。

平成 28 年 3 月

学長 跡見 裕

研究推進センターのミッション

本学の研究環境を整備し研究活動をより活性化させることを目的に、平成 26 年 4 月に杏林大学研究推進センターが設立されました。研究推進センターのミッションは数多くありますが、そのひとつは本学の研究者が行った研究成果を広く社会に公表することです。

現在、杏林大学には約 650 名の専任教員が在籍しており、様々な研究が行われております。その研究成果を整理し研究業績集として公表することにより、学際研究の活発化や産学官連携のシーズ発掘に繋がればと期待しております。この研究業績集を沢山の方々にご覧頂き、本学の研究者の研究についてご理解賜ると同時に本研究成果をご活用頂ければ幸いです。

八王子にあった学部・大学院の移転事業が終了し、2016 年 4 月には、いよいよ、井の頭キャンパスと三鷹キャンパスでの教育・研究が始まります。引き続き、皆様方のご指導ご助言を賜りますようお願い申し上げます。

平成 28 年 3 月

研究推進センター長

小林 富美恵

目 次

1	講 演 (学会・研究会，国際学会，地域の講演会， ポスターセッション，一般向け公開講座等)	医学部 1	⇒
	論 文 (原著，総説，依頼総説，症例報告等， 専門学術誌に掲載された学術著作等)	保健学部 117	⇒
	著 書 (分担執筆，監修，翻訳，電子メディアを含む)	総合政策学部 145	⇒
	特許等知的財産関係，報告書	外国語学部 153	⇒
	その他	CCRC 研究所 163	⇒
2	共同研究	167	⇒
3	研究費採択一覧	245	⇒
4	学会等の研究活動に対する表彰者一覧	257	⇒
5	学位論文要旨および審査要旨 医学研究科 保健学研究科 国際協力研究科	261	⇒

講演・論文・著書・特許等知的財産関係・報告書・その他	医 学 部
	保 健 学 部
	総 合 政 策 学 部
	外 国 語 学 部
	C C R C 研 究 所
共同研究	
研究費採択一覧	
学会等の研究活動に対する表彰者一覧	
学位論文要旨および審査要旨	

医学部

第一内科学教室（呼吸器内科）	3	放射線腫瘍学教室	87
第一内科学教室（腎臓・リウマチ膠原病内科）	7	麻酔科学教室	87
第一内科学教室（神経内科）	11	臨床検査医学教室	87
第二内科学教室（循環器内科）	13	総合医療学教室	90
第二内科学教室（血液内科）	19	リハビリテーション医学教室	93
第三内科学教室（消化器内科）	19	「リハビリテーション室」	94
第三内科学教室（糖尿病・内分泌・代謝内科）	24	脳卒中医学教室	95
腫瘍内科学教室	30	解剖学教室（肉眼解剖学）	97
高齢医学教室	35	解剖学教室（顕微解剖学）	98
精神神経科学教室	38	統合生理学教室	99
小児科学教室	40	細胞生理学教室	100
外科学教室（消化器・一般外科）	41	生化学教室（1）	100
外科学教室（呼吸器・甲状腺外科）	46	生化学教室（2）	100
外科学教室（乳腺外科）	48	薬理学教室	101
小児外科学教室	49	病理学教室	102
救急医学教室	49	感染症学教室（微生物学）	105
脳神経外科学教室	51	感染症学教室（寄生虫学）	108
心臓血管外科学教室	56	衛生学公衆衛生学教室	110
整形外科科学教室	57	法医学教室	113
皮膚科学教室	60	共同研究施設 RI 部門	113
形成外科学教室	64	フローサイトメトリー部門	114
泌尿器科学教室	67	実験動物施設部門	114
多発性嚢胞腎研究講座	71	生物学教室	115
眼科学教室	73	物理学教室	115
耳鼻咽喉科学教室	80	化学教室	115
産科婦人科学教室	83	英語教室	115
放射線医学教室	86		

第一内科学教室
(呼吸器内科)

講演

1. 佐久間翔, 皿谷健: 発熱, 関節痛を主訴とし慢性腎不全の二次性副甲状腺機能亢進症による片側性の異所性肺石灰化症を契機に診断された急性リンパ球性白血病の一例. 第111回日本内科学会総会, 東京, 2014年4月11-13日.
2. 滝澤始: COPD の気管支拡張療法: エビデンスから実地診療へ. 第37回日本呼吸器内視鏡学会学術集会, 京都, 2014年4月14-15日.
3. 小出卓, 大場智広, 松林南子, 川辺梨恵, 奥田良, 天野雅子, 松島秀和: 当院における EBUSTBNA の臨床的検討. 第37回日本呼吸器内視鏡学会学術集会, 京都, 2014年4月14-15日.
4. 肥留川一郎, 横山琢磨, 平田彩, 西沢知剛, 石田学, 小田未来, 中本啓太郎, 高田佐織, 中里陽子, 石井晴之, 武井秀史, 近藤武彦, 滝澤始, 後藤元: 当院呼吸器内科における肺門および縦隔リンパ節腫大に対する超音波気管支鏡下針生検の有用性の検討. 第37回日本呼吸器内視鏡学会学術集会, 京都, 2014年4月14-15日.
5. 小田未来, 横山琢磨, 平田彩, 西沢知剛, 石田学, 肥留川一郎, 中本啓太郎, 高田佐織, 石井晴之, 滝澤始, 後藤元: 超音波気管支鏡下リンパ節生検 (EBUS-TBNA) で診断した胸膜中皮腫の1例. 第37回日本呼吸器内視鏡学会学術集会, 京都, 2014年4月14-15日.
6. 中本啓太郎, 和田裕雄, 佐田充, 乾俊哉, 中村益夫, 本田紘二郎, 田中康隆, 高田佐織, 渡辺雅人, 横山琢磨, 皿谷健, 倉井大輔, 石井晴之, 滝澤始, 後藤元: Flagellin によるヒト肺胞上皮細胞の CXCL8/IL-8産生への影響. 第33回気道分泌研究会, 大阪, 2014年4月19日.
7. 滝澤始: 呼吸器感染症における炎症病態とその治療戦略. 第54回日本呼吸学会学術講演会, 大阪, 2014年4月25-27日.
8. 石井晴之, 田澤立之, 皿谷健, 倉井大輔, 横山恵美, 横山琢磨, 滝澤始, 井上義一, 中田光, 後藤元: わが国における骨髓異形成症候群に続発した肺胞蛋白症の予後について. 第54回日本呼吸学会学術講演会, 大阪, 2014年4月25-27日.
9. 皿谷健: Mycoplasma pneumoniae 及び Chlamydia pneumoniae の成人呼吸器疾患における持続感染の前視方的調査研究. 第54回日本呼吸学会学術講演会, 大阪, 2014年4月25-27日.
10. 和田裕雄, 森田恵子, 乾俊哉, 中村益夫, 中本啓太郎, 本田紘二郎, 佐田充, 高田佐織, 横山琢磨, 倉井大輔, 後藤元, 佐藤徹, 滝澤始: 肺動脈高血圧患者の強制オシレーション法 (FOT) による呼吸メカニクスの解析. 第54回日本呼吸学会学術講演会, 大阪, 2014年4月25-27日.
11. 渡辺雅人, 滝澤始, 後藤元: 感染症バイオマーカープロカルシトニン (PCT)-CAP における PCT 継時測定による解析と考察. 第54回日本呼吸学会学術講演会, 大阪, 2014年4月25-27日.
12. 中本啓太郎, 和田裕雄, 佐田充, 乾俊哉, 中村益夫, 本田紘二郎, 田中康隆, 高田佐織, 渡辺雅人, 横山琢磨, 皿谷健, 倉井大輔, 石井晴之, 滝澤始, 後藤元: Flagellin によるヒト肺胞上皮細胞への影響. 第54回日本呼吸学会学術講演会, 大阪, 2014年4月25-27日.
13. 平田彩, 横山琢磨, 高田佐織, 肥留川一郎, 辻本直貴, 佐田充, 小川ゆかり, 中島明, 蘇原慧伶, 田中康隆, 石井晴之, 滝澤始, 後藤元: 経口補水液を用いた Cisplatin hydration の安全性と忍容性についての探索的研究. 第54回日本呼吸学会学術講演会, 大阪, 2014年4月25-27日.
14. 皿谷健, 倉井大輔, 石井晴之, 木村博一, 佐々木佳子, 塚越博之, 滝澤始, 後藤元: Mycolasma pneumoniae 及び Chlamydia pneumoniae の成人呼吸器疾患における持続感染の前視方的調査研究. 第54回日本呼吸学会学術講演会, 大阪, 2014年4月25-27日.
15. 渡辺雅人, 滝澤始, 田村仁樹, 中島明, 後藤元: 感染症バイオマーカー プロカルシトニン (PCT)-CAP における PCT 維持測定による解析と考察. 第54回日本呼吸学会学術講演会, 大阪, 2014年4月25-27日.
16. 蘇原慧伶, 皿谷健, 石井晴之, 滝澤始, 後藤元: 膠原病患者の診断における Mechanic's hands の有用性の検討. 第54回日本呼吸学会学術講演会, 大阪, 2014年4月25-27日.
17. 中本啓太郎, 和田裕雄, 佐田充, 乾俊哉, 小川ゆかり, 中村益夫, 本田紘二郎, 中島明, 蘇原慧伶, 山田敦子, 長友禎子, 田中康隆, 高田佐織, 渡辺雅人, 横山琢磨, 皿谷健, 倉井大輔, 石井晴之, 滝澤始, 後藤元: 当院における重症喘息の臨床的検討. 第54回日本呼吸学会学術講演会, 大阪, 2014年4月25-27日.
18. 倉井大輔, 横山恵美, 皿谷健, 塚越博之, 木村博一, 石井晴之, 滝澤始, 後藤元: 成人喘息発作における呼吸器ウィルスの関与についての検討. 第54回日本呼吸学会学術講演会, 大阪, 2014年4月25-27日.
19. 横山琢磨, 高田佐織, 肥留川一郎, 平田彩, 乾俊哉, 皿谷健, 倉井大輔, 和田裕雄, 滝澤始, 後藤元: 未治療 IIIB/IV 非扁平上皮非細胞肺癌に対する Cisplatin+Pemetrexed+Bevacizumab 療法後の Pemetrexed 維持療法第 II 相試験. 第54回日本呼吸学会学術講演会, 大阪, 2014年4月25-27日.
20. 乾俊哉, 和田裕雄, 佐田充, 中本啓太郎, 中村益夫, 本田紘二郎, 田中康隆, 高田佐織, 渡辺雅人, 横山琢磨, 皿谷健, 倉井大輔, 石井晴之, 滝澤始, 後藤元: 気管支喘息, 肺気腫症, オーバーラップ症候群の表現型検討と比較. 第54回日本呼吸学会学術講演会, 大阪, 2014年4月25-27日.
21. 中本啓太郎, 皿谷健, 乾俊哉, 高田佐織, 横山琢磨, 倉井大輔, 和田裕雄, 石井晴之, 福岡利仁, 軽部美穂, 駒形嘉紀, 有村嘉宏, 滝澤始, 後藤元: 第26回日本アレルギー学会春季臨床大会, 京都, 2014年5月9-11日
22. Ishii H, Tazawa R, Inoue Y, Mikura S, Yomoto M, Nagatomo T, Inui T, Handa T, Hashimoto K, Tomii K, Nakata K: Secondary pulmonary alveolar proteinosis complicating myelodysplastic syndrome results in a worsening of prognosis. American Thoracic Society 2014, USA, May 16th-21st, 2014
23. Nakamoto K, Wada H, Sada M, Inui T, Nakamura M, Honda K, Tanaka Y, Takata S, Watanabe M, Yokoyama T, Saraya T, Kurai D, Ishii H, M.D, Takizawa H, Goto H: Pseudomonas Aeruginosa-Derived Flagellin Stimulates IL-8 Production In Human Alveolar Epithelial Cells A549. American Thoracic Society 2014, USA, May 16th-21st, 2014.
24. Watanabe M, Takizawa H, Tamura M, Nakajima A, Honda K, Nakamura M, Wada H, Ishii H, Goto H: Soluble ST2 As A Prognostic Marker Of Community-Acquired Pneumonia. American Thoracic Society 2014, USA, May 16th-21st, 2014.
25. Nishizawa T, Kurai D, Saraya T, Nakamoto K, Ishii H, Soharu E, Takizawa H: Antemortem Diagnosis With Multiple Random Skin Biopsies And Transbronchial Lung Biopsy In A Patient With Intravascular Large B Cell Lymphoma, So-Called "Asian Variant Lymphoma". American Thoracic Society 2014, USA, May 16th-21st, 2014.
26. Kurai D, Saraya T, Ishii H, Tukagoshi H, Kimura H, Takizawa H:

- Respiratory Viral Infection In Hospitalized Adult Patients In Japanese Tertiary Hospital. American Thoracic Society 2014, USA, May 16th-21st, 2014.
27. 麻生純平, 皿谷健, 田中康隆, 小川ゆかり, 辻晋吾, 滝澤始: 実家帰省で発熱, 呼吸困難の出現を繰り返した過敏性肺炎の一例. 第73回臨床アレルギー研究会, 東京, 2014年6月14日.
 28. 辻本直貴, 皿谷健, 倉井大輔, 石井晴之, 滝澤始, 後藤元: 胸部 CT での Split pleura sign と胸水の画素値を用いた膿胸と肺炎随伴性胸水の鑑別の検討. 第88回日本感染症学会学術講演会, 福岡, 2014年6月18-20日.
 29. 下田真史, 皿谷健, 米谷正太, 荒木光二, 牧野博, 倉井大輔, 横山琢磨, 高田佐織, 田中康隆, 蘇原慧伶, 中島 明, 小川ゆかり, 辻本直貴, 佐田充, 和田裕雄, 石井晴之, 滝澤始, 後藤元: 喀痰グラム染色における貧食像の有無と感染症診断に対する有用性についての検討. 第88回日本感染症学会学術講演会, 福岡, 2014年6月18-20日.
 30. 小川ゆかり, 倉井大輔, 肥留川一郎, 小田未来, 乾俊哉, 中本啓太郎, 皿谷健, 石井晴之, 滝澤始, 後藤元: 肺炎球菌性肺炎の検討: CAP (community acquired pneumonia) と NHCAP (healthcare associated pneumonia) の比較について. 第88回日本感染症学会学術講演会, 福岡, 2014年6月18-20日.
 31. 大熊康介, 皿谷健, 塚原弥生, 佐田充, 辻本直貴, 小川ゆかり, 中島明, 蘇原慧伶, 田中康隆, 高田佐織, 横山琢磨, 倉井大輔, 和田裕雄, 石井晴之, 滝澤始, 後藤元: 当院における成人マイコプラズマ肺炎の臨床及び画像的検討. 第88回日本感染症学会学術講演会, 福岡, 2014年6月18-20日.
 32. 皿谷健, 倉井大輔, 石井晴之, 木村博一, 塚越博之, 佐々木佳子, 小澤邦寿, 滝澤始, 後藤元: Mycoplasma pneumoniae 及び Chlamydia pneumoniae の成人呼吸器疾患における持続感染の前視的調査研究. 第88回日本感染症学会学術講演会, 福岡, 2014年6月18-20日.
 33. 小田未来, 倉井大輔, 大熊康介, 下田真史, 小川ゆかり, 中本啓太郎, 皿谷健, 滝澤始, 後藤元: 結核性胸膜炎確定症例の検討: 胸水貯留を引き起こす他の併存症の存在について. 第88回日本感染症学会学術講演会, 福岡, 2014年6月18-20日.
 34. 倉井大輔, 皿谷健, 石井晴之, 塚越博之, 木村博一, 滝澤始: 入院を必要とした呼吸器疾患での呼吸器ウイルスの検出と臨床的特徴について: 1 年間の前向き観察研究. 第88回日本感染症学会学術講演会, 福岡, 2014年6月18-20日.
 35. 石井晴之: 現場に役立つ画像の見方. 第10回多摩感染症薬剤師研究会, 東京, 2014年6月21日.
 36. 滝澤始: 外的環境と気管支喘息. 第2回東北 喘息・COPD フォーラム, 仙台, 2014年6月28日.
 37. 滝澤始: 細胞内分子機構とマクロライド. 第21回マクロライド新作用研究会, 東京, 2014年7月19日.
 38. 乾俊哉, 和田裕雄, 小川ゆかり, 小田未来, 高田佐織, 横山琢磨, 滝澤始, 後藤元, 新井秀信, 長瀬洋之, 山口正雄: 呼吸困難発作を繰り返し, 難治性喘息が疑われた一例. 第71回臨床アレルギー研究会, 東京, 2014年7月27日.
 39. 石井晴之: 続発性肺胞蛋白症の全国調査結果について. 平成26年度厚労科研(肺胞蛋白症, 遺伝性肺疾患に関する研究: 重症化難治化要因とその克服)第一回班会議. 大阪, 2014年8月2日.
 40. 皿谷健: 平成26年度版臨床現場ですぐに役立つナースのためのフィジカルアセスメント 吸器系の診かた. 一般財団法人 ライフ・プランニング・センター, 東京, 2014年8月2日.
 41. 皿谷健: Case based approach: Common disease の uncommon presentation “1000本ノック part1”. 日本臨床微生物学会第12回医師・臨床検査技師・薬剤師・看護師のための感染症学セミナー, 東京, 2014年8月24日.
 42. Wada H, Hagiwara I, Yamamoto Y, Goto H, Takizawa H: The relationship between surfactant protein D and respiratory functions in COPD. European Respiratory Society Annual Congress Munich 2014, Germany, September 6th-10th, 2014.
 43. Kurai D, Saraya T, Ishii H, Tsukagoshi H, Kimura H, Takizawa H: Respiratory viral infections in community-acquired pneumonia and exacerbation of COPD: One year survey at a Japanese university hospital. European Respiratory Society Annual Congress Munich 2014, Germany, September 6th-10th, 2014.
 44. Saraya T, Kurai D, Tsukagoshi H, Ishii H, Kimura H, Goto H, Takizawa H: Respiratory viral infections in adult asthma exacerbation: one year survey at a Japanese university hospital for characterization of hospitalized or not hospitalized patients. European Respiratory Society Annual Congress Munich 2014, Germany, September 6th-10th, 2014.
 45. 中元康雄, 皿谷健, 麻生純平, 布川寛樹, 辻晋吾, 平田彩, 渡邊崇靖, 和田翔子, 石田学, 倉井大輔, 石井晴之, 滝澤始: FDG-PET/CT にて著明な多数の集積を認めた心サルコイドーシスの1例. 第211回日本呼吸器学会関東地方会, 埼玉, 2014年9月20日.
 46. 滝澤始: ACOS の病態と治療戦略. 第10回 COPD フロンティア, 横浜, 2014年9月27日.
 47. 多門裕貴, 辻本直貴, 布川寛樹, 平田彩, 大熊康介, 皿谷健, 石井晴之, 滝澤始: 経過中に一時自然退縮し, 診断に難渋した Diffuse large B cell Lymphoma の1例. 第609回日本内科学会関東地方会, 東京, 2014年10月11日.
 48. 滝澤始: お年寄りの肺炎の特徴と予防の大切さ. 高齢者の肺炎予防, 武蔵野, 2014年10月26日.
 49. 横山琢磨, 滝澤始: 経口補水液を用いた Cisplatin hydration の安全性と忍容性についての探索的研究 Safety and tolerance of Oral Rehydration Solution(ORS) for Cisplatin-based chemotherapy in patients with lung cancer. 第18回東京呼吸病態研究会, 東京, 2014年11月4日.
 50. 滝澤始: 気管支喘息の診断と治療. 第14回長崎県央呼吸器セミナー, 長崎, 2014年11月5日.
 51. 横山琢磨, 高田佐織, 肥留川一郎, 平田彩, 小田未来, 乾俊哉, 小川ゆかり, 石井晴之, 和田裕雄, 滝澤始: 未治療非扁平上皮肺癌に対する CDDP+PEM+BEV 療法後の PEM 維持療法第Ⅱ相試験. 第55回日本肺癌学会総会, 京都, 2014年11月14-16日.
 52. 高田佐織, 横山琢磨, 平田彩, 肥留川一郎, 中本啓太郎, 石井晴之, 和田裕雄, 滝澤始: 当院における非小細胞肺癌に対する2次治療以降の carboplatin + nab - paclitaxel 併用療法の後方視的検討. 第55回日本肺癌学会総会, 京都, 2014年11月14-16日.
 53. 小川ゆかり, 横山琢磨, 平田彩, 肥留川一郎, 石田学, 小田未来, 高田佐織, 石井晴之, 和田裕雄, 滝澤始: 肺癌骨転移に対して骨シンチ診断支援ソフトによる定量評価と治療効果についての検討. 第55回日本肺癌学会総会, 京都, 2014年11月14-16日.
 54. 肥留川一郎, 横山琢磨, 平田彩, 高田佐織, 石井晴之, 滝澤始: 再発小細胞肺癌で sensitive relapse と refractory relapse に対する amrubicin(AMR)療法の効果, 安全性の検討. 第55回日本肺癌学会総会, 京都, 2014年11月14-16日.

55. Ishii H, Tazawa R, Inoue Y, Nakata K. Clinical characteristics of secondary pulmonary alveolar proteinosis (sPAP): the reason for the difficulty of diagnosis as sPAP. 19th Congress of Asian Pacific Society of Respiriology, Indonesia, November 13th-16th, 2014.
56. Nakamoto K, Wada H, Tsuji S, Sada M, Inui T, Nakamura M, Honda K, Tanaka Y, Koide T, Takata S, Yokoyama T, Saraya T, Kurai D, Ishii H, Goto H, Takizawa H: Clinical features and association with air pollution in patients with severe asthma. The 19th Congress of Asian Pacific Society of Respiriology, Indonesia, November 13th-16th, 2014.
57. Inei T, Wada H, Nakamoto K, Sada M, Tsuji S, Nakamura M, Honda K, Tanaka Y, Koide T, Takata S, Yokoyama T, Kurai D, Saraya T, Ishii H, Koyama H, Kogane T, Horie M, Mikami Y, Nogochi S, Matsuzaki H, Yamauchi Y, Kohyama T, Goto H, Takizawa H: Influence of gene polymorphism on air pollutants-induced airway oxidative stress among asthmatic patients. The 19th Congress of Asian Pacific Society of Respiriology, Indonesia, November 13th-16th, 2014.
58. Honda k, Wada H, Nakamura M, Nakamoto K, Sada M, Inui T, Tanaka Y, Takata S, Watanabe M, Yokoyama T, Kurai D, Saraya T, Ishii H, Goto H, Takizawa H: IL-17A And TNF- α Synergistically Stimulate IL-8 Production In Human Airway Epithelial Cells. The 19th Congress of Asian Pacific Society of Respiriology, Indonesia, November 13th-16th, 2014.
59. Nishizawa T, Kurai D, Saraya T, Nakamoto K, Ishii H, Sohara E, Takizawa H: Antemortem Diagnosis With Multiple Random Skin Biopsies And Transbronchial Lung Biopsy In A Patient With Intravascular Large B Cell Lymphoma, So-Called "Asian Variant Lymphoma". The 19th Congress of Asian Pacific Society of Respiriology, Indonesia, November 13th-16th, 2014.
60. Kurai D, Saraya T, Ishii H, Tsukagoshi H, Kimura H, Takizawa H: Respiratory Viral Infection In Hospitalized Adult Patients In Japanese Tertiary Hospital. The 19th Congress of Asian Pacific Society of Respiriology, Indonesia, November 13th-16th, 2014.
61. 渡辺雅人:【トピックス】感染症領域の新規バイオマーカー—PCTとsoluble ST2を中心に—. 第39回東北感染症・化療フォーラム, 山形, 2014年11月30日.
62. 福田のぞみ, 皿谷健, 辻本直貴, 布川寛樹, 大熊康介, 近藤晴彦, 滝澤始: 著明な胸膜肥厚を呈し, 胸膜原発の悪性リンパ腫 (Diffuse large B cell lymphoma) と考えられた1例. 第609回日本内科学会関東地方会, 東京, 2014年12月13日.
63. 野坂岳志, 皿谷健, 辻本直貴, 布川寛樹, 大熊康介, 石井晴之, 滝澤始: 肺癌に類似した画像を呈した肺アスペルギローシスの1例. 第609回日本内科学会関東地方会, 東京, 2014年12月13日.
64. 小出卓, 皿谷健, 塚原弥生, 石井晴之, 滝澤始: サルコイドーシスにおける胸部 CT 上の Galaxy sign の臨床的意義について. 厚生労働科学研究費補助金難治性疾患政策研究事業 びまん性肺疾患に関する調査研究, 東京, 2014年12月13日.
65. 滝澤始: 呼吸器感染症におけるマクロライド —基礎と臨床—. 沖縄マクロライド講演会, 沖縄, 2015年1月15日.
66. 石井晴之: 続発性肺胞蛋白症について. 第74回北信呼吸器疾患研究会, 長野, 2015年2月6日.
67. 滝澤始: IPF の新展開 ~診断・治療・管理~. 呼吸器研究フロンティア, 東京, 2015年3月5日.
1. Saraya T, Watanabe T, Tsujimoto N, Takata S, Araki K¹, Makino H¹, Yonetani S¹, Takizawa H, Goto H¹(Kyorin University School of Medicine, Department of Laboratory Medicine): [Case of candidemia with *Candida glabrata* with confirmation of the acquisition of micafungin sensitivity due to new mutation of FKS gene mutation]. *Kansenshogaku Zasshi* 88(3 Suppl 9-10):1-5, 2014.
2. Saraya T, Kurai D, Ishii H, Ito A, Sasaki Y¹, Niwa S¹, Kiyota N², Tsukagoshi H¹, Kozawa K¹, Goto H, Takizawa H¹(Gunma Prefectural Institute of Public Health and Environmental Sciences Gunma, ²Kumamoto Prefectural Institute of Public Health and Environmental Sciences Kumamoto): Epidemiology of virus-induced asthma exacerbations: with special reference to the role of human rhinovirus. *Front Microbiol* 5:226, 2014.
3. Sohara E, Saraya T, Sato S, Tsujimoto N, Watanabe T, Takata S, Tanaka Y, Ishii H, Takizawa H, Goto H: Mechanic's hands revisited: is this sign still useful for diagnosis in patients with lung involvement of collagen vascular diseases?. *BMC Res Notes* 7:303, 2014.
4. Saraya T, Tanabe K¹, Araki K², Yonetani S², Makino H², Watanabe T³, Tsujimoto N, Takata S, Kurai D, Ishii H, Miyazaki Y¹, Takizawa H, Goto H¹ (National Institute of Infectious Diseases, ²Kyorin University School of Medicine, Department of Laboratory Medicine, ³Kyorin University School of Medicine, Department of Respiratory Medicine): Breakthrough invasive *Candida glabrata* in patients on micafungin: a novel FKS gene conversion correlated with sequential elevation of MIC. *J Clin Microbiol* 52(7):2709-2712, 2014.
5. Horie M¹, Saito A¹, Yamauchi Y¹, Mikami Y¹, Sakamoto M¹, Jo T¹, Nakajima J¹, Takizawa H, Nagase T¹, Kohyama T²(¹The University of Tokyo, ²Teikyo University Mizonokuchi hospital): Related citations Histamine induces human lung fibroblast-mediated collagen gel contraction via histamine H1 receptor. *Exp Lung Res* 40(5):222-236, 2014.
6. Toriumi S, Saraya T, Tsujimoto N, Nosaka T, Kanno H, Kukimoto H, Sakuma S, Nagamine Y, Ohkuma K, Sada M, Nunokawa H, Tanaka Y, Yokoyama T, Takata S, Koide T, Kurai D, Wada H, Ishii H, Goto H and Takizawa H: Renal Salt Wasting Syndrome due to Carboplatin in a Patient with Lung Cancer. *pulmonary Research and respiratory medicine online journal*, 2014.
7. Saraya T, Kurai D, Nakagaki K¹, Sasaki Y², Niwa S², Tsukagoshi H², Nunokawa H, Ohkuma K, Tsujimoto N, Hirao S, Wada H, Ishii H, Nakata K³, Kimura H⁴, Kozawa K², Takizawa H, Goto H¹(Nippon Veterinary and Animal Science University, ²Gunma Prefectural Institute of Public Health and Environmental Sciences, ³Niigata University Medical and Dental Hospital, ⁴National Institute of Infectious Diseases): Novel aspects on the pathogenesis of *Mycoplasma pneumoniae* pneumonia and therapeutic implications. *Front Microbiol* 5:410, 2014.
8. Shimoda M, Saraya T, Tsujimoto N, Kurai D, Takizawa H, Goto H: Fatal disseminated cryptococcosis resembling miliary tuberculosis in a patient with HIV infection. *Intern Med* 53(15):1641-1644, 2014.
9. Wada H, Akiyama Y, Takeda H, Nakamura M, Takizawa H: Social isolation in individuals with chronic respiratory failure undergoing long-term oxygen therapy. *J Am Geriatr Soc*

- 62(9):1807-1808, 2014.
10. Wada H, Hagiwara S, Yamamoto Y, Takizawa H: Links between lung dysfunction and glucose metabolism dysregulation: does lung dysfunction represent a systemic disorder?. *Intern Med* 53(21):2413-2414, 2014.
11. Tanaka Y, Saraya T, Kurai D, Ishii H, Takizawa H, Goto H: Spontaneous resolution of *Pneumocystis jirovecii* pneumonia on high-resolution computed tomography in a patient with renal cell carcinoma. *Am J Case Rep* 15:496-500, 2014.
12. Ogawa Y, Saraya T, Koide T, Kikuchi K¹, Ohkuma K, Araki K², Makino H², Yonetani S², Takizawa H, Goto H (¹ Juntendo University,²Kyorin University School of Medicine, Department of Clinical Laboratory): Methicillin-resistant *Staphylococcus aureus* enterocolitis sequentially complicated with septic arthritis: a case report and review of the literature. *BMC Res Notes* 7:21, 2014.
13. Saraya T, Yonetani S¹, Ogawa Y, Tanaka Y (¹Kyorin University School of Medicine, Department of Clinical Laboratory): *Rothia aeria*: a great mimicker of the *Nocardia* species. *BMJ Case Rep*, 2014.
14. Tsuji S, Saraya T, Tanaka Y, Makino H¹, Yonetani S¹, Araki K¹, Kurai D, Ishii H, Takizawa H, Goto H (¹Kyorin University School of Medicine, Department of Respiratory Medicine): Community-acquired *Pseudomonas aeruginosa* pneumonia in previously healthy patients. *JMM Case Reports*, 2014. Online.
15. Tsujimoto S¹, Tsukagoshi H², Inai I¹, Yoshimoto Y¹, Daida A¹, Kusakawa I¹, Tanaka-Taya K³, Ishii H, Saraya T, Kurai D, Oishi K³, Ryo A⁴, Kimura H^{3,4} (¹St Luke's International Hospital, ²Gunma Prefectural Institute of Public Health and Environmental Sciences, ³National Institute of Infectious Diseases, ⁴Yokohama City University Graduate School of Medicine: Apnoea, dyspnea and wheezing in primary lower respiratory infections due to human rhinovirus in Japanese infants. *JMM Case Reports*, 2014. Online.
16. Hirano E¹, Kobayashi M², Tsukagoshi H², Yoshida LM³, Kuroda M⁴, Noda M⁴, Ishioka T⁵, Kozawa K², Ishii H, Yoshida A⁵, Oishi K⁴, Ryo A⁶, Kimura H⁴ (¹Fukui Prefectural Institute of Public Health and Environmental Science, ²Gunma Prefectural Institute of Public Health and Environmental Sciences, ³Nagasaki University, ⁴National Institute of Infectious Diseases, ⁵Aomori Prefectural Institute of Public Health and Environment, ⁶Yokohama City University): Molecular evolution of human respiratory syncytial virus attachment glycoprotein (G) gene of new genotype ON1 and ancestor NA1. *Infect Genet Evol* 28:183-191, 2014.
17. Mikami Y¹, Matsuzaki H¹, Horie M¹, Noguchi S¹, Jo T¹, Narumoto O¹, Kohyama T², Takizawa H, Nagase T¹, Yamauchi Y¹ (¹The University of Tokyo, ²Teikyo University Mizonokuchi hospital): Lymphotoxin β receptor signaling induces IL-8 production in human bronchial epithelial cells. *PLoS One* 9(12):e114791, 2014.
18. Sada M, Saraya T, Ishii H, Goto H: Sudden multiple fractures in a patient with sarcoidosis in multiple organs. *BMJ Case Rep*, 2014.
19. Tsujimoto N, Saraya T, Shimoda M, Goto H: Three stripes sign: muscle involvement with internal fibrosis in a patient with sarcoidosis. *BMJ Case Rep*, 2014.
20. Saraya T, Yonetani S¹, Ogawa Y, Tanaka Y (¹Kyorin University School of Medicine, Department of Laboratory Medicine): *Rothia aeria*: a great mimicker of the *Nocardia* species. *BMJ Case Rep*, 2014.
21. Saraya T, Kikuchi K¹, Araki K², Uehara Y¹, Makino H¹, Tamura M, Hirukawa I, Honda K, Yokoyama T, Kurai D, Ishii H, Fujiwara M³, Takizawa H and Goto H (¹Juntendo University, ²Kyorin University School of Medicine, Department of Laboratory Medicine, ³Kyorin University School of Medicine, Department of Pathology): Reversed halo sign caused by huge tricuspid native valve infective endocarditis associated with community-acquired methicillin-resistant *Staphylococcus aureus*. *JMM Case Reports*, 2015. Online.
22. 倉井大輔, 石井晴之, 皿谷健, 滝澤始: 成人・高齢者におけるRSウイルス感染症の重要性. *病原微生物検出情報* 35(6):11-12, 2014.
23. 滝澤始: 知られざる21世紀の国民病 COPD 対症療法から予後を改善する治療へ. *SRL宝函 別冊第10回 SRL Update Forum 講演集*: 21-26, 2014.
24. 石井晴之: 続発性肺蛋白症の臨床的特徴—全国調査結果と更なる課題—. *日本肺サーファクタント・界面医学会雑誌* 45: 13-15, 2014.
25. 皿谷健: 【関節リウマチ・膠原病-症例で学ぶ診断と治療】関節リウマチ・膠原病を疑う時のアプローチ 呼吸器・肺所見から考える膠原病. *Medicina* 51(12):2020-2025, 2014.
26. 中本啓太郎, 滝澤始: 【そうか! そうだったのか! 再確認! 呼吸器ケアの「なぜ?」がわかる黄金解説 解剖生理から呼吸不全病態まで43問ななめヨミ!】(第6章)呼吸機能検査を理解するための「なぜ」なぜ, 術前に多くの項目の呼吸機能検査が必要なの?. *呼吸器ケア* 2014(夏季増刊):154-160, 2014.
27. 皿谷健: 【CT・MRI戦略的活用ガイド】各科に直撃! よくある紹介疾患, 紹介前にあるといい検査, 紹介後にする検査 呼吸器内科. *Medicina* 51(11):312-318, 2014.
28. 皿谷健: 【膠原病】症状に対する診断的アプローチ 呼吸器症状 膠原病に特異的な症状はなく, 所見との組み合わせで疑う. *Hospitalist* 2(2):335-350, 2014.
29. 皿谷健, 渡邊崇靖, 辻本直貴, 高田佐織, 荒木光二¹, 牧野博¹, 米谷正太¹, 滝澤始, 後藤元 (¹杏林大学医学部付属病院・臨床検査部): 【症例から学ぶ感染症セミナー-症例の疑問点から研究的考察へ-】新たな FKS 遺伝子変異によるミカファンゲン耐性獲得の経過を確認できた *Candida Glabrata* 血症の一例. *感染症学雑誌* 88(3付録):1-5, 2014.
30. 乾俊哉, 中本啓太郎, 和田裕雄, 滝澤始: 【大気汚染と呼吸器疾患】大気汚染と喘息. *呼吸器内科* 25(6):489-496, 2014.
31. 乾俊哉, 横山琢磨, 高田佐織, 平田彩, 西沢知剛, 肥留川一郎, 和田裕雄, 石井晴之, 滝澤始, 後藤元: 進行期非扁平上皮非小細胞肺癌に対する初回治療での cisplatin+pemetrexed 使用症例の臨床的検討. *肺癌* 54(3):128-134, 2014.
32. 佐田充, 滝澤始: 【最近の大気汚染とアレルギー疾患】環境汚染とアレルギー 過去の大気汚染と喘息・呼吸器疾患. *アレルギー・免疫* 21(10):1484-1491, 2014.
33. 辻晋吾, 滝澤始: 【環境因子と呼吸器疾患】大気汚染と呼吸器疾患 PM2.5を中心に. *呼吸と循環* 62(10):921-932, 2014.
34. 中本啓太郎, 辻晋吾, 佐田充, 乾俊哉, 和田裕雄, 滝澤始: 大気汚染と呼吸器疾患. *呼吸* 33(10):953-960, 2014.
35. 下田真史, 小出卓, 滝澤始: 【好酸球性副鼻腔炎と周辺疾患】好酸球性肉芽腫性血管炎(EGPA)と好酸球性副鼻腔炎. *アレルギー*

ギー・免疫 22(1):88-94, 2014.

36. 中元康雄, 皿谷健, 辻吾吾, 平田彩, 渡邊崇靖, 和田翔子, 大熊康介, 金重真奈美, 下田真史, 西沢知剛, 石田学, 小田未来, 肥留川一郎, 檜垣学, 石井晴之, 小路仁¹, 軽部美穂¹, 田中良太², 武井秀史², 呉屋朝幸², 藤原正親³, 滝澤始, 後藤元¹(杏林大・医・内科学教室(腎臓・リウマチ・膠原病内科)), ²杏林大・医・外科学教室(呼吸器・甲状腺), ³杏林大学・医・病理学教室):PET/CT および胸腔鏡下肺生検による組織学的評価を施行し得た肺リウマチ結節の1例. 日本胸部臨床 73(12): 1472-1477, 2014.
37. Tsujimoto N, Saraya T, Nunokawa H, Ohkuma K, Goto H and Takizawa H: Flapping Tremor as a Diagnostic Tool for Evaluation of Hypercapnia. Pulm Res Respir Med Open J 2(1): 49-51, 2015. Online.
38. Saraya T, Sada M, Ohkuma K, Sakuma S, Tsujimoto N, Yoshida S, Fujiwara M, Tsukahara Y, Kurai D, Ishii H, Takizawa H, Goto H: Evidence of unilateral metastatic pulmonary calcification with a prolonged Fever and arthralgia caused by acute lymphoblastic leukemia in a chronic dialysis patient. Intern Med 54(1):63-67, 2015.
39. Saraya T, Takizawa H: Evidence of pulmonary disseminated cryptococcosis: diffuse multiple micronodules on thoracic computed tomography. Am J Med 128(1):e21, 2015.
40. Kuroda M¹, Niwa S², Sekizuka T¹, Tsukagoshi H², Yokoyama M¹, Ryo A³, Sato H¹, Kiyota N⁴, Noda M¹, Kozawa K², Shirabe K⁵, Kusaka T⁶, Shimojo N⁷, Hasegawa S⁸, Sugai K⁹, Obuchi M¹, Tashiro M¹, Oishi K¹, Ishii H, Kimura H¹⁰ (¹National Institute of Infectious Diseases, ²Gunma Prefectural Institute of Public Health and Environmental Sciences, ³Yokohama City University Graduate School of Medicine, ⁴Kumamoto Prefectural Institute of Public Health and Environmental Sciences, ⁵Kagawa University, ⁶Chiba University, ⁷Yamaguchi University Graduate School of Medicine, ⁸National Hospital Organization Yokohama Medical Center, ⁹Toyama Institute of Health, ¹⁰Gunma Prefectural Institute of Public Health and Environmental Sciences): Molecular evolution of the VP1, VP2, and VP3 genes in human rhinovirus species C 5:8185, 2015.
41. 滝澤始: COPD・喘息オーバーラップ症候群の病態と治療. 東京都医師会雑誌 68(3):190-195, 2015.
42. 滝澤始:【マクロライドの治療効果をめぐる30年の歩み】呼吸器科臨床でのマクロライドの使われ方. 医薬ジャーナル 51(3): 954-958, 2015.
43. 石井晴之: 肺胞蛋白症 pulmonary alveolar proteinosis (PAP). 今日の治療指針・私はこう治療している. 医学書院: 334-335, 2015.

著書

1. 滝澤始: 楽しく学べる血液ガスと呼吸生理. 東京, 株式会社文光堂, 2014.
2. 滝澤始: 新呼吸療法テキスト 薬物療法. 3学会(日本胸部外科学会・日本呼吸器学会・日本麻酔科学会)合同呼吸療法認定士認定委員会. 東京, 株式会社アトムズ, 2014.p.122-140.
3. 滝澤始, 倉井大輔: 免許皆伝! 呼吸療法の考え方, 進め方. 東京, 中外医学社, 2014.
4. 皿谷健: 実践的 抗菌薬の選び方 アジスロマイシンとクラリスロマイシン. Medicina. 東京, 医学書院, 2014. p.184-191.
5. 滝澤始: 臨床検査ガイド 2015年改訂版 炎症・免疫学的検査/A. 炎症・組織障害・線維化マーカー 間質性肺炎マーカー

(KL-6, SP-A, SP-D). 東京, 株式会社文光堂, 2015.p.632-634.

特許等知的財産関係, 報告書

1. 滝澤始: 微小粒子状物質をはじめとする大気汚染物質に高感受性を示すぜん息群の抽出とその増悪予防のための効率的な健康管理手法の確立. 独立行政法人 環境再生保全機構委託業務 2014年度 報告書.
2. 小出卓, 皿谷健: サルコイドーシスにおける胸部 CT 上の Galaxy sign の臨床的意義について. 厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患政策研究事業 びまん性肺疾患に関する調査研究 2014年度 研究報告書.

その他

1. 皿谷健: 第111回 日本内科学会総会 医学生・研修医の内科学サミット2014 指導医教官賞受賞, 東京, 2014年4月12日.
2. 石井晴之: 第54回日本呼吸器学会学術講演会 学術部会優秀賞受賞, 大阪, 2014年4月25日.
3. 滝澤始: 最先端技術と治療で肺難病に立ち向かう, 夕刊フジ, 2014年6月19日.
4. 皿谷健: 第3回杏林医学会研究奨励賞, 三鷹, 2014年11月15日.
5. 滝澤始: 【明日も元気】喘息, TBS ラジオ健康番組, 2015年11月17-21日.
6. 倉井大輔: NHK ニュースウォッチ9, 2015年1月23日.
7. 倉井大輔: NHK 情報まるごと, 2015年1月23日.
8. 倉井大輔: NHK ニュース深読み, 2015年1月24日放送回.

第一内科学教室 (腎臓・リウマチ膠原病内科)

講演

1. 駒形嘉紀: 病診連携について 一地域一体で実現する最先端のRA診療ー. 第1回RA病診連携の会, 調布, 2014年4月3日.
2. Y.Arimura: Infections and the Vasculitis Connection. ANCA - Associated Vasculitis. The 16th Asia Pacific League of Associations for Rheumatology Congress (APLAR), Philippines, March 31st, - April 4th, 2014.
3. Y.Arimura: Vasculitis: ANCA-Associated Vasculitis. The 16th Asia Pacific League of Associations for Rheumatology Congress (APLAR), Philippines, March 31, - April 4th, 2014.
4. 福岡利仁, 清水英樹, 池谷紀子, 早川哲, 駒形嘉紀, 軽部美穂, 要伸也, 有村義宏, 山田明: 慢性腎臓病 (CKD) 合併浮腫に対するトルバプタンの効果. 第111回日本内科学会総会・講演会, 東京, 2014年4月11-13日.
5. 有村義宏: 顕微鏡的多発血管炎 (MPA) の診断と治療 update. 第58回日本リウマチ学会総会・学術集会, 東京, 2014年4月24-26日.
6. 有村義宏: 合併症マネジメント: 腎臓. 第58回日本リウマチ学会総会・学術集会, 東京, 2014年4月24-26日.
7. 福岡利仁, 池谷紀子, 早川哲, 軽部美穂, 駒形嘉紀, 要伸也, 有村義宏, 山田明: 高齢関節リウマチ症例に対する生物学的製剤の効果と安全性. 第58回日本リウマチ学会総会・学術集会, 東京, 2014年4月24-26日.
8. 福岡利仁: RAの特殊病態. 第58回日本リウマチ学会総会・学術集会, 東京, 2014年4月24-26日.
9. 村上華奈子, 駒形嘉紀, 森知真子, 磯村杏耶, 遠藤彰子, 川嶋聡子, 池谷紀子, 要伸也, 有村義宏, 山田明: 好中球産生 NETs の ANCA 関連血管炎の病態への関与. 第58回日本リウマチ学会総会・学術集会, 東京, 2014年4月24-26日.
10. 川嶋聡子, 窪田沙也花, 吉原堅, 駒形嘉紀, 要伸也, 有村義

- 宏, 山田明:MPO-ANCA 陽性の好酸球多発血管炎性肉芽腫症 (EGPA) の再燃には4型がある. 第58回日本リウマチ学会総会・学術集会, 東京, 2014年4月24-26日.
11. 軽部美穂, 要伸也, 齋藤督芸, 川嶋聡子, 清水英樹, 駒形嘉紀, 有村義宏, 山田明: 関節リウマチにおける慢性腎臓病 (CKD) 発症の関連因子の検討. 第58回日本リウマチ学会総会・学術集会, 東京, 2014年4月24-26日.
 12. 清水英樹, 要伸也, 齋藤督芸, 軽部美穂, 池谷紀子, 早川哲, 福岡利仁, 駒形嘉紀, 有村義宏, 山田明: 生物製剤使用中の当院関節リウマチ患者における慢性腎臓病合併について. 第58回日本リウマチ学会総会・学術集会, 東京, 2014年4月24-26日.
 13. 遠藤彰子, 駒形嘉紀, 池谷紀子, 要伸也, 有村義宏, 山田明: 自己免疫性血球減少症を合併した Felty 症候群の一例. 第58回日本リウマチ学会総会・学術集会, 東京, 2014年4月24-26日.
 14. 中本啓太郎, 皿谷健, 乾俊哉, 高田佐織, 横山琢磨, 倉井大輔, 和田裕雄, 石井晴之, 福岡利仁, 軽部美穂, 駒形嘉紀, 有村義宏, 滝澤始, 後藤元: トシリズマブ治療を行った関節リウマチ患者の肺感染症の検討. 第26回日本アレルギー学会春季臨床大会, 京都, 2014年5月9-11日.
 15. 有村義宏: 血管炎新分類と顕微鏡的多発血管炎(MPA) update. International Chapel Hill Consensus Conference 2012をうけて. 第26回日本アレルギー学会春季臨床大会, 京都, 2014年5月10日.
 16. 有村義宏: ANCA 関連血管炎の診療 -腎臓内科の立場より-. CHUGAI KIDNEY RELATED DISEASE SYMPOSIUM -ANCA-associated Vasculitis and Renal Anemia-, 東京, 2014年5月10日.
 17. Karube M, Kaname S, Saito M, Ikegaya N, Fukuoka K, Komagata Y, Arimura Y, Yamada A: A case of nephrotic syndrome due to antiphospholipid syndrome nephropathy. The 14th Asian Pacific Congress of Nephrology, Tokyo, May 14th-17th, 2014.
 18. Shimizu H, Kaname S, Kawashima S, Ikegaya N, Hayakawa S, Fukuoka K, Karube M, Komagata Y, Arimura Y, Yamada A: Renoprotective effect of telmisartan for obese patients. The 14th Asian Pacific Congress of Nephrology, Tokyo, May 14th-17th, 2014.
 19. Sakurai S, Endo A, Shimizu H, Komagata Y, Kaname S, Arimura Y, Yamada A: A case of IgG4-related disease diagnosed 7 years after the start of hemodialysis. The 14th Asian Pacific Congress of Nephrology, Tokyo, May 14th-17th, 2014.
 20. Miyazawa S, Shimizu H, Karube M, Kobayashi M, Nakajima E, Kubota S, Komagata Y, Kaname S, Arimura Y, Yamada A: A case of TTP associated with stable SLE who showed dramatic improvement by glucocorticoid alone. The 14th Asian Pacific Congress of Nephrology, Tokyo, May 14th-17th, 2014.
 21. 要伸也: なぜ今腎臓病なのか. 第9回三鷹市民公開講座, 腎臓について考えるフォーラム, 三鷹, 2014年5月17日.
 22. 要伸也: aHUS の診断と病態について. 埼玉 aHUS 研究会, 川越, 2014年5月29日.
 23. 有村義宏: 血管炎—最新の話題—. 第9回西埼玉地区循環器疾患セミナー, 所沢, 2014年5月19日.
 24. 有村義宏: 血管炎の up to date—ANCA 関連血管炎を中心に—. 第49回日本小児腎臓病学会, 秋田, 2014年6月6日.
 25. 小林昌史, 清水英樹, 軽部美穂, 宮澤さやか, 池谷紀子, 早川哲, 駒形嘉紀, 要伸也, 有村義宏, 山田明: 治療に難渋した膠原病関連非典型溶血性尿毒症症候群の2例. 第59回日本透析医学会学術集会・総会, 神戸, 2014年6月12-15日.
 26. 軽部美穂, 要伸也, 高橋孝幸, 川嶋聡子, 駒形嘉紀, 有村義宏, 山田明: アルガトロバンにて免疫吸着療法を行い、出産に成功した妊娠合併難治性ループス腎炎の1例. 第59回日本透析医学会学術集会・総会, 神戸, 2014年6月12-15日.
 27. 高橋孝幸, 清水英樹, 要伸也, 駒形嘉紀, 有村義宏, 山田明: 当院における緊急入院を要した CKD 症例の検討. 第59回日本透析医学会学術集会・総会, 神戸, 2014年6月12-15日.
 28. 中島瑛里子, 清水英樹, 福岡利仁, 高橋孝幸, 窪田沙也花, 早川哲, 駒形嘉紀, 要伸也, 有村義宏, 山田明: 血液透析導入時に内腸骨動脈瘤の切迫破裂をきたした1例. 第59回日本透析医学会学術集会・総会, 神戸, 2014年6月12-15日.
 29. 櫻井仁子, 遠藤彰子, 清水英樹, 駒形嘉紀, 要伸也, 有村義宏, 山田明: 透析導入7年後に IgG4関連疾患の診断に至った多発性嚢胞腎症例. 第59回日本透析医学会学術集会・総会, 神戸, 2014年6月12-15日.
 30. 小西文晴, 和久昌幸, 佐々木豪, 三宅伸之, 本田恒雄, 佐藤友紀, 喜屋武淳, 有村義宏, 山田明: 両側気腫性腎盂炎の一例. 第59回日本透析医学会学術集会・総会, 神戸, 2014年6月12-15日.
 31. 山田裕信, 白地絢, 村野祐司, 萬知子, 千々和京介, 浜井章, 軽部美穂, 要伸也, 山田明: ポリスルホン膜トレイト NV を導入して. 第59回日本透析医学会学術集会総会, 神戸, 2014年6月12-15日.
 32. 有村義宏: ANCA 関連血管炎—基礎・臨床の進歩—. 第9回長崎皮膚・膠原病フォーラム, 長崎, 2014年6月19日.
 33. 佐藤綾, 窪田沙也花, 齋藤督芸, 川嶋聡子, 磯村杏耶, 片岡郁徳, 高橋孝幸, 遠藤彰子, 福岡利仁, 軽部美穂, 吉原堅, 駒形嘉紀, 山田明, 要伸也, 有村義宏: 早期の治療開始により腎機能が回復した Goodpasture's syndrome の一例. 第67回三多摩腎疾患治療医会, 三鷹, 2014年6月22日.
 34. Kaname S: TMA and aHUS associated with autoimmune diseases including SLE, collagen disease. The 2nd aHUS Extension Meeting for Nephrologists, Tokyo, July 2nd, 2014.
 35. 川嶋聡子, 窪田沙也花, 佐藤綾, 吉原堅, 駒形嘉紀, 要伸也, 有村義宏, 山田明: MPO-ANCA 陽性の好酸球性多発血管炎性肉芽腫症 (EGPA) における腎症の検討—再燃との関連—. 第57回日本腎臓学会学術総会, 横浜, 2014年7月4-6日.
 36. 平山浩一, 小林正貴, 臼井丈一, 有村義宏, 杉山斉, 新田孝作, 武曾恵理, 和田隆志, 山縣邦弘: ANCA 型 RPGN における肺病変の検討. 第57回日本腎臓学会学術総会, 横浜, 2014年7月4-6日.
 37. 軽部美穂, 要伸也, 清水英樹, 駒形嘉紀, 有村義宏, 山田明: TMA 合併ループス腎炎2例の von Willebrand 因子発現に関する組織学的検討. 第57回日本腎臓学会学術総会, 横浜, 2014年7月4-6日.
 38. 清水英樹, 要伸也, 齋藤督芸, 軽部美穂, 池谷紀子, 早川哲, 福岡利仁, 駒形嘉紀, 有村義宏, 山田明: 生物製剤使用中の慢性疾患患者での慢性腎臓病合併について. 第57回日本腎臓学会学術総会, 横浜, 2014年7月4-6日.
 39. 早川哲, 要伸也, 駒形嘉紀, 有村義宏, 山田明: 血液透析中の循環血液量変動と末梢血管抵抗の関連. 第57回日本腎臓学会学術総会, 横浜, 2014年7月4-6日.
 40. 有村義宏: 公的班研究の現状と課題: 難治性血管炎調査研究班の研究成果と課題. 第57回日本腎臓学会学術総会, 横浜, 2014年7月6日.
 41. 有村義宏: 膠原病内科から見る免疫抑制剤の使い方. 第3回東

- 京西部神経免疫フォーラム, 立川, 2014年7月17日.
42. 清水英樹, 要伸也, 有村義宏, 田坂華世, 長澤理英子, 平松佐紀子: 地域連携を元にPD導入した介護度の高い超高齢者の1例—高齢者 PD/地域連携を含め—. 三鷹 PD 地域連携セミナー, 三鷹, 2014年7月19日.
43. 駒形嘉紀: 病診連携による地域一体のRA診療. 第2回RA病診連携の会, 三鷹, 2014年7月25日.
44. 有村義宏: ANCA 関連血管炎に関する検査と診療. 第1回検査と診療. 関西フォーラム, 大阪, 2014年7月26日.
45. 要伸也: CKD 患者の水電解質管理—夏場の注意を含めて—. 北多摩 CKD 病診連携講演会, 東京, 2014年7月31日.
46. 要伸也, 柴垣有吾: 低ナトリウム血症—症例検討と鑑別診断・治療—. 第19回臨床研修医のための腎臓セミナー, 新潟, 2014年8月3日.
47. 有村義宏: 関節リウマチの診断と治療. KYO 学術講演会, 甲府, 2014年8月7日.
48. 有村義宏: 血管炎診療の進歩. 第26回日本リウマチ学会中部支部学術集会, 新潟, 2014年8月30日.
49. 福岡利仁: 東京多摩地区の PD の現況について. 第20回日本腹膜透析医学会学術集会・総会, 山形, 2014年9月6日.
50. 有村義宏: ANCA 関連血管炎—最新知見—. KIDNEY RELATED DISEASE FORUM ~ANCA-associated Vasculitis~, 名古屋, 2014年9月9日.
51. 軽部美穂, 要伸也, 前園知宏, 高橋孝幸, 早川哲, 駒形嘉紀, 山田明, 有村義宏: 腎生検にて診断に至った尿細管間質性腎炎合併 T 細胞リンパ腫の1例. 第18回腎間質障害研究会, 東京, 2014年9月13日.
52. 有村義宏: 平成26年度: 研究代表者報告 (基本方針). 平成26年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等政策研究事業 (難治性疾患政策研究事業) 第1回班会議, 東京, 2014年9月14日.
53. 有村義宏: 血管炎症候群の診断と治療. 平成26年度北海道・東北地区リウマチ教育研修会, 青森, 2014年9月21日.
54. 有村義宏: 血管炎診療におけるアフエレンス療法の位置付け. 第35回日本アフエレンス学会学術大会, 東京, 2014年9月28日.
55. 要伸也: 糖尿病性腎症における最近の話題. 武蔵野 DM Forum, 東京, 2014年10月2日.
56. 有村義宏: ANCA 関連血管炎の病態診断・治療. 第20回白河腎疾患フォーラム, 福島, 2014年10月7日.
57. 有村義宏: ANCA 関連血管炎—病態と臨床研究の進歩—. Vasculitis Forum in Fukuoka 2014, 福岡, 2014年10月10日.
58. 有村義宏: ANCA 関連血管炎の病態と診断・治療. 腎と膠原病フォーラム, 名古屋, 2014年10月16日.
59. 有村義宏: ANCA 関連血管炎の治療. 全国膠原病フォーラム in 東京, 東京, 2014年10月19日.
60. 高橋孝幸, 池谷紀子, 福岡利仁, 軽部美穂, 駒形嘉紀, 石本麻衣, 千葉厚郎, 山田明, 要伸也, 有村義宏: 重症筋無力症に緩徐進行1型糖尿病を合併し, 治療経過中に膜性腎症を呈した1例. 第44回日本腎臓学会東部学術大会, 東京, 2014年10月24-25日.
61. 宮澤さやか, 早川哲, 池谷紀子, 小林昌史, 駒形嘉紀, 要伸也, 有村義宏: ネフローゼ症候群で発症した妊娠高血圧症候群の1例. 第44回日本腎臓学会東部学術大会, 東京, 2014年10月24-25日.
62. 片岡郁穂, 軽部美穂, 磯村杏耶, 齋藤督芸, 駒形嘉紀, 山田明, 要伸也, 有村義宏: 糸球体優位に IgA, IgG 沈着を認めたネフローゼ症候群の1例. 第44回日本腎臓学会東部学術大会, 東京, 2014年10月24-25日.
63. 遠藤彰子, 高橋孝幸, 池谷紀子, 駒形嘉紀, 山田明, 要伸也, 有村義宏: 難治性喘息, 好中球性中耳炎に合併した膜性腎症の1例. 第44回日本腎臓学会東部学術大会, 東京, 2014年10月24-25日.
64. 前園知宏, 軽部美穂, 高橋孝幸, 早川哲, 駒形嘉紀, 山田明, 要伸也, 有村義宏: 腎生検にて T 細胞リンパ腫の診断に至った尿細管間質性腎炎の1例. 第44回日本腎臓学会東部学術大会, 東京, 2014年10月24-25日.
65. 小林昌史, 池谷紀子, 櫻井仁子, 早川哲, 駒形嘉紀, 山田明, 要伸也, 有村義宏: 筋痛を主訴とする, 高齢発症の溶連菌感染後急性糸球体腎炎の1例. 第44回日本腎臓学会東部学術大会, 東京, 2014年10月24-25日.
66. 福岡利仁: シンポジウム・学生・研修医のためのセミナー. 第44回日本腎臓学会東部学術大会, 東京, 2014年10月24-25日.
67. 要伸也: メタボリックシンドロームと腎 (よくわかるシリーズ16). 第44回日本腎臓学会東部学術大会, 東京, 2014年10月24-25日.
68. 有村義宏: 新しい SLE 診断基準とループス腎炎. 第11回神戸 CKD フォーラム, 神戸, 2014年10月30日.
69. 要伸也: CKD における血圧管理. HT フォーラム講演, 東京, 2014年11月6日.
70. 有村義宏, 川嶋聡子: MPO-ANCA 陽性の好酸球性多発血管炎性肉芽腫症(EGPA)の再燃と ANCA 値の関連. 第20回 MPO 研究会, 熱海, 2014年11月7-8日.
71. 有村義宏: 厚生労働省難病対策 MHLW Project for intractable diseases. 第20回 MPO 研究会, 熱海, 2014年11月8日.
72. Fukuoka K, Kaname S, Arimura Y: Effectiveness of tolvaptan in chronic kidney disease patients with systemic edema. American Society of Nephrology meeting, USA, November 13th, 2014.
73. Endo A, Kaname A, Arimura Y: Fibrillary glomerulonephritis presenting as rapidly progressive glomerulonephritis with linear IgA staining of the glomerular capillary walls. American Society of Nephrology meeting, USA, November 14th, 2014.
74. 前園知宏, 福岡利仁, 池谷紀子, 國沢恭平, 駒形嘉紀, 要伸也, 有村義宏: 長期 SLE 治療経過中に非典型 HUS を発症した1例. 三多摩腎疾患治療医会第68回研究会, 三鷹, 2014年11月9日.
75. 國沢恭平, 遠藤彰子, 小路仁, 駒形嘉紀, 要伸也, 有村義宏: 2回目の腎生検で診断に至った C3 glomerulonephritis の1例. 第43回杏林医学会総会, 三鷹, 2014年11月15日.
76. 前園知宏, 佐藤綾, 池谷紀子, 早川哲, 駒形嘉紀, 要伸也, 有村義宏, 松田雄大, 甲能直幸: 繰り返す顔面神経麻痺と肥厚性硬膜炎を合併した ANCA 関連血管炎性中耳炎 (Otitis Media with ANCA-Associated Vasculitis: OMAAV) の1例. 第43回杏林医学会総会, 三鷹, 2014年11月15日.
77. 要伸也: ANCA 関連血管炎・腎炎と透析. 三重透析合併症講演会, 津, 2014年11月29日.
78. 有村義宏: ANCA 関連血管炎—Rituximab 治療の現況—. 第29回日本臨床リウマチ学会, 福岡, 2014年11月29-30日.
79. 有村義宏: 平成26年度: 第2回班会議 研究代表者報告. 平成26年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等政策研究事業 (難治性疾患政策研究事業) 難治性血管炎に関する調査研究班, 東京, 2014年12月12日.
80. 有村義宏: 血管炎診療—最新の治療—. 血管炎フォーラム, 東京, 2014年12月12日.
81. 有村義宏: ANCA 関連血管炎—基礎・臨床研究の進歩—. 第3回山陰血管炎研究会, 松江, 2014年12月13日.

82. 有村義宏:腎と血管炎について. 第2回和歌山 腎・血管炎・膠原病勉強会, 和歌山, 2015年1月15日.
83. 有村義宏:「血管炎診療の歴史と展望—免疫抑制剤, 生物学的製剤を含めた治療戦略について—」. 信州膠原病セミナー, 長野, 2015年2月14日.
84. 有村義宏:ANCA 関連血管炎—ANCA 測定を中心に—. 第6回愛知県腎機能評価研究会, 名古屋, 2015年2月16日.
85. 有村義宏:我が国における血管炎とANCA 測定の歴史と変遷. 第2回血管炎早期発見研究会, 東京, 2015年2月21日.
86. 富澤綾子, 藤田直巳, 高橋麻奈美, 関本翠恵, 濱井章, 新井由美, 早川哲, 駒形嘉紀, 要伸也, 有村義宏:血液透析導入クリニカルパスを作成して. 東京透析懇談会, 東京, 2015年2月22日.
87. 有村義宏:関節リウマチにおける病態と治療戦略. 杏林近隣地区 薬薬連携講演会, 東京, 2015年2月26日.
88. 有村義宏:RPGN と ANCA 関連腎炎・血管炎のすべて. 第20回臨床研修医のための腎臓セミナー, 東京, 2015年3月1日.
89. 有村義宏:ANCA 関連血管炎の診断と治療の進歩. 第14回関西膠原病フォーラム, 京都, 2015年3月7日.
90. 軽部美徳, 要伸也, 齋藤督芸, 川嶋聡子, 清水英樹, 池谷紀子, 駒形嘉紀, 有村義宏:妊娠時にネフローゼ症候群を呈しながら出産に成功したクリオグロブリン血症性腎炎の1例. 第25回腎と妊娠研究会, 横浜, 2015年3月7日.

論文

1. 有村義宏:膠原病・血管炎. 腎と透析 76(4):585-589, 2014.
2. 有村義宏:オーバービュー:血管炎の分類と新規病名分類. 呼吸器内科 25(4):289-293, 2014.
3. 清水英樹, 要伸也, 高野秀樹, 石橋由孝, 宮澤さやか, 高橋孝幸, 櫻井仁子, 窪田沙也花, 軽部美徳, 山田明:腹膜透析導入時の医療連携がもたらす効果について. 腹膜透析2014 77(別冊):367-368, 2014.
4. 佐藤綾, 有村義宏, 清水英樹, 窪田沙也花, 磯村杏耶, 小西文晴, 川嶋聡子, 池谷紀子, 吉原堅, 駒形嘉紀, 要伸也, 石井誠之, 佐藤衛, 山田明:長期維持透析中に再燃した抗好球性多発血管炎性肉芽腫症(Churg-Strauss 症候群)の1例. 透析会誌 47(7):453-457, 2014.
5. 有村義宏:難治性血管炎の新たな治療法. Modern Physician 34(9):1080-1083, 2014.
6. 有村義宏:急速進行性糸球体腎炎に伴う肺病変. 最新医学社別冊 新しい診断と治療の ABC 85:79-87, 2014.
7. 磯村杏耶, 池谷紀子, 片岡郁徳, 齋藤督芸, 小路仁, 吉原堅, 駒形嘉紀, 要伸也, 有村義宏, 山田明, 岡野晴子, 塩川芳明:維持透析中に中枢神経障害を発症して診断された好酸球性多発血管炎性肉芽腫症(EGPA:Churg-Strauss 症候群)の一例. 関東リウマチ 47:202-208, 2014.
8. 高橋孝幸, 要伸也:下痢・嘔吐と水電解質異常. 腎と透析 77(1):71-74, 2014.
9. 要伸也:血管炎・抗 GBM 抗体陽性. 臨牀透析 30(9):41-45, 2014.
10. 要伸也:巻頭言:CKD 診療,そして電解質. 腎と透析77(2):133-134, 2014.
11. 要伸也:腎・透析センターにおける地域連携の取り組み. 杏林医会誌46(1):61-65, 2015.
12. 要伸也:AKI 診療の進歩:血栓性微小血管症(TMA). 腎と透析 76(4):601-604, 2014.
13. 要伸也:外来で行う低カリウム血症の治療のすすめかた. Medical Practice 31(5):811-815, 2014.
14. 山村昌弘, 佐田憲映, 針谷正祥, 藤井隆夫, 石津明洋, 有村義宏, 榎野博史:1.免疫と内科疾患—その病態と治療最前線 5)抗好中球細胞質抗体(ANCA)関連血管炎の病態と治療の最前線. 日本内科学会雑誌 103(9):2121-2129, 2014.
15. 有村義宏, 池谷紀子:血管炎症候群. IV.関節リウマチ以外の膠原病, 最近の話題. 日本内科学会雑誌 103(10):2492-2500, 2014.
16. 池谷紀子, 有村義宏, 吉原堅, 駒形嘉紀, 要伸也, 山田明:膠原病における HPLC による尿中インタクト微量アルブミンの臨床的意義. 杏林医学会雑誌 45(4):125-136, 2014.
17. 有村義宏, 川上民裕, 本間栄, 吉藤元:血管炎:最近の話題. 呼吸 33(11):1082-1095, 2014.
18. 有村義宏:抗 GBM 抗体腎炎へのアフエレスシス療法. 腎と透析78(2):178-181, 2015.
19. 有村義宏:好酸球性多発血管炎性肉芽腫症. 科学評論社 63(3):239-245, 2015.
20. 有村義宏(共著):RPGN 診療ガイドライン作成分科会.エビデンスに基づく急速進行性腎炎症候群(RPGN)診療ガイドライン2014. 日本腎臓学会誌57(1)139-232, 2014.
21. 有村義宏, 池谷紀子:【リウマチ学:診断と治療の進歩】トピックス 関節リウマチ以外の膠原病, 最近の話題 血管炎症候群. 日本内科学会雑誌 103:2492-2500, 2014.
22. Hirayama K, Kobayashi M, Usui J, Arimura Y, Sugiyama H, Nitta K, Muso E, Wada T, Matsuo S and Yamagata K on behalf of the Japanese RPGN Study Group of Progressive Renal Disease: Pulmonary involvements of anti-neutrophil cytoplasmic autoantibody-associated renal vasculitis in Japan. Nephrol Dial Transplant(2015) 30:i83-i93.
23. Ando K, Ohtsu H, Uchida S, Kaname S, Arakawa Y, Fujita T, EVALUATE Study Group: Anti-albuminuric effect of the aldosterone blocker eplerenone in non-diabetic hypertensive patients with albuminuria: a double-blind, randomised, placebo-controlled trial. Lancet Diabetes Endocrinol. 2(12):944-953. 2014.
24. Sawai T, Nangaku M, Ashida A, Fujimaru R, Hataya H, Hidaka Y, Kaname S, Okada H, Sato W, Yasuda T, Yoshida Y, Fujimura Y, Hattori M, Kagami S: Diagnostic criteria for atypical hemolytic uremic syndrome proposed by the Joint Committee of the Japanese Society of Nephrology and the Japan Pediatric Society. Clin Exp Nephrol 18(1):4-9,2014.
25. Igarashi T, Ito S, Sako M, Saitoh A, Hataya H, Mizuguchi M, Morishima T, Ohnishi K, Kawamura N, Kitayama H, Ashida A, Kaname S, Taneichi H, Tang J, Ohnishi M, Study group for establishing guidelines for the diagnosis and therapy of hemolytic uremic syndrome: Guidelines for the management and investigation of hemolytic uremic syndrome. Clin Exp Nephrol 18(4):525-557,2014.
26. 駒形嘉紀:血管炎のバイオマーカーが偽陽性・偽陰性を示す病態. Modern Physician 34:1058-1061, 2014.
27. 駒形嘉紀, 有村義宏:RA 以外の膠原病に対する生物学的製剤治療の可能性 血管炎症候群. 炎症と免疫 23:153-158, 2015.
28. Sada KE, Yamamura M, Harigai M, Fujii T, Arimura Y, Makino H, Research Committee on Intractable Vasculitides, the Ministry of Health, Labour and Welfare of Japan: Issues associated with the Ministry of Health, Labour and Welfare diagnostic criteria for antineutrophil cytoplasmic antibody-associated vasculitides: Reclassification of patients in the prospective cohort study of Remission Induction Therapy in Japanese patients with ANCA-associated vasculitides according to the MHLW criteria. od Rheumatol. 25(4): 657-659, 2015

29. Sada KE, Yamamura M, Harigai M, Fujii T, Dobashi H, Takasaki Y, Ito S, Yamada H, Wada T, Hirahashi J, Arimura Y, Makino H, Research Committee on Intractable Vasculitides, the Ministry of Health, Labour and Welfare of Japan: Classification and characteristics of Japanese patients with antineutrophil cytoplasmic antibody – associated vasculitis in a nationwide, prospective, inception cohort study. *Arthritis Res Ther*.16(2): R101, 2014.
30. Sada KE, Amano K, Uehara R, Yamamura M, Arimura Y, Nakamura Y, Makino H, Research Committee on Intractable Vasculitides, the Ministry of Health, Labour, Welfare of Japan: A nationwide survey on the epidemiology and clinical features of eosinophilic granulomatosis with polyangiitis (Churg-Strauss) in Japan. *Mod Rheumatol*. 24(4):640-644, 2014.
31. Nakada Y¹, Tsuboi N¹, Takahashi Y¹, Yoshida H¹, Hara Y¹, Okonogi H¹, Kawamura T¹, Arimura Y, Yokoo T¹ (Jikei University): A Case of Concurrent MPO-/PR3-Negative ANCA-Associated Glomerulonephritis and Membranous Glomerulopathy. *Case Rep Nephrol*. doi:10.1155/2015/316863. (Epub 2015).

著書

1. 有村義宏: 多発血管炎性肉芽腫症候群(Wegener 肉芽腫症). 間質性肺疾患 診療マニュアル. 久保恵嗣, 藤田次郎編集, 東京, 南江堂, 2014.p.302-304.
2. 有村義宏: ANCA 関連血管炎に関する検査と診療. 第1回 検査と診療 関西フォーラム講演録集腎疾患診療のアップフロント. 名古屋, 医学生物学研究所, 2015.p.15-19.
3. 有村義宏: IV. 免疫血清検査. パーフェクトガイド 検査値事典 [第2版]. 中原一彦監修. 東京, 総合医学社, 2014.p.403-412.
4. 有村義宏: RPGN 診療ガイドライン作成分科会. エビデンスに基づく 進行性腎障害診療ガイドライン2014. 厚生労働省難治性疾患克服研究事業進行性腎障害に関する調査研究班編集. 東京, 東京医学社. 2014.p.vii-x, p.1-5.
5. 有村義宏: RPGN 診療ガイドライン作成分科会. エビデンスに基づく 急速進行性腎炎症候群(RPGN)診療ガイドライン2014 ダイジェスト版. 厚生労働省難治性疾患克服研究事業進行性腎障害に関する調査研究班編集. 東京, 東京医学社. 2014.p.42-54.
6. 有村義宏: RPGN 診療ガイドライン作成分科会. エビデンスに基づく 急速進行性腎炎症候群(RPGN)診療ガイドライン2014準拠 急速進行性腎炎症候群. 有村義宏編集. 東京, 東京医学社. 2014.p.2-10.
7. 有村義宏: 急速進行性糸球体腎炎に伴う肺病変. 全身性疾患の肺病変. 杉山幸比古編集. 大阪, 最新医学社, 2014.p.79-87.
8. 要伸也, 有村義宏: 強皮症腎クリーゼ. 腎疾患・透析最新の治療. 槇野博史, 秋澤忠男編集, 東京, 南江堂, 2014, p.196-199.
9. 要伸也: 成人の HUS 診断・治療. 溶血性尿毒症症候群の診断・治療ガイドライン. 五十嵐隆 統括責任者, 溶血性尿毒症症候群の診断・治療ガイドライン作成班編集, 東京, 東京医学社, 2014, p.65-69.
10. 要伸也: 高ナトリウム血症. 今日の治療指針2015年度版. 東京, 医学書院, 2015.p.622.

その他

1. 要伸也(当番世話人): 臨床研修医のための腎臓セミナー, 東京, 2015年2月28日-3月1日.
2. 有村義宏: ANCA 関連血管炎の治療. 全国膠原病フォーラムブック「全国膠原病フォーラム in 東京」報告書. 一般社団法人 全国膠原病友の会主催, 東京, 2014年10月19日.
3. 有村義宏: 広域な多摩地区に不足するRAの医療資源 不可欠

な医療連携の効果的なあり方を考える. Rapport ラポール 第7号. 中外製薬株式会社. 2014.p.1-11.

第一内科学教室 (神経内科)

講演

1. 岡村耕一, 脊山英徳, 岡野晴子, 傳法倫久, 山田深, 岡島康友, 塩川芳昭: 高齢者におけるアルテプラゼ静脈注射療法について. 第27回日本老年脳神経外科学会, 新潟, 2014年4月25日.
2. 木戸直樹, 岡野晴子, 清水英樹, 福岡利仁, 塩川芳昭, 千葉厚郎: 亜急性に好酸球増多を呈しコレステロール塞栓症と診断した73歳男性例. 首都圏脳卒中フォーラム, 東京, 2014年5月9日.
3. 千葉厚郎, 内堀歩, 加藤知子: 抗 synapsin Ia 抗体測定系の検討. 第55回日本神経学会学術大会, 福岡, 2014年5月21-24日.
4. 内堀歩, 千葉厚郎: ガングリオシド複合による抗原抗体反応増強の機序に関する検討. 第55回日本神経学会学術大会, 福岡, 2014年5月21-24日.
5. 大石知瑞子, 園生雅弘, 千葉厚郎: 下肢末梢神経伝導検査における所謂「50%ルール」の妥当性について. 第55回日本神経学会総会, 福岡, 2014年5月21-24日.
6. 田村暁子, 園生雅弘, 大石知瑞子, 三野俊和, 武田景敏, 山本圭一, 山川義弘, 正木秀樹, 安宅鈴香, 伊藤和博, 葛田強司, 嶋田裕之: 後根神経節炎における頸骨神経刺激体性感覚誘発電位(SEP)の検討. 第55回日本神経学会総会, 福岡, 2014年5月21-24日.
7. 三井純, 松川敬志, 石浦浩之, 市川弥生子, 後藤順, 村山繁雄, 高嶋博, 佐々木秀直, 辻省次, JAMSAC: 多系統萎縮症の疾患関連遺伝子の探索. 第55回日本神経学会学術大会, 福岡, 2014年5月21-24日.
8. 吉田知礼, 綾野水樹, 傳法倫久, 小川有紀, 毛利崇人, 羽田裕, 岡野晴子, 千葉厚郎: 左被殻出血後にパーキンソンニズムを呈した78歳女性例. 第209回日本神経学会関東甲信越地方会, 東京, 2014年6月7日.
9. 柳葉久実, 山本詞子, 山口哲人, 中馬越清隆, 玉岡晃, 市川弥生子, 後藤順, 辻省次: 運動後の筋痙攣, 筋痛で発症し, 亜急性の進行を呈した家族性筋萎縮性側索硬化症(SOD1 L85F 変異)の32歳女性例. 第209回日本神経学会関東・甲信越地方会, 東京, 2014年6月7日.
10. 内尾直裕, 長島優, 平賢一郎, 市川弥生子, 寺尾安生, 松本直通, 辻省次: 乳児期より精神発達遅滞を伴い, 30歳代から歩行障害と嚥下障害が急速に進行, WDR45遺伝子変異を認めた40歳女性例. 第209回日本神経学会関東・甲信越地方会, 東京, 2014年6月7日.
11. 山上まり, 櫻井靖久, 濱田健介, 杉本泉, 萬年徹, 畑中裕己, 内堀歩, 千葉厚郎: 左優位の顔面・上肢主体の運動麻痺に右の舌下神経麻痺を合併したギラン・バレー症候群. 第209回日本神経学会関東・甲信越地方会, 東京, 2014年6月7日.
12. 千葉厚郎: 長期にわたり IVIg療法を行った全身型重症筋無力症の一例. 第3回東京西部神経免疫フォーラム, 立川, 2014年7月17日.
13. 傳法倫久: 脳梗塞急性期および慢性期治療における時間軸でみた場合の抗血小板療法へアスピリンを中心に. 武田薬品勉強会, 三鷹, 2014年7月31日.

14. 岡村耕一, 佐藤研隆, 笹森寛生, 鳥居正剛, 岡野晴子, 傳法倫久, 山田深, 岡島康友, 塩川芳昭: CT-MRI Reversed Discrepancy が認められた急性期アテローム血栓症における脳CT perfusion 画像. 第33回 The Mt. Fuji Workshop on CVD, 盛岡, 2014年8月30日.
15. Chiba A: Molecular story of Guillain-Barré syndrome. 第26回神経免疫学会, 金沢, 2014年9月4-6日.
16. 千葉厚郎, 内堀歩, 加藤知子: 免疫沈降法による抗 synapsin 1a 抗体測定系の検討. 第26回神経免疫学会, 金沢, 2014年9月4-6日.
17. 内堀歩, 千葉厚郎: Guillain-Barré 症候群におけるガングリオン抗体の抗原抗体反応でのセラミド添加の影響. 第26回神経免疫学会, 金沢, 2014年9月4-6日.
18. 中島昌典, 内堀歩, 小川有紀, 宮崎泰, 市川弥生子, 千葉厚郎: 肺小細胞癌に合併した抗 CV2/CRMP-5抗体陽性傍腫瘍性視神経症 PON の61歳女性例. 第210回日本神経学会関東・甲信越地方会, 東京, 2014年9月6日.
19. 傳法倫久: 脳卒中のチーム医療 内科医である私の血管内治療専門医としての立ち位置. 第8回東京脳卒中の血管内治療セミナー, 東京, 2014年9月20日.
20. Okada K, Maruyama K, Torii M, Okamura K, Seyama H, Yamada S, Dembo T, Shiokawa Y: Experience of *IN Vivo* Optical Spectroscopy during and after carotid endarterectomy. The 12th Korean and Japanese Friendship Conference on Surgery for Cerebral Stroke, Osaka, September 26th-27th, 2014.
21. 岡村耕一, 脊山英徳, 岡野晴子, 傳法倫久, 山田深, 岡島康友, 塩川芳昭: 高齢者におけるアルテプラゼ静脈注射療法について. 第73回日本脳神経外科学会学術総会, 東京, 2014年10月9-11日.
22. 吉原智之, 金澤隆三郎, 大淵英徳, 傳法倫久, 嶋口英俊, 大川原舞, 落合育雄: 急性期脳主幹脳脈閉塞に対する血管内治療の成績. 第42回日本救急医学会総会・学術集会, 福岡, 2014年10月28-30日.
23. Oishi C, Sonoo M, Chiba A: Validity of the 50% rule for the nerve conduction study of the lower-limb. American Association of Neuromuscular and Electrophysiology Medicine (AANEM) 61th Annual Meeting, USA, October 29th-November 1st, 2014.
24. Chiba T, Imafuku I, Oishi C, Konoeda F, Higashihara M, Hokkoku K, Hatanaka Y, Sonoo M: Cervical spinal nerve 8 and thoracic vertebrae 1 innervation of forearm flexor muscles. American Association of Neuromuscular and Electrophysiology Medicine (AANEM) 61th Annual Meeting, USA, October 29th, -November 1st, 2014.
25. Chiba A, Uchibori A, Kato T: Study on assay system for anti - synapsin 1a antibody. 12th International Congress of Neuroimmunology, Germany, November 9th-13th, 2014.
26. Uchibori A, Chiba A: A study on the mechanism of antigen - antibody reaction increased by ganglioside - complexing in Guillain - Barré syndrome. 12th International Congress of Neuroimmunology, Germany, November 9th-13th, 2014.
27. 大石知瑞子, 園生雅弘, 橘滋國, 千葉厚郎: 脛骨神経の二峰性複合筋活動電位(CMAP)から内側足底神経障害が証明され, 足根管症候群(TTS)と診断した1症例. 第44回 日本臨床神経生理学会・学術集会, 福岡, 2014年11月19-21日.
28. 千葉隆司, 此枝史恵, 東原真奈, 神谷久雄, 大石知瑞子, 畑中裕己, 園生雅弘: 前腕筋群の C8と T1の筋節支配. 第44回日本臨床神経生理学会・学術集会, 福岡, 2014年11月19-21日.
29. 田村暁子, 園生雅弘, 大石知瑞子, 伊藤和博, 葛田強司, 島田裕之, 伊藤義彰: 後根神経節炎における頸骨神経刺激体性感覚誘発電位(SEP)の検討. 第44回 日本臨床神経生理学会・学術集会, 福岡, 2014年11月19-21日.
30. 中島昌典, 内堀歩, 市川弥生子, 小川有紀, 千葉厚郎: 初期の症状変動と亜急性の瘧性対麻痺・認知機能低下を呈し hereditary diffuse leukoencephalopathy with spheroids(HDLS)と診断した27歳女性例. 第211回日本神経学会関東・甲信越地方会, 東京, 2014年11月29日.
31. 千葉厚郎: 免疫性末梢神経障害の診断と治療・予後予測: Guillain-Barré/Fisher 症候群・CIDP を中心に. 第4回神経疾患に親しみ強くなる会教育セミナー, 東京, 2014年12月20日.
32. 吉原智之, 金澤隆三郎, 大淵英徳, 嶋口英俊, 傳法倫久, 落合育雄, 大川原舞, 国吉昇: 急性期脳主幹脳脈閉塞に対する血行再建療法の適応と工夫. 第30回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術総会, 横浜, 2014年12月4-6日.
33. 笹森寛生, 鳥居正剛, 小松原弘一郎, 傳法倫久, 佐藤栄志, 塩川芳昭: 杏林大学における tPA 静注療法無効例に対する血管内治療の現状. 第30回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術総会, 横浜, 2014年12月4-6日.
34. 千葉厚郎, 内堀歩: 免疫沈降アッセイ系による抗 synapsin 1a 抗体の検討. 平成26年度厚生労働省(神経免疫疾患)政策および実用化研究班合同班会議, 東京, 2015年1月21日.
35. 内堀歩, 千葉厚郎: 糖脂質複合による抗原抗体反応増強機序に関する検討. 平成26年度厚生労働省(神経免疫疾患)政策および実用化研究班合同班会議, 東京, 2015年1月21日.
36. 小松原弘一郎, 傳法倫久, 笹森寛生, 鳥居正剛, 佐藤栄志, 平野照之, 塩川芳昭: 脳主幹動脈急性期血行再建術における当施設での現状と課題—時短に向けての取り組み—. 第20回日本脳神経外科救急学会, 東京, 2015年1月30-31日.
37. 千葉厚郎, 内堀歩: 免疫性神経疾患における新たな診断バイオマーカーの探索: 一次進行型 MS と抗 synapsin 1a 抗体(第2報). 第8回多摩神経免疫研究会, 立川, 2015年2月12日.
38. 綾野水樹, 傳法倫久, 田中雅貴, 平野照之, 塩川芳昭: 肥満および糖尿病の有無がクロビドグレル抵抗性に及ぼす影響. 第40回日本脳卒中学会総会, 広島, 2015年3月26-29日.
39. 金澤隆三郎, 吉原智之, 大淵英徳, 落合育雄, 傳法倫久, 嶋口英俊, 大川原舞, 鈴木直幸, 中野由美子, 赤坂保美: 頸動脈狭窄における, 「定量的」プラーク硬度に関する研究. 第40回日本脳卒中学会総会, 広島, 2015年3月26-29日.
40. 佐藤研隆, 傳法倫久, 笹森寛生, 小松原弘一郎, 鳥居正剛, 佐藤栄志, 平野照之, 塩川芳昭: 右腕頭動脈の可動性プラークに対して Hybrid Surgery を行った1症例. 第40回日本脳卒中学会総会, 広島, 2015年3月26-29日.
41. 岡田啓, 脊山英徳, 鳥居正剛, 岡村耕一, 丸山啓介, 山田深, 傳法倫久, 塩川芳昭: CEA 周術期における INVOS のパターン解析. 第40回日本脳卒中学会総会, 広島, 2015年3月26-29日.
42. 吉原智之, 金澤隆三郎, 大淵英徳, 嶋口英俊, 傳法倫久, 落合育雄, 大川原舞: 急性期脳主幹動脈閉塞に対し血管内治療による早期再開通が予後を改善する可能性. 第40回日本脳卒中学会総会, 広島, 2015年3月26-29日.
43. 小松原弘一郎, 佐藤栄志, 笹森寛生, 鳥居正剛, 傳法倫久, 塩川芳昭: 急性期脳底動脈閉塞に対する血行再建療法の治療成績: 連続13例における画像評価と予後に関する検討. 第40回日本脳卒中学会総会, 広島, 2015年3月26-29日.
44. 中島昌典, 岡野晴子, 傳法倫久, 平野照之, 千葉厚郎, 遠藤

英仁, 窪田博, 磯村杏耶: 大動脈原性脳塞栓症を発症し, 上行大動脈置換術を施行した80歳男性例. 第212回 日本神経学会関東・甲信越地方会, 東京, 2015年3月14日.

45. 傳法倫久: 急性期脳主幹動脈閉塞に対する血行再建療法 — 現状と最近の話題 —. Stroke Core Member Meeting in Koedo, 川越, 2015年3月4日.

論文

1. 千葉厚郎: 糖脂質抗体関連ニューロパチー: 基本と最近の話題. 神経治療学 31: 274-278, 2014.
2. 傳法倫久: 脳梗塞急性期治療 update 脳梗塞の脳血管内治療の最前線. 神経内科 81: 535-543, 2014.
3. Deguchi I¹, Dembo T, Yoshimura S², Sakai N³, Okada Y⁴, Kitagawa K⁵, Kimura K⁶, Hyogo T⁷, Yamagami H⁸, Egashira Y⁹, Tanahashi N¹ (¹Saitama medical University, ²Hyogo College of Medicine, ³Kobe City Medical Center Genrerall Hospital, ⁴National Hospital Organization, Kyushu medical Center, ⁵Osaka University, ⁶Kawasaki Medical School, ⁷Nakamura Memorial Hospital, ⁸National Cerebral and Cardiovascular Center, ⁹Gifu University): Relationship between magnetic resonance angiography - diffusion - weighted imaging mismatch and clinical outcome in endovascular treatment for acute ischemic stroke: subgroup analysis of the Recovery by Endovascular Salvage for Cerebral Ultra - acute Embolism- Japan Registry. J Stroke Cerebrovasc Dis 23(6): 1471-1476, 2014.
4. Oishi C, Sonoo M¹, Kurono H¹, Hatanaka Y¹, Shimizu T¹, Chiba A, Sakuta M (¹Teikyo University School of Medicine): A new pitfall in a sensory conduction study of the lateral antebrachial cutaneous nerve: spread to the radial nerve. Muscle Nerve 50(2): 186-192, 2014.
5. Iose S¹, Misawa S¹, Sonoo M², Shimizu T³, Oishi C, Shibuya K¹, Nasu S¹, Sekiguchi Y¹, Mitsuma S¹, Beppu M¹, Omori S¹, Komori T⁴, Kokubun N⁵, Inaba A⁶, Hirashima F⁷, Kuwabara S¹, The Tokyo Metropolitan Neuromuscular Electrodiagnosis Study Group (¹Chiba University, ²Teikyo University School of Medicine, ³Tokyo Metropolitan Neurological Hospital, ⁴National Hakone Hospital, ⁵Dokkyo Medical University, ⁶Kanto Central Hospital, ⁷Nissan Tamagawa Hospital): Duration of the distal compound muscle action potential for diagnosis of chronic inflammatory demyelinating polyneuropathy: effects of low-cut filters. J Clin Neurophysiol 31(5): 441-443, 2014.
6. Tezenas du Montcel S, Durr A, Bauer P, Figueroa KP, Ichikawa Y, Brussino A, Forlani S, Rakowicz M, Schöls L, Mariotti C, van de Warrenburg BP, Orsi L, Giunti P, Filla A, Szymanski S, Klockgether T, Berciano J, Pandolfo M, Boesch S, Melegh B, Timmann D, Mandich P, Camuzat A, Clinical Research Consortium for Spinocerebellar Ataxia (CRC-SCA), EUROSCA network, Goto J, Ashizawa T, Cazeneuve C, Tsuji S, Pulst SM, Brusco A, Riess O, Brice A, Stevanin G: Modulation of the age at onset in spinocerebellar ataxia by CAG tracts in various genes. Brain. 137 (9): 2444-2455, 2014.
7. Saigoh K, Mitsui J, Hirano M, Shioyama M, Samukawa M, Ichikawa Y, Goto J, Tsuji S, Kusunoki S: The first Japanese familial case of spinocerebellar ataxia 23 with a novel mutation in the PDYN gene. Parkinsonism Relat Disord. 21(3): 332-334, 2015.

著書

1. 内堀歩, 千葉厚郎: 急性散在性脳脊髄炎(ADEM). 神経疾患最新の治療 2015-2017. 小林祥泰, 水澤英洋, 山口修平編集.

東京, 南江堂, 2015. p.133-135.

2. 大石知瑞子, 千葉厚郎: 無菌性髄膜炎. 新しい診断と資料のABC82/神経7 神経関連感染症. 水澤英洋編. 大阪, 最新医学社, 2014. p.65-72.
3. 市川弥生子, 辻省次: 脊髄小脳変性症. こどもの病気 遺伝についてきかれたら. 松原洋一, 呉繁夫, 左合治彦編集. 東京, 診断と治療社, 2015. p.123-125
4. 千葉厚郎: Fisher 症候群. 神経内科研修ノート. 鈴木則宏責任編集, 東京, 診断と治療社, 2015. P.464-466.

特許等知的財産関係, 報告書

1. 千葉厚郎, 内堀歩: 免疫沈降アッセイ系による抗 synapsin 1a 抗体の検討. 厚生労働科学研究補助金難治性疾患等政策研究事業「エビデンスに基づいた神経免疫疾患の早期診断基準・重症度分類・治療アルゴリズムの確立に関する研究」2014年度総括分担研究報告書.
2. 内堀歩, 千葉厚郎: 糖脂質複合による抗原抗体反応増強機序に関する検討. 厚生労働科学研究委託費 難治性疾患実用化研究事業「免疫性ニューロパチーの治療反応性予測に基づく有効な治療戦略の構築」2014年度委託業務成果報告書.

第二内科学教室 (循環器内科)

講演

1. 坂田好美: 高血圧ガイドライン2014改訂のポイントとみついていたきたい心不全. 日本高血圧学会. 東京, 2014年4月9日.
2. 谷谷誠一, 山崎聡子, 飯島毅彦, 萬知子, 井原玲, 波利井清紀, 佐藤徹, 吉野秀朗: 新方式による非心臓手術前循環器スクリーニングシートの使用経験と有用性. 第111回日本内科学会総会・講演会, 東京, 2014年04月13日.
3. 石黒みどり, 坂田好美, 上杉陽一郎, 木村郷, 井坂葵, 南島俊徳, 古谷充史, 松下健一, 佐藤徹, 吉野秀朗: 肺動脈性肺高血圧症例における3D Speckle Tracking Strain を用いた右室機能の評価. 第25回日本心エコー図学会学術集会, 金沢, 2014年4月17日.
4. 上杉陽一郎, 坂田好美, 南島俊徳, 井坂葵, 石黒みどり, 伊波巧, 石黒晴久, 松下健一, 佐藤徹, 吉野秀明: 心エコーを用いた慢性血栓性肺高血圧症における経皮的肺動脈拡張術治療後の再灌流性肺水腫出現の予測. 第25回日本心エコー図学会学術集会, 金沢, 2014年4月17日.
5. 上田明子: 肥大型心筋症に合併する心室頻拍に対するカテーテル治療. Women in EP, 大阪, 2014年4月18日.
6. Sato T, Soejima K, Denpo T, Momose Y, Matsushita N, Hoshida K, Higuchi S, Miwa Y, Togashi I, Ueda A, Shiokawa Y, Yoshino H: High Incidence of Atrial Fibrillation Episodes Prior to the Stroke in Patients with Cardiac Implantable Electrical Devices. 第79回日本循環器学会学術集会, 大阪, 2015年4月24-26日.
7. 佐藤徹: 肺高血圧治療の最新の遅延. ファイザー社内勉強会, 東京, 2014年4月25日.
8. 佐藤徹: 肺高血圧症の最新の診断と治療. 第6回大阪肺高血圧症勉強会大阪, 2014年4月26日.
9. Sato T, Soejima K, Nagaoka M, Momose Y, Matsushita N, Hoshida K, Higuchi S, Miyakoshi M, Miwa Y, Ueda A, Yoshino H, and Shoda M: Unusual Break in a Durata Lead With Shock Coil Fragmentation and Cable Externalization. Heart Rhythm 35th annual scientific session, USA, May 7th-10th, 2014.
10. 伊波巧: PTPA for CTEPH: current status and future prospect.

- 第10回新広島循環器治療研究会, 広島, 2014年5月9日.
11. 坂田好美:心エコーで評価する～右心機能の重要性～. 第63回日本医学検査学会教育講演, 東京, 2014年5月18日.
 12. 三輪陽介:心房細動マネジメント -ガイドライン改定から考える-. 東京都病院薬剤師会 臨床薬学研究会, 東京, 2014年5月21日.
 13. Inami T, Kataoka M, Ishiguro H, Shigeta Y, Kikuchi H, Yoshino H, Satoh T: A new era of therapeutic strategies for chronic thromboembolic pulmonary hypertension: Contrast among pulmonary endarterectomy, precutaneous transluminal pulmonary hypertension and medical therapy. International CTEPH Conference Paris 2014, France, June 2nd-3rd, 2014.
 14. Inami T, Kataoka M, Ishiguro H, Shigeta Y, Kikuchi H, Yoshino H, Satoh T: Pressure - wire - guided percutaneous transluminal pulmonary angioplasty: a breakthrough in the catheter interventional therapy for the chronic thromboembolic pulmonary hypertension. International CTEPH Conference Paris 2014, France, June 2nd-3rd, 2014.
 15. Kikuchi H, Inami T, Kataoka M, Ishiguro H, Shigeta Y, Yoshino H, Satoh T: A gradual improvement without functional restenosis one year after precutaneous transluminal pulmonary angioplasty for chronic thromboembolic pulmonary hypertension, International CTEPH Conference Paris 2014, France, June 2nd-3rd, 2014.
 16. Kikuchi H, Inami T, Kataoka M, Ishiguro H, Shigeta Y, Yoshino H, Satoh T: The most sensible objective marker in echocardiography and electrocardiography to detect an improvement of pulmonary hypertension: a study after precutaneous transluminal pulmonary angioplasty. International CTEPH Conference Paris 2014, France, June 2nd-3rd, 2014.
 17. Shigeta Y, Inami T, Kataoka M, Ishiguro H, Kikuchi H, Yoshino H, Satoh T: Impact of precutaneous transluminal pulmonary hypertension for chronic thromboembolic pulmonary hypertension with residual pulmonary hypertension after pulmonary endarterectomy, International CTEPH Conference Paris 2014, France, June 2nd-3rd, 2014.
 18. Shigeta Y, Inami T, Kataoka M, Ishiguro H, Kikuchi H, Yoshino H, Satoh T: Relationship between lipid disorders and chronic thromboembolic pulmonary hypertension, International CTEPH Conference Paris 2014, France, June 2nd-3rd, 2014.
 19. Kanaya M, Inami T, Kataoka M, Ishiguro H, Yanagisawa R, Shimura N, Momose Y, Uesugi Y, Yoshino H, Satoh T: A gradual improvement without functional restenosis one year after precutaneous transluminal pulmonary angioplasty for chronic thromboembolic pulmonary hypertension. International CTEPH Conference Paris 2014, France, June 2nd-3rd, 2014.
 20. 佐藤徹:エボprostetノール治療について. 第2回日立肺高血圧症勉強会, 日立, 2014年6月16日.
 21. 吉野秀朗:冠攣縮性狭心症とVasospastic Heart failure. 旭川循環器疾患学術講演会, 旭川, 2014年6月19日.
 22. 坂田好美:肺高血圧症と慢性心不全. 第9回秋桜会講演, 秋田, 2014年6月21日.
 23. 岩田真由美, 伊波巧:An early-onset case of right ventricular tumor. 若手医師のため循環器内科セミナー, 東京, 2014年6月21日.
 24. 佐藤徹:肺高血圧症の最新の診断と治療. 第会小児肺循環を考える会 in 神奈川, 横浜, 2014年6月26日.
 25. 副島京子: Epicardial catheter ablation. Japanese Heart Rhythm Society Summer Seminar, 東京, 2014年6月29日.
 26. 吉野秀朗:循環器疾患上手な薬の飲み方. 杏林大学公開講演会, 三鷹, 2014年6月28日.
 27. 佐藤徹:肺高血圧症の最近知見. RD-6 DM 対象社内勉強会プログラム, 東京, 2014年7月16日.
 28. 坂田好美:Speckle-tracking Echocardiographyの strainを用いた心機能評価. 第252回多摩エコー研究会, 東京, 2014年7月17日.
 29. 佐藤徹:最新の肺高血圧症診断と治療. 第15回大阪膠原病と肺循環を考えるフォーラム, 大阪, 2014年7月18日.
 30. 坂田好美, 今井昌康:Multimodality による Strain 評価. 第15回心筋会, 東京, 2014年7月19日.
 31. 佐藤徹:Percutaneous Transluminal Pulmonary Angioplasty in Chronic Thromboembolic Pulmonary Hypertension. 6th Long March National Vascular Medicine Conference. China, 2014年7月20日.
 32. 副島京子:Recent Advance in Arrhythmia Therapy. Japanese Heart Rhythm Society Annual Meeting, 東京, 2014年7月22-25日.
 33. 副島京子:Epicardial approach. Japanese Heart Rhythm Society Annual Meeting, 東京, 2014年7月22-25日.
 34. 佐藤俊明, 萩原陽, 吉村高寛, 露口晃, 野澤隆志, 安村佑樹, 川上俊一郎, 村野祐司, 萬知子, 前田明子, 佐藤俊明, 副島京子, 吉野秀朗:当院における遠隔モニタリング運用と今後の展望. 第29回日本不整脈学会学術大会, 東京, 2014年7月22-25日.
 35. Ueda A, Oginosawa Y, Soejima K, Abe H, Kohno R, Ohe H, Momose Y, Nagaoka M, Matsushita N, Hoshida K, Higuchi S, Miyakoshi M, Miwa Y, Sato T, Yoshino H: Outcomes of single- or dual-lead ICD system in Japanese patients - Experience of 2 University hospitals in Japan -. 第29回日本不整脈学会学術集会, 東京, 2014年7月23-25日.
 36. 吉野秀朗:知ってほしい虚血性心疾患の心電図診断の基本. 第29回日本不整脈学会学術大会・第31回日本心電学会学術集会 合同学術大会, 東京, 2014年7月24日.
 37. Inami T, Kataoka M, Ishiguro H, Shimura N, Yanagisawa R, Yoshino H, Satoh T: Pressure - wire - guided precutaneous transluminal pulmonary angioplasty: a breakthrough in the interventional therapy for chronic thromboembolic pulmonary hypertension. The 23rd Annual Meeting of Japanese Association of Cardiovascular Intervention and Therapeutics, Nagoya, July 24th-26th, 2014.
 38. Miwa Y: Risk Stratification of Serious Cardiac Events Using Heart Rate Turbulence in Patients with Myocardial Infarction. Symposium Noninvasive Assessment of Autonomic nerve system. Joint meeting of 29th Japan Heart Rhythm Society and 31st Japanese Society of Electrocardiology, Tokyo, July 25th, 2015.
 39. Miwa Y, Soejima K, Nagaoka N, Momose Y, Matsushita N, Higuchi S, Hoshida K, Miyakoshi M, Ueda A, Sato T, Yoshino H: Arrhythmic Events during Head-up Tilt Test in Patients with Suspected Reflex Syncope or Presyncope. Joint meeting of 29th Japan Heart Rhythm Society and 31st Japanese Society of Electrocardiology, Tokyo, July 25th, 2015.
 40. 吉野秀朗:虚血性心疾患診療の最先端(最新のガイドラインから). 三鷹市医師会循環器研究会, 三鷹, 2014年7月30日.
 41. 合田あゆみ, 石黒みどり, 長岡身佳, 菊池華子, 志村亘彦, 柳澤亮爾, 伊波巧, 石黒晴久, 吉野秀朗, 佐藤徹:右心カテーテル併用心肺運動負荷試験による肺高血圧症の早期検出に関する検討. PH サミット2014, 岡山, 2014年8月2-3日.

42. 佐藤徹:CTEPH の診断と治療について. バイエル社外講師勉強会, 東京, 2014年8月6日.
43. 佐藤徹:PTEとDVTへの集学的治療:最新の診療の実態とその成績. 第23回日本集中治療医学会関東甲信越地方会, 東京, 2014年8月23日.
44. Inami T, Kataoka M, Ishiguro H, Yanagisawa R, Momose Y, Uesugi Y, Kanaya M, Yoshino H, Satoh T: Pressure - wire - guided percutaneous transluminal pulmonary angioplasty : a breakthrough in the catheter interventional therapy for the chronic thromboembolic pulmonary hypertension. European Society of Cardiology Congress 2014, Spain, August 30th, - September 3rd, 2014.
45. Tanai S, Yamasaki S, Goda A, Nagae A, Nishimura T, Shimoyama K, Satoh T, Yoshino H: Chronic kidney disease and stress left ventricular systolic function in adenosine stress myocardial perfusion imaging predict future cardiovascular events . European Society of Cardiology Congress 2014, Barcelona SPAIN, August 30th, -September 3rd, 2014.
46. 谷合誠一: 杏林大学方式による非心臓手術前スクリーニングシートの有用性. 第18回関東ハートセミナー, 東京, 2014年9月12日.
47. 吉野秀朗:地域包括ケアと ICT. 医療福祉建築フォーラム2014, 東京, 2014年9月19日.
48. 佐藤徹:心房中隔欠損症からくる肺高血圧症. 医療講演会東京都難病相談・支援センター, 東京, 2014年9月21日.
49. 山岸民治, 上田明子, 福士圭, 若林典弘, 山崎聡子, 松下健一, 坂田好美, 佐藤徹, 吉野秀朗, 稲葉雄亮, 土屋博司, 遠藤英仁, 野間美緒, 窪田博:バルサルバ洞動脈瘤・感染性心内膜炎へ進展した化膿性心外膜炎の一例. 日本循環器学会関東甲信越地方会, 東京, 2014年9月26日.
50. 副島京子:Ablation of Life Threatening Ventricular. 第62回日本心臓病学会学術集会, 仙台, 2014年9月26-28日.
51. 伊波巧, 片岡雅晴, 石黒晴久, 重田洋平, 菊池華子, 佐藤徹, 吉野秀朗:Current status and future prospect of precutaneous transluminal pulmonary angioplasty in our institution. 第62回日本心臓病学会学術集会, 仙台, 2014年9月26-28日.
52. 菊池華子, 伊波巧, 片岡雅晴, 石黒晴久, 重田洋平, 百瀬裕一, 金谷允博, 佐藤徹, 吉野秀朗:慢性血栓性肺高血圧症に対する経皮的肺動脈形成術後1年間の血行動態変化. 第62回日本心臓病学会学術集会, 仙台, 2014年9月26-28日.
53. 重田洋平, 伊波巧, 片岡雅晴, 石黒晴久, 菊池華子, 百瀬裕一, 金谷允博, 佐藤徹, 吉野秀朗:術後残存肺高血圧症に対する経皮的肺動脈形成術の効果. 第62回日本心臓病学会学術集会, 仙台, 2014年9月26-28日.
54. 金谷允博, 伊波巧, 片岡雅晴, 石黒晴久, 重田洋平, 菊池華子, 佐藤徹, 吉野秀朗:慢性血栓性肺高血圧症と脂質異常症及び EPA/AA 比の関連性. 第62回日本心臓病学会学術集会, 仙台, 2014年9月26-28日.
55. 佐藤徹:最新の肺高血圧症診断と治療. 第4回東京肺循環セミナー, 東京, 2014年10月2日.
56. 伊波巧, 片岡雅晴, 石黒晴久, 重田洋平, 百瀬裕一, 金谷允博, 福士圭, 佐藤徹, 吉野秀朗: Efficacy and Safty of balloon pulmonary angioplasty for inoperable chronic thromboembolic pulmonary hypertension in Japan. 第2回肺高血圧学会第3回日本肺循環学会合同学術集会, 東京, 2014年10月3-5日.
57. 佐藤徹:最新の肺高血圧症診断と治療. 第4回岐阜肺高血圧症フォーラム, 岐阜, 2014年10月8日.
58. 富樫郁子, 副島京子, 上田明子, 三輪陽介, 樋口聡, 宮越睦, 松下紀子, 百瀬裕一, 長岡身佳, 吉野秀朗:陳旧性前壁心筋梗塞に対し voltage adjustment による isthmus 同定で複数の心室頻拍の焼灼に成功した一例. 第26回カテーテルアブレーション委員会公開研究会, 新潟, 2014年10月9-11日.
59. 坂田好美:当院におけるファブリー病のスクリーニングの現状と循環器画像診断. 多摩ファブリー病セミナー, 東京, 2014年10月16日.
60. 伊波巧:Current status of treatment for chronic thromboembolic pulmonary hypertension in our institution. 第1回群馬 CTEPH フォーラム, 前橋, 2014年10月20日.
61. 谷合誠一:高純度EPA製剤を活用した治療戦略. Pure EPA 多摩クリニックセミナー, 東京, 2014年10月22日.
62. 佐藤徹:最近の肺高血圧症診断・治療の動向. 第3回神奈川肺高血圧症カンファレンス, 横浜, 2014年10月23日.
63. 佐藤徹:講演肺高血圧症を中心に. 第9回患者と医療者が創るフォーラム, 東京, 2014年10月23日.
64. Miwa Y, Soejima K, Sato T, Ueda A, Miyakoshi M, Hoshida K, Higuchi S, Matsushita N, Momose Y, Yoshino H: Unusual Late complications of the catheter ablation: femoral hematoma and cardiac tamponade. 7th Asia Pacific Heart Rhythm Society Scientific Session, India, October 29th, 2014.
65. 佐藤徹:肺動脈形成術について. 第9回東京医科歯科大学関連病院 冠動脈治療研究会, 東京, 2014年10月25日.
66. Soejima K: Epicardial catheter ablation: anatomy and complication. APHRS2014, India, October 29th, - November 1, 2014.
67. Soejima K: Entrainment mapping for VT ablation. APHRS2014, India, October 29th, -November 1st, 2014.
68. Soejima K: Ischemic and non-ischemic cardiomyopathy. APHRS2014, India, October 29th, -November 1st, 2014.
69. Yoshino H: A usefulness of novel cardiovascular peri-operative screening for non-cardiac surgery. The 31st Congress of the Pan-Pacific Surgical Association Japan Chapter, Taiwan . October 31st, -November 2nd, 2014.
70. 吉野秀朗:非心臓手術の術前循環器チェックポイント. 三鷹, 2014年11月12日.
71. 伊波巧, 片岡雅晴, 石黒晴久, 柳澤亮爾, 志村亘彦, 佐藤徹, 吉野秀朗: Pressure-wire- guided PTPA. Alliance for revolution and international cardiology advancement 2014, 福岡, 2014年11月21-23日.
72. 坂田好美:循環器領域における心臓超音波の今後の展望-最新の循環器診療と心臓超音波, 栃木, 2014年11月25日.
73. 吉野秀朗:安心できる地域医療をめざして. 「みんなで守る地域医療」講演会, 白河, 2014年11月30日.
74. Soejima K: Optimal relationship among regulators, scientific societies, device industries: which future can we foresee?. XVI International Symposium on Progress in Clinical Pacing Euro - japan Arrhythmia Forum, Italy, December 2nd-5th, 2014.
75. 佐藤徹:肺高血圧診断と治療の経験. 第8回東海肺高血圧症フォーラム. 名古屋, 2014年12月6日.
76. 坂田好美, 吉川勉, 馬原啓太郎, 馬原啓太郎, 上田哲郎, 磯貝俊明, 小西裕二, 長尾建, 山本剛, 高山守正:心エコーを用いたこつぽ型心筋症の心機能障害の特徴-東京 CCU ネットワークよりの報告-. 第34回東京CCU研究会, 東京, 2014年12月6日.
77. 田口浩樹, 重田洋平, 山岸民治, 樋口聡, 伊波巧, 石黒晴久, 高昌秀安, 佐藤徹, 吉野秀朗:冠攣縮性狭心症の診断におい

- て iFR が有用であることが示唆された一例. 第234回日本循環器学会関東甲信越地方会, 東京, 2014年12月6日.
78. 坂田好美: HFpEF って何だろう?-心エコーを用いた HFpEF の評価-. 東京, 2014年12月9日.
79. 上田明子. 抗凝固療法の現状と課題-ワルファリンのメリット・デメリット. 多摩不整脈研究会/エリキュース座談会, 東京, 2014年12月12日.
80. 坂田好美: 肺高血圧の診断と運動負荷心エコー. 運動負荷心エコー&PH 講演会, 東京, 2014年12月14日.
81. Soejima K: Sudden cardiac death prevention. Yamaguchi Arrhythmia Forum, Yamaguchi, January 30th, 2015.
82. 三輪陽介, 副島京子, 佐藤俊明, 上田明子, 富樫郁子, 星田京子, 樋口聡, 松下紀子, 百瀬裕一, 吉野秀朗: 頻脈誘発性心筋症による QT 延長症候群で Torsades de pointes を呈した一例. 第27回臨床不整脈研究会, 東京, 2015年1月10日.
83. 吉野秀朗: 虚血性心疾患の心電図. 毛呂山抗凝固療法 Network Meeting, 毛呂山, 2015年2月12日.
84. 佐藤徹: 肺高血圧症と右心機能-今後の展望と着目点-. 座談会 CARDIAC PRACTICE. 東京, 2015年1月15日.
85. 松下紀子, 上田明子, 長岡身佳, 百瀬裕一, 樋口聡, 星田京子, 宮越睦, 三輪陽介, 富樫郁子, 佐藤俊明, 副島京子, 吉野秀朗, 森山久美, 萬知子: 硬膜外麻酔で VF storm を脱し星状神経節レーザー照射で ICD 作動抑制に至った TOF 根治術後の1例. 第17回日本成人先天性心疾患学会, 東京, 2015年1月17-18日.
86. 佐藤徹: 最新の肺高血圧症診断と治療. 肺高血圧症セミナー, 八王子, 2015年2月13日.
87. 吉野秀朗: 東京都で実施されている CCU 大動脈ネットワークについて. 第30回近畿 MMC 研究会, 大阪, 2015年2月14日.
88. 上田明子. マグネティックナビゲーションによるカテーテルアブレーション. 第34回阪神アブレーション電気生理研究会, 大阪, 2015年2月14日.
89. 谷合誠一: 杏林大学方式による非心臓手術前スクリーニングシートの有用性. 第11回メトロポリタンハートクラブ, 東京, 2015年2月16日.
90. 松下紀子, 佐藤俊明, 百瀬裕一, 樋口聡, 星田京子, 三輪陽介, 富樫郁子, 上田明子, 副島京子, 吉野秀朗: 房室ブロック症例における心筋症の合併: 心臓 MRI での検討. 第7回植込みデバイス関連冬季大会, 東京, 2015年2月19-21日.
91. 奥田健太郎, 渡邊英一, 西井伸洋, 土屋邦彦, 佐藤俊明, 田上和幸, 阿部芳久, 寺田健, 亀谷良介, 山本賢, 祖父江嘉洋, 尾崎行男: 不適切作動を有する患者における予後規定因子. 第7回植込みデバイス関連冬季大会, 東京, 2015年2月19-21日.
92. 前田明子, 佐藤俊明, 副島京子, 上田明子, 三輪陽介, 宮越睦, 星田京子, 樋口聡, 松下紀子, 百瀬裕一, 長岡身佳, 吉野秀朗: 頻回なショック作動と失神を経験後, 遠隔モニタリングを活用したケアが必要となった ICD 植込み後の1例. 第7回植込みデバイス関連冬季大会, 東京, 2015年2月19-21日.
93. 前田明子, 佐藤俊明, 副島京子, 上田明子, 三輪陽介, 宮越睦, 星田京子, 樋口聡, 松下紀子, 百瀬裕一, 長岡身佳, 吉野秀朗: ICD/CR T-D 植込み患者の自動車運転制限に関する認識調査. 第7回植込みデバイス関連冬季大会, 東京, 2015年2月19-21日.
94. 富樫郁子, 佐藤俊明, 副島京子, 上田明子, 三輪陽介, 宮越睦, 星田京子, 樋口聡, 松下紀子, 百瀬裕一, 長岡身佳, 吉野秀朗: 側副血行路より ICD リード追加植え込みをおこなった, ペースメーカー植込み後鎖骨下静脈完全閉塞を合併した透析症例. 第7回植込みデバイス関連冬季大会, 東京, 2015年2月19-21日.
95. 三輪陽介, 副島京子, 長岡身佳, 百瀬裕一, 松下紀子, 樋口聡, 星田京子, 宮越睦, 上田明子, 佐藤俊明, 吉野秀朗: 反射性失神が疑われた患者における head-up tilt 試験中の不整脈イベント. 第7回植込みデバイス関連冬季大会, 東京, 2015年2月19-21日.
96. 吉野秀朗: 大動脈解離の成因と疫学. 第3回大動脈解離シンポジウム, 横浜, 2015年3月7日.
97. 佐藤徹: 最新の肺高血圧症診断と治療. アイミクス配合錠発売2周年記念講演会 in 多摩, 多摩, 2015年3月11日.
98. Sakata K, Uesugi Y, Isaka A, Minamishima T, Matsushita K, Toru Satoh T, Yoshino H: Evaluation of Right Atrial Function and Prognosis Using Speckle - Tracking Imaging in Patients with Pulmonary artery Hypertension. The American College of Cardiology 64th Annual Scientific Session, USA, March 15th, 2015.
99. Soejima K: Epicardial catheter ablation. Taiwan HRS Annual Meeting, Taiwan, March 7th-8th, 2015.
100. Soejima K: VT ablation in valve replacement patients. Taiwan, March 7th-8th, 2015.
101. Soejima K: VT ablation. Kimitsu Arrhythmia Meeting, Kimitsu, March 17th, 2015.
102. 坂田好美, 今井昌康, 横山健一, 上杉陽一郎, 南島俊徳, 古谷充史, 佐藤徹, 似鳥俊明, 吉野秀朗: Multimodality imaging による Strain 評価, 北九州, 2015年3月28日.

論文 邦文

1. 吉野秀朗: 不安定狭心症・非 ST 上昇型心筋梗塞 (UA/NSTEMI) に関する2007年ガイドラインの2012年重点改訂—ACCF/AHA. 血栓と循環22(1):131-133, 2014.
2. 吉野秀朗: 抗血栓薬を服用中の患者が内視鏡検査, 生検, 粘膜切除, 手術をうけることになりました. どうすればよいですか. 循環器科医必携—日常診療の疑問解決します—. Heart View 18(12):257-262, 2014.
3. 吉野秀朗: 心臓病患者が非心臓手術を受ける際に大丈夫というためのポイントを説明してください. 循環器科医必携—日常診療の疑問解決します—. Heart View 18-12:263-268, 2014.
4. 吉野秀朗: 心筋梗塞患者をどう管理するか. ICU・CCU における循環管理. Heart View 18(13):64-67, 2014.
5. 吉野秀朗: ICT を用いた地域包括ケアの現状と未来. 杏林医学会雑誌 46(1):77-82, 2015.
6. 佐藤徹: 肺高血圧. 呼吸と循環 62(4):338-344, 2014.
7. 佐藤徹: 肺塞栓症患者をどう管理するか. Heart View. 18(13):74-77, 2014.
8. 佐藤徹: 肺高血圧症の最適治療を目指して a) 内科の立場より. 34:43(1403)-48(1408), 2014.
9. 佐藤徹: 肺動脈性肺高血圧症薬物治療の最前線. Pharma Medica. 32:72-73, 2014.
10. 佐藤徹: 特発性肺動脈性肺高血圧症 (IPAH) の診断と治療. 呼吸器内科 26(4):245-251, 2014.
11. 佐藤徹: “肺高血圧症診断のポイントと最近の治療戦略 3) 慢性血栓性肺高血圧症 内科の立場より”. Progress in Medicine. 34-8, 2014.
12. 坂田好美: 最新の循環器診療—どこまで進むか心エコー検査. 東京, 杏林医学会雑誌45(4):175-182, 2014.

13. 村上力¹, 吉川勉², 前川裕一郎³, 上田哲郎⁴, 坂田好美, 磯貝俊明⁴, 山本剛⁵, 長尾建⁶, 高山守正²⁽¹⁾(東海大医大²榊原記念病院³慶応医大⁴多摩総合医療センター⁵日本医科大⁶日本大学): たこつぼ型心筋症における院内心合併症の予測因子に関する検討. ICUとCCU:38(別冊):S17-18, 2015.
14. 前川裕一郎¹, 吉川勉², 上田哲郎³, 坂田好美, 村上力⁴, 磯貝俊明³, 山本剛⁵, 長尾建⁶, 高山守正²⁽¹⁾(慶応医大²榊原記念病院³多摩総合医療センター⁴東海大医大⁵日本医科大⁶日本大学): たこつぼ心筋症症例における入院時好中球数増加の意義. ICUとCCU:38(別冊):S53-54, 2015.
15. 磯貝俊明¹, 吉川勉², 上田哲郎¹, 小西裕二³, 坂田好美, 前川裕一郎⁴, 村上力⁵, 山本剛⁶, 長尾建⁷, 高山守正²⁽¹⁾(多摩総合医療センター²榊原記念病院³東京医科歯科医大⁴慶応医大⁵東海大医大⁶日本医科大⁷日本大学): たこつぼ心筋症における心電図変化と心臓合併症の関連についての検討—東京 CCU ネットワークデータを用いた多施設共同研究—. ICU と CCU:38(別冊):S58-64, 2015.
16. 松下紀子, 佐藤俊明, 金谷允博, 百瀬裕一, 長岡身佳, 樋口聡, 星田京子, 宮越睦, 三輪陽介, 上田明子, 副島京子, 吉野秀朗: 致死的不整脈を合併した筋ジストロフィーの2症例. 心臓, 46(2): 134-139, 2014.
17. 上田明子, 副島京子, 三輪陽介, 塚田雄大, 宮越睦, 星田京子, 長岡身佳, 佐藤俊明, 吉野秀朗, 新田隆¹, 村田広茂¹⁽¹⁾(日本医科大): 二弁置換後の心室頻拍に対する心外膜アブレーションを施行した1例. 臨床心臓電気生理 37:241-249, 2014.
18. 佐藤俊明: 心臓植込みデバイスの遠隔モニタリングをもちいた地域医療連携. 杏林医学会雑誌 46(1):67-71, 2015
19. 佐藤俊明: 心臓植込みデバイスをもちいた診療の最新. 杏林医学会雑誌 46(1):107-110, 2015.
20. 松下健一: 急性心不全. 杏林医学会雑誌45:165-169, 2014.
21. 谷合誠一, 山崎聡子, 飯島毅彦¹, 萬知子², 井原玲³, 波利井清紀³, 佐藤徹, 吉野秀朗^{1(昭和医大)}, ²杏林大学麻酔科学, ³杏林大学形成外科学: 新方式による非心臓手術前循環器スクリーニングシートの使用経験と有用性. 心臓 46(8):1071-1079, 2014.
22. 谷合誠一, 横山健一¹⁽¹⁾(杏林大学放射線医学): 循環器診療を支える最新の非侵襲的検査. 杏林医会誌 46(1):111-121, 2015.
23. 田口浩樹: PAD と全身疾患. 杏林医学会雑誌 45:159-163, 2014.
24. Satoh T: Current practice for pulmonary hypertension. Chin Med J (Engl).127(19):3491-3495, 2014.
25. Aizawa Y, Takatsuki S, Kashimura S, Katsumata Y, Nishiyama T, Kimura T, Nishiyama N, Tanimoto Y, Tanimoto K, Fukuda Y, Satoh T, Ogawa S, Fukuda K: Thoracic impedance as a therapeutic marker of acute decompensated heart failure, Int J Cardiol. 174(3):840-2, 2014.
26. Inami T, Kataoka M¹, Ando M², Fukuda K¹, Yoshino H, Satoh T^{1(Keio University)}, ²Fujita Health University): A new era of therapeutic strategies for chronic thromboembolic pulmonary hypertension by two different interventional therapies: pulmonary endarterectomy and percutaneous transluminal pulmonary angioplasty. PLoS One. 9(4), 2014.
27. Inami T, Kataoka M¹, Ishiguro H, Yanagisawa R, Shimura N, Yoshino H, Satoh T^{1(Keio University)}: Percutaneous transluminal pulmonary angioplasty for chronic thromboembolic pulmonary hypertension with severe right heart failure. Am J Respir Crit Care Med. 189(11):1437-9, 2014.
28. Inami T, Kataoka M¹, Shimura N, Ishiguro H, Yanagisawa R, Fukuda K¹, Yoshino H, Satoh T^{1(Keio University)}: Pressure-wire-guided precutaneous transluminal pulmonary angioplasty: a breakthrough in catheter-interventional therapy for chronic thromboembolic pulmonary hypertension. JACC Cardiovascular Interv 7(11): 1297-1306, 2014.
29. Kanaya M, Matsushita K, Inami T, Yamasaki S, Mizumi S, Minamishima T, Goda A, Ueda A, Sakata K, Satoh T, Yoshino H. :Successful Treatment of Severe Right-Sided Heart Failure Due to Postoperative Constrictive Pericarditis With Tolvaptan. Am J Ther. (Epub 2014).
30. Kataoka M¹, Yanagisawa R, Inami T, Kawakami T, Fukuda K¹, Yoshino H, Sano M¹, Satoh T^{1(Keio University)}: Fischer Ratio as Predictor of Severity and Adverse Cardiac Events in Pulmonary Hypertension. Journal of Cardiac Failure 20(10):S146, 2014.
31. Kimura M¹, Tamura Y¹, Takei M¹, Yamamoto T¹, Ono T², Kawakami T¹, Kataoka M¹, Kuwana M², Satoh T, Fukuda K¹⁽¹⁾(Keio University ²Hiratsuka City Hospital): Article: Rapid Initiation of Intravenous Epoprostenol Infusion Is the Favored Option in Patients with Advanced Pulmonary Arterial Hypertension. Journal of Cardiac Failure 20(10):S163, 2014.
32. Momose Y, Aimi Y, Hirayama T, Kataoka M¹, Ono M, Yoshino H, Satoh T, Gamou S: De Novo Mutations in the BMPR2 Gene in Patients with Heritable Pulmonary Arterial Hypertension. Ann Hum Genet, 79(2):85-91, 2015.
33. Moriyama K¹, Satoh T, Motoyasu A¹, Kohyama T¹, Kotani M, Kanai R¹, Ando T¹, Yoroze T¹⁽¹⁾(Dept. of Anesthesiology, Kyorin University School of Medicine) : High - Flow Nasal Cannula Therapy in a Patient with Reperfusion Pulmonary Edema following Percutaneous Transluminal Pulmonary Angioplasty. Case Rep Pulmonol. doi:org/10.1155/2014/837612.(2014).
34. Morris DA¹, Takeuchi M², Krisper M¹, Köhncke C², Bekfani T², Carstensen T¹, Hassfeld S¹, Dorenkamp M¹, Otani K¹, Takigiku K³, Izumi C⁴, Yuda S⁵, Sakata K, Ohte N⁷, Tanabe K⁸, Osmanoglou E⁸, Kühnle Y¹, Dungen HD¹, Nakatani S⁹, Otsuji Y², Haverkamp W¹, Boldt LH¹⁽¹⁾(Charite University Hospital, ²School of Medicine University of Occupational and Environmental Health, ³Nagano Children's Hospital, ⁴Tenri Hospital, ⁵Sapporo Medical University School of Medicine, ⁶Nagoya City University Graduate School of Medical Sciences, ⁷Shimane University Faculty of Medicine, ⁸Meoclinic, ⁹Osaka University Graduate School of Medicine): Normal values and clinical relevance of left atrial myocardial function analysed by speckle - tracking echocardiography: multicentre study. Eur Heart J Cardiovasc Imaging 16(4):364-372, 2015.
35. Morris DA¹, Otani K², Bekfani T³, Takigiku K⁴, Izumi C⁵, Yuda S⁶, Sakata K, Ohte N⁷, Tanabe K⁸, Friedrich K³, Kühnle Y³, Nakatani S⁹, Otsuji Y², Haverkamp W³, Boldt LH³, Takeuchi M²⁽¹⁾(Charité University Hospital, ²University of Occupational and Environmental Health, School of Medicine, ³Charité University Hospital, ⁴Nagano Children's Hospital, ⁵Tenri Hospital, ⁶Sapporo Medical University School of Medicine, ⁷Nagoya City University Graduate School of Medical Sciences, ⁸Shimane University Faculty of Medicine, ⁹Osaka University Graduate School of Medicine): Multidirectional global left ventricular systolic function in normal subjects and patients with hypertension: multicenter evaluation. J Am Soc

欧文

- Echocardiogr. 27:493–500,2014.
36. Murakami T¹, Yoshikawa T¹, Maekawa Y², Ueda T³, Isogai T³, Konishi Y⁴, Sakata K, Nagao K⁵, Yamamoto T⁶, Takayama M¹, the CCU Network Scientific Group (Sakakibara Heart Institute, ²Keio University School of Medicine, ³Tokyo Metropolitan Tama Medical Center, ⁴Musashino Red Cross Hospital, ⁵Nihon University Surugadai Hospital, ⁶Nippon Medical School): Characterization of predictors of in-hospital cardiac complications of takotsubo cardiomyopathy: Multi-center registry from Tokyo CCU Network. *Journal of Cardiology* 63(4):269–273,2014.
 37. Soejima K, Nogami A, Sekiguchi Y, Harada T, Satomi K, Hirose T, Ueda A, et al. :Epicardial catheter ablation of ventricular tachycardia in no entry left ventricle: mechanical aortic and mitral valves. *Circ Arrhythm Electrophysiol* 8:381–389, (Epub 2015).
 38. Birnie DH¹, Sauer WH², Bogun F³, Cooper JM⁴, Culver DA⁵, Duvernoy CS⁶, Judson MA⁷, Kron J⁸, Mehta D⁹, Cosedis Nielsen J¹⁰, Patel AR¹¹, Ohe T¹², Raatikainen P¹³, Soejima K (University of Ottawa Heart Institute, ²University of Colorado, Aurora, Colorado, ³University of Michigan, ⁴Temple University Health System, ⁵Cleveland Clinic, ⁶VA Ann Arbor Healthcare System and University of Michigan, ⁷Albany Medical College, ⁸Virginia Commonwealth University, ⁹Mount Sinai School of Medicine, ¹⁰Aarhus University Hospital, ¹¹University of Chicago, ¹²Sakakibara Heart Institute of Okayama, ¹³Heart Center) : HRS Expert Consensus Statement on the Diagnosis and Management of Arrhythmias Associated With Cardiac Sarcoidosis. *Heart Rhythm*. 11(7):1305–1323,2014.
 39. Pedersen CT, Kay GN, Kalman J, Borggrefe M, Della-Bella P, Dickfeld T, Dorian P, Huikuri H, Kim YH, Knight B, Marchlinski F, Ross D, Sacher F, Sapp J, Shivkumar K, Soejima K, Tada H, Alexander ME, Triedman JK, Yamada T, Kirchhof P, Lip GY, Kuck KH, Mont L, Haines D, Indik J, Dimarco J, Exner D, Iesaka Y, Savelieva I; EHRA/HRS/APHS expert consensus on ventricular arrhythmias. *Heart Rhythm*. 11(10):166–196, 2014.
 40. Yoshida N¹, Inden Y, Soejima K, Goto H, Murohara T (Nagoya University Graduate School of Medicine): A novel steerable Foley balloon catheter for preventing phrenic nerve injury during epicardial catheter ablation. *J Interv Card Electrophysiol*. 39(3):259, 2014.
 41. Ritter P¹, Duray GZ², Steinwender C³, Soejima K, Omar R⁴, Mont L⁵, Boersma LV⁶, Knops RE⁸, et al (Hôpital Cardiologique du Haut-Lévêque, ²Medical Centre, Hungarian Defence Forces, ³Linz General Hospital, ⁴National Heart Institute, ⁵Universitat de Barcelona, ⁶St Antonius Ziekenhuis, ⁷Academisch Medisch Centrum (AMC)): Early performance of a miniaturized leadless cardiac pacemaker: the Micra Transcatheter Pacing Study. *Eur Heart J* 2015 (in press)
 42. Ritter P¹, Duray GZ², Zhang S³, Narasimhan C⁴, Soejima K, Omar R⁵, Laager V⁶ (CHU/Université de Bordeaux, Avenue Magellan, ²Medical Centre, Hungarian Defence Forces, ³Fuwai Hospital, ⁴CARE Hospitals and CARE Foundation, ⁵National Heart Institute, ⁶Medtronic): The rationale and design of the Micra Transcatheter Pacing Study: safety and efficacy of a novel miniaturized pacemaker. *Europace* 17(5):807–13,2015.
 43. Aizawa Y¹, Takatsuki S¹, Kashimura S¹, Katsumata Y¹, Nishiyama T¹, Kimura T¹, Nishiyama N¹, Tanimoto Y¹, Tanimoto K¹, Fukuda Y², Sato T, Ogawa S², Fukuda K (Keio University School of Medicine, ²International University of Health and Welfare, Mita Hospital): Thoracic impedance as a therapeutic marker of acute decompensated heart failure. *Int J Cardiol*. 174(3):840–2, 2014.
 44. Sartipy U¹, Goda A, Mancini DM², Lund LH (Karolinska University Hospital, ²Columbia University): Assessment of a University of California, Los Angeles 4-variable risk score for advanced heart failure. *J Am Heart Assoc*. 3:e000998,2014.
 45. Sartipy U¹, Goda A, Yuzefpolskaya M², Mancini DM², Lund LH (Karolinska University Hospital, ²Columbia University): Utility of the Seattle Heart Failure Model in patients with cardiac resynchronization therapy and implantable cardioverter defibrillator referred for heart transplantation. *Am Heart J*. 168(3):325–31,2014.
 46. Inohara T¹, Kohsaka S¹, Shiraishi Y¹, Goda A, Sawano M¹, Yagawa M², Mahara K², Fukuda K¹, Yoshikawa T² (Keio University, ²Sakakibara Heart Institute): West Tokyo Heart Failure Registry Investigators. Prognostic impact of renal and hepatic dysfunction based on the MELD–XI score in patients with acute heart failure. *Int J Cardiol*. 176(3):571–3,2014.
 47. Goda A, Itoh H¹, Ebi Y², Kondo K¹, Maeda T¹, Shimada T³ (Sakakibara Heart Institute, ²Daiyukai General Hospital, ³Chiba Social Insurance Hospital). Erythropoietin Treatment Improves Peak VO₂ and Oxygen Uptake Efficiency Slope without Changing VE vs. VCO₂ Slope in Anemic Patients. *Int J Clin Cardiol* 2(2):2378–2951,2015.
 48. Miwa Y, Soejima K, Sato T, Maeda A, Ueda A, Miyakoshi M, Hoshida K, Higuchi S, Matsushita N, Nagaoka M, Momose Y, Kanaya M, Yoshino H: A case of complete atrioventricular block: The use of magnetic resonance imaging conditional pacemakers for diagnosing cardiac sarcoidosis. *Journal of Arrhythmia*, 30:111–114, 2014.
 49. Miwa Y, Soejima K, Sato T, Matsushita K, Sueoka J, Takayama N, Yoshino H: Dramatic improvement of refractory anemia caused by mechanical hemolysis in a patient with hypertrophic obstructive cardiomyopathy using dual-chamber pacing. *Journal of Arrhythmia*:doi:10.1016/j.joa.2014.12.001.(2015).
 50. Shimura N, Kataoka M¹, Inami T, Yanagisawa R, Ishiguro H, Kawakami T¹, Higuchi Y², Ando M², Fukuda K¹, Yoshino H, Satoh T (Keio University, ²Fujita Health University): Additional percutaneous transluminal pulmonary angioplasty for residual or recurrent pulmonary hypertension after pulmonary endarterectomy. *Int J Cardiol* 183: 138–42, 2015.
 51. Shirai Y¹, Tamura Y¹, Yasuoka H¹, Satoh T, Kuwana M¹ (Keio University): IgG4-related disease in pulmonary arterial hypertension on long-term epoprostenol treatment. *Eur Respir J*. : 1516–9, 2014.
 52. Yanagisawa R, Kataoka M¹, Inami T, Shimura N, Ishiguro H, Fukuda K¹, Yoshino H, Satoh T (Keio University): Efficacy of 360-degree three-dimensional rotational pulmonary angiography to guide percutaneous transluminal pulmonary angioplasty. *Eurointervention* 9:1483,2014.
 53. Yanagisawa R, Kataoka M¹, Inami T, Shimura N, Ishiguro H, Fukuda K, Yoshino H, Satoh T. (Keio University): Safety and efficacy of percutaneous transluminal pulmonary angioplasty in elderly patients. *Int J Cardiol*. 175(2):285–9, 2014.

54. Yanagisawa R, Kataoka M¹, Inami T, Momose Y, Kawakami T¹, Takei M¹, Kimura M¹, Isobe S¹, Yamakado M¹, Fukuda K¹, Yoshino H, Sano M¹, Satoh T (Keio University): Usefulness of circulating amino acid profile and Fischer ratio to predict severity of pulmonary hypertension. AmJCardiol 115:831-6, 2015.
55. Gan XT¹, Tanai S, Zhao G, Huang CX, Velenosi YJ, Xue J, Urquhart BL, Karmazyn M (Schulich School of Medicine and Dentistry): DC73-TNAP crosstalk regulates the hypertrophic response and cardiomyocyte calcification due to $\alpha 1$ adrenoceptor activation. Mol Cell Biochem 394(1-2): 237-246, 2014.

著書

1. 吉野秀朗: A. 内科学概論. 臨床工学技士標準テキスト. 小野哲章, 峰島三千男, 堀川宗之, 渡辺敏. 東京, 金原出版, 2014. p.495-511.
2. 吉野秀朗: 虚血の同定-多枝病変で虚血同定をどうする?. PCI・カテーテル室のピンチからの脱出法119. 村松俊哉. 東京, 南江堂, 2014. p.12-14.
3. 佐藤徹: 肺高血圧症. 循環器内科医のための非心臓手術必須知識. 吉野秀朗編, 東京, メジカルビュー社, 2014. p.102-109.
4. Sakata K: 3. Echocardiography. Nihon Naika Gakkai Zasshi 103(2). 2014. p.353-367.
5. 坂田好美: 悪性リンパ腫. 心エコー: 16-2. 東京, 文光堂, 2015. p.134-141.
6. 坂田好美: 弁膜症. ハートナーシング4月号. 大阪, メディカ出版, 2015. p.39-51. 9. 佐藤俊明: 今後期待される新たなデバイス②: リードレスペースメーカー. 不整脈治療 update 第2巻. 大阪, 医療ジャーナル社, 2014. p.224-229.
7. 佐藤俊明, 林田健太郎, 岡田隆晴, 荒井陽一他: 出会えてよかった! II. 先進医療技術を選んだ患者さんたちのエッセー集. 第2集. 東京, 米国医療機器・IVD 工業会 (AMDD), 2014.
8. 合田あゆみ: 代替療法 心房細動に対する運動療法. カレントセラピー33(3). 高久史鷹, 猿田享男監修, 北村聖編集, 東京, ライフメディコム, 2015. p.69-74.
9. 三輪陽介: 不整脈(頻脈性不整脈・徐脈性不整脈). <特集2> まる暗記不要! イラストでひと目で理解 心臓の重要疾患の治療と看護. Heart Nursing4 池田隆徳編, 大阪, メディカ出版, 2015. p.52-59.

その他

1. 伊波巧: 第3回杏林医学会研究奨励賞受賞, 2014年11月15日.

第二内科学教室 (血液内科)

講演

1. 高山信之: 非血縁者間同種骨髄移植後, 3年半寛解を維持している形質細胞白血病の1例. 第4回多摩骨髄腫研究会, 東京, 2014年6月5日.
2. 高山信之: Diffuse large B-cell lymphoma の治療. 第26回多摩悪性リンパ腫研究会, 東京, 2014年6月27日.
3. 高山信之: 杏林大学病院における急性リンパ性白血病の治療成績. 多摩 Ph+ALL セミナー. 東京, 2014年7月11日.
4. 関雅史, 式場星矢, 百瀬恵美, 桑原彩子, 佐藤範英, 平野和彦, 望月眞, 高山信之: ホジキンリンパ腫に対する化学療法後に肺小細胞癌が顕在化した重複癌の1例. 第609回日本内科学会関東地方会, 東京, 2014年10月11日.
5. Momose E, Shikiba S, Kuwabara A, Seki M, Satoh N, Takayama

N: Simultaneous occurrence of GC and non-GC DLBCLs arising as MTX-associated LPD. 第76回日本血液学会学術集会, 大阪, 2014年10月31日.

6. Shikiba S, Kuwabara A, Momose E, Seki M, Satoh N, Kigasawa H, Kamma H, Takayama N: A fatal case of atypical CML showing massive systemic infiltration of differentiated granulocytes. 第76回日本血液学会学術集会, 大阪, 2014年11月1日.
7. 高山信之: Diffuse large B-cell lymphoma の治療 Part2. 第28回多摩悪性リンパ腫研究会, 東京, 2015年2月13日.
8. 高山信之, 桑原彩子, 式場星矢, 関雅史, 百瀬恵美, 佐藤範英: 当施設における骨髄破壊の前処置による臍帯血移植の治療成績. 第37本造血細胞移植学会総会, 神戸, 2015年3月6日.
9. 高山信之: 多発性骨髄腫に対する自家移植-自験例を踏まえた移植後治療に関する若干の考察-. TAMA Hematology Forum, 東京, 2015年3月13日.
10. 今田枝里, 式場星矢, 百瀬恵美, 佐藤範英, 高山信之. double-hit lymphoma と急性骨髄性白血病の骨髄内同時発症を認めた1例. 第2回日本血液学会関東甲信越地方会, 東京, 2015年3月21日.

論文

1. Keino H, Okada AA, Watanabe T, Echizen N, Inoue M, Takayama N, Nagane M: Spectral-domain optical coherence tomography patterns in intraocular lymphoma. Ocul Immunol Inflamm. 11: 1-6, 2015.

著書

1. 高山信之: がん薬物療法キードラッグ65. 古瀬純司編, 東京, 中外医学社, 2014. p45-46, p49-50, p54-55, p63-65, p107-108, p111-112, p114-115, p122-123, p132-133, p137-138, p144-145, p161, p169, p172, p274-275, p278-279, p282-283, p286-287, p317-318, p321, p327-329.

第三内科学教室 (消化器内科)

講演

1. 高橋信一: ピロリ菌除菌の実践 - 胃炎保険適用後1年を迎えて -. 第11回多摩 GI-Endoscopy 研究会, 小平, 2014年4月9日.
2. 川村直弘: 非代償性肝硬変に対するエルカルニチンの効果. 第19回多摩 H.p・肝炎研究会, 立川, 2014年4月12日.
3. 西川かおり: 腹部エコーマスター講座 ビギナーセミナー 胆道・脾臓・膵臓. アスリードセミナー, 東京, 2014年4月13日.
4. 森秀明: 腹部エコーマスター講座 ビギナー向けセミナー. アスリードセミナー, 東京, 2014年4月13日.
5. 森秀明: カラーDプラを使いこなすには. 日本消化器がん検診学会関東甲信越支部超音波研修委員会, 東京, 2014年4月19日.
6. 高橋信一: ピロリ感染胃炎診療のこつ. 第29回太田「胃と腸」の会, 太田, 2014年4月22日.
7. 徳永健吾: 胃癌ハイリスク検診と実地診療に必要なピロリ感染症の知識(第1回). 三鷹医師会, 三鷹, 2014年4月23日.
8. 川村直弘: B 型肝炎のおはなし. 西多摩地区市民公開医療講演会, あきる野, 2014年4月27日.
9. Umegaki E, Kato M, Takeda H, Tominaga K, Kusunoki H, Furuta K, Sakurai K, Odaka T, Kinoshita Y, Haruma K, Takahashi S, Higuchi K, Kusano M, Fujimoto K, Arakawa T:

Clinical Characteristics of Elderly Patients With PPI-Refractory NERD From the G-PRIDE Study Who Responded to Rikkunshito. Digestive Disease Week 2014 and Annual Meeting of the American Gastroenterological Association, USA, May 3rd, 2014.

10. Ono A, Hata H, Toki M, Takahashi S: The Nasogastric Lavage Before Endoscopy is Not Absolutely Necessary in Emergency Department Patients With GI Bleeding. Digestive Disease Week 2014 and Annual Meeting of the American Gastroenterological Association, USA, May 4th, 2014.
11. 西川かおり: 見逃してはいけない消化器疾患の超音波所見「肝病変と肝近傍病変の見極めのための着目点」. 日本超音波医学会第87回学術集会, 横浜, 2014年5月9日.
12. 關里和, 森秀明, 齋藤大祐, 尾股佑, 塚田幾太郎, 山田雄二, 西川かおり, 大倉康男, 正木忠彦, 高橋信一: 体外式腹部超音波検査が術前診断に有用であった Meckel 憩室内翻の一例. 日本超音波医学会第87回学術集会, 横浜, 2014年5月9日.
13. 森秀明, 西川かおり, 本田普久, 塚田幾太郎, 尾股佑, 關里和, 峯佳毅, 小樽二世, 高橋信一, 岸野智則, 齋田真由美: 消化器領域における3次元超音波検査-Fly Thru-の検討. 日本超音波医学会第87回学術集会, 横浜, 2014年5月11日.
14. 森秀明, 畠二郎, 櫻田博史, 関根智紀, 西田睦, 西川かおり, 長谷川雄一, 藤井康友, 本田伸行, 宮本幸夫, 山田博康: 消化管診断基準小委員会からの報告. 日本超音波医学会第87回学術集会, 横浜, 2014年5月11日.
15. 森秀明: 超音波教育-最前線. 最新シミュレーターによるハンズオン〜心エコー, 腹部エコー, 胎児エコー〜. 日本超音波医学会第87回学術集会, 横浜, 2014年5月11日.
16. 徳永健吾: 胃癌ハイリスク検診と実地診療に必要なピロリ感染症の知識(第2回). 三鷹医師会. 三鷹, 2014年5月13日.
17. 森秀明: 消化器疾患知っておきたい超音波診断. 第250回多摩エコー研究会, 東京, 2014年5月15日.
18. 三浦みき, 林田真理, 三井達也, 落合一成, 齋藤大祐, 塚田幾太郎, 桜庭彰人, 山田雄二, 小山元一, 森秀明, 高橋信一: 当院におけるパテンシーカプセルの使用経験. 第87回日本消化器内視鏡学会総会, 福岡, 2014年5月15日.
19. 箕輪慎太郎, 齋藤大祐, 三浦みき, 桜庭彰人, 山田雄二, 林田真理, 小山元一, 大倉康男, 高橋信一: 腸重積を繰り返す Peutz-Jeghers syndrome に対しダブルバルーン内視鏡で小腸ポリプ切除術を施行した1例. 第87回日本消化器内視鏡学会総会, 福岡, 2014年5月15日.
20. 神保陽子, 土岐真朗, 落合一成, 太田博崇, 渡辺俊介, 大野亜希子, 倉田勇, 畑英行, 蓮江智彦, 平野和彦, 山口康晴, 両角克朗, 大倉康男, 高橋信一: 胃生検にて Group2と判定され最終診断が癌であった11例の検討. 第87回日本消化器内視鏡学会総会, 福岡, 2014年5月15日.
21. 齋藤大祐, 林田真理, 三浦みき, 平野和彦, 桜庭彰人, 山田雄二, 小山元一, 大倉康男, 高橋信一: 当院における消化管サイトメガロウイルス感染症の検討. 第87回日本消化器内視鏡学会総会, 福岡, 2014年5月16日.
22. 畑英行, 土岐真朗, 山口康晴: 超高齢者上部消化管出血における特徴とその治療戦略. 第87回日本消化器内視鏡学会総会, 福岡, 2014年5月16日.
23. 川村直弘: 慢性肝疾患の栄養療法. ヤンセンファーマ社内勉強会, 東京, 2014年6月13日.
24. 高橋信一: ピロリ除菌の実際-胃炎保険適用後1年を経過して-. 第98回日本消化器内視鏡学会関東地方会, 東京, 2014年6月14日.
25. 尾崎良, 三浦みき, 齋藤大祐, 桜庭彰人, 山田雄二, 小山元一, 高橋信一: 癒着性イレウスを契機に診断された小腸腫瘍の1例. 第98回日本消化器内視鏡学会関東地方会, 東京, 2014年6月15日.
26. 高橋信一: H. pylori 除菌療法ですべては解決されるか?. 第20回日本ヘリコバクター学会学術集会, 東京, 2014年6月28日.
27. 高橋哲史, 松井英則, 高橋信一, 中村正彦: H. heilmannii 感染胃粘膜における IL-10 依存的な CD86-CD28 シグナル活性化. 第20回日本ヘリコバクター学会学術集会, 東京, 2014年6月28日.
28. 正岡建洋, 鈴木秀和, 小俣富美雄, 水野滋章, 伊藤慎芳, 川上浩平, 大草敏史, 徳永健吾, 栗原直人, 松久威史, 西澤俊宏, 鈴木雅之, 鳥居明, 浅岡大介, 永原章仁, 竹内義明, 森英毅, 松崎潤太郎, 峯徹哉, 河合隆, 高橋信一, 榊信廣: 東京都多施設共同調査における Helicobacter pylori 一次・二次除菌率の経年変化の検討. 第20回日本ヘリコバクター学会学術集会, 東京, 2014年6月28日.
29. 徳永健吾, 伊藤慎芳, 水野滋章, 松久威史, 浅岡大介, 永原章仁, 小俣富美雄, 西澤俊宏, 鈴木雅之, 鳥居明, 栗原直人, 正岡建洋, 鈴木秀和, 竹内義明, 川上浩平, 河合隆, 大草敏史, 峯徹哉, 榊信廣, 高橋信一: シタフロキサンをを用いた H. pylori 三次除菌療法-東京都内多施設検討-. 第20回日本ヘリコバクター学会学術集会, 東京, 2014年6月28日.
30. 伊藤慎芳, 佐々木仁, 浅岡大介, 永原章仁, 徳永健吾, 高橋信一, 竹内義明, 松久威史, 西澤俊宏, 鈴木雅之, 水野滋章, 峯徹哉, 大草敏史, 小俣富美雄, 栗原直人, 正岡建洋, 鈴木秀和, 榊信廣, 川上浩平, 河合隆, 鳥居明: ペニシリンを用いないヘリコバクター除菌治療. 第20回日本ヘリコバクター学会学術集会, 東京, 2014年6月28日.
31. Takahashi R, Tokunaga K, Tanaka A, Takahashi S: Investigating the effectiveness of third-line H. pylori eradication therapy. The 11th Korea-Japan Joint Symposium on Helicobacter Infection, Tokyo, June 28th, 2014.
32. Tanaka A, Tokunaga K, Takahashi S: H. pylori eradication therapy for penicillin-allergic patients. The 11th Korea-Japan Joint Symposium on Helicobacter Infection, Tokyo, June 28th, 2014.
33. 田中昭文, 徳永健吾, 高橋信一: 高齢者における H. pylori 一次除菌療法-clarithromycin 耐性率と除菌率による検討-. 第20回日本ヘリコバクター学会学術集会, 東京, 2014年6月29日.
34. 高橋信一: 胃がん検診とピロリ除菌. 三鷹市医師会学術講演会, 三鷹, 2014年7月8日.
35. 土岐真朗, 両角克朗, 太田博崇, 落合一成, 権藤興一, 三井達也, 渡辺俊介, 神保陽子, 大野亜希子, 倉田勇, 畑英行, 蓮江智彦, 中村健二, 山口康晴, 森秀明, 高橋信一: エアネックピローで ERCP 後の血中唾液腺アミラーゼ上昇を減らせるか?. 第45回日本膵臓学会大会, 北九州, 2014年7月11日.
36. 畑英行, 土岐真朗, 高橋信一: 高齢者の非静脈瘤性上部消化管出血の臨床的特徴と止血率向上に向けた治療戦略. 第17回日本高齢消化器病学会総会, 山口, 2014年7月12日.
37. 倉田勇, 土岐真朗, 太田博崇, 落合一成, 新井健介, 渡辺俊介, 神保陽子, 大野亜希子, 畑英行, 蓮江智彦, 中村健二, 両角克朗, 山口康晴, 高橋信一: 合併症を有する高齢者内視鏡的截石術困難症例の治療戦略. 第17回日本高齢消化器病学会総会, 山口, 2014年7月12日.

38. 三浦みき, 齋藤大祐, 林田真理, 高橋信一: 当院における高齢者に対するダブルバルーン内視鏡検査の検討. 第17回日本高齢消化器病学会, 山口, 2014年7月12日.
39. 高橋信一: ピロリ菌ってなあに? 病気と関係あるの?. 第20回日本ヘリコバクター学会学術集市民公開講座, 東京, 2014年7月13日.
40. 高橋信一: ピロリ菌除菌の実際 - 胃炎保険適用後1年を迎えて -. 第169回京都消化器病研究会, 京都, 2014年7月17日.
41. 高橋信一: 胃がん検診とピロリ除菌. 横須賀市医師会学術講演会, 横須賀, 2014年7月18日.
42. 高橋信一: ピロリ除菌の実際 - 胃炎保険適用後1年を経過して -. 第319回練馬区医師会学術部内科医会臨床研究会, 東京, 2014年7月22日.
43. 徳永健吾: 変わる慢性胃炎の診療ピロリ感染胃炎と機能性ディスペプシア. 三鷹医師会学術講演会. 三鷹, 2014年7月25日.
44. 高橋信一: ピロリ感染胃炎診療のこつ. 第24回西多摩消化器疾患カンファレンス, 青梅, 2014年7月29日.
45. 高橋信一: 実地診療におけるピロリ除菌の実際. 北町臨床研究会, 東京, 平成26年7月30日.
46. 徳永健吾 : H. pylori 感染胃炎除菌の現状と課題. 第46回胃病態機能研究会, 横浜, 2014年8月1日.
47. 田中昭文, 徳永健吾, 高橋信一: 高齢者における H. pylori 一次療法 - clarithromycin 耐性率と除菌率による検討 -. 第23回消化器疾患病態治療研究会, 札幌, 2014年8月9日.
48. 森秀明: 腹部エコーマスター講座 アドバンスドエコーセミナー. アスリッドセミナー. 東京, 2014年9月7日.
49. 西川かおり: 腹部エコーマスター講座 アドバンスドセミナー 胆道・膵臓. アスリッドセミナー, 東京, 2014年9月7日.
50. 徳永健吾: 変貌する H.pylori 感染症と酸関連疾患の実診療. Next Lecture Meeting, 東京, 2014年9月8日.
51. Tanaka A, Tokunaga K, Takahashi S: Evaluation of Helicobacter pylori first line eradication therapy (PPI/AC) in elderly patients - evaluation of clarithromycin resistant rate and eradication rate -. X X VIIth International Workshop on Helicobacter and Microbiota in Chronic Digestive Inflammation and Gastric Cancer, Italy, September 12th, 2014.
52. 高橋信一: これだけは知っておきたいピロリ除菌と胃がん予防. 京都消化器医会定例学術講演会, 京都, 2014年9月13日.
53. 太田博崇, 倉田勇, 新井健介, 渡辺俊介, 神保陽子, 大野亜希子, 畑英行, 土岐真朗, 徳永健吾, 川村直弘, 森秀明, 高橋信一: 肝原発 G2NET でカルチノイド症候群を合併した稀な1例. 第331回日本消化器病学会関東支部例会, 東京, 2014年9月20日.
54. 神保陽子, 徳永健吾, 桜庭彰人, 太田博崇, 新井健介, 渡辺俊介, 大野亜希子, 倉田勇, 畑英行, 土岐真朗, 林田真理, 高橋信一: 発熱, 上腹部痛を契機に診断された家族性地中海熱の一例. 第331回日本消化器病学会関東支部例会, 東京, 2014年9月20日.
55. 落合一成, 土岐真朗, 太田博崇, 新井健介, 渡辺俊介, 神保陽子, 大野亜希子, 倉田勇, 畑英行, 蓮江智彦, 中村健二, 山口康晴, 両角克朗, 森秀明, 高橋信一: 急性閉塞性胆管炎の原因がアミオダロンと考えられた1例. 第50回日本胆道学会学術集会, 東京, 2014年9月26日.
56. 森秀明: 超音波検査の優位性 (CT や MRI などの他画像と比較して) 特別発言. 第36回超音波ドプラ研究会, 東京, 2014年9月27日.
57. 徳永健吾: Helicobacter pylori 感染胃炎総除菌時代に向けて.
- 第17回日本臨床腸内微生物学会総会学術集会, 東京, 2014年10月4日.
58. 森秀明: スクリーニングから精査まで - 消化器 (肝・脾) -. 日本超音波医学会主催超音波診断講習会, 仙台, 2014年10月5日.
59. 西川かおり: スクリーニングから精査まで - 消化器 (胆・膵) -. 日本超音波医学会超音波診断講習会, 仙台, 2014年10月5日.
60. 島森直子, 岸野智則, 西川かおり, 板谷直, 浦田毅, 下山田博明, 森秀明, 奴田原紀久雄, 大西宏明, 渡邊卓: 乳頭状腎細胞癌の一例. 日本超音波医学会 関東甲信越地方会 第26回学術集会, 東京, 2014年10月18日.
61. 浦田毅, 岸野智則, 大西宏明, 山本明日香, 島森直子, 飯田綾子, 渡辺敬子, 森秀明, 楊國昌, 渡邊卓: 腎臓に浸潤したバーキッドリンパ腫の一例: 転移性腎腫瘍との鑑別点について. 日本超音波医学会関東甲信越地方会第26回学術集会, 東京, 2014年10月18日.
62. 宮脇晴子, 岸野智則, 森秀明, 福岡利仁, 下山田博明, 浦田毅, . 島森直子, 飯田綾子, 大西宏明, 渡邊卓: 腎辺縁に hypoechoic cortical rim を認めた一例. 日本超音波医学会関東甲信越地方会第26回学術集会, 東京, 2014年10月18日.
63. 森秀明: 超音波ならではの - 超音波の魅力を語る - 「消化器」. 日本超音波医学会関東甲信越地方会第26回学術集会, 東京, 2014年10月18日.
64. Kawai T, Moriyama F, Gotoda T, Fukuzawa M, Mizuguchi Y, Tokunaga K, Takahashi S : Evaluation of Gastric Cancer Diagnosis Using New Magnification Endoscopy (Near Focus) With NBI. Annual Scientific Meeting of the American College of Gastroenterology, USA, October 19th, 2014.
65. Kawai T, Uematsu J, Fukuzawa M, Sato M, Gotoda T, Moriyama F, Tokunaga K, Takahashi S: Relationship Between Endoscopic Findings and H. pylori Infection. Annual Scientific Meeting of the American College of Gastroenterology, USA, October 20th, 2014.
66. Kawai T, Mizuguchi Y, Tokunaga K, Takahashi S : Usefulness of Measurement of Pepsinogen Value on Diagnosis of H. pylori Infection. Annual Scientific Meeting of the American College of Gastroenterology, USA, October 20th, 2014.
67. Miura M, Saito D, Hayashida M, Sakuraba A, Yamada Y, Koyama G, Takahashi S: The clinical characteristic of patients with pneumatosis cystoides intestinalis in Japan. UEGW, Austria, October 20th, 2014
68. Kawai T, Fukuzawa M, Yanagisawa K¹, Naito S, Fukuzawa M, Sugimoto H, Yamagishi T, Gotoda T, Kusano C, Moriyama F, Tokunaga K, Takahashi S: Surveillance of Short Segment Barrett's Esophagus Using Ultrathin Endoscopy. Annual Scientific Meeting of the American College of Gastroenterology, USA, October 21st, 2014.
69. Tanaka A, Tokunaga K, Takahashi S : Helicobacter pylori Eradication Therapy for Penicillin - Allergic Patients. Annual Scientific Meeting of the American College of Gastroenterology, USA, October 21st, 2014.
70. 田中昭文, 徳永健吾, 高橋信一: ペニシリンアレルギー症例に対する H. pylori 除菌療法の検討. JDDW 2014, 神戸, 2014年10月23日.
71. 土岐真朗, 両角克朗, 太田博崇, 落合一成, 渡辺俊介, 神保陽子, 大野亜希子, 倉田勇, 畑英行, 蓮江智彦, 中村健二, 山口康晴, 高橋信一: ERCP 関連手技の前処置におけるグルカゴ

- ンの有用性の検討と投与法の工夫. JDDW 2014, 神戸, 2014年10月24日.
72. 田部井弘一, 徳永健吾, 太田博崇, 落合一成, 神保陽子, 大野亜希子, 倉田勇, 畑英行, 蓮江智彦, 土岐真朗, 田中昭文, 高橋信一: ESD 後人工潰瘍に対する並行群間試験-エソメプラゾールの有効性に関する検討. JDDW 2014, 神戸, 2014年10月25日.
 73. 徳永健吾: 変貌する H.pylori 除菌療法の普及は何をもたらすのか?. 第15回消化管疾患研究会熊本, 熊本, 2014年11月13日.
 74. 川村直弘: インターフェロンフリーのC型肝炎治療 ~経口薬へのパラダイムシフト~. 調布市医師会学術講演会, 調布, 2014年11月21日.
 75. 高橋信一: 実地診療におけるピロリ除菌の実際. 第20回多摩Hp・肝炎研究会, 立川, 2014年11月26日.
 76. 一瀬由香里, 岸野智則, 大西宏明, 大塚弘毅, 須藤恵美, 岡野晴子, 西川かおり, 森秀明, 細井温, 高城靖志, 渡邊卓: 孤立性上腸間膜動脈解離後の広範囲血栓形成と思われる一例-超音波検査の有用性について-. 第61回日本臨床検査医学会学術集会, 福岡, 2014年11月22-25日.
 77. 大坂真以子, 岸野智則, 大西宏明, 大塚弘毅, 島森直子, 寺戸雄一, 西川かおり, 森秀明, 奴田原紀久雄, 高城靖志, 渡邊卓: 転移性腎腫瘍の3例-超音波画像所見の考察-. 第61回日本臨床検査医学会学術集会, 福岡, 2014年11月22-25日.
 78. 須藤恵美, 岸野智則, 大西宏明, 大塚弘毅, 大坂真以子, 藤原正親, 板谷直, 西川かおり, 森秀明, 奴田原紀久雄, 高城靖志, 渡邊卓: 褐色細胞腫との鑑別が困難であった副腎癌の一例-超音波画像所見の考察-. 第61回日本臨床検査医学会学術集会, 福岡, 2014年11月22-25日.
 79. Saito D, Hayashida M, Takahashi S: The clinical characteristics of patients with gastrointestinal cytomegalovirus infection in japan. APDW2014, Indonesia, November 24th, 2014.
 80. Minowa S, Saito D, Miura M, Hayashida M, Takahashi S: Capsule endoscopy is a very useful tool as a decision of treatment strategy for neurocysticercosis (NCC). APDW2014, Indonesia, November 24th, 2014.
 81. 林田真理, 齋藤大祐, 三浦みき, 桜庭彰人, 山田雄二, 徳永健吾, 小山元一, 高橋信一: 当院で経験した蛋白漏出性胃腸症の4症例について. 第45回日本消化吸収学会, 東京, 2014年11月22日.
 82. 川村直弘: 肝臓病の栄養 何が足りない, 何が余計. 西多摩市民公開講座, あきる野, 2014年11月30日.
 83. 高橋信一: H. pylori 除菌を巡る新しい話題. 酸関連疾患セミナー in yonago, 米子, 2014年12月2日.
 84. 川村直弘: 肝機能検査の見方. 第16回肝臓病治療を考える栄養士の会, 東京, 2014年12月6日.
 85. 高橋信一: Helicobacter pylori との格闘の26年を総括し未来を語る. 第99回日本消化器内視鏡学会関東地方会, 東京, 2014年12月6日.
 86. 新井健介, 土岐真朗, 楠原光謹, 深沢友里, 箕輪慎太郎, 太田博崇, 落合一成, 権藤興一, 渡辺俊介, 神保陽子, 大野亜希子, 倉田勇, 畑英行, 蓮江智彦, 中村健二, 徳永健吾, 山口康晴, 両角克朗, 森秀明, 高橋信一: 当院における胃アニサキス症の現況. 第99回日本消化器内視鏡学会関東地方会, 東京, 2014年12月6日.
 87. 楠原光謹, 菊池翁輝, 深沢友里, 箕輪慎太郎, 太田博崇, 落合一成, 権藤興一, 新井健介, 渡辺俊介, 神保陽子, 大野亜希子, 畑英行, 蓮江智彦, 土岐真朗, 中村健二, 徳永健吾, 山口康晴, 両角克朗, 森秀明, 高橋信一: AIDs 関連パーキットリンパ腫により閉塞性黄疸を来したと考えられた稀な1例. 第99回日本消化器内視鏡学会関東地方会, 東京, 2014年12月7日.
 88. 徳永健吾, 齋藤大祐, 三浦みき, 桜庭彰人, 山田雄二, 林田真理, 徳永健吾, 小山元一, 大倉康男, 杉山政則, 高橋信一: 発熱を契機に診断された小腸内分泌細胞癌の1例. 第99回日本消化器内視鏡学会関東地方会, 東京, 2014年12月7日.
 89. 徳永健吾: 変貌する H.pylori 除菌療法の普及は何をもたらすのか?. 第99回日本消化器内視鏡学会関東地方会, 東京, 2014年12月7日.
 90. 高橋信一: くすりとピロリ菌と胃潰瘍. 杏林大学公開講座, 三鷹, 2014年12月13日.
 91. 高橋信一: 胃炎と胃癌-ピロリ菌の係りについて-. 第417回国際治療談話会例会, 東京, 2015年1月15日.
 92. 徳永健吾: Helicobacter pylori 感染症の診断・治療・適応疾患. 日本ヘリコバクター学会 H.pylori 感染症認定医・平成27年度教育講演会, 東京, 2015年1月25日.
 93. 高橋信一: 酸関連疾患と H. pylori 除菌の最新の話題について. 藤沢市医師会消化器病医会学術講演会, 鎌倉, 2015年2月2日.
 94. 徳永健吾: わが国における NSAIDs 潰瘍診療の問題点. 淡青運動器セミナー2015, 東京, 2015年2月7日.
 95. 菊池翁輝, 奥山秀平, 關里和, 塚田幾太郎, 中村一久, 松岡弘泰, 佐藤悦久, 川村直弘, 西川かおり, 森秀明, 高橋信一: 原発性胆汁性肝硬変と診断後早期に自己免疫性肝炎へ移行しその後成人型 Still 病を発症した1例. 第55回三多摩肝臓談話会, 武蔵野, 2015年2月13日.
 96. 徳永健吾, 神保陽子, 桜庭彰人, 太田博崇, 新井健介, 渡辺俊介, 大野亜希子, 倉田勇, 畑英行, 土岐真朗, 林田真理, 田中昭文, 高橋信一: 家族内での発症を確認した家族性地中海熱. 第11回日本消化管学会総会学術集会, 東京, 2015年2月14日.
 97. 後藤知之, 桜庭彰人, 三浦みき, 齋藤大祐, 山田雄二, 林田真理, 小山元一, 高橋信一: 同時に2か所から活動性出血の1例. 第11回日本消化管学会総会学術集会, 東京, 2015年2月14日.
 98. Tanaka A, Tokunaga K, Takahashi S: Evaluation of Helicobacter pylori first line eradication therapy (PPI/AC) in elderly patients -evaluation of clarithromycin resistant rate and eradication rate-. The 8th IGICS, Tokyo, February 14th, 2015.
 99. 三浦みき, 林田真理, 齋藤大祐, 小暮正晴, 桜庭彰人, 吉敷智和, 山田雄二, 小山元一, 正木忠彦, 杉山政則, 大倉康男, 高橋信一: 鉄欠乏性貧血を契機に診断に至ったメッケル憩室を伴わない小腸の異所性胃粘膜の一例. 第8回日本カプセル内視鏡学会学術集会, 東京, 2015年2月15日.
 100. 高橋信一: 酸関連疾患と H. pylori 除菌の最新の話題について. タケキャブ錠承認記念講演会, 東京, 2015年2月18日.
 101. 千野貴子, 奥山秀平, 大浦紀彦: 摂食障害患者への NST 介入の有用性. 第30回日本静脈経腸栄養学会学術集会, 神戸, 2015年2月12日.
 102. 高橋信一: ピロリ除菌と胃がん検診. 平成26年度胃がん検診講習会, 久留米, 2015年2月25日.
 103. 池崎修, 武田雄一, 田代祥博, 田村皓子, 平昭衣梨, 矢内真人, 柴田勇, 山地統, 浦牛原幸治, 小野圭一, 小島茂, 野内俊彦, 清水誠一郎, 太田博崇, 川村直弘, 高橋信一: 診断が困難であったC型非代償性肝硬変に合併した特発性細菌性胸膜炎の1剖検例. 日本消化器病学会 関東支部第333回例会, 東京, 2015年2月28日.

104. 高橋信一:酸関連疾患と H. pylori 除菌の最新の話について. タケキヤブ錠発売記念講演会, 大磯, 2015年3月4日.
 105. 徳永健吾:H.pylori 感染胃炎と内視鏡所見. 若手内視鏡医の会, 橋本, 2015年3月6日.
 106. 高橋信一:酸関連疾患と H. pylori 除菌の最新の話について. タケキヤブ新発売記念講演会, 調布, 2015年3月9日.
 107. 高橋信一:酸関連疾患と H. pylori 除菌の最新の話について. タケキヤブ新発売記念講演会, 川崎, 2015年3月11日.
 108. 田中昭文:酸関連疾患と H. pylori 除菌における最新の話. 府中市薬剤師会定例研修会, 府中, 2015年3月18日.
 109. 高橋信一:酸関連疾患と H. pylori 除菌の最新の話について. タケキヤブ錠発売記念講演会, 柏, 2015年3月19日.
 110. Tokunaga T, Tanaka A, Takahashi R, Takahashi S: The marked increase of primary and secondary drug resistance in *Helicobacter pylori* necessitates the establishment of more reliable eradication protocols in Japan. The 12th Annual Conference of Korea-Japan Joint Meeting on *Helicobacter* Infection. Korea, March 22nd, 2015.
 111. 高橋信一:酸関連疾患と H. pylori 除菌の最新の話について. タケキヤブ新発売記念講演会, 府中, 2015年3月24日.
 112. 田中昭文:酸関連疾患と H.pylori 除菌における最新の話. 国分寺市医師会学術講演会, 国分寺, 2015年3月24日.
- 論文**
1. Matsui H¹, Takahashi T², Murayama SY³, Uchiyama I⁴, Yamaguchi K⁵, Shigenobu S⁵, Matsumoto T⁶, Kawakubo M⁶, Horiuchi K⁶, Ota H⁶, Osaki T⁷, Kamiya S⁷, Smet A⁸, Flahou B⁸, Ducatelle R⁸, Haesebrouck F⁸, Takahashi S, Nakamura S⁹, Nakamura M²(¹Kitasato Institute for Life Sciences and Graduate School of Control Sciences, Kitasato University, ²School of Pharmaceutical Sciences, Kitasato University, ³School of Pharmacy, Nihon University, ⁴Data Integration and Analysis Facility, National Institute for Basic Biology (NIBB), ⁵Functional Genomic Facility, National Institute for Basic Biology (NIBB), ⁶School of Health Sciences, Shinshu University School of Medicine, ⁷Department of Infectious Diseases, Kyorin University School of Medicine, ⁸Department of Pathology, Bacteriology and Avian Diseases, Faculty of Veterinary Medicine, Ghent University, ⁹Institute of Gastroenterology, Tokyo Women's Medical University): Development of New PCR Primers by Comparative Genomics for the Detection of *Helicobacter suis* in Gastric Biopsy Specimens. *Helicobacter* 19(4):260-271, 2014.
 2. Tominaga K, Kato M, Takeda H, Shimoyama Y, Umegaki E, Iwakiri R, Furuta K, Sakurai K, Odaka T, Kusunoki H, Nagahara A, Iwakiri K, Furuta K, Murakami K, Miwa H, Kinoshita Y, Haruma K, Takahashi S, Watanabe S, Higuchi K, Kusano M, Fujimoto K, Arakawa T (C-PRIDE study group): A randomized, placebo-controlled, double-blind clinical trial of rikkunshito for patients with non-erosive reflux disease refractory to proton-pump inhibitor: the G-PRIDE study. *J Gastroenterol* 49:1392-1405,2014.
 3. Kawai T, Takahashi S, Suzuki H, Sasaki H, Nagahara A, Asaoka D, Matsuhisa T, Masaoka T, Nishizawa T, Suzuki M, Ito M, Kurihara N, Omata F, Mizuno S, Torri A, Kawakami K, Ohkusa T, Tokunaga K, Mine T, Sakaki N: Changes in the first line *Helicobacter pylori* Eradication rates using the triple therapy—a multicenter study in the Tokyo metropolitan area (Tokyo Hp Study Group). *J. Gastroenterol. Hepatol.* 29 (Suppl. 4): 29-32,2014.
 4. Nakamura M¹, Takahashi T¹, Matui H², Baniwa Y¹, Takahashi S, Murayama S⁴, Serizawa H³, Suzuki H³, Hibi T³ (¹School of pharmaceutical sciences, Kitasato Univ. ² Kitasato institute for life sciences, Kitasato Univ. ³Department of Internal Medicine, Keio Univ. ⁴ School of pharmacy, Nihon University): Alteration of angiogenesis in *Helicobacter heilmannii* -induced mucosa-associated lymphoid tissue lymphoma: Interaction with c-Met and hepatocyte growth factor. *J. Gastroenterol. Hepatol.* 29 (Suppl. 4): 70-76,2014.
 5. 北原るり子,山崎昭, 高橋信一:医療安全管理部における地域貢献. 杏林医会誌 46(1):57-59,2015.
 6. Fukudo S, Hahm K.B, Zhu Q, Sollano J.D, Rani A.A, Syam A.F, Kachintorn U, Suzuki H, Kamiya T, Joh T, Uchiyama K, Naito Y, Takahashi S, Kinoshita Y, Ueno F, Yamagami H, Chan F.K.L, Fock K., Arakawa T(C-PRIDE study group):Survey of Clinical Practice for Irritable Bowel Syndrome in East Asian Countries. *Digestion.* 91:99-109, 2015.
 7. 三浦みき, 齋藤大祐, 林田真理, 徳永健吾, 高橋信一:当院における高齢者に対するダブルバルーン内視鏡検査に関する検討. 日本高齢消化器病学会, 17 (2) 58-62:2014.
 8. 齋藤大祐, 林田真理, 三浦みき, 徳永健吾, 高橋信一:腸管囊胞様気腫症の臨床的検漏. 日本消化器病学会雑誌 112 (3): 494-499, 2015.
 9. 徳永健吾, 田中昭文, 高橋信一:H.pylori 耐性菌の現状とその対策. クラリスロマイシン耐性の獲得機序と対策. *Helicobacter Research* 18: 130-134, 2014.
 10. 徳永健吾, 田中昭文, 高橋信一:実臨床における慢性胃炎の意味. *消化器内視鏡* 26:1152-1153,2014.
 11. 田中昭文, 徳永健吾, 高橋信一:*Helicobacter pylori* 除菌の副作用.*Helicobacter Research* 18:406-411, 2014.
 12. 徳永健吾, 田中昭文, 高橋信一:H.pylori 除菌療法(一次～三次以降)の実際と課題. *消化器の臨床* 18: 181-185, 2015.
 13. 徳永健吾, 田中昭文, 高橋信一: *Helicobacter pylori* 感染胃炎総除菌時代に向けて. 日本臨床腸内微生物学会誌 17:44-46, 2014.
 14. 徳永健吾, 田中昭文, 高橋信一: *Helicobacter pylori* 除菌適応拡大 臨床からの問題点. *無菌生物* 44:38-40, 2014.
 15. 田部井弘一, 徳永健吾, 榎藤興一, 太田博崇, 落合一成, 新井健介, 倉田勇, 大野亜希子, 内田康人, 畑 英行, 蓮江智彦, 土岐真朗, 田中昭文, 高橋信一:出血性消化性潰瘍患者に対する並行群間比較試験 エソメプラゾールの有効性に関する検討. *潰瘍*41:23-25, 2014.
 16. 伊藤慎芳, 佐々木仁, 永原章仁, 浅岡大介, 高橋信一, 徳永健吾, 竹内義明, 松久威史, 西澤俊宏, 鈴木雅之, 水野滋章, 峯徹哉, 大草敏史, 小俣富美雄, 栗原直人, 正岡建洋, 鈴木秀和, 榎信廣, 川上浩平, 河合隆, 鳥居明 (Tokyo Hp Study Group):ペニシリンを用いないヘリコバクター除菌治療. 日本ヘリコバクター学会誌16:30, 2015.
 17. 田中昭文, 徳永健吾, 高橋信一:*Helicobacter pylori* と胃癌. 杏林医会誌 特集 悪性腫瘍:41-52, 2014.
 18. Kishino T^{1,2}, Mori T³, Kawai S², Mori H, Nishikawa K, Hirano K⁴, Matsushima S¹, Ohtsuka K^{1,2}, Ohnishi H^{1,2}, Watanabe T^{1,2} (¹Department of Laboratory Medicine, ²Department of Clinical Laboratory, ³Department of Surgery, ⁴Department of Pathology):Carcinoma, an atypical subset

of gallbladder malignancies. J Med Ultrason 41:487-490, 2014.

19. Watanabe K¹, Kishino T^{1,2,3}, Sano J¹, Ariga T¹, Okuyama S, Mori H, Matsushima S², Ohtsuka K^{1,2}, Ohnishi H^{1,2}, Watanabe T^{1,2} (¹Department of Clinical Laboratory, ²Department of Laboratory Medicine, ³Department of Clinical Engineering, Kyorin University Faculty of Health Sciences): Relationship between epicardial adipose tissue thickness and early impairment of left ventricular systolic function in patients with preserved ejection fraction. Heart Vessels (in press)
20. 森秀明: 日経メディクイズ. Nikkei medical 562:85-86, 2014.
21. Kawaguchi T¹, Shiraishi K², Ito T³, Suzuki K⁴, Koreeda C⁵, Ohtake T⁶, Iwasa M⁷, Tokumoto Y⁸, Endo R⁹, Kawamura N, Shiraki M¹⁰, Habu D¹¹, Tsuruta S¹², Miwa Y¹³, Kawaguchi A¹⁴, Kakuma T¹⁴, Sakai H¹², Kawada N¹⁵, Hanai T¹⁰, Takahashi S, Kato A⁹, Onji M⁸, Takei Y⁷, Kohgo Y⁶, Seki T⁵, Tamano M⁴, Katayama K¹⁶, Mine T², Sata M¹, Moriwaki H¹⁰, Suzuki K¹⁷ (¹Kurume University, ²Tokai University, ³Osaka Kosei-Nenkin Hospital, ⁴Dokkyo Medical University Koshigaya Hospital, ⁵Kansai Medical University Takii Hospital, ⁶Asahikawa Medical University, ⁷Mie University, ⁸Ehime University, ⁹Iwate Medical University, ¹⁰Gifu University, ¹¹Osaka City University, ¹²NHO Beppu Medical Center, ¹³Miwa Clinic, ¹⁴Kurume University, ¹⁵Osaka City University, ¹⁶Osaka Medical Center for Cancer and Cardiovascular Diseases, ¹⁷Iwate Medical University): Branched-Chain Amino Acids Prevent Hepatocarcinogenesis and Prolong Survival of Patients With Cirrhosis. Clinical Gastroenterology and Hepatology 12(6):1012-1018, 2014.

著書

1. 土岐真朗, 高橋信一: 胃潰瘍. Clinical Study 35(4). 東京, メジカルフレンド社, 2014. p.26-32.
2. 齋藤大祐, 林田真理, 高橋信一: 原因不明消化管出血(OGIB)の対処のコツ. 診断と治療 102(7). 東京, 診療と治療社, 2014. p.53-58, 2014.
3. 倉田勇, 土岐正朗, 高橋信一: 胃潰瘍・十二指腸潰瘍. ガイドライン外来診療2014. 泉孝英編, 東京, 日経メディカル開発, 2014. p.145-153.
4. 土岐正朗, 高橋信一: 消化性潰瘍. 診療ガイドライン UP-TO-DATE 2014-2015. 門脇孝, 小室一成, 宮地良樹監修, 東京, メディカルレビュー社, 2014. p.224-232.
5. 田中昭文, 徳永健吾, 高橋信一: H. pylori 感染性胃炎は, H. pylori 関連ディスペプシアか, それとも? 機能性ディスペプシア. 荒川哲男監修, 大阪, フジメディカル出版, 2014. p.116-122.
6. 徳永健吾, 高橋信一: 機能性ディスペプシア. 消化性潰瘍. 内科外来処方 navi. 富野康日監修, 東京, 中外医学社, 2015. p.42, 43-44.
7. 徳永健吾, 高橋信一: ヘリコバクター・ピロリ感染症. 今日の臨床検査 2015-2016. 櫻林郁之介監修, 東京, 南江堂, 2015. p.14.
8. 高橋信一: 胃の検査. 別冊 NHK きょうの健康「検査でわかること」. 安倍美和子編, 東京, NHK 出版, 2015. p.66-73.
9. 高橋信一: 日本消化器内視鏡学会における卒後教育制度の理念と現状. 消化器内視鏡. 消化器内視鏡編集委員会編, 東京, 東京医学社, 2015. p.142-143.
10. 土岐真朗: 胆道癌. 3. テガフル・ギメラシル・オテラシルカリウム / 5. ゲムシタビン / 11. シスプラチン. がん薬物療法キードラッグ 65. 古瀬純司編著. 東京, 中外医学社, 2014. p.22-23 /

p.36-37 / p.77-78.

11. 大野亜希子, 徳永健吾, 高橋信一: ヘリコバクター・ピロリ感染症. 今日の臨床検査. 東京, 南江堂, 2014. p.2015-2016.
12. 土岐真朗, 森秀明: B 胆嚢疾患 B12 コレステロールシス. 画像で見ぬく消化器疾患 vol.4 胆道・膵臓. 東京, 医学出版, 2014. p.112-113.
13. 齋藤大祐, 林田真理, 高橋信一: 原因不明消化管出血(OGIB)の対処のコツ. 診断と治療 102(7). 2014. p.993-998.
14. 森秀明: IV 消化管. 超音波検査の考え方, おさえどころ, 新技術. 新腹部画像診断の勘どころ. 兼松雅之, 高橋雅士監修. 東京, メジカルビュー社, 2014. p.214-221.
15. 森秀明: V. 副腎・後腹膜. 超音波検査の考え方, おさえどころ, 新技術. 新腹部画像診断の勘どころ. 兼松雅之, 高橋雅士監修. 東京, メジカルビュー社, 2014. p.266-270.

その他

1. 高橋信一(インタビュー): ピロリ菌除去で, 胃の疾患が予防できる! . 家の光 90(7):64-65, 2014.(7.1)
2. 高橋信一(インタビュー): 食道裂孔ヘルニアとは. 読売新聞 2014年8月24日発行.
3. 高橋信一(インタビュー): 胃がんの原因「ピロリ菌」除菌を助ける乳酸菌. The Wine Kingdom 84:77, 2014.
4. 高橋信一(インタビュー): ピロリ菌の除菌で胃がんを予防できますか? . 消化器のひろば 6:10-11, 2015.
5. 徳永健吾(監修): 機能性ディスペプシア. クレデンシャル: 12-13, 2014.
6. 徳永健吾: 胃に不快感 機能性ディスペプシア ストレス社会で急増. 河北新報 朝刊, 2014年10月17日.
7. 田中昭文, 徳永健吾, 高橋信一: 第20回日本ヘリコバクター学会学術集会(臨床より) (Helicobacter pylori ニュース). Helicobacter Research 18:452-455, 2014.
8. 川村直弘: 「教えてドクター」C 型肝炎をテーマに解説, リビング東京西, 2014年9月6日.
9. 川村直弘: 「紙上医療講座 肝炎治療の最前線」西多摩市民公開講座から肝発がん栄養治療について解説, 西多摩新聞, 2015年1月30日.

第三内科学教室 (糖尿病・内分泌・代謝内科)

講演

1. 石田均: 日本人のための糖尿病食事療法—食品交換表の改訂を踏まえて—. 第35回筑豊糖尿病懇話会勉強会, 飯塚, 2014年4月4日.
2. 石田均: 日本人にふさわしい糖尿病食事療法を考える. 町田市医師会学術講演会, 町田, 2014年4月11日.
3. 小沼裕寿, 犬飼浩一, 北原敦子, 森谷理恵, 炭谷由計, 村嶋俊隆, 勝田秀紀, 西田進, 高橋和人, 石田均: インクレチンシグナルとPPAR γ 活性化代謝経路の血管内皮細胞におけるクロストーク. 第111回日本内科学会総会, 東京, 2014年4月11-13日.
4. 栗原進, 保坂利男, 小野啓, 井上郁夫, 片山茂裕, 栗田卓也(肥満2型糖尿病のリラグルチド長期投与の有効性の検討(心理面の介入も含めて)). 第111回日本内科学会総会, 東京, 2014年4月11-13日.
5. 保坂利男: 栄養と糖に関する深い話. 糖尿病三位一体セミナー, 武蔵野, 2014年4月12日.
6. 石田均: 「食品交換表の改訂とそのポイント」—日本人にふさわしい糖尿病食事療法とは?—. 第2回北区 Diabetes Medical

- Care Conference. 東京, 2014年4月15日.
7. 近藤琢磨:病態に応じた糖尿病治療. 第2回多摩糖尿病若手研究会, 武蔵野, 2014年4月18日.
 8. 保坂利男:知って得する2型糖尿病治療トピックス-大血管障害予防のための良質な血糖コントロールを目指して! ~. 東大和医師会学術講演会, 東大和, 2014年4月18日.
 9. 石田均:健康寿命をのばそう! 一食で元気に健康長寿を目指した食事の基本. 第87回日本内分泌学会学術総会, 福岡, 2014年4月24-26日.
 10. 石本麻衣, 炭谷由計, 菅原祥子, 永瀬惟, 比佐有紀, 盛田久美, 近藤健, 高橋聡, 森田奈瑠, 貞苺利彦, 信太暁子, 村嶋俊隆, 勝田秀紀, 田中利明, 犬飼浩一, 板垣英二, 石田均:胸腺腫を伴った重症筋無力症, 抗VGKC抗体関連疾患および緩徐進行1型糖尿病を合併した1例. 第87回日本内分泌学会学術総会, 福岡, 2014年4月24-26日.
 11. 勝田秀紀, 田中利明, 森谷理恵, 高橋和人, 炭谷由計, 犬飼浩一, 板垣英二, 石田均:内科的治療により甲状腺機能を長期的にコントロールし得た TSH 産生下垂体腺腫の一例. 第87回日本内分泌学会学術総会, 福岡, 2014年4月24-26日.
 12. 興津理絵, 阪上浩, 保坂利男, 高橋友奈, 黒田雅士, Bayasgalan Jambaldorj, 原田永勝, 中屋豊(:細胞骨格制御分子による糖取り込み機構の解析. 第87回日本内分泌学会学術総会, 福岡, 2014年4月24-26日.
 13. 北原敦子:食品交換表の改訂のポイント. 長野栄養士会, 長野, 2014年4月26日.
 14. 石田均:「食品交換表の改訂とそのポイント」—日本人にふさわしい糖尿病食事療法を含めて—. 第1回八女筑後 CDE 研究会, 八女, 2014年5月9日.
 15. 石田均:日本人にふさわしい糖尿病食事療法—糖質の意義とインクレチンの役割について—. 第18回名古屋循環器 生活習慣病カンファレンス, 名古屋, 2014年5月10日.
 16. 石田均:日本人のための糖尿病食事療法—「食品交換表」の改訂とその新たな方向性—. 平成26年度公益法人兵庫県栄養士会第3回通常総会, 神戸, 2014年度5月17日.
 17. 齊藤雅一, 新倉奈緒美, 齊藤妙子, 山岡美徳, 保坂利男, 栗田卓也, 池淵研二:NST 介入における CONUT(Controlling Nutritional Status)法の有用性について. 第63回日本医学検査学会, 新潟, 2014年 5月17-18日
 18. 石田均:糖尿病の食事療法の課題と展望. 食品交換表第7版への改訂の概要. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
 19. 北原敦子, 高橋和人, 森谷理恵, 小沼裕寿, 半田桂子, 森田奈瑠, 石本麻衣, 炭谷由計, 田中利明, 勝田秀紀, 西田進, 犬飼浩一, 石田均:膵β細胞保護効果に対するアスタキサンチンの細胞内作用機構に関する検討—ケモカインの MCP-1の分泌動態への影響—. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
 20. 西田進, 鈴木清, 近藤健, 高橋聡, 村嶋俊隆, 貞苺利彦, 信太暁子, 森谷理恵, 北原敦子, 炭谷由計, 高橋和人, 田中利明, 勝田秀紀, 犬飼浩一, 石田均:糖・脂質代謝異常や高血圧が男性の骨代謝マーカーに及ぼす影響とその成因について. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
 21. 高橋和人, 森谷理恵, 北原敦子, 半田桂子, 小沼裕寿, 村嶋俊隆, 炭谷由計, 田中利明, 勝田秀紀, 西田進, 犬飼浩一, 石田均:糖尿病での骨代謝異常における基盤病態の解明とそれに対する温熱処理の影響の検討. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
 22. 森谷理恵, 高橋和人, 北原敦子, 小沼裕寿, 半田桂子, 炭谷由計, 田中利明, 勝田秀紀, 西田進, 板垣英二, 犬飼浩一, 石田均:骨芽細胞からのサイトカイン分泌に及ぼす飽和脂肪酸の影響とその細胞内シグナル伝達経路に関する検討. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
 23. 勝田秀紀, 盛田久美, 比佐有紀, 石本麻衣, 森田奈瑠, 村嶋俊隆, 北原敦子, 高橋和人, 炭谷由計, 田中利明, 西田進, 小澤幸彦, 犬飼浩一, 石田均:プロインスリン変換酵素活性に基づく膵β細胞機能評価による2型糖尿病症例におけるシタグリブチンの膵β細胞保護効果の検討. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
 24. 高橋久子, 今野里美, 下田ゆかり, 栗山絹世, 塚田美裕, 小林庸子, 炭谷由計, 高橋和人, 勝田秀紀, 田中利明, 西田進, 吉元勝彦, 犬飼浩一, 板垣英二, 石田均:妊娠糖尿病における妊娠中の食事摂取量と妊娠経過ならびに新生児の状況との関連について. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
 25. 鈴木清, 服部隆一, 岡西大介, 菊山宗嗣, 松林直, 森谷理恵, 高橋和人, 北原敦子, 西田進, 犬飼浩一, 石田均:2型糖尿病での破骨細胞機能の異常に及ぼす肥満の影響と動脈硬化との関連について. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
 26. 炭谷由計, 須崎由香, 藤澤祐基, 盛田久美, 比佐有紀, 菅原祥子, 永瀬惟, 森田奈瑠, 石本麻衣, 近藤健, 五林可織, 北原敦子, 高橋和人, 岡島康友, 犬飼浩一, 石田均:携帯型脈拍計を活用した運動療法の確立とその血糖コントロールに及ぼす臨床的效果の検討. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
 27. 浅間泉, 小林庸子, 高橋和人, 五林可織, 炭谷由計, 勝田秀紀, 田中利明, 吉元勝彦, 西田進, 犬飼浩一, 板垣英二, 石田均:当院における造影 CT 施行時のビグアナイド薬休薬の取組みと現状報告. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
 28. 小沼裕寿, 犬飼浩一, 炭谷由計, 保坂利男, 近藤健, 高橋聡, 貞苺利彦, 信太暁子, 高橋和人, 勝田秀紀, 田中利明, 西田進, 板垣英二, 石田均:CKD を合併した2型糖尿病患者における DPP-4阻害薬リナグリプチンの有用性. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
 29. 須崎由香, 炭谷由計, 藤澤祐基, 長谷川純子, 犬飼浩一, 岡島康友, 石田均:脈拍を指標にした運動療法の効果—携帯型脈拍計を使用した慢性運動療法—. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
 30. 栗山絹世, 高橋久子, 下田ゆかり, 小林庸子, 渡邊美津子, 佐藤真由美, 田中耕史, 相原圭太, 塚田芳枝, 犬飼浩一, 石田均::糖尿病透析予防指導の導入から現状分析まで. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
 31. 犬飼浩一, 半田桂子, 小沼裕寿, 炭谷由計, 保坂利男, 北原敦子, 森谷理恵, 高橋和人, 田中利明, 勝田秀紀, 西田進, 板垣英二, 石田均:糖尿病モデルマウスにおける長期糖質制限食投与の影響に関する遺伝子学的検討. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
 32. 井内卓次郎, 保坂利男, 城石雅弘, 住田崇, 片山茂裕, 栗田卓也:ブナシメジ抽出物の2型糖尿病モデルマウスにおける肥満抑制効果. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
 33. 住田崇, 保坂利男, 井内卓次郎, 大竹啓之, 片山茂裕, 栗田卓也:ドラクナイーブ及び SU 薬治療中患者における GLP-1

- 受容体作用薬リラグチド12ヶ月以上の長期投与の有用性. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
34. 諏訪絵美, 栗原進, 保坂利男, 小野啓, 井上郁夫, 片山茂裕, 栗田卓也: コントロール不良2型糖尿病のインスリン・シタグリプチン併用療法でシタグリプチンからビルダグリプチンへ切替えの有用性の検討. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
35. 大竹啓之, 保坂利男, 住田崇, 井内卓次郎, 片山茂裕, 栗田卓也: インスリン治療中の2型糖尿病患者におけるリナグリプチン併用効果の検討. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
36. 保坂利男, 大竹啓之, 住田崇, 井内卓次郎, 片山茂裕, 栗田卓也: eGFR 経度低下高齢2型糖尿病患者におけるリナグリプチンの使用経験. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
37. 興津理絵, 黒田雅士, 保坂利男, 坂東正浩, 原田永勝, 中屋豊, 阪上浩: 細胞骨格制御分子による糖取り込み機構の解析. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
38. 保川信行, 栗原進, 今井健太, 小池裕之, 井口篤志, 新浪博, 保坂利男, 小野啓, 井上郁夫, 片山茂裕, 栗田卓也: 周術期における人工膵臓の使用経験. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
39. 保坂利男: 糖尿病療養指導と薬物療法の Up to date-食品成分の糖尿病に対する基礎研究もふくめて-. 吉祥寺 Diabetic Seminar, 武蔵野, 2014年5月27日.
40. 保坂利男, 井内卓次郎, 城石雅弘, 住田崇, 犬飼浩一, 石田均, 栗田卓也: プナシメジ抽出物の2型糖尿病マウスモデルにおける内臓脂肪蓄積抑制効果. 第68回日本栄養・食糧学会大会, 札幌, 2014年5月30日-6月1日.
41. 石田均: 日本人の体質に合った糖尿病食事療法. 静岡糖尿病学術講演会, 静岡, 2014年6月3日.
42. 石田均: 日本人にふさわしい糖尿病食事療法を考える. 第20回 Diabetes Care Yokohama-Yokosuka Study, 横浜, 2014年6月6日.
43. 石田均: 日本人のための糖尿病食事療法への新たな展開. 第3回 CST 研究会, 武蔵野, 2014年6月7日.
44. Katsuta H, Suzuki K, Ozawa S, Moriya R, Onuma H, Takahashi K, Tanaka T, Nishida S, Inukai K, Ishida H: Decreased proinsulin convertase enzyme 1/3 activity in type 2 diabetes would be restored by additional sitagliptin treatment. The American Diabetes Association's 74th Scientific Sessions, USA, June 13th-17th, 2014.
45. Moriya R, Takahashi K, Kitahara A, Onuma H, Handa K, Sumitani Y, Tanaka T, Katsuta H, Nishida S, Itagaki E, Inukai K, Ishida H: VEGF₁₂₀ secretion from palmitate-preloaded osteoblastic cells is enhanced through the activation of PI3K-dependent pathways. The American Diabetes Association's 74th Scientific Sessions, USA, June 13th-17th, 2014.
46. Kitahara A, Takahashi K, Moriya R, Onuma H, Handa K, Sumitani Y, Tanaka T, Katsuta H, Nishida S, Sakurai T, Inukai K, Ohno H, Ishida H. Direct action of ghrelin enhance the secretions of proinflammatory adipokines from mature 3T3-L1 adipocytes in vitro. The American Diabetes Association's 74th Scientific Sessions, USA, June 13th-17th, 2014.
47. Nomoto H, Kondo T, Nakamura A, Miyoshi H, Atsumi T. Inhibition of small-Maf function in pancreatic beta-cells ameliorates insulin secretion due to enhancement of insulin and glucokinase gene expression. The American Diabetes Association's 74th Scientific Sessions, USA, June 13th-17th, 2014.
48. 保坂利男: 再考, 療養指導とともに DPP4阻害薬をうまく使うコツ! 東葛北部糖尿病治療懇話会. 東葛北部糖尿病治療懇話会, 柏, 2014年6月24日.
49. 石田均: 日本人のための糖尿病食事療法—インクレチンとの関連も含めて—. 第27回糖尿病フォーラム・イン・広島, 広島, 2014年6月25日.
50. 石田均: 日本人の体質に合った糖尿病食事療法を考える. 第18回糖尿病治療・看護・療養指導を考える試行錯誤の会, 秋田, 2014年6月28日.
51. 石田均: 日本人の体質に合った糖尿病食事療法—食品交換表の改訂と今後の展開—. 第13回東京 CDE フォーラム, 東京, 2014年7月5日.
52. 北原敦子: 食品交換表の改訂のポイント. 新潟栄養士会, 新潟, 2014年7月5日.
53. 近藤琢磨: 膵β細胞研究と糖尿病治療—それぞれの変遷. 第4回中東京臨床糖尿病フォーラム, 武蔵野, 2014年7月9日.
54. 保坂利男: 食品成分の可能性—動物実験から生活習慣病予防のアプローチ—. 武蔵野, 2014年7月9日.
55. 石田均: 日本人の体質に合った糖尿病食事療法—食品交換表の改訂ポイントとともに—. 第2回生活習慣病研究会, 沼津, 2014年7月10日.
56. 勝田秀紀: 2型糖尿病の指標としてのプロインスリンの活用について. Diabetes Summer Seminar 糖尿病と膵β細胞, 東京, 2014年7月12日.
57. 石田均: 「糖尿病食事療法新たな出発点」—その人にあった栄養食事指導を目指して—「糖尿病食事療法のための食品交換表第7版」改訂のポイント. 臨床栄養学セミナー I, 横浜, 2014年7月19日.
58. 石田均: 日本人のための糖尿病食事療法—インクレチンとの関連も含めて—. 東京糖尿病医療研究会第12回学術講演会, 東京, 2014年7月22日.
59. 近藤琢磨: 日常診療における糖尿病合併症の管理. 第35回糖尿病連絡会, 小平, 2014年7月24日.
60. 石田均: 日本人の体質に合った糖尿病食事療法—食品交換表第7版の改訂ポイントとともに—. 第17回熊本糖尿病フォーラム, 熊本, 2014年7月25日.
61. 石田均: 日本人のための糖尿病食事療法とその将来への展望. 第15回長崎県糖尿病・妊娠研究会, 長崎, 2014年7月26日.
62. 近藤琢磨: 糖尿病研究の成果を日常診療に生かそう!. E-quality meeting 2014, 武蔵野, 2014年7月29日.
63. 保坂利男: 糖尿病治療に於ける DPP4阻害薬の位置づけ. E-quality meeting 2014, 武蔵野, 2014年7月29日.
64. 石田均: 日本人のための糖尿病食事療法—インクレチンとの関連も含めて—. 東葛糖尿病研究会, 野田, 2014年7月30日.
65. 近藤琢磨: Maf 転写因子群によるβ細胞の機能制御. Ten Topics in Endocrinology and Metabolism, 札幌, 2014年8月2日.
66. 石田均: 日本人の体質に合った糖尿病食事療法とは. 学術講演会—糖尿病治療 Up To Date—, 対馬, 2014年8月8日.
67. 石田均: 日本人のための糖尿病食事療法を考える. 2014年度糖尿病療養支援ネットワーク研修会, 東京, 2014年8月24日.
68. 近藤琢磨: 高齢者糖尿病患者とどう向き合うか?. 北多摩地区糖尿病学術講演会, 武蔵野, 2014年9月2日.

69. 石田均: 日本人の体質に合った糖尿病食事療法. 糖尿病フォーラム in 大分 (TOFO), 大分, 2014年9月3日.
70. 石田均: 日本人の健康長寿を目指す食事療法とは?. 糖尿病・栄養研究会 Diabetes and Nutrition Research Conference 2014, 大阪, 2014年9月4日.
71. 石田均: 健康長寿を目指す食事療法について. 富山県女性薬剤師会学術講演会, 富山, 2014年9月7日.
72. 北原敦子: 食品交換表の改訂のポイント. 世田谷保健所, 東京, 2014年9月9日.
73. 石田均: 日本人にふさわしい糖尿病食事療法を考える. 郡山 Diabetes Educators Network Forum, 郡山, 2014年9月11日.
74. 石田均: 日本人の健康長寿を目指す食事療法を考える. 宮崎インスリン療法研究会, 宮崎, 2014年9月13日.
75. 石田均: 日本人に適した糖尿病食事療法とは. 糖尿病地域連携セミナー in 春の町, 北九州, 2014年9月25日.
76. 近藤琢磨: 糖尿病研究から考える糖尿病治療戦略. Incretin Forum in Tama 2014, 立川, 2014年9月30日.
77. 石田均: 糖尿病合併症から考える食事療法・運動療法. 第29回日本糖尿病合併症学会, 東京, 2014年10月3-4日.
78. 小沼裕寿, 犬飼浩一, 北原敦子, 森谷理恵, 炭谷由計, 高橋和人, 勝田秀紀, 田中利明, 西田進, 保坂利男, 石田均: インクレチンシグナルと PPAR γ 活性化代謝経路の血管内皮細胞におけるクロストーク. 第29回日本糖尿病合併症学会, 東京, 2014年10月3-4日.
79. 西田進, 鈴木清, 近藤健, 高橋聡, 貞莉利彦, 村嶋俊隆, 森谷理恵, 小沼裕寿, 炭谷由計, 北原敦子, 高橋和人, 田中利明, 勝田秀紀, 犬飼浩一, 石田均: 男性において糖・脂質代謝異常や高血圧が, 骨代謝異常に及ぼす影響についての検討. 第29回日本糖尿病合併症学会, 東京, 2014年10月3-4日.
80. 石田均: 糖尿病における食事療法の意義と今後の課題. 第36回日本臨床栄養学会総会, 第35回日本臨床栄養協会総会, 第12回大連合大会, 東京, 2014年10月4-5日.
81. 保坂利男: 最新外来インスリン治療マニュアル. 岩国内科医会学術講演会, 岩国, 2014年10月10日.
82. 近藤琢磨: 肥満合併糖尿病に優先される治療は?. 3rd T-LED Conference, 立川, 2014年10月14日.
83. 石田均: 日本人のための食事療法を考える—カーボカウントの本来の意義—. 第44回城北肥満研究会, 東京, 2014年10月17日.
84. 石田均: 日本人のための糖尿病食事療法—「食品交換表」改訂のポイントと今後の方向性—. 平成26年度地域活動事業部健康づくり推進研修会, 静岡, 2014年10月18日.
85. 北原敦子, 高橋和人, 小沼裕寿, 炭谷由計, 田中利明, 勝田秀紀, 西田進, 保坂利男, 犬飼浩一, 石田均: Ghrelin 刺激性アディポカイン分泌制御機構の解明. 第35回日本肥満学会, 宮崎, 2014年10月24-25日.
86. 炭谷由計, 須崎由香, 藤澤祐基, 保坂利男, 犬飼浩一, 岡島康友, 石田均: 携帯型脈拍計を活用した運動療法の確立とその血糖コントロールに及ぼす臨床的効果の検討. 第35回日本肥満学会, 宮崎, 2014年10月24-25日.
87. 黒田雅史, 阪上浩, 保坂利男, 興津理絵, 原田永勝, 中屋豊: 細胞骨格制御分子 γ -synuclein による糖取り込み機構の解析. 第35回日本肥満学会, 宮崎, 2014年10月24-25日.
88. 石田均: 日本人にふさわしい糖尿病食事療法—食品交換表の改訂とその新しい方向性—. 第28回苦小牧糖尿病勉強会, 苦小牧, 2014年10月29日.
89. 石田均: 日本人の体質に合った糖尿病食事療法を考える. 2014年度第1回米沢地区 CDE 研修会, 米沢, 2014年11月1日.
90. 保坂利男: 2型糖尿病治療に於ける DPP4阻害薬, SGLT2阻害薬のポジショニング. 第3回日本くすりと糖尿病学会学術集会, 福岡, 2014年11月2日.
91. 近藤琢磨: 経口血糖降下薬に伴う低血糖の実例と留意点. 平成26年度東京糖尿病治療セミナー (多摩地区), 武蔵野, 2014年11月8日.
92. 石田均: 日本人にふさわしい糖尿病食事療法を考える. 第131回糖尿病症例研究談話会, 東京, 2014年11月11日.
93. 犬飼浩一, 半田桂子, 小沼裕寿, 森谷理恵, 炭谷由計, 高橋和人, 勝田秀紀, 田中利明, 西田進, 保坂利男, 石田均: 糖尿病モデルマウスにおける糖質制限食投与による遺伝子学的影響の検討. 第43回杏林医学会総会, 三鷹, 2014年11月15日.
94. 白土健, 櫻井拓也, 小笠原準悦, 木本紀代子, 高橋和人, 炭谷由計, 石田均, 大野秀樹, 木崎節子: 高グルコース培養によるマクロファージの時計遺伝子 Rev-erb α の発現変化とその生理的役割. 第43回杏林医学会総会, 三鷹, 2014年11月15日.
95. 石田均: 日本人に相応しい糖尿病食事療法への展開. 第10回 Current Topics lecture in Endocrinology & Metabolism, 出雲, 2014年11月20日.
96. 石田均: 日本人の健康長寿を目指す食事療法. 釧路市医師会学術講演会, 釧路, 2014年11月22日.
97. 保坂利男: 高齢糖尿病患者における DPP4阻害薬のポジショニングと使い分け. 生活習慣病セミナー, 金沢, 2014年11月25日.
98. 高橋久子, 下田ゆかり, 栗山絹世, 塚田美祐, 小林庸子, 炭谷由計, 高橋和人, 勝田秀紀, 田中利明, 西田進, 吉元勝彦, 保坂利男, 犬飼浩一, 板垣英二, 石田均: 妊娠糖尿病妊婦へのインスリン導入受容までの看護・助産支援についての検討. 第30回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会, 長崎, 2014年11月28-29日.
99. 井内卓次郎, 住田崇, 波多野雅子, 酒井豪太, 深堀賢人, 田口亮, 保川信行, 保坂利男, 大竹啓之, 池上裕一, 安田重光, 片上秀喜, 片山茂裕, 栗田卓也: 先端巨大症に合併した褐色細胞腫の一例. 第24回内分泌 Update, 大宮, 2014年11月28-29日.
100. 石田均: 日本人に相応しい糖尿病食事療法とその新たな展開. 糖尿病治療を考える会—糖尿病治療における食事療法の大切さについて—, 横須賀, 2014年12月10日.
101. 保坂利男: SGLT2阻害薬適正使用マニュアル. 西多摩地区糖尿病と合併症予防の為に講演会, 昭島, 2014年12月4日.
102. 保坂利男: 糖尿病療養指導と DPP4阻害薬治療の Up To Date. 第124回岩国・柳井臨床糖尿病懇話会, 岩国, 2014年12月5日.
103. 保坂利男: 高齢者糖尿病患者における DPP-4阻害薬のポジショニングと使い分け. M3 Web 講演会, 東京, 2014年12月11日.
104. 保坂利男: 最新2型糖尿病経口血糖降下薬治療マニュアル. Meet the Expert—専門医に聞く治療薬の処方意図—, 三鷹, 2014年12月17日.
105. 北原敦子, 高橋和人, 森谷理恵, 小沼裕寿, 炭谷由計, 田中利明, 勝田秀紀, 西田進, 近藤琢磨, 保坂利男, 犬飼浩一, 石田均: 2型糖尿病状態下の膵 β 細胞での慢性炎症に対するアスタキサンチンの保護作用との機序について. 第18回日本病態栄養学会年次学術集会, 京都, 2015年1月10-11日.
106. 近藤琢磨: 膵 β 細胞研究からみた糖尿病治療戦略. Diabetes Expert Forum 2015, 立川, 2015年1月14日.
107. 石田均: 日本人の体質に合った糖尿病食事療法. 日本医師会生涯教育講座セミナー, 東京, 2015年1月15日.

108. 保坂利男:最新外来インスリン治療マニュアル.インスリン最新治療研究会, 福井, 2015年1月16日.
109. 近藤琢磨:病態を意識した糖尿病治療薬の選択～多種類のお薬をどう使いこなす?～. 平成26年度北多摩北部保健医療圏糖尿病ネットワーク 医療従事者向け研修会, 西東京, 2015年1月17日.
110. 石田均:日本人の健康長寿を保つための食事療法. 第10回千葉糖尿病眼合併症研究会, 千葉, 2015年1月22日.
111. 比佐有紀, 炭谷由計, 永瀬惟, 盛田久美, 石本麻衣, 森田奈瑠, 田中利明, 勝田秀紀, 保坂利男, 犬飼浩一, 石田均:肥満2型糖尿病における BOT からリキナセチドによる BPT へ切り換え効果の検討. 第52回日本糖尿病学会関東甲信越地方会, 横浜, 2015年1月24日.
112. 森田奈瑠, 炭谷由計, 石本麻衣, 高橋聡, 村嶋俊隆, 勝田秀紀, 田中利明, 保坂利男, 板垣英二, 犬飼浩一, 石田均:術後に著しい血糖改善を認めたサブクリニカルクッシング症候群合併褐色細胞腫の一例. 第52回日本糖尿病学会関東甲信越地方会, 横浜, 2015年1月24日.
113. 盛田久美, 村嶋俊隆, 炭谷由計, 比佐有紀, 永瀬惟, 石本麻衣, 森田奈瑠, 保坂利男, 犬飼浩一, 石田均:糖尿病性動眼神経麻痺の重症化再発を認めた緩徐進行型1型糖尿病の一例. 第52回日本糖尿病学会関東甲信越地方会, 横浜, 2015年1月24日.
114. 高橋奈央, 東海俊史, 三橋順子, 池田和穂, 田中直見, 田中利明, 西田進, 石田均:当院における初診時から1年間の糖尿病栄養指導の臨床的効果. 第52回日本糖尿病学会関東甲信越地方会, 横浜, 2015年1月24日.
115. 近藤健, 大久保佳昭, 村嶋俊隆, 伊藤新, 金子松五, 西田次郎, 武井泉:慢性 C 型肝炎に対するインターフェロン治療により誘発された1型糖尿病の1例. 第52回日本糖尿病学会関東甲信越地方会, 横浜, 2015年1月24日.
116. 近藤琢磨:β細胞研究の現状から将来の糖尿病治療を考える. 第6回 Metropolitan Diabetes Conference, 東京, 2015年1月24日.
117. 北原敦子:食品交換表の改訂のポイント. 特別区研究所, 東京, 2015年1月27日.
118. 石田均:日本人の健康寿命を保つための食事療法を考える. 糖尿病学術セミナー, 市川, 2015年1月28日.
119. 保坂利男:照らし出される SGLT2阻害薬の可能性とポジショニング. 東久留米医師会学術講演会, 東久留米, 2015年2月10日.
120. 千野貴子, 種山小栗, 塚田美裕, 丹波光子, 奥山秀平, 小嶋幸一郎, 保坂利男, 大浦紀彦:摂食障害患者への NST 介入の有用性. 第30回日本静脈経腸栄養学会, 神戸, 2015年2月12-13日.
121. 保坂利男:照らし出される SGLT2阻害薬の可能性とポジショニング. 糖尿病 Workshop in 葛飾, 荒川, 2015年2月19日.
122. 石田均:日本人の体質に合った糖尿病食事療法. 第49回糖尿病学の進歩, 岡山, 2015年2月20日.
123. 石田均:食品交換表の改訂とそのポイント―「活用編」の応用ならびに実践を含めて―. 第49回糖尿病学の進歩, 岡山, 2015年2月20-21日.
124. 保坂利男:照らし出される SGLT2阻害薬の可能性とポジショニング. 国分寺・小金井医師会 合同学術講演会, 国分寺, 2015年2月25日.
125. 保坂利男:照らし出される SGLT2阻害薬の可能性とポジショニング. Diabetes Expert Meeting, 田無, 2015年2月26日.
126. 保坂利男:照らし出される SGLT2阻害薬の可能性とポジショニング. 糖尿病を考える in 荒川, 浅草, 2015年2月27日.
127. 近藤琢磨:肥満合併糖尿病:10年後の人生を変えるのはどちら?～BG 薬追加の立場から～. 第6回多摩糖尿病先端医療研究会, 立川, 2015年3月3日.
128. 石田均:眼科と内科の新たな連携―糖尿病療養指導チームの役割とその重要性も含めて―. 第20回日本糖尿病眼学会総会, 東京, 2015年3月6-8日.
129. 久須見有美, 佐野公彦, 中山真紀子, 厚東隆志, 井上真, 山本実, 石田均, 平形明人:非散瞳下超広角眼底撮影を用いた人間ドック健診での糖尿病網膜症の検出. 第20回日本糖尿病眼学会総会, 東京, 2015年3月6-8日.
130. 保坂利男:SGLT2阻害薬 臨床経験から発売1年経って見えてきたこと, またこれからの課題. 東京都病院薬剤師会 臨床薬学研究会, 2015年3月5日.
131. 前川亜樹, 安部晶子, 浅間泉, 島村祥子, 平形明人, 石田均:眼科領域の糖尿病療養指導士による糖尿病教室. 第20回日本糖尿病眼学会総会, 東京, 2015年3月6-8日.
132. 保坂利男:SGLT2阻害薬外来適正使用マニュアル.新潟市糖尿病治療セミナー, 新潟, 2015年3月11日.
133. 北原敦子:「低血糖」. 第18回TAMA生活習慣病フォーラム, 東京, 2015年3月14日.
134. 保坂利男:SGLT2阻害薬外来適正使用マニュアル. 新宿区糖尿病懇話会, 新宿, 2015年3月15日.
135. 石田均:日本人の体質に合った糖尿病食事療法. 茨城県保険医協会 第54回コモンディーズ研究会, 土浦, 2015年3月17日.
136. 保坂利男:照らし出される SGLT2阻害薬の可能性とポジショニング. Tachikawa Diabetes Meeting, 立川, 2015年3月17日.
137. 石田均:日本人の体質に適した糖尿病食事療法を考える. 城北地区4区(板橋区・練馬区・豊島区・北区)合同 糖尿病区民公開講座, 東京, 2015年3月21日.
138. 保坂利男:照らし出される SGLT2阻害薬の可能性とポジショニング. 坂戸地区糖尿病懇話会, 坂戸, 2015年3月24日.
139. 保坂利男:SGLT2阻害薬外来適正使用マニュアル. 本庄市児玉医師会学術講演会, 本庄, 2015年3月27日.
140. 保坂利男:照らし出される SGLT2阻害薬の可能性とポジショニング. 名古屋内科医会第531回例会・愛知県下内科医会第64回合同例会, 名古屋, 2015年3月28日.

論文

1. Ozawa S¹, Katsuta H¹, Suzuki K, Takahashi K, Tanaka T, Sumitani Y, Nishida S, Yoshimoto K, Ishida H (equally contributed) : Estimated proinsulin processing activity of prohormone convertase (PC) 1/3 rather than PC2 is decreased in pancreatic β-cells of type 2 diabetic patients. *Endocr J* 61(6): 607-614, 2014.
2. Ogasawara J, Ito T, Wakame K, Kitadate K, Sakurai T, Sato S, Ishibashi Y, Izawa T, Takahashi T, Ishida H, Kizaki T, Ohno H : ETAS, an enzyme - treated asparagus extract, attenuates amyloid β-induced cellular disorder in PC12 cells. *Natural Product Commun* 9(4): 561-564, 2014.
3. Handa K, Inukai K, Onuma O, Kudo A, Nakagawa F, Tsuruga K, Kitahara A, Moriya R, Takahashi K, Sumitani Y, Hosaka T, Kawakami H, Oyadomari S, Ishida H: Long-term low carbohydrate diet leads to deleterious metabolic manifestations in diabetic mice. *PLoS One* 9(8): e104948, 2014.
4. Onuma H, Inukai K, Kitahara A, Moriya R, Nishida S, Tanaka T,

- Katsuta H, Takahashi K, Sumitani Y, Hosaka T, Ishida H: The glucagon-like peptide 1 receptor agonist enhances intrinsic peroxisome proliferator - activated receptor γ activity in endothelial cells. *Biochem Biophys Res Commun* 451: 339-344, 2014.
5. Hirata T, Inukai K, Morimoto J, Katayama S, Ishida H: Effects of concomitant drugs on sitagliptin - mediated improvement in glycemic control in Japanese patients with type 2 diabetes. *Prim Care Diabetes* 8 : 265-270, 2014.
 6. Onuma H, Inukai K, Watanabe M, Sumitani Y, Hosaka T, Ishida H: Effects of long - term monotherapy with glimepiride vs glibenclamide on glycemic control and macrovascular events in Japanese Type 2 diabetic patients. *J Diabetes Mellitus* 4 : 33-37, 2014.
 7. Inukai K, Hirata T, Sumita T, Watanabe M, Ikegami Y, Ito D, Kurihara S, Yasukawa N, Morimoto J, Takata N, Kanazawa K, Neda T, Sumitani Y, Inoue K, Noguchi Y, Hosaka T, Ishida H, Katayama S: Clinical Characteristics of Japanese Type 2 Diabetic Patients Responsive to Sitagliptin. *J Diabetes Mellitus* 4 : 172-178, 2014.
 8. Sumita T, Ono H, Suzuki T, Sakai G, Inukai K, Katagiri H, Asano T, Katayama S, Awata T: Mediobasal hypothalamic PTEN modulates hepatic insulin resistance independently of food intake in rats. *Am J Physiol Endocrinol Metab* 307 : E47-60, 2014.
 9. Hosaka T, Sasaga S, Yamasaka Y, Nii Y, Edazawa K, Tsutsumi R, Shuto E, Okahisa N, Iwata S, Tomotake H, Sakai T: Treatment with buckwheat bran extract prevents the elevation of serum triglyceride levels and fatty liver in KK-Ay mice. *J Med Invest* 61(3-4) : 345-352, 2014.
 10. Tsutsumi R, Yoshida T, Nii Y, Okahisa N, Iwata S, Tsukayama M, Hashimoto R, Taniguchi Y, Sakaue H, Hosaka T, Shuto E, Sakai T: Sudachitin, a polymethoxylated flavone, improves glucose and lipid metabolism by increasing mitochondrial biogenesis in skeletal muscle. *Nutrition & Metabolism (Lond)* Jul 4;11:32, eCollection 2014.
 11. Chung L.T.K, Hosaka T, Tam L.T.T, Giang N.T, Binh T.Q, Hao L.T.H, Da P.X: Oral administration of *Bifidobacterium* spp. improves insulin resistance, induces adiponectin and prevents inflammatory adipokine expressions. *BIOMEDICAL RESEARCH* 35(5) : 303-310, 2014.
 12. Kameda H, Miyoshi H, Shimizu C, Nagai S, Nakamura A, Kondo T, Chida D, Atsumi T: Expression and regulation of neuromedin B in pituitary corticotrophs of male melanocortin 2 receptor-deficient mice. *Endocrinology* 155 : 2492-2499, 2014.
 13. Miyoshi A, Nagai S, Takeda M, Kondo T, Nomoto H, Kameda H, Hirai A, Cho K, Kimachi K, Shimizu C, Atsumi T, Miyoshi H: Ovarian morphology and prevalence of polycystic ovary syndrome in Japanese women with type 1 diabetes mellitus. *J Diabetes Investig* 4 : 326-329, 2014.
 14. Kitahara A, Takahashi K, Moriya R, Onuma H, Handa K, Sumitani S, Tanaka T, Katsuta H, Nishida S, Sakurai T, Inukai K, Ohno H, Ishida H: Ghrelin augments the expressions and secretions of proinflammatory adipokines, VEGF120 and MCP-1, in differentiated 3T3-L1 adipocytes. *J Cell Physiol* 230: 199-209, 2015.
 15. Hirota K, Keino H, Inoue M, Ishida H, Hirakata A: Comparisons of microRNA expression profiles in vitreous humor between eyes with macular hole and eyes with proliferative diabetic retinopathy. *Graefes Arch Clin Exp Ophthalmol* 253 : 335-342, 2015.
 16. Chung L.T.K, Hosaka T, Trung N.T, Kassu A, Oanh D.T, Ba T.H, Phuong P.T, Quang Binh T: *Bifidobacterium* species lower serum glucose, increase insulin signaling protein expressions and improve adipokine profile in diabetic mice. *BIOMEDICAL RESEARCH* 36(1) : 63-70, 2015.
 17. Nomoto H, Kondo T, Miyoshi H, Nakamura A, Hida Y, Yamashita K.I, Sharma A.J, Atsumi T: Inhibition of small Maf function in pancreatic beta cells improves glucose tolerance through the enhancement of insulin gene transcription and insulin secretion. *Endocrinology* Mar 12 : en20141906, 2015.
 18. 石田均: 日本人にふさわしい糖尿病の食事療法—食品交換表の第7版の改訂と今後の方向性—. *糖尿病と妊娠* 14(1): 22-26, 2014.
 19. 石田均: 糖尿病食事療法の実際と糖尿病治療におけるその意義—糖質制限食の功罪も含めて—. *Current Therapy* 32(4): 379-384, 2014.
 20. 勝田秀紀, 石田均: SU 薬はどのような患者に適していますか?. *治療* 96(6): 944-945, 2014.
 21. 石田均: 医師が把握すべき食品交換表第7版への改訂のポイント. *Medical Asahi* 43(9): 26-28, 2014.
 22. 石田均: 食事療法の考え方と今後の課題. *日本医師会雑誌* 143(8): 1673-1677, 2014.
 23. 保坂利男, 炭谷由計, 犬飼浩一: 外来通院患者における強化インスリン療法でのインスリングルリジンへの切り替え後の有効性および安全性の検討. *新薬と臨床* 63(6) : 924, 2014.
 24. 炭谷由計, 保坂利男, 小沼裕寿, 犬飼浩一: CKD を有する2型糖尿病患者におけるリナグリプチンの有用性の検討. *Diabetes Frontier* 25(5) : 621-625, 2014.
- 著書**
1. 石田均: 糖尿病食事療法のための食品交換表活用編第2版—献立例とその実践—. 日本糖尿病学会編・著. 日本糖尿病協会, 東京, 文光堂, 2015.
 2. 志村二三夫, 石田均(編集): カレント: 人体の構造と機能及び疾病の成り立ち2. 東京, 建帛社, 2015.
 3. 石田均: 日本人の体質に合った糖尿病の食事療法を考えよう. ベんちのーと24(4). 東京, メディカル・ジャーナル社, 2014. p.12-13.
 4. 石田均: 糖尿病における食事療法の在り方—インクレチンとの関連を中心に—. *Medical View Point* 35(4). 2014. p.3.
 5. 石田均, 井口登興志, 前川聡(Round Table Discussions): 選択的 SGLT2 阻害薬の適正使用のために. *日経メディカル* (2014.07). 2014. p.071-073.
 6. 西田進, 鈴木清, 近藤健, 貞苅利彦, 信太暁子, 村嶋俊隆, 森谷理恵, 小沼裕寿, 炭谷由計, 犬飼浩一, 板垣英二, 石田均: 男性2型糖尿病における骨代謝異常の解析とその成因ならびにシタグリプチン投与の効果に関する臨床的研究. 日本人の糖尿病を考える会業績集. 2014. p.7-12.
 7. 石田均: 日本人にふさわしい糖尿病食事療法を考える—極端な糖質制限食と動脈硬化との関連から—. *EYE-DIA Vol2*. 2014. p.3-4.
 8. 石田均: メディカル eye「日本人にふさわしい糖尿病食事療法を考える」. 東京保険医新聞第1614号. 東京, 東京保険医協会, 2015. p.4.

9. 保坂利男, 炭谷由計, 根田保, 犬飼浩一: BOT (Basal-supported Oral Therapy)療法の課題と今後の展望. 新薬と臨床 63(6). 東京, 医薬情報研究所, 2014. p.837.
10. 保坂利男: [夏季特集=主な疾患の治療とその展望]「糖尿病 ～膵β細胞の保護を目指した治療～」. MEDICAMENT NEWS 第2165号. メディカルオンライン, 2014. p.9-10.
11. 保坂利男: インスリン抵抗性と境界型糖尿病の病態－基礎研究の治験より－. 月刊糖尿病 6(8). 東京, 医学出版, 2014. p.8-13.
12. 保坂利男: プナシメジの抗・脱メタボ体型の可能性～プナシメジ抽出物の肥満かつ糖尿病マウスにおける体脂肪蓄積抑制効果～. 信州のそ菜 712. 長野, 全国農業組合連合会長野県本部, 2014. p.39-41.
13. 井内卓次郎, 保坂利男: プナシメジの抗・脱メタボ体型の可能性～プナシメジ熱抽出物の肥満糖尿病マウスにおける内臓脂肪蓄積抑制効果. MP(MICOPHAGIST) 10. 2014. p.2-3.
14. 板垣英二: year note 2016 視床下部・下垂体疾患. D14-29 岡庭豊, 荒瀬康司, 三角和雄編. 東京, メディックメディア, 2015.

腫瘍内科学教室

講演

1. 古瀬純司: 膵がん化学療法の最新情報. ～エビデンスからプラクティスへ～. 鹿児島膵癌研究会, 鹿児島, 2014年4月18日.
2. 上野秀樹, 池田公史, 古瀬純司: 膵癌患者に対する ABI-007(nab-paclitaxel) の臨床開発: 日本人における ABI-007+ Gemcitabine 療法第 I/II 相試験. 第100回日本消化器病学会総会, 東京, 2014年4月24日.
3. 岡野尚弘, 成毛大輔, 春日章良, 北村浩, 高須充子, 長島文夫, 古瀬純司: 高度肝障害を伴う多発肝転移大腸癌患者における化学療法の妥当性の検討. 第100回日本消化器病学会総会, 東京, 2014年4月26日.
4. 古瀬純司: 切除不能膵癌の二次化学療法 (CQ5-4) に関する改訂. 膵癌診療ガイドライン拡大改訂委員会 (公聴会). 日本膵臓学会, 東京, 2014年4月26日.
5. 弦間昭彦, 古瀬純司, 羽鳥隆, 市川度, 奥坂拓志, 荒川浩明, 井上義一, 海老名雅仁, 加藤晃史, 楠本昌彦, 桑野和善, 齋藤好信, 酒井文和, 上甲剛, 谷口博之, 福田悠, 関頭洋: タルセバ錠 膵癌 特定使用成績調査 (全例調査) における300例中間結果報告. 第54回日本呼吸器学会, 大阪, 2014年4月26日.
6. Nagashima F: Geriatric Oncology in Japan. Asian Clinical Oncology Society, Taiwan, May 2nd-4th, 2014.
7. Furuse J: Current status and future directions of chemotherapy for pancreatic cancer. Asian KOLs Meeting in Taipei, Taipei, May 4th, 2014.
8. 古瀬純司: 膵がん化学療法の最新情報. ～エビデンスからプラクティスへ～. オンコロジーフォーラム in 札幌, 札幌, 2014年5月8日.
9. 古瀬純司: 消化器がん領域. 肝胆膵. CINV に関する日本の新しいエビデンス. CINV Forum, 東京, 2014年5月11日.
10. 古瀬純司: 膵癌治療の新時代に向けて－FOLFIRINOX の実践. Clinical Symposium in Kyushu & Yamaguchi, 福岡, 2014年5月23日.
11. 寺島健志, 鈴木英一郎, 奥坂拓志, 金子周一, 池田公史, 山口研成, 森口理久, 杉本理恵, 佐野圭二, 安居幸一郎, 細川歩, 井口東郎, 石井浩, 大川伸一, 山口武人, 行澤斉悟, 森本学, 横須賀収, 稲葉吉隆, 中森正二, 古瀬純司: 肝細胞癌に対するソラフェニブの国内多施設共同第 II 相試験－Child-Pugh 分類 A 又は B 患者に対する有効性と安全性の検討. 第50回日本肝臓学会総会, 東京, 2014年5月29日.
12. Morizane C, Okusaka T, Mizusawa J, Katayama H, Ueno M, Ikeda M, Ishii H, Azuma T, Iguchi H, Nakamori S, Mizuno N, Sata N, Sugimori K, Yamaguchi K, Mine T, Sano K, Maguchi H, Shimizu K, Furuse J, Japan Clinical Oncology Group: Randomized phase III study of gemcitabine plus S-1 combination therapy versus gemcitabine plus cisplatin combination therapy in advanced biliary tract cancer: Japan Clinical Oncology Group study (JCOG1113). 2014 ASCO Annual Meeting, USA, May 31st, 2014.
13. Kondo S, Ikeda M, Kudo M, Nadano S, Furuse J, Osaki Y, Kumada T, Ohkawa K, Mizokami M: Multicenter observational study of reactivation of hepatitis B virus caused by chemotherapy for solid tumors. 2014 ASCO Annual Meeting, USA, May 31st, 2014.
14. Abou-Alfa GK, Cheng AL, Meyer T, El-Khoueiry A, Ikeda M, Chun HG, Faivre S, Furuse J, Knox J, Okusaka T, Ping J, Borgman A, Kelley RK: Phase 3 Randomized, Double-blind, Controlled Study of Cabozantinib (XL184) vs Placebo in Subjects with Hepatocellular Carcinoma Who have Received Prior Sorafenib (CELESTIAL) (NCT01908426). 2014 ASCO Annual Meeting, USA, May 31st, 2014.
15. Furuse J: Current ongoing clinical trials for pancreatic cancer in Japan. NCI Pancreas Task Force's meeting, USA, June 1st, 2014.
16. 清水怜, 池田公史, 森本学, 加藤弥菜, 河田則文, 工藤正俊, 中森正二, 金子周一, 杉本理恵, 古瀬純司, 奥坂拓志: 進行肝細胞癌を対象としたソラフェニブとシスプラチン肝動注の併用療法. 第50回日本肝臓学会, 京都, 2014年6月5日.
17. 角谷眞澄, 池田公史, 高山忠利, 沼田和司, 泉並木, 國土典宏, 古瀬純司, 奥坂拓志, 伊藤雄一郎, 工藤正俊: ソラフェニブ国際共同非介入試験 GIDEON 最終解析 (Global Investigation of therapeutic DEcisions in unresectable HCC and Of its treatment with sorafenib) ～日本における肝臓治療の実態～. 第19回肝動脈塞栓療法研究会, 奈良, 2014年6月7日.
18. 古瀬純司: 膵癌の集学的治療の最新トピックス. 膵臓治療の最前線: エビデンスと治療選択. 第26回日本肝胆膵外科学会学術集会, 和歌山, 2014年6月11日.
19. 古瀬純司: エビデンスに基づいた肝・胆・膵悪性腫瘍の化学療法. 胆道癌に対する切除手術の補助療法. 第26回日本肝胆膵外科学会学術集会, 和歌山, 2014年6月12日.
20. 古瀬純司: 膵癌治療の新時代に向けて－FOLFIRINOX の実践. 第29回北海道消化器癌化学療法研究会学術講演会, 札幌, 2014年6月20日.
21. 古瀬純司: 糖尿病と膵臓がんを考える. 膵がん診療の最前線－診断から治療まで. SEM～糖尿病と膵臓がん～, 長野, 2014年6月27日.
22. Furuse J: Current ongoing clinical trials for pancreatic cancer in Japan. IAP/ECP consensus review of guidelines for the clinical management of pancreatic cancer, England, June 25th, 2014.
23. 長島文夫, 北村浩, 宮島謙介, 春日章良, 成毛大輔, 岡野尚弘, 古瀬純司, 松岡弘芳, 正木忠彦, 松井敏史, 須藤紀子, 神崎恒一, 奥山徹, 明智龍男, 安藤昌彦: 高齢者切除不能大腸癌において治療方針決定に用いる高齢者機能評価の実態とその応用について. 第81回大腸癌研究会, 名古屋, 2014年7

- 月4日.
24. 古瀬純司:最新の抗がん剤治療と治療の選択. 平成26年度連携大学合同市民公開シンポジウム. がんと上手につきあうために〜抗がん剤治療の専門家からのアドバイス,三鷹, 2014年7月5日.
25. 岡野尚弘, 成毛大輔, 春日章良, 北村浩, 長島文夫, 古瀬純司:切除不能膵癌における局所進行例と遠隔転移例の臨床的特徴の検討. 第45回日本膵臓学会大会, 北九州, 2014年7月11日.
26. 春日章良, 奥坂拓志, 池田公史, 福富晃, 井岡達也, 古瀬純司, 伊佐山浩通, 大川伸一, 朴成和:化学療法未治療の遠隔転移を有する膵癌に対するFOLFIRINOX療法の第II相臨床試験.第45回日本膵臓学会大会, 北九州市, 2014年7月11日.
27. 伊佐山浩通, 奥坂拓志, 猪狩功遺, 古瀬純司, 石井浩, 中井陽介, 今井翔梧, 岡村正太, 浜田知久馬:膵癌無作為化比較試験(GEST, JACCRO PC-01, GEMSAP)統合解析研究探索解析結果報告.第45回日本膵臓学会大会, 北九州市, 2014年7月11日.
28. 羽鳥隆, 古瀬純司, 弦間昭彦, 市川度, 奥坂拓志, 関頭洋:タルセバ錠 膵癌 特定使用成績調査(全例調査)における800例最終解析結果報告.第45回日本膵臓学会大会, 北九州, 2014年7月11日.
29. 古瀬純司:膵がん化学療法ー有効性・安全性から薬剤選択を考えるー.第45回日本膵臓学会大会, 北九州, 2014年7月11日.
30. 古瀬純司:切除不能膵がんの治療戦略ー薬物療法の最新情報ー.第45回日本膵臓学会大会, 北九州, 2014年7月11日.
31. 古瀬純司, 大東弘明, 中郡聡夫, 菅野敦, 上坂克彦, 中村聡明, 奥坂拓志:膵癌診療ガイドライン2013を巡って 今後の課題「補助療法」.第45回日本膵臓学会大会, 北九州, 2014年7月11日.
32. Nagashima F : JCOG activities in Geriatric Oncology. SIOG APAC, Singapore, July 12th-13th, 2014.
33. 古瀬純司:肝細胞癌の治療戦略.第12回日本臨床腫瘍学会学術集会, 福岡, 2014年7月17日.
34. Ikeda M,Ueno H,Ueno M,Mizuno N, Ioka T, Omuro Y, Nakajima T, Furuse J : A phase I /II trial of weekly nab-paclitaxel (nab-P) + Gemcitabine (GEM) in Japanese patients (pts) with metastatic pancreatic cancer (MPC).第12回日本臨床腫瘍学会学術集, 福岡, 2014年7月17日.
35. 岡野尚弘, 成毛大輔, 春日章良, 北村浩, 高須充子, 長島文夫, 古瀬純司:切除不能膵癌の転移形式による治療成績の検討.第12回日本臨床腫瘍学会学術集会,福岡, 2014年7月17日.
36. 古瀬純司:肝・胆道・膵がん-疫学・診断・治療の実態-. 10期がん情報ナビゲーター養成講座消化器がん,東京,2014年8月1日.
37. 古瀬純司:肝臓がんの薬物治療. Akiba Cancer Forum, 東京, 2014年8月9日.
38. 古瀬純司:膵癌化学療法の最新知見 ー多様化の時代に向けた取り組み. 第6回北陸消化器癌治療FORUM, 金沢, 2014年8月9日.
39. 古瀬純司:もっと知ってほしい がんと化学療法のこと. アピタルがん夜間学校, 東京, 2014年8月20日.
40. 古瀬純司:膵癌化学療法の現状と今後の展望. 第52回日本癌治療学会学術集会, 横浜, 2014年8月28日.
41. 長島文夫:高齢者がんにおける総合的機能評価(JCOG 高齢者研究小委員会からの報告). 第52回日本癌治療学会学術集会, 横浜, 2014年8月28日.
42. 伊藤雄一郎, 古瀬純司, 奥坂拓志, 池田公史, 谷河賞彦, 橋爪憲聖, 佐々木康綱 :Regorafenib pharmacokinetic (PK) data: The result of an integrated analysis. 口演. 第52回日本癌治療学会学術集会, 横浜, 2014年8月29日.
43. 長島文夫, 中村健一, 小川朝生, 濱口哲弥, 北村浩, 古瀬純司 :高齢者がんにおける総合的機能評価(JCOG 高齢者研究小委員会からの報告). 第52回日本癌治療学会学術集会, 横浜, 2014年8月29日.
44. 大川伸一, 馬場秀夫, 杉森一哉, 古瀬純司, 山本和秀, 南博信, 北川雄光, 林和彦, 権雅憲, 若林剛, 相羽恵介:肝胆膵がんにおける化学療法の悪心嘔吐観察研究. 第52回日本癌治療学会学術集会, 横浜, 2014年8月29日.
45. 市川度, 古瀬純司, 弦間昭彦, 羽鳥隆, 奥坂拓志, 関頭洋:エルロチニブ 膵癌 特定使用成績調査(全例調査)800例 の安全性・有効性最終解析結果. 第52回日本癌治療学会学術集会, 横浜, 2014年8月29日.
46. 岡野尚弘, 成毛大輔, 春日章良, 北村浩, 高須充子, 長島文夫, 古瀬純司 :当科での切除不能再発膵癌における治療成績の検討. 第52回日本癌治療学会学術集会, 横浜, 2014年8月30日.
47. 高橋秀明, 森実千種, 桑原明子, 奥山浩之, 大野泉, 清水怜, 光永修一, 林直美, 篠原旭, 小林美沙樹, 近藤俊輔, 上野秀樹, 奥坂拓志, 古瀬純司, 池田公史:進行膵がんにおける悪性腫瘍の家族歴と治療効果の検討. 第52回日本癌治療学会学術集会, 横浜, 2014年8月30日.
48. 古瀬純司:がん医療の現状. 平成25年杏林大学病院度がん看護研修 基礎編 特別講義, 三鷹, 2014年9月6日.
49. 古瀬純司:膵癌化学療法の最新情報ーFOLFIRINOX と新たな展望. 第8回消化器がん化学療法におけるチーム医療を考える会. 松山, 2014年9月6日.
50. 古瀬純司:標準治療の確立と臨床試験. がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン特別講義II. 帝京大学, 東京, 2014年9月8日.
51. 古瀬純司:膵癌化学療法の最新情報ーFOLFIRINOX をどう使うか. 第128回信州膵胆管研究会, 長野, 2014年9月20日.
52. 古瀬純司, 水野伸匡, 森実千種, 仲地耕平, 池田公史, 小西大, 奥坂拓志 :肝門部胆管癌に対する薬物療法の役割と治療成績. 第50回日本胆道学会学術集会, 東京, 2014年9月26日.
53. Furuse j, Gemma A, Hatori T, Okusaka T, Seki A : 704P – Final safety analysis of erlotinib plus gemcitabine in a post-marketing surveillance study (POLARIS) of >800 Japanese pancreatic cancer patients. ESMO 2014, Spain, September 29th, 2014 .
54. Kasuga A, Okano N, Naruge D, Kitamura H, Takasu A, Nagashima F, Furuse J : 714P – Fixed dose rate gemcitabine and S-1 combination therapy (FGS) as salvage chemotherapy for gemcitabine-refractory advanced pancreatic cancer. ESMO 2014, Spain, September 29th, 2014 .
55. Abou-Alfa G,Cheng AL,Meyer T,El-Khoueiry A,Ikeda M,Chun H,Furuse J,Knox J,Okusaka T,Colombo M,Merle P,Santoro A,Gallagher D, Janczewska E, Trojan J, Klumpen HJ, Cicin I, Ping J, Borgman – Hagey A, Kelley RK : 742TiP-Phase 3 randomized, double – blind, controlled study of cabozantinib (XL184) vs placebo in subjects with hepatocellular carcinoma who have received prior sorafenib(CELESTIAL) (NCT01908426). ESMO 2014,Spain,September 29th, 2014 .
56. 古瀬純司:がん化学療法の進歩と腫瘍内科医の役割. 第13回消化器低侵襲治療研究会, 成田, 2014年10月2日.
57. 古瀬純司:膵・胆道癌化学療法の変遷と今後の展望. 第7回

- Kyushu Panc-Bil Meeting, 福岡, 2014年10月4日.
58. 長島文夫:高齢がんリスク評価と意思決定支援の取組み (がん薬物療法の視点). 第27回日本サイコロコロジー学会総会, 東京, 2014年10月4日.
 59. 古瀬純司:膵癌化学療法の最新情報-多様化の時代に向けて. 第6回四国消化器癌フォーラム, 徳島, 2014年10月10日.
 60. 古瀬純司:がん化学療法と低栄養への対策. 東京医科大学八王子医療センター 第10回 NST 勉強会, 八王子, 2014年10月16日.
 61. 本告成淳, 坪井優, 天野祐二, 税所宏光, 古瀬純司:High volume center から緩和医療士サルベージ化学療法を行うべく紹介され当院で化学療法を行った消化器癌症例の予後の検討. JDDW2014, 神戸, 2014年10月25日.
 62. 古瀬純司:消化器がん化学療法の最近の話題. 第3回がん・緩和ケアフォーラム in 八王子, 八王子, 2014年10月30日.
 63. Furuse J : S-1: A Hope from the east? Innovation in pancreatic cancer treatment. 2014 Joint APA/JPS Anniversary Meeting, USA, November 7th, 2014.
 64. Kasuga A, Ueno H, Ikeda M, Ueno M, Mizuno N, Ioka T, Omuro Y, Nakajima T, Furuse J : Efficacy, safety and pharmacokinetics (PK) of weekly *nab*-paclitaxel (*nab*-P) plus Gemcitabine (G) in Japanese patients (pts) with metastatic pancreatic cancer (MPC): phase I/ II trial. 2014 Joint APA/JPS Anniversary Meeting, USA, November 8th, 2014.
 65. 古瀬純司:膵癌化学療法の変遷と最新情報. 第7回胆がん化学療法研究会, 苫小牧, 2014年11月28日.
 66. 長島文夫:杏林大学腫瘍内科における抗悪性腫瘍薬の開発試験登録患者に占める高齢者の特徴. 第35回日本臨床薬理学会学術総会, 松山, 2014年12月4日.
 67. 古瀬純司:肝・胆道・膵がんの薬物療法. 平成26年度 がん専門薬剤師集中教育講座, 福岡, 2014年12月6日.
 68. 古瀬純司:膵癌化学療法の変遷と最新情報. THE 5th BILIARY TRACT & PANCREATIC CANCER CONFERENCE, 岡山, 2014年12月6日.
 69. 古瀬純司:消化器がんの患者さんから学ぶ. がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン. 連携4大学合同市民公開シンポジウム, 東京, 2014年12月20日.
 70. 古瀬純司:膵がん治療の進歩-新しい時代への期待. 第5回クリスマス・スペシャル勉強会, 東京, 2014年12月23日.
 71. Aiba K, Tamura K, Saeki T, Baba H, Kitagawa Y, Yoshida K, Furuse J, Kakeji Y, Wakabayashi G : Patterns and severity of chemotherapy - induced nausea (CIN) in patients with gastrointestinal cancers associated with highly to moderately emetogenic chemotherapy (HEC and MEC). 2015 Gastrointestinal Cancers Symposium, USA, January 15th-17th, 2015.
 72. Abou-Alfa GK, Cheng AL, Meyer T, El-Khoueiry AB, Ikeda M, Chun HG, Furuse J, Knox JJ, Okusaka T, Ping J, Borgman-Hagey AE, Kelley RK : Phase 3 randomized, double-blind, controlled study of cabozantinib (XL184) versus placebo in subjects with hepatocellular carcinoma who have received prior sorafenib (CELESTIAL ; NCT01908426). 2015 Gastrointestinal Cancers Symposium, USA, January 15th-17th, 2015.
 73. Shitara K, Fujii S, Denda T, Kajiwara T, Yuki S, Nakajima TE, Takashima A, Kawasaki K, Tamura T, Esaki T, Naruge D, Ebi H, Kudo T, Taniguchi H, Akagi K, Yamanaka T, Ochiai A, Doi T, Ohtsu A, Yoshino T : The nationwide genomic screening project for gastrointestinal cancer in Japan (GI-SCREEN): Simultaneous identification of KRAS, NRAS, BRAF, and PIK3CA mutation in advanced colorectal cancer (aCRC) (GI-SCREEN 2013-01). 2015 Gastrointestinal Cancers Symposium, USA, January 15th-17th, 2015.
 74. 長島文夫:高齢者の化学療法:高齢者研究の考え方 本邦の現状と課題. 第3回広島がん薬物療法研究会, 広島, 2015年2月20日.
 75. 古瀬純司:肝胆膵がんの最新の薬物療法. 第10回日本癌治療学会アップデート教育コース, 東京, 2015年3月7日.
 76. Furuse J, Masafumi Ikeda M, Kondo S, Kudo M, Nadano S, Osaki Y, Kumada T, Ohkawa K, Mizokami M : Multicenter observational study of reactivation of hepatitis B virus caused by chemotherapy for solid tumors. 24th Asian Pacific association for the study of the liver, Turkey, March 13th, 2015.

論文 和文

1. 成毛大輔, 岡野尚弘, 春日章良, 北村浩, 長島文夫, 古瀬純司:当院における進行肝細胞癌に対するソラフェニブ療法中止後の動向. 後治療としての治験について. The Liver Cancer Journal 6(2):134-135, 2014.
2. 古瀬純司:膵がん退治の始まり. 臨床試験の現状. 内科. 肝胆膵 68(6):911-919, 2014.
3. 春日章良, 岡野尚弘, 成毛大輔, 北村浩, 長島文夫, 古瀬純司:膵NET: ガイドラインの解釈と診療の実践. 膵 NEC G3の化学療法. 胆と膵 35(7):651-655, 2014.
4. 古瀬純司, 岡野尚弘, 成毛大輔, 春日章良, 北村浩, 長島文夫:悪性胆道狭窄に対する診断・治療の進歩. 胆道癌に対する化学療法・免疫療法. 臨床消化器内科 29(9): 1255-1262, 2014.
5. 古瀬純司, 岡野尚弘, 成毛大輔, 春日章良, 北村浩, 長島文夫:消化器がん化学療法の最先端. 膵癌. 医学と薬学 71(10):1799-1808, 2014.
6. 古瀬純司, 成毛大輔, 岡野尚弘, 春日章良, 北村浩, 長島文夫:肝癌のトピックス. 肝細胞癌の分子標的治療. 病理と臨床 32(12):1326-1330, 2014.
7. 古瀬純司:肝胆膵診療の New Horizon. 膵疾患:膵がん. 切除不能膵癌に対する化学療法-1st line, 2nd line およびそれ以降の選択方法. 肝胆膵 69(6):1185-1191, 2014.
8. 長島文夫, 濱口哲弥¹ (国立がん研究センター消化器内科):大腸癌治療-課題克服のための新たな戦略. 高齢者大腸癌の臨床的問題と化学療法の実践. 消化器の臨床 17(4):350-354, 2014.
9. 古瀬純司, 岡野尚弘, 成毛大輔, 田原純子, 春日章良, 北村浩, 長島文夫:消化器診療-30年と今後の展望. 化学療法領域の変遷と展望. 肝胆膵. 臨床消化器内科 30(1):91-100, 2014.
10. 長島文夫, 濱口哲弥¹, 古瀬純司 (国立がん研究センター): JCOG 高齢者研究小委員会の活動と高齢大腸癌を対象とした臨床研究について. 癌と化学療法42(1):16-20, 2015.
11. 古瀬純司:胆膵. 膵臓. 膵癌治療の新たな展開. FOLFIRINOXへの期待と課題. Annual Review 消化器 2015:189-195, 2015.
12. 成毛大輔, 古瀬純司:最新肝癌学-基礎と臨床の最新研究動向-. 肝癌の治療. 化学療法・分子標的治療. 現在開発中の分子標的薬. 日本臨床73suppl1最新肝癌学:743-747, 2015.
13. 古瀬純司:膵・胆道癌診療の新時代へ-診断と治療の新たな展開-. 胆道癌に血管新生阻害薬は有効か. 臨床試験からの可能性. 胆と膵36(2):163-166, 2015.

14. 横山政明¹, 大西宏明², 大塚弘毅², 渡邊卓², 大倉康男³, 古瀬純司, 杉山政則¹ (杏林大学医学部消化器・一般外科, ²杏林大学医学部臨床検査医学, ³杏林大学医学部病理学). 膵・胆道癌診療の新時代へー診断と治療の新たな展開ー. 胆道癌における増殖シグナル伝達因子の発現と遺伝子変異の多様性. KRAS 変異, HER2過剰発現の胆道癌バイオマーカーとしての可能性. 胆と膵36(2):143-151, 2015.
15. 古瀬純司, 岡野尚弘, 成毛大輔, 田原純子, 春日章良, 北村浩, 長島文夫: 癌治療の10年(2004~2014年), そして未来への展望. 内科領域(癌薬物療法). 膵癌化学療法. 癌の臨床60(6):587-595, 2015.
16. 成毛大輔, 古瀬純司: 胆道癌 GEM+CDDP 療法. 抗がん剤の副作用と支持療法. 日本臨床 73(suppl 2):592-596, 2015.
17. 岡野尚弘, 長島文夫, 古瀬純司: 胆嚢癌化学療法の現状と展望. 膵癌・胆道癌. 日本臨床73(suppl 3):585-589, 2015.
18. 成毛大輔, 長島文夫, 古瀬純司: 切除不能膵癌の全身化学療法. 膵癌・胆道癌. 日本臨床73(suppl 3):148-151, 2015.
19. 長島文夫, 北村浩, 春日章良, 成毛大輔, 岡野尚弘, 宮脇謙介, 古瀬純司: がん薬物療法の副作用とその対策(補助・支持療法を含む). 高齢がん患者のケア. 腫瘍内科 15(3):268-272, 2015.
20. 長島文夫, 古瀬純司: 老年腫瘍学の現状と地域医療. 杏林医学会雑誌46(1):83-86, 2015.
21. 長島文夫: がん薬物療法の進歩と外来在宅がん診療について. 杏林医学会雑誌 46(1):27-28, 2015.

欧文

1. Inada-Inoue M¹, Ando Y, Kawada K, Mitsuma A, Sawaki M, Yokoyama T, Sunakawa Y, Ishida H, Araki K, Yamashita K, Mizuno K, Nagashima F, Takekura A, Nagamatsu K, Sasaki Y (Cancer Institute Hospital of Japanese Foundation for Cancer Research): Phase I study of pazopanib alone or combined with lapatinib in Japanese patients with solid tumors. Cancer Chemother Pharmacol 73(4):673-683, 2014
2. Matsuyama M¹, Ishii H, Furuse J, Ohkawa S, Maguchi H, Mizuno N, Yamaguchi T, Ioka T, Ajiki T, Ikeda M, Hakamada K, Yamamoto M, Yamaue H, Eguchi K, Ichikawa W, Miyazaki M, Ohashi Y, Sasaki Y (Cancer Institute Hospital of Japanese Foundation for Cancer Research): Phase II trial of combination therapy of gemcitabine plus anti-angiogenic vaccination of elpamotide in patients with advanced or recurrent biliary tract cancer. Invest New Drugs, 2014. (Epub).
3. Ikeda M¹, Ohkawa S, Okusaka T, Mitsunaga S, Kobayashi S, Morizane C, Suzuki I, Yamamoto S, Furuse J (National Cancer Center Hospital East): Japanese phase I study of GC33, a humanized antibody against glypican-3 for advanced hepatocellular carcinoma. Cancer Sci 105(4): 455-462, 2014.
4. Kishiki T¹, Ohnishi H, Masaki T, Ohtsuka K, Ohkura Y, Furuse J, Watanabe T, Sugiyama M (Department of Surgery, Kyorin University School of Medicine): Overexpression of MET is a new predictive marker for anti-EGFR therapy in metastatic colorectal cancer with wild-type KRAS. Cancer Chemother Pharmacol 73(4):749-757, 2014.
5. Zhu AX¹, Kudo M², Assenat E³, Cattani S⁴, Kang YK⁵, Lim HY⁶, Poon RT⁷, Blanc JF⁸, Vogel A⁹, Chen CL¹⁰, Dorval E¹¹, Peck-Radosavljevic M¹², Santoro A¹³, Daniele B¹⁴, Furuse J, Jappe A¹⁵, Perraud K¹⁵, Anak O¹⁵, Sellami DB¹⁶, Chen LT¹⁷ (Massachusetts General Hospital Cancer Center, ²Kinki University School of Medicine, ³ICM Val d'Aurelle, ⁴University Nord De France, ⁵University of Ulsan College of Medicine, ⁶Sungkyunkwan University School of Medicine, ⁷University of Hong Kong Queen Mary Hospital, ⁸Hospital Saint Andre, ⁹Medical School Hannover, ¹⁰Kaohshing Chang Gung Memorial Hospital, ¹¹CHRU de Tours, ¹²Medical University of Vienna, ¹³Humanitas Cancer Center, ¹⁴G Rummo Hospital, ¹⁵Novartis Pharma, ¹⁶Novartis Pharmaceuticals, ¹⁷National Institute of Cancer Research): Effect of everolimus on survival in advanced hepatocellular carcinoma after failure of sorafenib: the EVOLVE-1 randomized clinical trial. JAMA 312(1):57-67, 2014.
6. Yamaguchi Y¹, Yamaue H, Okusaka T, Okuno K, Suzuki H, Fujioka T, Otsu A, Ohashi Y, Shimazawa R, Nishio K, Furuse J, Minami H, Tsunoda T, Hayashi Y, Nakamura Y (Kawasaki Medical School): Committee of Guidance for Peptide Vaccines for the Treatment of Cancer, The Japanese Society for Biological Therapy. Guidance for peptide vaccines for the treatment of cancer. Cancer Sci 105(7):924-931, 2014.
7. Kishiki T¹, Ohnishi H², Masaki T¹, Ohtsuka K², Ohkura Y³, Furuse J, Sugiyama M¹, Watanabe T² (Department of Surgery, Kyorin University, ²Department of Laboratory Medicine, Kyorin University, ³Department of Pathology, Kyorin University): Impact of genetic profiles on the efficacy of anti-EGFR antibodies in metastatic colorectal cancer with KRAS mutation. Oncol Rep 32(1):57-64, 2014.
8. Yamaguchi K¹, Okusaka T², Shimizu K³, Furuse J, Ito Y⁴, Hanada K⁵, Shimosegawa T⁶ (University of Occupational and Environment Health, ²National Cancer Center, ³Tokyo Women's Medical University, ⁴National Cancer Center, ⁵JA Onomichi General Hospital, ⁶Tohoku University Graduate School of Medicine): Committee for revision of clinical guidelines for pancreatic cancer of Japan Pancreas Society. EBM-based Clinical Guidelines for Pancreatic Cancer (2013) Issued by the Japan Pancreas Society: A Synopsis. Jpn J Clin Oncol 44(10):883-888, 2014.
9. Okusaka T¹, Ikeda M, Fukutomi A, Ioka T, Furuse J, Ohkawa S, Isayama H, Boku N (National Cancer Center Hospital): Phase II study of FOLFIRINOX for chemotherapy-naïve Japanese patients with metastatic pancreatic cancer. Cancer Sci 105(10):1321-1326, 2014.
10. Yamaguchi T¹, Machida N, Morizane C, Kasuga A, Takahashi H, Sudo K, Nishina T, Tobimatsu K, Ishido K, Furuse J, Boku N, Okusaka T (National Cancer Center Hospital): Multicenter retrospective analysis of systemic chemotherapy for advanced neuroendocrine carcinoma of the digestive system. Cancer Sci 105(9):1176-1181, 2014.
11. Takahashi H¹, Ojima H², Shimizu H³, Furuse J, Furukawa H⁴, Shibata T⁵ (Asahikawa Medical University, ²National Cancer Center Research Institute, ³National Cancer Center Research Institute, ⁴Asahikawa Medical University, ⁵National Cancer Center Research Institute): Axitinib (AG-013736), an oral specific VEGFR TKI, shows potential therapeutic utility against cholangiocarcinoma. Jpn J Clin Oncol 44(6):570-578, 2014.
12. Miyazaki M¹, Ohtsuka M, Miyakawa S, Nagino M, Yamamoto M, Kokudo N, Sano K, Endo I, Unno M, Chijiwa K, Horiguchi A, Kinoshita H, Oka M, Kubota K, Sugiyama M, Uemoto S, Shimada M, Suzuki Y, Inui K, Tazuma S, Furuse J, Yanagisawa A,

Nakanuma Y, Kijima H, Takada T⁽¹⁾Chiba University): Classification of biliary tract cancers established by the Japanese Society of Hepato-Biliary-Pancreatic Surgery :3rd) English edition. J Hepatobiliary Pancreat Sci 22(3):181-196, 2015.

13. Takahashi H¹, Ikeda M, Kumada T, Osaki Y, Kondo S, Kusumoto S, Ohkawa K, Nadano S, Furuse J, Kudo M, Ito K, Yokoyama M, Okusaka T, Shimoyama M, Mizokami M⁽¹⁾National Cancer Center Hospital East): Multicenter cooperative case survey of hepatitis B virus reactivation by chemotherapeutic agents. Hepatol Res. doi: 10.1111/hepr.12496, 2015.(Epub).
14. Kasuga A, Okano N, Naruge D, Kitamura H, Takasu A, Nagashima F, Furuse J: Retrospective analysis of fixed dose rate infusion of gemcitabine and S-1 combination therapy (FGS) as salvage chemotherapy in patients with gemcitabine-refractory advanced pancreatic cancer: inflammation-based prognostic score predicts survival. Cancer Chemother Pharmacol 75(3):457-464, 2015.

著書

1. 古瀬純司編著: やさしい膵・胆道がん外来化学療法の自己管理. 大阪, 医薬ジャーナル, 2014.
2. 古瀬純司: がん治療について. やさしい膵・胆道がん外来化学療法の自己管理. 古瀬純司編. 大阪, 医薬ジャーナル, 2014. p.10-12.
3. 古瀬純司: 膵・胆道がんの特徴. 治療方針をどう決めるかへ化学療法の役割と位置付けへ. やさしい膵・胆道がん外来化学療法の自己管理. 古瀬純司編. 大阪, 医薬ジャーナル, 2014. p.25-29.
4. 古瀬純司: 膵・胆道がんの標準化学療法の治療方法. 膵がん. 概要. やさしい膵・胆道がん外来化学療法の自己管理. 古瀬純司編. 大阪, 医薬ジャーナル, 2014. p.30-35.
5. 古瀬純司: 膵・胆道がんの標準化学療法の治療方法. 胆道がん. 概要. やさしい膵・胆道がん外来化学療法の自己管理. 古瀬純司編. 大阪, 医薬ジャーナル, 2014. p.52-54.
6. 古瀬純司編著: がん薬物療法キードラッグ65. 東京, 中外医薬社, 2014.
7. 古瀬純司: ピリミジン薬. フルオロウラシル. 小腸がん. がん薬物療法キードラッグ65. 古瀬純司編. 東京, 中外医薬社, 2014. p.7.
8. 古瀬純司: ブラチナ(白金)製剤. シスプラチン. 肝がん. がん薬物療法キードラッグ65. 古瀬純司編. 東京, 中外医薬社, 2014. p.76-77.
9. 古瀬純司: VEGF などの血管新生阻害薬. ソラフェニブ. 肝がん. がん薬物療法キードラッグ65. 古瀬純司編. 東京, 中外医薬社, 2014. p.303-305.
10. 古瀬純司: 膵がん・胆道がん薬物療法ハンドブック. 奥坂拓志編. 東京, 南江堂, 2014.
11. 古瀬純司: 胆道がん薬物療法の概要と今後の展望. 膵がん・胆道がん薬物療法ハンドブック. 古瀬純司, 奥坂拓志編. 東京, 南江堂, 2014. p.17-20.
12. 岡野尚弘, 古瀬純司: 薬物療法の実践. 膵がん・胆道がん共通のレジメン. Gemcitabine 単独療法. 膵がん・胆道がん薬物療法ハンドブック. 古瀬純司, 奥坂拓志編. 東京, 南江堂, 2014. p.28-32.
13. 弦間昭彦, 伊藤良則, 古瀬純司, 遠藤一司編著: 分子標的治療薬マスターガイド. 東京, 中外医薬社, 2014.
14. 野村久祥, 古瀬純司: 分子標的と薬剤. EGFR. セツキシマブ.

分子標的治療薬マスターガイド. 弦間昭彦, 伊藤良則, 古瀬純司, 遠藤一司編. 東京, 中外医薬社, 2014. p.58-61.

15. 野村久祥, 古瀬純司: 分子標的と薬剤. EGFR. パニツムマブ. 分子標的治療薬マスターガイド. 弦間昭彦, 伊藤良則, 古瀬純司, 遠藤一司編. 東京, 中外医薬社, 2014. p.62-64.
16. 関礼輔, 古瀬純司: 分子標的と薬剤. KIT(CD117). イマチニブ. 分子標的治療薬マスターガイド. 弦間昭彦, 伊藤良則, 古瀬純司, 遠藤一司編. 東京, 中外医薬社, 2014. p.127-131.
17. 関礼輔, 古瀬純司: 分子標的と薬剤. VEGF などの血管新生阻害. ベバシズマブ. 分子標的治療薬マスターガイド. 弦間昭彦, 伊藤良則, 古瀬純司, 遠藤一司編. 東京, 中外医薬社, 2014. p.139-143.
18. 野村久祥, 古瀬純司: 分子標的と薬剤. VEGF などの血管新生阻害. ソラフェニブ. 分子標的治療薬マスターガイド. 弦間昭彦, 伊藤良則, 古瀬純司, 遠藤一司編. 東京, 中外医薬社, 2014. p.144-146.
19. 野村久祥, 古瀬純司: 分子標的と薬剤. VEGF などの血管新生阻害. スニチニブ. 分子標的治療薬マスターガイド. 弦間昭彦, 伊藤良則, 古瀬純司, 遠藤一司編. 東京, 中外医薬社, 2014. p.147-150.
20. 川上英泰, 古瀬純司: 分子標的と薬剤. VEGF などの血管新生阻害. アキシチニブ. 分子標的治療薬マスターガイド. 弦間昭彦, 伊藤良則, 古瀬純司, 遠藤一司編. 東京, 中外医薬社, 2014. p.167-170.
21. 臼井浩明, 古瀬純司: 分子標的と薬剤. VEGF などの血管新生阻害. パゾパニブ. 分子標的治療薬マスターガイド. 弦間昭彦, 伊藤良則, 古瀬純司, 遠藤一司編. 東京, 中外医薬社, 2014. p.171-177.
22. 川上英泰, 古瀬純司: 分子標的と薬剤. VEGF などの血管新生阻害. レゴラフェニブ. 分子標的治療薬マスターガイド. 弦間昭彦, 伊藤良則, 古瀬純司, 遠藤一司編. 東京, 中外医薬社, 2014. p.178-181.
23. 古瀬純司: 臓器別分子標的薬の位置づけ. 消化器がん. 分子標的治療薬マスターガイド. 弦間昭彦, 伊藤良則, 古瀬純司, 遠藤一司編. 東京, 中外医薬社, 2014. p.224-231.
24. 岡野尚弘, 古瀬純司: レジメン別プロのコツ. 胆道がん. GEM±CDDP(GC)ー腎障害, 間質性肺炎に注意ー. 消化器がん化学療法 副作用マネジメント プロのコツ. 小松嘉人編. 東京, メジカルビュー社, 2014. p.139-143.
25. 岡野尚弘, 古瀬純司: レジメン別プロのコツ. 胆道がん. S-1単剤一下痢に注意し, 場合によっては患者の自己判断で中止も考慮ー. 消化器がん化学療法 副作用マネジメント プロのコツ. 小松嘉人編. 東京, メジカルビュー社, 2014. p.144-148.
26. 古瀬純司: 分子標的薬の開発状況. Hepatology Practice 第5巻 肝臓の診療を極める 基本から最前線まで. 金子周一, 竹原徹郎, 持田智編. 東京, 文光堂, 2014. p.203-205.
27. 岡野尚弘, 長島文夫, 北村浩, 春日章良, 成毛大輔, 高須充子, 古瀬純司: レジメン+症例. 大腸がん. UFT+LV. 消化器がん化学療法レジメンブック2版. 室圭編. 東京, 日本医事新報社, 2014. p.151-153.
28. 岡野尚弘, 長島文夫, 北村浩, 春日章良, 成毛大輔, 高須充子, 古瀬純司: レジメン+症例. 大腸がん. S-1(TS-1)+CPT-11 [IRIS 療法]. 消化器がん化学療法レジメンブック2版. 室圭編. 東京, 日本医事新報社, 2014. p.154-156.
29. 古瀬純司: がんの薬物療法・緩和医療. 胆道癌. 消化器病診療第2版. 一般財団法人日本消化器病学会監修. 消化器病診療第2版編集委員会編. 東京, 医学書院, 2014. p.440-443.

30. 古瀬純司: 消化器癌化学療法の実際. わが国における大規模無作為化比較試験. 現在進行中の大規模臨床試験－肝・胆・膵. オンコロジー臨床ガイド 消化器癌化学療法改訂4版. 大村健二編. 東京, 南山堂, 2014. p.163-167.
31. 成毛大輔, 岡野尚弘, 春日章良, 北村浩, 長島文夫, 古瀬純司: 抗がん剤・分子標的治療による膵癌治療. 膵癌治療の現状と将来展望. 膵癌治療 up-to-date. 跡見裕監修. 海野倫明, 土田明彦編. 東京, 医学図書出版, 2014. p.37-45.

報告書

1. 古瀬純司: 切除不能膵癌に対する標準治療の確立に関する研究. 厚生労働科学研究費委託費(革新的がん医療実用化研究事業)2014年度 委託業務成果報告書.
2. 長島文夫: 高齢がんを対象とした臨床研究の標準化とその普及に関する研究. 厚生労働科学研究費委託費(革新的がん医療実用化研究事業)2014年度 委託業務成果報告書.

その他

1. 長島文夫: 医療. 老いとともに 6月薬. 朝日新聞, 2014年6月3日.
2. 古瀬純司:【専門】肝がん 各論. e-learning. 日本癌治療学会がん医療ネットワークナビゲーター用講義.

高齢医学教室

講演

1. 神崎恒一: 生活習慣病と認知症. 第3回糖尿病合併症研究会, 名古屋, 2014年4月10日.
2. 長谷川浩: 認知症をみるということ. 青木病院講演会, 調布, 2014年4月11日.
3. 神崎恒一: 三鷹市武蔵野市における認知症連携の取り組みについて. 第10回練馬区医師会認知研究会, 東京, 2014年5月8日.
4. 長谷川浩: 認知症連携について: 杏林大学病院もの忘れセンターでのこころみ. 第2回岡山西認知症連携懇話会, 倉敷, 2014年5月15日.
5. 神崎恒一: 三鷹市, 武蔵野市の認知症連携－これまでと今後－. 府中市認知症セミナー, 府中, 2014年5月23日.
6. 神崎恒一: 認知症に伴う運動器の障害. 山武郡市薬剤師会, 城西国際大学薬学部保険薬局部会, 東金, 2014年5月30日.
7. 神崎恒一: フレイル研究の最前線～診断から介入への展望～. 第56回日本老年医学会学術集会, 福岡, 2014年6月12-14日.
8. 町田綾子, 山田如子, 小林義雄, 長谷川浩, 松井敏史, 神崎恒一: 認知症の心理・行動症状の認知症疾患別検討. 第56回日本老年医学会学術集会, 福岡, 2014年6月12-14日.
9. 小原聡将, 田中政道, 佐藤道子, 小林義雄, 小柴ひとみ, 永井久美子, 山田如子, 長谷川浩, 松井敏史, 神崎恒一: 脳血管性病変を有する認知機能低下患者の総合機能評価における特徴. 第56回日本老年医学会学術集会, 福岡, 2014年6月12-14日.
10. 小柴ひとみ, 永井久美子, 田中政道, 松井敏史, 神崎恒一: もの忘れ外来通院高齢者における転倒歴と血中カルニチン値との関連. 第56回日本老年医学会学術集会, 福岡, 2014年6月12-14日.
11. 田中政道, 永井久美子, 小柴ひとみ, 松井敏史, 神崎恒一: 高齢者における転倒歴と身体機能の低下との関連について. 第56回日本老年医学会学術集会, 福岡, 2014年6月12-14日.
12. 宮澤太機, 柴田茂貴, 永井久美子, 小林義雄, 小柴ひとみ, 松井敏史, 神崎恒一: 高齢者における認知機能低下と脳血流自己調整機能の関連性. 第56回日本老年医学会学術集会, 福岡, 2014年6月12-14日.
13. 永井久美子, 宮澤太機, 柴田茂貴, 小林義雄, 小柴ひとみ, 松井敏史, 神崎恒一: 経頭蓋超音波ドップラ法による脳血流動態評価と大脳白質病変との関連. 第56回日本老年医学会学術集会, 福岡, 2014年6月12-14日.
14. 宮澤太機, 柴田茂貴, 永井久美子, 小林義雄, 小柴ひとみ, 松井敏史, 神崎恒一: 経頭蓋超音波ドップラ法とSPECTを用いた脳血流量測定と比較. 第56回日本老年医学会学術集会, 福岡, 2014年6月12-14日.
15. 宮城島慶, 輪千督高, 杉山小百合, 小林義雄, 須藤紀子, 長谷川浩, 松井敏史, 神崎恒一: 医療・介護関連肺炎入院患者の予後規定因子について. 第56回日本老年医学会学術集会, 福岡, 2014年6月12-14日.
16. 杉山小百合, 山田如子, 小柴ひとみ, 小林義雄, 長谷川浩, 松井敏史, 鳥羽研二, 神崎恒一: もの忘れ外来診療におけるCGA7の妥当性の検討. 第56回日本老年医学会学術集会, 福岡, 2014年6月12-14日.
17. 山田如子, 松井敏史, 竹下実希, 佐藤道子, 守屋佑貴子, 輪千安希子, 小柴ひとみ, 小林義雄, 長谷川浩, 神崎恒一: もの忘れ外来患者の外来通院継続(健在率)の関わる因子の研究－historical cohort study. 第56回日本老年医学会学術集会, 福岡, 2014年6月12-14日.
18. 名古屋恵美子, 松井敏史, 竹下実希, 井上慎一郎, 長谷川浩, 神崎恒一: 高齢医学病棟入院患者におけるソーシャルワークの実際. 第56回日本老年医学会学術集会, 福岡, 2014年6月12-14日.
19. 永井久美子, 小柴ひとみ, 小林義雄, 山田如子, 須藤紀子, 長谷川浩, 松井敏史, 神崎恒一: 老年症候群の適切な把握のためのもの忘れセンター予診票の作成と妥当性・信頼性の検証. 第56回日本老年医学会学術集会, 福岡, 2014年6月12-14日.
20. 里村元, 山田如子, 小林義雄, 長谷川浩, 松井敏史, 神崎恒一: もの忘れ外来患者の周辺症状と入院後の認知機能低下の関与. 第56回日本老年医学会学術集会, 福岡, 2014年6月12-14日.
21. 井上慎一郎, 長谷川浩, 船曳茜, 小原聡将, 松井敏史, 神崎恒一: 高齢者偽痛風の臨床的特徴の検討. 第56回日本老年医学会学術集会, 福岡, 2014年6月12-14日.
22. 輪千督高, 長谷川浩, 輪千安希子, 宮城島慶, 松井敏史, 神崎恒一: 当科における尿路感染症の背景についての検討. 第56回日本老年医学会学術集会, 福岡, 2014年6月12-14日.
23. 永井久美子, 柴田茂貴, 小柴ひとみ, 宮澤太機, 神崎恒一, 鳥羽研二: 認知機能障害に対する動脈硬化の関与－認知症病型別解析－. 第46回日本動脈硬化学会学術集会, 東京, 2014年7月10-11日.
24. Shibata S, Nagai K, Miyazawa T, Koshiba H, Levine B, Kozaki K: Effects of advanced glycation end-product inhibition with alagebrium and exercise training on age-related arterial stiffening in healthy elderly humans. 第46回日本動脈硬化学会学術集会, 東京, 2014年7月10-11日.
25. 宮澤太機, 柴田茂貴, 永井久美子, 小林義雄, 小柴ひとみ, 松井敏史, 神崎恒一: 認知機能が低下した高齢者における脈波伝播速度と中大脳動脈血流速度の関連性. 第46回日本動脈硬化学会学術集会, 東京, 2014年7月10-11日.
26. 神崎恒一: 認知症を正しく理解しよう. フォーラム認知症 in 調布, 調布, 2014年6月17日.
27. 神崎恒一: 認知症診療のポイントと連携の必要性. 第2回あきる野ADカンファレンス, あきる野, 2014年6月18日.

28. 松井敏史:物忘れセンターにおける服薬アンケートの中間報告. 認知症治療フォーラム in 多摩2014, 武蔵野, 2014年6月26日.
29. 神崎恒一:認知症の症状・診断と治療について. 秋川流域第13回市民健康フォーラム, あきる野, 2014年6月28日.
30. 神崎恒一:認知症に伴う運動器の障害. 第26回日本運動器科学会, 浜松, 2014年7月5日.
31. 神崎恒一:認知症医療連携の現状と将来像について. メマリー錠3周年記念講演会, 武蔵野, 2014年7月7日.
32. Kozaki K, Matsui T, Matsushita S, Higuchi S, Toba K: Involvement of limbic-diencephalic Circuits in Alcoholics with Cognitive Decline-an MRI Study by Voxel-based Morphometric Analysis. Alzheimer's Association International Conference, Denmark, July 12th-17th. 2014.
33. 長谷川浩:「地域で認知症をみる」杏林大学・三鷹ネットワーク大学公開講座, 三鷹, 2014年7月12日.
34. 神崎恒一:生活習慣病と認知症. 第70回青梅糖尿病内分泌研究会, 青梅, 2014年7月23日.
35. 松井敏史:内臓脂肪と病気の防ぎ方. 平成26年度 NTT データ公開講座, 東京, 2014年7月24日.
36. 長谷川浩:医療・介護の地域連携ともの忘れ相談シートの活用／認知症連携について. 平成26年度府中市地域包括相談員研修会, 府中, 2014年7月29日.
37. 長谷川浩: 認知症の診断・治療／認知症疾患医療センターの取り組み. 東京都医療社会事業協会研修会, 三鷹, 2014年7月30日.
38. 神崎恒一:高齢者の機能とその評価. 2014年老年医学サマーセミナー in 軽井沢, 北佐久, 2014年7月31日.
39. 神崎恒一:認知症. 市民公開講座「ストップ・ザ・ロコモ全国キャラバン in 大阪」, 大阪, 2014年8月9日.
40. 神崎恒一:三鷹市・武蔵野市における認知症地域連携の現状. Expert of Dementia, 東京, 2014年9月2日.
41. 長谷川浩:地域でみる認知症. 精神科専門薬剤師養成研究会, 東京, 2014年9月6日.
42. 神崎恒一:生活習慣病と認知症. 稲城市・多摩市・川崎市多摩区医師会共催学術講演会, 稲城, 2014年9月10日.
43. 松井敏史:認知症の最新情報-理解と対応-. 平成26年度介護保険施設等看護研修 公益社団法人神奈川県看護協会, 横浜, 2014年9月11日.
44. 小池裕美子, 田中政道, 長田正史, 竹下実希, 長谷川浩, 松井敏史, 神崎恒一:誤嚥性肺炎の治療後に間質性肺炎を発症した高齢女性の一例. 第60回日本老年医学会関東甲信越地方会, 三鷹, 2014年9月20日.
45. 新井さおり, 竹下実希, 井上慎一郎, 松井敏史, 長谷川浩, 神崎恒一, 佐藤範英, 高山信之, 大西宏明:急性胃腸炎を契機に溶血性貧血を来し自然軽快した認知症高齢者女性の一例. 第60回日本老年医学会関東甲信越地方会, 三鷹, 2014年9月20日.
46. 神崎恒一:認知症の薬物療法. 第1回老人保健施設管理医師研修会, 東京, 2014年9月27日.
47. 神崎恒一:老年医学の立場から見た認知症治療. 第4回関西脳神経外科認知症研究会, 大阪, 2014年9月27日.
48. 神崎恒一:認知症にならないために. 三鷹市老人クラブ連合会健康長寿講演会, 三鷹, 2014年9月30日.
49. 大荷満生:Body compositional disorder(BCD)と栄養. 第36回日本臨床栄養学会総会, 東京, 2014年10月4日.
50. 保田直美, 望月豊, 寺島直樹, 中島久美子, 大荷満生, 秦葭哉:慢性心不全における身体組成の変化-浮腫による水分量の増加と筋肉喪失量を検討した一例. 第36回日本臨床栄養学会総会, 東京, 2014年10月4日.
51. 松井敏史:飲酒と脳神経疾患. 第4回飲酒と健康に関する講演会 公益社団法人アルコール健康医学協会, 東京, 2014年10月9日.
52. 大荷満生:健康管理概論・介護予防概論. 平成26年度健康運動指導士養成講習会, 公益社団法人健康・体力づくり事業団主催, 東京, 2014年10月11日.
53. 神崎恒一:認知症を正しく理解するために. 地域医療セミナー, 三鷹, 2014年10月12日.
54. 神崎恒一:認知症を正しく理解するために. 地域医療セミナー, 調布, 2014年10月18日.
55. 神崎恒一:認知症と骨折・転倒. 第1回日本サルコペニア・フレイル研究会研究発表会, 東京, 2014年10月19日.
56. 田中政道, 松井敏史, 小柴ひとみ, 永井久美子, 長谷川浩, 神崎恒一:もの忘れ外来通院患者におけるサルコペニアの実態調査と臨床測定値に関する検討. 第1回日本サルコペニア・フレイル研究会研究発表会, 東京, 2014年10月19日.
57. 松井敏史:生活習慣病の予防・改善について. 平成26年度宇宙航空研究開発機構公開講座, 調布, 2014年10月23日.
58. Kozaki K:Efforts to improve dementia care from primary care setting. 32nd World Congress of Internal Medicine, Korea, October 26th. 2014.
59. Hasegawa H. Short lecture for surgeons: To know the characteristics of the elderly patients. The 31st Congress of the Pan-Pacific Surgical Association. Taiwan, October 31st,-November 2nd, 2014.
60. 長谷川浩:認知症と排尿障害について. 第22回三鷹・武蔵野・小金井排尿障害勉強会, 武蔵野, 2014年11月1日.
61. 神崎恒一:認知症にやさしいコミュニティとITの活用. 認知症サミット日本後継イベント, 東京, 2014年11月5-6日.
62. 神崎恒一:「認知症患者の身体的合併症」転倒・骨折. 第33回日本認知症学会学術集会, 横浜, 2014年11月29日-12月1日.
63. 小原聡将, 長谷川浩, 田中政道, 小林義雄, 小柴ひとみ, 永井久美子, 小原史絵, 山田如子, 松井敏史, 神崎恒一:脳血管性病変を有する軽度認知機能障害と脳血管性認知症の総合機能評価における特徴. 第33回日本認知症学会学術集会, 横浜, 2014年11月29日-12月1日.
64. 中居龍平, 山田如子, 小林義雄, 長谷川浩, 神崎恒一:認知症患者の単純・連続繰り返し動作におけるfNIRSによる血流評価と転倒傾向. 第33回日本認知症学会学術集会, 横浜, 2014年11月29日-12月1日.
65. 大荷満生:食事脂肪・脂肪酸組成と炎症プロセスによるメタボリック症候群の制御. 第3 回残存リスクカンファレンス, 東京, 2015年1月15日.
66. 神崎恒一:認知症を正しく理解するために. 地域医療セミナー, 三鷹, 2015年1月18日.
67. 長谷川浩:認知症の理解と対応. 小金井市認知症講演会, 小金井, 2015年1月27日.
68. 神崎恒一:病・診・介護の連携による認知症ケアネットワーク今地区に関する研究事業. 平成26年度長寿科学研究・認知症対策総合研究事業研究成果発表会, 東京, 2015年1月30日.
69. 長谷川浩:みんなで支える認知症. ベネッセスタイルケア講演会, 東京, 2015年2月6日.
70. 神崎恒一:認知症を正しく理解するために. 地域医療セミナー, 調布, 2015年2月11日.
71. 神崎恒一:認知症患者の転倒・骨折. 高齢者 Total Care

Support セミナー, 新潟, 2015年2月12日.

72. 大荷満生:健康管理概論・介護予防概論. 平成27年度健康運動指導士養成講習会・公益社団法人健康・体力づくり事業団主催, 東京, 2015年2月12日.
73. 神崎恒一:認知症高齢者の歩行障害と転倒. 第4回ADL懇話会, 燕, 2015年2月18日.
74. 大荷満生:我が国の介護予防施策の現状と課題. 第11回上級介護予防運動スペシャリスト養成講習会, 公益財団法人日本スポーツクラブ(JSCA)主催, 東京, 2015年2月21日.
75. 神崎恒一:サルコペニア・フレイルとは?. 第14回生活習慣病フォーラム, 郡山, 2015年2月26日.
76. 大荷満生:動脈硬化の危険因子としての高トリグリセライド血症-どのように管理し治療すべきか. 第二回 Primary Care Conference-生活習慣病を考える, 東京, 2015年2月26日.
77. 神崎恒一:認知症に伴う運動器の障害. 第95回中部地区老年医学談話会, 名古屋, 2015年2月28日.
78. 神崎恒一:調布で認知症をみるために. 認知症カンファレンス in 調布, 調布, 2015年3月5日.
79. 神崎恒一:加齢に伴う心身の機能の低下(認知症, サルコペニア, フレイル)の考え方とその対処. 東大和市医師会学術講演会, 東大和, 2015年3月6日.
80. 神崎恒一:認知症診療における地域連携と診断/治療のポイント. 三鷹市医師会学術講演会, 三鷹, 2015年3月17日.
81. 三ツ間小百合, 輪千督高, 長田正史, 新井さおり, 竹下実希, 井上慎一郎, 松井敏史, 長谷川浩, 神崎恒一:失行と意識障害で発見された頭蓋内リンパ腫の2例. 第61回日本老年医学会関東甲信越地方会, 東京, 2015年3月21日.
82. 井上慎一郎, 竹下実希, 船曳茜, 高附里江, 三ツ間小百合, 輪千督高, 小原聡将, 松井敏史, 長谷川浩, 神崎恒一:脾動脈-左腎静脈シャントによる高アンモニア血症に対しB-RTOを施行した症例. 第61回日本老年医学会関東甲信越地方会, 東京, 2015年3月21日.

論文

1. 松井敏史, 横山顕¹, 松下幸生¹, 神崎恒一, 樋口進¹(¹国立病院機構久里浜医療センター):特集. 生活習慣病と認知機能アルコール. 日本臨牀72(4):749-756, 2014.
2. 長谷川浩, 神崎恒一:病診連携. 月刊糖尿病 6(3):68-72, 2014.
3. 神崎恒一, 松井敏史:高齢アルコール依存症者の断酒による骨代謝マーカーの変動. 日本骨粗鬆症学会雑誌22(2):167(369)-168(370),2014.
4. 松井敏史, 竹下実希, 井上慎一郎, 里村元, 神崎恒一:介護施設における薬物療法の優先順位をどのように考えたらよいでしょうか. Geriatric Medicine 52(8):947-953, 2014.
5. 松井敏史, 神崎恒一, 松下幸生, 樋口進:高齢者における飲酒コントロールと認知症予防. 認知神経科学 16(1):9-17,2014.
6. 神崎恒一:サルコペニアの定義と診断. 整形・災害外科57:1389-1396, 2014.
7. 長谷川浩:生活習慣病対策から認知症予防を考える・認知症診療に対するチーム医療 病診連携. 月刊糖尿病 6:68-72,2014.
8. 長谷川浩:ICU・CCUにおける循環管理. ICU・CCU患者における高齢者のもつ問題点を把握する. HeartView18:1242-1247,2014.
9. 長谷川浩:精神心理状態からみたフレイル. MEDICAMENT NEWS2180:9-11,2014.
10. 長田正史, 長谷川浩, 井上慎一郎, 守屋佑貴子, 輪千督高,

須藤紀子, 神崎恒一:急激に悪化した経過をたどり病理解剖で確定診断された肺動脈弁の孤発性感染性心内膜炎の1例. 日本老年医学会雑誌51(5):453-459, 2014.

11. 小原聡将, 長谷川浩, 船曳茜, 井上慎一郎, 杉山小百合, 宮城島慶, 八反丸美喜子, 里村元, 竹下実希, 松井敏史, 神崎恒一:炎症性疾患に続発した高齢者偽痛風症例の検討. 日本老年医学会雑誌51(6):554-559, 2014.
12. Yokoyama A, Yokoyama T, Mizukami T, Matsui T, Shiraiishi K, Kimura M, Matsushita S, Higuchi S, Maruyama K:Alcoholic Ketosis: Prevalence, Determinants, and Ketohepatitis in Japanese Alcoholic Men. Alcohol Alcohol 49:618-625,2014.
13. 横山顕, 松井敏史, 水上健, 松下幸生, 樋口進, 丸山勝也, 横山徹爾:アルコール脱水素酵素1Bの遺伝子多型はアルコール依存症男性の体重と飲酒量との関連の強力な規定因子である. アルコールと医学生物学 32:80-83,2014.
14. 横山顕, 水上健, 松井敏史, 木村充, 松下幸生, 樋口進, 丸山勝也, 横山徹爾:アルコール依存症男性のアルコール脱水素酵素1Bとアルデヒド脱水素酵素2と肝硬変, 硝石灰化, 糖尿病, 高血圧の合併との関連. アルコールと医学生物学 32:102-107,2014.
15. 神崎恒一:地域の中でのもの忘れセンターの役割. 杏林医学会雑誌46(1):41-44, 2015.
16. 大野一将¹, 平昭衣梨¹, 矢内真人¹, 永田絃子¹, 山地統¹, 浦牛原幸治¹, 小野圭一¹, 小島茂¹, 野内俊彦¹, 太田博崇¹, 武田雄一¹, 川口淳¹, 白田剛¹, 長谷川浩, 神崎恒一(¹公立昭和病院消化器内科):消化管出血を呈した胆嚢十二指腸瘻の一例. 多摩消化器シンポジウム誌 29:17-23, 2015.

著書

1. 神崎恒一:総論 フレイルと老年症候群. フレイル超高齢社会における最重要課題と予防戦略. 葛谷雅文, 雨海照祥編集. 東京, 医歯薬出版, 2014. p.23-30.
2. 松井敏史, 横山顕, 水上健, 木村充, 松下幸生, 神崎恒一, 丸山勝也, 樋口進:第2章病理・病態生理 病理・画像所見. アルコール依存症. 齋藤利和編集. 大阪, 最新医学社, 2014. p.30-43.
3. 宮城島慶, 神崎恒一:介護老人保健施設入所者の血圧管理で注意すべきことを教えてください. 荻原俊男監修, 楽木宏実編集. 東京, 先端医学社, 2014. p.198-199.
4. 宮城島慶, 須藤紀子:高齢者の誤嚥性肺炎と栄養. 最新情報をおさえる! 臨床栄養の活用ガイド. 東京, 医学書院, medicina December2014, 2014. p.2386-2390.
5. 大荷満生:栄養障害-疾病の成り立ち, 新スタンダード栄養・食物シリーズ4. 東京, 東京化学同人, 2015. p.93-100.
6. 大荷満生:運動器(骨格筋)系の疾患-疾病の成り立ち. 新スタンダード栄養・食物シリーズ4. 東京, 東京化学同人, 2015. p.252-256.
7. 大荷満生:ライフステージと栄養-高齢期. 応用栄養学・新スタンダード栄養・食物シリーズ10. 東京, 東京化学同人, 2015. p.139-152.

特許等知的財産関係, 報告書

1. 神崎恒一:大脳皮質下病変に関連する認知障害および機能障害とアミノ酸トランスポーターの関与. 科学研究費補助金(基盤研究(C))2014年度 実績報告書.
2. 神崎恒一:病・診・介護の連携による認知症ケアネットワーク構築に関する研究事業. 厚生労働科学研究費補助金(認知症対策総合研究事業)2014年度 総括研究報告書. 2012-2014年度 総合研究報告書.

講演

3. 神崎恒一:被災地の再生を考慮した在宅医療の構築に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業)2014年度 分担研究報告書.
4. 神崎恒一:高齢者在宅医療に関する多職種協働の阻害要因を克服する教育システムの構築に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金(長寿科学総合研究事業)2014年度 分担研究報告書.
5. 神崎恒一:認知症非薬物療法の普及促進による介護負担の軽減を目指した地域包括的ケア研究. 厚生労働科学研究費補助金(認知症対策総合研究事業)2014年度 分担研究報告書.
6. 神崎恒一:加齢による運動器への影響に関する研究-サルコペニアに関する包括的検討-. 厚生労働科学研究費補助金(長寿科学総合研究事業)2014年度 分担研究報告書.
7. 神崎恒一:日本人における大脳白質病変の老年症候群に及ぼす作用と危険因子の解明に関する研究. 長寿医療研究開発費 2014年度 分担研究報告書.
8. 神崎恒一:フレイルの進行に関わる要因に関する研究. 長寿医療研究開発費 2014年度 分担研究報告書.
9. 松井敏史:高齢者の薬物治療の安全性に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金(長寿科学総合研究事業)2014年度 分担研究報告書.
10. 松井敏史:アルコール依存による認知症の責任病変の同一画像解析と ALDH2遺伝子多型の関与. 科学研究費補助金(基盤研究(C))2014年度 実績報告書.
11. 長谷川浩:高齢者の認知機能低下に対する, 心機能の向上を介した新規治療概念の構築(副題: PDEⅢ阻害薬であるプレタールのもつ心拍数増加と強心作用に着目した, 高齢者の認知機能低下に対する新規予防法・治療法の開発). 長寿医療研究開発費 2014年度 分担研究報告書. 科学研究費補助金(基盤研究(C))2014年度 実績報告書.

その他

1. 神崎恒一:フォーラム認知症 in 調布「認知症と転倒・骨折の危険な関係」, NHK テレビ E テレ出演, 2014年7月12日.
2. 松井敏史:「知れば防げる認知症7大リスク」, 週刊朝日2014年8月22日号.
3. 神崎恒一:第60回日本老年医学会関東甲信越地方会主催, 三鷹, 2014年9月20日.
4. 長谷川浩:認知症について. 看護師認知症対応力向上研修, 三鷹, 2014年10月4日.
5. 長谷川浩:地域で認知症をみるには. 越谷市認知症ネットワーク懇話会, 越谷, 2014年10月8日.
6. 長谷川浩:認知症高齢者を地域で支えるには. 介護支援専門員調布市連絡協議会:平成26年度研修会, 調布, 2014年10月16日.
7. 長谷川浩:「増える高齢者の救急搬送」, 産経新聞2015年2月3日.
8. 長谷川浩:認知症について～その病状と治療～. 平成26年度調布市認知症サポーターフォローアップ講座, 調布, 2015年2月9日.
9. 長谷川浩:高齢者虐待について. 認知症高齢者虐待防止勉強会, 三鷹, 2015年2月13日.
10. 長谷川浩:認知症多職種協働とは. 武蔵野市全市地域ケア会議, 武蔵野, 2015年2月26日.
11. 長谷川浩:なぜ多職種協働が必要か. 武蔵野市認知症 DASC 研修, 武蔵野, 2015年3月18日.

1. 渡邊衡一郎:ベンゾジアゼピン系抗不安薬の使い方再考. 第14回多摩精神科医学会学術講演会, 東京, 2014年4月11日.
2. 渡邊衡一郎:当事者との新しい双方向性の治療方針決定法 Shared Decision Making (SDM) の精神科臨床における実現可能性. 第15回奈良精神科薬物療法研究会, 奈良, 2014年4月17日.
3. 渡邊衡一郎:さまざまなタイプのうつの鑑別及び適切な対応. 第13回京浜産業精神保健研究会学術講演会, 東京, 2014年4月18日.
4. 田中伸一郎:精神病理学入門. 第1回精神科臨床研究会アプリコット, 東京, 2014年5月15日.
5. 森千夏:アスペルガー障害と統合失調症を疑われた事例. 包括システムによる日本ロールシャッハ学会第20回記念大会ワークショップ, 東京, 2014年5月16日.
6. 田中伸一郎:うつ病(DSM)から抽出された「統合失調症らしさ」について. 第18回統合失調症臨床研究会, 名古屋, 2014年5月24日.
7. 渡邊衡一郎:企業のメンタルヘルス—メンタルヘルス不調の予防・対応をめぐる最近の動向—. 第3回公益財団法人精神分析武田こころの健康財団シンポジウム, 東京, 2014年6月10日.
8. 渡邊衡一郎:老年期精神障害と非定型抗精神病薬との関係—リスクとベネフィットのバランスを考慮して—. 第29回日本老年精神医学会, 東京, 2014年6月13日.
9. Kito S:Transcranial magnetic stimulation (TMS) in the treatment of depression:TMS-SPECT/EEG studies.Korean Psychosomatic Society Meeting, South Korea, June 20th, 2014.
10. Nozaki K, Kikuchi T, Watanabe K: Patient's preference for treatment of bipolar disorder: An internet survey. 29th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology, Canada, June 24th, 2014.
11. Mizuno Y, Suzuki T, Hofer A, Fleischacker WW, Uchida T, Yoshida K, Sakurai H, Watanabe K, Mimura M, Uchida H: Clinical and Biological Correlates of Resilience in Patients with Schizophrenia: A Cross - sectional Study. 29th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology, Canada, June 24th, 2014.
12. 青木裕見, 渡邊衡一郎, 古野毅彦, 小林靖, 千葉裕美, 垣田康秀, 井上真郷, 堀正士:Shared Decision Making7日間プログラムの有効性の検討:ランダム化比較試験 第一報. 第110回日本精神神経学会学術総会, 横浜, 2014年6月26日.
13. 鬼頭伸輔:国内外におけるrTMSの現況, 安全性に関する留意点. Clinical Application and Safety of rTMS in Japan and Overseas. 第110回日本精神神経学会学術総会, 横浜, 2014年6月26-28日.
14. 菊地俊暁:薬物療法を受ける患者の気持ち. 第110回日本精神神経学会総会, 横浜, 2014年6月26-28日.
15. 渡邊衡一郎:リハビリ達成を支援する薬物療法. 第110回日本精神神経学会学術総会, 横浜, 2014年6月27日.
16. 田中伸一郎, 森 千夏, 戸部有希子:統合失調症様の特徴をもつうつ病の多面的診断の方法について. 第110回日本精神神経学会学術総会, 横浜, 2014年6月28日.
17. 田中伸一郎:統合失調症様うつ病(schizophrenia-like depression)の臨床特徴について. 第2回杏林大学精神神経科臨床研究報告会, 三鷹, 2014年7月12日.

18. 田中伸一郎: 注意欠如・多動症 (ADHD) の事例検討. 第1回発達障害臨床研究会アプリッコ, 三鷹, 2014年7月16日.
19. 渡邊衡一郎: 改めて考える気分安定薬の副作用及びそのマネージメント. 第11回日本うつ病学会総会, 広島, 2014年7月18日.
20. 鬼頭伸輔: うつ病の「rTMS」特殊形状コイルを使用した deep TMSによるうつ病の治療. 第11回日本うつ病学会総会, 広島, 2014年7月18-19日.
21. 田中伸一郎, 戸部有希子, 森千夏: 大うつ病に対する多面的評価を用いた臨床診断について (1) —統合失調症様うつ病の場合—. 第11回日本うつ病学会総会, 広島, 2014年7月19日.
22. 田中伸一郎, 戸部有希子: 大うつ病に対する多面的評価を用いた臨床診断について (2) —自閉症スペクトラム関連性うつ病の場合—. 第11回日本うつ病学会総会, 広島, 2014年7月18日.
23. 田中伸一郎, 戸部有希子: 大うつ病に対する多面的評価を用いた臨床診断について (3) —精神病性うつ病の場合—. 第11回日本うつ病学会総会, 広島, 2014年7月19日.
24. 鬼頭伸輔: 経頭蓋磁気刺激による治療抵抗性うつ病の治療: How to stimulate. 第5回 Stimulation Therapy 研究会, 東京, 2014年8月2-3日.
25. Kito S, Pascual-Marqui RD, Hasegawa T, Koga Y: Transcranial magnetic stimulation modulates resting EEG functional connectivity in depression: a TMS-EEG study. XVI World Congress of Psychiatry, Spain, September 14th-18th, 2014.
26. 鬼頭伸輔: 反復経頭蓋磁気刺激 (rTMS) によるうつ病の治療と機能的結合性の変化: rTMS-EEG 研究. 第36回日本生物学的精神医学会, 奈良, 2014年9月29日-10月1日.
27. 長谷川崇, 中島亨: REM 睡眠時行動障害に対し催眠暗示が有効であった可能性がある1例. 第30回日本催眠学会学術大会, 東京, 2014年10月4日.
28. 森千夏: 催眠感受性に関わるパーソナリティ特性について —リラクゼーションの効果に注目して—. 第30回日本催眠学会学術大会, 東京, 2014年10月4日.
29. 岡一太郎, 田中伸一郎, 日野原圭: 統合失調症の精神病理. 第37回日本精神病理学会, 東京, 2014年10月4-5日.
30. 田中伸一郎: 統合失調症 (DSM) の診断基準を満たさないが, それでも統合失調症であるような一群について. 第37回日本精神病理学会, 東京, 2014年10月5日.
31. 鬼頭伸輔: 経頭蓋磁気刺激概論. 磁気刺激によるうつ病治療の実際. 第1回磁気刺激療法研究会, 東京, 2014年10月12日.
32. 渡邊衡一郎: 精神疾患のリハビリ回復に向けた治療アプローチにおけるレジリエンス概念の重要性. 第3回日本ポジティブサイコロジー医学会学術集会, 東京, 2014年10月26日.
33. Kito S: Transcranial magnetic stimulation (TMS) in the treatment of depression. Brain Conference 2014. Korean Society for Brain and Neural Science (KSBNS), the 3rd Congress of Asian Society for Neuropathology (CASN), and Korean Society for Neurodegenerative Disease (KSND), South Korea, November 6th-8th 2014.
34. 田中伸一郎: うつ病 (DSM) 診療の基礎から応用まで. 吉富・田辺三菱勉強会, 三鷹, 2014年11月7日.
35. 平野祥子, 戸部有希子, 田中伸一郎, 中島亨, 渡邊衡一郎: ステロイドの乱用・依存により様々な精神神経症状を呈した1例. 第102回東京精神医学会学術集会, 東京, 2014年11月8日.
36. 長谷川崇, 鬼頭伸輔, 古賀良彦: 治療抵抗性うつ病への左前頭前野高頻度 TMS の有効性及び安全性に関する予備的研究: わが国への導入を目指して. 第25回磁気刺激法の臨床応用と安全性に関する研究会, 福岡, 2014年11月19日.
37. 鬼頭伸輔: 経頭蓋磁気刺激の現状, 機序, 展望. 第44回日本臨床神経生理学会学術大会, 福岡, 2014年11月19-21日.
38. 渡邊衡一郎: うつ病治療における『真の recovery』達成のために抗うつ薬が出来ること. 第24回日本臨床精神神経薬理学会・第44回日本神経精神薬理学会, 名古屋, 2014年11月20日.
39. 菊地俊暁: レギュラトリーサイエンス (指定発言). 第24回日本臨床精神神経薬理学会, 名古屋, 2014年11月20-22日.
40. 渡邊衡一郎: Shared Decision Making (SDM) の意義と実践. 第24回日本臨床精神神経薬理学会・第44回日本神経精神薬理学会, 名古屋, 2014年11月21日.
41. 渡邊衡一郎: 精神科治療における服薬アドヒアランスの問題をどのように理解するか. 第24回日本臨床精神神経薬理学会・第44回日本神経精神薬理学会, 名古屋, 2014年11月22日.
42. 渡邊衡一郎: うつを正しく診断し適切に対処するには. 慶應義塾大学薬学部公開講座, 東京, 2014年11月29日.
43. 渡邊衡一郎: 精神科治療における服薬アドヒアランスの問題をどのように理解するか. 第35回日本臨床薬理学会学術総会, 松山, 2014年12月4日.
44. 鬼頭伸輔: 経頭蓋磁気刺激 (TMS) によるうつ病のニューロモデュレーション. 第44回ヒューマンサイエンス総合研究セミナー, 東京, 2014年12月4日.
45. 渡邊衡一郎: 不安症治療における当事者の好みや印象を活かした薬剤選択. 第7回日本不安症学会学術大会, 広島, 2015年2月14日.
46. 渡邊衡一郎: 当事者との新しい双方向性の治療方針決定法 Shared Decision Making (SDM) の精神科臨床における実現可能性. PPST 研究会中国ブロック講演会, 岡山, 2015年2月20日.
47. 青木裕見, 古野毅彦, 小林靖, 千葉裕美, 垣田康秀, 渡邊衡一郎, 井上真郷: 注意欠如・多動症を持つ大学生の特徴と学内精神科での対応について. 第34回日本社会精神医学会, 富山, 2015年3月5日.
48. 田中伸一郎: DSM-5 の診断基準を満たさないが, それでも統合失調症であるような患者の診断方法について. 自治医科大学精神医学教室集談会, 宇都宮, 2015年3月10日.
49. 田中伸一郎: 患者さんはこんなときどうしてほしいか? —支持しながら指示する精神療法をめざして—. 第5回精神科臨床研究会アプリッコ, 東京, 2015年3月26日.

論文

1. Ishida T¹, Suzuki T², Watanabe K, Sakurai H², Uchida H³, Mimura M³ (¹National Hospital Organization Chiba Medical Center, ²Inokashira Hospital, ³Keio University): Prophylactic use of heparin for deep vein thrombosis in restrained psychiatric patients: a chart review. Gen Hosp Psychiatry 36(6):690-693, 2014.
2. Takeuchi H¹, Suzuki T², Remington G¹, Watanabe K, Mimura M³, Uchida H³ (¹University of Toronto, ²Inokashira Hospital, ³Keio University): Lack of effect of risperidone or olanzapine dose reduction on metabolic parameters, prolactin, and corrected QT interval in stable patients with schizophrenia. J Clin Psychopharmacol 34(4): 517-520, 2014.
3. Takeuchi H¹, Suzuki T², Remington G¹, Watanabe K, Mimura M³, Uchida H³ (¹University of Toronto, ²Inokashira Hospital, ³Keio University): Lack of effect of risperidone or olanzapine dose reduction on subjective experiences in stable patients with schizophrenia. Psychiatry Res 218(1-2):244-246, 2014.

4. Kumazaki H¹, Watanabe K, Imasaka Y², Iwata K¹, Tomoda A¹, Mimura M³ (¹Fukui University, ²Oizumi Hospital, ³Keio University) : Risperidone – Associated Urinary Incontinence in Patients With Autistic Disorder With Mental Retardation. J Clin Psychopharmacol 34(5):624–626, 2014.
5. Takeuchi H¹, Suzuki T², Bies R R³, Remington G¹, Watanabe K, Mimura M⁴, Uchida H⁴ (¹University of Toronto, ²Inokashira Hospital, ³University of Pittsburgh, ⁴Keio University) :Dose reduction of risperidone and olanzapine and estimated dopamine D₂ receptor occupancy in stable patients with schizophrenia: findings from an open-label, randomized, controlled study. J Clin Psychiatry 75(11):1209–1214, 2014.
6. 渡邊 衡一郎, 菊地俊暁:改めて注目すべき向精神薬の副作用 Update—気分安定薬, 抗うつ薬, 抗精神病薬に焦点をあてて—. 精神誌 116(4):323–331, 2014.
7. 渡邊 衡一郎:国内外のうつ病治療ガイドラインにみる薬物治療の立ち位置,そしてその適切な使用方法とは. カレントセラピー 32(6):29–35, 2014.
8. 渡邊 衡一郎:境界例に対する薬物療法. 精神 25(1): 22–27, 2014.
9. 渡邊 衡一郎:双極うつ病における不安の併存に対し, 薬物療法ではどう取り組めるか. 臨精薬理 17(8):1107–1112, 2014.
10. 渡邊 衡一郎, 竹内啓善¹(トロント大):各種向精神薬の主たる特徴とその問題点. 日医師会誌 143(7):1441–1451, 2014.
11. 渡邊 衡一郎:抗不安薬, 睡眠薬をいかに減らしていくか. メンタルヘルスマガジン こころの元気+ 8(11):20–22, 2014.
12. 吉田和生¹, 渡邊 衡一郎(¹慶應義塾大):特集 I 新規抗うつ薬の特徴と使用法 ミルタザピン. 精神 25(5):498–504, 2014.
13. 日比慎太郎¹, 渡邊 衡一郎(¹東京海病院):【向精神薬の副作用と対策 Update】抗うつ薬による中断症候群(解説/特集). 臨精医 43(11):1661–1666, 2014.
14. 青木裕見¹, 渡邊 衡一郎(¹早稲田大):精神科治療における双方向性の意思決定 shared decision making の実現可能性. 精神科治療 30(1):99–104, 2015.
15. Kito S, Pascual-Marqui RD¹, Hasegawa T, Koga Y (University of Zurich, Kansai Medical University) : High-frequency left prefrontal transcranial magnetic stimulation modulates resting EEG functional connectivity for gamma band between the left dorsolateral prefrontal cortex and precuneus in depression. Brain Stimul 7:145–146, 2014.
16. 鬼頭伸輔:経頭蓋磁気刺激療法—治療器としての我が国への導入を目指して. カレントセラピー 32:66–70, 2014.
17. 鬼頭伸輔:うつ病の Brain Stimulation 療法:経頭蓋磁気刺激(TMS). 最新医 69:1732–1734, 2014.
18. 鬼頭伸輔:経頭蓋磁気刺激による治療抵抗性うつ病の治療と機能的結合性:TMS-EEG 研究. 日薬物脳波会誌 15:15–19, 2014.
19. 菊地俊暁:治療関係と薬物療法—薬物療法を受ける患者の気持ちとは—. 精神誌116(9) :752–757, 2014.
20. 菊地俊暁, 今中雄一¹, 堀越勝², 宗未来³, 牛島洋景⁴(¹京都大, ²国立精神神経医療研究センター, ³英国王立精神研究所, ⁴国立国際医療研究センター国府台病院):精神療法のクオリティコントロールについて. 認知療法研究7(2) :159–167, 2014.
21. Nakagawa A¹, Sado M¹, Mitsuda D², Fujisawa D¹, Kikuchi T, Abe T¹, Sato Y¹, Iwashita S², Mimura M¹, Ono Y³ (¹Keio University, ²Sakuragaoka Memorial Hospital, ³National Center of Neurology and Psychiatry) : Effectiveness of cognitive behavioural therapy augmentation in major depression treatment (ECAM study):

study protocol for a randomized clinical trial. BMJ Open. 4(10):e006359.doi:10.1136/bmjopen-2014-006359.

22. 田中伸一郎:患者の心の動き(転移)から自分の心理状態(逆転移)に気づく. 治療増刊号96:736–737, 2014.

著書

1. 鈴木利人, 渡邊 衡一郎, 松田公子, 林昌洋編:精神科医×薬剤師クロストークから読み解く精神科薬物療法—多職種連携から生まれる新しいコミュニケーションの提案—. 東京, 南山堂, 2014.
2. 八木剛平, 渡邊 衡一郎編:レジリアンス症候学・脳科学・治療学. 東京, 金原出版, 2014.
3. 渡邊 衡一郎, 竹内啓善:なぜD₂受容体遮断薬は抗精神病薬となりうるのか? POWER MOOK 精神医学の基盤. 石郷岡純, 加藤敏編, 東京, 学術出版, 2015. p.196–202.
4. 菊地俊暁うつ病. 精神科医×薬剤師クロストークから読み解く精神科薬物療法. 鈴木利人ら編, 東京, 南山堂, 2014. p.131–135, p.145–150.
5. 菊地俊暁:抗うつ薬とレジリアンスについて. レジリアンス—症候学・脳科学・治療学. 八木剛平, 渡邊 衡一郎編. 東京, 金原出版, 2014. p.170–180.

その他

1. 渡邊 衡一郎:「きょうの健康」うつ病が治らないあなたに, NHK E テレ放送, 2014年9月29日–10月2日.
2. 鬼頭伸輔:特殊形状のコイルによる deep TMS で深部脳領域への刺激が可能に. Medical Tribune, 2014年9月4日, 12頁.
3. 鬼頭伸輔:うつ病治療に新たな可能性をもたらす反復経頭蓋磁気刺激(rTMS)への期待. 医学書院, 週刊医学界新聞, 2014年10月27日, 第3098号4面.
4. 菊地俊暁:講演:NHK 秋田放送局主催 NHK ハートフルフォーラム in 秋田市「こころの元気をまもる」, 秋田市, 2014年11月9日.
5. 田中伸一郎:書評・神田橋條治著「医学部講義」. 精神経誌 116(4), 350, 2014.
6. 田中伸一郎:書評・津田均著「気分障害は, いま—うつと躁を精神病理学から問い直す」. 精神経誌117(3), 2015. (in print).
7. Shekhar S, 瀬戸屋雄太郎, 武田雅俊, 神庭重信, 張賢徳, 大塚耕太郎, 河西千秋, 高橋祥友, 大森哲郎, 田中伸一郎:精神神経学会の座談会の企画・編集 日本の精神医学・医療の現状と自殺対策—WHO 世界自殺レポート会議において—. 精神経誌, 116(11) :897–906, 2014.

小児科学教室

講演

1. 中村由紀子, 島崎真希子, 宮田世羽, 小松祐美子, 細井健一郎, 保科弘明, 保崎明, 野村優子, 楊國昌:大学病院小児科における在宅医療ケアを必要とする児の検討. 第117回日本小児科学会総会, 名古屋, 2014年4月12日.
2. 木内善太郎, 伊藤雄伍, 西堀由紀野, 楊國昌:胸腺 T 細胞アポトーシスにおける glucocorticoid induced transcript1 の役割. 第117回日本小児科学会学術集会, 名古屋, 2014年4月11–13日.
3. 楊國昌:プライマリ・ケアにおける小児腎疾患. 第18回稲城市小児臨床研究会, 稲城, 2014年4月25日.
4. 楊國昌:プライマリ・ケアにおける小児腎疾患. 武蔵野医師会講演会. 武蔵野, 2014年5月28日.
5. 宮田世羽, 池上弓子, 中野瑛子, 松岡雄一郎, 島崎真希子,

小松祐美子, 中村由紀子, 岡明: 当院におけるレベチラセタムの使用経験. 第56回日本小児神経学会総会, 浜松, 2014年5月30日.

6. 中野瑛子, 池上弓子, 松岡雄一郎, 島崎真希子, 宮田世羽, 小松祐美子, 中村由紀子, 岡明: タクロリムスが有効であったステロイド依存性重症筋無力症の女児例. 第56回日本小児神経学会学術集会, 浜松, 2014年5月30日.
7. 高木永, 木内善太郎, 伊藤雄伍, 倉山亮太, 楊國昌: 非典型的発症の溶連菌感染後急性糸球体腎炎の3例. 第49回日本小児腎臓病学会学術集会, 秋田, 2014年6月5-7日.
8. 木内善太郎, 西堀由紀野, 木村徹, 福富俊之, 竹松弘, 楊國昌: 糖質ステロイドの新規抗 T 細胞作用機序の同定 - Glucocorticoid induced transcript1 (GLCCI1) のタンパク機能解析をもとに -. 第49回日本小児腎臓病学会学術集会, 秋田, 2014年6月5-7日.
9. 羽田伊知郎, 伊藤紀子, 伊藤雄伍, 倉山亮太, 福原大介, 西堀由紀野, 清水章, 長田道夫, 楊國昌: 経時的腎生検で異なったバリエーションを呈した FSGS の1例. 第49回日本小児腎臓病学会学術集会, 秋田, 2014年6月5-7日.
10. 田中佐門, 保崎明, 楊國昌: 最近経験した異物誤飲の2例. 第110回多摩小児科臨床懇話会, 三鷹, 2014年6月20日.
11. 楊國昌: 小児のプライマリケアにおける腎尿路疾患の見方・考え方. 第4回多摩小児プライマリケア研究会, 東京, 2014年7月19日.
12. 楊國昌: プライマリ・ケアにおける小児腎・尿路疾患の診断のすすめかた. 第105回日本小児科学会秋田地方会, 秋田, 2014年7月26日.
13. 鴫田雅俊, 細井健一郎: 当院における Late Preterm 児の検討. 第3回多摩周産期新生児フォーラム, 立川, 2014年9月30日.
14. 楊國昌: プライマリ・ケアにおける小児腎・尿路疾患の診断のすすめかた. 杉並医師会, 東京, 2014年10月7日.
15. 楊國昌: ネフローゼにおけるステロイド感受性機序と GLCCI1 分子機能のクロストーク. 多摩小児腎セミナー, 東京, 2014年10月7日.
16. 大泉亜友美, 高木永, 楊國昌: 急速に進行し呼吸障害を来した扁桃周囲膿瘍の乳児例. 第111回多摩小児科臨床懇話会, 三鷹, 2014年10月17日.
17. 牧野篤司, 山本明日香, 楊國昌: CAP-RAST が陰性化し, 除去解除後にアナフィラキシーを生じたカカオアレルギーの一例. 第51回日本小児アレルギー学会, 四日市, 2014年11月8日.
18. 田中佐門, 保崎明, 楊國昌: コイン型リチウム電池誤飲の1例. 第43回杏林医学会, 三鷹, 2014年11月15日.
19. 安藤理恵, 弦間友紀, 宮澤永尚, 吉野浩, 別所文雄, 楊國昌: Sulfamethoxazole-trimethoprim(ST)合剤により血糖低下を来した ALL の一例. 第56回日本小児血液・がん学会学術集会, 2014年11月28日.
20. 吉野浩: 外来で遭遇する小児がんの症状-小児がん診断ハンドブックを参考に-. 第112回多摩小児科臨床懇話会, 三鷹, 2015年2月6日.
21. 小谷昌史, 杉本雅子, 大越陽一, 宮田世羽, 弦間友紀, 吉野浩: 片側の視力低下から診断された神経線維腫症 I 型に伴う視神経膠腫の一例. 第112回多摩小児科臨床懇話会, 三鷹, 2015年2月6日.
22. 田中佐門, 松岡雄一郎, 高木永, 保崎明, 吉野浩, 楊國昌: 深頸部感染症の2乳児例. 第22回多摩小児感染・免疫研究会, 武蔵野, 2015年2月28日.
23. 鴫田雅俊, 大越陽一, 尾戸真由, 小林智恵, 保崎明: 吐血と顔

色不良を主訴に搬送された心原性ショックの女児例. 第19回東京循環器小児科治療 Arora, 東京, 2015年3月7日.

24. 安藤理恵, 那須ゆかり, 高木永, 吉野浩, 楊國昌, 井原哲: 大後頭孔狭窄による四肢不全麻痺, 呼吸障害が急速に進行した軟骨無形成症の1例. 第617回日本小児科学会東京都地方会講和会, 2015年3月14日.

論文

1. Miyai T, Aya K, akaiwa M, Yan K, Sado Y, Tanaka H, Morishima T: Functional analysis of NPHS1 mutations in Japanese patients. *Histol Histopathol* 29:279-284, 2014.
2. Fumoto S, Hosoi K, Ohnishi H, Hoshina H, Yan K, Saji H, Oka A: Chimerism of buccal membrane cells in a monochorionic dizygotic twin. *Pediatrics* 133(4):e1097-100. doi: 10.1542.(2014).
3. Kimura T, Takahashi M, Yan K, Sakurai H: Expression of SLC2A9 Isoforms in the Kidney and Their Localization in Polarized Epithelial Cells. *PLoS One*. 9(1): e84996. doi: 10.1371 / journal.pone.0084996. (2014).
4. Oka M, Nozu K, Kaito H, Fu XJ, Nakanishi K, Hashimura Y, Morisada N, Yan K, Matsuo M, Yoshikawa N, Vorechovsky I, Iijima K. Natural history of genetically proven autosomal recessive Alport syndrome. *Pediatr Nephrol*. 29(9): 1535-1544, 2014.
5. 保科弘明, 大越陽一, 岡明: 神経原性先天性多関節拘縮を呈した一絨毛一羊膜性双胎の1例. *日本未熟児新生児学会雑誌* 26(2):315-319, 2014.
6. 中村由紀子, 島崎真希子, 小松祐美子, 三輪真美, 別所文雄, 岡明: 注意欠陥／多動性障害(AD/HD)を合併した前頭前野巨大脳動静脈奇形の1例. *脳と発達* 46(5):359-362, 2014.
7. 宮田世羽, 島崎真希子, 小松祐美子, 中村由紀子, 岡明: 非けいれん性てんかん重積状態を初発症状とした前頭葉てんかんの1小児例. *脳と発達* 46(4):301-306, 2014.

その他

学会・研究会主催

1. 第110回多摩小児科臨床懇話会: 三鷹, 2014年6月20日.
2. 第12回三鷹小児内分泌セミナー: 三鷹, 2014年7月4日.
3. 第111回多摩小児科臨床懇話会: 三鷹, 2014年10月17日.
4. 第13回三鷹小児内分泌セミナー: 三鷹, 2015年1月30日.
5. 第112回多摩小児科臨床懇話会: 三鷹, 2015年2月6日.
6. 第22回多摩小児感染・免疫研究会: 武蔵野, 2015年2月28日.

外科学教室 (消化器・一般外科)

講演

1. 吉敷智和, 正木忠彦, 小嶋幸一郎, 高安甲平, 渡邊武志, 松岡弘芳, 杉山政則: CurB が得られた Stage4症例の期間別の再発, 予後に関する検討. 大腸癌術後フォローアップ研究会, 東京, 2014年1月30日.
2. Kojima K, Masaki T, Matsuoka H, Takayasu K, Kishiki T, Suzuki Y, Abe N, Mori N, Sugiyama M: Short term results of our treatment strategy for perforated colonic diverticulitis. 25th Jagelman/35th Turnbull International Colorectal Disease Symposium, U.S.A. February 11th-14th, 2014.
3. 吉敷智和, 正木忠彦, 松岡弘芳, 小林敬明, 小嶋幸一郎, 高安甲平, 古瀬純司, 杉山政則, 跡見裕: 大腸癌の抗 EGFR 抗体薬治療における新しい効果予測因子の検討. 第8回多摩消化器がん化学療法シンポジウム, 東京, 2014年2月18日.

4. 小嶋幸一郎, 正木忠彦, 高安甲平, 吉敷智和, 鈴木裕, 松岡弘芳, 阿部展次, 森俊幸, 杉山政則: 左側型穿孔性大腸憩室炎に対する治療の検討. 第50回日本腹部救急医学会総会, 東京, 2014年3月6-7日.
5. 鈴木裕, 中里徹矢, 横山政明, 松木亮太, 阿部展次, 森俊幸, 正木忠彦, 杉山政則: 重症急性膵炎における血液浄化療法の有用性について. 第50回日本腹部救急医学会, 東京, 2014年3月7日.
6. 竹内弘久, 阿部展次, 大木亜津子, 杉山政則: 胃 ESD 中に発生した空気塞栓症の1例. 第50回日本腹部救急医学会総会, 東京, 2014年3月7日.
7. 麻生喜祥, 下位洋史, 長尾美智子, 百名祐介, 大倉史典, 岡田夢, 伊藤雄二: S 状結腸捻転内視鏡的整復後に発症した腸間膜血腫の一例. 第832回外科集談会, 東京, 2014年3月8日.
8. 吉本恵理, 大木亜津子, 阿部展次, 竹内弘久, 橋本佳和, 得津敬之, 長尾玄, 正木忠彦, 森俊幸, 杉山政則: 胃 ESD 後大量出血の一例. 第832回外科集談会, 東京, 2014年3月8日.
9. 阿部展次, 竹内弘久, 大木亜津子, 橋本佳和, 長尾玄, 森俊幸, 杉山政則: 胃粘膜下腫瘍に対する内視鏡的筋層剥離術と腹腔鏡補助下/非補助下内視鏡的全層切除術の成績. 第86回日本胃癌学会総会, 横浜, 2014年3月20-22日.
10. 橋本佳和, 阿部展次, 得津敬之, 大木亜津子, 竹内弘久, 正木忠彦, 森俊幸, 杉山政則, 望月眞, 大倉康男: 進行胃癌術後10年目に Krukenberg 腫瘍および腹膜播種再発を来した1例. 第86回日本胃癌学会総会, 横浜, 2014年3月21日.
11. 正木忠彦: 消化器がん治療の進歩. 平成25年度連携4大学合同市民公開講座シンポジウム, 東京, 2014年3月29日.
12. 横山政明, 鈴木裕, 中里徹矢, 杉山政則: 術前診断に難渋した膵嚢胞性疾患の一例. 多摩肝胆膵クラブ, 東京, 2014年3月8日.
13. 阿部展次, 橋本佳和, 大木亜津子, 竹内弘久, 長尾玄, 正木忠彦, 森俊幸, 杉山政則: 非乳頭部表在性十二指腸腫瘍に対する内視鏡的切除・腹腔鏡内視鏡合同手術・開腹手術の成績. 第114回日本外科学会定期学術集会, 京都, 2014年4月3日.
14. 鈴木裕, 森俊幸, 横山政明, 中里徹矢, 松木亮太, 阿部展次, 正木忠彦, 杉山政則: 全国多施設調査からみた肝内結石症診療の現状. 第114回日本外科学会定期学術集会, 京都, 2014年4月3日.
15. 竹内弘久, 阿部展次, 大木亜津子, 水野英彰, 正木忠彦, 森俊幸, 杉山政則: Reduced port surgery における新しい方向性-ショートタイプ軟性内視鏡補助下单孔式手術-. 第114回日本外科学会定期学術集会, 京都, 2014年4月3日.
16. 中里徹矢, 鈴木裕, 横山政明, 阿部展次, 正木忠彦, 森俊幸, 杉山政則: IPMN における reprim 遺伝子メチル化の検討. 第114回日本外科学会定期学術集会, 京都, 2014年4月3-5日.
17. 吉敷智和, 正木忠彦, 松岡弘芳, 小嶋幸一郎, 高安甲平, 鈴木裕, 阿部展次, 森俊幸, 杉山政則: ESMO ガイドラインを利用した大腸癌 Stage IV 患者の予後予測因子の検討. 日本外科学会, 京都, 2014年4月3-5日.
18. 横山政明, 森俊幸, 鈴木裕, 中里徹矢, 松岡弘芳, 阿部展次, 正木忠彦, 杉山政則: 肝内胆管癌偽陽性症例の調査研究. 第114回日本外科学会定期学術集会, 京都, 2014年4月3-5日.
19. 大木亜津子, 阿部展次, 竹内弘久, 海野みちる, 大倉康男, 杉山政則: 胃癌における胃内洗浄液細胞診の検討. 第114回日本外科学会総会, 京都, 2014年4月5日.
20. Sugiyama M: Technical refinement of pancreatic surgery. Korea Pancreas Surgery Club. Korea Japan Pancreas Surgery Joint Symposium, Korea, April 12th, 2014.
21. Masaki T : Treatment strategy for intra-pelvic recurrence of rectal cancer. Japan-Korea Joint Symposium, 47th KSCP meeting, Korea, April 12th, 2014.
22. Sugiyama M: Technical refinement of pancreatic surgery. 5th International Conference of Asian Oceanic Pancreas Association, India, April 20th, 2014.
23. 中里徹矢, 鈴木裕, 横山政明, 阿部展次, 正木忠彦, 森俊幸, 杉山政則: IPMN における reprim 遺伝子メチル化異常と発癌の関連. 第100回日本消化器病学会総会, 東京, 2014年4月23-26日.
24. Yokoyama M, Ohnishi H, Ohtsuka K, Ookura Y, Furuse J, Matsuoka H, Watanabe T, Sugiyama M : Investigation of biological characteristics of biliary tract cancers to establish a novel molecular-targeted therapy. 第100回日本消化器病学会総会国際フォーラム, 東京, 2014年4月23-26日.
25. Mori T: Plenary Lecture II Technical Qualification system of JSES KSELS. 34th Annual Meeting, Korea, April 24th, 2014.
26. 阿部展次: 非治療切除に終わった ESD 後の対応: 超高齢者ではどうする?. 消化管疾患研究会熊本, 熊本, 2014年4月25日.
27. 大木亜津子, 阿部展次, 竹内弘久, 海野みちる, 大倉康男, 杉山政則: 胃癌における胃内洗浄液細胞診の検討-遊離癌細胞は検出されるのか?- 第100回日本消化器病学会総会, 東京, 2014年4月26日.
28. 吉敷智和, 正木忠彦, 松岡弘芳, 小嶋幸一郎, 高安甲平, 渡邊武志, 鈴木裕, 阿部展次, 森俊幸, 杉山政則: 直腸癌 Stage IV 症例の予後予測因子についての検討. 第100回日本消化器病学会総会, 東京, 2014年4月26日.
29. 阿部展次, 竹内弘久, 杉山政則: 内腔からの内視鏡処置を最優先させる胃粘膜下腫瘍に対する摘出戦略-内視鏡的筋層剥離術, 内視鏡的全層切除術, 腹腔鏡補助下内視鏡的胃全層切除術-. 第87回日本消化器内視鏡学会総会, 福岡, 2014年5月15日.
30. 竹内弘久, 小柏靖直, 阿部展次, 大木亜津子, 森俊幸, 甲能直幸, 杉山政則: 中・下咽頭表在癌に対する経口的内視鏡切除の有用性について. 第87回日本消化器内視鏡学会総会, 京都, 2014年5月15日.
31. 橋本佳和, 阿部展次, 鈴木裕, 得津敬之, 横山政明, 中里徹矢, 大木亜津子, 竹内弘久, 長尾玄, 正木忠彦, 森俊幸, 杉山政則: ESD が追加治療としての LADG に及ぼす影響に関する検討. 第87回日本消化器内視鏡学会総会, 福岡, 2014年5月15日.
32. 竹内弘久, 阿部展次, 大木亜津子, 杉山政則: 超高齢者(85歳以上)早期胃癌に対する ESD は妥当か?. 第87回日本消化器内視鏡学会総会, 京都, 2014年5月16日.
33. 吉本恵理, 大木亜津子, 阿部展次, 竹内弘久, 橋本佳和, 得津敬之, 長尾玄, 森俊幸, 正木忠彦, 杉山政則: 胃 ESD 後第11病日に大量後出血を来した一例. 第87回日本消化器内視鏡学会総会, 福岡, 2014年5月16日.
34. 杉山政則, 鈴木裕, 中里徹矢, 横山政明, 阿部展次, 正木忠彦, 森俊幸: 腸回転解除術を用いた膵頭十二指腸切除術. 第68回手術手技研究会, 東京, 2014年5月17日.
35. 大木亜津子, 阿部展次, 吉本恵理, 得津敬之, 橋本佳和, 竹内弘久, 正木忠彦, 森俊幸, 杉山政則: 内視鏡的切除適応外早期胃癌に対する姑息的 ESD の意義. 第87回日本消化器内視鏡学会総会, 福岡, 2014年5月16日.

36. 杉山政則, 鈴木裕, 中里徹矢, 横山政明, 阿部展次, 正木忠彦, 森俊幸: 腸回転解除術を用いた臍頭十二指腸切除術. 第68回手術手技研究会, 東京, 2014年5月17日.
37. 鈴木裕, 中里徹矢, 横山政明, 松木亮太, 阿部展次, 森俊幸, 正木忠彦, 杉山政則: スコアリングシステムを用いた膵 IPMN の治療戦略—手術適応と術式, 至適郭清範囲について—. 第26回日本肝胆膵外科学会学術集会, 和歌山, 2014年6月11日.
38. 中里徹矢, 鈴木裕, 横山政明, 阿部展次, 正木忠彦, 森俊幸, 杉山政則: 妊娠出産を経て増大した巨大肝血管腫の一切除例. 第26回日本肝胆膵外科学会学術集会, 和歌山, 2014年6月11-13日.
39. Yokoyama M, Mori T, Suzuki Y, Nakazato T, Sugiyama M: Analysis of false-positive intrahepatic cholangiocarcinoma. 第26回日本肝胆膵外科学会学術集会, 和歌山, 2014年6月11-13日.
40. 鈴木裕, 中里徹矢, 横山政明, 長尾玄, 高橋信一, 杉山政則: 急性膵炎重症化における内臓脂肪の影響. 第31回日本胆膵病態・生理研究会, 東京, 2014年6月14日.
41. 大木亜津子, 阿部展次, 竹内弘久, 海野みちる, 大倉康男, 杉山政則: 胃癌における胃内洗浄液細胞診の検討. 第98回消化器内視鏡学会関東支部例会, 東京, 2014年6月15日.
42. 松岡弘芳, 正木忠彦, 小嶋幸一郎, 吉敷智和, 高安甲平, 阿部展次, 森俊幸, 杉山政則: 保険診療における問題点: 消化器疾患について. 第39回日本外科系連合学会学術集会, 東京, 2014年6月20日.
43. 杉山政則: 膵嚢胞性腫瘍の診断と治療. 日本消化器病学会関東支部第24回教育講演会, 東京, 2014年6月22日.
44. Abe N: Single-incision multiport laparoendoscopic surgery using a newly - developed short - type flexible endoscope. NOTES symposium, Korea, July 5th, 2014.
45. 中里徹矢, 鈴木裕, 横山政明, 阿部展次, 正木忠彦, 森俊幸, 杉山政則: IPMN 組織異型度と represso 遺伝子の関連. 第45回日本膵臓学会大会, 北九州, 2014年7月11-12日.
46. 横山政明, 鈴木裕, 中里徹矢, 阿部展次, 森俊幸, 杉山政則: 膵管ホルダー, 及び mucosa squeeze-out 法を用いた膵管空腸粘膜吻合. 第45回日本膵臓学会大会, 小倉, 2014年7月11-12日.
47. 小嶋幸一郎, 正木忠彦, 渡邊武志, 高安甲平, 吉敷智和, 鈴木裕, 松岡弘芳, 阿部展次, 森俊幸, 杉山政則: 穿孔性大腸憩室炎に対する新しい治療指針における短期的治療成績の検討. 第69回日本消化器外科学会総会, 郡山, 2014年7月16-18日.
48. 中里徹矢, 鈴木裕, 横山政明, 阿部展次, 正木忠彦, 森俊幸, 杉山政則: 手技・器械の改良による膵管空腸粘膜吻合の標準化. 第69回日本消化器外科学会総会, 郡山, 2014年7月16-18日.
49. 横山政明, 森俊幸, 鈴木裕, 中里徹矢, 松岡弘芳, 阿部展次, 正木忠彦, 杉山政則: 肝内胆管癌偽陽性症例の調査研究. 第69回日本消化器外科学会総会, 福島, 2014年7月16-18日.
50. 阿部展次, 竹内弘久, 橋本佳和, 大木亜津子, 長尾玄, 森俊幸, 杉山政則: Beyond ESD—胃粘膜下腫瘍に対する筋層以深での内視鏡的切除. 第69回日本消化器外科学会総会, 郡山, 2014年7月17日.
51. 竹内弘久, 森俊幸, 小嶋幸一郎, 阿部展次, 正木忠彦, 杉山政則: 前方アプローチ(メッシュ使用)法後の再発鼠径部ヘルニアに対する検討. 第69回日本消化器外科学会総会, 郡山, 2014年7月17日.
52. 橋本佳和, 森俊幸, 鈴木裕, 得津敬之, 大木亜津子, 竹内弘久, 長尾玄, 阿部展次, 正木忠彦, 杉山政則: 当院における Reduced Port Surgery Nissen 噴門形成術の実際と工夫. 第69回日本消化器外科学会総会, 郡山, 2014年7月17日.
53. 吉敷智和, 正木忠彦, 小嶋幸一郎, 高安甲平, 渡邊武志, 鈴木裕, 松岡弘芳, 阿部展次, 森俊幸, 杉山政則: 大腸癌の抗 EGFR 抗体薬治療における, さらなる個別化治療を目指して. 日本消化器外科学会総会, 郡山, 2014年7月18日.
54. 鈴木裕, 中里徹矢, 横山政明, 松木亮太, 阿部展次, 森俊幸, 正木忠彦, 杉山政則: 予測式による膵 IPMN の治療戦略—手術適応と術式選択, 至適郭清範囲—. 第69回日本消化器外科学会総会, 福島, 2014年7月18日.
55. 松岡弘芳, 正木忠彦, 小嶋幸一郎, 小嶋幸一郎, 吉敷智和, 高安甲平, 小林敬明, 阿部展次, 森俊幸, 杉山政則: 直腸癌肛門括約筋温存手術後排便障害の影響について. 第69回日本消化器外科学会総会, 福島, 2014年7月18日.
56. 森俊幸, 山口茂樹, 万代恭嗣: 日本内視鏡外科学会技術認定制度による技術評価, 外科医養成, 手術リスクマネジメント. 第69回日本消化器外科学会総会, 郡山, 2014年7月18日.
57. Kojima K, Masaki T, Takayasu K, Kishiki T, Watanabe T, Suzuki Y, Matsuoka H, Abe N, Mori T, Sugiyama M: Transanal drainage tube insertion following low anterior resection in rectal cancer patients; is it worthwhile?. The 8th Colorectal Disease Symposium in Tokyo, Tokyo, 2014年7月26日.
58. 山岸夢希, 橋本佳和, 小嶋幸一郎, 近藤恵里, 横山政明, 大木亜津子, 竹内弘久, 長尾玄, 松岡弘芳, 阿部展次, 正木忠彦, 森俊幸, 杉山政則: 横行結腸および全胃が脱出した混合型食道裂孔ヘルニアに対し腹腔鏡下 Nissen 噴門形成術を施行した1例. 第330回日本消化器病学会関東支部例会, 東京, 2014年7月26日.
59. Masaki T : 3-D Laparoscopy vs. 2-D Laparoscopy -pros and cons. 8th Colorectal Disease Symposium in Tokyo, Tokyo, July 26th, 2014.
60. Matsuoka H, Masaki T, Kojima K, Kishiki T, Kobayashi T, Takayasu K, Suzuki Y, Abe N, Mori T, Sugiyama M: MRI has dominated US in staging rectal cancer. 8th. Colorectal Disease Symposium in Tokyo. Tokyo, July 26th, 2014.
61. Matsuoka H, Masaki T, Kojima K, Kishiki T, Kobayashi T, Takayasu K, Suzuki Y, Abe N, Mori T, Sugiyama M: Why do some patients complain severe evacuatory disorder following low anterior resection?. 17th Annual Conference on Functional Disorder in Anorectal Disease, Tokyo, August 9th. 2014.
62. 鈴木裕, 近藤恵里, 中里徹矢, 横山政明, 松岡弘芳, 阿部展次, 森俊幸, 正木忠彦, 杉山政則: 術前に診断しえた Portal annular pancreas の1例. 第41回日本膵切研究会, 東京, 2014年8月23日.
63. 藤井肇, 阿部展次, 橋本佳和, 大木亜津子, 長尾玄, 正木忠彦, 森俊幸, 杉山政則: 十二指腸 NET に対して腹腔鏡内視鏡合同手術を施行した1例. 第834回外科集談会, 東京, 2014年9月6日.
64. 松岡弘芳, 正木忠彦, 小嶋幸一郎, 吉敷智和, 高安甲平, 渡邊武志, 阿部展次, 森俊幸, 杉山政則: 各再建法における直腸癌術後臨床生理学的検討. 第20回大腸肛門機能障害研究会, 東京, 2014年9月6日.
65. 荻原利弥, 近藤恵里, 横山政明, 鈴木裕, 阿部展次, 正木忠彦, 森俊幸, 杉山政則: 感染性心内膜炎の加療中に胆嚢出血をきたした1例. 第331回日本消化器病学会関東支部例会, 東京, 2014年9月20日.

66. 小嶋幸一郎, 正木忠彦, 渡邊武志, 高安甲平, 吉敷智和, 鈴木裕, 松岡弘芳, 阿部展次, 森俊幸, 杉山政則: 左側型穿孔性大腸憩室炎に対する治療戦略. 第6回 Acute Care Surgery 学会学術集会, 青森, 2014年9月20-21日.
67. 横山政明, 中里徹矢, 鈴木裕, 杉山政則, 大塚弘毅, 大西宏明, 渡邊卓, 大倉康男: 胆道癌におけるシグナル伝達系および細胞周期関連分子の解析. 第50回日本胆道学会学術集会, 東京, 2014年9月26-27日.
68. 鈴木裕, 森俊幸, 横山政明, 中里徹矢, 松木亮太, 阿部展次, 正木忠彦, 杉山政則: 全国多施設調査からみた肝内結石症診療の現状. 第50回日本胆道学会学術集会, 東京, 2014年9月27日.
69. 阿部展次, 橋本佳和, 大木亜津子, 竹内弘久, 横山政明, 中里徹矢, 鈴木裕, 森俊幸, 杉山政則: 腹腔鏡(補助)下尾側脾切除の手法と成績. 第6回脾臓内視鏡外科研究会, 盛岡, 2014年10月1日.
70. 吉敷智和, 森俊幸, 小嶋幸一郎, 高安甲平, 橋本佳和, 渡邊武志, 鈴木裕, 松岡弘芳, 阿部展次, 正木忠彦, 杉山政則: 腹腔鏡下に修復した内ヘルニアの1例. 第27回日本内視鏡外科学会総会, 盛岡, 2014年10月2日.
71. 竹内弘久, 阿部展次, 大木亜津子, 森俊幸, 正木忠彦, 杉山政則: 中・下咽頭表在癌に対する経口的内視鏡切除治療とセンチネルリンパ節生検による Hybrid 手術の有用性について. 第27回日本内視鏡外科学会総会, 盛岡, 2014年10月2日.
72. 小嶋幸一郎, 正木忠彦, 渡邊武志, 高安甲平, 吉敷智和, 鈴木裕, 松岡弘芳, 阿部展次, 森俊幸, 杉山政則: 腹腔鏡下復辟瘻痕ヘルニア修復術の短期的治療成績. 第27回日本内視鏡外科学会総会, 盛岡, 2014年10月2-4日.
73. 渡邊武志, 森俊幸, 小嶋幸一郎, 高安甲平, 吉敷智和, 松岡弘芳, 阿部展次, 正木忠彦, 杉山政則: 当院における腹腔鏡下腹壁瘻痕ヘルニア修復術の Reduced port surgery への工夫. 第27回日本内視鏡外科学会総会, 盛岡, 2014年10月2-4日.
74. 阿部展次, 竹内弘久, 大木亜津子, 橋本佳和, 森俊幸, 杉山政則: 軟性内視鏡と腹腔鏡を用いた低侵襲 hybrid 手術. 第27回日本内視鏡外科学会総会, 盛岡, 2014年10月3日.
75. 森俊幸: 高精細画像が腹腔鏡下手術に及ぼしたインパクト. 第27回日本内視鏡外科学会総会, 盛岡, 2014年10月3日.
76. 橋本佳和, 森俊幸, 小島洋平, 紅谷鮎美, 大木亜津子, 竹内弘久, 長尾玄, 鈴木裕, 松岡弘芳, 阿部展次, 正木忠彦, 杉山政則: サンダービートを用いた腹腔鏡下噴門再形成術の1例. 第27回日本内視鏡外科学会総会, 盛岡, 2014年10月4日.
77. 阿部展次, 竹内弘久, 杉山政則: ESD と LECS の bridge-胃 GIST に対する内視鏡的全層切除術(endoscopic full-thickness resection: EFTR). 第88回日本消化器内視鏡学会総会, 神戸, 2014年10月25日.
78. 吉敷智和, 正木忠彦, 小嶋幸一郎, 高安甲平, 鈴木裕, 松岡弘芳, 阿部展次, 森俊幸, 杉山政則: Stage IV 大腸癌の予後予測因子はなにか?. JDDW, 神戸, 2014年10月25日.
79. 大木亜津子, 阿部展次, 吉本恵理, 橋本佳和, 竹内弘久, 正木忠彦, 森俊幸, 杉山政則: ESD 後2nd look内視鏡検査の意義. 第22回 JDDW, 神戸, 2014年10月25日.
80. 鈴木裕, 杉山政則: 分枝型 IPMN における国際ガイドラインの検証-手術適応決定に EUS は必須か?. 第56回日本消化器病学会大会(JDDW2014), 神戸, 2014年10月25日.
81. 竹内弘久, 阿部展次, 堀合真一, 橋本佳和, 水野英彰, 大木亜津子, 長尾玄, 正木忠彦, 森俊幸, 杉山政則: 十二指腸非乳頭部表在性腫瘍に対する内視鏡観察を併用した腹腔鏡補助下経十二指腸の粘膜切除術(laparoscopy-assisted transduodenal resection: LATDR). 第10回 LECS 研究会, 神戸, 2014年10月25日.
82. 竹内弘久, 阿部展次, 大木亜津子, 平野和彦, 大倉康男, 杉山政則: 未分化・分化型組織混在早期胃癌に対する ESD の適応拡大について. JDDW2014, 神戸, 2014年10月25日.
83. 橋本佳和, 阿部展次, 横山政明, 中里徹矢, 大木亜津子, 竹内弘久, 長尾玄, 鈴木裕, 松岡弘芳, 正木忠彦, 森俊幸, 杉山政則: 腹腔鏡補助下幽門側胃切除術におけるパイポラ・超音波凝固切開統合デバイスの有用性. 第12回日本消化器外科学会大会(JDDW2014), 神戸, 2014年10月25日.
84. 吉本恵理, 大木亜津子, 阿部展次, 竹内弘久, 橋本佳和, 森俊幸, 正木忠彦, 杉山政則.
85. 題名: 胃 ESD 症例における遅発性後出血(5日目以降)リスク因子の検討. JDDW, 神戸, 2014年10月25日.
86. 阿部展次, 竹内弘久, 杉山政則: NOTES への bridge: ショートタイプ軟性内視鏡補助下单孔式手術. 第12回日本消化器外科学会大会, 神戸, 2014年10月26日.
87. 小島洋平, 中里徹矢, 横山政明, 鈴木裕, 松岡弘芳, 阿部展次, 正木忠彦, 森俊幸, 杉山政則, 原由紀子, 大倉康男: 退形成性膵管癌4例の検討. JDDW2014, 神戸, 2014年10月26日.
88. 小嶋幸一郎, 正木忠彦, 高安甲平, 吉敷智和, 渡邊武志, 鈴木裕, 松岡弘芳, 阿部展次, 森俊幸, 杉山政則: 診断に苦慮した腹腔内膿瘍の一例. 第8回多摩腸疾患カンファレンス, 立川, 2014年10月10日.
89. Kojima K, Masaki T, Takayasu K, Kishiki T, Watanabe T, Suzuki Y, Matsuoka H, Abe N, Mori T, Sugiyama M, Ohata T, Sano Y, Tanbo M, Matsuda T: A case of necrotizing fasciitis following chemoradiotherapy for recurrent rectal cancer. The 31th Congress of the Pan-Pacific Surgical Association Japan Chapter, Taiwan, October 31st, - November 2nd. 2014.
90. Masaki T: 3-D imaging of laparoscopic colorectal surgery - A new option. 3rd Taipei International Symposium of MIDS, Taiwan, November 1st, 2014.
91. Sugiyama M, Suzuki Y, Yokoyama M, Nakazato T, Matsuoka H, Abe N, Masakai T, Mori T: Technical refinement of pancreatoduodenectomy. 31st Congress of Pan-Pacific Surgical Association Japan Chapter, Taipei, November 2nd, 2014.
92. Takeuchi H, Abe N, Ohki A, Masaki T, Mori T, Sugiyama M: Expanding the indications of endoscopic resection for early gastric cancer with mucosal invasion and submucosal invasion within 500 μ m. The 31 th PPSA, Taipei, November 2nd, 2014.
93. Suzuki Y, Sugiyama M, Inui K, Igarashi Y, Ohara H, Tazuma S, Tsuji T, Miyagawa H, Atomi Y: Management of pancreatolithiasis - A Japanese multicenter study. APA / JPS Meeting 2014, USA, November 7th, 2014.
94. Sugiyama M, Suzuki Y, Yokoyama M, Nakazato T, Abe N, Masakai T, Mori T: Technical refinement of pancreatoduodenectomy. 45th Meeting of American Pancreatic Association, USA, November 8th, 2014.
95. 吉敷智和, 正木忠彦, 松岡弘芳, 小嶋幸一郎, 高安甲平, 渡邊武志, 鈴木裕, 阿部展次, 森俊幸, 杉山政則, 杉原健一: Stage 4 大腸癌根治切除後の短期再発の危険因子は何か?. 日本大腸肛門病学会, 横浜, 2014年11月7日.
96. 小嶋幸一郎, 正木忠彦, 渡邊武志, 高安甲平, 吉敷智和, 鈴木裕, 松岡弘芳, 阿部展次, 森俊幸, 杉山政則: 傾向スコアマッチング分析を用いた直腸癌手術における系肛門ドレーンの有

- 用性の検討. 第69回日本大腸肛門病学会学術集会, 横浜, 2014年11月7-8日.
97. 紅谷鮎美, 松岡弘芳, 正木忠彦, 吉敷智和, 小嶋幸一郎, 杉山政則: 直腸癌低位前方切除術の縫合不全危険因子の検討. 第69回日本大腸肛門病学会学術集会, 横浜, 2014年11月7-8日.
 98. 吉敷智和, 正木忠彦, 松岡弘芳, 小嶋幸一郎, 高安甲平, 鈴木裕, 阿部展次, 森俊幸, 杉山政則: 大腸癌における血清 p53 抗体測定の意義. 多摩大腸疾患懇話会, 東京, 2014年11月11日.
 99. 吉敷智和, 正木忠彦, 松岡弘芳, 小嶋幸一郎, 高安甲平, 鈴木裕, 阿部展次, 森俊幸, 杉山政則: 大腸癌における KRAS 変異と BRAF 変異の比較. 第76回日本臨床外科学会総会, 郡山, 2014年11月20日.
 100. 近藤恵里, 鈴木裕, 横山政明, 阿部展次, 正木忠彦, 森俊幸, 杉山政則: 術前診断しえた腎細胞癌胆嚢転移の1例. 第76回日本臨床外科学会総会, 郡山, 2014年11月20日.
 101. 麻生喜祥, 正木忠彦, 小嶋幸一郎, 高安甲平, 吉敷智和, 鈴木裕, 松岡弘芳, 阿部展次, 森俊幸, 杉山政則: 腹腔鏡下腹壁瘻痕ヘルニア修復術後に漿液腫感染を合併した1例. 第76回日本臨床外科学会総会, 福島, 2014年11月20-22日.
 102. 小嶋幸一郎, 正木忠彦, 渡邊武志, 高安甲平, 吉敷智和, 鈴木裕, 松岡弘芳, 阿部展次, 森俊幸, 杉山政則: 穿孔性大腸憩室炎に対する保存的治療の有効性. 第76回日本臨床外科学会総会, 郡山, 2014年11月20-22日.
 103. 鈴木裕, 中里徹矢, 横山政明, 松木亮太, 阿部展次, 森俊幸, 正木忠彦, 杉山政則: 腸回転解除を用いた臍頭十二指腸切除術の工夫. 第76回日本臨床外科学会総会, 福島, 2014年11月21日.
 104. 橋本佳和, 森俊幸, 小島洋平, 紅谷鮎美, 大木亜津子, 竹内弘久, 長尾玄, 鈴木裕, 松岡弘芳, 阿部展次, 正木忠彦, 杉山政則: 腹腔鏡下噴門形成術におけるReduced Port Surgeryの手法と工夫. 第76回日本臨床外科学会総会, 郡山, 2014年11月22日.
 105. 松岡弘芳, 正木忠彦, 小嶋幸一郎, 吉敷智和, 高安甲平, 渡邊武志, 阿部展次, 森俊幸, 杉山政則: 直腸癌肛門温存手術の功罪. 第1回東海大学外科医会, 神奈川, 2014年11月26日.
 106. Matsuoka H, Masaki T, Kojima K, Kishiki T, Kobayashi T, Takayasu K, Suzuki Y, Abe N, Mori T, Sugiyama M: Rectal prolapse: our experience. Annual Congress of Korean Surgical Society, Korea, November 28th, 2014.
 107. 近藤恵里, 長尾玄, 堀合真市, 阿部展次, 正木忠彦, 森俊幸, 杉山政則: 人工血管感染を合併した食道穿孔に対し, 食道切除, グラフト再置換にて救命しえた1例. 第27回日本感染症外科学会総会学術集会, 東京, 2014年12月4日.
- 論文**
1. Abe N, Suzuki Y, Masaki T, Mori T, Sugiyama M : Surgical management of superficial non - mpullary duodenal tumors. Dig Endosc Supple 2:57-63, 2014.
 2. Abe N, Mori T, Sugiyama M : Tips on laparoscopic distal pancreatectomy. J Hepatobiliary Pancreat Sci 21:E41-47,2014.
 3. Kishiki T, Ohnishi H¹, Masaki T, Ohtsuka K¹, Ohkura Y², Furuse J³, Watanabe T¹, Sugiyama M ¹Laboratory Medicine, ²Pathology ³Medical Oncology) : Overexpression of MET is a New Predictive Marker for Anti-EGFR Therapy in Metastatic Colorectal Cancer with Wild-Type KRAS. Cancer Chemother Pharmacol 73:749-757,2014.
 4. Kishiki T, Ohnishi H¹, Masaki T, Ohtsuka K¹, Ohkura Y², Furuse J³, Sugiyama M, Watanabe T¹(¹Laboratory Medicine, ²Pathology, ³Medical Oncology) : Impact of genetic profiles on the efficacy of anti-EGFR antibodies in metastatic colorectal cancer with KRAS mutation. ONCOLOGY REPORTS 32: 57-64, 2014.
 5. 杉山政則: 乳頭を攻略するーカニューレーションの基本と困難例への対処. 消化器内視鏡 26: 158,2014.
 6. 鈴木裕, 杉山政則: 手術記録の書き方 胆道の手術 中・下部胆管癌・乳頭癌 経十二指腸的乳頭部切除術. 消化器外科 37: 864-866, 2014.
 7. Suzuki Y, Mori T, Yokoyama M, Nakazato T, Abe N, Tsubouchi H, Nakanuma Y, Sugiyama M: Hepatolithiasis: Analysis of Japanese nationwide surveys over a period of 40 years. J Hepato-biliary-pancreatic science. 21: 617-622, 2014.
 8. 鈴木裕, 中里徹矢, 横山政明, 阿部展次, 森俊幸, 杉山政則: IPMN の外科治療. 臨床消化器内科 29: 1727-1731, 2014.
 9. 鈴木裕, 中里徹矢, 横山政明, 阿部展次, 正木忠彦, 森俊幸, 杉山政則: IPMN と MRCP. 臨床画像 30: 1320-1327, 2014.
 10. 竹内弘久, 阿部展次, 大倉康男, 杉山政則: 全体に褪色調を呈し, 発赤とひきつれを伴う陥凹性病変. 消化器内視鏡 26(7):995-996,2014.
 11. 竹内弘久, 阿部展次, 大倉康男, 杉山政則: 隆起を呈する病変 悪性 食道原発悪性黒色腫. 消化器内視鏡 26(10):1620-1621,2014.
 12. 長尾玄, 杉山政則, 阿部展次: 特殊な形態を呈する病変 大動脈人工血管置換術後の縦隔食道瘻. 消化器内視鏡 26(10): 1764-1765,2014.
 13. 長尾玄, 杉山政則: 糖尿病(重症例を含む)がある患者さんの術後ケアは, どんなことに注意したらよいの?. ナーシングケア Q&A 49:276-277,2014.
 14. 中里徹矢, 横山政明, 鈴木裕, 杉山政則: 胆管内乳頭状腫瘍 (IPNB) と肝粘液性嚢胞性腫瘍 (肝 MCN). 消化器内視鏡 26(1):148-9,2014.
 15. 橋本佳和, 阿部展次, 杉山政則: 術後の食道吻合部狭窄. 消化器内視鏡 10:1732-1733, 2014.
 16. 森俊幸, 得津敬之, 杉山政則: Reduced Port Surgery の現況と課題. Annual Review 消化器2014:278-283,2014.
 17. Mori T: Concept of Reduced Port Laparoscopic Surgery in Eds. springer:11-22,2014.
 18. 森俊幸, 跡見裕: 肝胆膵低侵襲外科の新潮流 日医雑誌 143:1212-1213,2014.
 19. 森俊幸: 手術技能の見える化. Surgery Frontier 21(4): 358-362,2014.
 20. 森俊幸: 難治性肝疾患の診療を極める 基本から最前線まで. 肝内結石症の疫学:262-265,2014.
 21. Yamaguchi T, Abe N, Matsunobu S, Mizuno H, Yanagida O, Takeuchi H, Masaki T, Mori T, Sugiyama M: Single-incision multiport laparoendoscopic surgery using a short-type flexible endoscope and its usefulness in cholecystectomy. Asian J Surg Endosc 8:48-53, 2014.
 22. 横山政明, 中里徹矢, 鈴木裕, 杉山 政則: 術式別の術前・術中・術後管理 胆道・胆嚢 胆嚢摘出術. 臨床外科 69(11): 185-187,2014.
- 著書**
1. 阿部展次, 跡見裕: 「膵がん」と言われたら... 東京, 保健同人社, 2014.

2. 正木忠彦:痔核, 裂肛, 肛門周囲膿瘍, 痔瘻, 粘膜脱症候群. 今日の治療指針2015. 山口徹, 北原光夫監修. 東京, 医学書院, 2015. p.503-505.
3. 横山政明, 杉山政則:胆道・胆嚢. 消化器外科看護まるごと図解ブック 解剖生理からケアまで網羅!必修事項がサクッとわかる 2014春季増刊. 大阪, メディカ出版, 2014.p.118-141.

特許等知的財産関係, 報告書

1. 正木忠彦:進行大腸がんに対する腹腔鏡下手術と開腹手術の根治性に関するランダム化比較試験. 厚生労働科学研究費「消化管悪性腫瘍に対する標準治療確立のための多施設共同研究」2013年度 分担研究報告書.
2. 正木忠彦:Stage III 治癒切除大腸癌に対する術後補助化学療法として Capecitabine 療法と S-1 療法とのランダム化第 III 相比較臨床試験. 厚生労働科学研究費「消化管悪性腫瘍に対する標準治療確立のための多施設共同研究」2013年度 分担研究報告書.

その他

1. 鈴木裕:第114回第日本外科学会定期学術集会優秀演題, 京都, 2014年4月3日.
2. 竹内弘久:座長 一般演題1:症例報告. 第6回日本静脈経腸栄養学会 首都圏支部会学術集会, 東京, 2014年5月31日.
3. 中里徹矢:座長, 脾・脾・血管. 第833回外科集談会, 東京, 2014年6月28日.
4. 阿部展次:「胃癌手術の新展開」, 日経ラジオ, 2014年8月19日.
5. 竹内弘久:デジタルポスターセッション優秀演題, 第88回日本消化器内視鏡学会総会, 神戸, 2014年10月25日.
6. 阿部展次:逆引き病気事典, 週刊現代, 2014年11月1日.
7. 鈴木裕:第22回(平成26年度)日本膵臓病研究財団, 膵臓病研究奨励賞.
8. 正木忠彦:ここに注目! 知っているようで知らない疾患のトリセツ(file_060) 腸閉塞(解説). Credentials 78: 12-13, 2015.

外科学教室 (呼吸器・甲状腺)

講演

1. Kondo H : Tracheobronchoplasty : from the viewpoint of technical education. 18th WCBIP / WCBE World Congress joint meeting of the World Association for Bronchology and Interventional Pulmonology and the International Bronchoesophagology Society, Kyoto, April 14th, 2014.
2. Kawachi R, Shimizu R, Tachibana K, Karita S, Nakazato Y, Nagashima Y, Takei H, Kondo H, Goya T : What kind of surgical intervention should be performed for postoperative bronchopleural fistula?. 18th WCBIP / WCBE World Congress joint meeting of the World Association for Bronchology and Interventional Pulmonology and the International Bronchoesophagology Society, Kyoto, April 16th, 2014.
3. 須田一晴, 古屋敷剛, 喜多秀文, 近藤晴彦, 呉屋朝幸:SST (superior sulcus tumor)に対する胸腔鏡アプローチ. 第31回日本呼吸器外科学会総会, 東京, 2014年5月29日.
4. 喜多秀文, 藤田敦, 中里宜正, 飯島美砂, 山崎真美, 近藤晴彦, 呉屋朝幸:中縦隔に発生した異型性線維性組織球腫の1切除例. 第31回日本呼吸器外科学会総会, 東京, 2014年5月29日.
5. 河内利賢, 平田佳史, 清水麗子, 橘啓盛, 荻田真, 中里陽子, 長島鎮, 武井秀史, 近藤晴彦, 呉屋朝幸:自然気胸に対する胸

腔鏡下胸膜テント法. 第31回日本呼吸器外科学会総会, 東京, 2014年5月30日.

6. 橘啓盛, 平田佳史, 河内利賢, 荻田真, 中里陽子, 長島鎮, 武井秀史, 近藤晴彦, 呉屋朝幸:中葉肺癌に対するリンパ系路を意識したリンパ節郭清. 第31回日本呼吸器外科学会総会, 東京, 2014年5月30日.
7. 須田一晴, 古屋敷剛, 喜多秀文, 近藤晴彦, 呉屋朝幸:完全鏡視下による拡大手術の検討と工夫. 第31回日本呼吸器外科学会総会, 東京, 2014年5月30日.
8. 古屋敷剛, 須田一晴, 喜多秀文, 藤田敦, 近藤晴彦, 呉屋朝幸:当施設における完全胸腔鏡下肺区域切除. 第31回日本呼吸器外科学会総会, 東京, 2014年5月30日.
9. 藤田敦, 喜多秀文, 近藤晴彦, 呉屋朝幸:非接触型レーザーキーボードによる術中画像ナビゲーションシステム. 第31回日本呼吸器外科学会総会, 東京, 2014年5月30日.
10. 藤田敦, 喜多秀文, 近藤晴彦, 呉屋朝幸:人工気胸による胸腔鏡下胸膜癒着剥離術. 第31回日本呼吸器外科学会総会, 東京, 2014年5月30日.
11. 新井信晃, 橘啓盛, 平田佳史, 河内利賢, 荻田真, 中里陽子, 長島鎮, 武井秀史, 近藤晴彦, 呉屋朝幸:肺癌術後の Mediastinal chyloma に対して頸部アプローチによるドレナージが有効であった1例. 第165回日本胸部外科学会関東甲信越地方会, 横浜, 2014年6月7日.
12. 神尾幸見, 橘啓盛, 武井秀史, 新井信晃, 三ツ間智也, 清水麗子, 平田佳史, 松脇りえ, 河内利賢, 荻田真, 中里陽子, 長島鎮, 平野浩一, 望月眞, 藤原正親, 菅間博, 近藤晴彦:高周波スネアを用いて気管支鏡下に切除した腎細胞癌気管支転移の1例. 第149回日本呼吸器内視鏡学会関東支部会, 東京, 2014年6月14日.
13. 近藤晴彦:肺がんに対する拡大手術ーパンコースト型肺がんを中心にー. 福岡胸部外科疾患研究会, 福岡, 2014年6月14日.
14. 平田佳史, 橘啓盛, 三ツ間智也, 新井信晃, 松脇りえ, 河内利賢, 荻田真, 中里陽子, 長島鎮, 武井秀史, 藤原正親, 平野浩一, 近藤晴彦:転移性肺腫瘍に対してペバシズマブ投与中に両側難治性気胸を発症した1例. 第170回日本肺癌学会関東支部会, 東京, 2014年6月21日.
15. 橘啓盛:低肺機能症例への手術適応について(症例提示). 第3回 Thoracic surgical oncology conference in West Tokyo, 東京, 2014年7月4日.
16. 近藤晴彦:間質性肺炎合併肺癌の外科治療. 長野胸部疾患懇話会, 松本, 2014年7月5日.
17. 須田一晴, 古屋敷剛, 近藤晴彦, 呉屋朝幸:当院での完全鏡視下区域切除術. 第1回 TS 区域切除勉強会, 軽井沢, 2014年8月30日.
18. 中里陽子, 平野浩一, 藤原正親, 菅間博:甲状腺粘表皮癌の1例. 第47回日本甲状腺外科学会学術集会, 福岡, 2014年10月31日.
19. 武井秀史, 近藤晴彦, 宮岡悦郎, 浅村尚生, 吉野一郎, 伊達洋至, 奥村明之進, 多田弘人, 中西洋一, 江口研二, 秋田弘俊, 小林英夫, 横井香平:小細胞肺癌に対する手術治療ー肺癌登録合同委員会2004年外科切除例の全国集計からー. 第55回日本肺癌学会学術集会, 京都, 2014年11月15日.
20. 河内利賢, 松脇りえ, 橘啓盛, 荻田真, 中里陽子, 長島鎮, 武井秀史, 近藤晴彦:メディカルスタッフのためのよくわかる肺がん診療「手術」 チーム医療推進プログラム2 メディカルスタッフのためのよくわかる肺がん診療. 第55回日本肺癌学会学術集会, 京都, 2014年11月15日.

21. 橘啓盛, 新井信晃, 三ツ間智也, 平田佳史, 松脇りえ, 河内利賢, 荻田真, 喜多秀文, 須田一晴, 藤田敦, 古屋敷剛, 中里陽子, 長島鎮, 武井秀史, 近藤晴彦: 中葉発生原発性肺癌における#11s リンパ節郭清の重要性. 第55回日本肺癌学会学術集会, 京都, 2014年11月15日.
22. 須田一晴, 古屋敷剛, 喜多秀文, 近藤晴彦, 呉屋朝幸: 分葉不全肺癌に対する完全鏡視下肺葉切除術. 第55回日本肺癌学会学術集会, 京都, 2014年11月16日.
23. 古屋敷剛, 須田一晴, 喜多秀文, 藤田敦, 近藤晴彦, 呉屋朝幸: 完全胸腔鏡下手術での季肋部切開法の有用性～当施設での最新の取り出し法・応用～. 第55回日本肺癌学会学術集会, 京都, 2014年11月16日.
24. 松脇りえ, 祢里真也, 永井完治, 青景圭樹, 菱田智之, 吉田純司, 坪井正博, 近藤晴彦, 石井源一郎: pN2肺扁平上皮癌の再発予測因子－原発巣およびリンパ節転移巣における腫瘍組織の性状と再発への影響－. 第55回日本肺癌学会学術集会, 京都, 2014年11月16日.
25. 中里陽子, 新井信晃, 三ツ間智也, 平田佳史, 松脇りえ, 橘啓盛, 河内利賢, 荻田真, 長島鎮, 武井秀史, 平野浩一, 近藤晴彦: 医局長のあり方～女性外科医の視点から～ Japan Association of Women Surgeons 共催企画3. 第76回日本臨床外科学会総会, 郡山, 2014年11月21日.
26. 須田一晴, 古屋敷剛, 近藤晴彦, 呉屋朝幸: 当科における完全鏡視下肺全摘術の検討. 第23回長岡肺癌研究会, 長岡, 2015年2月6日.
27. 荻原利弥, 河内利賢, 平田佳史, 松脇りえ, 橘啓盛, 荻田真, 中里陽子, 長島鎮, 武井秀史, 近藤晴彦: 縦隔結腸癌により胸骨正中切開創の便汁汚染を併発した1例. 第24回日本呼吸器外科医会冬期学術集会, 軽井沢, 2015年2月20日.
28. 平野浩一, 菅間博: 甲状腺癌は怖くない?－甲状腺癌の病理を知る. 市民公開講座, 三鷹, 2015年3月11日.
29. Tanaka R, Schindler N, Deasis FJ, Derevianko AY, Zhao JC, Ujiki M: Dedicated two week proficiency-based simulation curriculum for surgical residents. 8th Annual Meeting of the Consortium of ACS - Accredited Education Institutes, USA, March 13th, 2015.

論文 和文

1. 近藤晴彦: 知らない? 知りたい? 術者がこっそり教える解剖はなし 呼吸器外科. オペナーシング 29(8): 683, 2014.
2. 橘啓盛, 近藤晴彦: 画像診断 Q&A. 胸部外科67(2): 142-145, 2014.

欧文

1. Takei H, Kondo H, Miyaoka E¹, Asamura H², Yoshino I³, Date H⁴, Okumura M⁵, Tada H⁶, Fujii Y⁷, Nakanishi Y⁸, Eguchi K⁹, Dosaka-Akita H¹⁰, Kobayashi H¹¹, Sawabata N⁵, Yokoi K¹²; Japanese Joint Committee of Lung Cancer Registry. (1)Univ of Tokyo, (2)National Cancer Center Hospital, (3)Chiba Univ, (4)Kyoto Univ, (5)Osaka Univ, (6)Osaka City General Hospital, (7)Nagoya City Univ, (8)Kyushu Univ, (9)Teikyo Univ, (10)Hokkaido Univ, (11)National Defense Medical College, (12)Nagoya Univ): Surgery for small cell lung cancer: a retrospective analysis of 243 patients from Japanese Lung Cancer Registry in 2004. J Thorac Oncol 9(8): 1140-1145, 2014.
2. Sato T¹, Teramukai S², Kondo H, Watanabe A³, Ebina M⁴, Kishi K⁵, Fujii Y⁶, Mitsudomi T⁷, Yoshimura M⁸, Maniwa T⁹, Suzuki K¹⁰, Kataoka K¹¹, Sugiyama Y¹², Kondo T⁴, Date H¹; the Japanese

Association for Chest Surgery (1)Kyoto Univ, (2)Kanazawa Univ, (3)Sapporo Medical Univ, (4)Tohoku Univ, (5)Toranomon Hospital, (6)Nagoya City Univ, (7)Aichi Cancer Center Hospital, (8)Hyogo Cancer Center, (9)Shizuoka Cancer Center, (10)Juntendo Univ, (11)Hiroshima City Hospital, (12)Jichi Medical Univ): Impact and predictors of acute exacerbation of interstitial lung disease after pulmonary resection for lung cancer. J Thorac Cardiovasc Surg 147(5): 1604-1611, 2014.

3. Yamatani C¹, Abe M¹, Shimoji M¹, Maniwa T¹, Takahashi S¹, Isaka M¹, Ohde Y¹, Watanabe R¹, Ito I¹, Kondo H, Nakajima T¹ (1)Shizuoka Cancer Center): Pulmonary adenosquamous carcinoma with mucoepidermoid carcinoma-like component with characteristic p63 staining pattern: either a novel subtype originating from bronchial epithelium or variant mucoepidermoid carcinoma. Lung Cancer 84(1): 45-50, 2014.
4. Maniwa T¹, Endo M¹, Isaka M¹, Nakagawa K¹, Ohde Y¹, Okumura T¹, Kondo H (1)Shizuoka Cancer Center): Acute exacerbation of interstitial lung disease with lung cancer after surgery: evaluation with 2-[18]-fluoro-2-deoxy-D-glucose positron emission tomography. Surg Today 44(3): 494-498, 2014.
5. Endo T¹, Yazawa T¹, Shishido-Hara Y¹, Fujiwara M¹, Shimoyamada H¹, Ishii J², Sato H², Tachibana K, Takei H, Kondo H, Goya T, Endo S³, Kamma H¹ (1)Pathol, Kyorin Univ, (2)Yokohama City Univ, (3)Jichi Medical School): Expression of developing neural transcription factors in lung carcinoid tumors. Pathol Int 64(8): 365-374, 2014.
6. Sato T¹, Watanabe A², Kondo H, Kanzaki M³, Okubo K⁴, Yokoi K⁵, Matsumoto K⁶, Marutsuka T⁷, Shinohara H⁸, Teramukai S⁹, Kishi K¹⁰, Ebina M¹¹, Sugiyama Y¹², Meinoshin O¹³, Date H¹; Japanese Association for Chest Surgery (1)Kyoto Univ, (2)Sapporo Medical Univ, (3)Tokyo Women's Medical Univ, (4)Tokyo Medical & Dental Univ, (5)Nagoya Univ, (6)Kishiwada City Hospital, (7)Kumamoto Chuo Hospital, (8)Niigata Univ, (9)Kanazawa Univ, (10)Toranomon Hospital, (11)Tohoku Pharmaceutical Univ, (12)Jichi Medical Univ, (13)Osaka Medical Center for Cancer and Cardiovascular Diseases): Long-term results and predictors of survival after surgical resection of patients with lung cancer and interstitial lung diseases. J Thorac Cardiovasc Surg 149(1): 64-69, 2015.
7. Sato T¹, Kondo H, Watanabe A², Nakajima J³, Niwa H⁴, Horio H⁵, Okami J⁶, Okumura N⁷, Sugio K⁸, Teramukai S⁹, Kishi K¹⁰, Ebina M¹¹, Sugiyama Y¹², Kondo T¹³, Date H¹ (1)Kyoto Univ, (2)Sapporo Medical Univ, (3)Univ of Tokyo, (4)Seirei Mikatahara General Hospital, (5)Tottori Univ, (6)Osaka Medical Center for Cancer and Cardiovascular Diseases, (7)Kurashiki Central Hospital, (8)Kyushu Univ, (9)Kanazawa Univ, (10)Toranomon Hospital, (11)Tohoku Pharmaceutical Univ, (12)Jichi Medical Univ, (13)Tohoku Univ): A simple risk scoring system for predicting acute exacerbation of interstitial pneumonia after pulmonary resection in lung cancer patients. Gen Thorac Cardiovasc Surg 63(3): 164-172, 2015.
8. Matsuwaki R¹, Ishii G¹, Zenke Y¹, Neri S¹, Aokage K¹, Hishida T¹, Yoshida J¹, Fujii S¹, Kondo H, Goya T, Nagai K¹, Ochiai A¹ (1)National Cancer Center Hospital East): Immunophenotypic features of metastatic lymph node tumors to predict recurrence in N2 lung squamous cell carcinoma. Cancer Sci. 105(7): 905-911, 2014.

その他

1. 近藤晴彦:「話題の医学」肺癌診療における腫瘍マーカーの意義についてコメント, 地デジ7ch, 2014年7月20日.

外科学教室 (乳腺外科)

講演

1. 伊美建太郎, 井本滋, 上野貴之, 伊東大樹, 宮本快介, 北村真奈美: BONENAVI を用いた乳癌骨転移の定量診断の試み. 第114回日本外科学会定期学術集会, 京都, 2014年4月3-5日.
2. Yip KW, Zhang Z, Sakemura-Nakatsugawa N, Huang JW, Vu NM, Chiang YK, Lin CL, Kwan JY, Yue S, Jitkova Y, To T, Zahedi P, Pai EF, Schimmer AD, Lovell JF, Sessler JL, Liu FF: A porphodimethene chemical inhibitor of uroporphyrinogen decarboxylase. American Association for Cancer Research Annual Meeting, USA, April 5th-9th, 2014.
3. 上野貴之: 臨床試験の結果からみえる個別化治療の今後の展望. Oncotype Dx セミナー, 東京, 2014年6月21日.
4. 井本滋, 愛甲孝, 坂本純一, 北島政樹: センチネルリンパ節転移陽性乳癌における腋窩治療の観察研究. 第22回日本乳癌学会学術総会, 大阪, 2014年7月10日.
5. 井本滋, 和田徳昭: ラジオ波焼灼治療のピットフォール. 第10回乳癌低侵襲治療研究会, 大阪, 2014年7月12日.
6. 上野貴之: 血中循環がん細胞・循環ゲノムの検出法と臨床応用. 第22回日本乳癌学会学術総会, 大阪, 2014年7月10-12日.
7. 宮本快介, 伊坂泰嗣, 伊東大樹, 伊美建太郎, 北村真奈美, 上野貴之, 井本滋: 手術療法が施行された IV 期乳癌の検討. 第22回日本乳癌学会学術総会, 大阪, 2014年7月10-12日.
8. 伊東大樹, 井本滋, 上野貴之, 伊美建太郎, 宮本快介, 多田真奈美: Trastuzumab/vinorelbine 療法を施行した HER2陽性進行再発乳癌患者における2次治療に関する検討. 第22回日本乳癌学会学術総会, 大阪, 2014年7月10-12日.
9. 北村真奈美, 上野貴之, 伊東大樹, 伊美建太郎, 宮本快介, 井本滋: 閉経後HR陽性進行再発乳癌に対するフルベストラント長期使用症例の検討. 第22回日本乳癌学会学術総会, 大阪, 2014年7月10-12日.
10. 上野貴之: 乳癌個別化治療の現状と展望. 第22回日本乳癌学会学術総会 モーニングセミナー, 大阪, 2014年7月10-12日.
11. 上野貴之: HER2陽性 MBC 治療の New Standard. 第12回日本臨床腫瘍学会学術集会, 福岡, 2014年7月17-19日.
12. Ueno T: Preoperative systemic therapy for HER2 positive breast cancer. 第12回日本臨床腫瘍学会学術集会, 福岡, 2014年7月17-19日.
13. 上野貴之: イントリンジックサブタイプ. 日本乳癌学会専門医セミナー, 東京, 2014年8月9日.
14. 上野貴之: HER2陰性 MBC の個別化への挑戦. 静岡乳癌シンポジウム, 静岡, 2014年8月23日.
15. 上野貴之: HER2陰性進行再発乳癌に対する1次化学療法のエビデンス. 第52回日本癌治療学会学術集会 イブニングセミナー, 横浜, 2014年8月28日-30日.
16. 伊坂泰嗣: 乳がん検診を正しく受けるために. 久我山地域住民・一般公開講座, 東京, 2014年9月13日.
17. Imoto S, Ueno T, Ito H, Imi K, Miyamoto K, Kitamura M: Phase II study on radiofrequency ablation in early breast cancer. Presented at the scientific meeting of the Japan-Hungary-Poland Surgical Society. Tokyo, September 17th, 2014.
18. 上野貴之: 新規分子標的治療薬の意義と今後の展望. 横浜乳癌シンポジウム, 横浜, 2014年9月20日.
19. Ueno T, Tanaka S, Fujisawa N, Imoto S, Toi M: Circulating epithelial and endothelial cells in breast cancer patients— Its implications in cancer treatment. 第73回日本癌学会学術集会, 横浜, 2014年9月25-27日.
20. Tanaka S, Ueno T, Ishiguro H, Morita S, Toi M: The alteration of circulating endothelial progenitor cell counts during neoadjuvant chemotherapy. 第73回日本癌学会学術集会, 横浜, 2014年9月25-27日.
21. Imoto S, Nakatsugawa N, Ueno T, Isaka H, Ito H, Imi K, Nakatsura T: Host-tumor immune response for breast cancer patients treated with radiofrequency ablation. 第73回日本癌学会学術集会, 横浜, 2014年9月25-27日.
22. Imoto S, Ueno T, Ito H, Imi K, Miyamoto K, Kitamura M: Can radiofrequency ablation be an alternative to breast-conserving surgery in early breast cancer?. Presented at 34th congress of the European Society of Surgical Oncology. UK, October 29th, 2014.
23. 上野貴之: HER2陰性 MBC の個別化治療戦略. 多摩乳癌分子標的治療研究会, 東京, 2014年11月28日.
24. 上野貴之: 進行再発乳癌のホルモン治療. 多摩乳癌懇話会, 東京, 2014年12月4日.
25. 上野貴之: 薬剤作用から考えるハラヴェンの可能性. 第11回日本乳癌学会関東地方会, 大宮, 2014年12月6日.
26. Imoto S, Nagamine S, Ito T, Tsuda H, Yoshida M, Tozaki M, Morita S, Ueno T: Phase II study on radiofrequency ablation in stage 0 and I breast cancer without extensive intraductal components. Presented at 37th San Antonio Breast Cancer Symposium. USA, December 10th, 2014.
27. 上野貴之: 乳癌治療の基礎と今後の展望. 三鷹市医師会, 東京, 2015年2月20日.
28. 上野貴之: ER 陽性 HER2陰性進行再発乳癌のメカニズムと新しい治療戦略. 桶狭間BCキャンプ, 名古屋, 2015年2月21日.

論文

1. Ueno T, Masuda N, Yamanaka T, Saji S, Kuroi K, Sato N, Takei H, Yamamoto Y, Ohno S, Yamashita H, Hisamatsu K, Aogi K, Iwata H, Sasano H, Toi M: Evaluating the 21-gene assay Recurrence Score® as a predictor of clinical response to 24weeks of neoadjuvant exemestane in estrogen receptor-positive breast cancer. Int J Clin Oncol.19(4): 607-13, 2014.
2. Shibayama O, Yoshiuchi K, Inagaki M, Matsuoaka Y, Yoshikawa E, Sugawara Y, Akechi T, Wada N, Imoto S, Murakami K, Ogawa A, Akabayashi A, Uchitomi Y: Association between adjuvant regional radiotherapy and cognitive function in breast cancer patients treated with conservation therapy. Cancer Med 3(3):702-709, 2014.
3. Oba MS, Imoto S, Toh U, Wada N, Kawada M, Kitada M, Masuda N, Taguchi T, Minami S, Jinno H, Sakamoto J, Morita S: Observational Study of Axilla Treatment for Breast Cancer Patients with 1-3 Positive Micrometastases or Macrometastases in Sentinel Lymph Nodes. Jpn J Clin Oncol 44(9):876-879, 2014.
4. 上野貴之: 多重遺伝子診断と HER2陽性乳がん. 腫瘍内科 14: 208-212, 2014.
5. 上野貴之: 細胞増殖と細胞死の評価. Pharma Medica 32: 19-23, 2014.

- 上野貴之:個別化医療の今後. Mebio 31: 52-57, 2014.
- 井本滋, 白石知大:皮膚温 存乳房切除術. 外科 76(9): 963-968, 2014.
- 野村久祥, 川上英泰, 臼井浩昭, 鈴木真也, 井本滋, 齋藤真一郎:第一世代セロトニン拮抗薬とリン酸デキサメタゾン2 剤による乳がん AC 療法点滴投与開始時刻に合わせた薬剤師内服指導による悪心・嘔吐の報告(第2報). 癌と化学療法 41(9):1129-1133, 2014.
- 井本滋:センチネルリンパ節転移陽性乳癌の治療方針. 癌と化学療法 41(13):2560-2562, 2014.
- Mukai H, Noguchi S, Akiyama F, Inaji H, Iwase H, Horiguchi J, Kurebayashi J, Hirata K, Toi M, Kurosumi M, Kohno N, Nishimura R, Nakamura S, Imoto S, Iwase T, Endo T, Saeki T, Ogawa Y, Ito Y, Tokuda Y, Ikeda T: 2013 clinical practice guidelines (The Japanese Breast Cancer Society): history, policy and mission. Breast Cancer 22(1):1-4, 2015.

著書

- 井本滋:がん薬物療法キードラッグ65. 古瀬純司編. 東京, 中外医学社, 2014.
- 井本滋:乳癌. ガイドライン外来診療2014. 泉孝英編. 東京, 日経メディカル開発, 2014.

小児外科学教室

講演

- 鮫島由友, 葦澤融司, 浮山越史, 渡邊佳子, 望月智弘, 佐藤順一郎:当院における膈ヘルニア手術の工夫(簡単に誰でもできる切り株法). 第51回小児外科学会総会, 大阪, 2014年5月8日.
- 渡邊佳子, 葦澤融司, 浮山越史, 望月智弘, 鮫島由友:膈部小切開で手術を行った7例の検討. 第51回日本小児外科学会学会術集会, 大阪, 2014年5月8日.
- 浮山越史, 長村敏生, 岩中督:「小児腸重積症の診療ガイドライン」公表後調査, 第51回日本小児外科学会学会術集会, 大阪, 2014年5月10日.
- 渡邊佳子, 葦澤融司, 浮山越史, 望月智弘, 鮫島由友:当科における術後イレウスの検討, 第28回日本小児救急医学会学会術集会, 横浜, 2014年6月6日.
- 鮫島由友, 葦澤融司, 浮山越史, 渡邊佳子, 佐藤順一郎:先天性小腸閉鎖症と胎便性腹膜炎. 第112回東京小児外科研究会, 東京, 2014年6月17日.
- 浮山越史:小児救急における小児外科疾患-臨床・看護の現場で役立つ知識-. 第9回小児救急医療ワークショップ in 北九州, 北九州市, 2014年8月2日.
- 浮山越史:こどもにもアンチエイジングは必要だ. 日本抗加齢医学会専門医・指導士認定委員会主催講演会, 名古屋, 2014年10月5日.
- 鮫島由友, 葦澤融司, 浮山越史, 渡邊佳子, 佐藤順一郎:先天性食道閉鎖症の特殊型-Kluth IIIb3型. 第49回関東甲信越地方会, 千葉, 2014年10月11日.
- 佐藤順一郎, 葦澤融司, 浮山越史, 渡邊佳子, 鮫島由友:上顎体と鑑別を要した右頬粘膜の骨外性歯牙腫の一例. 第49回日本小児外科学会関東甲信越地方会, 千葉, 2014年10月11日.
- Ikeda T, Ukiyama E, Nirasawa Y, Kohno N: A case of ectopic odontoma : a rare and unusual case report of eruption of compound odontoma. The 31st Congress of the Pan - Pacific Surgical Association Japan Chapter, Taipei, November 2nd, 2014.

- 渡邊佳子, 葦澤融司, 浮山越史, 鮫島由友, 佐藤順一郎, 楊国昌, 野村優子, 保科弘明:当院における外科疾患を伴った13, 18trisomy 症例の検討. 第30回日本小児外科学会秋季シンポジウム, 淡路島, 2014年11月1日.
- 渡邊佳子, 葦澤融司, 浮山越史, 佐藤順一郎:当院で経験したボタン電池誤飲症例の検討. 第76回日本臨床外科学会総会, 郡山, 2014年11月21日.
- 浮山越史:小児救急における超音波検査. 第5回東京井の頭教育セミナー, 三鷹市, 2014年12月6日.

平成25年度追加分

講演

- 渡邊佳子, 葦澤融司, 浮山越史, 望月智弘, 鮫島由友:当院で経験したボタン電池誤飲症例の検討. 第50回日本腹部救急医学会総会, 東京, 2014年3月6日.
- 望月智弘, 葦澤融司, 浮山越史, 渡邊佳子, 鮫島由友:DIC を初発症状として診断された先天性胆道拡張症の1例. 第832回外科集談会, 東京, 2014年3月8日.

論文

- 浮山越史, 葦澤融司, 渡邊佳子, 望月智弘, 鮫島由友:腹部救急における超音波検査のpitfall. 小児外科 46: 360-364, 2014.
- 浮山越史:腸重積症の非観血的整復. 小児科診療 77: 1521-1524, 2014.
- 渡邊佳子, 葦澤融司:直腸肛門奇形. こどもケア 9(3):58-61, 2014.

救急医学教室

講演

- 樽井武彦, 大田原正幸, 宮国泰彦, 玉田尚, 山口芳裕:救命救急センターにおける一般外科手術症例の変遷〜外科系救急医の果たす役割について〜. 第114回日本外科学会定期学術集会, 京都, 2014年4月5日.
- 山田賢治, 海田賢彦, 山口芳裕:重症熱傷に合併した手熱傷の治療について. 第57回日本手外科学会学会術集会, 宜野湾, 2014年4月18日.
- 大畑徹也, 丸野秀人, 樽井武彦, 山口芳裕, 市川正一:ガス壊疽に対する予後予測因子の検討-救命と機能を中心に-. 第87回日本整形外科学会, 神戸, 2014年5月24日.
- 大森達矢, 山田賢治, 守永広征, 松田岳人, 八木橋敏, 樽井武彦, 松田剛明, 山口芳裕:胸骨圧迫に伴う肋骨骨折の発生について. 第17回日本臨床救急医学会総会・学術集会, 宇都宮, 2014年5月31日.
- 海田賢彦, 加藤聡一郎, 宮国泰彦, 庄司高裕, 宮内洋, 樽井武彦, 山田賢治, 山口芳裕:広範囲熱傷における自家培養表皮移植の意義. 第40回日本熱傷学会総会・学術集会, さいたま, 2014年6月5日.
- 加藤聡一郎, 海田賢彦, 宮内洋, 樽井武彦, 山田賢治, 山口芳裕:重症熱傷患者の集学的治療と広域医療連携における当院の役割. 第40回日本熱傷学会総会・学術集会, さいたま, 2014年6月6日.
- 宮国泰彦, 山田賢治, 守永広征, 大田原正幸, 加藤聡一郎, 海田賢彦, 玉田尚, 宮内洋, 樽井武彦, 山口芳裕:左心房破裂の診断に難渋した墜落外傷の一救命例. 第28回日本外傷学会, 東京, 2014年6月26日.
- 大畑徹也, 星亨, 丸野秀人, 山口芳裕, 市村正一:精神疾患患者における骨盤輪骨折の検討. 第40回日本骨折治療学会, 熊

- 本, 2014年6月27日.
9. 松隈卓徳, 大畑徹也, 丸野秀人, 山口芳裕, 市村正一: 多発外傷に伴う踵骨骨折の治療成績. 第40回日本骨折治療学会, 熊本, 2014年6月27日.
 10. 加藤聡一郎, 大畑徹也, 山下紗季, 星亨, 市村正一, 山口芳裕: 右肩甲帯部重複損傷に同側鎖骨複合骨折と伴った重症外傷の治療経験. 第40回日本骨折治療学会, 熊本, 2014年6月28日.
 11. 大畑徹也: interactive ease presentation 症例4. 第1回重症四肢外傷シンポジウム, 札幌, 2014年7月19日.
 12. 大畑徹也: この重症解放骨折 貴方ならどうする? 症例10. 第1回重症四肢外傷シンポジウム, 札幌, 2014年7月19日.
 13. 山口芳裕: 足もとの化学兵器. 第36回日本中毒学会総会・学術集会, 東京, 2014年7月26日.
 14. 山口芳裕: 爆発の話～血漿分画製剤の必要性～. 第9回岐阜救急集中治療セミナー, 岐阜, 2014年9月26日.
 15. 山口芳裕: 有事における我が国の医療の対応能力を問う. 名古屋市などの地方都市では, その対応と現状は?. 第4回安全保障・危機管理セミナー, 名古屋, 2014年10月25日.
 16. 大畑徹也, 樽井武彦, 加藤聡一郎, 山口芳裕: 外傷に起因する急性四肢コンパートメント症候群の治療成績の検討. 第42回日本救急医学会総会・学術集会, 福岡, 2014年10月28日.
 17. 海田賢彦, 宮国泰彦, 庄司高裕, 玉田尚, 宮内洋, 樽井武彦, 山田賢治, 山口芳裕: 熱傷患者における新しい鎮静鎮痛管理法の功罪. 第42回日本救急医学会総会・学術集会, 福岡, 2014年10月28日.
 18. 小泉健雄, 和田貴子, 千田晋治, 井田善明, 神山麻由子, 久保祐美子, 久米梢子, 山口芳裕: いのちを守ることを伝えるために. 第42回日本救急医学会総会・学術集会, 福岡, 2014年10月28日.
 19. 加藤聡一郎, 守永広征, 大田原正幸, 玉田尚, 松田岳人, 宮内洋, 樽井武彦, 山田賢治, 山口芳裕: 重篤な成人発症インフルエンザ脳症の臨床像と検査結果の推移. 第42回日本救急医学会総会・学術集会, 福岡, 2014年10月28日.
 20. 大田原正幸, 玉田尚, 伊東杏里, 鈴木準, 小野寺亮, 守永広征, 松田岳人, 樽井武彦, 山田賢治, 山口芳裕: Segmental arterial mediolysis (SAM) による腹部内臓動脈瘤破裂の2例. 第42回日本救急医学会総会・学術集会, 福岡, 2014年10月28日.
 21. 樽井武彦, 西沢良平, 大畑徹也, 松田岳人, 福島秀起, 山田賢治, 松田剛明, 山口芳裕: 重症敗血症の予後は変えられるか. 第42回日本救急医学会総会・学術集会, 福岡, 2014年10月29日.
 22. 山田賢治, 海田賢彦, 大畑徹也, 庄司高裕, 井上孝隆, 玉田尚, 松田岳人, 宮内洋, 樽井武彦, 山口芳裕: 人工呼吸管理を要した頸髄損傷の6例. 第42回日本救急医学会総会・学術集会, 福岡, 2014年10月29日.
 23. 小倉裕司, 丸藤哲, 齋藤大蔵, 武山直志, 久志本成樹, 藤島清太郎, 真弓俊彦, 荒木恒敏, 池田弘人, 小谷穰治, 三木靖雄, 白石振一郎, 鈴木幸一郎, 鈴木泰, 田熊清継, 鶴田良介, 山口芳裕, 山下典雄, 相川直樹: sepsis 患者における急性期 DIC スコアの意義. 第42回日本救急医学会総会・学術集会, 福岡, 2014年10月29日.
 24. 西沢良平, 宮国泰彦, 山田賢治, 笹沢俊吉, 宮方基行, 海田賢彦, 宮内洋, 樽井武彦, 山口芳裕: 重症発生し重篤化した院内クレブシエラ肺炎の1例. 第42回日本救急医学会総会・学術集会, 福岡, 2014年10月30日.
 25. Tarui T, Yamada K, Matsuda T, Yamaguchi Y: Emergency Medicine in Japan. The 32nd Congress of the Pan-Pacific Surgical Association Japan Chapter, Taiwan, November 1st, 2014.
 26. Miyakuni Y, Tarui T, Suzuki J, Onodera R, Shoji T, Kaita Y, Miyauchi H, Fukushima H, Yamada K, Matsuda T, Yamaguchi Y: A survival case of severe deep neck abscess required extensive cervical excision. The 32nd Congress of the Pan-Pacific Surgical Association Japan Chapter, Taiwan, November 1st, 2014.
 27. 山口芳裕: 脳卒中診療を支える救急医療システム. 第20回日本脳神経外科救急学会, 東京, 2015年1月30日.
 28. 松田剛明: ER体制について. 第20回日本脳神経外科救急学会, 東京, 2015年1月30日.
 29. 笹沢俊吉, 伊東杏里, 鈴木準, 西沢良平, 小野寺亮, 宮国泰彦, 庄司高裕, 宮内洋, 福島秀起, 樽井武彦, 山田賢治, 山口芳裕: 鏡視下手術を併用し低侵襲に外科性横隔膜損傷を修復し得た鋭的胸腹部外傷の1例. 第65回日本救急医学会関東地方会, 横浜, 2015年2月7日.
 30. 伊東杏里, 守永広征, 笹沢俊吉, 鈴木準, 西沢良平, 大田原正幸, 加藤聡一郎, 松田岳人, 宮内洋, 樽井武彦, 山田賢治, 山口芳裕: 腎動脈瘤破裂による出血性ショックに対しバルーンカテーテルによるflow control下にコイル塞栓術を行い救命し得た1例. 第65回日本救急医学会関東地方会, 横浜, 2015年2月7日.
 31. 鈴木準, 大田原正幸, 伊東杏里, 笹沢俊吉, 鈴木準, 西沢良平, 切刀主税, 樽井武彦, 山田賢治, 山口芳裕: 市販薬大量服用による重症カフェイン中毒に対し経時的に血中濃度測定を行い治療した3症例の検討. 第65回日本救急医学会関東地方会, 横浜, 2015年2月7日.
 32. 山口芳裕: 足下の危機管理～遺棄化学兵器の処理と血漿分画製剤の有用性と確保の重要性～. 第20回日本集団災害医学会総会・学術集会, 立川, 2015年2月26日.
 33. 山口芳裕: 原発事故の特殊性と対応の留意点. 第20回日本集団災害医学会総会・学術集会, 立川, 2015年2月26日.
 34. 山口芳裕: 海洋国日本の災害対応の未来～艦船を利用した災害医療の組織的介入～. 第20回日本集団災害医学会総会・学術集会, 立川, 2015年2月27日.
 35. 加藤聡一郎, 山田賢治, 宮内洋, 山口芳裕: 重症熱傷患者都内後方搬送訓練からみた今後の東京DMATの役割. 第20回日本集団災害医学会総会・学術集会, 立川, 2015年2月27日.
 36. 山口芳裕: 東京オリンピックの医療対応. 第20回日本集団災害医学会総会・学術集会, 立川, 2015年2月28日.
 37. 山口芳裕: 東京DMAT NBC 特殊チーム. 第20回日本集団災害医学会総会・学術集会, 立川, 2015年2月28日.

論文

1. Ogura H, Yamaguchi Y¹, Gando S¹, Saitoh D¹, Takeyama N¹, Kushimoto S¹, Fujishima S¹, Mayumi T¹, Araki T¹, Ikeda H¹, Kotani J¹, Miki Y¹, Shiraishi S¹, Suzuki K¹, Suzuki Y¹, Takuma K¹, Tsuruta R¹, Yamashita N¹, Aikawa N¹ (the Japanese Association for Acute Medicine Sepsis Registry Study Group): Epidemiology of severe sepsis in Japanese intensive care units: prospective multicenter study. Journal of Infection and Chemotherapy 20:157-162, 2014.
2. Fujishima S, Yamaguchi Y¹, Gando S¹, Saitoh D¹, Takeyama N¹, Kushimoto S¹, Mayumi T¹, Araki T¹, Ikeda H¹, Kotani J¹, Miki Y¹, Shiraishi S¹, Suzuki K¹, Suzuki Y¹, Ogura H¹, Takuma K¹, Tsuruta R¹, Yamashita N¹, Aikawa N¹ (the Japanese Association

for Acute Medicine Sepsis Registry Study Group): A multicenter, prospective evaluation of quality of care and mortality in Japan based on the Surviving Sepsis Campaign guidelines. *Journal of Infection and Chemotherapy* 20:115-120, 2014.

- 久保佑美子, 岡本博照¹, 小泉健雄², 山口芳裕³, 松田剛明³, 照屋浩司⁴, 和田貴子²(¹杏林大・医・公衆衛生, ²杏林大・保・救急救命, ³杏林大・医・救急医学, ⁴杏林大・保・公衆衛生): 西多摩医療圏の一病院における二次救急患者の搬送実態: 地理的要因からみた分析. *日臨救医学会誌* 17:522-529, 2014.
- 宇野重起, 山口芳裕¹(¹杏林大・医・救急医学): 高齢者の救命の限界に挑戦する. *救急医* 38:1039-1046, 2014.
- 玉田尚, 山口芳裕¹(¹杏林大・医・救急医学): 熱傷患者に対する麻酔と周術期管理. *救急医* 38:1278-1283, 2014.
- 山口芳裕: 地域の災害対応(東京 DMAT). *日病院会誌* 61:1114-1120, 2014.
- 石川幸史, 山田賢治¹, 樽井武彦¹, 海田賢彦¹, 八木橋敏^{1,2}, 松田剛明¹, 島崎修次^{1,3}, 山口芳裕¹(¹杏林大・医・救急医学, ²救急救命東京研修所, ³国士舘大): 病院前救護における熱傷面積評価と気道熱傷を疑う要因について. *日臨救医学会誌* 17:782-788, 2014.
- 道廣岳, 星亨¹, 工藤文孝¹, 山岸賢一郎¹, 大畑徹也², 加藤聡一郎², 市村正一³(¹東大和病院, ²杏林大・医・救急医学, ³杏林大・医・整形外科): ガス壊疽の治療成績. *日本骨・関節感染症学会誌* 28:1-4, 2015.
- 加藤聡一郎, 星亨¹, 大畑徹也², 工藤文孝¹, 山岸賢一郎¹(¹東大和病院, ²杏林大・医・救急医学): 創外固定器を definitive fixator として用いた下肢重度開放骨折の検討. *日本創外固定・骨延長学会誌* 26:69-75, 2015.

著書

- 山田賢治, 山口芳裕: 7むち打ち症(むち打ち損傷 whiplash injury). *M.P. Medical Practice 内科総合誌*. 東京, 文光堂, 2014. p.140-142.
- 玉田尚, 山口芳裕: 症例検討9熱傷患者「病態変化を見極め, 二手三手を見据えた対応を」. *LiSA コレクション「症例で学ぶ新しい周術期の輸液管理」*. 松永明. 東京, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 2014. p.96-105.
- 山口芳裕: N 災害の現場で, 医療支援を得ることの意義～福島原発事故対応を踏まえて～. *NBC 災害活動マニュアル*. 東京, イカロス出版, 2014. p.32-38.
- 山口芳裕: 「失敗の本質」に学ぶ災害時の医療の組織戦のありかた. *Pharma Medica*. 東京, メディカルレビュー社, 2015. p.45-48.

特許等知的財産関係, 報告書

- 山口芳裕: 消防力の整備指針及び消防水利の基準について. 消防力の整備指針及び消防水利の基準に関する検討会報告書 2014年度.

その他

- 山口芳裕: 救急ワークステーションについてコメント, *日本経済新聞*, 2014年7月10日.
- 山口芳裕: 「生活 患者を生きる」東京 DMAT 6 情報編～阪神大震災の反省から～, *朝日新聞*, 2014年8月3日.
- 山口芳裕: 「情報まるごと」熱中症について解説, *NHK*, 2014年8月8日.
- 山口芳裕: 「モーニングバード」スズメバチに刺された時の対処法について解説, *テレビ朝日*, 2014年8月18日.

- 山口芳裕: 福島第一原発での教訓を踏まえた突入撤退判断システムの開発について紹介, *産経新聞*, 2014年10月12日.
- 山口芳裕: 「テレ玉イブニング NEWS」原発事故を教訓に「突入撤退判断システム」を開発したことが紹介, *テレビ埼玉*, 2015年3月4日.
- 山口芳裕: 「ニュースウォッチ9」乳頭温泉での硫化水素ガス事故について危険性について解説, *NHK*, 2015年3月18日.

脳神経外科学教室

講演

- Maruyama K, Yokoi H, Yamaguchi R, Noguchi A, Kono N, Shikawa Y: Optimization of the role of endoscope in transsphenoidal surgery. The 6th World Congress for Endoscopic Surgery of the Brain, Skull Base and Spine, Italy, April 4th, 2014.
- 岡田啓, 脊山英徳, 鳥居正剛, 岡村耕一, 山田深, 傳法倫久, 塩川芳昭: CEA 周術期における INVOS の使用経験. 第23回脳神経外科手術と機器学会, 福岡, 2014年4月18日.
- 岡村耕一, 脊山英徳, 岡野晴子, 傳法倫久, 山田深, 岡島康友, 塩川芳昭: 高齢者におけるアルテプラゼ静脈注射療法について. 第27回日本老年脳神経外科学会, 新潟, 2014年4月25日.
- 永根基雄: 神経腫瘍の標準治療と多施設共同臨床試験. 第32回日本脳腫瘍病理学会, 徳島, 2014年5月23日.
- 永根基雄: Glioma の遺伝子異常と治療成績. 第32回日本脳腫瘍病理学会, 徳島, 2014年5月23日.
- 永根基雄: 膠芽腫に対するベバシズマブ治療と効果判定. 第32回日本脳腫瘍病理学会, 徳島, 2014年5月24日.
- 小林啓一: Bevacitumab の導入で何が変わったか? ～初発例・再発例をあげて. 脳腫瘍治療セミナー, 東京, 2014年5月30日.
- 岡村耕一: 日本人の脳梗塞治療を考える. 第9回富士・玄海 Stroke Conference, 福岡, 2014年5月30日.
- 岡村耕一, 坪川 民治, 城下博夫, 塩川芳昭, 轉石小百合, 松原幸枝, 宮東 昭彦, 川上 速人: フリーラジカルスカベンジャー, エダラボンによる出血性脳梗塞の抑制, 高血糖ラットモデルを用いた実験. 第14回日本抗加齢医学会総会, 大阪, 2014年6月6日.
- 野口明男, 塩川芳昭: 日本人における MRI 皮質下病変の実態調査. 第23回日本脳ドック学会総会, 下関, 2014年6月7日.
- 横井秀格, 丸山啓介, 高山信之, 田中秀峰, 松本祐磨, 木村奈津子, 塩川芳昭, 甲能直幸: 脊索腫との鑑別が困難であった斜体部悪性リンパ腫の一例. 第26回日本頭蓋底外科学会, 千葉, 2014年6月19日.
- 丸山啓介, 横井秀格, 山口竜一, 野口明男, 甲能直幸, 塩川芳昭: 傍鞍部腫瘍に対する endoscopic skull basesurgery の適応と限界. 第26回日本頭蓋底外科学会, 千葉, 2014年6月19日.
- 佐藤栄志, 小西善史, 林基高, 小松原弘一郎, 笹森寛生, 塩川芳昭: ステント支援下脳動脈瘤塞栓術の初期・中期治療成績. 第20回日本血管内治療学会, 和歌山, 2014年6月20-21日.
- 永根基雄: 再発膠芽腫に対する標準治療: ベバシズマブ単独療法の再発形態解析とベバシズマブ基盤療法の展望. 第21回多摩脳腫瘍研究会, 三鷹, 2014年6月21日.
- 齊藤邦昭, 小林啓一, 千葉知宏, 戸原由紀子, 五明美穂, 岡田啓, 野口明男, 塩川芳昭, 菅間博, 永根基雄: Genetic marker 陰性の Anaplastic Oligodendroglioma の症例, 第21回多摩脳腫瘍研究会, 東京, 2014年6月21日.

16. 久米賢, 田中雅樹, 李政勲, 島田篤, 丸山啓介, 野口明男, 塩川芳昭: 治療に難渋している Long-standing overt ventriculomegaly in adults (LOVA)の1例. 三鷹ニューロカンファレンス, 多摩, 2014年6月26日.
17. 小松原弘一郎, 佐藤栄志, 小西善史, 塩川芳昭: 経静脈的塞栓にて access に困難を要した Cavernous Sinus dural AVF の1症例. 第11回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会関東地方会・学術集会, 東京, 2014年7月12日.
18. 岡田啓, 丸山啓介, 金太一, 野口明男, 永根基雄, 塩川芳昭: コンピュータグラフィックスによる術前シミュレーションと iPad での閲覧の有用性. 第14回日本術中画像情報学会, 東京, 2014年7月12日.
19. 齊藤邦昭, 武笠晃丈, 鈴木雄一, 井野賢司, 国松聡, 増谷佳孝, 大谷亮平, 高柳俊作, 田中將太, 齊藤延人: Q ball imaging トラクトグラフィ融合ナビゲーションの有用性. 第14回日本術中画像情報学会, 東京, 2014年7月12日.
20. 永根基雄, 小林啓一, 齊藤邦昭, 岡田啓, 塩川芳昭: Temozolomide-refractory 再発膠芽腫に対する bevacizumab 基盤療法. 第27回東京脳腫瘍治療懇話会, 東京, 2014年7月4日.
21. Nagane M, Lee J, Shishido-Hara Y, Suzuki K, Shimizu S, Umino M, Kobayashi K, Shiokawa Y (Lecture): Prognostic factors for primary central nervous system lymphomas treated with high-dose methotrexate-based chemo-radiotherapy. The 20th International Conference on Brain Tumor Research and Therapy, U.S.A, July 23rd, 2014.
22. 永根基雄: 悪性神経膠腫に対する Bevacizumab 治療: Arms or Foe?. 第52回春秋コンgres, 東京, 2014年8月2日.
23. 久米賢, 田中雅樹, 丸山啓介, 横井秀格, 塩川芳昭: transthemoidal meningoencephalocele により中年以降に非外傷性髄液鼻漏を発症した1例. 第124回脳神経外科関東地方会, 東京, 2014年9月6日.
24. 末松慎也, 高井敬介, 石田渉, 岩室宏一, 谷口真: 胸椎部脊髄症: 軽微な脊髄圧迫症例の画像所見の特徴と手術転帰. 杏林大学脳神経外科夏季セミナー, 多摩, 2015年9月12日.
25. 岡田啓, 小林啓一, 野口明男, 齊藤邦昭, 永根基雄, 塩川芳昭: 術中モニタリング及び術中受注蛍光診断を併用したナビゲーション下腫瘍摘出の pitfall. 第19回日本脳腫瘍の外科学会, 東京, 2014年9月12日.
26. 久米賢, 丸山啓介, 山口竜一, 野口明男, 塩川芳昭: 傍鞍部腫瘍に対する endoscopic skull base surgery. 第19回日本脳腫瘍の外科学会, 東京, 2014年9月12日.
27. 佐藤栄志: 破裂脳底動脈先端部動脈瘤の一例. 第8回東京脳卒中の血管内治療セミナー, 東京, 2014年9月20日.
28. 永根基雄: 中枢神経系原発悪性リンパ腫: 治療の進歩と展望. PCNSL - 頭蓋内悪性リンパ腫. 広島, 2014年9月26日.
29. Okada K, Maruyama K, Torii M, Okamura K, Seyama H, Yamada S, Dembo T, Shiokawa Y: Experience of in Vivo Optical Spectroscopy during and after carotid endarterectomy. 12th Japanese - Korean Friendship Conference on Surgery for Cerebral Stroke, Osaka, September 26th, 2014.
30. Maruyama K, Tanaka M, Okada K, Noguchi A, Shiokawa Y: Multimodality surgery including preoperative simulation for vascular malformations in the eloquent area. 12th Japanese - Korean Friendship Conference on Surgery for Cerebral Stroke, Osaka, September 26th, 2014.
31. 木村唯子, 川崎隆, 谷口真, 横地房子, 海津敬倫, 塩川芳昭, 渡辺英寿: DBS 手術で視床亜核のMRIターゲティングは可能か?. 第73回日本脳神経外科学会総会, 東京, 2014年10月9日.
32. 野口明男, 塩川芳昭: Trans laminar terminalis approach における術野の定量解析. 第73回日本脳神経外科学会総会, 東京, 2014年10月9日.
33. 武笠晃丈, 相原功輝, 齊藤邦昭, Johnson Brett E, 高柳俊作, 上田宏生, 山本尚吾, 辰野健二, 永江玄太, 成田善孝, 永根基雄, 西川亮, 植木敬介, Costello Joseph F, 油谷浩幸, 齊藤延人: 化学療法剤による神経膠腫ゲノム不安定性の加速の可能性. 第73回日本脳神経外科学会総会, 東京, 2014年10月9日.
34. 田中雅樹, 塩川芳昭: DICOM データ計測による後角穿刺点の検討. 第73回日本脳神経外科学会総会, 東京, 2014年10月9日.
35. 岡田恭子, 永根基雄, Wendy Ha, Mustafa Khasraw, Kerrie L McDonald: PARP inhibitor 併用 TMZ 療法の再発及び temozolomide 耐性膠芽腫細胞株に対する効果. 第73回日本脳神経外科学会総会, 東京, 2014年10月9日.
36. 岡田啓, 小林啓一, 野口明男, 齊藤邦昭, 塩川芳昭, 永根基雄: 膠芽腫における accelerated failure time モデルを用いた自験例の検討. 第73回日本脳神経外科学会総会, 東京, 2014年10月9日.
37. 佐藤研隆, 塩川芳昭, 鳥居正剛, 脊山英徳, 岡村耕一: 高齢者における STA-MCA bypass 術の治療成績. 第73回日本脳神経外科学会総会, 東京, 2014年10月9日.
38. 相原功輝, 武笠晃丈, 後藤健吾, 永江玄太, 齊藤邦昭, 成田善孝, 油谷浩幸, 齊藤延人: ゲノム解析に基づいた小児脳腫瘍治療戦略の成人脳腫瘍への応用の可能性. 第73回日本脳神経外科学会総会, 東京, 2014年10月9日.
39. 佐々木重嘉, 岡村耕一, 熊切敦, 河合拓也, 田中雅樹, 塩川芳昭: SAH 患者における PiCCO モニタリングの使用経験. 第73回日本脳神経外科学会総会, 東京, 2014年10月9日.
40. 丸山啓介, 金太一, 野口明男, 永根基雄, 塩川芳昭: iPad を用いたコンピュータグラフィックスによる術前シミュレーション操作. 第73回日本脳神経外科学会総会, 東京, 2014年10月10日.
41. 熊切敦, 塩川芳昭, 小林祥泰: くも膜下出血における脳血管攣縮の頻度と合併症の関係. 第73回日本脳神経外科学会総会, 東京, 2014年10月10日.
42. 鳥居正剛, 脊山英徳, 岡村耕一, 小松原弘一郎, 佐藤研隆, 佐藤栄志, 小西善史, 塩川芳昭: 頸動脈狭窄症に対する当施設での血行再建術の適応と治療成績. 第73回日本脳神経外科学会総会, 東京, 2014年10月10日.
43. 齊藤邦昭, 武笠晃丈, 永江玄太, 相原功輝, 大谷亮平, 高柳俊作, 小俣麻友, 田中將太, 成田善孝, 植木敬介, 西川亮, 永根基雄, 油谷浩幸, 齊藤延人: メチル化網羅的解析により同定された神経膠腫悪性転化に伴う脱メチル化. 第73回日本脳神経外科学会総会, 東京, 2014年10月10日.
44. 小林啓一, 齊藤邦昭, 塩川芳昭, 永根基雄: 再発膠芽腫に対する各種化学療法における再発形態と予後の解析. 第73回日本脳神経外科学会総会, 東京, 2014年10月10日.
45. 永根基雄: 再発膠芽腫に対する標準治療: ベバシズマブ単独療法の再発形態解析とベバシズマブ基盤療法の展望. 第73回日本脳神経外科学会学術総会, 東京, 2014年10月10日.
46. 島田大輔, 堂福翔吾, 野村昌志, 広川大輔, 齊藤徹, 寺西裕, 堀川弘史, 太田貴裕, 水谷 徹: 高齢者の CEA についての検

- 討. 第71回日本脳神経外科学会総会, 東京, 2014年10月11日.
47. 佐藤栄志, 小松原弘一郎, 島田篤, 林基高, 笹森寛生, 河合拓也, 脊山英徳, 小西善史, 塩川芳昭: スtent支援下脳動脈瘤塞栓術の初期・中期治療成績—特に虚血性合併症について. 第73回日本脳神経外科学会総会, 東京, 2014年10月11日.
 48. 岡村耕一, 鳥居正剛, 傳法倫久, 山田深, 岡島康友, 塩川芳昭: 高齢者におけるアルテプラザー静脈注射療法について. 第73回日本脳神経外科学会総会, 東京, 2014年10月11日.
 49. 山口竜一, 野口明男, 丸山啓介, 田中雅樹, 小林啓一, 小松原弘一郎, 佐藤栄志, 塩川芳昭: 当院における未破裂脳動脈瘤診療の実態. 第73回日本脳神経外科学会総会, 東京, 2014年10月11日.
 50. 小松原弘一郎, 佐藤栄志, 笹森寛生, 鳥居正剛, 傳法倫久, 塩川芳昭: 急性期脳底動脈閉塞に対する血行再建療法の治療成績. 第73回日本脳神経外科学会総会, 東京, 2014年10月11日.
 51. 本田有子, 野口明男, 牛場克明, 田村晃, 櫻井孝, 塩川芳昭: 日本人における MRI 皮質下病変の実態調査. 第73回日本脳神経外科学会総会, 東京, 2014年10月11日.
 52. 阿部泰明, 横矢重臣, 丸山啓介, 野口明男, 佐藤栄志, 塩川芳昭: 意識障害を伴う基礎疾患を有する慢性硬膜下血腫患者の重症化の検討. 第73回日本脳神経外科学会総会, 東京, 2014年10月11日.
 53. 久米賢, 田中雅樹, 李政勲, 島田篤, 丸山啓介, 野口明男, 塩川芳昭: 治療に難渋した Long-standing overt ventriculomegaly in adults (LOVA) の1例. 日本水頭症脳脊髄液学会第7回学術集会, 東京, 2014年10月26日.
 54. 久米賢, 丸山啓介, 田中雅樹, 野口明男, 塩川芳昭: 視床への進展を二期的に全摘出した松果体部巨大奇形腫の1例. 第11回脳神経外科手術夜話, 多摩, 2014年10月31日.
 55. 永根基雄: 悪性脳腫瘍の化学療法: Current Trends and Challenges. 平成26年度鹿児島県医師会生涯教育認定申請講座, 鹿児島, 2014年11月7日.
 56. 小林啓一, 野口明男, 斎藤邦昭, 塩川芳昭, 永根基雄: 術後不全麻痺と後頭葉脳梗塞を生じた痛恨の側頭葉巨大膠芽腫の1例. 第50回多摩脳神経外科懇話会, 武蔵野, 2014年11月13日.
 57. 今井大也, 佐藤研隆, 田中雅樹, 永根基雄, 塩川芳昭: 膠芽腫の放射線化学療法後に発症した中大脳動脈閉塞を呈した1例. 第43回杏林医学会総会, 多摩, 2014年11月15日.
 58. 川井田善太郎, 小松原弘一郎, 丸山啓介, 佐藤栄志, 塩川芳昭: 横・S 状静脈洞部硬膜動静脈瘻に対し観血的導入動脈遮断術が有効であった1例. 第43回杏林医学会総会, 多摩, 2014年11月15日.
 59. 久米賢, 田中雅樹, 李政勲, 島田篤, 丸山啓介, 野口明男, 塩川芳昭: 治療に難渋した Long-standing overt ventriculomegaly in adults (LOVA) の1例. 第43回杏林医学会総会, 多摩, 2014年11月15日.
 60. Nagane M, Kobayashi K, Saito K, Shiokawa Y: Recurrent patterns of bevacizumab monotherapy for recurrent primary glioblastoma. The 19th Annual Scientific Meeting and Education Day of the Society for Neuro-Oncology, U.S.A. November 13th-16th, 2014.
 61. Saito K, Mukasa A, Nagae G, Aihara K, Omata M, Otani R, Takayanagi S, Tanaka S, Shibahara J, Takahashi M, Momose T, Shimamura T, Narita Y, Ueki K, Nishikawa R, Nagane M, Miyano S, Aburatani H, Saito N: Genome-wide methylation analysis identifies genomic DNA demethylation during malignant progression of gliomas. 19th Annual Scientific Meeting of the Society for Neuro-Oncology, U.S.A, November 16th, 2014.
 62. 齊藤邦昭, 武笠晃丈, 鈴木雄一, 井野賢司, 大谷亮平, 高柳俊作, 田中將太, 国松聡, 増谷佳孝, 齊藤延人: Q ball imaging tractography を用いた脳腫瘍手術. 第32回日本脳腫瘍学会学術集会, 浦安, 2014年11月30日.
 63. 岡田啓, 小林啓一, 野口明男, 斎藤邦昭, 塩川芳昭, 永根基雄: 膠芽腫における accelerated failure time モデルを用いた自験例の検討. 第32回日本脳腫瘍学会学術集会, 千葉, 2014年11月30日.
 64. 永根基雄, 福村知隆, 上野敏秀, 李 政勲, 原由紀子, 三島一彦, 市村幸一, 武笠晃丈, 成田善孝, 西川亮, 間野博行: 中枢神経系原発悪性リンパ腫における全エクソンシーケンスによる遺伝子異常解析. 第32回日本脳腫瘍学会学術集会, 千葉, 2014年12月1日.
 65. 永根基雄, 小林啓一, 齊藤邦昭, 塩川芳昭: ベバシズマブ単独療法の再発形態と予後解析. 第32回日本脳腫瘍学会学術集会, 千葉, 2014年12月1日.
 66. 小林啓一, 斎藤邦昭, 佐々木重嘉, 岡田啓, 塩川芳昭, 永根基雄: 初発中枢神経系原発悪性リンパ腫に対する R-MPV 療法の治療成績. 第32回日本脳腫瘍学会学術集会, 千葉, 2014年12月1日.
 67. 小林啓一, 斎藤邦昭, 佐々木重嘉, 岡田啓, 塩川芳昭, 永根基雄: 再発悪性神経膠腫に対するベバシズマブ+ニムスチン併用療法 (BEVAC 療法) の試み. 第32回日本脳腫瘍学会学術集会, 千葉, 2014年12月1日.
 68. 岡田恭子, 永根基雄, Wendy Ha, Chung Sylvia, Mustafa Khasraw, Kerrie L McDonald: PARP inhibitor 併用 TMZ 療法の再発及び temozolomide 耐性膠芽腫細胞株に対する効果. 第32回日本脳腫瘍学会学術集会, 千葉, 2014年12月1日.
 69. 佐藤栄志, 小松原弘一郎, 笹森寛生, 島田篤, 林基高, 河合拓也, 脊山英徳, 小西善史, 塩川芳昭: スtent支援下脳動脈瘤塞栓術の中期治療成績. 第30回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術総会, 横浜, 2014年12月4日.
 70. 笹森寛生, 鳥居正剛, 小松原弘一郎, 傳法倫久, 佐藤栄志, 塩川芳昭: 杏林大学における tPA 静注療法無効例に対する血管内治療の現状. 第30回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術総会, 横浜, 2014年12月4日.
 71. 林基高, 畑中良, 宇都宮利史, 山下圭一, 原田洋一, 畑山徹, 河野拓司, 佐藤栄志, 塩川芳昭, 小西善史, 土屋一洋, 飯塚有応: 手術加療を要した硬膜動静脈瘻の2例. 第30回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術総会, 横浜, 2014年12月6日.
 72. 小松原弘一郎, 佐藤栄志, 笹森寛生, 鳥居正剛, 傳法倫久, 塩川芳昭: 破裂前交通動脈瘤不完全クリッピングに対してコイル塞栓術を行った1例. 第30回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術総会, 横浜, 2014年12月4-6日.
 73. 久米賢, 阿部泰明, 田中雅樹, 丸山啓介, 野口明男, 永根基雄, 塩川芳昭: 顎関節に浸潤し, めまいにて発症した中頭蓋底巨細胞腫の1例. 第125回脳神経外科関東地方会, 東京, 2015年12月6日.
 74. 山口竜一, 野口明男, 岡村耕一, 熊切敦, 岡田啓, 佐々木重嘉, 塩川芳昭: 前回手術による癒着が強く, 再手術の際に内頸動脈損傷を来した SAH の1例. 第7回南十字星手術カンファレンス, 千葉, 2015年1月11日.

75. 塩川芳昭:脳血管外科から入る脳神経外科手術修練. 第2回手技にこだわる脳神経外科ビデオカンファレンス, 東京, 2015年1月24日.
76. 丸山啓介, 横井秀格, 山口竜一, 野口明男, 甲能直幸, 塩川芳昭:傍鞍部腫瘍に対する耳鼻科との4 hands endonasal surgery.第2回手技にこだわる脳神経外科ビデオカンファレンス, 東京, 2015年1月24日.
77. 鳥居正剛:CEA 術中のブランク摘出前後での頸動脈超音波内頸動脈血流量評価の有用性-過還流症候群の予知を念頭ににした-. 第44回日本脳卒中の外科学会学術集会, 広島, 2015年3月26日.
78. 正木瑤子, 山田深, 仁科彩子, 岡島康友, 鳥居正剛, 平野照之, 塩川芳昭:90歳以上の急性期脳卒中患者におけるADLに影響を与える因子の検討. 第40回日本脳卒中学会学術集会, 広島, 2015年3月26日.
79. 佐々木重嘉, 岡村耕一, 熊切敦, 河合拓也, 田中雅樹, 塩川芳昭:SAH患者におけるPiCCOモニタリングの使用経験. 第40回日本脳卒中学会学術集会, 広島, 2015年3月26日.
80. 林良幸, 山田深, 鳥居正剛, 岡島康友, 平野照之, 塩川芳昭:頸動脈内膜剥離術後の迷走および舌下神経麻痺による嚥下障害を呈した1例. 第40回日本脳卒中学会学術集会, 広島, 2015年3月26日.
81. 丸山啓介:Eloquent AVM に対するiPadでの術前シミュレーション. 第44回日本脳卒中の外科学会学術集会, 広島, 2015年3月27日.
82. 山口竜一, 野口明男, 丸山啓介, 田中雅樹, 小林啓一, 小松原弘一郎, 佐藤栄志, 塩川芳昭:当院における未破裂脳動脈瘤診療の実態. 第44回日本脳卒中の外科学会学術集会, 広島, 2015年3月27日.
83. 岡田啓, 脊山英徳, 鳥居正剛, 岡村耕一, 丸山啓介, 山田深, 傳法倫久, 塩川芳昭:CEA周術期におけるINVOSのパターン解析. 第40回日本脳卒中学会総会, 広島, 2015年3月27日.
84. 小松原弘一郎, 佐藤栄志, 笹森寛生, 傳法倫久, 塩川芳昭:急性期脳底動脈閉塞に対する血行再建療法の治療成績:連続13例における画像評価と予後に関する検討. 第40回日本脳卒中学会総会, 広島, 2015年3月27日.
85. 佐藤栄志, 島田篤, 林基高, 小松原弘一郎, 笹森寛生, 脊山英徳, 小西善史, 塩川芳昭:ステント支援下脳動脈瘤塞栓術の中期治療成績. 第40回日本脳卒中学会総会, 広島, 2015年3月28日.
86. 佐藤栄志, 島田篤, 林基高, 小松原弘一郎, 笹森寛生, 小西善史, 野口明男, 塩川芳昭:直達手術後の脳動脈瘤内コイル塞栓術-不完全クリッピング術またはクリッピング術後再発例に対する再治療-. 第40回日本脳卒中学会総会, 広島, 2015年3月28日.
- hemorrhage study.Stroke. 45(3):868-870,2014.
4. 塩川芳昭:comments 高精細融合3次元画像を用いた術中支援. CI研究(35)2:103,2014.
5. Iihara K, Nishimura K, Kada A, Nakagawara J, Ogasawara K, Ono J, Shiokawa Y, Aruga T, Miyachi S, Nagata I, Toyoda K, Matsuda S, Miyamoto Y, Suzuki A, Ishikawa K B, Kataoka H, Nakamura F, Kamitani S: Effects of Comprehensive Stroke Care Capabilities on In-Hospital Mortality of Patients with Ischemic and Hemorrhagic Stroke:J - ASPECT Study. PLoS ONE 9(5): e96819,2014.
6. Nishimura K,Nakamura F,Takegami M,Fukuhara S,Nakagawara J, Ogasawara K,Ono J,Shiokawa Y,Miyachi S,Nagata I,Toyoda K, Matsuda S,Kataoka H,Miyamoto Y,Kitaoka K, Kada A,Iihara K, J-ASPECT Study Group: Cross-sectional survey of workload and burnout among Japanese physicians working in stroke care: the nationwide survey of acute stroke care capacity for proper designation of comprehensive stroke center in Japan (J-ASPECT) study. Circ Cardiovasc Qual Outcomes 7(3):414-422,2014.
7. Koga M, Arihiro S, Hasegawa Y, Shiokawa Y, Okada Y,Kimura K, Furui E, Nakagawara J, Yamagami J, Kario K,Okuda S,Tokunaga K,Takizawa H, Takasugi J, Sato S, Nagatsuka K, Minematsu K, Toyoda K, and for the Stroke Acute Management with Urgent Risk - factor Assessment and Improvement (SAM for Blood Pressure Lowering in Acute InURAI) Study Investigators: Intravenous Nicardipine Dosingtracerebral Hemorrhage : The Stroke Acute Management with Urgent Risk-factor Assessment and Improvement-Intracerebral Hemorrhage Study. J J Stroke Cerebrovasc Dis. 23(10):2780-7 2014 .
8. Nagane M, Kobayashi K, Tanaka M, Sato K, Tsuchiya K, Shishido - Hara Y, Shiokawa Y. Predictive significance of mean apparent diffusion coefficient value for responsiveness of temozolomide - refractory malignant glioma to bevacizumab: preliminary report. Int J Clin Oncol 19: 16-23, 2014.
9. Shishido-Hara Y, Yazawa T, Nagane M, Higuchi K, Abe-Suzuki S, Kurata M, Kitagawa M, Kamma H, Uchihara T : JC viral inclusions in progressive multifocal leukoencephalopathy : Scaffolding promyelocytic leukemia nuclear bodies grow with cell cycle transition through an S-to-G2-like state in enlarging oligodendrocyte nuclei. J Neuropathol Exp Neurol 73(5): 442-453, 2014.
10. Feng H, Lopez GY, Kim CK, Alvarez A, Duncan CG, Nishikawa R, Nagane M, Su A-J, Auron PE, Hedberg ML, Wang L, Raizer JJ, Kessler JA, Parsa AT, Gao W, Kim S, Jashi K, Nakano I, Grandis JR, McLendon RE, Bigner DD, Lin H-K, Furnari FB, Cavene WK, Hu B, Yan H, Cheng S-Y: EGFR Phosphorylation of DCBLD2 Recruits TRAF6 and Stimulates Akt-promoted Tumorigenesis. J Clin Invest. 124(9):3741-3756,2014.
11. Keino H,Okada AA, Watanabe T, Echizen N, Inoue M, Takayama N, Nagane M: Spectral - domain optical coherence tomography patterns in intraocular lymphoma. Ocular Immunology and Inflammation, :1-15, 2015.
12. 永根基雄:神経膠腫の化学療法トピックス. 治療の最前線「第20回」. BRAIN 114: 6-7, 2014.
13. 永根基雄:再発膠芽腫 (in Japanese). 脳21, 17 (1): 20-28, 2014.
14. 永根基雄:悪性神経膠腫に対する抗血管新生療法と課題 (Anti-angiogenic therapy for malignant glioma). 癌と化学療法

論文

1. 塩川芳昭:くも膜下出血. 今日の治療指針 私はこう治療している TODAY'S THERAPY 56:836-839, 2014.
2. 塩川芳昭:穿頭脳室ドレナージ術の新技术. 脳神経外科ジャーナル23(4):330,2014.
3. Kobayashi J,Koga M,Tanaka E,Okada Y,Kimura K,Yamagami H,Okuda S,Hasegawa Y,Shiokawa Y,Furui E,Nakagawara J,Kario K,Okata T,Arihiro S,Sato S,Nagatsuka K,Minematsu K,Toyoda K ; SAMURAI Study Investigators : Continuous antihypertensive therapy throughout the initial 24 hours of intracerebral hemorrhage: the stroke acute management with urgent risk-factor assessment and improvement-intracerebral

- 41 (2): 141-147, 2014.
15. 永根基雄: Key Note Lecture ベバシズマブが治療イノベーショ
ンを起こした意義と初期治療での意義〜膠芽腫〜. がん抗血
管新生療法: 17, 2014.
16. 永根基雄: 悪性脳腫瘍の治療効果判定の画像診断. CI 研究
36 (2): 2014(in press).
17. 永根基雄: ベバシズマブによる初発膠芽腫治療. 腫瘍内科 13
(2): 278-288, 2014.
18. 永根基雄: 膠芽腫. In 神経症候群 III-その他の神経疾患を含
めて- [第2版]. 日本臨牀 別冊 28: 47-52, 2014.
19. 永根基雄: 脳神経外科医が解説する血液腫瘍: 悪性リンパ腫.
脳神経外科速報 24 (6): 658-668, 2014.
20. Nagane M: Dose-dense temozolomide - Is it still promising?.
Neurol Med Chir 55(1):38-49, 2015.
21. 佐藤栄志: 橋出血後の予後-高血圧性橋出血の急性期の生命
予後と慢性期の機能予後について. 日本臨牀 72(増刊
7):373-375, 2014.
22. 佐藤栄志: 脳血管撮影. 神経内科研修ノート:101-104, 2014.
23. 野口明男: Extradural temporopolar approach の進め方と考え方.
脳神経外科速報 24:952-958, 2014.
24. 野口明男, 佐藤栄志, 小西善史, 清水淑恵, 田中雅樹, 山口
竜一, 丸山啓介, 栗田浩樹, 塩川芳昭: 脳動静脈奇形の治療.
The Mt. Fuji Workshop on CVD 32: 93-96, 2014.
25. 丸山啓介, 小林啓一, 田中雅樹, 野口明男, 土屋一洋, 小林
邦典¹, 永根基雄, 塩川芳昭¹(杏林大学放射線科): 脳腫瘍の
術中 navigation で参照する適切な融合画像の選択.
PROGRESS IN COMPUTED IMAGING 35(1):13-20, 2014.
26. 丸山啓介: 「速い」「安い」「旨い」パソコン選び, 日常診療に役
立つ IT. 脳神経外科速報 24 (3): 337-341, 2014.
27. 丸山啓介: 動画扱いのスペシャリストになろう, 日常診療に役
立つ IT. 脳神経外科速報 24 (5): 582-586, 2014.
28. 丸山啓介: iMovie での手術ビデオ編集の基本, 日常診療に役
立つ IT. 脳神経外科速報 24 (7): 798-802, 2014.
29. 丸山啓介: iMovie で格調高い手術ビデオを作ろう, 日常診療に
役立つ IT. 脳神経外科速報 24 (9): 1026-1029, 2014
30. 丸山啓介: 医学書の整理術/活用術, 日常診療に役立つ IT.
脳神経外科速報 24 (11): 1250-1253, 2014
31. 丸山啓介, 塩川芳昭: 側頭葉およびその近傍の腫瘍(中頭蓋
窩も含む). 神経症候群[第2版]-その他の神経疾患を含めて-
III. 日本臨牀社 別冊 31:454-457, 2014.
32. Maruyama K, Kin T¹, Saito T², Suematsu S, Gomyo M³, Noguchi
A, Nagane M, Shiokawa Y: Neurosurgical simulation by
interactive computer graphics on iPad. Int J Comput Assist
Radiol Surg 9:1073-1078, 2014.
33. 丸山啓介, 山口竜一, 野口明男, 佐藤栄志, 塩川芳昭: 脳室
内出血を主体とする破裂脳動脈瘤の治療. 脳卒中の外科 42
(6): 447-452, 2014.
34. 野口明男, 佐藤栄志, 小西善史, 清水淑恵, 田中雅樹, 山口
竜一, 丸山啓介, 栗田浩樹, 塩川芳昭: 脳動静脈奇形の治
療.The Mt Fuji workshop on CVD 32:93-96, 2014.
35. 小林啓一, 永根基雄, 河合拓也, 野口明男, 塩川芳昭: 高齢
者中枢神経系原発悪性リンパ腫に対する大量 methotrexate 基
盤初期治療の成績と展望. Geriatric Neurosurgery 26:63-70,
2014.
36. Okamura K, Tsubokawa T¹, Johshita H¹, Miyazaki H², Shiokawa
Y(¹Department of Neurosurgery, Saitama Cardiovascular and
Respiratory Center, ²Department of Neurosurgery, Kugayama

Hospital): Edaravone, a free radical scavenger, attenuates
cerebral infarction and hemorrhagic infarction in rats with
hyperglycemia. Neurological Reserch 36(1):65-69, 2014.

37. 岡村耕一, 塩川芳昭: くも膜下出血の原因(脳動脈瘤以外). 日
本臨牀72(7):445-448, 2014.
38. Saito K, Mukasa A, Narita Y, Tabei Y, Shinoura N, Shibui S,
Saito N: Toxicity and outcome of radiotherapy with concomitant
and adjuvant temozolomide in elderly patients with glioblastoma:
a retrospective study. Neurol Med Chir 54(4): 272-9, 2014.
39. Aihara K, Mukasa A, Gotoh K, Saito K, Nagae G, Tsuji S,
Tatsuno K, Yamamoto S, Takayanagi S, Narita Y, Shibui S,
Aburatani H, Saito N: H3F3A K27M mutations in thalamic
gliomas from young adult patients. Neuro Oncol. 16(1): 140-6,
2014.
40. Igaki H, Sakumi A, Mukasa A, Saito K, Kunitatsu A, Masutani
Y, Hanakita S, Ino K, Haga A, Nakagawa K, Ohtomo K:
Corticospinal tract - sparing intensity - modulated radiotherapy
treatment planning. Rep Pract Oncol Radiother. 19(5): 310-6,
2014.
41. Fukushima Y, Imai H, Yoshino M, Kin T, Takasago M, Saito K,
Nakatomi H, Saito N: Ptois as partial oculomotor nerve palsy
due to compression by infundibular dilatation of posterior
communicating artery, visualized with three - dimensional
computer graphics: case report. Neurol Med Chir 54(3): 214-8,
2014.

著書

1. 塩川芳昭: 脳動脈, 脳室およびくも膜下腔, 脊柱, 脊髄. 標準
脳神経外科学第13. 版東京, 医学書院, 2014. p.20-32.
2. 塩川芳昭: 脳卒中(脳出血・脳梗塞・くも膜下出血・もやもや病).
year noteTOPICS 2014-2015内科・外科疾患4th edition 研修
医・非専門医でも知っておくべき近年と今後の主な動向. 東京,
メディックメディア, 2014. p.307-311.
3. 永井良三, 鈴木則宏, 荒木信夫, 神田隆, 吉良潤一, 塩川芳
昭, 西野一三, 水澤英洋編集: 神経内科 研修ノート, 東京, 診
断と治療社, 2014.
4. 有賀徹, 奥寺敬, 片山容一, 加藤庸子, 栗栖薫, 黒岩敏彦, 塩
川芳昭, 平山昌康, 松前光紀編集: すぐに役立つ脳神経外科
救急ハンドブック改訂2版. 日本脳神経外科救急学会. 東京, メ
ディカ出版, 2015.
5. 佐藤栄志: 脳血管内治療-メスを使わずに脳の血管の病気に立
ち向かう!. 集中ケアナーシングのための急性・上昇患者ケア
vol.3, No.2, 東京, 総合医学社, 2014.
6. 丸山啓介, 塩川芳昭: シミュレーションと手術の実際 末梢, そ
の他②. 中大脳動脈瘤のすべて —シミュレーションで経験する
手術・IVR. 井川房夫, 宮地茂編, 大阪, メディカ出版, 2014.
p.131-133, .
7. 丸山啓介, 塩川芳昭: 側頭葉およびその近傍の腫瘍(中頭蓋窩
も含む). 日本臨牀(別冊), 神経症候群(第2版) III. 大阪, 日本
臨床社, 2014. p.454-457.
8. 小林啓一: 脳腫瘍〜静かに忍び寄る脳腫瘍—神経症状の変化
を見逃さない! 〜. 集中ケアナーシングのための急性・重症患
者ケア vol.3 No.2. 東京, 日総研出版, 2014. p.281-292.
9. 小林啓一, 永根基雄: 放射線治療・化学療法: 成人. 脳神経外
科周術期管理のすべて 第4版. 松谷雅生, 田村晃, 藤巻高光,
森田明夫編. 東京, メジカルビュー社, 2014. p.233-261.
10. 岡村耕一: 脳神経外科. 新人から使える! 保存版 56術式の看
護のツボがわかる! 超早わかり手術看護のサッと先読みポイ

ント, オペナーシング2013年秋季増刊. 東京, メディカ出版, 2014. p.11.

特許等知的財産関係, 報告書

1. 塩川芳昭, 本田有子, 丸山啓介, 野口明男, 清一美, 曾我隆正, 牛場克明, 田村晃: 日本人における大脳白質病変の老年症候群に及ぼす作用と危険因子の解明に関する研究(25-6). 長寿医療研究開発費 2014年度分担研究報告書.
2. 塩川芳昭: 包括的脳卒中センターの整備に向けた脳卒中の救急医療に関する研究. 厚生労働科学研究委託費(循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業) 2014年度分担研究報告書.
3. 塩川芳昭: 急性期脳卒中への内科複合治療の確立に関する研究. 厚生労働科学研究委託費(循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業) 2014年度分担研究報告書.

その他

1. 塩川芳昭: 掲載記事 憂楽帳 家族の病氣. 毎日新聞2014年4月19日夕刊:7.
2. 塩川芳昭: テレビ出演 医 TV スペシャル 脳卒中治療の現場から 脳卒中の再発予防について. BS朝日, 2014年12月27日.
3. 永根基雄: ASCO DIRECT ASCO 公式オンラインプログラム解説. American Society of Clinical Oncology (ASCO), Chicago, 2014年5月30日-6月5日.
4. 永根基雄: 5-ALA による光線力学診断と適正使用. 第31回日本脳腫瘍学会学術集会ランチョンセミナー1 紙上座談会, 2015.

心臓血管外科学教室

講演

1. 庄司高裕, 原田裕久, 茅原昭子, 二瓶ゆかり, 中村ゆかり, 池添亨, 山添真治, 内田崇之: 当施設における Vascular access(VA)トラブルに対する Vascular Access Intervention Therapy(VAIVT)の検討. 第34回日本静脈学会, 名護, 2014年4月17日.
2. 山添真治, 庄司高裕, 原田裕久, 池添亨, 中村ゆかり, 茅原昭子, 二瓶ゆかり, 中村ゆかり, 内田崇之: 下肢静脈瘤に対する血管内レーザー治療の初期成績. 第34回日本静脈学会, 名護, 2014年4月17日.
3. Kubota H, Endo H, Noma M, Tsuchiya H, Takahashi Y, Inaba Y: Equine Pericardial Roll Graft Replacement of Infected Pseudoaneurysm of the Thoracic Aorta for "Initial Treatment" "IAATSAorticSymposium2014. USA, April 24th, 2014.
4. 池添亨, 布川雅雄, 細井温, 窪田博: 腹部大動脈瘤術後 perigraft seroma に感染をきたした開腹手術を施行した一例. 第42回日本血管外科学会学術総会, 弘前, 2014年5月22日.
5. 西野純史, 稲葉雄亮, 遠藤英仁, 土屋博司, 野間美緒, 窪田博: LIDA-LAD 開存3症例の再開心術における心筋保護法の工夫. 第11回多摩心臓外科学会, 立川, 平成24年5月31日.
6. 土屋博司, 遠藤英仁, 野間美緒, 稲葉雄亮, 窪田博: 感染性心内膜炎術後 PVE に対し 2 度の再手術を施行した 1 例. 胸部外科学会関東甲信越地方会, 横浜, 2014年6月7日.
7. 窪田博, 稲葉雄亮: A 型急性大動脈解離の弓部 tear に対し内膜固定を行い, 弓部置換術を回避した超高齢者の一例. 第34回東京胸部外科懇話会, 東京, 2014年7月19日.
8. 布川雅雄, 池添亨, 根本卓, 細井温, 窪田博: 突発性縦隔血腫の一例. 第14回血管外科アカデミー, 鳴門, 2014年9月6日.
9. 池添亨, 根本卓, 細井温, 布川雅雄, 窪田博: 正中弓状靱帯圧

迫による腹腔動脈狭を伴う十二指腸動脈瘤の一例. 第161回血管外科症例検討会, 三鷹, 2014年9月27日.

10. 根本卓, 池添亨, 細井温, 布川雅雄, 窪田博: 多発塞栓症による重傷虚血肢に対し, 血管内治療と末梢バイパス術を行った一例. 第二回 KPAC, 武蔵野, 2014年9月19日.
11. 遠藤英仁, 野間美緒, 土屋博司, 稲葉雄亮, 西野純史, 平形明人, 窪田博: 間歇的静脈圧増強逆行性脳灌流法施行時の眼底鏡を用いた網膜動静脈観察-臨床例における検討-. 第67回日本胸部外科学会定期学術集会, 福岡, 2014年10月2日.
12. 稲葉雄亮, 野間美緒, 遠藤英仁, 土屋博司, 西野純史, 窪田博: 感染性胸部動脈瘤・人工血管感染に対し Xenopericardial roll graft を用いた8例の手術成績. 第67回日本胸部外科学会定期学術集会, 福岡, 2014年10月2日.
13. Kubota H, Endo H, Noma M, Tsuchiya H, Takahashi Y, Inaba Y, Nishino Y, Tsuboi A: Xenopericardial Roll Graft Replacement to Treat Infectious Pseudoaneurysm or Graft Infection of Thoracic and Thoraco - abdominal Aorta. The 28th European Association Cardio-Thoracic Surgery (EACTS 2014), Italy, October 14th, 2014.
14. 土屋博司, 遠藤英仁, 西野純史, 稲葉雄亮, 野間美緒, 窪田博, 竹谷剛: 緊急 TEVAR 術後の遅延性対麻痺に対し CSFD が著効した一例. 第55回日本脈管学会総会, 倉敷, 2014年10月30日.
15. 根本卓, 細井温, 池添亨, 布川雅雄, 窪田博: 下腿限局型深部静脈血栓症における血栓の経時的変化に関する検討. 第55回日本脈管学会総会, 倉敷, 2014年10月30日.
16. 池添亨, 原田裕久, 庄司隆裕, 山添真治, 疋田聡, 内田崇之: 当施設における Vascular access(VA)トラブルに対する Vascular Access Intervention Therapy(VAIVT)の検討. 第55回日本脈管学会総会, 倉敷, 2014年10月31日.
17. 遠藤英仁, 細井温, 土屋博司, 稲葉雄亮, 高橋雄, 窪田博: 間歇的静脈圧増強逆行性脳灌流法 (Intermittent Pressure Augment-Retrograde Cerebral Perfusion; IPA-RCP) の NIRS による評価. 医用近赤外線分光法研究会, 倉敷, 2014年11月1日.
18. 高橋雄, 遠藤英仁, 土屋博司, 根本卓, 西野純史, 窪田博: 原発性肺高血圧症に伴う LMCA compression syndrome により ACS を発症した一例. 第12回多摩心臓血管外科学会, 立川, 2015年2月7日.
19. 根本卓, 池添亨, 細井温, 布川雅雄, 窪田博: 低心機能を合併した左室内血栓による上腸間膜動脈閉塞症に対する血管内治療の一例. 第24回東京血管外科画像診断治療研究会, 東京, 2015年3月13日.

論文

1. Kubota H: Xenopericardial Roll Graft Replacement to Treat Infectious Pseudoaneurysm or Graft Infection of Thoracic and Thoraco-Abdominal Aorta, Interact CardioVasc Thorac Surg 19 (suppl 1): S97.doi:10.1093/icvts/ivu276.327.(2014).

著書

1. 窪田博: 脈管系疾患による痛みの臨床. ペインクリニック, Vol. 36 No. 2. 東京, 真興交易医書出版部, 2015.
2. 窪田博: TAVI(Transcatheter aortic valve implantation). 杏林医学雑誌46巻1号. 2015.
3. 布川雅雄: 胸部大動脈瘤のステンドグラフト治療. 杏林医学雑誌46巻2号. 2015.
4. 遠藤英仁: 冠動脈バイパス術一変遷と展望一. 杏林医学雑誌46巻1号. 2015.

その他

- 窪田博:高齢者の心臓弁膜症治療. ラジオ NIKKEI「医学講座」. 2014年4月10日.
- 細井温:座長, 深部静脈血栓症3, 第34回日本静脈学会総会, 沖縄, 2014年4月17日.
- 西野純史:多摩心臓血管外科学会奨励賞受賞 2014年5月31日.
- 窪田博:座長, 第233回 日本循環器学会関東甲信越地方会大動脈II, 東京 2014年9月6日.
- 窪田博:座長, 第67回日本胸部外科学会定期学術集会, 福岡, 2014年10月1日.
- 細井温:座長, 第55回日本脈管学会総会 その他2, 倉敷, 2014年10月30日.
- 細井温:会長, 医用近赤外線分光法研究会, 倉敷, 2014年11月1日.
- 布川雅雄:座長, 「重傷虚血肢に対する外科治療の実際」虚血と感染との戦いー江戸川病院より, 第6回多摩フットケアセミナー, 立川, 2015年3月6日.

整形外科教室

講演 口演

- 高橋雅人, 里見和彦, 長谷川淳, 大柁英昭, 竹内拓海, 佐藤俊輔, 長谷川雅一, 佐野秀仁, 市村正一:頭蓋刺激ー複合筋活動電位による術中脊髄モニタリングの疾患別有効性. 第43回日本脊椎脊髄病学会, 京都, 2014年4月17-19日.
- 井上功三朗, 長谷川雅一, 市村正一, 井上智雄, 宮坂芳郎, 森脇孝博:ラロキシフェン塩酸塩とエルデカルシトールの併用効果の検討ーアルファカルシトールからエルデカルシトールへの切り替えー. 第4回骨粗鬆症治療研究会, 三鷹, 2014年5月10日.
- 小谷明弘, 阿部哲士, 石井朝夫, 梶山史郎, 正岡利紀, 斉藤政克, 松下和彦, 山田浩司, 勝呂徹:骨・関節術後感染予防ガイドラインの改正にあたり 術前・術中での術後感染予防のための管理, 対策ー縫合糸は SSI に影響するかー. 第87回日本整形外科学会, 神戸, 2014年5月22-25日.
- 大畑徹也, 丸野秀人, 樽井武彦, 山口芳裕, 市村正一:ガス壊疽に対する予後予測因子の検討(救命と機能を中心に). 第87回日本整形外科学会, 神戸, 2014年5月22-25日.
- 田島崇, 太田力, 向井原健太, 浅野尚文, 川井章, 森井健司, 近藤格:FUS-CHOP 融合遺伝子産物結合タンパクに着目した粘液型脂肪肉腫のプロテオーム解析. 第87回日本整形外科学会学術総会, 神戸, 2014年5月22-25日.
- 森井健司, 吉山晶, 青柳貴之, 田島崇, 市村正一:骨・軟部悪性腫瘍に対する化学療法効果判定における血清 D-dimer 値の有用性. 第87回日本整形外科学会学術総会, 神戸, 2014年5月22-25日.
- 井上功三朗, 長谷川雅一, 市村正一, 井上智雄, 宝亀登, 宮坂芳郎, 森脇孝博:ラロキシフェン塩酸塩とエルデカルシトールの併用効果の検討ーアルファカルシトールからエルデカルシトールへの切り替えー. 第87回日本整形外科学会, 神戸, 2014年5月22-25日.
- 坂倉健吾, 小谷明弘, 佐々木茂, 中村克司, 市村正一:変形性膝関節症による慢性疼痛に対するトラマドール塩酸塩/アセトアミノフェン配合錠の有効性.第87回日本整形外科学会学術総会, 神戸, 2014年5月22-25日.
- 青柳貴之, 森井健司, 吉山晶, 田島崇, 望月一男, 市村正一:軟部悪性腫瘍における unplanned resection の実態調査ー臨床的特徴および治療成績への影響ー. 第87回日本整形外科学会学術総会, 神戸, 2014年5月22-25日.
- 吉山晶, 森井健司, 青柳貴之, 田島崇, 市村正一:脂肪腫と高分化型脂肪肉腫の鑑別における血清 D-dimer 値の有用性. 第87回日本整形外科学会学術総会, 神戸, 2014年5月22-25日.
- Morii T, Yoshiyama A, Tajima T, Aoyagi T, Ichimura S : Endoprosthesis reconstruction for the treatment of musculoskeletal tumors in adult: Present status, limitations and perspe, 第87回日本整形外科学会学術総会, 神戸, 2014年5月22-25日.
- 長谷川雅一, 佐野秀仁, 長谷川淳, 五十嵐一峰, 高橋雅人, 市村正一:腰椎椎間板ヘルニアに対するMED 後の再手術例の検討. 第88回日本整形外科学会学術総会, 神戸, 2014年5月22-25日.
- 林光俊, 安部学, 上菌紗映, 奥出聡, 加藤英之, 平川淳一, 川上純範, 岡島康友:精神病院における身体リハビリテーション第2報ー高所飛び降りによる多発外傷例を主としてー. 第51回日本リハビリテーション医学会学術集会, 名古屋, 2014年6月5日.
- 大畑徹也:右大腿骨近位部骨折術後インプラント破損. stryker: Kuntscher 75th Anniversary Symposium , 東京, 2014年6月14-15日.
- 青柳貴之, 森井健司, 吉山晶, 田島崇, 市村正一:骨軟部悪性腫瘍の化学療法における発熱性好中球減少症のリスクについて. 第37回日本骨・関節感染症学会, 東京, 2014年6月21日.
- 丸野秀人, 大畑徹也, 稲田成作, 松隈卓徳, 市村正一, 木下欣明, 大柁英明:肘頭骨折に対する LCP olecranon plate の使用経験. 第40回日本骨折治療学会, 熊本, 2014年6月27-28日.
- 丸野秀人, 大畑徹也, 稲田成作, 松隈卓徳, 市村正一:橈骨頭骨折に対する DTJ スクリュー®の使用経験. 第40回日本骨折治療学会, 熊本, 2014年6月27-28日.
- 大畑徹也, 星亨, 丸野秀人, 山口芳裕, 里見和彦:精神疾患患者における骨盤輪骨折の検討. 第40回日本骨折治療学会, 熊本, 2014年6月27-28日.
- 篠塚信行, 上菌紗映, 林光俊, 平川淳一:精神科病院入院患者のADL 調査ーBarthel Indexを用いてー. 第33回東京都理学療法士学術大会, 東京, 2014年7月6日.
- 奥出聡, 濱田賢二, 篠塚信行, 林光俊, 平川淳一:飛び降りによる多発外傷患者に対する理学療法のアウトカム. 第33回東京都理学療法士学術大会, 東京, 2014年7月6日.
- 吉山晶, 渡部逸史, 須佐美知郎, 田島崇, 青柳貴之, 森岡秀夫, 戸山芳昭, 市村正一, 森井健司:腎細胞癌骨転移例の治療成績. 第47回 日本整形外科学会 骨・軟部腫瘍学術集会, 大阪, 2014年7月17-18日.
- 青柳貴之, 森井健司, 吉山晶, 田島崇, 市村正一:骨軟部悪性腫瘍の化学療法における発熱性好中球減少症. 第47回 日本整形外科学会 骨・軟部腫瘍学術集会, 大阪, 2014年7月17-18日.
- 田島崇, 浅野尚文, 向井原健太, 窪田大介, 森井健司, 川井章, 近藤格:Calreticulin の発現差は粘液型脂肪肉腫の悪性度を反映する. 第47回 日本整形外科学会 骨・軟部腫瘍学術集会, 大阪, 2014年7月17-18日.
- 大畑徹也:開放骨折や離断を伴った重症多発四肢外傷症例 salvage or amputation?. 第1回日本重症四肢外傷シンポジウム, 札幌, 2014年7月19-20日.
- 大畑徹也:治療に難渋した右下腿開放骨折 Gustilo Type IIIB

- の感染症例. 第1回日本重症四肢外傷シンポジウム, 札幌, 2014年7月19-20日.
26. 長谷川雅一, 井上功三郎, 宮坂芳郎, 市村正一:ビスフォスホネート静注剤の使用経験. 第11回ビスフォスホネート up date, 大阪, 2014年7月24日.
 27. 佐藤行紀, 小谷明弘, 佐々木茂, 坂倉健吾, 市村正一:大腿骨上顆軸と脛骨内反角の相関. 6th JOSKAS, 広島, 2014年7月24-26日.
 28. 坂倉健吾, 小谷明弘, 佐々木茂, 中村克司, 市村正一:変形性膝関節症による慢性疼痛に対するトラマドール塩酸塩/アセトアミノフェン配合錠の有効性. 6th JOSKAS, 広島, 2014年7月24-26日.
 29. 佐野秀仁, 長谷川雅一, 高橋雅人, 長谷川淳, 市村正一:当院での BKP の術後新規椎体骨折の実態. 第49回日本脊髄障害医学会, 旭川, 2014年9月11-12日.
 30. 西野衆文, 橋本吉登, 今給黎直明, 林光俊:ユニバシアード代表男女バレーボール選手のメディカルチェック. 日本整形外科スポーツ医学会, 東京, 2014年9月12日.
 31. 藤田耕司, 林光俊, 山口博, 小原和宏, 荒木大輔, 中島耕平:全日本女子バレーボールの障害について. 日本整形外科スポーツ医学会, 東京, 2014年9月12日.
 32. 今給黎直明, 林光俊, 西野衆文, 中嶋耕平:全日本男子シニアバレーボール選手の外傷と障害-11年間の JISS 受診歴を Sports Injury Surveillance program で分類-. 日本整形外科スポーツ医学会, 東京, 2014年9月12日.
 33. 今給黎直明, 林光俊, 福井勉, 西野衆文:バレーボール選手における腹直筋損傷の検討. 日本整形外科スポーツ医学会, 東京, 2014年9月12日.
 34. Inoue K, Hasegawa M, Ichimura S, Inoue T, Hoki N, Miyasaka Y, Moriwaki T: The effects of combination therapy of Raloxifene with Eldecacitol in postmenopausal osteoporosis ~switching from Alfacalcidol to Eldecacitol~. The American Society for Bone and Mineral Research 2014 Annual Meeting, USA, September 12th,~15th, 2014.
 35. 小谷明弘:感染予防の工夫/周術期管理の留意点(骨・関節術後感染予防ガイドライン改定にあたり). 第63回東日本整形災害外科学会, 東京, 2014年9月19-20日.
 36. 佐野秀仁, 高橋雅人, 長谷川雅一, 長谷川淳, 市村正一:当科での透析性骨椎患者の手術成績. 第63回東日本整形災害外科学会, 東京, 2014年9月19-20日.
 37. 森井健司, 大塚弘毅, 大西宏明, 吉山晶, 青柳貴之, 田島崇, 市村正一: BH-3 mimetic を用いた軟骨肉腫に対する新規分子標的治療の開発. 第29 回日本整形外科学会基礎学術集会, 鹿児島, 2014年10月9-10日.
 38. 佐藤行紀, 小谷明弘, 佐々木茂, 坂倉健吾, 市村正一:大腿骨上顆軸と脛骨内反角の相関. 第29回日本整形外科学会基礎学術集会, 鹿児島, 2014年10月9-10日.
 39. 長谷川雅一, 井上功三郎, 宮坂芳郎, 市村正一:ビスホスホネート静注剤の使用経験. 第16回日本骨粗鬆症学会, 東京, 2014年10月23-25日.
 40. 井上功三郎, 長谷川雅一, 市村正一, 井上智雄, 宝亀登, 宮坂芳郎, 森脇孝博:ラロキシフェン塩酸塩とエルデカルシトールの併用効果の検討 ~アルファカルシドールからエルデカルシトールへの切り替え~. 第16回日本骨粗鬆症学会, 東京, 2014年10月23-25日.
 41. 大畑徹也, 樽井武彦, 加藤総一郎, 市村正一, 山口芳裕:外傷に起因する急性四肢コンパートメント症候群の治療成績の検討. 日本救急医学会, 福岡, 2014年10月28日.
 42. 飯田貴俊, 平井みつよ, 猪股裕子, 津川美木, 土井淳, 平川淳一, 植田耕一郎, 林光俊:精神科病院でおこなう, 摂食嚥下リハビリテーションービデオ嚥下内視鏡検査の導入ー. 第28回東京都精神病院協会学会, 東京, 2014年10月28日.
 43. 井上功三郎, 小寺正純, 森脇孝博, 市村正一:寛骨臼に放射線骨壊死を発症した2例. 第41回日本股関節学会, 東京, 2014年10月31日-11月1日.
 44. Ohata T, Hoshi T, Maruno H, Tarui T, Yamaguchi, Ichimura S: Examination of Serum Lactate as a Predictor of Mortality in polytrauma patients with pelvic ring fractures: The 31st Congress of PPSA JC, Taiwan, October 31st, ~November 2nd, 2014.
 45. 坂倉健吾, 小谷明弘, 佐々木茂, 市村正一:肩腱板修復術の治療経験ーmini-open 法と鏡視下腱板修復術の比較ー. 第42回日本関節病学会, 東京, 2014年11月6-7日.
 46. 友利杏奈, 村田光範, 土肥美智子, 林光俊, 三枝大地, 高梨泰彦, 奥脇透, 俵紀行, 川原貴:少年バレーボール選手の最終身長に基づいた予測方法. 第25回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 東京, 2014年11月8-9日.
 47. 太田武雄, 萩原芳幸, 岩崎圭祐, 林光俊, 上野俊明, 添島紗夜香, 田中沙織:ナショナルチーム男女バレーボール選手の歯科調査. 第25回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 東京, 2014年11月8-9日.
 48. 西野雅人, 吉山晶, 青柳貴之, 森井健司, 市村正一:肩甲部に発生した glomus 腫瘍の一例. 第43回杏林医学会総会, 東京, 2014年11月15日.
 49. 渡邊隼人, 青柳貴之, 吉山晶, 森井健司, 小柏靖直, 今西順久, 望月眞, 甲能直幸, 市村正一:悪性傍神経節腫大腿骨骨転移病的骨折の治療経験. 第43回杏林医学会総会, 東京, 2014年11月15日.
 50. 佐野秀仁, 長谷川雅一, 高橋雅人, 長谷川淳, 市村正一:当院での BKP の術後隣接椎体骨折の予防対策. 第22回日本腰痛学会, 幕張, 2014年11月15-16日.
 51. 大畑徹也:大腿骨近位部骨折 Short Femoral Nail 使用時の Tips & Tricks 大腿骨近位部骨折の前方アプローチ . Private Cadaver Training Course, タイ, 2014年11月25-26日.
 52. 小寺正純, 井上功三郎, 市村正一, 森脇孝博:不安定型大腿骨頭すべり症の治療成績. 第25回日本小児整形外科学会, 浦安, 2014年11月27-28日.
 53. 大畑徹也:予防的内腸骨動脈バルーンカテーテル留置し加療を行った高齢者寛骨臼骨折の1例~大量出血リスクを回避するための戦略~. 5th Zimmer Trauma Symposium, 東京, 2015年1月23-24日.
 54. 森井健司, 吉山晶, 青柳貴之, 田島崇, 小菅みず穂, 村山みゆき, 市村正一, 大塚弘毅, 大西宏明:ドキシロピシン耐性骨肉腫細胞株における癌幹細胞性発現とオートファジー. 第6回アクリジンオレンジ治療研究会, 京都, 2015年1月24日.
 55. 長谷川雅一, 長谷川淳, 佐野秀仁, 高橋雅人, 市村正一:治療に難渋したシャルコー脊椎症(Charcot Spine)の1例. 2015脊椎脊髄病研究会, 東京, 2015年2月20日.
 56. 小寺正純, 井上功三郎, 市村正一, 森脇孝博:サポートリングを用いた寛骨臼再剣術の中期成績. 第45回日本人工関節学会, 福岡, 2015年2月27-28日.
 57. 佐藤行紀, 小谷明弘, 鈴木啓司, 坂倉健吾, 市村正一:変形性膝関節症の進行に伴う大腿骨上顆軸の変化. 第45回日本人工関節学会, 福岡, 2015年2月27-28日.

58. 佐野秀仁, 長谷川雅一, 高橋雅人, 長谷川淳, 市村正一: 当院での BKP の術後新規椎体骨折の実態. 第55回関東整形災害外科学会, さいたま, 2015年3月27-28日.
59. 佐藤行紀, 小谷明弘, 鈴木啓司, 坂倉健吾, 佐々木茂, 市村正一: 当院における人工膝関節置換術後感染に対する治療成績. 第55回関東整形災害外科学会, 大宮, 2015年3月27-28日.

講演

1. 市村正一: テリパラチドの特徴と臨床応用. Bone Master Course III 福岡会場, 福岡, 2014年4月5日.
2. 市村正一: テリパラチドの脊椎疾患における応用. 第43回日本脊椎脊髄病学会学術集会, 京都, 2014年4月18日.
3. 市村正一: 骨粗鬆症性椎体骨折の臨床的課題ー予防から保存療法と手術療法までー. 第87回日本整形外科学会学術集会, 神戸, 2014年5月23日.
4. 長谷川雅一: 日常診療における骨粗鬆症の診断と治療 ~脊椎椎体骨折の早期診断のコツ~. 三鷹市医師会講演会, 三鷹, 2014年5月28日.
5. 長谷川雅一: 日常診療における骨粗鬆症の診断と治療. 乳がん治療と Bone Health を考える, 東京, 2014年6月11日.
6. 市村正一: 骨粗鬆症治療における骨形成促進薬の役割. 会津医学会学術講演会, 会津若松, 2014年6月12日.
7. 長谷川雅一: 骨粗鬆症性椎体骨折の診断と治療. 第7回多摩整形外科病診連携の会, 武蔵野, 2014年7月10日.
8. 市村正一: 骨粗鬆症におけるテリパラチドの有用性. 第1回新発田北蒲原地区骨折予防骨形成講演会, 新発田, 2014年7月11日.
9. 市村正一: 脆弱性椎体骨折の予防と保存療法. 骨粗鬆症の圧迫骨折を治す会, 広島, 2014年7月12日.
10. 市村正一: 骨粗鬆症関連領域におけるテリパラチドの臨床応用. Bone Masters Course III, 大阪, 2014年7月19日.
11. 市村正一: ロコモティブシンドローム(ロコモ)を知っていますか?. 杏林大学市民公開講座, 三鷹, 2014年7月26日.
12. 市村正一: 骨粗鬆症薬物療法におけるビスフォスフォネート静注剤の使い方. 第2回北多摩北部整形外科フォーラム, 武蔵野, 2014年8月9日.
13. 市村正一: 脊椎代謝性疾患の診断と治療(主として骨粗鬆症). 第12回日本整形外科学会脊椎脊髄病医研修会, 東京, 2014年8月23日.
14. 市村正一: 女性の骨粗鬆症の治療戦略ー薬物治療と手術療法の実際ー. 日本医師会障害教育講座, 東京, 2014年9月4日.
15. 林光俊: 本学会活性化に向けて 競技種目別スモールグループ新設の提言ースポーツ現場に携わっている整形外科医の立場よりー. 日本整形外科スポーツ医学会, 東京, 2014年9月12日.
16. 大畑徹也: Gustilo III B lower leg of acute compartment syndrome. Gustilo III B open fracture management course ~今, 日本の重度開放骨折治療の極みへ~, 東京, 2014年9月20-21日.
17. 市村正一: ロコモを知っていますか? ~介護を受けない健康な毎日を過ごすために~. 杏林大学文化講演, 羽村, 2014年9月27日.
18. 市村正一: 骨粗鬆症性椎体骨折予防のための薬物治療戦略. 第123回中部日本整形災害外科学会学術集会, 名古屋, 2014年10月3日.
19. 市村正一: 骨粗鬆症性椎体骨折に対する低侵襲手術ーBallon Kyphoplasty (BKP)を中心にー. 第16回日本骨粗鬆症学会, 東京, 2014年10月23日.
20. 市村正一: 骨粗鬆症性椎体骨折の病態と手術治療. 第16回日本骨粗鬆症学会教育研修講演, 東京, 2014年10月24日.
21. 市村正一: テリパラチドによる骨粗鬆症治療の最前線. 稲城多摩学術講演会, 東京, 2014年10月30日.
22. 市村正一: 骨粗鬆症性脆弱骨折予防のための新しい治療戦略ービスホスホネート静注剤を中心にー. 第41回日本股関節学会, 東京, 2014年11月1日.
23. 林光俊: 生涯スポーツ活動ーオリンピック選手からあなたまでー. 国分寺医師会法人取得40周年記念市民健康講演会, 立川, 2014年11月1日.
24. 市村正一: 整形外科領域におけるテリパラチドの応用. 佐世保 PTH 研究会, 佐世保, 2014年11月6日.
25. 市村正一: 脆弱性椎体骨折の予防における薬物療法の実際ーテリパラチド weekly 製剤を中心にー. 第13回大阪最新整形外科研修セミナー, 大阪, 2014年11月8日.
26. 市村正一: 骨粗鬆症診療におけるテリパラチドの実際. さいたま脆弱性骨折を考える会, 東京, 2014年11月21日.
27. 森井健司: 脂肪性腫瘍への対応と最近の話題. Orthopaedic conference 2014, 東京, 2014年11月28日.
28. 市村正一: ロコモを知っていますか? ~介護を受けない健康な毎日を過ごすために~. 杏林大学文化講演会, 八王子, 2014年11月29日.
29. 市村正一: 骨粗鬆症治療の最近の話題ービスホスホネート静注製剤を中心にー. 徳島 Osteoporosis セミナー, 徳島, 2014年12月3日.
30. 市村正一: 骨粗鬆症薬物療法の実際ービスホスホネート静注製剤を中心にー. 第15回熊本骨折セミナー学術講演会, 熊本, 2015年1月17日.
31. 森井健司: がん診療連携拠点病院における緩和医療の動向. 久光製薬株式会社研修会, 東京, 2015年1月28日.
32. 林光俊: スポーツによるアキレス腱断裂とリハビリテーションー保存療法を主としてー. 第25回近畿足の外科症例検討会, 大阪, 2015年2月14日.
33. 森井健司: 肋骨腫瘍の診断と治療. 第2回多摩地区の整形外科疾患を考える会, 東京, 2015年2月18日.
34. 市村正一: ロコモを知っていますか? ~介護を受けない健康な毎日を過ごすために~. 三鷹市市民公開講演会, 三鷹, 2015年2月20日.
35. 林光俊: スポーツ障害とリハビリテーションにおけるスポーツドクターの役割ーバレーボールナショナルチームドクターを例にー. 第7回さいたま市整形外科研究会さいたま市臨床整形外科協議会, さいたま, 2015年2月26日.
36. 森井健司: 症例から学ぶ骨軟部腫瘍診療の勘どころ. 東海整形外科医会 (2014年度横浜公開セミナー), 横浜, 2015年3月8日.
37. 市村正一: 骨粗鬆症診療における骨形成促進剤の臨床応用. 第二回東葛地区骨粗鬆症を考える会, 柏, 2015年3月14日.

論文

1. 林光俊, 安部学¹, 平川淳一², 加藤英之², 上園紗映², 奥出聡², 川上純範³, 岡島康友⁶(¹目白第2病院, ²平川病院, ³山梨リハビリテーション病院, ⁴杏林大・医・リハビリテーション(医学): Topics 精神科病院における身体リハビリテーション・高所飛び降りによる多発外傷例を主として-. Journal of Clinical Rehabilitation 23 (12): 1222-1229, 2014.
2. 林光俊: スポーツに整形外科医はどうかかわるかーメディカルチェックおよびメディカルサポートー ⑤バレーボール. 関節外科 33(12): 1270-1275, 2014.

3. 西野衆文¹, 林光俊^(筑波大):バレーボール選手の下肢疲労性障害-メディカルチェックにおける下肢圧痛点調査. 日本整形外科学スポーツ医学学会誌34(1):90-93, 2014.
4. Matsushima S, Ohtsuka K, Ohnishi H, Fujiwara M, Nakamura H, Morii T, Goto H, Watanabe T: V843I, a lung cancer predisposing EGFR mutation, is responsible for resistance to EGFR tyrosine kinase inhibitors. J Thorac Oncol. 9(9):1377-1384. doi: 10.1097. 2014.
5. Yoshiyama A, Morii T, Tajima T, Aoyagi T, Honya K, Mochizuki K, Satomi K, Ichimura S: D-dimer Levels in the Differential Diagnosis Between Lipoma and Well-differentiated Liposarcoma. Anticancer Res 34:5181-5185, 2014.
6. Morii T, Ohtsuka K, Ohnishi H, Mochizuki K, Yoshiyama A, Aoyagi T, Hornicek FJ, Ichimura S: BH3 mimetics inhibit growth of chondrosarcoma - a novel targeted-therapy for candidate models. Anticancer Res 34:6423-6430, 2014.
7. Morii T, Aoyagi T, Tajima T, Yoshiyama A, Ichimura S, Mochizuki K: Unplanned resection of a soft tissue sarcoma: Clinical characteristics and impact on oncological and functional outcomes. J Orthop Sci. 20(2):373-379. doi: 10.1007/s00776-014-0689-x. (Epub 2015).
8. Nakajima M¹, Takahashi A², Tsuji T³, Karasugi T⁴, Baba H⁵, Uchida K⁵, Kawabata S⁶, Okawa A⁶, Shindo S⁷, Takeuchi K⁸, Taniguchi Y⁹, Maeda S¹⁰, Kashii M¹¹, Seichi A¹², Nakajima H⁵, Kawaguchi Y¹³, Fujibayashi S¹⁴, Takahata M¹⁵, Tanaka T¹⁶, Watanabe K¹⁷, Kida K¹⁸, Kanchiku T¹⁹, Ito Z²⁰, Mori K²¹, Kaito T²², Kobayashi S²³, Yamada K²⁴, Takahashi M, Chiba K³, Matsumoto M²⁵, Furukawa K²⁶, Kubo M²⁷, Toyama Y²⁵, Genetic Study Group of Investigation Committee on Ossification of the Spinal Ligaments, Ikegawa S²⁸(¹Laboratory for Bone and Joint Diseases, RIKEN, ²Laboratory for Statistical Analysis, RIKEN, ³Keio University, ⁴RIKEN, Kumamoto University, ⁵University of Fukui, ⁶Tokyo Medical and Dental University, ⁷Kudanzaka Hospital, ⁸National Okayama Medical Center, ⁹The University of Tokyo, ¹⁰Kagoshima University, ¹¹Osaka University, ¹²Jichi Medical University, ¹³Toyama University, ¹⁴Kyoto University, ¹⁵Hokkaido University, ¹⁶Hiroshima University, ¹⁷Niigata University Medical and Dental General Hospital, ¹⁸Kochi Medical School, ¹⁹Yamaguchi University, ²⁰Nagoya University, ²¹Shiga University of Medical Science, ²²National Hospital Organization Osaka Minami Medical Center, ²³Hamamatsu University School of Medicine, ²⁴Kurume University School of Medicine, ²⁵Keio University, ²⁶Hiroshima University Graduate School of Medicine, ²⁷Laboratory for Genotyping Development, RIKEN, ²⁸Laboratory for Bone and Joint Diseases, RIKEN): A genome-wide association study identifies susceptibility loci for ossification of the posterior longitudinal ligament of the spine. Nat Genet 46: 1012-1016, 2014.
9. Kobayashi S¹, Matsuyama Y¹, Shinomiya K², Kawabata S³, Ando M⁴, Kanchiku T⁵, Saito T⁶, Takahashi M, Ito Z⁷, Muramoto A⁷, Fujiwara Y⁸, Kida K⁹, Yamada K¹⁰, Wada K¹¹, Yamamoto N¹², Satomi K¹³, Tani T⁹(¹Hamamatsu University School of Medicine, ²Yokohama City Minato Red Cross Hospital, ³Tokyo Medical and Dental University, ⁴Wakayama Rosai Hospital, ⁵Yamaguchi University, ⁶Kansai Medical University Takii Hospital, ⁷Nagoya University, ⁸Hiroshima City Asa Hospital, ⁹Kochi Medical School, ¹⁰Kurume University School of Medicine, ¹¹Hiroshima

University, ¹²Tokyo Women's Medical University Yachiyo Medical Center, ¹³Kugayama Hospital). A new alarm point of transcranial electrical stimulation motorevoked potentials for intraoperative spinal cord monitoring: a prospective multicenter study from the Spinal Cord Monitoring Working Group of the Japanese Society for Spine Surgery and Related Research. J Neurosurg Spine. 20(1):102-107, 2014.

10. Aoyagi T, Morii T, Tajima T, Yoshiyama A, Ichimura S: Analysis of the Risk Factor for Febrile Neutropenia in Patient with Bone and Soft tissue Sarcoma. ANTICANCER RESEARCH 35: 2375-2384, 2015.
11. 竹内拓海, 高橋雅人, 長谷川雅一, 長谷川淳, 大柁英昭, 佐藤俊輔, 里見和彦, 市村正一: 脊椎回旋角度と片開き式椎弓形成術後 C5麻痺の関係. 関東整災誌 45(4):211-214, 2014.

著書

1. 市村正一:骨粗鬆症. 今日の治療指針-私はこう治療している-TOADY'S THERAPY 2015. 山口徹, 北原光夫監修. 東京, 医学書院, 2015.p.1047-1049.
2. 林光俊:ナショナルチームドクター・トレーナーが書いた種目別スポーツ障害の診療. 改訂第2版. 東京, 南江堂, 2014.
3. 林光俊, 中島靖弘:トライアスロン. 種目別にみる スポーツ外傷・障害とリハビリテーション. 東京, 医歯薬出版株式会社, 2014. p.114-119.
4. 林光俊:精神科・身体合併症のリハビリテーション. 東京, 協同医書出版社, 2015.
5. 大畑徹也: 第2章 精神科における身体合併症のリハビリテーション:救命救急センターとの連携, 実態について. 精神科・身体合併症のリハビリテーション. 平川純一, 林光俊, 仙波浩幸, 上藺紗映編集. 東京, 協同医書出版社, 2015. p.27-34.

特許等知的財産関係, 報告書

1. 森井健司:高悪性度骨軟部腫瘍に対する標準治療確立のための研究. 厚生労働省がん臨床研究事業 分担研究報告書.

その他

1. 森井健司:第11回関東骨軟部腫瘍の基礎を語る会春セミナー 主催, 伊豆, 2014年4月26-27日.
2. 市村正一:インタビュー, 脊椎圧迫骨折-診断のポイントと新治療法 BKP-. 日本臨床内科医会 リーフレット, 2014年11月11日.

皮膚科学教室

講演

1. Shiohara T, Takahashi R, Kano Y, Ushigome Y: Monocytes control Treg in severe drug eruption. The 6th Drug Hypersensitivity Meeting (DHM6), Switzerland, April 9th-12th, 2014.
2. Takahashi R, Ushigome Y, Shiohara T: Mycoplasma Pneumoniae infections serve to enhance the risk of subsequently developing severe allergic diseases by chronically abrogating Treg-mediated suppression. The 6th Drug Hypersensitivity Meeting (DHM6), Switzerland, April 9th-12th, 2014.
3. Ushigome Y, Takahashi R, Shiohara T: Patrolling monocytes sensing herpes simplex virus in severe drug eruption. The 6th Drug Hypersensitivity Meeting (DHM6), Switzerland, April 9th-12th, 2014.
4. Kano Y, Ushigome Y, Horie C, Mizukawa Y, Shiohara T: Immune reconstitution inflammatory syndrome (IRIS) observed in the setting of drug - induced hypersensitivity syndrome / drug

- reaction with eosinophilia and systemic symptoms (DIHS/DRESS). The 6th Drug Hypersensitivity Meeting (DHM6), Switzerland, April 9th-12th, 2014.
5. 塩原哲夫: 眼合併症を伴う重症薬疹とアトピー性皮膚炎. 第5回東京多摩眼科連携セミナー, 東京, 2014年4月19日.
 6. Mizukawa Y, Takahashi R, Kano Y, Shiohara T: Mycoplasma infection as an inhibitory factor for developing DIHS/DRESS. The 6th Drug Hypersensitivity Meeting (DHM6), Switzerland, April 9th-12th, 2014.
 7. 塩原哲夫: 皮膚アレルギーに汗は善玉か. 第113回 日本皮膚科学会総会, 京都, 2014年5月30日.
 8. 塩原哲夫: 本講演を理解するための解説. GVHD, IRS, DIHSの類似性について. 第113回 日本皮膚科学会総会, 京都, 2014年5月31日.
 9. 塩原哲夫: IRS(Immune Reconstitution Syndrome)としてのDIHS, GVHD, サルコイドーシス. 第113回 日本皮膚科学会総会, 京都, 2014年5月31日.
 10. 加藤峰幸: ウイルス性急性発疹症. 第113回 日本皮膚科学会総会, 京都, 2014年5月30日-6月1日.
 11. 堀江千穂: 薬剤性過敏症症候群と移植片対宿主病の類似性はヘルペスウイルスの再活性化がもたらす? . 第113回 日本皮膚科学会総会, 京都, 2014年5月31日.
 12. 堀江千穂, 平原和久, 塩原哲夫, 高木永, 楊國昌: アシクロビル(ACV)と γ -グロブリンの併用療法が奏功した新生児ヘルペスの1例. 第113回日本皮膚科学会総会, 京都, 2014年5月30日-6月1日.
 13. 佐藤洋平, 堀江千穂, 平原和久, 水川良子, 狩野葉子: 人工透析患者に生じた多発性固定薬疹の1例. 第113回 日本皮膚科学会総会, 京都, 2014年5月30日-6月1日.
 14. 新田桐子, 牛込悠紀子, 早川順, 塩原哲夫, 遠藤彰子, 清水英樹, 笹沢俊吉: 紫斑の消退とともに急速に腎不全が進行したアナフィラクトイド紫斑の一例. 第398回日本皮膚科学会北海道地方会, 旭川, 2014年6月7-8日.
 15. Komatsu Y: Sweating disturbance as a triggering event that drives atopic dermatitis process forward. German-Japanese Society of Dermatology, Germany, June 11th-14th, 2014.
 16. Horie C: Disseminated neonatal herpes simplex virus -1 infection successfully treated with intravenous immunoglobulin (IVIg) in addition to acyclovir. German-Japanese Society of Dermatology, Germany, June 14th-15th, 2014.
 17. Kurata M, Sato Y, Hirahara K, Kano Y, Shiohara T: GVHD-like HSV reactivation in a DIHS/ DRESS patient. Post Congress Meeting in the German-Japanese Society of Dermatology, Germany, June 14th-15th, 2014.
 18. Kano Y, Kurata M, Sato Y, Shiohara T: Mycoplasma pneumoniae infection for the development of Stevens-Johnson syndrome. Post Congress Meeting in the German-Japanese Society of Dermatology, Germany, June 14th-15th, 2014.
 19. 成田陽子, 堀江千穂, 平原和久, 狩野葉子, 塩原哲夫: サイトメガロウイルス感染症を合併した水疱性類天疱瘡一教室例の検討. 日本皮膚科学会第854回東京地方会, 東京, 2014年6月21日.
 20. 福田知雄: 顔面および上腕に生じたクロモコーシスの2例. 第63回神奈川県真菌研究会, 横浜, 2014年6月28日.
 21. 三友貴代, 堀江千穂, 倉田麻衣子, 福田知雄, 平田彩, 蘇原慧伶, 皿谷健, 石井晴之, 滝澤始: Intravascular large B-cell lymphoma の2例ー皮膚所見と生検のポイントー. 日本皮膚科学会第855回東京地方会, 東京, 2014年7月12日.
 22. 小松由莉江, 牛込悠紀子, 佐藤洋平, 水川良子, 塩原哲夫: アトピー性皮膚炎における発汗障害. 第1回汗と皮膚疾患の研究会, 東京, 2014年8月2日.
 23. 佐藤典子, 水川良子, 塩原哲夫, 坂田好美: 右室内血栓を生じ血管 Behçet 病を考えた1例. 日本皮膚科学会第856回東京地方会, 東京, 2014年9月20日.
 24. 塩原哲夫: 重症薬疹に対する IVIG の有用性. 第78回日本皮膚科学会東部支部学術大会, 青森, 2014年10月4日.
 25. 佐藤洋平, 三友貴代, 福田知雄: 上皮系腫瘍一再発転移後, 強皮症様症状を生じた有棘細胞癌の一例. 第78回日本皮膚科学会東部支部学術大会, 青森, 2014年10月4-5日.
 26. 五味方樹, 牛込悠紀子, 早川順, 塩原哲夫: シェーグレン症候群を合併し, 汗腺を中心に類上皮細胞肉芽腫を形成した皮膚サルコイドの1例. 第65回日本皮膚科学会中部支部学術大会, 大阪, 2014年10月25-26日.
 27. 福田知雄: 爪白癬治療の現状と課題. 第58回日本医真菌学会総会, 横浜, 2014年11月1日.
 28. 三友貴代, 牛込悠紀子, 狩野葉子, 塩原哲夫, 渡邊淳: Ehlers-Danlos 症候群の一例. 第43回杏林医学会総会, 三鷹, 2014年11月15日.
 29. 倉田麻衣子, 堀江千穂, 早川順, 狩野葉子, 塩原哲夫: 免疫グロブリン上昇に伴い汗疱を生じたテグレトールによる薬剤性過敏症症候群(DIHS)の1例. 第44回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会, 仙台, 2014年11月21-23日.
 30. 佐藤洋平, 三友貴代, 狩野葉子, 塩原哲夫: プレドニゾロン内服自己中断後に増悪した Stevens-Johnson 症候群(SJS)の一例. 第44回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会, 仙台, 2014年11月21-23日.
 31. 水川良子: 角質水分量が接触反応の強さを決めている. 第44回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会, 仙台, 2014年11月21-23日.
 32. Aoyama T, Morizane S, Hamada T, Shiohara T, Iwatsuki K: Elevated IL-10 levels are associated with beneficial responses to plasmapheresis while predicting progression to cytomegalovirus disease. The 39th Annual Meeting of the Japanese Society for Investigative Dermatology, Osaka, December 12th-14th, 2014.
 33. Takahashi R, Ushigome Y, Shiohara T: Monocytes are crucial for a shift away from a Treg to Th17 response in mycoplasma pneumoniae infection and SJS/TEN. The 39th Annual Meeting of the Japanese Society for Investigative Dermatology, Osaka, December 12th-14th, 2014.
 34. 新田桐子, 牛込悠紀子, 早川順, 狩野葉子, 塩原哲夫: クリンダマイシンゲル外用後に広範囲に紅斑・膿疱が出現し, 経皮感作が示唆された2例. 第438回日本皮膚科学会京滋地方会, 京都, 2014年12月20日.
 35. 三友貴代, 堀江千穂, 早川順, 水川良子, 狩野葉子, 塩原哲夫: Mycoplasma が関与したと考えられる急性陰門潰瘍. 日本皮膚科学会第859回東京地方会, 東京, 2015年1月17日.
 36. 牛込悠紀子, 高橋良, 塩原哲夫: 重症薬疹の発症における patrolling monocyte の相反する役割. 第78回日本皮膚科学会東京支部学術大会, 東京, 2015年2月21-22日.
 37. 塩原哲夫, 小松由莉江, 水川良子, 牛込悠紀子: 発汗障害がもたらす意外な皮膚疾患. 第78回日本皮膚科学会東京支部学術大会, 東京, 2015年2月21-22日.
 38. 堀江千穂, 小松由莉江, 早川順, 塩原哲夫, 山田昌和: 髄膜炎様の症状・ぶどう膜炎・白斑を伴った顔面帯状疱疹の1例. 第78

回日本皮膚科学会東京支部学術大会, 東京, 2015年2月21-22日.

39. 塩原哲夫:「皮膚疾患において汗は悪玉? 善玉?」発汗障害と皮膚アレルギー. 第78回日本皮膚科学会東京支部学術大会, 東京, 2015年2月22日.

論文

1. Shiohara T, Ushigome Y, Kano Y, Takahashi R: Crucial role of viral reactivation in the development of severe drug eruptions: a comprehensive review. Clin Rev Allergy Immunol, Published online, 2014.
2. 狩野葉子: 薬剤性過敏症候群(DIHS)の治療と管理. アレルギーの臨床34:92-95, 2014.
3. 塩原哲夫: 医学・医療のいまわかるキーワード 2014 皮膚・感覚器(眼科・耳鼻咽喉)薬剤性過敏症候群. 医のあゆみ 249:479, 2014.
4. 水川良子, 塩原哲夫: 固定薬疹の発症機序. 臨免疫・アレルギー科 61:581-584, 2014.
5. Ishida T, Kano Y, Mizukawa Y, Shiohara T: The dynamics of herpesvirus reactivations during and after severe drug eruptions: their relation to the clinical phenotype and therapeutic outcome. Allergy 69: 798-805, 2014.
6. 塩原哲夫: 知っておきたい汗の必須知識 発汗異常とアレルギー. Derma. 220:61-65, 2014.
7. 塩原哲夫, 小松由莉江: 発汗異常にもたらされるアレルギー性疾患. 皮アレルギーフロンテ 12:79-83, 2014.
8. 塩原哲夫: 重症薬疹の診断と治療 アップデート 序 薬疹が“重症”になるとき. アレルギー免疫 21:1185-1188, 2014.
9. 平原和久: 薬剤性過敏症候群(DIHS)の診断と治療. アレルギー免疫 21:1227-1233, 2014.
10. 狩野葉子: 重症薬疹の予後 重症薬疹の診断と治療 アップデート. アレルギー・免疫 21:1248-1254, 2014.
11. Ogawa K¹, Morito H¹, Hasegawa A¹, Miyagawa F¹, Kano Y, Shiohara T (Nara Medical Univ) et al: Elevated serum thymus and activation-regulated chemokine (TARC/CCL17) relates to reactivation of human herpesvirus 6 in drug reaction with eosinophilia and systemic symptoms (DRESS)/drug-induced hypersensitivity syndrome (DIHS). Br J Dermatol 171: 425-427, 2014.
12. Kurata M, Mizukawa Y, Aoyama Y¹, Shiohara T (Okayama Univ): Herpes simplex virus reactivation as a trigger of mucous lesions in pemphigus vulgaris. Br J Dermatol 171: 554-560, 2014.
13. 塩原哲夫: 貼付剤による皮膚へのトラブルとその対策. 日本薬剤師会誌 66:1203-1207, 2014.
14. 佐藤洋平, 平原和久, 狩野葉子, 塩原哲夫: 肺真菌症患者に生じた急性汎発性発疹性膿疱症(AGEP)の1例. 臨皮 68: 775-780, 2014.
15. Shiohara T, Takahashi R, Ushigome Y, Kano Y: Regulatory T cells in severe drug eruptions. Curr Immunol Rev 10: 41-50, 2014.
16. 平原和久, 塩原哲夫: 皮膚疾患の診かた 発熱を伴う発疹への対応 薬疹. レジデントノート 16:2095-2102, 2014.
17. 石田正: 皮膚診断学: 知っておくべき検査法とその考え方(2) 様々な皮膚疾患におけるウイルス再活性化の読み方. 日皮会誌 124:2111-2117, 2014.
18. 平原和久: 写真で学ぶアレルギー これが唾液腺バイオプシーのやり方だ!. 皮アレルギーフロンテ 12:174, 2014.
19. 塩原哲夫: 皮膚のアレルギーにおいて汗は善玉か. 日皮会誌 124:2484-2485, 2014.
20. 塩原哲夫: 中毒疹に迫る 本講演を理解するための解説. 日皮会誌 124:2878-2880, 2014.
21. 堀江千穂: 薬剤性過敏症候群(DIHS)と移植片対宿主病(GVHD)の類似性はヘルペスウイルスの再活性化がもたらす?. 日皮会誌 124:2884-2886, 2014.
22. 加藤峰幸: 最近の話題 ウイルス性急性発疹症. 日皮会誌 124:2975-2976, 2014.
23. 塩原哲夫: Immune Reconstitution Syndrome (IRS) としてのDIHSとGVHDとサルコイドーシス. 日皮会誌 124:2892-2895, 2014.
24. 平原和久: 注意すべき重症薬疹 急性汎発性発疹性膿疱症(AGEP). 薬事 56:2167-2170, 2014.
25. Kano Y, Tohyama M¹, Aihara M², Matsukura S², Watanabe H³, Shiohara T, et al (¹Ehime Univ, ²Yokohama City Univ, ³Showa Univ): Sequelae in 145 patients with drug-induced hypersensitivity syndrome / drug reaction with eosinophilia and systemic symptoms: survey conducted by the Asian Research Committee on Severe Cutaneous Adverse Reactions (ASCAR). J Dermatol 42: 276-282, 2015.
26. 塩原哲夫: 皮膚型と全身型, その移行型を考える. Visual Dermatol 14:134-138, 2015.
27. 塩原哲夫: 固定薬疹と中毒性表皮壊死症. Visual Dermatol 14: 146-148, 2015.
28. 加藤峰幸: アナフィラクトイド紫斑と紫斑病性腎症. Visual Dermatol 14:150-151, 2015.
29. 水川良子: 皮膚型結節性多発動脈炎(cPAN)と結節性多発動脈炎(PAN). Visual Dermatol 14:160-162, 2015.
30. 狩野葉子: 深在性エリテマトーデス(LEP)のままで留まった例と中間型ループスエリテマトーデスに LEP を生じた例. Visual Dermatol 14:164-167, 2015.
31. 福田知雄: 皮膚症状のみの皮膚筋炎と筋症状を伴う皮膚筋炎. Visual Dermatol 14:168-170, 2015.
32. 早川順: 皮膚サルコイドーシスとサルコイドーシス. Visual Dermatol 14:172-174, 2015.
33. 新田桐子, 狩野葉子, 塩原哲夫: 造影MRIにて血行不全による足趾の骨髓炎と考えられた1例. 臨皮 69:65-68, 2015.
34. Komatsu Y, Okazaki A, Hirahara K, Araki K, Shiohara T: Difference in Clinical Features and Outcomes between Group A and Group G Streptococcus-Induced Cellulitis. Dermatology 230: 244-249, 2015.

著書

1. 福田知雄: 乳房外パジェット病の非手術療法. WHAT'S NEW in 皮膚科学 2014-2015. 宮地良樹編. 東京, メディカルレビュー社, 2014. p. 140-141.
2. 塩原哲夫: 宮地の前に宮地なし. 宮地の後に宮地なし. 若い医師たちに紡ぐことば. 東京, メディカルレビュー社, 2014. p. 310-311.
3. 塩原哲夫, 他編(日本アレルギー学会監修): アナフィラキシーガイドライン. 東京, メディカルレビュー社, 2014. p. 1-23.
4. Descamps V¹, Tohyama M², Kano Y, Shiohara T (¹Hôpital Bichat, Université Paris, ²Ehime Univ): HHV-6A and HHV-6B in drug-induced hypersensitivity syndrome/drug reaction with eosinophilia and systemic symptoms. In: Human herpesviruses HHV-6A, HHV-6B, and HHV-7, Diagnosis and clinical management. 3rd Ed. Flamand L, Lautenschlager I, Krueger G,

Abrashi D, eds. New York, Elsevier, 2014. p. 179-200.

5. 狩野葉子: 結節性紅斑. 皮膚疾患最新の治療 2015-2016. 渡辺晋一, 古川福実編. 東京, 南江堂, 2015. p. 56.
6. 塩原哲夫: 保湿剤はかゆみに有効か?. EBM 皮膚疾患の治療 up-to-date. 宮地良樹編. 東京, 中外医学社, 2015. p. 70-73.
7. 塩原哲夫: 色素性痒疹. 皮膚疾患最新の治療2015-2016. 渡辺晋一, 古川福実編. 東京, 南江堂, 2015. p. 47.

特許等知的財産関係, 報告書

1. 塩原哲夫: 厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等政策研究事業(難治性疾患政策研究事業)重症多形滲出性紅斑に関する調査研究 2015年度総括・分担研究報告書.

その他

1. 塩原哲夫: 眼合併症を伴う重症薬疹とアトピー性皮膚炎. 第5回東京多摩眼科連携セミナー, 東京, 2014年4月19日.
2. 塩原哲夫: 貼付剤を上手に使うためのコツ. Dementia Forum in 甲信越, 東京, 2014年5月17日.
3. 塩原哲夫: アトピー性皮膚炎におけるスキンケア. 第12回城南小児アレルギー懇話会, 東京, 2014年5月22日.
4. 塩原哲夫: 高齢者の皮膚ケア. 足立区認知症勉強会, 東京, 2014年5月23日.
5. 狩野葉子: 分子標的薬と皮膚障害. 日本皮膚科学会研修講習会必須 A コース, 東京, 2014年6月1日.
6. 塩原哲夫: 特別講演. 重症多形滲出性紅斑を含む薬疹の診断と治療. 痛みフォーラム2014, さいたま, 2014年7月2日.
7. 塩原哲夫: 常識を見直そう: 汗とスキンケア. 厚木市皮膚科医学会学術講演会, 厚木, 2014年7月3日.
8. 三友貴代: Intravascular large B-cell lymphoma の2例ー皮膚所見と生検のポイントー. 多摩皮膚科専門医会, 武蔵野, 2014年7月5日.
9. 塩原哲夫, 横関博雄¹, 片山一朗²(¹日本医科歯科大, ²大阪大学): 対談 発汗研究の歴史からみえてくるアレルギーの新しい病因論. 皮アレルギーフロンテ 12:6-14, 2014.
10. 福田知雄: 白癬について. 青梅慶友病院感染症研修会, 青梅, 2014年7月16日.
11. 塩原哲夫: 貼付剤を上手に使うためのコツ. Dementia Forum in 長岡, 長岡, 2014年7月10日.
12. 塩原哲夫: 高齢者にパッチを上手に使うコツー見逃されがちな汗の役割. 豊島区薬剤師会学術講演会, 東京, 2014年7月17日.
13. 塩原哲夫: 高齢者にパッチを上手に使うコツ. 第7回日本在宅薬学会ランチョンセミナー, 大阪, 2014年7月20日.
14. 塩原哲夫: アレルギー疾患および帯状疱疹における発汗異常. 第1回汗と皮膚疾患研究会, 東京, 2014年8月2日.
15. 塩原哲夫: 薬疹の臨床の現状とこれからの課題. 理化学研究所セミナー, 鶴見, 2014年8月15日.
16. 塩原哲夫: 常識を見直そうー汗とスキンケア. 加茂市医師会学術講演会, 加茂, 2014年8月22日.
17. 塩原哲夫: ヒルドイドのこんな使い方・あんな使い方. WEB LIVE SEMINAR, 東京, 2014年8月25日.
18. 塩原哲夫: 貼付剤を上手に使う. Uonuma Alzheimer's Forum, 魚沼, 2014年9月9日.
19. 福田知雄: 真菌感染とスキンケア. 札幌市皮膚科医学会例会・研修会, 札幌, 2014年9月12日.
20. 塩原哲夫: 常識を見直そうー汗をスキンケア. 鳥取スキンケア研究会, 鳥取, 2014年9月17日.
21. 塩原哲夫: 貼付剤を上手に使うためのコツ. 神経変性疾患懇話会, 十日町, 2014年10月8日.

22. 福田知雄: 日光角化症に対する最新治療ーベセリナクリームを中心にー. 皮膚疾患フォーラム, 東京, 2014年10月9日.
23. 倉田麻衣子: 皮膚科からみた Dengue 熱 教室例のまとめ. 多摩皮膚科専門医会, 武蔵野, 2014年10月11日.
24. 福山雅大: 診断に苦慮した丘疹症例 1) 足底の丘疹. 多摩皮膚科専門医会, 武蔵野, 2014年10月11日.
25. 牛込悠紀子: 診断に苦慮した丘疹症例 2) 軀幹の丘疹. 多摩皮膚科専門医会, 武蔵野, 2014年10月11日.
26. 塩原哲夫: アトピー性皮膚炎におけるスキンケアと外用療法. 宮城県小児科医学会学術講演会, 仙台, 2014年10月16日.
27. 塩原哲夫: 薬疹を見逃さないために. 北埼玉医師会学術講演会, 加須, 2014年10月21日.
28. 塩原哲夫: アトピー性皮膚炎におけるスキンケアと外用療法. 松江市皮膚科医学会・東部小児科医学会合同講演会, 松江, 2014年11月6日.
29. 塩原哲夫: アナフィラシーガイドライン. Anaphylaxis 対策特別委員会, 日本アレルギー学会, 2014.
30. 塩原哲夫: 新たに展開した薬疹の世界. 杏林大学公開講演会, 三鷹, 2014年11月12日.
31. 塩原哲夫: 常識を見直そう: 汗とスキンケア. 香川スキンケアフォーラム, 高松, 2014年11月20日.
32. 塩原哲夫: 汗と皮膚疾患. ヤンセン皮膚科セミナー, 札幌, 2014年11月22日.
33. 塩原哲夫: 重症薬疹に対する IVIG の有用性. 日本製薬講演会, 東京, 2014年11月25日.
34. 塩原哲夫: 常識を見直そう: 汗とスキンケア. 藤沢市皮膚科医学会, 藤沢, 2014年11月26日.
35. 狩野葉子: 重症薬疹の診断と治療ーアップデートー. 岡山県医師会皮膚科部会, 岡山市医師会皮膚科, 泌尿器科専門医会, 岡山, 2014年12月5日.
36. 塩原哲夫: 常識を見直そう: 汗とスキンケア. 第13回宮崎皮膚疾患治療研究会, 宮崎, 2014年12月6日.
37. 塩原哲夫, 宇都宮一豊: SGLT2阻害薬投与中にみられる皮膚障害. 対談 糖尿病患者において注意すべき皮膚障害, 東京, 2014年12月16日.
38. 塩原哲夫: 重症薬疹についての最新の知見. 地域連携学術集会小児科トピックス Meet the Experts (東邦大医療センター), 大森, 2014年12月18日.
39. 塩原哲夫: 羅針盤 秩序の崩壊がもたらすもの. Visual Dermatol 14:131, 2015.
40. 塩原哲夫: ランチョンセミナー “高齢者にパッチを上手に使うコツー見逃されがちな汗の役割ー”. 神奈川薬剤師学会, 横浜, 2015年1月12日.
41. 福田知雄: 真菌感染とスキンケア. 皮膚疾患フォーラム, 調布, 2015年1月23日.
42. 塩原哲夫: SGLT2阻害薬投与下にみられる皮膚障害の特徴と対応について. 糖尿病 WEB シンポジウム, 東京, 2015年1月27日.
43. 塩原哲夫: 重症薬疹に対する IVIG の有用性. 武田薬品全国TV/Web 講演会, 東京, 2015年2月5日.
44. 塩原哲夫: SGLT2阻害薬投与下にみられる皮膚障害の特徴と対応について. Opinion leader's meetingーSGLT2阻害薬有効性・安全性の検証ー, 博多, 2015年2月8日.
45. 狩野葉子: 重症薬疹の現状. 平成26年度日本皮膚科学会東京支部企画研修講習会, 東京, 2015年2月20日.
46. 塩原哲夫: アトピー性皮膚炎におけるスキンケアー見逃されがちな汗の役割ー. 高崎市医師会第19回学術講演会, 高崎,

2015年2月24日。

47. 堀江千穂:水疱症診断におけるピットフォール。第15回皮膚合同カンファレンス, 武蔵野, 2015年3月4日。
48. 佐藤洋平:Churg-Strauss 症候群を見逃さないためのチェックポイント。第15回皮膚合同カンファレンス, 武蔵野, 2015年3月4日。
49. 五味方樹:顔面, 頭部の皮膚腫瘍〜切除してみたらこうだった〜。第15回皮膚合同カンファレンス, 武蔵野, 2015年3月4日。
50. 平原和久:覚えてほしい手指の感染症。第15回皮膚合同カンファレンス, 武蔵野, 2015年3月4日。
51. 塩原哲夫:SGLT2阻害薬投与下にみられる皮膚障害の特徴と対応について。Opinion leader's meeting〜SGLT2阻害薬有効性・安全性の検証〜, 福岡, 2015年3月7日。
52. 塩原哲夫:高齢者にパッチを上手に使うコツ〜見逃されがちな汗の役割〜。第31回板薬イブニングセミナー, 東京, 2015年3月11日。
53. 塩原哲夫:常識を見直そう:汗とスキンケア。下関市皮膚科医会, 下関, 2015年3月12日。
54. 塩原哲夫:スキルアップのための Q&A DLST の読み方について教えてください。皮アレ르기フロンテ 13:51, 2015。
55. 塩原哲夫:アトピー性皮膚炎におけるスキンケア〜見逃されがちな汗の役割〜。栃木スキンケアセミナー, 宇都宮, 2015年3月19日。

形成外科学教室

講演

1. Ozaki M, Kurita M, Ihara A, Kajitani A, Takushima A, Harii K : Thread lifting for prevention of the ocular stimulus-deprivation amblyopia in patients with obstructive periocular infantile hemangioma. The 20th International Workshop of International Society for the Study of Vascular Anomalies, Australia, April 2nd, 2014.
2. 大浦紀彦, 佐藤卓士, 三上智子, 岩科祐己, 桐渕英人, 多久嶋亮彦, 波利井清紀:ハイドロサージェリーによる wound bed preparation. 第57回日本形成外科学会総会・学術集会, 長崎, 2014年4月9日。
3. 尾崎峰, 白石知大, 井原玲, 大浦紀彦, 多久嶋亮彦, 波利井清紀:リストカット痕に対する組織拡張器を用いた治療の検討。第57回日本形成外科学会総会・学術集会, 長崎, 2014年4月9日。
4. 多久嶋亮彦, 栗田昌和, 白石知大, 波利井清紀:陳旧性顔面神経麻痺治療における美容外科的アプローチ。第57回日本形成外科学会総会・学術集会, 長崎, 2014年4月10日。
5. 大浦紀彦:第6のデブリードマン ハイドロサージェリーの可能性。第57回日本形成外科学会総会・学術集会, 長崎, 2014年4月10日。
6. 清家志円, 大浦紀彦, 多久嶋亮彦, 波利井清紀, 佐藤智也, 市岡滋, 古川雅英:足部難治性潰瘍に対する血管柄付き遊離組織移植術の有効性について。第57回日本形成外科学会総会・学術集会, 長崎, 2014年4月10日。
7. 成田圭吾, 多久嶋亮彦, 白石知大, 栗田昌和, 尾崎峰, 波利井清紀:人工物の感染に伴う頭部瘻孔の治療。第57回日本形成外科学会総会・学術集会, 長崎, 2014年4月9-11日。
8. 江藤ひとみ, 小林よう, 渡辺玲, 佐藤卓士, 中山玲玲, 井原玲, 芝崎由佳, 尾崎峰, 多久嶋亮彦, 波利井清紀:扁平母斑の臨床所見の検討。第57回日本形成外科学会総会・学術集会, 長

崎, 2014年4月9-11日。

9. 白石知大, 渡辺玲, 芝崎由佳, 辻直子, 多久嶋亮彦, 波利井清紀:乳輪乳頭温存皮下乳腺全摘術(NSM)後の乳房二期再建における乳頭の頭側偏位を改善させる工夫。第57回日本形成外科学会総会・学術集会, 長崎, 2014年4月9-11日。
10. 辻直子, 青井則之, 吉村浩太郎, 波利井清紀:反復脂肪注入 Multiple fat graft による全乳房再建。第57回日本形成外科学会総会・学術集会, 長崎, 2014年4月9-11日。
11. 坂いづみ, 倉地彩奈, 井原玲, 波利井清紀:ざ瘡後癢痕に対しトリウムシノロン水性懸濁注射液局注後陥没したため手術による治療を余儀なくされた一例。第57回日本形成外科学会総会・学術集会, 長崎, 2014年4月9-11日。
12. 大浦紀彦:軟部組織・創傷から CLI を考える Real Angiosome。第3回 PAD カンファレンス 重症下肢虚血の病態と治療, 東京, 2014年4月15日。
13. 大浦紀彦:CLI を救え! CLI 治療を困難にしているものは何か?。第6回日本下肢救済足病学会北海道地方会, 札幌, 2014年4月26日。
14. 大浦紀彦:潰瘍治療最前線:医療連携による治療効率最大化に向けて 重症下肢虚血 R6に対する血管外科と形成外科のコラボレーション。第42回日本血管外科学術集会, 青森, 2014年5月22日。
15. 多久嶋亮彦:笑いの再建-最近の新しい試み-。第37回日本顔面神経研究会, 東京, 2014年5月30日。
16. 大浦紀彦:下肢慢性創傷の病態と治療 CLI DFU Leg ulcer。シルバー&ヘルスケア戦略特別セミナー慢性創傷管理の最前線, 東京, 2014年6月7日。
17. 大浦紀彦:糖尿病性足病変の治療戦略 足病変の何に気をつけるのか。Ikebukuro Heart Forum 〜こころと心臓〜。東京, 2014年6月7日。
18. 大浦紀彦:Ⅲ.創傷管理に必要な基本的知識【下肢創傷を形成外科的視点で管理する】。日本下肢救済足病学会認定セミナーVer. 2, 札幌, 2014年6月27日。
19. 大浦紀彦:EVT の臨床評価指標としての創傷評価と治療。第6回日本下肢救済足病学会, 札幌, 2014年6月28日。
20. 大浦紀彦, 井原玲, 若林桂介, 多田朋子, 森重侑樹:創傷管理と被覆材 創処置。第6回日本下肢救済足病学会, 札幌, 2014年6月29日。
21. 大浦紀彦:CLI を救え! CLI 治療を困難にしているものは何か?。第71回兵庫県血管外科研究会, 神戸, 2014年7月5日。
22. 辻直子, 青井則之, 吉村浩太郎, 波利井清紀:反復脂肪注入による全乳房再建 Expander/StepCAL。第22回日本乳癌学会学術総会, 大阪, 2014年7月10-12日。
23. 大浦紀彦:プロフェッショナル 育てる。慢性創傷と戦うスーパー看護師。第11回日本褥瘡学会関東甲信越地方会学術集会, 東京, 2014年7月11日。
24. 佐藤卓士, 栗田昌和, 江藤ひとみ, 菅浩隆, 栗田恵里奈, 尾崎峰, 井原玲, 多久嶋亮彦, 波利井清紀:血管奇形組織からの効率的な血管内皮細胞単離法の開発。第11回血管腫・血管奇形研究会, 松本, 2014年7月20日。
25. 尾崎峰, 成田圭吾, 岩科裕己, 井原玲, 江藤ひとみ, 佐藤卓士, 多久嶋亮彦, 波利井清紀:下顎関節突起骨折に対する骨延長器を用いた牽引術における合併症の検討。第6回日本創傷外科学会総会・学術集会, 高松, 2014年7月24日。
26. 大浦紀彦:重症下肢虚血 Rutherford6に対する治療 血管柄付き自家遊離組織移植術の有効性とリスクの検討。第6回日本創傷外科学会総会・学術集会, 高松, 2014年7月24日。

27. 井原玲, 大浦紀彦, 清家志円, 若林圭介, 多田朋子, 森重侑樹, 多久嶋亮彦, 波利井清紀: 重傷下肢虚血に対する, 創縁の牽引と陰圧閉鎖療法併用についての検討. 第6回日本創傷外科学総会・学術集会, 高松, 2014年7月24-25日.
28. 大浦紀彦: TIME 理論に基づく NPWT. 2014 NPWT Expert Technical Forum, 東京, 2014年8月9日.
29. 大浦紀彦: 心臓・血管手術後創傷・感染に対する治療戦略—心臓血管外科と形成外科のコラボレーション—. 東海心臓血管外科 VAC セミナー2014, 名古屋, 2014年8月23日.
30. 大浦紀彦: 「ずらして褥瘡を防ぐ」新しい褥瘡予防戦略. 第16回日本褥瘡学会学術総会, 名古屋, 2014年8月30日.
31. 辻直子, 浅野裕子, 吉村浩太郎, 波利井清紀: 乳房インプラント抜去と同時幹細胞付加脂肪移植術の検討. 第37回日本美容外科学会総会, 2014年9月3-4日.
32. 北幸紘, 菅浩隆, 千葉知宏, 下山田博明, 菅間博, 多久嶋亮彦, 波利井清紀: 1指に4ヶ所の多発病変を認めた腓肭巨細胞腫の1例. 第279回関東形成外科学会東京地方会, 東京, 2014年9月6日.
33. 大浦紀彦: 下肢切断の転帰を考える 糖尿病性足病変における大腿切断術, 下腿切断術の適応と工夫. 鹿児島フットケアセミナー2014, 鹿児島, 2014年9月14日.
34. 大浦紀彦: 糖尿病性足病変の患者に対するフットケアと靴装具の重要性. 第28回日本靴医学会学術集会, 福岡, 2014年9月28日.
35. 白石知大, 菅浩隆, 辻直子, 多久嶋亮彦, 波利井清紀: 皮下乳腺全摘後の一次二期再建における乳輪乳頭偏位の原因と予防. 第2回日本乳房オンコプラスチックサージャリー学会, 東京, 2014年10月3-4日.
36. 辻直子, 青井則之, 吉村浩太郎, 波利井清紀: 幹細胞付加脂肪移植 (CAL) による全乳房再建. 第2回日本乳房オンコプラスチックサージャリー学会, 東京, 2014年10月3-4日.
37. 菅浩隆: 温度応答性ディッシュを用いた単球・マクロファージ系細胞の継代培養法: 創傷治癒研究の新たなアプローチ. 第23回日本形成外科学会基礎学術集会, 松本, 2014年10月9-10日.
38. 佐藤卓士, 栗田昌和, 江藤ひとみ, 菅浩隆, 栗田恵里奈, 尾崎峰, 井原玲, 多久嶋亮彦, 波利井清紀: 血管奇形組織からの効率的な血管内皮細胞単離法の開発. 第23回日本形成外科学会基礎学術集会, 松本, 2014年10月10日.
39. 大浦紀彦: 糖尿病性足病変の患者に対するフットケアと靴装具の重要性. 第28回日本靴医学会学術集会, 福岡, 2014年9月28日.
40. 大浦紀彦: 最新の褥瘡治療. がんセンター褥瘡対策委員会主催褥瘡講演会, 柏, 2014年10月17日.
41. Shiraishi T, Takushima A, Harii K: Fingertip Replantation: How to Hand down the Technique Keeping Good Result. The 31st. Congress of the Pan - Pacific Surgical Association Japan Chapter. Taiwan, October 31st, -November 2nd, 2014.
42. Ozaki M, Narita K, Shiraishi T, Eto H, Kurita M, Takushima A, Harii K: Our refined method of traction therapy for the condylar fracture of mandible using an internal bone distraction device. The 31st. Congress of the Pan-Pacific Surgical Association Japan Chapter. Taiwan, November 1st, 2014.
43. Kita Y, Ozaki M, Narita K, Takushima A, Harii K: Four cases of successful artificial skull bone implant by reduction of dead space between implant and dura after intractable infection. The 31st. Congress of the Pan-Pacific Surgical Association Japan Chapter. Taiwan, November 1st, 2014.
44. 大浦紀彦: 糖尿病性足病変に対する治療戦略 —血流の有無とチーム医療について—. 第26回 北海道 MMC 研究会「糖尿病と血管障害」, 札幌, 2014年11月15日.
45. 尾崎峰: 顔面骨折治療におけるチタンプレートと吸収性プレートの使い分け—Optimal Plate Selection—. 第32回日本頭蓋顎顔面外科学会学術集会, 大阪, 2014年11月6日.
46. 桐渕英人, 成田圭吾, 尾崎峰, 多久嶋亮彦, 波利井清紀: 視力障害なく摘出できた眼窩筋肉内木片異物の1例. 第32回日本頭蓋顎顔面外科学会学術集会, 大阪, 2014年11月6-7日.
47. 尾崎峰, 江藤ひとみ, 岩科裕己, 多久嶋亮彦, 波利井清紀: 前頭骨後壁骨折を合併した顔面骨整復術において硬膜損傷を回避するために Le Fort II 型骨切りを併用した2例. 第32回日本頭蓋顎顔面外科学会学術集会, 大阪, 2014年11月7日.
48. 菅浩隆: 保険適応になった乳がん術後の乳房再建. 第10回複十字病院乳腺センター市民公開講座, 清瀬, 2014年11月9日.
49. 大浦紀彦: 糖尿病性足病変に対する治療戦略—血流の有無とチーム医療について—. 第26回北海道 MMC 研究会「糖尿病と血管障害」, 札幌, 2014年11月15日.
50. 大浦紀彦: 軟部組織感染症に対する治療戦略. おいでまっし感染対策研究会 創傷処置と感染対策セミナー, 金沢, 2014年11月21日.
51. Ohura N: Japanese status of pressure ulcer 2014. The Asia Pacific Pressure Ulcer Prevention advisory board, China, November 29th, 2014.
52. 井原玲, 大浦紀彦, 芝崎由佳, 景山大輔, 大島直也: 重症下肢虚血に対し血行再建を繰り返したが, 下肢壊死の進行が止められず, 大切断に至った1例. 第3回多摩 CLI 研究会, 東京, 2014年11月27日.
53. 成田圭吾, 多久嶋亮彦, 白石知大, 栗田昌和, 菅浩隆, 朝戸裕貴, 波利井清紀: 陳旧性顔面神経麻痺に対して再施行された一期の遊離広背筋移植術の検討. 第41回日本マイクロサージャリー学会学術集会, 京都, 2014年12月4-5日.
54. 清家志円, 栗田昌和, Khater A, 北幸紘, 多久嶋亮彦, 波利井清紀: 移植筋体の神経二重支配の研究を目的とした新しい動物モデルの開発. 第41回日本マイクロサージャリー学会学術集会, 京都, 2014年12月5日.
55. Takushima A: Double innervated latissimus dorsi muscle transfer for longstanding paralyzed face. The 1st Hong Kong congress of Microsurgery, Hong Kong, December 13th, 2014.
56. 大浦紀彦: 糖尿病性足病変の治療「フットケアの潮流 —チーム医療—」形成外科医の立場から. 第20回糖尿病フットケア研究会, 東京, 2014年12月13日.
57. 大浦紀彦: 糖尿病性足病変の治療戦略 感染と虚血への対応. 第7回東海創傷治療フォーラム, 名古屋, 2015年1月30日.
58. 大浦紀彦: total nutritional therapy for wound care session 4. 第13回日本フットケア学会, 東京, 2015年2月14日.
59. 大浦紀彦: total nutritional therapy for wound care session 5. 第13回日本フットケア学会, 東京, 2015年2月14日.
60. 大浦紀彦: Education for young physician session-5 「BTK, CLI へのアプローチ」創傷治療の基本. JET2015, 大阪, 2015年2月21日.
61. 大島直也, 尾崎峰, 江藤ひとみ, 佐藤卓士, 北幸紘, 多久嶋亮彦, 波利井清紀: 組織拡張器で作製したポケットにペースト状人工骨を注入し整容的改善を得た側頭部陥凹変形の一例. 第20回日本形成外科手術手技学会学術集会, 鎌倉, 2015年2月21日.

62. 菅浩隆:脂肪幹細胞の研究報告-脂肪幹細胞の働き. 日本医療毛髪再生研究会ハンズオンセミナー, 東京, 2015年3月1日.
63. 中務秀一, 菅浩隆, 千葉知宏, 寺戸雄一, 菅間博, 多久嶋亮彦, 波利井清紀:手術待機中に基底細胞癌が発生した頭部脂腺母斑の1例. 第281回関東形成外科学会東京地方会, 東京, 2015年3月7日.
64. Narita K, Takushima A, Asato H, Harii K:Reattempt of One-stage Latissimus Dorsi Muscle Transfer for Smile Reconstruction after the Failure of a Previous Transfer.The 8th Congress of World Society for Reconstructive Microsurgery, India, March 19th-22nd, 2015.
65. Seike S, Kurita M, Takushima A, Harii K:Development of a new rat model for the study of double innervation in neurovascular muscle transfer. The 8th Congress of World Society for Reconstructive Microsurgery, India, March 19th-22nd, 2015.
66. Takushima A:Double Innervated Latisimmus Dorsi Muscle Transfer for Longstanding Paralyzed Face. The 8th Congress of World Society for Reconstructive Microsurgery, India, March 21st, 2015.
67. 大浦紀彦:透析患者の下肢治療戦略ー連携の光と闇ー. 第3回 CLINCH:Critical Limb Ischemia Network in aichi, 名古屋, 2015年3月21日.
68. 大浦紀彦:高齢化社会における創傷治療. 第33回日本臨床皮膚外科学会学術集会, 千葉, 2015年3月27日.
69. 坂いづみ, 三上智子, 井原玲, 山崎和紀, 波利井清紀:ざ瘡後癢痕に対しトリアムシロン水性懸濁注射液局注後に頬部陥没を生じた女性に手術療法を行った一症例. 第33回日本臨床皮膚外科学会, 浦安, 2015年3月27-28日.

論文

1. 多久嶋亮彦, 波利井清紀:Hemifacial microsomia における軟部組織の再建. 形成外科57(4):369-375, 2014.
2. 大浦紀彦, 清家志円, 井原玲, 森重侑樹, 多久嶋亮彦, 波利井清紀:糖尿病性足病変に対する創傷治療と靴装具の重要性. 靴の医学 28:186-191, 2014.
3. 大浦紀彦, 井原玲:褥瘡の診断と治療過程 エビデンスに基づく褥瘡ケア UPDATE. 臨床栄養 124(6):688-692, 2014.
4. 木村勇亮, 大浦紀彦, 勾坂正信, 多久嶋亮彦, 波利井清紀:アルベカシン硫酸塩の血中・組織浸出液濃度の比較および組織移行性の検討. 日本形成外科学会誌 34(8):573-579, 2014.
5. 鈴木理央¹, 大浦紀彦(¹横須賀市立市民病院 形成外科):【創傷の予防と治療のための栄養療法】低栄養と創傷治療. WOC Nursing 2(7):12-20, 2014.
6. 木下幹雄¹, 大浦紀彦(¹東京西徳洲会病院 形成外科):【peripheral arterial disease(PAD)に対する新しい戦略】治す 重症虚血肢に対する集学的治療. Heart View 18(6):648-654, 2014.
7. 大浦紀彦, 清家志円, 井原玲, 岩科裕己, 桐渕英人, 北幸紘, 多久嶋亮彦, 波利井清紀:【足の褥瘡を識る〜ケアの対応を見極める〜】踵部褥瘡の局所治療(手術療法を含む). WOC Nursing 2(5):22-28, 2014.
8. 木村勇亮, 大浦紀彦, 梶谷彩奈, 多田朋子, 菅浩隆, 多久嶋亮彦, 波利井清紀:【末梢動脈疾患に対する最先端治療戦略】重症下肢虚血に対する創傷治療. Circulation 4(2):67-72, 2014.
9. 木村勇亮, 大浦紀彦, 梶谷彩奈, 多田朋子, 菅浩隆, 多久嶋亮彦, 波利井清紀:【重症下肢虚血肢とリハビリテーション】足潰瘍, 壊疽の局所療法. 総合リハビリテーション42(4):305-312, 2014.
10. 大浦紀彦:【特殊ユニット, 他のチーム医療から考える褥瘡ケア】手術室. WOC Nursing 2(4):12-16, 2014.
11. Kagaya Y, Ohura N, Suga H, Eto H, Takushima A, Harii K: 'Real angiosome' assessment from peripheral tissue perfusion using tissue oxygen saturation foot-mapping in patients with critical limb ischemia. Eur J Vasc Endovasc Surg. 47(4):433-441, 2014.
12. 安井佑¹, 木下幹雄, 栗田恵里奈, 佐藤大介, 大浦紀彦(¹東京西徳洲会病院 形成外科):全身性炎症反応症候群を呈した重症感染性足壊疽に対し二期の切断術が有用であった2例. 形成外科57(3):303-309, 2014.
13. Kagaya Y, Ohura N, Kurita M, Takushima A, Harii K: Examination of tissue oxygen saturation(StO₂) changes associated with vascular pedicle occlusion in a rat Island flap model using near-Infrared spectroscopy. Microsurgery (Epub 2015).
14. Okamoto S, Iida O, Nakamura M, Yamauchi Y, Fukunaga M, Yokoi Y, Soga Y, Zen K, Hirano K, Suematsu N, Suzuki K, Shintani Y, Miyashita Y, Urasawa K, Kitano I, Yamaoka T, Ohura N, Hamasaki T, Uematsu M, Nanto S: Postprocedural Skin Perfusion Pressure Correlates With Clinical Outcomes 1 Year After Endovascular Therapy for Patients With Critical Limb Ischemia on behalf of the OLIVE Investigators. Angiology 2015.(Published online).
15. Ozaki M, Suga H, Eto H, Kobayashi Y, Watanabe R, Takushima A, Harii K: Efficacy of serial excisions of melanocytic nevi on the face using a carbon dioxide laser: a cosmetic point of view. Aesthetic Plast Surg 38:316-321, 2014.
16. 尾崎峰, 佐藤卓士, 江藤ひとみ: 超高齢社会におけるレーザー治療の意義 高齢者におけるレーザーを用いた抗加齢美容医療. 日本レーザー医学会誌 35:451-455, 2015.
17. 尾崎峰, 白石知大, 江藤ひとみ: 骨移植による鼻形成術. 形成外科58:287-297, 2015.
18. 菅浩隆, 大浦紀彦:【消化器外科医必修!「形成外科」のエッセンス】形成外科の基本手技 褥瘡. 手術68(3):321-324, 2014.
19. Suga H, Rennert RC, Rodrigues M, Sorkin M, Glotzbach JP, Janusz M, Fujiwara T, Longaker MT, Gurter GC: Tracking the elusive fibrocytes: Identification and characterization of collagen producing hematopoietic lineage cells during murine wound healing. Stem Cells, 32:1347-1360, 2014.
20. Fukuoka H¹, Suga H, Harii K (¹Cherry - Blossom Plastic and Regenerative Surgery): Hair regeneration treatment using adipose - derived stem cell conditioned medium: follow - up with trichograms. E-plasty 15:65-72, 2015.
21. 成田圭吾, 多久嶋亮彦: 顔面の軟部組織損傷治療のコツー外傷性顔面神経損傷の治療. PEPARS 90:69-76, 2014.
22. 成田圭吾, 多久嶋亮彦: 顔面神経麻痺の治療 updateー 一期的遊離広背筋移植による笑いの再建. PEPARS 92:63-68, 2014.
23. Shiraishi T, Park S, Niu A, Hasegawa H: Congenital hypertrophy of multiple intrinsic muscles of the foot. J Plast Surg Hand Surg 48(6):437-440, 2014.
24. 白石知大, 多久嶋亮彦, 波利井清紀:【顔面神経麻痺における眼瞼部の治療】病的共同運動に伴う瞼裂縦幅の狭小化に対する外科的治療戦略. 形成外科 57(5):497-505, 2014.
25. 井本滋¹, 白石知大(¹杏林大学乳癌外科):【乳癌に対するoncoplastic surgery】Oncoplastic surgery を考慮した乳癌手術皮膚温存乳房切除術. 外科 76(9):963-968, 2014.
26. 白石知大:【形成外科医のための手外科の基本】伸筋腱損傷の診断と治療のポイント. 形成外科 57(増刊):S15-S21, 2014.

27. 白石知大,辻直子,多久嶋亮彦,波利井清紀:【乳房インプラント再建のコツ】自家組織再建と人工物再建の比較. 形成外科 58(2):157-166, 2015.
28. 辻直子¹, 浅野裕子², 吉村浩太郎³, 波利井清紀(¹セルポートクリニック横浜, ²亀田総合病院乳腺科, ³東京大学医学部形成外科・美容外科): 胸郭変形と乳房低形成に対する脂肪由来幹細胞付加脂肪移植術. 形成外科57(9):1041-1050, 2014.
29. 辻直子¹, 村瀬祥子¹, 波利井清紀(¹セルポートクリニック横浜): インプラントと幹細胞付加脂肪移植(CAL)を併用した乳房再建術の手技と要点. 形成外科58(2):167-175, 2015.

著書

1. 多久嶋亮彦, 成田圭吾:形成外科エキスパートたちの基本手術血管柄付き遊離腓骨移植による下顎再建. 野崎幹弘編. 東京, 克誠堂出版, 2014. p.170-178.
2. 水原章浩, 大浦紀彦:症例でみるよくわかる創傷の陰圧閉鎖療法. 医学と看護社, 2015.
3. 大浦紀彦:皮膚感染症／蜂窩織炎, 壊死性軟部組織感染症. 形成外科治療手技全書 III 創傷外科. 東京, 克誠堂, 2015. p.244-252.

その他

1. 大浦紀彦:研究会主催 第10回東京 CLI 検討会. 新宿, 2014年4月17日.
2. 大浦紀彦:研究会主催 第2回 Tama Limb Salvage and wound care Nursing Network. 吉祥寺, 2014年5月10日.
3. 大浦紀彦:研究会主催 第2回「透析患者の足を救う」多摩地区 CLI カンファレンス. 杏林大学大学院講堂, 2014年8月2日.
4. 大浦紀彦:研究会主催 第11回東京 CLI 検討会. 新宿, 2014年9月11日.
5. 大浦紀彦:研究会主催 第1回 TAMA Outpatients and Home-care Wound care meeting. 吉祥寺, 2015年2月12日.
6. 菅浩隆:2014年度日本形成外科学会学術奨励賞(受賞論文: Suga H, Rennert RC, Rodrigues M, Sorkin M, Glotzbach JP, Januszyk M, Fujiwara T, Longaker MT, Gurter GC. Tracking the elusive fibrocytes: Identification and characterization of collagen producing hematopoietic lineage cells during murine wound healing. Stem Cells, 32:1347-1360, 2014.).

泌尿器科学教室

講演

1. 穴戸俊英, 北村盾二, 舩田一樹, 二宮直紀, 中村雄, 山口剛, 林建二郎, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄:当院における HoLEP および TUEB の中期治療成績. 第102回日本泌尿器科学会総会, 神戸, 2014年4月24日.
2. 原秀彦, 北村盾二, 二宮直紀, 舩田一樹, 中村雄, 山口剛, 板谷直, 林建二郎, 多武保光宏, 穴戸俊英, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄:進行性腎細胞癌に対してスニチニブを使用した症例の検討. 第102回日本泌尿器科学会総会, 神戸, 2014年4月24日.
3. 中村雄, 北村盾二, 二宮直紀, 舩田一樹, 山口剛, 林建二郎, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 穴戸俊英, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄:当院における腹腔鏡下膀胱全摘術の現状と問題点. 第102回日本泌尿器科学会総会, 神戸, 2014年4月24日.
4. 桶川隆嗣, 舩田一樹, 二宮直紀, 中村雄, 山口剛, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 舩田原紀久雄:去勢抵抗性前立腺癌にお

ける化学療法での治療効果判定は PSA で十分かー末梢循環癌細胞検査の意義-. 第102回日本泌尿器科学会総会, 神戸, 2014年4月25日.

5. 北村盾二, 二宮直紀, 舩田一樹, 中村雄, 山口剛, 林建二郎, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 穴戸俊英, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄:当院における精巣腫瘍治療, 腹腔鏡下後腹膜リンパ節郭清術の初期経験. 第102回日本泌尿器科学会総会, 神戸, 2014年4月25日.
6. 板谷直, 北村盾二, 舩田一樹, 二宮直紀, 中村雄, 山口剛, 林建二郎, 原秀彦, 多武保光宏, 穴戸俊英, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄:体外衝撃波碎石術後の α 1遮断薬による排石効果の比較検討. 第102回日本泌尿器科学会総会, 神戸, 2014年4月25日.
7. 二宮直紀, 北村盾二, 舩田一樹, 中村雄, 山口剛, 林建二郎, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 穴戸俊英, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄:PNL の中長期の治療成績と合併症. 第102回日本泌尿器科学会総会, 神戸, 2014年4月25日.
8. 多武保光宏, 北村盾二, 舩田一樹, 二宮直紀, 中村雄, 山口剛, 板谷直, 林建二郎, 原秀彦, 穴戸俊英, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄:結石性腎盂腎炎における DIC 発症への危険因子. 第102回日本泌尿器科学会総会, 神戸, 2014年4月26日.
9. 林建二郎, 穴戸俊英, 北村盾二, 二宮直紀, 舩田一樹, 中村雄, 山口剛, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄:腸管を利用した尿管変向術が消化管粘膜に及ぼす影響の検討. 第102回日本泌尿器科学会総会, 神戸, 2014年4月26日.
10. 山口剛, 北村盾二, 二宮直紀, 舩田一樹, 中村雄, 林建二郎, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 穴戸俊英, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄:腎部分切除, 腎全摘除後における腎機能の推移, 制癌効果とそれに影響する因子についての検討. 第102回日本泌尿器科学会総会, 神戸, 2014年4月26日.
11. 舩田一樹, 北村盾二, 二宮直紀, 中村雄, 山口剛, 板谷直, 林建二郎, 原秀彦, 多武保光宏, 穴戸俊英, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄:去勢抵抗性前立腺癌に対するドセタキセル療法での循環腫瘍細胞の FISH 解析. 第102回日本泌尿器科学会総会, 神戸, 2014年4月26日.
12. 野間康央, 磯谷周治, 下山博史, 井上正浩, 中島晶子, 古謝将之, 堀内明, 常盤紫野, 北村香介, 吉井隆, 斎藤恵介, 久末伸一, 井手久満, 武藤智, 山口雷蔵, 堀江重郎:ロボット補助下腎部分切除術(RAPN)における選択的腎動脈遮断を目的とした手術計画の経験. 第102回日本泌尿器科学会総会, 神戸, 2014年4月26日.
13. 金城真実, 嘉村康邦, 関口由紀, 舩田原紀久雄:女性過活動膀胱患者における β 3刺激薬と抗ムスカリン薬の安全性・有効性の比較. 第102回日本泌尿器科学会総会, 神戸, 2014年4月26日.
14. 桶川隆嗣:CRPC における circulating tumor cells (CTC)の意義. 泌尿器 CTC 研究会, 東京, 2014年5月9日.
15. 桶川隆嗣:前立腺癌がんの個別化医療. がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン, 三鷹, 2014年5月28日.
16. 北村盾二, 鮫島未央, 二宮直紀, 舩田一樹, 中村雄, 野間康央, 山口剛, 森川泰如, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄, 藤原正親, 菅間博:ペニシリンG大量投与によって発症したと考えられる出血性膀胱炎の1例. 第124回多摩泌尿器科医会, 武蔵野, 2014年6月6日.
17. 北村盾二, 鮫島未央, 二宮直紀, 舩田一樹, 野間康央, 中村

- 雄, 森川泰如, 山口剛, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 奴田原紀久雄: 高容量ペニシリン G 投与により出血性膀胱炎をきたした1例. 第615回日本泌尿器科学会東京地方会, 東京, 2014年6月21日.
18. 奴田原紀久雄: 多発性嚢胞腎(ADPKD)の薬物療法. 『常染色体優性多発性嚢胞腎』学術講演会, つくば, 2014年6月26日.
19. 奴田原紀久雄, 東原英二, 桶川隆嗣, 穴戸俊英, 多武保光宏, 原秀彦, 宮崎功, 小林邦典, 似鳥俊明: 多発性嚢胞腎患者に対する飲水増加がもたらす効果について. 第57回日本腎臓学会学術総会, 横浜, 2014年7月4-6日.
20. 安藤昌彦, 武藤智, 奴田原紀久雄, 堀江重郎: 疾患負担とQOL. 第57回日本腎臓学会学術総会, 横浜, 2014年7月4-6日.
21. 武藤智, 望月俊雄, 土谷健, 西尾妙織, 花岡一成, 鶴屋和彦, 石村栄治, 成田一衛, 乳原善文, 奴田原紀久雄, 堀江重郎: 多発性嚢胞腎患者全国登録による多施設共同研究(J-PKD レジストリー研究): 中間報告. 第57回日本腎臓学会学術総会, 横浜, 2014年7月4-6日.
22. 森川泰如: 当院でのエンザルタミド初期治療経験. 前立腺癌治療戦略シンポジウム, 立川, 2014年7月18日.
23. 奴田原紀久雄: ADPKD の診断と治療. 神戸明石腎セミナー, 神戸, 2014年8月7日.
24. 板谷直, 鮫島未央, 北村盾二, 舩田一樹, 二宮直紀, 野間康央, 中村雄, 山口剛, 森川泰如, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 東原英二, 奴田原紀久雄, 太田智則: 体外衝撃波碎石術後の α 1遮断薬による排石効果の比較検討. 日本尿路結石症学会第24回学術集会, 大阪, 2014年8月30日.
25. 奴田原紀久雄: 腎盂尿管ビデオスコープ OLYMPUS URF-V2 開発の原点そして未来へ. 日本尿路結石症学会第24回学術集会, 大阪, 2014年8月30日.
26. 森川泰如, 鮫島未央, 北村盾二, 二宮直紀, 舩田一樹, 野間康央, 中村雄, 山口剛, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 東原英二, 奴田原紀久雄: 去勢抵抗性前立腺癌化学療法後の治療経験. 第125回多摩泌尿器科医会, 立川, 2014年9月12日.
27. 金城真実, 嘉村康邦, 関口由紀, 奴田原紀久雄: 女性過活動膀胱患者におけるメタボリックシンドロームとミラベグロン治療効果に関する検討. 第21回日本排尿機能学会, 岡山, 2014年9月18日.
28. 谷口珠実, 丹波光子, 平山千登勢, 金城真実, 榎本香織, 多武保光宏, 奴田原紀久雄, 小林英樹, 大竹裕子, 武田正之: 尿失禁女性の骨盤底筋訓練後6ヵ月間の年齢別比較. 第21回日本排尿機能学会, 岡山, 2014年9月19日.
29. 奴田原紀久雄, 東原英二, 桶川隆嗣, 多武保光宏, 森秀明, 宮崎功, 似鳥俊明, 小林邦典: Safety of somatostatin analogue octreotide for Autosomal dominant polycystic kidney disease. 第22回嚢胞性腎疾患研究会, 東京, 2014年9月20日.
30. 舩田一樹, 鮫島未央, 北村盾二, 二宮直紀, 中村雄, 野間康央, 山口剛, 森川泰如, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 東原英二, 奴田原紀久雄: 術前推定前立腺容積100cm³以上の前立腺肥大症に対する HoLEP の手術成績. 第21回日本排尿機能学会, 岡山, 2014年9月20日.
31. 中村雄, 鮫島未央, 北村盾二, 二宮直紀, 舩田一樹, 野間康央, 森川泰如, 山口剛, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 奴田原紀久雄, 東原英二: HoLEP の長期治療成績. 第21回日本排尿機能学会, 岡山, 2014年9月20日.
32. 森川泰如, 原秀彦: 褐色細胞腫に対する腹腔鏡下副腎摘除術の検討. 第27回日本内視鏡外科学会総会, 盛岡, 2014年10月4日.
33. 原秀彦, 森川泰如, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 奴田原紀久雄: 当院における腎癌での開腹手術と腹腔鏡下手術の治療成績. 第27回日本内視鏡外科学会総会, 盛岡, 2014年10月4日.
34. 北村盾二, 鮫島未央, 二宮直紀, 舩田一樹, 野間康央, 中村雄, 山口剛, 森川泰如, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 東原英二, 奴田原紀久雄: 当院における腹腔鏡下膀胱全摘除術の現状と問題点. 第27回日本内視鏡外科学会総会, 盛岡, 2014年10月4日.
35. 鮫島未央, 北村盾二, 舩田一樹, 二宮直紀, 中村雄, 野間康央, 山口剛, 森川泰如, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 奴田原紀久雄: 腎癌胆嚢転移の1例. 第79回日本泌尿器科学会東部総会, 横浜, 2014年10月13日.
36. 原秀彦, 鮫島未央, 北村盾二, 舩田一樹, 二宮直紀, 中村雄, 野間康央, 山口剛, 森川泰如, 板谷直, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 奴田原紀久雄: 腎癌骨転移に対するゾレドロン酸併用療法の検討. 第79回日本泌尿器科学会東部総会, 横浜, 2014年10月13日.
37. 北村盾二, 寺戸雄一, 二宮直紀, 舩田一樹, 野間康央, 中村雄, 山口剛, 森川泰如, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 奴田原紀久雄: 前立腺膿瘍との鑑別が困難であった多発血管炎性肉芽腫症(GPA, Wegener 肉芽腫症)の1例. 第79回日本泌尿器科学会東部総会, 横浜, 2014年10月13日.
38. 二宮直紀, 鮫島未央, 北村盾二, 舩田一樹, 野間康央, 中村雄, 山口剛, 森川泰如, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 奴田原紀久雄: 当院における根治的膀胱全摘術の周術期合併症の検討. 第79回日本泌尿器科学会東部総会, 横浜, 2014年10月13日.
39. 山口剛, 二宮直紀, 舩田一樹, 中村雄, 林建二郎, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 穴戸俊英, 桶川隆嗣, 東原英二, 奴田原紀久雄: 膀胱癌での回腸新膀胱造設術症例における長期成績. 第79回日本泌尿器科学会東部総会, 横浜, 2014年10月13日.
40. 多武保光宏, 鮫島未央, 北村盾二, 舩田一樹, 二宮直紀, 中村雄, 野間康央, 山口剛, 森川泰如, 板谷直, 原秀彦, 桶川隆嗣, 奴田原紀久雄: うつ病を合併した LOH 症候群に対するテストステロン補充療法. 第79回日本泌尿器科学会東部総会, 横浜, 2014年10月14日.
41. 森川泰如, 北村盾二, 舩田一樹, 二宮直紀, 中村雄, 野間康央, 山口剛, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 東原英二, 奴田原紀久雄: 当院におけるデガレリクスの使用経験. 第79回日本泌尿器科学会東部総会, 横浜, 2014年10月14日.
42. 板谷直, 鮫島未央, 北村盾二, 舩田一樹, 二宮直紀, 野間康央, 中村雄, 山口剛, 森川泰如, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 奴田原紀久雄: 腎盂尿管癌における予後因子の検討. 第79回日本泌尿器科学会東部総会, 横浜, 2014年10月14日.
43. 野間康央, 鮫島未央, 北村盾二, 二宮直紀, 舩田一樹, 中村雄, 山口剛, 森川泰如, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 奴田原紀久雄: 当院における脳転移を認めた腎癌の治療成績. 第79回日本泌尿器科学会東部総会, 横浜, 2014年10月14日.
44. 舩田一樹, 鮫島未央, 北村盾二, 二宮直紀, 中村雄, 野間康央, 山口剛, 森川泰如, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 東原英二, 奴田原紀久雄: HoLEP 後に見つかった前立腺癌の臨床的検討. 第79回日本泌尿器科学会東部総会, 横浜, 2014年10月14日.
45. 桶川隆嗣: 杏林大学におけるアピラテロンの使用経験. ザイティ

- ガ発売記念講演会, 立川, 2014年10月31日.
46. 奴田原紀久雄:ADPKD 治療の Update. 第2回福井 ADPKD 研究会, 福井, 2014年11月6日.
 47. 桶川隆嗣:前立腺がんの治療とは?. 調布市前立腺がん市民公開講座, 調布, 2014年11月15日.
 48. 鮫島未央:後腹膜に発生した hemangiopericytoma の1例. 第126回多摩泌尿器科医会, 武蔵野, 2014年11月21日.
 49. 桶川隆嗣, 舩田一樹, 二宮直紀, 中村雄, 山口剛, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 奴田原紀久雄:腎腫瘍に対する単孔式後腹膜下腎摘除は従来の腹腔鏡手術より低侵襲か. 第28回日本泌尿器内視鏡学会, 福岡, 2014年11月26日.
 50. 桶川隆嗣, 舩田一樹, 二宮直紀, 中村雄, 山口剛, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 奴田原紀久雄:腹腔鏡下前立腺全摘術とロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘術の治療成績:単一術者の比較. 第28回日本泌尿器内視鏡学会, 福岡, 2014年11月26日.
 51. 鮫島未央, 北村盾二, 野間康央, 山口剛, 森川泰如, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 奴田原紀久雄:PNL を行ったマトリックス結石の1例. 第28回日本泌尿器内視鏡学会, 福岡, 2014年11月26日.
 52. 山口剛, 二宮直紀, 舩田一樹, 中村雄, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 東原英二, 奴田原紀久雄:腹腔鏡下腎部分切除術における中長期腎機能の推移. 第28回日本泌尿器内視鏡学会, 福岡, 2014年11月27日.
 53. 野間康央, 鮫島未央, 北村盾二, 二宮直紀, 舩田一樹, 中村雄, 山口剛, 森川泰如, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 奴田原紀久雄:TUL 後の尿管狭窄の臨床検討. 第28回日本泌尿器内視鏡学会, 福岡, 2014年11月27日.
 54. 二宮直紀, 鮫島未央, 舩田一樹, 野間康央, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 東原英二, 奴田原紀久雄:PNL の中長期の成績. 第28回日本泌尿器内視鏡学会, 福岡, 2014年11月27日.
 55. 板谷直, 北村盾二, 二宮直紀, 舩田一樹, 中村雄, 山口剛, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 奴田原紀久雄:当科で施行した腹腔鏡下腎摘除術から開腹手術に移行した症例の検討. 第28回日本泌尿器内視鏡学会, 福岡, 2014年11月27日.
 56. 多武保光宏, 鮫島未央, 北村盾二, 二宮直紀, 舩田一樹, 中村雄, 森川泰如, 原秀彦, 桶川隆嗣, 奴田原紀久雄:腎および尿管結石における ESWL 治療効果の予測. 第28回日本泌尿器内視鏡学会, 福岡, 2014年11月28日.
 57. 原秀彦, 鮫島未央, 北村盾二, 二宮直紀, 舩田一樹, 山口剛, 板谷直, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 奴田原紀久雄:当院における腹腔鏡下腎盂形成術の治療成績. 第28回日本泌尿器内視鏡学会, 福岡, 2014年11月28日.
 58. 鮫島未央, 北村盾二, 二宮直紀, 舩田一樹, 野間康央, 中村雄, 山口剛, 森川泰如, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 奴田原紀久雄, 下山田博明, 菅間博:後腹膜 hemangiopericytoma の1例. 第616回日本泌尿器科学会東京地方会, 東京, 2014年12月11日.
 59. 桶川隆嗣, 舩田一樹, 二宮直紀, 中村雄, 山口剛, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 奴田原紀久雄:ハイリスク前立腺癌における末梢循環癌細胞検査の意義. 第30回前立腺シンポジウム, 東京, 2014年12月14日.
 60. 桶川隆嗣:私の行ってきた臨床・研究のこれまでとこれから. 三鷹市医師会学術講演会, 三鷹, 2014年12月18日.
 61. 奴田原紀久雄, 東原英二, 桶川隆嗣, 多武保光宏, 森秀明, 宮崎功, 似島俊明, 小林邦典:ADPKD 患者に対するソマトスタチン(オクトレオチド)の安全性について. 第2回「若手のための

ADPKD マネージメントカンファレンス, 東京, 2015年1月24日.

62. 野間康央, 鮫島未央, 北村盾二, 二宮直紀, 舩田一樹, 山口剛, 森川泰如, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 奴田原紀久雄, 東原英二:アタザナビル内服で発症した尿管結石の1例. 第127回多摩泌尿器科医会, 武蔵野, 2015年1月30日.
63. 野間康央, 鮫島未央, 北村盾二, 二宮直紀, 舩田一樹, 山口剛, 森川泰如, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 奴田原紀久雄, 東原英二:アタザナビル内服で発症した尿管結石の1例. 第617回日本泌尿器科学会東京地方会, 東京, 2015年2月12日.
64. 奴田原紀久雄:基礎から学ぶ膀胱癌・前立腺癌. 第8回多摩尿検査講演会, 立川, 2015年2月28日.
65. 二宮直紀:腹腔鏡下前立腺全摘術とロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘術の治療成績:単一術者の比較. 第128回多摩泌尿器科医会, 武蔵野, 2015年3月6日.

論文

1. Okegawa T, Itaya N, Hara H, Tambo M, Nutahara K : Circulating tumor cells as a biomarker predictive of sensitivity to docetaxel chemotherapy in patients with castration-resistant prostate cancer. *Anticancer Res* 34(11):6705-6710,2014.
2. Yabusaki M^{1,2}, Sato J^{1,2}, Kohyama A³, Kojima T³, Nobuoka D^{2,4}, Yoshikawa T², Sawada Y², Murakami K¹, Gohda K¹, Okegawa T, Nakamura M⁵, Takamatsu K⁵, Ito M³, Kaneko K³, Nakatsura T² (¹Sysmex Corporation, ²National Cancer Center, ³National Cancer Center Hospital East, ⁴Okayama University, ⁵Tokyo Dental College) : Detection and preliminary evaluation of circulating tumor cells in the peripheral blood of patients with eight types of cancer using a telomerase-specific adenovirus. *Oncol Rep* 32(5):1772-1778,2014.
3. Okegawa T, Higaki M¹, Matsumoto T², Kase H³, Murata A⁴, Noda K⁵, Noda H⁶, Asaoka H⁷, Oshi M⁸, Tomoishi J⁹, Uchida H¹⁰, Higashihara E, Nutahara K, Bone Metastasis Prostate Cancer Group (¹National Hospital Organization Disaster Medical Center, ²Tokyo Medical University Hachioji Medical Center, ³Sassa General Hospital, ⁴Kawakita associates General Hospital, ⁵NishiTokyo Central General Hospital, ⁶Tama-Hokubu Medical Center, ⁷Akuru Municipal Medical Center, ⁸Tokyo Metropolitan Tama Medical Center, ⁹Ome Municipal General Hospital, ¹⁰Hitotsubashi Hospital): Zoledronic acid improves clinical outcomes in patients with bone metastatic hormone-naïve prostate cancer in a multicenter clinical trial. *Anticancer Res* 34(8): 4415-4420, 2014.
4. Tambo M, Okegawa T, Shishido T, Higashihara E, Nutahara K: Predictors of septic shock in obstructive acute pyelonephritis. *World J Urol* 32(3):803-811, 2014.
5. Fujita N, Okegawa T, Terado Y¹, Tambo M, Higashihara E, Nutahara K (¹Dept of Pathology, Kyorin University school of Medicine) : Serum level and immunohistochemical expression of vascular endothelial growth factor for the prediction of postoperative recurrence in renal cell carcinoma. *BMC Res Notes* 7:369,2014.
6. Higashihara E¹, Nutahara K, Tanbo M, Hara H, Miyazaki I², Kobayashi K³, Nitadori T² (¹Department of ADPKD Research, Kyorin University School of Medicine, ²Department of Radiology, Kyorin University School of Medicine, ³Department of Medical Radiological Technology, Faculty of Health Sciences, Kyorin University) : Does increased water intake prevent disease

progression in autosomal dominant polycystic kidney disease?.
Nephrol Dial Transplant 29(9):1710-1719,2014.

7. Higashihara E¹, Nutahara K, Okegawa T, Tanbo M, Mori H², Miyazaki I³, Nitadori T³, Kobayashi K^{3,4} (¹Department of ADPKD Research, Kyorin University School of Medicine, ²Department of Gastroenterology, Kyorin University School of Medicine, ³Department of Radiology, Kyorin University School of Medicine, ⁴Department of Medical Radiological Technology, Faculty of Health Sciences, Kyorin University): Safety study of somatostatin analogue octreotide for autosomal dominant polycystic kidney disease in Japan. Clin Exp Nephrol 2014 (in press).
8. 奴田原紀久雄: 前立腺癌外科的治療の展望 ロボット支援下腹腔鏡下前立腺全摘術. 杏林医学会誌 45(1):19-23, 2014,
9. 奴田原紀久雄: 多発性嚢胞腎の薬物療法. 腎と透析 77(5): 735-739, 2014.
10. 山本新吾¹, 奴田原紀久雄(¹兵庫医科大学): 序文 特集2長期留置尿管ステントの現状と展望. Jpn J Endourol 27:47, 2014.
11. 和田耕一郎¹, 山本新吾², 松崎純一³, 麦谷莊一⁴, 山田仁⁵, 安田満⁶, 宮崎淳⁷, 高橋聡⁸, 山口秋人⁹, 奴田原紀久雄(¹岡山大学, ²兵庫医科大学, ³大口東総合病院, ⁴すずかけセントラル病院, ⁵武田総合病院, ⁶岐阜大学, ⁷筑波大学, ⁸札幌医科大学, ⁹原三信病院): 長期留置尿管ステントの現状と展望 尿管ステントの長期留置に関するアンケート調査. Jpn J Endourol 27(1): 79-83, 2014.
12. 穴戸俊英, 林建二郎, 東原英二, 奴田原紀久雄: 間質性膀胱炎の治療法の変遷と成績 間質性膀胱炎に対する低用量シクロスポリン A(CyA)内服治療効果と今後の課題. 泌外 27(臨増): 623-625, 2014.
13. 金城真実, 嘉村康邦¹, 関口由紀², 奴田原紀久雄(¹四谷メディカルキューブ, ²横浜元町女性医療クリニック LUNA): 女性尿失禁患者における精神症状について. 日女性骨盤底医学会誌, 11(1):89-92, 2014.
14. 桶川隆嗣, 板谷直, 原秀彦, 奴田原紀久雄: 腎盂尿管癌に対する単孔式後腹膜鏡下腎尿管全摘除術. Jpn J Endourol 27(2):262-267, 2014.
15. 多武保光宏, 奴田原紀久雄: 経尿道的尿管碎石術(TUL). 泌尿器ケア 226:172-181, 2014.
16. 多武保光宏, 奴田原紀久雄: 泌尿器内視鏡治療とチーム医療ー結石内視鏡治療ー. Jpn J Endourol 27(1):112-117, 2014.
17. 多武保光宏, 奴田原紀久雄: 難治性結石治療に挑むー周術期尿路感染症の治療ー. 泌外 27(臨増):661-663, 2014.
18. 板谷直, 北村盾二, 舩田一樹, 二宮直紀, 中村雄, 山口剛, 林建二郎, 原秀彦, 多武保光宏, 穴戸俊英, 桶川隆嗣, 東原英二, 奴田原紀久雄: 体外衝撃波碎石術(ESWL)後のα1遮断薬による排石効果の比較検討. 日尿路結石症会誌 12(2): 175-177, 2014.
19. Kondo T¹, Nakazawa H², Oya M³, Kimura G⁴, Fujii Y⁵, Hatano T⁶, Kawata N⁷, Kume H⁸, Morita M⁹, Nakajima K¹⁰, Ohno Y¹¹, Okegawa T, Takahashi S¹², Wakumoto Y¹³, Horie S¹³, Yamaguchi R, Saito K, Murakami M (¹Tokyo Women's Medical University, ²Tokyo Women's Medical University Medical Center East, ³Keio University School of Medicine, ⁴Nippon Medical School, ⁵Tokyo Medical and Dental University Graduate School, ⁶JR Tokyo General Hospital, ⁷Nihon University School of Medicine, ⁸Tokyo University, ⁹Showa University Koto Toyosu Hospital, ¹⁰Toho University School of Medicine, ¹¹Tokyo Medical University, ¹²Cancer Institute Hospital, ¹³Juntendo University Graduate

School of Medicine): Clinical efficacy and prognostic factors of tumor progression in Japanese patients with advanced renal cell carcinoma treated with sorafenib. Jpn J Clin Oncol. 45(3): 274-80,2015.

20. 奴田原紀久雄: 腎盂尿管ビデオスコープ OLYMPUS URF-V2 開発の原点そして未来へ. 日尿路結石症会誌 13(2):180-183, 2015.
21. 奴田原紀久雄: 「超高齢社会におけるレーザー治療の意義」の特集によせて. 日レーザー医学会誌 35(4):444, 2015.
22. 奴田原紀久雄: 多発性嚢胞腎ADPKDの新しい展開 尿路結石症と腎細胞がん. 腎臓内科・泌尿器科 1(2):153-156, 2015.

平成25年度業績追加分

1. 林建二郎, 穴戸俊英, 北村盾二, 二宮直紀, 舩田一樹, 中村雄, 山口剛, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 奴田原紀久雄: 膀胱全摘後の回腸新膀胱における排尿状態の検討. 日排尿学会誌 24(2):332-335, 2014.

著書

1. Okegawa T, Nutahara K: Urology. Reduced Port Laparoscopic Surgery. Mori T, Dapri G. Tokyo, Springer Japan, 2014. p.491-497.
2. 奴田原紀久雄: 血尿. 診療ガイドライン UP-TO-DATE 2014-2015. 門脇孝, 小室一成, 宮地良樹監修, 五十嵐隆, 一ノ瀬正和, 大家基嗣, 岡本美孝, 加藤聖子, 小松則夫, 高橋良輔, 樋口和秀, 三鴨廣繁, 三森経世, 持田智, 山崎正志, 山本哲也編集. 東京, メディカルレビュー社, 2014. p.811-815.
3. 奴田原紀久雄: 疫学・予後. エビデンスに基づく多発性嚢胞腎(PKD)診療ガイドライン2014. 松尾清一監修, 厚生労働省難治性疾患克服研究事業進行性腎障害に対する調査研究班編集. 東京, 東京医学社, 2014. p.26-28.
4. 奴田原紀久雄: 治療 4) 尿路結石. エビデンスに基づく多発性嚢胞腎(PKD)診療ガイドライン2014. 松尾清一監修, 厚生労働省難治性疾患克服研究事業進行性腎障害に対する調査研究班編集. 東京, 東京医学社, 2014. p.46-47.
5. 多武保光宏: ゲムシタピン(尿路上皮癌), メトトレキサート(尿路上皮癌), シスプラチン(尿路上皮癌, 精巣癌), プレオマイシン(精巣癌), ドセタキセル(前立腺癌), ゴセレリン・リユープロレリン・テガレリクス(前立腺癌), エベロリムス・テムシロリムス・スニチニブ・ソラフェニブ・アキシチニブ(腎臓癌). がん薬物療法キードラッグ65. 古瀬純司編集. 東京, 中外医学社, 2014. p.40, 61, 79-80, 136-137, 192, 223-225, 230-231, 265, 269-270, 299-300, 304-305, 307-308.
6. 奴田原紀久雄: 腎・尿管結石. 今日の治療指針2015. 山口徹, 北原光夫監修, 福井次矢, 高木誠, 小室一成総編集. 東京, 医学書院, 2015. p.1084-1085.
7. 奴田原紀久雄: 疫学. エビデンスに基づく多発性嚢胞腎(PKD)診療ガイドライン2014準拠 多発性嚢胞腎診療ガイド Q&A 改訂第2版. 松尾清一監修, 堀江重郎編集. 東京, 診断と治療社, 2015. p.34-35.
8. 奴田原紀久雄合併症とその対策(6) 尿路結石. エビデンスに基づく多発性嚢胞腎(PKD)診療ガイドライン2014準拠 多発性嚢胞腎診療ガイド Q&A 改訂第2版. 松尾清一監修, 堀江重郎編集. 東京, 診断と治療社, 2015. p.98-99.
9. 奴田原紀久雄: 予後, 予後判定基準など. エビデンスに基づく多発性嚢胞腎(PKD)診療ガイドライン2014準拠 多発性嚢胞腎診療ガイド Q&A 改訂第2版. 松尾清一監修, 堀江重郎編集. 東京, 診断と治療社, 2015. p.119-120.

その他

1. 桶川隆嗣: 「医療の現場」前立腺がん ～医療の未来形 ロボッ

ト手術に密着！～, BS 朝日, 2015年2月1日.

多発性嚢胞腎研究講座

講演

国内学会・講演

1. 東原英二:多発性嚢胞腎の発症機序と薬物治療. Meet the Expert ADPKD in TOYMA, 富山, 2014年4月21日.
2. 穴戸俊英, 北村盾二, 舩田一樹, 二宮直紀, 中村雄, 山口剛, 林建二郎, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄:当院における HoLEP および TUEB の中期治療成績. 第102回日本泌尿器科学会総会, 神戸, 2014年4月24日.
3. 原秀彦, 北村盾二, 二宮直紀, 舩田一樹, 中村雄, 山口剛, 板谷直, 林建二郎, 多武保光宏, 穴戸俊英, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄:進行性腎細胞癌に対してスニチニブを使用した症例の検討. 第102回日本泌尿器科学会総会, 神戸, 2014年4月24日.
4. 中村雄, 北村盾二, 二宮直紀, 舩田一樹, 山口剛, 林建二郎, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 穴戸俊英, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄:当院における腹腔鏡下膀胱全摘術の現状と問題点. 第102回日本泌尿器科学会総会, 神戸, 2014年4月24日.
5. 北村盾二, 二宮直紀, 舩田一樹, 中村雄, 山口剛, 林建二郎, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 穴戸俊英, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄:当院における精巣腫瘍治療, 腹腔鏡下後腹膜リンパ節郭清術の初期経験. 第102回日本泌尿器科学会総会, 神戸, 2014年4月25日.
6. 板谷直, 北村盾二, 舩田一樹, 二宮直紀, 中村雄, 山口剛, 林建二郎, 原秀彦, 多武保光宏, 穴戸俊英, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄:体外衝撃波碎石術後の $\alpha 1$ 遮断薬による排石効果の比較検討. 第102回日本泌尿器科学会総会, 神戸, 2014年4月25日.
7. 二宮直紀, 北村盾二, 舩田一樹, 中村雄, 山口剛, 林建二郎, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 穴戸俊英, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄:PNL の中長期の治療成績と合併症. 第102回日本泌尿器科学会総会, 神戸, 2014年4月25日.
8. 多武保光宏, 北村盾二, 舩田一樹, 二宮直紀, 中村雄, 山口剛, 板谷直, 林建二郎, 原秀彦, 穴戸俊英, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄:結石性腎盂腎炎における DIC 発症への危険因子. 第102回日本泌尿器科学会総会, 神戸, 2014年4月26日.
9. 林建二郎, 穴戸俊英, 北村盾二, 二宮直紀, 舩田一樹, 中村雄, 山口剛, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄:腸管を利用した尿路変向術が消化管粘膜に及ぼす影響の検討. 第102回日本泌尿器科学会総会, 神戸, 2014年4月26日.
10. 山口剛, 北村盾二, 二宮直紀, 舩田一樹, 中村雄, 林建二郎, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 穴戸俊英, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄:腎部分切除, 腎全摘除後における腎機能の推移, 制癌効果とそれに影響する因子についての検討. 第102回日本泌尿器科学会総会, 神戸, 2014年4月26日.
11. 舩田一樹, 北村盾二, 二宮直紀, 中村雄, 山口剛, 板谷直, 林建二郎, 原秀彦, 多武保光宏, 穴戸俊英, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄:去勢抵抗性前立腺癌に対するドセタキセル療法での循環腫瘍細胞の FISH 解析. 第102回日本泌尿器科学会総会, 神戸, 2014年4月26日.
12. 北村盾二, 鮫島未央, 二宮直紀, 舩田一樹, 中村雄, 野間康央, 山口剛, 森川泰如, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄, 藤原正親, 菅間博:ペニシリンG 大量投与によって発症したと考えられる出血性膀胱炎の1例. 第124回多摩泌尿器科医会, 武蔵野, 2014年6月6日.
13. 東原英二:ADPKD 治療 UPDATE. サムスカ効能追加記念静岡講演会, 静岡, 2014年6月7日.
14. 東原英二:ADPKD における最新診療. Tolvaptan 適応追加記念講演会, 小倉, 2014年6月17日.
15. 舩田原紀久雄, 東原英二, 桶川隆嗣, 穴戸俊英, 多武保光宏, 原秀彦, 宮崎功, 小林邦典, 似鳥俊明:多発性嚢胞腎患者に対する飲水増加がもたらす効果について. 第57回日本腎臓学会学術総会, 横浜, 2014年7月4-6日.
16. 東原英二:多発性嚢胞腎(PKD)の最新情報. 大塚製薬株式会社プレスセミナー, 東京, 2014年7月15日.
17. 東原英二:Tolvaptan の ADPKD 診療における位置づけ. サムスカ ADPKD 適応追加記念講演会, 盛岡, 2014年7月25日.
18. 板谷直, 鮫島未央, 北村盾二, 舩田一樹, 二宮直紀, 野間康央, 中村雄, 山口剛, 森川泰如, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄, 太田智則:体外衝撃波碎石術後の $\alpha 1$ 遮断薬による排石効果の比較検討. 日本尿路結石症学会第24回学術集会, 大阪, 2014年8月30日.
19. 東原英二:サムスカ錠 ADPKD 効能追加記念講演会. Opening Remarks, 東京, 2014年8月30日.
20. 東原英二:多発性嚢胞腎の最新治療. 第21回多摩透析勉強会, 立川, 2014年9月6日.
21. 森川泰如, 鮫島未央, 北村盾二, 二宮直紀, 舩田一樹, 野間康央, 中村雄, 山口剛, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄:去勢抵抗性前立腺癌化学療法後の治療経験. 第125回多摩泌尿器科医会, 立川, 2014年9月12日.
22. 舩田原紀久雄, 東原英二, 桶川隆嗣, 多武保光宏, 森秀明, 宮崎功, 似鳥俊明, 小林邦典:Safety of somatostatin analogue octreotide for Autosomal dominant polycystic kidney disease. 第22回嚢胞性腎疾患研究会, 東京, 2014年9月20日.
23. 東原英二, 舩田原紀久雄, 桶川隆嗣, 多武保光宏, 原秀彦, 宮崎功, 小林邦典, 似鳥俊明:Accuracy and Reliability of Kidney Volume Estimations with Ellipsoid Equations by Magnetic Resonance Imaging in Autosomal Dominant Polycystic Kidney Disease. 第22回嚢胞性腎疾患研究会, 東京, 2014年9月20日.
24. 舩田一樹, 鮫島未央, 北村盾二, 二宮直紀, 中村雄, 野間康央, 山口剛, 森川泰如, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄:術前推定前立腺容積100cm³以上の前立腺肥大症に対する HoLEP の手術成績. 第21回日本排尿機能学会, 岡山, 2014年9月20日.
25. 中村雄, 鮫島未央, 北村盾二, 二宮直紀, 舩田一樹, 野間康央, 森川泰如, 山口剛, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 舩田原紀久雄, 東原英二:HoLEP の長期治療成績. 第21回日本排尿機能学会, 岡山, 2014年9月20日.
26. 山口剛, 二宮直紀, 舩田一樹, 中村雄, 林建二郎, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 穴戸俊英, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄:膀胱癌での回腸新膀胱造設術症例における長期成績. 第79回日本泌尿器科学会東部総会, 横浜, 2014年10月13日.
27. 森川泰如, 北村盾二, 舩田一樹, 二宮直紀, 中村雄, 野間康央, 山口剛, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄:当院におけるデガレリクスの使用経験. 第79回日本泌尿器科学会東部総会, 横浜, 2014年10月14日.

28. 舩田一樹, 鮫島未央, 北村盾二, 二宮直紀, 中村雄, 野間康央, 山口剛, 森川泰如, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄: HoLEP 後に見つかった前立腺癌の臨床的検討. 第79回日本泌尿器科学会東部総会, 横浜, 2014年10月14日.
29. 山口剛, 二宮直紀, 舩田一樹, 中村雄, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄: 腹腔鏡下腎部分切除術における中長期腎機能の推移. 第28回日本泌尿器内視鏡学会, 福岡, 2014年11月27日.
30. 二宮直紀, 鮫島未央, 舩田一樹, 野間康央, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄: PNL の中長期の成績. 第28回日本泌尿器内視鏡学会, 福岡, 2014年11月27日.
31. 東原英二: 多発性嚢胞腎の新しい治療戦略. 第10回千葉エコー研究会, 千葉, 2014年11月30日.
32. 舩田原紀久雄, 東原英二, 桶川隆嗣, 多武保光宏, 森秀明, 宮崎功, 似島俊明, 小林邦典: ADPKD 患者に対するソマトスタチン(オクトレオチド)の安全性について. 第2回「若手のためのADPKD マネージメントカンファレンス」, 東京, 2015年1月24日.
33. 東原英二: 多発性嚢胞腎の新しい治療戦略. ADPKD Forum in Sendai, 仙台, 2015年1月27日.
34. 野間康央, 鮫島未央, 北村盾二, 二宮直紀, 舩田一樹, 山口剛, 森川泰如, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 舩田原紀久雄, 東原英二: アタザナビル内服で発症した尿管結石の1例. 第127回多摩泌尿器科医会, 武蔵野, 2015年1月30日.
35. 東原英二: 多発性嚢胞腎の新しい治療戦略. 香川 ADPKD 学術講演会, 高松, 2015年2月9日.
36. 東原英二: 多発性嚢胞腎の新しい治療戦略. サムスカ錠ADPKD 効能追加記念講演会, 立川, 2015年2月10日.
37. 野間泰央, 鮫島未央, 北村盾二, 二宮直紀, 舩田一樹, 山口剛, 森川泰如, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 舩田原紀久雄, 東原英二: アタザナビル内服で発症した尿管結石の1例. 第617回日本泌尿器科学会東京地方会, 東京, 2015年2月12日.
38. 東原英二: 多発性嚢胞腎の新しい治療戦略. 大崎地区学術講演会, 大崎, 2015年2月13日.
39. 東原英二: 多発性嚢胞腎の最新治療. 多発性嚢胞腎 地域医療連携講演会～変わる難病治療～, 福岡, 2015年2月24日.
40. 東原英二: 多発性嚢胞腎の新しい治療戦略. 日本医師会生涯教育講座 多発性嚢胞腎学術講演会, 青森, 2015年3月17日.
41. 東原英二: 多発性嚢胞腎の新しい治療戦略. 学術講演会 多発性嚢胞腎における最新診療, 山形, 2015年3月27日.

国際学会・米国学会

1. Torres VE, Chapman AB, Devuyst O, Gansvoort RT, Higashihara E, Perrone RD, Ouyang J, Shoaf SE, Dandurand A, McQuade RD, Czerwiec FS: Tolvaptan-treatment of ADPKD confers persistent EGFR improvement: results from the TEMPO 4:4 extension trial. 51st ERA-EDTA Congress, Netherland, June 1st, 2014.
 2. Devuyst, Chapman AB, Gansvoort RT, Grantham JJ, Higashihara E, Perrone RD, Torres VE, Krasa HB, Ouyang J, Shoaf S, Czerwiec FS Urine osmolality and outcome in ADPKD : resuts from the TEMPO 3:4 trial. 51st ERA-EDTA Congress, Netherland, June 1st, 2014.
 3. Perrone RD, Bae KT, Chapman AB, Devuyst O, Gansvoort RT, Grantham JJ, Higashihara E, Torres VE, Sergeyeva O, Zhou w, Blais JD, Czerwiec FS: Relationship of total kidney volume, growth, CKD stage and kidney pain in ADPKD: examination of the overture baseline data. 51st ERA-EDTA Congress , Netherland, June 1st, 2014.
 4. Torres VE, Chapman AB, Devuyst O, Gansvoort RT, Higashihara E, Perrone RD, Ouyang J, Shoaf SE, Blais J, Czerwiec FS: Tolvaptan-treatment of ADPKD confers persistent eGFR improvement: Results from the TEMPO 4:4 extension trials. ASN Kidney Week 2014, USA, November 15th, 2014
 5. Kugita M, Yoshihara D, Sasaki M, Nishii K, Suzuki A, Yuzawa Y, Yamaguchi T, Horie S, Higashihara E, Nagao S: Beneficial effect of combined treatment of two Gi protein activators in PCK rats, an orthologous model of human autosomal recessive polycystic kidney disease. ASN Kidney Week 2014, USA, November 15th, 2014.
 6. Casteleijn NF, Blais JD, Chapman AB, Czerwiec FS, Devuyst O, Higashihara E, Ouyang J, Perrone RD, Torres VE, Gansvoort RT: Tolvaptan decreases the incidence of renal pain events in ADPKD patients: Results from the TEMPO 3:4 trial. ISN World Congress of Nephrology, South Africa, March 14th, 2015.
 7. Torres V, Devuyst O, Chapman A, Gansvoort R, Grantham J, Higashihara E, Perrone R, Ouyang J, Blais J, Czerwiec F: Effect of tolvaptan in ADPKD by CKD stage: Results from the TEMPO 3:4 trial. ISN World Congress of Nephrology, South Africa, March 14th, 2015.
- #### 論文
1. 田中正利, 入江慎一郎, 桶川隆嗣, 賀本敏行, 酒井英樹, 今井常夫, 服部良平, 伊藤明宏, 木下秀文, 小松和人, 繁田正信, 中澤速和, 吉村一宏, 三保浩光, 伊藤直樹, 川喜田睦司, 佐藤文憲, 関利盛, 野々村祝夫, 松田公志, 寺地敏郎, 頼川晋, 角野佳史, 川端岳, 近藤幸尋, 立神勝則, 中川健, 吉岡邦彦, 田邊一成, 尾本和也, 江藤正俊, 絹川常郎, 鈴木和雄, 渡辺竜助, 武田正之, 浅沼宏, 岩村正嗣, 座光寺秀典, 宋成浩, 永井敦, 馬場志郎, 原勲, 桶之津史郎, 鈴木孝明, 平尾佳彦, 寛善行, 東原英二. 泌尿器腹腔鏡手術ガイドライン2014年版(解説/特集). 日本泌尿器内視鏡学会 27:1-46, 2014.
 2. 穴戸俊英, 林建二郎, 東原英二, 舩田原紀久雄: 間質性膀胱炎の治療法の変遷と成績 間質性膀胱炎に対する低用量シクロスポリン A(CyA)内服治療効果と今後の課題. 泌外 27(臨増): 623-625, 2014.
 3. 板谷直, 北村盾二, 舩田一樹, 二宮直紀, 中村雄, 山口剛, 林建二郎, 原秀彦, 多武保光宏, 穴戸俊英, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄: 体外衝撃波碎石術(ESWL)後の α 1遮断薬による排石効果の比較検討. 日尿路結石症会誌 12(2): 175-177, 2014.
 4. 林建二郎, 穴戸俊英, 菅田明子, 中村雄, 板谷直, 原秀彦, 多武保光宏, 桶川隆嗣, 東原英二, 舩田原紀久雄: HoLEP(ホルミウムレーザー前立腺核手術)は高齢者にとって安全・有効な治療法か?. 日本泌尿器内視鏡学会誌 28(1): 137-141, 2015.
 5. Tambo M¹, Okegawa T¹, Shishido T¹, Higashihara E², Nutahara K¹(¹Department of Urology, Kyorin University School of Medicine, ²Department of ADPKD Research, Kyorin University School of Medicine): Predictors of septic shock in obstructive acute pyelonephritis. World J Urol.32(3):803-811, 2014.
 6. Okegawa T, Higaki M¹, Matsumoto T², Kase H³, Murata A⁴, Noda K⁵, Noda H⁶, Asaoka H⁷, Oshi M⁸, Tomoishi J⁹, Uchida H¹⁰, Higashihara E¹¹, Nutahara K¹²: Bone Metastasis Prostate

- Cancer Group (¹National Hospital Organization Disaster Medical Center, ²Tokyo Medical University Hachioji Medical Center, ³Sassa General Hospital, ⁴Kawakita associates General Hospital, ⁵NishiTokyo Central General Hospital, ⁶Tama-Hokubu Medical Center, ⁷Akuru Municipal Medical Center, ⁸Tokyo Metropolitan Tama Medical Center, ⁹Ome Municipal General Hospital, ¹⁰Hitotsubashi Hospital, ¹¹Department of ADPKD Research, Kyorin University School of Medicine, ¹²Department of Urology, Kyorin University School of Medicine) : Zoledronic acid improves clinical outcomes in patients with bone metastatic hormone-naïve prostate cancer in a multicenter clinical trial. *Anticancer Res.* 34(8):4415-4420, 2014
7. Higashihara E, Nutahara K¹, Tanbo M¹, Hara H¹, Miyazaki I², Kobayashi K³, Nitatori T² ¹Department of Urology, Kyorin University School of Medicine, ²Department of Radiology, Kyorin University School of Medicine, ³Department of Medical Radiological Technology): Does increased water intake prevent disease progression in autosomal dominant polycystic kidney disease?. *Nephrol Dial Transplant.* 29: 1710-1719, 2014.
 8. Higashihara E, Nutahara K¹, Okegawa T¹, Tanbo M¹, Mori H², Miyazaki I³, Nitatori T³, Kobayashi K⁴ (¹Department of Urology, Kyorin University School of Medicine, ²Department of Gastroenterology, Kyorin University School of Medicine, ³Department of Radiology, ⁴Department of Medical Radiological Technology) : Safety study of somatostatin analogue octreotide for autosomal dominant polycystic kidney disease in Japan. *CLin Exp Nephrol.* 19(4):746-752, 2015.
 9. Fujita N¹, Okegawa T¹, Terado Y², Tambo M¹, Higashihara E, Nutahara K¹ (¹Department of Urology, Kyorin University School of Medicine, ²Dept of Pathology, Kyorin University school of Medicine): Serum level and immunohistochemical expression of vascular endothelial growth factor for the prediction of postoperative recurrence in renal cell carcinoma. *BMC Res Notes.* 7:369, 2014.
 10. Muto S¹, Kawano H, Higashihara E, Narita E, Ubara Y, Matsuzaki T, Ouyang J, Torres VE, Horie S (¹Department of Urology, Teikyo University School of Medicine): The effect of tolvaptan on autosomal dominant polycystic kidney disease patients: a subgroup analysis of the Japanese patient subset from TEMPO 3:4 trial. *Clin Exp Nephrol.* DOI: 10. 1007 / s10157-015-1086-2. (Epub 2015).
 11. 東原英二: 注目の新薬<V₂ 受容体拮抗薬>「サムスカ錠7.5mg, 同 15mg, 同 30mg」. *医薬ジャーナル新薬展望* 2015 51(S-1):102-114, 2015.
 - 10 Tips in Uveitis, World Ophthalmology Congress 2014, Tokyo, April 2nd-6th, 2014.
 4. Hirakata A: Update on Management of Macular Hole. World Ophthalmology Congress 2014, Tokyo, April 2nd-6th, 2014.
 5. Vajzovic L, Mahmoud T, Inoue M, Toth C, Hirakata A: Duke Vitreoretinal Surgical Rounds: What Would Machemer, McCuen, Tano, and Hida Say? A Generation of Changes. World Ophthalmology Congress 2014, Tokyo, April 2nd-6th, 2014.
 6. Takeyama A, Kita Y, Kita R, Tomita G: The influence of axial length on ganglion cell complex thickness and ganglion cell complex thickness to total retinal thickness ratio in young adults. World Ophthalmology Congress 2014, Tokyo, April 2nd - 6th, 2014.
 7. Kita Y, Kita R, Takeyama A, Tomita G: The effect of high myopia on glaucoma diagnostic parameters as measured by optical coherence tomography. World Ophthalmology Congress 2014, Tokyo, April 2nd-6th, 2014.
 8. Enomoto N, Anraku A, Takagi S, Kita Y, Tomita G: Correlation of optic nerve head parameters by scanning laser ophthalmoscopy with thickness of circumpapillary retinal nerve fiber layer by spectral domain-optical coherence tomography in glaucoma. World Ophthalmology Congress 2014, Tokyo, April 2nd-6th, 2014.
 9. Anraku A, Enomoto N, Kita Y, Takagi S, Tomita G: Impact of macular ganglion cell complex thickness on progression of visual field loss in patients with normal-tension glaucoma and hemifield defects. World Ophthalmology Congress 2014, Tokyo, April 2nd-6th, 2014.
 10. Watanabe T, Keino H, Taki W, Echizen N, Okada AA: Efficacy of infliximab in two young patients with Behcet's disease. World Ophthalmology Congress® of the international council of ophthalmology, Tokyo, April 2nd-6th, 2014.
 11. 平形明人: 眼科断層機器の進歩の硝子体手術への貢献. 第118回日本眼科学会総会, 東京, 2014年4月2-5日.
 12. 狩野麻里子, 古泉英貴, 山本亜希子, 齋藤昌晃, 杉谷篤彦, 丸子一朗, 岡田アナベルあやめ, 飯田知弘, 石龍鉄樹: 滲出型加齢黄斑変性に対する aflibercept 硝子体内注射の6ヶ月治療成績. 第118回日本眼科学会総会, 東京, 2014年4月2-6日.
 13. 山本亜希子, 岡田アナベルあやめ, 肥留川京子, 大竹杏奈, 杉谷篤彦: 難治性 AMD aflibercept 切り替え症例に対する treat and adjust 療法の治療反応. 第118回日本眼科学会総会, 東京, 2014年4月2-6日.
 14. 慶野博, 渡辺交世, 岡田アナベルあやめ: 硝子体による制御性 T 細胞の誘導能の検討. 第118回日本眼科学会総会, 東京, 2014年4月2-6日.
 15. 古泉英貴, 狩野麻里子, 山本亜希子, 齋藤昌晃, 丸子一朗, 石龍鉄樹, 岡田アナベルあやめ, 飯田知弘: ポリープ状脈絡膜血管症での脈絡膜血管透過性亢進所見とアフリベルセプトへの反応性. 第118回日本眼科学会総会, 東京, 2014年4月2-6日.
 16. Hirota K, Keino H, Inoue M, Hirakata A: MicroRNA Expression Profiling in Vitreous Humor from Patients with Macular Hole. World Ophthalmology Congress 2014, Tokyo, April 2nd-5th, 2014.
 17. Yokota R, Hirakata A, Saito T, Hotta K, Inoue M: Surgical Outcome of Macular Hole Secondary to Type 2 Idiopathic Macular Telangiectasia. World Ophthalmology Congress 2014,

眼科学教室

講演

1. Arai C, Ogata M, Tanaka E, Oda K, Okada AA, Hirakata A: Outcome of low vision care comparing quality of life in patients with low vision between before and after intervention. Vision 2014 (11th International Congress on Low Vision), Australia, March 30th, -April 3rd, 2014.
2. Okada AA: Viral Acute Retinal Necrosis, Symposium: Infectious Uveitis One Should Not Miss. World Ophthalmology Congress 2014, Tokyo, April 2nd-6th, 2014.
3. Okada AA: Top 10 Tips on Imaging in Uveitis, Symposium: Top

- Tokyo, April 2nd-5th, 2014.
18. Inoue M, Itoh Y, Rii T, Hirota K, Hirakata A: Macular Retinoschisis and Detachment Associated with Normal Tension Glaucoma. World Ophthalmology Congress 2014, Tokyo, April 2nd-5th, 2014.
 19. Takase H, Goto H, Okada AA, Ohguro N, Mochizuki M: Development and validation of new diagnostic criteria for acute retinal necrosis. World Ophthalmology Congress 2014, Tokyo, April 2nd-6th, 2014.
 20. Keino H, Shudo K, Kitaoka Y, Harada T, Okada AA: Retinoic acid receptor stimulation ameliorates autoimmune optic neuritis. World Ophthalmology Congress 2014, Tokyo, April 2nd-6th, 2014.
 21. Yamamoto A, Okada AA, Hirukawa K, Sugitani A: Intravitreal aflibercept for exudative age-related macular degeneration associated with large retinal pigmented epithelium detachment. World Ophthalmology Congress 2014, Tokyo, April 2nd-6th, 2014.
 22. 鈴木崇, 大橋裕一, 大鹿哲郎, 後藤浩, 平形明人, 福下公子, 宮田和典: HOYA 眼内レンズ関連眼内炎における後ろ向き症例調査報告. 第118回日本眼科学会総会, 東京, 2014年4月2-5日.
 23. Kawasaki R, Yu SY, Nagaoka T, Inoue M, Lee JE: Treatment of diabetic retinopathy: From ABCs to Updates. World Ophthalmology Congress 2014, Tokyo, April 2nd-5th, 2014.
 24. Inoue M: Images of visual perceptions experienced during cataract surgery projected onto retinal surface of model eye. World Ophthalmology Congress 2014, Tokyo, April 2nd-5th, 2014.
 25. 富田茜, 廣田和成, 折原唯史, 国田大輔, 井上真, 平形明人: アトピー性網膜剥離修復術後早期にMRSA バックル感染を生じた一例. 第5回東京多摩眼科連携セミナー, 東京, 2014年4月19日.
 26. 井上真: 難治症例への MIVS. 第2回お茶の水 Ophthalmic Update, 東京, 2014年4月19日.
 27. 慶野博: 皮膚疾患と眼炎症性疾患. 第5回 東京多摩眼科連携セミナー, 東京, 2014年4月19日.
 28. 山田昌和: ドライアイ診療アップデート. 第7回筑後眼科教育フォーラム, 福岡, 2014年4月25日.
 29. 平形明人: 知っておきたい眼の病気-よりよい視力を守るために-. 杏林大学「地(知)の拠点整備事業 第1回杏林大学・杏林医学会・三鷹ネットワーク大学共催 市民公開講座, 三鷹, 2014年5月10日.
 30. 井上真: 後眼部手術の最新の話. 筑波大学レチナアカデミー, 筑波, 2014年5月11日.
 31. 岡田アナベルあやめ: 眼炎症疾患: 最近のトピックより. 第7回四国 Eye ランドセミナー, 高松, 2014年5月14日.
 32. 井上真: こじれた先天網膜分離症. 第7回網膜硝子体手術勉強会, 東京, 2014年5月22日.
 33. 井上真: 朝顔症候群の憂鬱. 第14回信濃町研究会, 東京, 2014年5月23日.
 34. 山田昌和: 角結膜疾患の薬物療法. Apricot Ophthalmology Forum, 立川, 2014年5月23日.
 35. 井上真: 網膜静脈分枝閉塞症-硝子体手術無効例. 東京黄斑疾患研究会, 東京, 2014年5月24日.
 36. 平形明人: 基幹病院における眼科と内科の連携. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
 37. 平形明人: 症例から学ぶ眼底疾患アップデート-2014. 奈良県眼科医学会学術定例会, 橿原, 2014年6月1日.
 38. 平形明人: 症例から学ぶ眼底疾患. 東多摩南部眼科医学会 学術講演会, 東京, 2014年6月7日.
 39. 岡田アナベルあやめ: 眼炎症疾患: 最近のトピックより. 第47回道南眼科集談会, 函館, 2014年6月7日.
 40. 山田昌和: コンタクトレンズの合併症, 問題点. 静岡県コンタクトレンズ管理者講習会, 静岡, 2014年6月7日.
 41. 山田昌和: 成人眼検診の医学的効果・費用対効果. 松江ブロック眼科学術講演会, 松江, 2014年6月12日.
 42. 山田昌和: 蛍光色素を駆使した涙液研究. 第8回箱根ドライアイクラブ, 軽井沢, 2014年6月20日.
 43. 平形明人: 強度近視牽引性黄斑剥離の治療と課題. 姫路市 MF の会, 姫路, 2014年6月21日.
 44. 山田昌和: 角結膜疾患の薬物療法. 東京都眼科医学会平成26年度卒後研修会, 東京, 2014年6月21日.
 45. Keino H, Okada AA: L-2/IL-2 Ab complex plus rapamycin ameliorate experimental autoimmune uveoretinitis associated with expansion of CD4+Foxp3+ regulatory T cells. Meeting of the Federation of Clinical Immunology Societies, USA, June 25th-28th, 2014.
 46. 山田昌和: 前眼部疾患と QOV. 第3回日本視野学会学術集会, 東京, 2014年6月29日.
 47. 北幸幸: OCT を用いた緑内障診断の注意点. 第9回 Tokyo Glaucoma Retina joint conference, 東京, 2014年6月.
 48. 北幸幸: 明日から役立つ OCT の使い方. キサラタン発売15周年記念講演会, 東京, 2014年6月.
 49. 多田明日美, 岩橋千春, 中井慶, 南場研一, 岡田アナベルあやめ, 高瀬博, 後藤浩, 蕨城俊克, 水木信久, 安積淳, 園田康平, 武田篤信, 大黒伸行: 結核性ぶどう膜炎の臨床像および治療予後の検討. 第48回日本眼炎症学会, 東京, 2014年7月4-6日.
 50. 高瀬博, 大黒伸行, 岡田アナベルあやめ, 後藤浩, 園田康平, 富田誠, 南場研一, 水木信久, 望月學: 急性網膜壊死の診断基準に関する全国調査研究. 第48回日本眼炎症学会, 東京, 2014年7月4-6日.
 51. 渡辺交世, 肥留川京子, 慶野博, 瀧和歌子, 越前成旭, 岡田アナベルあやめ: 糖尿病虹彩炎を発症した患者の臨床的特徴についての検討. 第48回日本眼炎症学会, 東京, 2014年7月4-6日.
 52. 岡田アナベルあやめ: 全身疾患は全身治療で治すべし. 第48回日本眼炎症学会, 東京, 2014年7月4-6日.
 53. 平形明人: 1) 強膜バックリング手術の基本. 2) 強度近視牽引性黄斑症の硝子体手術. Infinite Power Up Seminar, 札幌, 2014年7月5日.
 54. 慶野博, 渡辺交世, 越前成旭, 瀧和歌子, 井上真, 岡田アナベルあやめ: 眼内悪性リンパ腫における黄斑部 SD-OCT 所見の検討. 第48回日本眼感染症学会, 東京, 2014年7月5日.
 55. 重安千花, 阿久根陽子, 福井正樹, 家久一光, 杉田あかね, 玉置惣一郎, 山田昌和: SCL 装用に伴うドライアイに対するジクアホルソナトリウム点眼液の効果. 第57回日本コンタクトレンズ学会, 東京, 2014年7月5日.
 56. 福井正樹, 重安千花, 阿久根陽子, 家久一光, 杉田あかね, 玉置惣一郎, 山田昌和: SCL 装用者のレンズ素材による眼表面ムチンの変化. 第57回日本コンタクトレンズ学会, 東京, 2014年7月5日.
 57. 山田昌和: コンタクトレンズと角膜の生理. 第57回日本コンタクト

- レンズ学会, 東京, 2014年7月6日.
58. 山田昌和: 涙液油層, 水層の由来とダイナミクス. 第3回日本涙道・涙液学会, 東京, 2014年7月6日.
 59. 柳沼重晴, 渡辺交世, 松木奈央子, 永本敏之: PE 白内障のチン小帯脆弱・断裂. 第29回 JSCRS 学術総会, 福岡, 2014年7月11-13日.
 60. Hirakata A: Case presentations and discussions: Surgical Cases. 1st International Conference on Pathologic Myopia, Taiwan, July 18th-19th, 2014.
 61. 尾形真樹, 山本亜希子, 岡田アナベルあやめ, 新井千賀子, 田中恵津子, 小田浩一, 平形明人: 加齢黄斑変性患者が拡大補助具として iPad を利用する際の読書方法の検討. 第23回視覚障害リハビリテーション研究発表会, 京都, 2014年7月19-20日.
 62. 井上真: 糖尿病黄斑浮腫への手術戦略. 神奈川県眼科 DM カンファレンス, 横浜, 2014年7月26日.
 63. Kurihara T, Shinoda H, Yagihashi M, Uchida A, Inoue M, Koto T, Nagai N, Tsubota K, Ozawa Y: Levels of immunoglobulins (Igs) in hematological malignancy-associated central retinal vein occlusion. ASRS, USA, August 12th, 2014.
 64. Inoue M, Koto T, Hirakata A: Wide-angle fundus imaging in gas filled eyes. ASRS, USA, August 12th, 2014.
 65. 慶野博: 難治性眼炎症疾患に対する新しい治療戦略「基礎研究からのアプローチ」. 第5回北海道眼炎症免疫セミナー, 札幌, 2014年8月22日.
 66. 平形明人: 強度近視性牽引性黄斑症に対する強膜短縮術. 第16回 Japan Macula Club, 蒲郡, 2014年8月23-24日.
 67. 飯田知弘, 石龍鉄樹, 岡田アナベルあやめ: 滲出型加齢黄斑変性に対するアフリバセプト療法の成績. Japan Macula Club, 蒲郡, 2014年8月23-24日.
 68. 井上真: ガス注入眼での Optos 画像. 第16回 Japan Macula Club, 蒲郡, 2014年8月23-24日.
 69. Inoue M: Subretinal injection of tissue plasminogen activator for submacular hemorrhage. Chang Gung Memorial Hospital morning conference, Taiwan, August 29th, 2014.
 70. Inoue M: Subretinal injection of tissue plasminogen activator for submacular hemorrhage. 22th International Wu Ho-Su Memorial Congress -International Symposium of Vitreo-Retinal Diseases, Taiwan, August 29th, 2014.
 71. Inoue M: Micro-Incision Vitrectomy Surgery (MIVS) for complicated cases. 22th International Wu Ho-Su Memorial Congress -International Symposium of Vitreo-Retinal Diseases, Taiwan, August 30th, 2014.
 72. Inoue M: Retinal complications associated with congenital optic disc anomaly. 22th International Wu Ho-Su Memorial Congress -International Symposium of Vitreo-Retinal Diseases, Taiwan, August 30th, 2014.
 73. 北善幸: 緑内障に対する OCT の使い方とその注意点. 第2回順天堂大学浦安眼科サマーセミナー, 浦安, 2014年8月.
 74. 北善幸: OCT を用いた緑内障診断の注意点. ファイザー社内講演会, 東京, 2014年8月.
 75. Hirakata A, Ando Y, Yokota R, Orihara T, Kunita D, Hirota K, Koto T, Inoue M: Vitrectomy and scleral shortening in patients with macular hole retinal detachment or myopic traction maculopathy. 29th Meeting of the Clus Jules Gonin, Switzerland, September 3rd-6th, 2014.
 76. 山田昌和: 視覚障害の疾病負担と看護の役割. 第30回日本視機能看護学会, 名古屋, 2014年9月6日.
 77. 山田昌和: コンタクトレンズ: 合併症や問題点のトピックス. 東京都眼科医会コンタクトレンズ管理者講習会, 東京, 2014年9月13日.
 78. Yamada M, Shigeyasu C, Akune Y, Fukui M: Diquafosol sodium ophthalmic solution for the treatment of dry eye in soft contact lens wearers. European Association for Vision and Eye Research 2014, France, October 4th, 2014.
 79. 松木奈央子: 飛蚊症, 網膜剥離. 目の愛護デー Tokyo Eye Festival, 東京, 2014年10月5日.
 80. 岡田アナベルあやめ: 加齢黄斑変性治療のマネージメント. アイリーア黄斑疾患セミナー in 関西, 大阪, 2014年10月11日.
 81. 山田昌和: 角結膜疾患の薬物療法. 第4回山形眼科フォーラム, 山形, 2014年10月11日.
 82. Ando Y, Hirakata A, Yokota R, Orihara T, Kunita D, Hirota K, Koto T, Inoue M: Vitrectomy and scleral shortening in patients with macular hole retinal detachment or myopic traction maculopathy. American Academy of Ophthalmology 2014, USA, October 18th-21st, 2014.
 83. Koizumi H, Kano M, Yamamoto A, Saito M, Maruko I, Sekiryu R, Okada AA, Iida T: Subfoveal choroidal thickness after intravitreal aflibercept for neovascular age - related macular degeneration: 12-month results. Annual Meeting of the American Academy of Ophthalmology 2014, USA, October 19th-22nd, 2014.
 84. 中山真紀子, 慶野博, 渡辺交世, 岡田アナベルあやめ: OCT を用いた眼炎症疾患の診療. 第16回西東京眼科フォーラム, 武蔵野, 2014年10月22日.
 85. 松木奈央子: チン小帯脆弱例における水晶体拡張リングの使用について. 第16回西東京フォーラム, 東京, 2014年10月22日.
 86. 岡田アナベルあやめ: 眼炎症疾患: 最近のトピックより. 第22回上越臨床眼科フォーラム学術講演会, 新潟, 2014年10月24日.
 87. 井上真: フェローシッププログラムと病診連携. 第1回大雪眼科フォーラム, 旭川, 2014年10月24日.
 88. 平形明人: 乳頭部先天異常に伴う網膜剥離と鑑別診断. 第28回さざなみ眼科研究会, 大津, 2014年10月25日.
 89. 平形明人: 症例から学ぶ眼底疾患アップデート. 第43回東海大学・神奈川県眼科医会合同カンファレンス, 海老名, 2014年10月30日.
 90. 井上真: Duty Cycle を考える. 第8回網膜硝子体手術勉強会, 東京, 2014年10月30日.
 91. 北善幸: 明日から役立つ OCT の使い方. 宮城県 眼科 講演会, 仙台, 2014年10月.
 92. 山田昌和: ドライアイ: 診断・治療の最新戦略. 旭川眼科セミナー, 旭川, 2014年11月1日.
 93. 新井千賀子, 尾形真樹, 田中恵津子, 小田浩一, 岡田アナベルあやめ, 平形明人: ロービジョンケア前後における QOL の変化とケア内容の分析. 第15回日本ロービジョン学会学術総会, 埼玉, 2014年11月1-2日.
 94. 井上真: Duty Cycle を考える. 第15回信濃町網膜研究会, 東京, 2014年11月7日.
 95. 井上真: パネリスト症例提示. 話題提供2 サージカル, 網膜ラウンジ, 東京, 2014年11月8日.
 96. 平形明人: 眼内腫瘍と紛らわしい病変. 第68回日本臨床眼科学会, 神戸, 2014年11月13-16日.
 97. 平形明人: 強度近視牽引性黄斑症の硝子体手術の現状. 第68回日本臨床眼科学会, 神戸, 2014年11月13-16日.

98. 安藤良将, 平形明人, 横田怜二, 折原唯史, 国田大輔, 廣田和成, 厚東隆志, 井上真: 強度近視黄斑分離症に対する強膜短縮術後の乱視矯正眼内レンズの有用性. 第68回日本臨床眼科学会, 神戸, 2014年11月13-16日.
99. 中山真紀子, 慶野博, 渡邊交世, 平形明人, 岡田アナベルあやめ: 多発消失性白点症候群の網膜外層所見と眼底自発蛍光. 第68回日本臨床眼科学会, 神戸, 2014年11月13-16日.
100. 厚東隆志, 井上真, 廣田和成, 国田大輔, 折原唯史, 北善幸, 佐野公彦, 平形明人: Inverted ILM flap 法により閉鎖を得た黄斑円孔の5症例. 第68回日本臨床眼科学会, 神戸, 2014年11月13-16日.
101. 渡邊交世, 柳沼重晴, 松木奈央子, 永本敏之: 網膜色素変性症の白内障手術におけるチン小帯脆弱. 第68回日本臨床眼科学会, 神戸, 2014年11月13-16日.
102. 柳沼重晴, 渡邊交世, 松木奈央子, 永本敏之: 強度近視眼の白内障手術におけるチン小帯脆弱. 第68回日本臨床眼科学会, 神戸, 2014年11月13-16日.
103. 佐野公彦, 北善幸, 国田大輔, 折原唯史, 廣田和成, 厚東隆志, 井上真, 平形明人: 網膜剥離を伴う朝顔症候群におけるOptos 超広角蛍光眼底造影検査の検討. 第68回日本臨床眼科学会, 神戸, 2014年11月13-16日.
104. 安藤良将, 平形明人, 横田怜二, 廣田和成, 厚東隆志, 森山無価, 大野京子, 井上真: 強度近視牽引性黄斑症の強膜短縮術前後のMRI所見. 強度近視研究会, 第68回日本臨床眼科学会, 神戸, 2014年11月13-16日.
105. 松本杏奈, 慶野博, 厚東隆志, 渡邊交世, 岡田アナベルあやめ: OCT で眼底後極部の経時的な変化を観察した急性網膜壊死の1例. 第68回日本臨床眼科学会, 神戸, 2014年11月13-16日.
106. 高瀬博, 大黒伸行, 岡田アナベルあやめ, 後藤浩, 園田康平, 富田誠, 南場研一, 水木信久, 望月學: 我が国における急性網膜壊死の実態調査. 第68回日本臨床眼科学会, 神戸, 2014年11月13-16日.
107. 山本亜希子, 狩野麻里子, 古泉英貴, 齋藤昌晃, 丸子一郎, 石龍鉄樹, 飯田知弘, 岡田アナベルあやめ: ポリープ状脈絡膜血管症に対する aflibercept 療法の1年経過. 第68回日本臨床眼科学会, 神戸, 2014年11月13-16日.
108. 山田昌和: 涙液を考慮した眼表面手術. 第68回日本臨床眼科学会, 神戸, 2014年11月13日.
109. 平塚義宗, 川崎良, 小野浩一, 山田昌和, 山下英俊: 眼科医のための臨床疫学研究デザイン塾, ケースコントロール研究をやってみよう. 第68回日本臨床眼科学会, 神戸, 2014年11月13日.
110. 小川佳子, 松家清栄, 水野嘉信, 山田昌和, NHO 弱視研究グループ: 弱視の視機能予後に関する多施設共同前向き研究. 第68回日本臨床眼科学会, 神戸, 2014年11月14日.
111. 井上真: 難治症例 PDR! 私の攻略法, 見せます!! 第68回日本臨床眼科学会, 神戸, 2014年11月14日.
112. 井上真: BRVO 治療を考える. 第68回日本臨床眼科学会, 神戸, 2014年11月15日.
113. 井上真: 27G 手術でのワンポイント. 第68回日本臨床眼科学会, 神戸, 2014年11月15日.
114. 井上真: 硝子体手術は必要か? Pro!. 第68回日本臨床眼科学会, 神戸, 2014年11月15日.
115. 井上真: 振り替えれば... 奴はいない. ナイトメア. 第68回日本臨床眼科学会, 神戸, 2014年11月15日.
116. 井上真: 黄斑浮腫への手術療法. Ophthalmology Web カンファレンス, 東京, 2014年11月18日.
117. 岡田アナベルあやめ: 眼科 PDT 講習会: PDT の読影. 眼科 PDT 研究会, 東京, 2014年11月23日.
118. 井上真: 白内障同時手術の過去, 現在, 未来. 第53回日本網膜硝子体学会, 大阪, 2014年11月28日.
119. 井上真: 網膜硝子体手術における合併症とその対策. 第53回日本網膜硝子体学会, 大阪, 2014年11月28日.
120. 中山真紀子, 山本亜希子, 岡田アナベルあやめ, 小林宏明, 松本杏奈, 久須見有美, 佐野公彦, 北善幸: 滲出型 AMD 再発例に対する aflibercept bimonthly 投与の治療反応. 第31回日本眼循環学会・第53回日本網膜硝子体学会総会合同学会, 大阪, 2014年11月28-30日.
121. 狩野麻里子, 山本亜希子, 古泉英貴, 齋藤昌晃, 丸子一郎, 飯田知弘, 岡田アナベルあやめ, 石龍鉄樹: 典型滲出型加齢黄斑変性に対する aflibercept 硝子体内注射の12ヶ月治療成績. 第31回日本眼循環学会・第53回日本網膜硝子体学会総会合同学会, 大阪, 2014年11月28-30日.
122. 佐野公彦, 井上真, 北善幸, 國田大輔, 折原唯史, 廣田和成, 厚東隆志, 平形明人: PDR における25ゲージ手術での Accurus と Constellation の比較検討. 第53回日本網膜硝子体学会, 大阪, 2014年11月28日.
123. 井上真: ReSight の徹底検証... あなたは本当に使いこなせていますか?. 第53回日本網膜硝子体学会, 大阪, 2014年11月29日.
124. 横田怜二, 厚東隆志, 井上真, 平形明人: アキュフォーカス挿入術後の超広角眼底撮影および網膜光凝固の経験. 第53回日本網膜硝子体学会, 大阪, 2014年11月29日.
125. 古泉英貴, 狩野麻里子, 山本亜希子, 齋藤昌晃, 丸子一郎, 石龍鉄樹, 岡田アナベルあやめ, 飯田知弘: 滲出型加齢黄斑変性に対するアフリベルセプト療法12ヶ月間の中心窩下脈絡膜厚変化. 第31回日本眼循環学会・第53回日本網膜硝子体学会総会合同学会, 大阪, 2014年11月28-30日.
126. 秋山陽一, 鈴木由美, 吉川泉, 浜由紀子, 富田香, 成田圭吾, 尾崎峰, 山田昌和: 巨大眼瞼部乳児血管腫を伴い不同視弱視治療を要した乳児例. 第70回日本弱視斜視学会, 京都, 2014年11月29日.
127. 名畑浩昌, 鈴木由美, 吉川泉, 浜由紀子, 富田香, 成田圭吾, 尾崎峰, 山田昌和: 外傷性眼瞼下垂による形態覚遮断弱視・内斜視を呈した幼児例. 第70回日本弱視斜視学会, 京都, 2014年11月29日.
128. 北善幸: 原発閉塞隅角緑内障. 第10回 Tokyo Glaucoma Retina joint conference, 東京, 2014年11月.
129. Tomita A, Suzuki Y, Yoshikawa I, Hama Y, Tomita K, Yamada M: Refractive errors and strabismus in Japanese children with Sotos syndrome. The XIIth Meeting of the International Strabismological Association, Kyoto, December 1st-4th, 2014.
130. 岡田アナベルあやめ: アメリカの医学教育制度. 杏林大学医学部 English Speaking Society, 東京, 2014年12月4日.
131. Hirakata A: Vitrectomy for the myopic traction maculopathy. 23rd Annual Conference of Vitreo Retinal Society- India, India, December 5th-7th, 2014.
132. Hirakata A: Evolution in management of optic disc pit with macular detachment. 23rd Annual Conference of Vitreo Retinal Society- India, India, December 5th-7th, 2014.
133. 井上真: 小切開硝子体手術の展望. 第243回鹿児島眼科集談会, 鹿児島, 2014年12月6日.
134. 岡田アナベルあやめ: アメリカの医学教育制度. 城南眼科集談

- 会, 東京, 2014年12月11日.
135. 渡辺敏樹, 気賀沢一輝, 慶野博, 安藤良将, 毛塚剛司, 田中恵子, 平形明人: Chronic relapsing inflammatory optic neuropathy と考えられた一症例. 第52回日本神経眼科学会, 千葉, 2014年12月12日.
 136. 慶野博, 渡辺交世, 首藤紘一, 北岡康史, 原田高幸, 岡田アナベルあやめ: レチノイン酸による実験的自己免疫性視神経炎の軽症化. 第52回日本神経眼科学会, 千葉, 2014年12月12-13日.
 137. 岡田アナベルあやめ: 非感染性ぶどう膜炎. 東京都眼科医会卒後研修研究会, 東京, 2014年12月13日.
 138. 山田昌和: 角結膜疾患の薬物治療: 薬剤選択のノウハウ. 平成26年度千葉県眼科医会学術講演会, 千葉, 2015年1月12日.
 139. 山田昌和: ドライアイ: 診断・治療の最新戦略. 第11回湘南眼科倶楽部, 鎌倉, 2015年1月15日.
 140. 井上真: 難治症例への小切開硝子体手術の適応. 第52回栃木県眼科医会研究会, 宇都宮, 2015年1月16日.
 141. 平形明人: 眼球外傷. 平成26年度卒後研修会, 東京, 2015年1月17日.
 142. 井上真: 後眼部手術の最新の話. 千寿製薬社内講演会, 東京, 2015年1月19日.
 143. 山田昌和: 角結膜疾患の薬物療法: 薬剤の選択と使い方. 城西武蔵野眼科講演会, 東京, 2015年1月21日.
 144. 井上真: OCT による黄斑疾患への治療. 城西武蔵野眼科講演会, 東京, 2015年1月21日.
 145. 山田昌和: コンタクトレンズと角膜合併症. 第8回京都北部病診連携研究会, 綾部, 2015年1月24日.
 146. 平形明人: 眼内腫瘍と紛らわしい病変. 第8回東京眼科アカデミー, 東京, 2015年2月7-8日.
 147. 松本杏奈, 重安千花, 中島史絵, 山田昌和: コリネバクテリウムによる両眼性の感染性角膜炎の1例. 第39回日本角膜学会, 高知, 2015年2月12日.
 148. 中島史絵, 重安千花, 山田昌和, 寺戸雄一, 沖坂重邦: CIN 様の所見を呈した結膜の隆起性病変の1例. 第39回日本角膜学会, 高知, 2015年2月12日.
 149. 今野公士, 山田昌和, 重安千花, 近藤義之: 2%レバミド点眼液の白内障術後の眼表面保護効果. 第39回日本角膜学会, 高知, 2015年2月12日.
 150. Inoue M: Duty cycle control in 27-gauge vitrectomy for PDR. Update on 27-gauge MIVS. Ahmedabad, India, February 15th, 2015.
 151. Keino H, Sato Y, Watanabe T, Okada AA: Basic Research in Ocular Infection and Immunology: Immune regulation of ocular inflammatory disease by Foxp3+ regulatory T cells. 2015 Asia ARVO, 横浜, February 16th-19th, 2015.
 152. 井上真: サージカルの立場より-DME における外科的治療の可能性を再考する - 糖尿病黄斑浮腫の ABC, 東京, 2015年2月21日.
 153. Koizumi H, Yamamoto A, Kano M, Okada AA, Sekiryu T, Iida T: One - year outcomes of intravitreal aflibercept injections for polypoidal choroidal vasculopathy. Annual Macula Society Meeting, USA, February 25th-28th, 2015.
 154. 平形明人: 成人の眼底腫瘍の鑑別. 第9回山形 Visual Science 研究会, 山形, 2015年2月28日.
 155. 山田昌和: ドライアイ: QOL を重視した治療戦略. 第9回宮城オキュラーサーフェス講演会, 仙台, 2015年2月28日.
 156. 山田昌和: ドライアイ: 診断・治療の最新戦略. 第5回名古屋ドライアイケアセミナー, 名古屋, 2015年3月5日.
 157. Hirakata A: Vitrectomy and scleral shortening in patients with macular hole retinal detachment or myopic traction maculopathy. Sino-Japanese Ocular Fundus Diseases Forum, China, March 6th, 2015.
 158. 山田昌和: ドライアイ: QOL を重視した治療の考え方. 第2回千葉オキュラーサーフェス研究会, 千葉, 2015年3月14日.
 159. 平形明人: アトピー性皮膚炎に伴う網膜剥離. 新宿 CLOUD の会, 東京, 2015年 3月26日.
- ### 論文
1. 斎藤恒浩, 廣田和成, 井上真, 野村昌弘¹, 岡田アナベルあやめ, 平形明人 (¹国家公務員共済組合連合会立川病院眼科): von Hippel-Lindau 病に伴う傍乳頭血管腫の治療の2症例. 日眼会誌118:33-39, 2014.
 2. 高田洋平, 桜井俊輔, 宮本幸治, 坂元伸行, 宮崎剛, 山田昌和: ヒト重層化培養角膜上皮モデルを用いた眼科用薬剤の眼刺激性に関する新規評価手法の開発. あたらしい眼科 31:409-413, 2014.
 3. Inoue M, Bissen-Miyajima H¹, Arai H², Hirakata A (¹Department of Ophthalmology, Tokyo Dental College Suidobashi Hospital, Tokyo, Japan, ² Minatomirai Eye Clinic, Yokohama, Japan): Retinal images viewed through a small aperture corneal inlay. Acta Ophthalmol 92:168-169, 2014.
 4. Hirota K, Hirakata A, Inoue M: Dehiscence of detached internal limiting membrane in eyes with myopic traction maculopathy with spontaneous resolution. BMC Ophthalmol 14:39, 2014.
 5. Shigeyasu C, Hirano S, Akune Y, Yamada M: Diquafosol tetrasodium increases the concentration of mucin-like substances in tears of healthy human subjects. Curr Eye Res, PMID:25310688.(early online, 2014).
 6. Fukui M, Yamada M, Akune Y, Shigeyasu C, Tsubota K: Fluorophotometric Analysis of The Ocular Surface Glycocalyx in Soft Contact Lens Wearers. Curr Eye Res, PMID:25614920.(early online, 2015).
 7. Hirukawa-Nakayama K, Hirakata A, Tomita K, Hiraoka T, Inoue M: Increased choroidal thickness in patient with high-altitude retinopathy. Indian J Ophthalmol 62:506-507, 2014.
 8. Takeyama A, Kita Y, Kita R, Tomita G: Influent4ce of axial length on ganglion cell complex (GCC) thickness and on GCC thickness to retinal thickness ratios in young adults. Japanese Journal of Ophthalmology. 58:86-93, 2014.
 9. Kita Y, Kita R, Takeyama A, Tomita G, Goldberg I: The effect of high myopia on glaucoma diagnostic parameters as measured by optical coherence tomography. Clinical & Experimental Ophthalmology. 42:722-728, 2014.
 10. Watanabe K¹, Shimada A², Miyaki K³, Hirakata A, Matsuoka K², Omae K⁴, Takei I⁵ (¹Center of Kampo Medicine, Faculty of Environment and Information study, Keio Univ. sch. Med., ²Division of Internal medicine, Saiseikai Center Hospital, ³Department of Clinical Research Informatics, National Center for Global Health and Medicine, ⁴Department of Preventive Medicine and Public Health, Keio Univ. sch. Med., ⁵Tokyo Dental College, Ichikawa General Hospital): Long-Term Effects of Goshajinkigan in Prevention of Diabetic Complications: A Randomized Open-Labelled Clinical Trial. Evid Based Complement Alternat Med, doi:10.1155/2014/128726.(2014).
 11. Itoh Y, Inoue M, Rii T, Ando Y, Hirakata A: Asymmetrical

- recovery of cone outer segment tips line and foveal displacement after successful macular hole surgery. *Invest Ophthalmol Vis Sci* 55:3003-3011,2014.
12. 富田茜, 柳沼重晴, 今野公士, 松本祐磨, 渡邊格, 木村奈津子, 横井秀格, 井上真, 甲能直幸, 平形明人: 副鼻腔炎に合併し急激に失明に至った眼窩蜂窩織炎, 眼窩骨膜下膿腫の1例. *眼科* 56:655-659,2014.
 13. Inoue M, Bissen - Miyajima H¹, Arai H², Noda T³, Ohnuma K⁴, Hirakata A (¹Tokyo Dental College Suidobashi Hospital, the Department of Ophthalmology, tokyo, ²the Minatomirai Eye Clinic, Yokohama, ³National Hospital Organization Tokyo Medical Center, Tokyo, ⁴Chiba University, the Department of Medical System Engineering, Faculty of Engineering, Chiba): Image quality of grating target in model eye when viewed through a small-aperture corneal inlay. *J Cataract Refract Surg* 40:1182-1191, 2014.
 14. Inoue M, Uchida A¹, Shinoda K², Taira Y³, Noda T⁴, Ohnuma K⁵, Bissen-Miyajima H⁶, Hirakata A (¹Keio Univ. School of Medicine, ²Teikyo Univ. School of Medicine, ³Ryuundo Eye Clinic, ⁴National Hospital Organization Tokyo Medical Center, ⁵Chiba University ⁶Tokyo Dental College Suidobashi Hospital): Images created in a model eye during simulated cataract surgery can be the basis for images perceived by patients during cataract surgery. *Eye (Lond)* 28:870-879,2014.
 15. Suzuki Y, Hama Y, Yoshikawa-Kobayashi I, Tomita K, Inoue M, Hirakata A: Eyelash line resection for ciliary entropion in patients with Down's syndrome. *Br J Ophthalmol* 98:1442-1447,2014.
 16. Rii T, Itoh Y, Inoue M, Hirota K, Hirakata A: Outer retinal morphological changes and visual function after removal of epiretinal membrane. *Can J Ophthalmol* 49:436-442,2014.
 17. Inoue M, Abulon DJ¹, Hirakata A (¹Alcon Research, Ltd., Irvine, CA, USA.): Comparison of the effects of 23-gauge and 25-gauge microincision vitrectomy blade designs on incision architecture. *Clin Ophthalmol* 8:2307-2318,2014.
 18. 大島佑介, 門之園一明, 井上真: RETINAWS 印象記, 眼臨紀 7(11):847-848, 2014.
 19. Hiratsuka Y, Yamada M, Akune Y, Murakami A, Okada AA, Yamashita H, Ohashi Y, Yamagishi N, Tamura H, Fukuhara S, Takura T: Assessment of vision-related quality of life among patients with cataract and the outcomes of cataract surgery using a newly developed visual function questionnaire; The VFQ-J11. *Jpn J Ophthalmol* 58:415-422,2014.
 20. Wolf S, Balciuniene VJ, Laganovska G, Menchini U, Ohno-Matsui K, Sharma T, Wong TY, Silva R, Pilz S, Gekkieva M on behalf of the the RADIANCE Study Group (including AA Okada): RADIANCE: a randomized controlled study of ranibizumab in patients with choroidal neovascularization secondary to pathologic myopia. *Ophthalmology* 121:682-692,2014.
 21. Keino H, Okada AA, Watanabe T, Taki W: Long term efficacy of infliximab on background vascular leakage in patients with Behçet's disease. *Eye* 28:1100-1106,2014.
 22. Takeuchi M, Kezuka T, Sugita S, Keino H, Namba K, Kaburaki T, Maruyama K, Nakai K, Hijioka K, Shibuya E, Komae K, Hori J, Ohguro N, Sonoda K-H, Mizuki N, Okada AA, Ishibashi T, Goto H, Mochizuki M: Evaluation of long-term efficacy and safety of infliximab treatment for uveitis in Behçet's disease: a multicenter study. *Ophthalmology* 121:1877-1884,2014.
 23. 山田昌和: 涙液のリピドミクス. あたらしい眼科 31:1347-1349,2014.
 24. 山田昌和: ドライアイ. 内科 114:1036-1039,2014.
 25. 平塚義宗, 山田昌和, 阿久根陽子, 村上晶, 山下英俊, 大橋裕一: 眼科臨床におけるアウトカム評価: 新しい視覚関連 QOL 指標 VFQ-J11. *日眼会誌* 118:1038-1042,2014.
 26. 山田昌和: ドライアイと QOL. *日本の眼科* 85:1267-1271,2014.
 27. 井上真: 最新の硝子体手術環境. あたらしい眼科 32(3):175-179, 2015.
 28. 井上真: 硝子体手術のウェットラボ. *日本の眼科* 86(2):154-158, 2015.
 29. 渡邊交世, 岡田アナベルあやめ: リウマチ性疾患の症候学, どう膜炎. *分子リウマチ治療, 先端医学社 vol.8* :32-35,2015.
 30. Kawasaki R, Akune Y, Hiratsuka Y, Fukuhara S, Yamada M: Cost-utility Analysis of Screening for Diabetic Retinopathy in Japan: A Probabilistic Markov Modeling Study. *Ophthalmic Epidemiology* 22:4-12,2015.
 31. Yokota R, Koto T, Inoue M, Hirakata A: Ultra-wide-field retinal images in an eye with a small-aperture corneal inlay. *J Cataract Refract Surg* 41:234-236,2015.
 32. Inokawa S¹, Watanabe T, Keino H, Sato Y², Hirakata A, Okada AA, Fukuda K³, Fukushima A³, Umezawa K⁴ (¹Department of Ophthalmology, Hiroshima University School of Medicine, Hiroshima, Japan, ²Division of Radioisotope Research, Kyorin University School of Medicine, Tokyo, Japan, ³Department of Ophthalmology, Kochi Medical School, Kochi, Japan, ⁴Department of Molecular Target Medicine Screening, Aichi Medical University, Nagakute, Japan): Dehydroxymethylepoxyquinomicin, a novel nuclear factor - κ B inhibitor, reduces chemokines and adhesion molecule expression induced by IL-1 β in human corneal fibroblasts. *Graefes Arch Clin Exp Ophthalmol* 253: 557-563, 2014.
 33. Inoue M, Itoh Y, Rii T, Kita Y, Hirota K, Kunita D, Hirakata A: Macular retinoschisis associated with glaucomatous optic neuropathy in eyes with normal intraocular pressure. *Graefes Arch Clin Exp Ophthalmol* (Epub ahead of print 2014).
 34. Inoue M, Itoh Y, Rii T, Kita Y, Hirota K, Kunita D, Hirakata A: Spontaneous resolution of peripapillary retinoschisis associated with glaucomatous optic neuropathy. *Acta Ophthalmol.* (Epub ahead of print 2014).
 35. Inoue M, Shiraga F¹, Shirakata Y², Morizane Y¹, Kimura S¹, Hirakata A (¹Department of Ophthalmology, Okayama University Graduate School of Medicine, Dentistry and Pharmaceutical Sciences, Okayama, Japan, ²Department of Ophthalmology, Kagawa University Faculty of Medicine, Kagawa, Japan): Subretinal injection of recombinant tissue plasminogen activator for submacular hemorrhage associated with ruptured retinal arterial macroaneurysm. *Graefes Arch Clin Exp Ophthalmol.* (Epub ahead of print 2014).
 36. Lou SM, Larkin KL, Winthrop K, Rosenbaum JT, and members of the Uveitis Specialists Study Group (including Okada AA): Lack of consensus in the diagnosis and treatment for ocular tuberculosis among uveitis specialists. *Ocular Immunol Inflamm* 14:1-7,2014.
 37. Hirota K, Keino H, Inoue M, Ishida H, Hirakata A: Comparisons of microRNA expression profiles in vitreous humor between eyes

- with macular hole and eyes with proliferative diabetic retinopathy. Graefes Arch Clin Exp Ophthalmol 253:335-342, 2015.
38. Hirota K, Itoh Y, Rii T, Inoue M, Hirakata A: Correlation between foveal interdigitation zone band defect and visual acuity after surgery for macular pseudohole. Retina 35:908-914,2015.
 39. Takase H, Okada AA, Goto H, Mizuki N, Namba N, Ohguro N, Sonoda KH, Tomita M, Keino H, Kezuka T, Kubono R, Mizuuchi K, Shibuya E, Takahashi H, Yanai R, Mochizuki M: Development and validation of new diagnostic criteria for acute retinal necrosis. Jpn J Ophthalmology 59:14-20,2015.
 40. Matsumoto-Otake A, Hirota K, Koto T, Inoue M, Hirakata A: Thickened retinal ganglion cell complex in patient with severe takayasu retinopathy at early stage. Retin Cases Brief Rep 9:41-4,2015.
 41. Rii T, Itoh Y, Inoue M, Hirota K, Hirakata A: Authors' reply. Can J Ophthalmol 50: 180, 2015.
 42. Suzuki T¹, Ohashi Y¹, Oshika T², Goto H³, Hirakata A, Fukushima K⁴, Miyata K⁵; Japanese Ophthalmological Society HOYA Intraocular Lens - Related Endophthalmitis Investigation Commission (¹Department of Ophthalmology, Ehime University, Graduate School of Medicine, Ehime, Japan, ²Department of Ophthalmology, Faculty of Medicine, University of Tsukuba, Tsukuba, Japan, ³Department of Ophthalmology, Tokyo Medical University, Tokyo, Japan, ⁴Karasuyama Eye Clinic, Tokyo, Japan, ⁵Miyata Eye Hospital, Miyazaki, Japan): Outbreak of Late-onset Toxic Anterior Segment Syndrome After Implantation of One-piece Intraocular Lenses. Am J Ophthalmol 159: 934-939. e2,2015.
 43. Ideta S, Ota Y, Yuki K, Noda M, Inoue M, Tsubota K: Evaluation of surgical outcomes for ptosis surgery by face recognition software. Asia Pac J Ophthalmol. 4(1):14-18,2015.
 44. Uchida A, Inoue M, Bissen-Miyajima H, Hirakata A: Dynamic changes of optical aberrations during restoration of optical properties of hydrophobic acrylic intraocular lens ejected through cartridge. Br J Ophthalmol, (Epub ahead of print 2015).
 45. Keino H, Okada AA, Watanabe T, Echizen N, Inoue M, Takayama N, Nagane M: Spectral-domain Optical Coherence Tomography Patterns in Intraocular Lymphoma. Ocul Immunol Inflamm:1-6, (Epub ahead of print 2015).
 46. Ando Y, Inoue M, Ohno-Matsui K, Kusumi Y, Iida T, Hirakata A: Macular detachment associated with intrachoroidal cavitation in non-pathological myopic eyes. RETINA (in press)
 47. Yokota R, Inoue M, MD, Itoh Y, Rii T, Hirota K, Hirakata A: Comparison of microincision vitrectomy and conventional 20-gauge vitrectomy for severe proliferative diabetic retinopathy. Jpn, J Ophthalmol (in press)
 48. Inoue M: Retinal complications associated with congenital optic disc anomalies determined by swept source optical coherence tomography. Taiwan, J Ophthalmol (in press)
- 著書**
1. 平形明人: Reticular Pseudodrusen. 超広角でみる眼底病変診断. 平形明人, 大路正人, 井上真, 瓶井資弘編集. 東京, メジカルビュー社, 2015. p.82-83.
 2. 平形明人: 外傷性黄斑円孔. 超広角でみる眼底病変診断. 平形明人, 大路正人, 井上真, 瓶井資弘編集. 東京, メジカルビュー社, 2015.p.88-92.
 3. 平形明人: 視神経乳頭ピットに伴う網膜剥離. 超広角でみる眼底病変診断. 平形明人, 大路正人, 井上真, 瓶井資弘編集. 東京, メジカルビュー社, 2015. p.166-169.
 4. 平形明人: 朝顔症候群に伴う網膜剥離. 超広角でみる眼底病変診断. 平形明人, 大路正人, 井上真, 瓶井資弘編集. 東京, メジカルビュー社, 2015.p.170-173.
 5. 平形明人: 眼科健康診断(眼底検査)での超広角眼底撮影の利用. 超広角でみる眼底病変診断. 平形明人, 大路正人, 井上真, 瓶井資弘編集. 東京, メジカルビュー社, 2015.p.206-207.
 6. 廣田和成, 平形明人: 視神経乳頭異常 (I. 視神経乳頭ピット, II. 朝顔症候群, III. 乳頭コロボーマ). 眼科臨床エキスパート 網膜剥離と極小切開硝子体手術. 寺崎浩子, 吉村長久編集. 東京, 医学書院, 2015.p.207-210.
 7. Okada AA. Behçet's disease. In: Ophthalmology, Fourth Edition, M Yanoff, J Duker (eds.), Elsevier, London, 2014.
 8. 山田昌和: 3歳児眼健診の有効性. 眼科診療クオリファイ 22. 弱視・斜視診療のスタンダード. 不二門尚編. 東京, 中山書店, 2014. p.82-85.
 9. 山田昌和: 癒着性斜視に対する羊膜移植術について教えてください. 眼科診療クオリファイ 22. 弱視・斜視診療のスタンダード. 不二門尚編. 東京, 中山書店, 2014. p.247-249.
 10. 山田昌和: 網膜剥離術後斜視. 眼手術学 3. 眼筋・涙器. 佐藤美保, 佐々木次壽編. 東京, 文光堂, 2014. p.202-204.
 11. 山田昌和: Salzmann 角膜変性. 眼科診療クオリファイ 25. 角膜混濁のすべて. 井上幸次編. 東京, 中山書店, 2014.10.p.113-115.
 12. 山田昌和編: 眼科診療クローズアップ. 東京, メジカルビュー社, 2014.
 13. 山田昌和: ドライアイ. 今日の治療指針 2015年版. 福井次矢, 高木誠, 小室一成編. 東京, 医学書院, 2015.
 14. 山田昌和: 表層角膜炎. 南山堂医学大辞典 第20版. 秋澤忠男ほか編. 東京, 南山堂, 2015.
 15. Inoue M: Image quality of the eye with a Premium IOL: Simulation of the retinal surgeon's view. Cataract Surgery: Maximizing outcomes though research. Springer, 2014.p.179-192.
 16. Inoue M: Wide-angle viewing system. Microincision Vitrectomy Surgery, Emerging techniques and technology. Developments in Ophthalmology vol.54. Karger, 2014.p.87-91.
 17. 井上真: Optos200Tx 撮り方のコツ. 超広角でみる眼底病変診断. 東京, メジカルビュー社, 2015.p.4-5.
 18. 井上真: 眼底像, 蛍光像のメリット・デメリット. 超広角でみる眼底病変診断. 東京, メジカルビュー社, 2015.p.6-11.
 19. 井上真: 眼底像, 最も多い上方弁状裂孔原性網膜剥離. 超広角でみる眼底病変診断. 東京, メジカルビュー社, 2015.p.120-123.
 20. 井上真: 眼底検査. 第2章研修で学ぶべき検査技術と知識. 眼科研修ノート改訂第2版, 東京, 診断と治療社, 2015. p.123-127.
 21. 井上真: 裂孔原性網膜剥離. 専門医のための眼科診療クオリファイ21眼救急疾患スクランブル, 東京, 中山書店, 2014. p.347-349.
 22. 井上真: 黄斑部膜処理. 網膜剥離と極小切開硝子体手術, 眼科臨床エキスパート. 東京, 医学書院, 2015. p.266-270.
 23. 井上真: 硝子体手術の特性. 小切開硝子体手術入門! -これだけわかれば始められる-. 東京, メジカルビュー社, 2014. p.4-7.

24. 井上真:同時手術の適応と IOL 選択. 小切開硝子体手術入門! -これだけわかれば始められる-. 東京, メジカルビュー社, 2014. p.106-108.
25. 井上真:飛蚊症. 今日の治療指針2015-私はこう治療している-. 東京, 医学書院, 2015. p.1381-1382.
26. 慶野博:ここが知りたい! ぶどう膜炎診療 ぶどう膜炎治療の組み立て方 3. 眼科グラフィック. 大阪, メディカ出版, 2014.p.269-275.
27. 慶野博:免疫抑制薬の使い方.あたらしい眼科31, 東京, メディカル葵, 2014.p.1279-86.
28. 慶野博, 岡田アナベルあやめ:ぶどう膜炎の評価 眼炎症の標準的評価法 -SUN ワーキンググループによる分類-, 眼科56. 東京, 金原出版, 2014.p.1135-1138.
29. 慶野博:サルコイドーシス. 超広角でみる眼底病変診断. 東京, メディカルビュー社, 2014.p.182-185.
30. 慶野博:急性網膜壊死. 超広角でみる眼底病変診断. 東京, メディカルビュー社.2014.p.186-189.
31. 慶野博:眼内悪性リンパ腫. 超広角でみる眼底病変診断. 東京, メディカルビュー社, 2014.p.190-193.
32. 慶野博:多発性後極部網膜色素上皮症. 超広角でみる眼底病変診断. 東京, メディカルビュー社, 2014.p.194-197.
33. 北善幸:いまさら聞けない OCT の活かし方. 緑内障の OCT 撮影. 眼科グラフィック3, 2014. p. 20-25.
34. 北善幸:緑内障セミナー. RTVue-100. あたらしい眼科31. 2014. p.1163-1164.
35. 北善幸: von Hippel-Lindau 病. 超広角でみる眼底病変診断. 平形明人, 大路正人, 井上真, 瓶井資弘編.東京, メジカルビュー社, 2015. p.62-65.
36. 北善幸:Eales 病. 超広角でみる眼底病変診断. 平形明人, 大路正人, 井上真, 瓶井資弘編. 東京, メジカルビュー社, 2015. p. 66-67.
37. 北善幸: 下方弁状裂孔網膜剥離(バククル症例). 超広角でみる眼底病変診断. 平形明人, 大路正人, 井上真, 瓶井資弘編. 東京, メジカルビュー社, 2015. p.132-133.
38. 北善幸:強度近視眼での格子状変性内円孔による網膜剥離(バククル症例). 超広角でみる眼底病変診断. 平形明人, 大路正人, 井上真, 瓶井資弘編. 東京, メジカルビュー社, 2015. p.134-137.

特許等知的財産関係, 報告書

1. 平形明人:読書が可能な人工視覚システム(脈絡膜上-経網膜電気刺激(STS)法の実用化)厚生労働科学研究費補助金(医療機器開発研究事業 H24-医療機器一般-004)分担研究報告書, 2015.
2. 平形明人:読書が可能な人工視覚システム(脈絡膜上-経網膜電気刺激(STS)法の実用化)厚生労働科学研究費補助金(医療機器開発研究事業 H24-医療機器一般-004) 分担研究総合報告書, 2015.
3. 慶野博:硝子体による眼内免疫寛容の作用機構の解明 26462696 文部科学省 科学研究費補助金 基盤研究 C 平成26年度-平成 28年度.

その他

1. 平形明人:老化現象?それとも病気のサイン?飛蚊症. きょうの健康, p80-84, NHK 出版, 東京,2014.
2. 平形明人:Optos だから見逃さなかった. 第67回日本臨床眼科学会 セミナーレポート, Chuo Sangio Times vol.4, p6,中央産業貿易株式会社, 東京, 2014.
3. 平形明人:糖尿病網膜症〜最新情報〜. ホスト 武井泉(東京

歯科大学市川総合病院 糖尿病・内分泌センター). DITN No.435 p2-3. メディカルジャーナル, 東京, 2014.

4. 平形明人:なんでも健康相談「複数の目の病気があるので失明が心配です」NHK きょうの健康9月号, p128,2014.
5. 平形明人:治療選択肢が広がった今, 糖尿病黄斑浮腫について再考する①診断・検査編. 北野滋彦, 厚東隆志, 山本禎子. 座談会, 京王プラザホテル, 2014年8月1日.
6. 平形明人:治療選択肢が広がった今, 糖尿病黄斑浮腫について再考する②治療編. 北野滋彦, 厚東隆志, 山本禎子. 座談会, 京王プラザホテル, 2014年8月1日.
7. 平形明人:症例から学ぶ眼底疾患アップデート-2014年-. 奈良県眼科医会報 13:p17-19,2014.
8. 平形明人:名医のセカンドオピニオン. 週刊朝日4月3日増大号, p139, 朝日新聞出版, 東京, 2015.
9. Hirakata A (International Affairs Committee) : First global trends in retina survey compares surgical practice patterns. Retina Times 58:14-15, 38-39, 2015.

受賞

1. 井上真:第3回杏林医学学会研究奨励賞 受賞, 2014年11月15日.

耳鼻咽喉科学教室

講演

1. Kogashiwa Y:Sentinel node navigation surgery using indocyanine green fluorescence imaging for head and neck cancer. 18th WCBIP/WCBE World Congress, Japan, April 13th -16th, 2014.
2. Sato D: A diagnostic meta-analysis of sentinel lymph node biopsy in early head and neck squamous cell carcinoma. 18th WCBIP/WCBE World Congress, Japan, April 13th-16th, 2014.
3. Karaho T:Can mano-videoesendoscopy substitute for videofluorography in evaluation of upper esophageal sphincter function?. 18thWCBIP / WCBE World Congress, Japan, April 13th -16th, 2014.
4. Yokoi H:Our experiences of an Endoscopic Endonasal Approach for Early Stage Olfactory Neuroblastoma. ENDOMILANO 2014 6th World Congress, Italy, April 14th-17th, 2014.
5. 横井秀格:アレルギー性鼻炎-診断と治療における最新の戦略-. 北多摩耳鼻咽喉科医会, 東京, 2014年4月23日.
6. 川原敬祐:難治性中耳炎の一例. 第21回杏林大学耳鼻咽喉科病診連携カンファレンス, 三鷹, 2014年4月26日.
7. 阿部千草:嚥下障害を主訴とした小脳橋角部髄膜腫の一例. 第21回杏林大学耳鼻咽喉科病診連携カンファレンス, 三鷹, 2014年4月26日.
8. 小野修平:内視鏡下鼻内手術にて摘出した若年性鼻咽頭血管線維腫(Radlkowski 分類:Stage II A)の一例. 第21回杏林大学耳鼻咽喉科病診連携カンファレンス, 三鷹, 2014年4月26日.
9. 池田哲也, 小柏靖直, 横井秀格, 甲能直幸:口腔扁平苔癬および口腔扁平苔癬類似粘膜炎の臨床病理組織学的検討. 第115回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会, 福岡, 2014年5月14-17日.
10. 小柏靖直, 松本吉史, 茂呂順久, 中村健大, 佐藤大, 甲能直幸:頭頸部領域に対する ICG 蛍光法と超音波造影剤ソナゾイドを併用したセンチネルリンパ節生検に関する検討. 第115回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会, 福岡, 2014年5月14-17日.
11. 増田正次, 甲能直幸, 小川郁:耳鳴患者に対するストレス応答の他覚的測定-第2報 耳鳴の重症度, 精神状態の影響につ

- いてー. 第115回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会, 福岡, 2014年5月14-17日.
12. 横井秀格, 松本祐磨, 川田往嗣, 甲能直幸:花粉特異的IgE陽性者におけるCCD特異的IgE抗体の関与について. 第115回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会, 福岡, 2014年5月14-17日.
13. 今西順久, 佐藤陽一郎, 渡部佳弘, 関水真理子, 伊藤文展, 小澤宏之, 小川郁:下咽頭癌・声門上癌 cN(+)例に対する経口的切除(TOVS) + 頸部郭清術の治療成績の検討. 第38回日本頭頸部癌学会, 東京, 2014年6月12-13日.
14. 小柏靖直:当科における頭頸部癌化学療法臨床と研究. 多摩頭頸部がんセミナー, 東京, 2014年6月20日.
15. 横井秀格:脊索腫との鑑別が困難であった斜台部悪性リンパ腫の一例. 第26回日本頭蓋底外科学会, 東京, 2014年6月19-20日.
16. 川原敬祐, 濱之上泰裕, 増田正次, 甲能直幸:ANCA関連血管炎性中耳炎の1例. 一般社団法人日本耳鼻咽喉科学会東京都地方部会定例会 第204回学術講演会, 東京, 2014年7月19日.
17. 唐帆健浩:嚥下障害患者への気管カニューレの選択と抜去の判断基準. 第20回日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会, 東京, 2014年9月5-7日.
18. 佐藤大, 甲能直幸:原発性マクログロブリン血症治療後に発見された舌アミロイドーシスの1例. 第27回日本口腔・咽頭科学会総会 学術講演会, 札幌, 2014年9月11-12日.
19. 松本吉史, 小柏靖直, 甲能直幸:セツキシマブは増殖抑制効果に耐性を持つ頭頸部癌細胞株の遊走および浸潤を阻害する. 第27回日本口腔・咽頭科学会総会 学術講演会, 札幌, 2014年9月11-12日.
20. 唐帆健浩:嚥下障害に対するチーム医療と病診連携. 第100回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会, 鹿児島, 2014年9月18日.
21. 佐藤大, 小柏靖直, 茂呂順久, 松本吉史, 濱ノ上泰裕, 甲能直幸:ICG 蛍光法と超音波造影剤ソナゾイドを併用した頭頸部センチネルリンパ節生検に関する基礎研究. 第16回SNNS研究会学術集会, 鹿児島, 2014年9月19-20日.
22. 松本吉史, 櫻井裕之, 小柏靖直, 木村徹, 甲能直幸:セツキシマブは増殖抑制効果に耐性を持つ頭頸部癌細胞株の遊走および浸潤を阻害する. 第73回日本癌学会学術総会, 横浜, 2014年9月25-27日.
23. 横井秀格, 田中秀峰, 松本祐磨, 木村奈津子, 池田哲也, 甲能直幸:脊索腫との鑑別が困難であった斜台部悪性リンパ腫の一例. 第53回日本鼻科学会総会・学術講演会, 大阪, 2014年9月25-27日.
24. 池田哲也, 松本祐磨, 横井秀格, 甲能直幸:ビスフォスフォネート関連顎骨壊死による副鼻腔炎の6例. 第53回日本鼻科学会総会・学術講演会, 大阪, 2014年9月25-27日.
25. 横井秀格:花粉症診断におけるCCD特異的IgE抗体の関与. 第53回日本鼻科学会総会・学術講演会, 大阪, 2014年9月25-27日.
26. 渡邊格, 横井秀格, 松本祐磨, 池田哲也, 甲能直幸:内視鏡下鼻内手術にて摘出した若年性鼻咽頭血管線維腫(Radkowskistage IIA)の一例. 第53回日本鼻科学会総会・学術講演会, 大阪, 2014年9月25-27日.
27. 松本祐磨, 横井秀格, 池田哲也, 甲能直幸:ハイドロデブリッターが有用であった汎副鼻腔病変を認めたアレルギー性真菌性副鼻腔炎の一例. 第53回日本鼻科学会総会・学術講演会, 大阪, 2014年9月25-27日.
28. 山中英敬, 横井秀格, 松本祐磨, 渡邊格, 池田哲也, 甲能直幸:Draf III が有用であった, 慢性副鼻腔炎再発と共に右眼窩前頭部コレステリン肉芽腫を認めた一例. 第53回日本鼻科学会総会・学術講演会, 大阪, 2014年9月25-27日.
29. 唐帆健浩:嚥下障害診療の最前線. 杏林大学医学部公開講演会, 三鷹, 2014年10月4日.
30. 唐帆健浩, 佐藤哲也, 川原敬祐, 甲能直幸:嚥下造影検査の代替としての嚥下内視鏡・圧検査の有用性. 第40回多摩耳鼻咽喉科臨床研究会, 三鷹, 2014年10月4日.
31. 唐帆健浩:嚥下機能と嚥下障害に関わる総論. 第1回日本嚥下医学会主催嚥下機能評価研修会, 東京, 2014年10月13日.
32. 増田正次, 務台英樹, 有本友季子, 仲野敦子, 甲能直幸, 松永達雄:COCH フレームシフト変異の分子病態と遺伝子診断に関する考察. 第24回日本耳科学会総会・学術講演会, 新潟, 2014年10月15-18日.
33. 蔵口潤, 他:当科における口腔扁平苔癬の臨床病理組織学的検討ー第2報ー. 第59回公益社団法人日本口腔外科学会総会・学術大会, 千葉, 2014年10月17-19日.
34. 池田哲也, 他:当科におけるゾレドロン酸誘発ビスフォスフォネート関連顎骨壊死の臨床的検討. 第59回公益社団法人日本口腔外科学会総会・学術大会, 千葉, 2014年10月17-19日.
35. Karaho T: Can mano - videoendoscopy substitute for videofluorography in evaluation of upper esophageal sphincter function?. 4th Congress of the European Society for Swallowing Disorders, Belgium, October 23rd-25th, 2014.
36. Hamanoue Y, Kogashiwa Y, Sato D, Moro Y, Sato T, Kohno N: A new technique for the removal of foreign bodies from hypopharynx to cervical esophagus with a Satou's curved laryngoscope. The 31st Congress of the Pan-pacific Surgical Association Japan Chapter, Taiwan, October 31st,-November 2nd, 2014.
37. Yamanaka H, Yokoi H, Matsumoto Y, Watanabe I, Ikeda T, Kohno N: Draf III was effective in a patient with right orbitofrontal cholesterol granuloma with recurrence of chronic sinusitis. The 31st Congress of the Pan-pacific Surgical Association Japan Chapter, Taiwan, October 31st,-November 2nd, 2014.
38. Ikeda T, Ukiyama E, Nirasawa Y, Kohno N: A case of ectopic odontoma: a rare and unusual case report of eruption of compound odontoma into the neonatal buccal mucosa. The 31st Congress of the Pan-pacific Surgical Association Japan Chapter, Taiwan, October 31st,-November 2nd, 2014.
39. 横井秀格:慢性副鼻腔炎の診断と治療ー近年難治性で問題となっている好酸球性副鼻腔炎から昔ながらの病態, 菌性副鼻腔炎の最新の知見ー. 平成26年度保険医療講習会 主催 東京都医師会 東京都福祉保健局, 東京, 2014年11月8日.
40. 濱之上泰裕, 小柏靖直, 佐藤大, 茂呂順久, 佐藤哲也, 甲能直幸:佐藤式彎曲型咽喉頭直達鏡を用いて安全に摘出できた頸部食道異物の2症例. 第66回日本気管食道科学会総会ならびに学術講演会, 高知, 2014年11月13-14日.
41. 佐藤大, 小柏靖直, 茂呂順久, 松本吉史, 濱之上泰裕, 甲能直幸:ICG 蛍光法と超音波造影剤ソナゾイドを併用した経皮的なセンチネルリンパ節の同定に関する検討. 第66回日本気管食道科学会総会ならびに学術講演会, 高知, 2014年11月13-14日.
42. 佐藤哲也, 唐帆健浩, 濱之上泰裕, 小柏靖直, 甲能直幸:瘻管摘出術から10年以上経過して頸部膿瘍を再発した梨状窩瘻の

- 1例. 第66回日本気管食道科学会総会ならびに学術講演会, 高知, 2014年11月13-14日.
43. 唐帆健浩: 嚥下障害の評価・診断法. 第2回嚥下機能評価研修会, 高知, 2014年11月15日.
44. 笠倉奈津子, 増田正次, 増田佐和子, 阪本浩一, 小河原昇, 三澤逸人, 甲能直幸, 松永達雄: 両側性低音障害型感音難聴の分子遺伝学的検討. 59回日本聴覚医学会総会・学術講演会, 下関, 2014年11月27-28日.
45. 松本吉史: 腫瘍外来. 第22回杏林大学耳鼻咽喉科病診連携カンファレンス, 三鷹, 2014年12月13日.
46. 松本文武: 難聴外来. 第22回杏林大学耳鼻咽喉科病診連携カンファレンス, 三鷹, 2014年12月13日.
47. 松本祐磨: 副鼻腔・頭蓋底手術外来, 鼻アレルギー. 第22回杏林大学耳鼻咽喉科病診連携カンファレンス, 三鷹, 2014年12月13日.
48. 川原敬祐: 摂食嚥下外来. 第22回杏林大学耳鼻咽喉科病診連携カンファレンス, 三鷹, 2014年12月13日.
49. 唐帆健浩: 嚥下障害診療におけるチーム医療と地域医療連携. 府中市医師会学術講演会, 府中, 2014年12月26日.
50. 横井秀格: 花粉症の診断と治療～検査に focus を当てて～. 板橋区耳鼻咽喉科医会学術講演会, 東京, 2015年1月22日.
51. 唐帆健浩: 嚥下障害診療におけるチーム医療と地域医療連携. 稲城市医師会学術講演会, 稲城, 2015年1月23日.
52. 阿部千草: 顎下部に生じた myxoma (粘液腫) の1 例. 第25回日本頭頸部外科学会総会ならびに学術講演会, 大阪, 2015年1月29-30日.
53. 松本吉史: セツキシマブは頭頸部癌細胞株の局所浸潤を抑制する. 第25回日本頭頸部外科学会総会ならびに学術講演会, 大阪, 2015年1月29-30日.
54. 川原敬祐: 耳下腺上皮筋上皮癌 (epithelial-myoepithelial carcinoma) の1 例. 第25回日本頭頸部外科学会総会ならびに学術講演会, 大阪, 2015年1月29-30日.
55. 甲能直幸: 頭頸部癌治療の最新情報. 第108回御茶ノ水耳鼻咽喉・頭頸科治療研究会, 東京, 2015年2月5日.
56. 唐帆健浩: 嚥下障害診療の最前線. 小平市医師会・小平市歯科医師会 市民公開講座, 小平, 2015年2月7日.
57. 唐帆健浩: 嚥下内視鏡検査の実際 (各論). 第4回日本嚥下医学会嚥下評価研修会, 福島, 2015年2月8日.
58. 甲能直幸: 耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域の最新情報. 第90回大分耳鼻咽喉科臨床研究会, 大分, 2015年2月12日.
59. Watabe T, Masuda M, Ogawa K: The hearing level change of the versatile gene modulation mouse (NKCC1-tetO mouse). The 38th Annual MidWinter Research Meeting of the Association for Research in Otolaryngology, USA, February 21st-25th, 2015.
60. 松本吉史: セツキシマブが頭頸部癌に与える影響について. 第3回南関東頭頸部腫瘍懇話会, 東京, 2015年3月6日.
61. 唐帆健浩: 摂食嚥下機能療法 (嚥下訓練, 口腔ケア, 気道管理を含む). 第5回日本嚥下医学会主催嚥下機能評価研修会, 福岡, 2015年3月8日.
62. 池田哲也: 歯肉出血を契機に判明した後天性血友病の一例. 第24回 (一社) 日本有病者歯科医療学会総会・学術集会, 旭川, 2015年3月20-22日.
63. 池田哲也: 当科におけるビスフォスフォネート関連顎骨壊死 (BRONJ) に対する対応について. 第24回 (一社) 日本有病者歯科医療学会総会・学術集会, 旭川, 2015年3月20-22日.
- navigation surgery. 外科 76(4):361-364, 2014.
2. 甲能直幸: 診断と治療 頭頸部癌の化学療法と放射線療法. 日本耳鼻咽喉科学会会報 117(5):697-701, 2014.
3. 唐帆健浩: 嚥下障害に対する外科的治療の適応と術式の選択. 耳鼻咽喉科臨床 107(6):500-501, 2014.
4. 唐帆健浩: 嚥下障害に対する耳鼻咽喉科医の役割 耳鼻咽喉科一般外来における嚥下指導と嚥下訓練. 日本耳鼻咽喉科学会会報 117(6):782-787, 2014.
5. 小柏靖直, 甲能直幸: 頭頸部癌化学療法の歴史. JOHNS 30(8):947-949, 2014.
6. 甲能直幸: 用語解説 再発性多発性軟骨炎 (relapsing polychondritis) (RP). 日本気管食道科学会会報 65(4):358-359, 2014.
7. 唐帆健浩: 口腔咽頭喉頭科学・気管食道科学領域 嚥下内視鏡検査で誤嚥を認めた!. JOHNS 30(9):1279-1280, 2014.
8. 唐帆健浩, 甲能直幸: 術中・術後合併症とその管理 精神・神経系 嚥下障害. 臨床外科 69(11):297-299, 2014.
9. 甲能直幸: 用語解説 臓器機能温存治療. 日本気管食道科学会会報 65(6):489-490, 2014.
10. 横井秀格: アレルギー性鼻炎に対する代替医療. アレルギーの臨床 35(1):32-35, 2015.
11. 横井秀格: 慢性副鼻腔炎の診断と治療 近年難治性で問題となっている好酸球性副鼻腔炎から昔ながらの病態, 菌性副鼻腔炎の最新の知見. 東京都医師会雑誌 68(3):204-216, 2015.
12. 横井秀格: One airway, one disease 慢性副鼻腔炎・鼻ポリープ. 呼吸器内科 27(3):180-186, 2015.
13. 小柏靖直, 尾川昌孝, 甲能直幸: 成人に発症した原因不明の軟口蓋穿孔の1例. 口腔・咽頭科 28(1):59-64, 2015.
14. 濱之上泰裕, 横井秀格, 川田往嗣, 松本祐磨, 中村健大, 甲能直幸: 稀な顔面外傷の一例. 頭頸部外科 24:109-113, 2014.
15. 藤島一郎, 唐帆健浩, 林良幸², 中山剛志³, 巨島文子⁴, 倉智雅子⁵ (*浜松市リハビリテーション病院, ²杏林大学 リハビリテーション室, ³杏林大学 摂食嚥下センター, ⁴京都第一赤十字病院, ⁵新潟リハビリテーション大学): 症例 私の治療方針 重度偽性球麻痺(解説). 嚥下医学 3:208-214, 2014.
16. 佐藤哲也, 唐帆健浩(*至誠会第二病院): 程度を評価する方法はありますか. JOHNS 31:61-63, 2015.
17. 唐帆健浩: 特集「杏林大学と地域医療」外来センター: 摂食嚥下センター. 杏林医学会雑誌 46:45-48, 2015.
18. 松本吉史, 小柏靖直, 甲能直幸: 頸部リンパ節結核9症例の検討. 日本耳鼻咽喉科学会誌 117:184-190, 2014.
19. Yamauchi K, Kogashiwa Y, Moro Y, Kohno N: The effect of topical application of royal jelly on chemoradiotherapy-induced mucositis in head and neck cancer: a preliminary study. Int J Otolaryngol: 974967, 2014. (Web)
20. Ikeda T, Kuraguchi J, Kogashiwa Y, Yokoi H, Satomi T, Kohno N: Successful treatment of Bisphosphonate - Related Osteonecrosis of the Jaw (BRONJ) patients with sitafloxacin: New strategies for the treatment of BRONJ. Bone 73: 217-222, 2014. (Web)
21. Yamauchi K, Kogashiwa Y, Nakamura T, Moro Y, Nagafuji H, Kohno N: Diagnostic evaluation of sentinel lymph node biopsy in early head and neck squamous cell carcinoma: a meta-analysis. Head Neck 37(1):127-133, 2015.
22. Matsumoto Y, Ikeda T, Yokoi H, Kohno N: Association between

論文

1. 小柏靖直, 甲能直幸: 頭頸部癌における sentinel node

odontogenic infections and unilateral sinus opacification. *Auris Nasus Larynx* 42(4): 288-293, 2015. (Web)

23. Yokoi H, Kodama S, Kogashiwa Y, Matsumoto Y, Ohkura Y, Nakagawa T, Kohno N: An endoscopic endonasal approach for early-stage olfactory neuroblastoma: an evaluation of 2 cases with minireview of literature. *Case Rep Otolaryngol*: 541026, 2015. (Web)
24. Karaho T, Satoh T, Nakajima J, Nakayama T, Kohno N: Can mano-videodendoscopy substitute for videofluorography in evaluation of upper esophageal sphincter function?. *Acta Otolaryngol* 135(2): 187-192, 2015.
25. Moro Y, Kogashiwa Y, Sato D, Matsumoto Y, Nakamura T, Yamauchi K, Sakurai H, Kohno N: Feasibility Study of Alternate-day S-1 as Adjuvant Chemotherapy for Head and Neck Cancer. *Anticancer Res* 35(2): 977-981, 2015.
26. Nakamura T, Kogashiwa Y, Nagafuji H, Yamauchi K, Kohno N: Validity of sentinel lymph node biopsy by ICG fluorescence for early head and neck cancer. *Anticancer Res* 35(3): 1669-1674, 2015.
27. Matsumoto Y, Kogashiwa Y, Mochizuki M, Kohno N: Malignant lymphoma arising in the submandibular gland in a patient with HIV infection and associated lymphadenopathy. *International Cancer Conference Journal*: 2014.(Published Online).
28. Ryan A, Ikeda R, Masuda M: The regulation of gene expression hair cells. *Hear Res* S0378-5955(15): 00003-9, 2015.

著書

1. 甲能直幸, 唐帆健治, 小柏靖直: 頭頸部がん治療薬. がん薬物療法キードラッグ65. 古瀬純司編著. 東京, 中外医学社, 2014.

産科婦人科学教室

講演

1. 田中啓, 齋藤将也, 松島実穂, 宮崎典子, 和地祐一, 井澤朋子, 酒井啓治, 岩下光利: 妊娠糖尿病において妊娠中母体体重増加が胎児発育を促進する. 公益社団法人日本産科婦人科学会第66回学術講演会, 東京, 2014年4月18-20日.
2. 齋藤将也, 田中啓, 松島実穂, 宮崎典子, 和地祐一, 井澤朋子, 酒井啓治, 岩下光利: カーボカウントを用いた妊娠糖尿病管理とその転帰. 公益社団法人日本産科婦人科学会第66回学術講演会, 東京, 2014年4月18-20日.
3. 渡邊百恵, 澁谷裕美, 藤田亜也, 齋藤郁恵, 黒田恵子, 西ヶ谷順子, 百村麻衣, 松本浩範, 小林陽一, 岩下光利: 婦人科手術症例における術後フォンダバリスクスナトリウム投与の有効性と安全性についての検討. 公益社団法人日本産科婦人科学会第66回学術講演会, 東京, 2014年4月18-20日.
4. 宮崎典子, 井澤朋子, 松島実穂, 和地祐一, 酒井啓治, 岩下光利: 子宮動脈塞栓術後に癒着胎盤となった2例. 公益社団法人日本産科婦人科学会第66回学術講演会, 東京, 2014年4月18-20日.
5. 松島実穂, 井澤朋子, 酒井啓治, 岩下光利: 血管内皮細胞は fibroblast growth factor を分泌し絨毛細胞の遊走を促進する. 公益社団法人日本産科婦人科学会第66回学術講演会, 東京, 2014年4月18-20日.
6. 黒田恵子, 澁谷裕美, 長内喜代乃, 西ヶ谷順子, 松本浩範, 百村麻衣, 小林陽一, 岩下光利: ジェノゲスト長期投与例の検討.

公益社団法人日本産科婦人科学会第66回学術講演会, 東京, 2014年4月18-20日.

7. 嘉治真彦, 上原彩子, 谷垣伸治, 小林陽一, 岩下光利, 清河康: 卵管単独捻転の5例の検討. 公益社団法人日本産科婦人科学会第66回学術講演会, 東京, 2014年4月18-20日.
8. 松澤由記子, 西ヶ谷順子, 野田清香, 渡部耕平, 澁谷裕美, 百村麻衣, 松本浩範, 小林陽一, 岩下光利: 子宮肉腫の術前診断についての検討. 公益社団法人日本産科婦人科学会第66回学術講演会, 東京, 2014年4月18-20日.
9. 堂園溪, 田中啓, 百村麻衣, 澁谷裕美, 西ヶ谷順子, 松本浩範, 小林陽一, 岩下光利: 術中腹水細胞診陽性は子宮体癌 type1 (類内膜腺癌 G1および G2) 症例の再発リスク因子である. 公益社団法人日本産科婦人科学会第66回学術講演会, 東京, 2014年4月18-20日.
10. 長内喜代乃, 小林陽一, 井澤朋子, 酒井啓治, 岩下光利: ラメルテオンは子宮体癌培養細胞の増殖, 浸潤を抑制する. 公益社団法人日本産科婦人科学会第66回学術講演会, 東京, 2014年4月18-20日.
11. 田中啓, 宮崎典子, 松島実穂, 柳下玲子, 谷垣伸治, 岩下光利: “Overlapped placentas”を呈した二絨毛膜二羊膜双胎の一例. 日本超音波学会第87回学術集会, 横浜, 2014年5月9-11日.
12. 竹森聖, 長内喜代乃, 井上慶子, 和地祐一, 井澤朋子, 酒井啓治, 岩下光利: 当院における単一臍帯動脈24例の検討. 第370回東京産科婦人科学会例会, 東京, 2014年5月24日.
13. Nishigaya Y, Kobayashi Y, Shibuya H, Momomura M, Matsumoto M, Iwashita M, Fujiwara M, Mochizuki M, Terado Y: A case of heterogenous sarcoma of the uterine cervix in a 19year-old woman. The 18th Japan-Korea-Taiwan Joint Conference for Gynecological Pathology, Taiwan, May 24th, 2014.
14. Momomura M, Kobayashi Y, Terado Y, Sakamoto N, Osanai K, Nishigaya Y, Matsumoto H: Metastases to the uterus from sigmoid colon cancer. The 18th Japan-Korea-Taiwan Joint Conference for Gynecological Pathology, Taiwan, May 24th, 2014.
15. 百村麻衣, 小林陽一, 長内喜代乃, 澁谷裕美, 西ヶ谷順子, 松本浩範, 岩下光利, 坂本穆彦, 藤原正親: 細胞所見が有用であった小細胞癌を主体とした子宮体部癌肉腫の1例. 第55回日本臨床細胞学会春期大会, 横浜, 2014年6月6-7日.
16. 堂園溪, 西ヶ谷順子, 野田清香, 片山素子, 長内喜代乃, 澁谷裕美, 百村麻衣, 松本浩範, 小林陽一, 岩下光利: パゾパニブにより QOL を維持している子宮平滑筋肉腫再発の1例. 第127回関東連合産科婦人科学会学術集会, 東京, 2014年6月21-22日.
17. 井上慶子, 井澤朋子, 渡部耕平, 黒田恵子, 宮崎典子, 松島実穂, 長内喜代乃, 和地祐一, 酒井啓治, 岩下光利: ヘパリンカルシウム皮下注射の一過性トランスアミナーゼの上昇について. 第127回関東連合産科婦人科学会学術集会, 東京, 2014年6月21-22日.
18. 深川裕一郎, 澁谷裕美, 本田理貢, 荒岡千景, 西ヶ谷順子, 百村麻衣, 松本浩範, 橋場剛士, 小林陽一, 岩下光利: 腹腔鏡下手術摘出標本にて診断しえた卵巣ステロイドホルモン産生腫瘍の1例. 第371回四水回, 東京, 2014年7月2日.
19. 谷垣伸治, 秦ひろか, 漆山大知, 佐々木かりん, 岩下光利, 秦健一郎: 先天異常例の網羅的遺伝子解析の課題—日本人正常集団の標準遺伝配列情報の必要性. 第50回日本周産期・新生児医学会学術集会, 浦安, 2014年7月13-15日.

20. 田中啓, 和地祐一, 井澤朋子, 谷垣伸治, 酒井啓治, 岩下光利: 妊娠糖尿病のインスリン抵抗性に影響を与える周産期因子の検討. 第50回日本周産期・新生児医学会学術集会, 浦安, 2014年7月13-15日.
21. 山田研二, 柳下玲子, 谷垣伸治, 高木崇子, 松島実穂, 宮崎典子, 田島泰宏, 岩下光利: 左上大静脈遺残の出生前診断における有用性とその診断法について. 第50回日本周産期・新生児医学会学術集会, 浦安, 2014年7月13-15日.
22. 松澤由記子, 井澤朋子, 渡部耕平, 黒田恵子, 井上慶子, 宮崎典子, 松島実穂, 和地祐一, 酒井啓治, 岩下光利: 出生前診断が困難であった VATER 連合の1例. 第50回日本周産期・新生児医学会学術集会, 浦安, 2014年7月13-15日.
23. 和地祐一, 井上慶子, 宮崎典子, 松島実穂, 井澤朋子, 酒井啓治, 岩下光利: 分娩における自己血輸血に関する検討. 第50回日本周産期・新生児医学会学術集会, 浦安, 2014年7月13-15日.
24. 松本浩範, 小林陽一, 長内喜代乃, 澁谷裕美, 西ヶ谷順子, 百村麻衣, 岩下光利, 山崎龍王, 梅澤聡, 磯西成治, 武知公博, 村松俊成: プラチナ感受性再発卵巣癌に対する GC (ゲムシタビン・カルボプラチン併用) 療法の有用性. 第56回日本婦人科腫瘍学会学術講演会, 宇都宮, 2014年7月17-19日.
25. 百村麻衣, 小林陽一, 堂園溪, 田中啓, 長内喜代乃, 澁谷裕美, 西ヶ谷順子, 松本浩範, 岩下光利: 再発卵巣癌に対するノギテカン+経口エトポシド併用療法の第Ⅱ相試験. 第56回日本婦人科腫瘍学会学術講演会, 宇都宮, 2014年7月17-19日.
26. 吉田真衣子, 山下詠子, 堂園溪, 荻安俊哉, 大森嘉彦, 下山田博明, 小林陽一, 大倉康男, 似鳥俊明: 急速な貧血の進行を伴いプレシヨックに至った線維腫茎捻転の1例. JSAWI 第15回シンポジウム, 淡路, 2014年9月5-6日.
27. 堂園溪, 鳥海玲奈, 田中啓, 百村麻衣, 澁谷裕美, 西ヶ谷順子, 松本浩範, 小林陽一, 岩下光利, 吉田真衣子, 山下詠子, 似鳥俊明: 子宮肉腫との鑑別が困難であった子宮腺筋腫の1例. JSAWI 第15回シンポジウム, 淡路, 2014年9月5-6日.
28. 岩下光利: 産婦人科医をめぐる最近のトピックス. 東北大学病院総合周産期母子医療センター周産期医療セミナー, 仙台, 2014年9月9日.
29. 齋藤將也, 澁谷裕美, 渡邊百恵, 松本浩範, 橋場剛士, 小林陽一, 岩下光利: 腹腔鏡下手術後に発症した子宮留血症の1例. 第54回日本産科婦人科内視鏡学会学術講演会, 鹿児島, 2014年9月11-13日.
30. 渡邊百恵, 澁谷裕美, 齋藤將也, 西ヶ谷順子, 松本浩範, 橋場剛士, 小林陽一, 岩下光利: 腹腔鏡下卵巣内内膜性嚢胞術後症例の検討. 第54回日本産科婦人科内視鏡学会学術講演会, 鹿児島, 2014年9月11-13日.
31. 岡愛子, 百村麻衣, 鳥海玲奈, 齋藤將也, 堂園溪, 田中啓, 澁谷裕美, 西ヶ谷順子, 松本浩範, 小林陽一, 岩下光利: 子宮肉腫と鑑別した子宮腺筋腫の1例. 第371回東京産科婦人科学会例会, 東京, 2014年9月20日.
32. Iwashita M: Introduction and problems to face. Japan Society of Obstetrics and Gynecology (JSOG), Lecture for Medical University of Vienna, Austria, October 6th, 2014.
33. 橋場剛士: 頸管内癒着を伴う Asherman 症候群の評価に IUI catheter を用いた子宮卵管造影が有用. 第37回日本産婦人科手術学会, 札幌, 2014年10月11-12日.
34. 渡部耕平, 田中啓, 齋藤郁恵, 松島実穂, 松澤由記子, 和地祐一, 井澤朋子, 酒井啓治, 岩下光利: 出生前診断した Klippel-Trenaunay-Weber 症候群の1例. 第128回関東連合産科婦人科学会学術集会, 松本, 2014年10月25-26日.
35. 鳥海玲奈, 小林陽一, 齋藤將也, 澁谷裕美, 西ヶ谷順子, 百村麻衣, 松本浩範, 宮崎紳一郎, 岩下光利: 難治性婦人科再発悪性腫瘍に対するサイバーナイフの有用性. 第128回関東連合産科婦人科学会学術集会, 松本, 2014年10月25-26日.
36. 橋場剛士, 荒岡千景, 松澤由記子, 和地祐一, 岩下光利: Asherman 症候群の成因と予防に関する考察. 第128回関東連合産科婦人科学会学術集会, 松本, 2014年10月25-26日.
37. 本田理貢, 田中啓, 松島実穂, 宮崎典子, 和地祐一, 酒井啓治, 岩下光利: 三胎妊娠に合併した巨大黄体過剰反応の1例. 第73回日本母体胎児医学会学術集会, 佐世保, 2014年11月7-8日.
38. 岡愛子, 井澤朋子, 藤田亜也, 上原一朗, 松島実穂, 酒井啓治, 岩下光利: 産褥心筋症の1例. 第73回日本母体胎児医学会学術集会, 佐世保, 2014年11月7-8日.
39. 長内喜代乃, 西ヶ谷順子, 百村麻衣, 松本浩範, 水谷奈津子, 坂本憲彦, 平野和彦, 藤原正親, 望月眞, 小林陽一, 岩下光利: 若年女性に発生した子宮頸部 heterogenous sarcoma の1例. 第53回日本臨床細胞学会秋期大会, 下関, 2014年11月8-9日.
40. Watanabe M, Shibuya H, Kobayashi Y, Iwashita M: Efficacy and safety of fondaparinux (FPX) for prevention of postoperative venous thromboembolism (VTE) in gynecologic cancer patients. 15th Biennial Meeting IGCS, Australia, November 8th-11th, 2014.
41. 岩下光利: 産科医と助産師の連携. 第4回愛知産婦人科研究会特別講演, 名古屋, 2014年11月22日.
42. 竹森聖, 井澤朋子, 深川裕一郎, 齋藤將也, 荒岡千景, 片山素子, 井上慶子, 柳下玲子, 和地祐一, 酒井啓治, 小林陽一, 岩下光利: 当院で経験した先天性筋強直性ジストロフィーの二例. 第372回四水会, 東京, 2014年11月26日.
43. 松澤由記子, 清本千景, 和地祐一, 橋場剛士, 岩下光利: Asherman 症候群の術後に妊娠に至った3症例. 第59回日本生殖医学学術講演会, 東京, 2014年12月4-5, 7日.
44. 富岡紀子, 井澤朋子, 岡愛子, 中島千絵, 田中啓, 松島実穂, 和地祐一, 酒井啓治, 岩下光利: 出生前に診断に苦慮した小腸捻転症の1例. 第372回東京産科婦人科学会例会, 東京, 2014年12月20日.
45. 小林陽一: 遺伝性腫瘍とその予防策～ホルモン剤の役割も含めて～. 三鷹市婦人科医会講演会, 三鷹, 2015年1月29日.
46. 岩下光利: 産科をめぐる最近のトピックス. 第27回日本医科大学産科婦人科学教室同窓会特別講演, 東京, 2014年2月22日.
47. 本田理貢, 百村麻衣, 鳥海玲奈, 齋藤將也, 渋谷英里子, 松本浩範, 小林陽一, 岩下光利: 細胞診が診断に有用であった骨盤内放線菌症の1例. 第373回東京産科婦人科学会例会, 東京, 2015年2月28日.
48. 小林陽一: 婦人科がん治療の副作用対策における漢方の役割. 第7回栃木県北化学療法セミナー (日本薬剤師研修センター認定予定講演会), 大田原, 2015年3月6日.

論文

1. Morikawa A¹, Ueda K, Takahashi K, Fukunaga M, Iwashita M, Kobayashi Y, Takechi K, Umezawa S, Terauchi F, Kiguchi K, Aoki D, Nomura H, Yoshikawa H, Satoh T, Jobo T, Fujiwara H, Takei Y, Kamoi S, Terao Y, Isonishi S (¹Dept. of Ob/Gy, Jikei Daisan Hosp.): Pathology-oriented treatment strategy of malignant ovarian tumor in pregnant women: analysis of 41 cases in Japan. Int J Clin Oncol 19(6): 1074-1079, 2014.

2. 深川裕一郎, 澁谷裕美, 高木崇子, 長内喜代乃, 西ヶ谷順子, 百村麻衣, 松本浩範, 小林陽一, 岩下光利: 著明なリンパ節腫大を伴った卵巣混合型胚細胞腫瘍の1例, 関東産婦誌 51: 27-32, 2014.
 3. 小林陽一: 子宮がん化学療法の一問一答. プロフェッショナルがんナーシング 4(2): 160-165, 2014.
 4. 嘉治真彦, 上原彩子, 清河国康, 谷垣伸治, 小林陽一: GnRHaによる保存療法を行った右卵巣周囲貯留嚢胞の1例. 東京産婦会誌 63(2): 287-291, 2014.
 5. 渋谷英里子, 井澤朋子, 松島実穂, 島海玲奈, 高木崇子, 井澤朋子, 酒井啓治, 岩下光利: 子宮動脈塞栓術後の子宮内感染が5カ月蔓延したが子宮温存し得た1例. 東京産婦会誌 63(2): 333-338, 2014.
 6. 谷垣伸治, 田中啓, 片山素子, 宮崎典子, 松島実穂, 秦健一郎, 岩下光利: 助産師とのチーム医療を考える助産師の行う超音波検査. 日周産期・新生児会誌 50(1): 114-117, 2014.
 7. 和地祐一, 片山素子, 上原一朗, 松島実穂, 宮崎典子, 井澤朋子, 谷垣伸治, 酒井啓治, 岩下光利: 双胎帝王切開における出血量についての検討. 日周産期・新生児会誌 50(1): 244-248, 2014.
 8. 田中啓, 片山素子, 松島実穂, 宮崎典子, 和地祐一, 井澤朋子, 谷垣伸治, 酒井啓治, 岩下光利: Light-for-dates で出生した極低出生体重児の短期・長期予後と周産因子の検討. 日周産期・新生児会誌 50(1): 192-197, 2014.
 9. Minakami H¹, Maeda T, Fujii T, Hamada H, Iitsuka Y, Itakura A, Itoh H, Iwashita M, Kanagawa T, Kanai M, Kasuga Y, Kawabata M, Kobayashi K, Kotani T, Kudo Y, Makino Y, Matsubara S, Matsuda H, Miura K, T Murakoshi T, Murotsuki J, Ohkuchi A, Ohno Y, Ohshiba Y, Satoh S, Sekizawa A, Sugiura M, Suzuki S, Takahashi T, Tsukahara T, Unno N, Yoshikawa H (¹Hokkaido Univ. Grad. Sch. of Med.): Guidelines for obstetrical practice in Japan: Japan Society of Obstetrics and Gynecology (JSOG) and Japan Association of Obstetricians and Gynecologists (JAOG) 2014 edition. J Obstet Gynecol Res: 40(6): 1469-1499, 2014.
 10. Kobayashi Y, Kuroda K, Shibuya H, Nishigaya Y, Momomura M, Matsumoto H, Iwashita M: Preoperative evaluation of deep venous thrombosis in patients with pelvic organ prolapse. J Obstet Gynaecol Res 40(6): 1754-1758, 2014.
 11. Tanaka K, Kobayashi Y, Shibuya H, Nishigaya Y, Momomura N, Matsumoto H, Iwashita M: Primary retroperitoneal mullerian adenocarcinoma arising from endometriosis. J Obstet Gynaecol Res 40(6): 1823-1827, 2014.
 12. 和地祐一, 松澤由記子, 井澤朋子, 橋場剛士, 酒井啓治, 岩下光利: ART 妊娠双胎と自然妊娠双胎の妊娠経過および分娩経過に関する検討. 東京産婦会誌 63(3): 412-416, 2014.
 13. 齋藤将也, 澁谷裕美, 渡邊百恵, 西ヶ谷順子, 百村麻衣, 松本浩範, 小林陽一, 岩下光利: S 状結腸穿孔を伴った卵巣成熟嚢胞性奇形腫悪性転化の1例. 東京産婦会誌 63(3): 460-464, 2014.
 14. Naing BT¹, Watanabe A², Tanigaki S, Ono M³, Iwashita M, Shimada T² (¹Dept. of Bio. & Mol. Biol., Nippon Med. Sch., ²Dept. of Bio. & Mol. Biol., Nippon Med. Sch.; Division of Clin. Genetics, Nippon Med. Sch. Hosp., ³Dept. of Pediatrics): Presymptomatic genetic analysis during pregnancy for vascular type Ehlers-Danlos syndrome. Int Med Case Rep J 7: 99-102, 2014.
 15. Sugihara K¹, Kobayashi Y, Suzuki A², Tamura N³, Motamedchaboki K³, Huang CT³, Akama T³, Pecotte J⁴, Frost P⁴, Bauer C⁴, Jimenez JB Jr⁴, Nakayama J⁵, Aoki D², Fukuda MN³ (¹Dept. of Ob / Gy, Hamamatsu Univ. Sch. of Med., ²Dept. of Ob / Gy, Keio Univ. Sch. of Med., ³Tumor Microenvironment, Cancer Ctr, Sanford - Burnham Med. Res. Inst., ⁴Southwest Natl. Primate Res. Ctr., Texas Biomed. Res. Inst., ⁵Dept. of Mol. Path., Shinshu Univ. Grad. Sch. of Med.): Development of pro-apoptotic peptides as potential therapy for peritoneal endometriosis. Nat Commun. 5: 4478, 2014. Doi: 10.1038/ncomms5478.
 16. 竹森聖, 長内喜代乃, 井上慶子, 和地祐一, 井澤朋子, 酒井啓治, 岩下光利: 当院における単一臍帯動脈24例の検討. 東京産婦会誌 63(4): 595-598, 2014.
 17. 島海玲奈, 黒田恵子, 深川裕一郎, 長内喜代乃, 澁谷裕美, 西ヶ谷順子, 松本浩範, 百村麻衣, 小林陽一, 岩下光利: 卵巣癌と鑑別が困難であった未分化子宮内膜肉腫の1例. 東京産婦会誌 63(4): 662-667, 2014.
 18. 和地祐一, 岩下光利: 不妊治療の実際, 多嚢胞性卵巣症候群(PCOS)合併不妊の治療. 産婦の実例 63(11): 1700-1707, 2014.
 19. 宮崎典子, 井澤朋子, 田中啓, 松島実穂, 和地祐一, 谷垣伸治, 酒井啓治, 岩下光利: 子宮動脈塞栓術後に癒着胎盤となった2例. 産婦の実例 63(12): 2021-2025, 2014.
 20. Tanaka K, Miyazaki N, Matsushima M, Yagishita R, Izawa T, Tanigaki S, Sakai K, Iwashita M: Prenatal diagnosis of Klippel - Treunay - Weber syndrome with Kasabach-Merritt syndrome in utero. J Med Ultrasonics 42: 109-112, 2015.
 21. 岩下光利, 久保田俊郎, 井寛一彦: 臨床医学の展望-30領域のトピックス, 産科学・婦人科学. 日本医事新報 4740: 121-124, 2015.
 22. Tanaka K, Iwashita M, Matsushima M, Izawa T, Sakai K, Kobayashi Y: Intrapartum group B streptococcus screening using real - time polymerase chain reaction in Japanese population. J Matern - Fetal Neonate Med. 7: 1-5, 2015.
 23. Tanaka K, Kobayashi Y, Dozono K, Shibuya H, Nishigaya Y, Momomura M, Matsumoto H, Iwashita M: Elevation of plasma D-dimer levels associated with rupture of ovarian endometriotic cysts. Taiwanese J Obstet Gynecol. (in press)
 24. Sato Y, Tanaka K, Kobayashi Y, Shibuya H, Nishigaya Y, Momomura M, Matsumoto H, Iwashita M: Uterine cervical cancer with brain metastasis as initial site of presentation: A case report. J Obstet Gynaecol Res. (in press)
- 著書**
1. 小林陽一: 子宮がん化学療法の一問一答, 治療に伴う看護特集患者のギモン・不安にこたえる, 臓器別がん化学療法の一問一答. プロフェッショナルがんナーシング 2. 瀧本真弓, 井淵富美編. 大阪, メディカ出版, 2014. p.160-165.
 2. 酒井啓治, 岩下光利: 分娩記録の書き方. 産婦人科研修ノート. 永井良三総監修, 綾部琢哉, 大須賀穰編. 東京, 診断と治療社, 2014. p.571-573.
 3. 谷垣伸治: 妊婦健診に一步差がつく産科超音波検査. 東京, 医学書院, 2014.
 4. 松島実穂, 酒井啓治, 岩下光利: 産科合併症, 貧血. イラストでハイリスク妊娠がわかる本, 妊婦さんへの説明にそのまま使える, ベリネイタルケア 2015新春増刊. 中田雅彦編. 大阪, メディカ出版, 2014. p.38-43.

講演

1. 横山健一:心臓 MRI の現状 Cardiac MRI: current status and future directions. 第73回日本医学放射線学会, 横浜, 2014年4月10-13日.
2. 荏安俊哉, 横山健一, 石村理英子, 似鳥俊明, 吉岡達也, 山村恒, 宮崎功, 小林邦典, 竹島秀則, 久原重英: Early experience of real-time cardiac imaging with the No - Training - Scan k-t method. 第73回日本医学放射線学会, 横浜, 2014年4月10-13日.
3. Ishimura R, Yokoyama K, Kariyasu T, Nitatori T, Kuhara S, Nitta S, Shiodera T, Takeguchi T: Knowledge-based automatic slice-alignment method of cardiac magnetic resonance imaging for aortic valve evaluation, comparison with inter-observer error. International society for magnetic resonance in medicine 2014, Italy, May 10th-16th, 2014.
4. 横山健一: 条件付き MRI 対応植え込み型デバイス患者の MRI 検査. Advancing Patient Management Discussion Forum, 名古屋, 2014年5月17日.
5. Toyoda K, Ohara A, Oba H, Osawa M, Kanda T, Hiraoka R, Kotoku J, Furui S: Evaluation of Peritonsillar Abscess Using Reconstructed Enhanced CT Images: Classification and Lesion Extent. ASNR 52nd Annual Meeting, Canada, May 17th-22nd, 2014.
6. 横山健一: 条件付き MRI 対応植え込み型デバイス患者の MRI 検査. Advancing Patient Management Discussion Forum, 広島, 2014年5月24日.
7. 増田裕, 黒木一典, 立石秀勝, 本谷啓太, 岩元香保里, 荏安俊哉, 似鳥俊明: 当院における大腸出血に対するTAEの検討. 日本IVR学会総会, 奈良, 2014年6月5-7日.
8. Kariyasu T, Yokoyama K, Ishimura R, Imai M, Nitatori T, Bannae S, Kuhara S: Clinical usefulness of real-time flow imaging with the no-training-scan k-t method: comparison with the conventional (2D-PC) method. The 8th Congress of Asian Society of cardiovascular imaging (ASCI2014), Korea, June 12th-14th, 2014.
9. 似鳥俊明: 条件付 MRI 対応循環器デバイス について. Advanced CT and MRI 2014, 軽井沢, 2014年6月14日.
10. 横山健一: 基礎から学ぶ心臓 MRI 撮像プロトコール. AIMS(Advanced Imaging Multimodality Seminars)2014, 東京, 2014年6月22日.
11. 大原有紗: 中枢神経領域～日常よく遭遇する疾患の多面性～. 第10回前期臨床研修医のための画像診断セミナー, 東京, 2014年6月22日.
12. 立石秀勝, 木下雄介, 増田裕, 黒木一典, 似鳥俊明: 治療方針の決定と手技に難渋した特発性肋間動脈破裂の1例. 第19回末梢血管画像・血管内治療研究会, 東京, 2014年6月28日.
13. 似鳥俊明: 条件付 MRI 対応循環器デバイス について. 東京MRI研究会2014, 東京, 2014年7月12日.
14. 横山健一: 診断の決め手となる撮像断面とコントラスト 胸部. 第33回東京MRI研究会, 東京, 2014年7月12日.
15. 荏安俊哉: 出血と虚血: 胸部領域. 第6回吉祥寺画像診断セミナー, 東京, 2014年8月2日.
16. 横山健一: Device 患者における MRI 撮像のワークフロー構築. 院内ワークフロー作成まで, 東京, 2014年8月30日.
17. 山下詠子, 高木康伸, 八杉利治, 元井亨, 船田信顕, 唐澤克之, 似鳥俊明: 術前診断に苦慮した英膜細胞腫の1例. JSAWI, 兵庫, 2014年9月3-4日.
18. 吉田真衣子, 山下詠子, 堂園溪, 荏安俊哉, 大森嘉彦, 下山田博明, 小林陽一, 似鳥俊明: 急速な貧血の進行を伴いプレシヨック状態に至った線維腫芽捻転の1例. JSAWI, 兵庫, 2014年9月3-4日.
19. 堂園溪, 鳥海玲奈, 田中啓, 百村麻衣, 澁谷裕美, 西ヶ谷順子, 吉田真衣子, 山下詠子, 似鳥俊明: 子宮肉腫との鑑別が困難であった子宮腺筋腫の1例. JSAWI, 兵庫, 2014年9月3-4日.
20. Ohara A, Tsuchiya K, Gomyo M, Tateishi H, Nitatori T: Comparison of cerebral blood flow on perfusion MRI by using arterial spin labeling and dynamic susceptibility contrast in brain tumors. XXth Symposium Neuroradiologicum, Turkey, September 7th-12th, 2014.
21. 横山健一: 条件付き MRI 対応植え込み型デバイス患者の MRI 検査. Advancing Patient Management Discussion Forum, 仙台, 2014年9月12日.
22. 横山健一: 条件付き MRI 対応心臓デバイスの最新情報. 第42回日本磁気共鳴医学会大会, 京都, 2014年9月18-20日.
23. 荏安俊哉, 横山健一, 今井昌康, 石村理英子, 似鳥俊明, 宮崎功, 吉岡達也, 浜田健司: 条件付き MRI 対応植え込み型デバイス患者に対する心臓 MRI 検査の初期経験. 第42回日本磁気共鳴医学会大会, 京都, 2014年9月18-20日.
24. 横山健一: 血管性病変の画像診断 血管炎(CHCC2012改訂要旨, Large vessel vasculitis). 第50回日本医学放射線学会秋季臨床大会, 神戸, 2014年9月26-28日.
25. 大原有紗, 豊田圭子, 土屋一洋, 五明美穂, 本谷啓太, 田中雅樹, 永根基雄, 塩川芳昭, 大森嘉彦, 平野和彦, 菅間博, 似鳥俊明: 側頭骨巨細胞腫の1例. 第27回頭頸部放射線研究会, 神戸, 2014年9月27日.
26. 増田裕: 産科出血のIVRについて. 多摩画像診断とIVRセミナー2014, 東京, 2014年10月24日.
27. 横山健一: 心臓 MRI の意義と実際. 埼玉西部心臓画像診断医学セミナー, 所沢, 2014年11月18日.
28. Yokoyama K, Nitatori T, Imai M, Kariyasu T, Yoshida M, Tsuchiya M, Nishikawa M, Kinoshita Y, Tsukahara Y, Watanabe M: Takayasu Arteritis: Current status of imaging diagnosis. Radiological Society of North America (RSNA2014), Chicago USA, November 30th, -December 5th, 2014.
29. 木下雄介, 増田裕, 荏安俊哉, 塚原弥生, 本谷啓太, 横山健一, 似鳥俊明: 肺葉内分画症の CT 所見の検討. 第446回日本医学放射線学会, 関東地方会定期大会, 東京, 2014年12月13日.
30. 志賀久恵, 増田裕, 立石秀勝, 荏安俊哉, 五明美穂, 村上清寿, 横山健一, 黒木一典, 似鳥俊明: 遺残坐骨動脈再考. 第446回日本医学放射線学会, 関東地方会定期大会, 東京, 2014年12月13日.
31. 立石秀勝, 増田裕, 荏安俊哉, 黒木一典, 似鳥俊明: 7Fr シース対応 IABO カテーテルの使用経験例. 東京アンギオ・IVR会, 東京, 2015年2月12日.
32. 五明美穂, 土屋一洋, 大原有紗, 立石秀勝, 片瀬七朗, 宮崎功, 似鳥俊明: 2D-ASL 法と3D-TOF 法によるMRAの描出能の検討. 第38回日本脳神経 CI 学会総会, 名古屋, 2015年2月13-14日.
33. 山下詠子: 婦人科領域の何これ MRI-放射線科医の求める画像. 第4回多摩 RESONANCE 研究会, 東京, 2015年2月27日.
34. Yamashita E, Murakami S, Kuroki K, Nitatori T: Gastroduodenal

perforation on CT: Useful clues of determining the perforation site based on the direct and indirect findings. ECR, Austria, March 3rd-8th, 2015.

35. Kariyasu T, Yokoyama K, Nishikawa M, Watanabe M, Nitatori T: Diagnostic imaging for foreign bodies. ECR 2015 (European congress of radiology) Austria, March 4th-8th, 2015.
36. 五明美穂, 土屋一洋, 片瀬七朗, 大原有紗, 立石秀勝, 宮崎功, 似鳥俊明: Flow-spoiled fresh blood imaging (FS-FBI) を用いた頭蓋内血管壁描出能の検討. 第44回日本神経放射線学会, 名古屋, 2015年3月6-7日.
37. 横山健一: 心臓 MRI の意義と実際. 玉置地区循環器画像研究会, 山形, 2015年3月13日.

論文

1. 横山健一, 渡辺由, 今井昌康, 石村理英子, 菊安俊哉, 吉田真衣子, 似鳥俊明: 大型血管炎の画像診断 - 高安動脈炎の病態, 画像診断のすべて. 臨床画像30(4):420-430, 2014.
2. Yokoyama K, Ishimura R, Kariyasu T, Imai M, Nitatori T, Kuhara S¹, Nitta S², Takeguchi T², Matsumoto N² (¹Clinical Application Research Center, Toshiba Medical Systems Corporation, ²Multimedia Laboratory, Corporate Research & Development Center, Toshiba Corporation): Clinical application of an automatic slice-alignment method for cardiac MR imaging. Magn Reson Med Sci 13(4):293-298, 2014.
3. 土屋一洋¹, 五明美穂, 大原有紗, 似鳥俊明 (¹東京通信病院・放射線科): 頭蓋内主幹動脈閉塞の病態診断におけるASLを基にした3Tでの非造影MR DSAの有用性. 臨床放射線59:695-700, 2014.
4. 菊安俊哉, 似鳥俊明: 異物の画像診断. 画像診断(0285-0524)34(6):647-660, 2014.
5. Miyazaki M¹, Zhou X¹, Hoshino T¹, Yokoyama K, Ishimura R, Nitatori T (¹MR Research, Toshiba Medical Research Institute): Non-contrast myocardial perfusion using a novel 4D magnetic resonance arterial spin labeling technique: Initial experience. Microvascular Research 98:94-101, 2015.
6. 谷合誠一¹, 横山健一 (¹杏林大・医・第二内科学(循環器内科)): 循環器診療を支える最新の非侵襲的検査. 杏林医学雑誌46(1):111-121, 2015.
7. Yokoyama K, Kariyasu T, Kuhara S¹, Imai M, Ishimura R, Nitatori T (¹Clinical Application Research Center, Toshiba Medical Systems Corporation): Influence of MRI-Conditional Cardiac Pacemakers on Quality and Interpretability of Images Acquired in 1.5-T Cardiac MRI. International Journal of Clinical Cardiology 2(2): 1-7, 2015.
8. 土屋一洋¹, 五明美穂 (¹東京通信病院・放射線科): MR angiography. Clinical Neuroscience 33: 674-677, 2015.

著書

1. 似鳥俊明編著: CT・MRI 解体新書. 東京, リブロ・サイエンス, アプリ版改訂, 2014.
2. 横山健一: IV章 胸部. 3次元画像から学ぶ CT・MRI 断層解剖. 似鳥俊明編集. 東京, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 2014.p.169-226.
3. 立石秀勝: 循環器内科医のための非心臓手術必須知識 II これだけは知っておこう解剖学の基礎知識 1. 解剖学の基礎知識 1) 脳神経. 吉野秀朗, 杉山政則編集. 東京, メジカルビュー社, 2014.p.26-35.
4. 五明美穂, 土屋一洋: 第8章 脳奇形と類縁病態/第12節 くも膜嚢

胞/第13節 正常で見られる構造. 圧倒的画像数で診る! 頭部疾患画像アトラス. 土屋一洋, 山田恵, 森懇編. 東京, 羊土社, 2015.p.402-417.

5. 大原有紗, 藤川章: 9. 全身性エリテマトーデスに伴う中枢神経障害. 圧倒的画像数で診る! 頭部疾患画像アトラス. 土屋一洋, 山田恵, 森懇編. 東京, 羊土社, 2014.p.215-219.

その他

1. 似鳥俊明: 日刊現代“異色の医師”, p16, 2014年10月1日.
2. 立石秀勝: TBS ドラマ『ホワイト・ラボ〜警視庁特別科学捜査班〜』第4話における監修, 2014年4月29日.

放射線腫瘍学教室

講演

1. 戸成綾子: 当院における89Sr 使用経験 症例提示. 第5回89Sr Tokyo Conference, 東京, 2014年10月25日.

論文

1. 高山誠: がん治療における放射線治療の役割. 杏林医学会雑誌 44:153-155, 2014.
2. Tonari A, Itaya N¹, Honda K², Sohara E², Kurai D², Okegawa T¹, Takayama M (¹Department of urology, Kyorin University, ²Department of respiratory medicine, Kyorin University): Effectiveness of isotope therapy in addition to external beam irradiation therapy for pain control due to bone metastases - case report-. J Kyorin Med. Soc. 45(3):79-82, 2014.

その他

1. 高山誠監修: 特材算定ハンドブック. 社会保険研究所, 東京, 2014.
2. 戸成綾子: 2014年度 がん看護研修会公開講演会, がん患者の相談者になる - 放射線治療編 -. 杏林大学病院第一会議室, 三鷹, 2014年9月6日.

麻酔科学教室

講演

学会発表

1. 足立智, 光田将憲, 森山潔, 片山あつ子, 山田達也, 萬知子: 麻酔情報管理システム上での注射薬実施入力漏れの実態. 日本麻酔科学会第61回総会. 横浜, 2014年5月15日.
2. 神山智幾, 森山潔, 金井理一郎, 東佑佳, 小谷真理子, 萬知子: 慢性血栓性肺高血圧症患者を対象にしたパルスオキシメータの制度に関する信頼性. 日本麻酔科学会第61回総会, 横浜, 2014年5月15日.
3. 安藤直朗, 森山久美, 大橋夕樹, 本保晃, 森山潔, 萬知子: 帝王切開後術後創部痛の慢性痛への移行頻度. 日本麻酔科学会第61回総会, 横浜, 2014年5月16日.
4. Yorozu T, Shiozawa Y, Moriyama K, Azuma Y: Related factors for mechanical complications in ultrasounds guided central venous catheterization. 88th International Anesthesia Research Society, Canada. May 18th, 2014.
5. 正保智恵美, 窪田靖志, 川名典子, 関礼輔, 田島伸介, 矢野絹子, 畔蒜祐一郎, 伊藤祐子: 医療用麻薬自己管理に向けた取り組み 看護師の意識調査より. 第19回日本緩和医療学会学術大会, 神戸, 2014年6月20日.
6. 窪田靖志, 正保智恵美, 川名典子, 関礼輔, 田島伸介, 塚田芳枝, 森山久美: 難治性がん性痛に対するデュロキシセチンの効果. 第19回日本緩和医療学会学術大会, 神戸, 2014年6月

20日。

7. 森山久美, 光田将憲, 長谷川綾子, 東佑佳, 山田達也, 萬知子: 周術期管理外来の現状と問題点. 日本麻酔科学会関東甲信越・東京支部第54回合同学術集会, 東京, 2014年8月30日。
8. 田淵沙織, 安藤直朗, 森山潔, 小谷真理子, 沢田龍治, 萬知子: 弓部分枝の高度狭窄を合併した患者に対する片肺全摘術の周術期管理. 日本麻酔科学会関東甲信越・東京支部第54回合同学術集会, 東京, 2014年8月30日。
9. 辻大介, 森山潔, 片山あつ子, 谷合誠一, 吉野秀朗, 萬知子: 冠動脈病変を合併した症候性頸動脈狭窄症の一例. 日本麻酔科学会関東甲信越・東京支部第54回合同学術集会, 東京, 2014年8月30日。
10. 小澤真紀, 箱根雅子, 木下尚之, 山田達也, 竹内徳子, 萬知子: 術中原因不明の循環不全の後心静止となり, 術後の経食道心エコーで SAM を認めた症例. 日本麻酔科学会関東甲信越・東京支部第54回合同学術集会, 東京, 2014年8月30日。
11. 窪田靖志: デュロキシセチン(サインバルタ®)が著効したがん疼痛の症例. 第5回多摩PCT研究会, 東京, 2014年9月4日。
12. 田嶋佳代子, 山田達也, 鮫島圭, 窪田靖志, 田口敦子, 萬知子: 大動脈弁置換術中に大動脈解離を発症した一例. 日本臨床麻酔学会第34回大会, 東京, 2014年11月2日。
13. 窪田靖志: 杏林大学での鎮痛補助薬の選択と効果. 第3回グループ内がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン 3大学合同カンファレンス, 東京, 2014年12月8日。
14. Yorozu T, Moriyama K, Kotani M, Koyama T: Factors associated with catheter-related bloodstream Infections in the intensive care unit of a university hospital. 89th International Anesthesia Research Society, USA. March 22nd, 2015.
15. Motoyasu A, Yorozu T, Moriyama K, Yamada T: The development and use of simulation scenarios inducing medication errors for use medical education. 89th International Anesthesia Research Society, USA. March 22nd, 2015.
16. 鶴澤康二, 森山潔, 神山智幾, 金井理一郎, 小谷真理子, 山田達也, 萬知子: 中心静脈カテーテル(CVC)ガイドライン変更後の消毒薬選択の実態調査. 第41回日本集中治療医学会学術集会, 京都, 2015年2月10日。
17. 本保晃, 森山潔, 金井理一郎, 小谷真理子, 山田達也, 萬知子: 高濃度酸素投与器具間での吸気酸素濃度の比較 高機能患者シミュレータを用いた研究. 第41回日本集中治療医学会学術集会, 京都, 2015年2月10日。

講演会

1. 窪田靖志: 緩和医療の進歩. 地(知)の拠点[杏林大学, 三鷹ネットワーク大学共催]市民公開講演会, 東京, 2014年9月1日。
2. 萬知子: 当たり前の事をする難しさ. 第20回日本小児麻酔学会, 札幌, 2014年9月22日。
3. 徳嶺譲芳: CVC/PICC のハンズオントレーニング. 総合地域医療研修セミナー, 仙台, 2015年2月20日。
4. 徳嶺譲芳: 超音波ガイド下中心静脈穿刺法. 第69回 CVC 指導者養成コース, 福島, 2015年2月21日。
5. 徳嶺譲芳: 超音波ガイド下中心静脈穿刺法. 第92回 CVC 実践セミナー, 福島, 2015年2月21日。
6. 徳嶺譲芳: 超音波ガイド下中心静脈穿刺の交差法・平行法. 平成26年度第4回 CVC 研修会, 東京, 2015年2月27日。
7. 徳嶺譲芳: 超音波ガイド下中心静脈穿刺法. 第68回 CVC 指導者養成コース, 前橋, 2015年3月7日。
8. 徳嶺譲芳: 超音波ガイド下中心静脈穿刺法. 第91回 CVC 実践セミナー, 前橋, 2015年3月7日。

9. 徳嶺譲芳: 超音波ガイド下中心静脈穿刺法. 第95回 CVC 実践セミナー, 福島, 2015年3月14日。
10. 徳嶺譲芳: 超音波ガイド下中心静脈穿刺法. 第70回 CVC 指導者養成コース, 島根, 2015年3月20日。

平成25年度業績追加分

1. 徳嶺譲芳: 超音波ガイド下中心静脈穿刺法. 医療安全講習会, 東京, 2014年2月6日。
2. 萬知子: 中心静脈カテーテル挿入に関する安全管理の組織的な取り組み. 多摩外科研究会, 東京, 2014年2月21日。
3. 徳嶺譲芳: 超音波ガイド下中心静脈穿刺法. 第93回 CVC 実践セミナー, 島根, 2014年3月21日。

論文

1. 萬知子: 抗凝固・肺塞栓予防-特集 エビデンスに基づいた周術期の患者安全. 麻酔 63(3):278-286, 2014.
2. 萬知子: 中心静脈カテーテル関連合併症-機械的合併症と血流感染-. 日本臨床麻酔学会誌 34:11-16, 2014.
3. 森山潔, 中澤春政, 川田良紀, 糟谷洋平, 萬知子: 術前抗菌薬投与の現状調査. 麻酔 63(2):215-217, 2014.
4. 窪田靖志: 手術室でのアセスメントに必要な基礎知識 麻酔の役割と生体への影響. オペナース 1(1):18-24, 2014.
5. 三上大介, 中澤春政, 森山潔, 萬知子: 開心術後合併症予測因子としての脳性ナトリウム利尿ペプチド(BNP)野有用性. 麻酔 63(2):138-142, 2014.
6. 鶴澤康二, 箱根雅子, 中澤春政, 安田博之, 森山潔, 萬知子: 肺動脈性高血圧症および混合性呼吸障害合併症患者に対する低用量等比重プロピカインを用いた脊髄くも膜下麻酔. 麻酔 63(2):157-160, 2014.
7. 金井理一郎, 鶴澤康二, 森山潔, 小谷真理子, 神山智幾, 中澤春政, 安田博之, 萬知子: パルスオキシメーターの低酸素血症に関する信頼性の見当. 日本集中治療学会誌 21:175-176, 2014.
8. 谷合誠一, 山崎聡子, 飯島毅彦, 萬知子, 井原玲, 波利井清紀, 佐藤徹, 吉野秀朗: 新方式による非心臓手術術前スクリーニングシートの使用経験と有用性. 心臓 46(8):1071-1079, 2014.
9. 神山智幾, 金井理一郎, 澤田龍治, 鶴澤康二, 森山潔, 小谷真理子, 山田達也, 萬知子: 経鼻高流量酸素療法を施行した, 重度閉塞性睡眠時無呼吸症候群患者に対する口蓋扁桃摘出術の術後管理. ICUとCCU 38(7):491-493, 2014.
10. 齋藤珠恵, 中澤春政, 箱根雅子, 丸山蘭, 森山潔, 萬知子: 周術期ラテックスアレルギー予防対策の有用性-杏林大学医学部付属病院における対策とその効果-. 麻酔 63(9):1034-1038, 2014.
11. 森山久美, 森山潔, 中澤春政, 萬知子: 大学病院1施設における術後肺血栓塞栓症と静脈血栓症予防ガイドラインの術前遵守度. 日本臨床麻酔学会誌 34(4):485-490, 2014.
12. 本保晃, 森山潔, 萬知子: 高機能患者シミュレータを用いたHighFO ネブライザー(R)の評価. 人工呼吸 31:72-73, 2014.
13. Motoyasu A, Moriyama K, Mitsuda S, Moriyama K, Yorozu T: Oxygen at a high flow rate(35 L/min) via a face mask for preoxygenation. Can J Anaesth. 61(2):2014.
14. Mitsuda S, Moriyama K, Yorozu T: Optimal insertion depth of endotracheal tube among Japanese. J Anesth 28(3):477, 2014.
15. Moriyama K, Satoh T, Motoyasu A, Kotani M, Kanai R, Ando T, Yorozu T: High - Flow Nasal Cannula Therapy in a Patient with Reperfusion Pulmonary Edema following Percutaneous Transluminal Pulmonary Angioplasty. Case Rep Pulmonol. 83(7):612, 2014.
16. Tadokoro T, Tokumine J, Lefor AT, Kawabata T, Yoza K, Kinjo

T: The three-step method for ultrasound-guided pediatric internal jugular venous catheterization: a clinical trial. J Anesth. 29(1):131-3, 2015.

17. Imaura M, Yokoyama H, Kohata Y, Kanai R, Kohyama T, Idemitsu W, Maki Y, Igarashi T, Takahashi H, Kanno H, Yamada Y: Initial dosing regimen of vancomycin to achieve early therapeutic plasma concentration in critically ill patients with MRSA infection based on APACHE II score. Eur J Drug Metab Pharmacokinet. 2014.

著書

1. 萬知子: 鎮痛・鎮静, せん妄の正しい評価なくして効果的なケアはありえない-急性・重症患者ケア3(1). 重症患者の鎮痛・鎮静 最前線. 東京, 総合医学社, 2014.p.16-23.
2. 萬知子: Multimodal Analgesia. 麻酔科 研修ノート 第2版. 東京, 診断と治療社, 2014.p.471-473.
3. 窪田靖志: 3神経障害性疼痛の治療5.腕神経叢浸潤に伴う痛み 症例で身につくがん疼痛治療薬. 山口重樹, 下山直人編. 東京, 羊土社, 2014. p.342-345.
4. 窪田靖志: 3神経障害性疼痛の治療6.坐骨神経浸潤に伴う痛み 症例で身につくがん疼痛治療薬. 山口重樹, 下山直人編. 東京, 羊土社, 2014. p.346-349.
5. 窪田靖志: 3神経障害性疼痛の治療7.四肢浮腫による神経絞扼による痛み 症例で身につくがん疼痛治療薬. 山口重樹, 下山直人編. 東京, 羊土社, 2014.p.350-353.
6. 窪田靖志: IV章膵がん・胆道がんの緩和治療3. 疼痛に対する薬物療法 膵がん・胆道がん薬物療法ハンドブック. 古瀬純司, 奥坂拓志編, 東京, 南光堂, 2014.p.172-176.
7. 窪田靖志: 下肢疼痛の管理-糖尿病性有痛性神経障害と虚血性下肢痛の管理-. WOC Nursing 3(11). 2014.p.81-87.

臨床検査医学教室

講演

1. 森秀明, 西川かおり, 本田普久, 塚田幾太郎, 尾股佑, 關里和, 峯佳毅, 小樽二世, 高橋信一, 岸野智則, 贅田真由美: 消化器領域における3次元超音波検査 -Fly Thru-の検討. 日本超音波医学会第87回学術集会, 東京, 2014年5月9-11日.
2. 佐藤英樹, 木崎直人, 有賀俊之, 浦田毅, 大藤弥穂, 高城靖志, 渡邊卓: 過去データの参照を可能にした生理検査システムの構築とペーパーレス化への取り組み. 第63回日本医学検査学会, 新潟, 2014年5月17-18日.
3. 石井隆浩, 小島直美, 関口久美子, 岡崎ゆり子, 加藤麻衣子, 高城靖志, 渡邊卓: 母親由来の高力価抗 D 抗体により児の血液型判定に影響を及ぼした1症例. 第63回日本医学検査学会, 新潟, 2014年5月17-18日.
4. 米山正芳, 本山拓也, 宮崎京子, 高城靖志, 渡邊卓: 酸性ユリメジャー・タブレット添加による生化学検査への影響. 第63回日本医学検査学会, 新潟, 2014年5月17-18日.
5. 大西宏明: 個別化医療の現状と展望 EGFR/K-RAS 検査を中心として. 多摩学術講演会, 立川, 2014年6月26日.
6. 大西宏明: 神経損傷予防のポイント. 第14回首都圏ラボラトリーフォーラム, 東京, 2014年9月6日.
7. 大西宏明: 神経損傷と迷走神経反射の予防と対処方法. 平成26年度総合検査全国研修会, 東京, 2014年9月27日.
8. 千葉直子, 坂本大典, 杉浦満喜, 高城靖志, 大西宏明, 渡邊卓: Unicel DxH1601の導入による業務ワークフローの効率化. 日本臨床検査自動化学会 第46回大会, 神戸, 2014年10月

9-11日.

9. 浦田毅, 岸野智則, 大西宏明, 山本明日香, 畠森直子, 飯田綾子, 渡辺敬子, 森秀明, 楊國昌, 渡邊卓: 腎臓に浸潤したバーキッドリンパ腫の一例: 転移性腎腫瘍との鑑別点について. 日本超音波医学会 関東甲信越地方会 第26回学術集会, 東京, 2014年10月18-19日.
10. 畠森直子, 岸野智則, 西川かおり, 板谷直, 浦田毅, 下山田博明, 森秀明, 奴田原紀久雄, 大西宏明, 渡邊卓: 乳頭状腎細胞癌の一例. 日本超音波医学会 関東甲信越地方会 第26回学術集会, 東京, 2014年10月18-19日.
11. 宮脇晴子, 岸野智則, 森秀明, 福岡利仁, 下山田博明, 浦田毅, 畠森直子, 飯田綾子, 大西宏明, 渡邊卓: 腎辺縁に hypoechoic cortical rim を認めた一例. 日本超音波医学会 関東甲信越地方会 第26回学術集会, 東京, 2014年10月18-19日.
12. 奥山美樹, 原島敬一郎, 鬼頭桃子, 津留裕奈, 三谷博子, 司茂幸英, 嶋津秀昭, 岸野智則: 新たなソフトウェアで解析したarterial stiffness index (ASI) に関する検討. 第1回日本血管血流学会学術集会, 東京, 2014年11月15日.
13. 大塚弘毅, 大西宏明, 小倉航, 松島早月, 岸野智則, 藤原正親, 古瀬純司, 渡邊卓: 転移性直腸癌症例において認められた新規 RET 遺伝子変異. 第61回日本臨床検査医学会学術集会, 福岡, 2014年11月22-25日.
14. 三谷博子, 石山陽事, 原島敬一郎, 岸野智則: 意識水準低下時の眠気改善を目的とした冷気刺激の可能性について: 神経生理学的パラメータを用いた検討. 第61回日本臨床検査医学会学術集会, 福岡, 2014年11月22-25日.
15. 大西宏明, 滝田順子, 松島早月, 大塚弘毅, 岸野智則, 細井健一郎, 大倉康夫, 小川誠司, 渡邊卓: 遺伝性骨髄増殖性腫瘍の家族例における網羅的遺伝子解析. 第61回日本臨床検査医学会学術集会, 福岡, 2014年11月22-25日.
16. 広井愛美, 米谷正太, 井田陽子, 奥山貴洋, 荒木光二, 高城靖志, 大西宏明, 渡邊卓: *Candida intermedia* が血液培養から検出された1症例. 第61回日本臨床検査医学会学術集会, 福岡, 2014年11月24-25日.
17. 原島敬一郎, 三谷博子, 司茂幸英, 岸野智則: Arterial pressure volume index の複数回測定下における安定性の検討: 推奨測定法の確立に向けて. 第61回日本臨床検査医学会学術集会, 福岡, 2014年11月22-25日.
18. 畠森直子, 岸野智則, 大西宏明, 大塚弘毅, 一瀬由香里, 大倉康男, 平野浩一, 高城靖志, 渡邊卓: 耳下腺深葉脂肪腫の一例-超音波画像所見の考察-. 第61回日本臨床検査医学会学術集会, 福岡, 2014年11月22-25日.
19. 須藤恵美, 岸野智則, 大西宏明, 大塚弘毅, 大坂真以子, 藤原正親, 板谷直, 西川かおり, 森秀明, 奴田原紀久雄, 高城靖志, 渡邊卓: 褐色細胞腫との鑑別が困難であった副腎癌の一例-超音波画像所見の考察-. 第61回日本臨床検査医学会学術集会, 福岡, 2014年11月22-25日.
20. 大坂真以子, 岸野智則, 大西宏明, 大塚弘毅, 畠森直子, 寺戸雄一, 西川かおり, 森秀明, 奴田原紀久雄, 高城靖志, 渡邊卓: 転移性腎腫瘍の3例-超音波画像所見の考察-. 第61回日本臨床検査医学会学術集会, 福岡, 2014年11月22-25日.
21. 米谷正太, 荒木光二, 広井愛美, 牧野博, 奥山貴洋, 平尾千尋, 高城靖志, 大西宏明, 渡邊卓: 当院において検出された *Aerococcus* 属菌に対する薬剤感受性の検討. 第26回臨床微生物学会総会・学術集会, 東京, 2015年1月31日-2月1日.
22. 平尾千尋, 田辺公一, 井田陽子, 米谷正太, 奥山貴洋, 広井愛美, 牧野博, 荒木光二, 高城靖志, 大野秀明, 宮崎義継, 大西

宏明, 渡邊卓: MALDI-TOF MS を用いた *Cryptococcus* 属の同定性能の検討. 第26回日本臨床微生物学会, 東京, 2015年1月31日-2月1日.

23. 森山遥, 千葉直子, 坂本大典, 松浦幸子, 杉浦満喜, 高木靖志, 大西宏明, 渡邊卓: 当院における EDTA 依存性血小板凝集の検査の現状と問題点について. 杏林メディカルフォーラム, 三鷹, 2015年3月7日.
24. 大西宏明: 採血合併症～神経損傷を中心として～. 第30回山梨県医学検査学会, 甲府, 2015年3月15日.

論文

1. Ohnishi H, Tortoli E¹, Ramos JP², Kazumi Y³, Yonetani S⁴, Matsushima S, Ohtsuka K, Watanabe T¹(¹San Raffaele Sci Inst, ²Escola Nacional de Saúde Pública, ³Res Inst Tuberculosis, ⁴Dept Clin Lab, Kyorin Univ Hosp): Proposal of reclassification of *Mycobacterium celatum* type2 as *Mycobacterium kyorinense*. Ann Microbiol 64:1879-1882, 2014.
2. Kishiki T¹, Ohnishi H, Masaki T¹, Ohtsuka K, Ohkura Y², Furuse J³, Watanabe T, Sugiyama M¹(¹Dept Surg, Kyorin Univ Sch Med, ²Dept Pathol, Kyorin Univ Sch Med, ³Dept Med Oncol, Kyorin Univ Sch Med): Overexpression of MET is a new predictive marker for anti-EGFR therapy in metastatic colorectal cancer with wild-type KRAS. Cancer Chemother Pharmacol 73:749-757, 2014.
3. Fumoto S¹, Hosoi K¹, Ohnishi H, Hoshina H¹, Yan K¹, Saji H², Oka A¹(¹Dept Pediatr, Kyorin Univ Sch Med, ²HLA Found Lab): Chimerism of buccal membrane cells in a monozygotic dizygotic twin. Pediatrics 133:e1097-e1100, 2014.
4. Kishiki T¹, Ohnishi H, Masaki T¹, Ohtsuka K, Ohkura Y², Furuse J³, Sugiyama M¹, Watanabe T¹(¹Dept Surg, Kyorin Univ Sch Med, ²Dept Pathol, Kyorin Univ Sch Med, ³Dept Med Oncol, Kyorin Univ Sch Med): Impact of genetic profiles on the efficacy of anti-EGFR antibodies in metastatic colorectal cancer with KRAS mutation. Oncol Rep 32:57-64, 2014.
5. Inoue S-1¹, Niikura M¹, Inoue M¹, Mineo S¹, Kawakami Y², Uchida A³, Ohnishi H, Kamiya S¹, Watanabe T, Kobayashi F¹(¹Dept of Infect Dis, Kyorin Univ Sch Med, ²Azabu Univ, ³Yamazaki Gakuen Univ): The protective effect of CD40 ligand-CD40 signalling is limited during the early phase of *Plasmodium* infection. FEBS Lett 588:2147-2153, 2014.
6. Matsushima S, Ohtsuka K, Ohnishi H, Fujiwara M¹, Nakamura H², Morii T³, Kishino T, Goto H⁴, Watanabe T¹(¹Dept Pathol, Kyorin Univ Sch Med, ²Tokyo Inst Technol, ³Dept Orthop Surg, Kyorin Univ Sch Med, ⁴Dept of Respir Med, Kyorin Univ Sch Med): V843I, a lung cancer predisposing EGFR mutation, is responsible for resistance to EGFR tyrosine kinase inhibitors. J Thorac Oncol 9:1377-1384, 2014.
7. Ohtsuka K, Ohnishi H, Nozaki E, Ramos JP¹, Tortoli E², Yonetani S³, Matsushima S, Tateishi Y³, Matsumoto S⁴, Watanabe T¹(¹Escola Nacional de Saúde Pública, ²San Raffaele Sci Inst, ³Dept Clin Lab, Kyorin Univ Hosp, ⁴Niigata Univ Grad Sch Med): Whole-genome sequence of *Mycobacterium kyorinense*. Genome Announcements 2:e01062, 2014.
8. Kishino T, Mori T¹, Kawai S², Mori H³, Nishikawa K³, Hirano K⁴, Matsushima S, Ohtsuka K, Ohnishi H, Watanabe T¹(¹Dept Surg, Kyorin Univ Sch Med, ²Dept Clin Lab, Kyorin Univ Sch Hosp, ³The Third Dept Intern Med, Kyorin Univ Sch Med, ⁴Dept Pathol, Kyorin Univ Sch Med): Carcinosarcoma, an atypical

subset of gallbladder malignancies. J Med Ultrason 41:487-490, 2014.

9. Yonetani S¹, Ohnishi H, Araki K¹, Hiroi M¹, Takagi Y¹, Ichimura S², Watanabe T¹(¹Dept Clin Lab, Kyorin Univ Hosp, ²Dept Orthop Surg, Kyorin Univ Sch Med): A psoas abscess caused by *Propionibacterium propionicum*. J Infect Chemother 20:650-652, 2014.
10. Morii T¹, Ohtsuka K, Ohnishi H, Mochizuki K¹, Yoshiyama A¹, Aoyagi T¹, Hornicek FJ², Ichimura S¹ (¹Dept Orthop Surg, Kyorin Univ Sch Med, ²Cent Sarcoma Connect Tissue Oncol, Massachusetts Gen Hosp): BH3 mimetics inhibit growth of chondrosarcoma—a novel targeted-therapy for candidate models. Anticancer Res 34:6423-6430, 2014.
11. Watanabe K¹, Kishino T, Sano J¹, Ariga T¹, Okuyama S², Mori H², Matsushima S, Ohtsuka K, Ohnishi H, Watanabe T¹(¹Dept Clin Lab, Kyorin Univ Hosp, ²The Third Dept Intern Med, Kyorin Univ Sch Med): Relationship between epicardial adipose tissue thickness and early impairment of left ventricular systolic function in patients with preserved ejection fraction. Heart Vessels (in press).

著書

1. 大西宏明: ウイルス・細菌・真菌・寄生虫同定便覧. 菅原隆編集. 東京, 技術情報協会, 2014. p.200-203.
2. 大西宏明: 採血管は使用順序を守らないとダメ! . MEDICAL TECHNOLOGY 42. 東京, 医歯薬出版, 2014. p.1276-1278.
3. 岸野智則: 第14章 臨床医学総論-7. 感染症/9. 消化器系/11. 麻酔科学/12. 集中治療学/13. 手術医学/15. 臨床免疫学. 臨床工学技士 ポケットレビュー帳. 福長一義編集. 東京, メジカルビュー社, 2015. p.313-316/325-329/333-342/347-351.

総合医療学教室

講演

1. 小林敬明, 正木忠彦, 小嶋幸一郎, 高安甲平, 吉敷智和, 松岡弘芳, 阿部展次, 森俊幸, 杉山政則: 切除困難な肝転移を有する結腸直腸癌に対する術前化学療法—当科での Conversion therapy の現状について—. 第114回日本外科学会定期学術集会, 京都, 2014年4月3日.
2. 佐野彰彦, 西圭史, 山内弘子, 荒木光二, 牧野博, 米谷正太, 井田陽子, 河合伸: MCFG が無効であった *C. intermedia* のカテーテル関連血流感染 (CRBSI) の1例. 第88回日本感染学会, 福岡, 2014年6月18-20日.
3. 西圭史, 河合弘子, 佐野彰彦, 河合伸: 血液培養陽性患者に対する ICT 介入の評価. 第88回日本感染学会, 福岡, 2014年6月18-20日.
4. 山本実: 脂質異常症の管理法. 小金井市高脂血症予防教室, 小金井, 2014年6月20日.
5. 佐野彰彦: 長期の DAP 投与下で MIC が上昇した MRSA 感染症の一例. MRSA フォーラム, 新宿, 2014年7月12日.
6. 菅野恵, 島田正亮, 村松健司, 坪井裕子, 波多江洋介, 岡昌之: 児童養護施設における心理的な実践研究をめぐって(3)—具体的な題材から研究の意義について語る—. 日本心理臨床学会第33回秋季大会, 横浜, 2014年8月23-25日.
7. 島田正亮, 菅野恵, 前川あさ美: 児童養護施設における措置変更に関与する要因の検討—若手職員への面接調査から—. 日本心理臨床学会第33回秋季大会, 横浜, 2014年8月23-25日.
8. Uechi T, Tsukada T, Shibata S, Ikeda T, Yonemoto N, Nonogi

- H, Kimura T, Nagao K, Matsuda T, Nomura H : Ambient Temperature at the Onset of Out-of-Hospital Cardiac Arrest Affects Neurological Outcome After One Month. European Society of Congress 2014(ESC Congress 2014), Spain, August 30th, -September 3rd, 2014.
9. 本間聡起, 加藤清恵, 林潤一, 山本実: 人間ドックにおける非侵襲的動脈硬化検査の利用法—CAVI, ABI, 頸部超音波断層検査の相互関係と危険因子. 第55回人間ドック学会学術大会, 福岡, 2014年9月4日.
10. Kobayashi T, Masaki T, Nozaki E, Sugiyama M, Okura Y: The specific gene expression and Epithelial Mesenchymal Transition (EMT) at the invasive front of colon cancer. 第73回日本癌学会学術総会, 横浜, 2014年9月25-27日.
11. 河合伸: 院内感染—どうして起こる, どうやって防ぐ—. 杏林大学医学部同窓会支部長会講演会, 東京, 2014年10月19日.
12. 本間聡起, 中村亨, 藤村香央里, 伊藤良浩, 前田裕二. 高齢者対象の汎用性の高いシステムを用いた遠隔診療実験—効率の運用法に関する考察. 第17回日本遠隔医療学会学術大会, 長崎, 2014年10月25日.
13. 新井舞, 佐野勇貴, 植地貴弘, 宮内弘子, 塚田雄大, 柴田茂貴, 小林敬明, 松田剛明, 野村英樹: 術後補助化学療養中に腹部大動脈の局所的壁血栓によって発症したと考えられる両側腎梗塞の1例. 第42回日本救急医学会総会・学術集会, 福岡, 2014年10月28-30日.
14. 宮内弘子, 新井舞, 佐野勇貴, 植地貴弘, 柴田茂貴, 小林敬明, 松田剛明, 野村英樹: 左頬部と口唇浮腫にて来院し, クインケ浮腫と診断した1例. 第42回日本救急医学会総会・学術集会, 福岡, 2014年10月28-30日.
15. 佐野勇貴, 植地貴弘, 新井舞, 宮内弘子, 塚田雄大, 柴田茂貴, 小林敬明, 松田剛明, 野村英樹: Wells4ルール+D ダイマ—定量が有効であった肺塞栓症の1例. 第42回日本救急医学会総会・学術集会, 福岡, 2014年10月28-30日.
16. 荒川雅崇, 新井舞, 植地貴弘, 佐野勇貴, 宮内弘子, 塚田雄大, 柴田茂貴, 小林敬明, 松田剛明, 野村英樹: 心窩部痛を主訴に来院し, 急性心膜炎と診断された1例. 第42回日本救急医学会総会・学術集会, 福岡, 2014年10月28-30日.
17. 須田秀太郎, 植地貴弘, 新井舞, 佐野勇貴, 宮内弘子, 塚田雄大, 柴田茂貴, 小林敬明, 松田剛明, 野村英樹: 発熱・尿閉を主訴に来院し, 脊髄炎尿閉症候群と診断した若年男性の1例. 第42回日本救急医学会総会・学術集会, 福岡, 2014年10月28-30日.
18. 澤井梓, 植地貴弘, 新井舞, 佐野勇貴, 宮内弘子, 塚田雄大, 柴田茂貴, 小林敬明, 松田剛明, 野村英樹: 総胆管結石性胆管炎に対する ERCP/EST 後に急性胆嚢炎を合併した1例. 日本救急医学会総会・学術集会, 福岡, 2014年10月28-30日.
19. 佐藤俊, 植地貴弘, 新井舞, 佐野勇貴, 宮内弘子, 塚田雄大, 柴田茂貴, 小林敬明, 松田剛明, 野村英樹: 感染と清涼飲料水の多飲を契機とした糖尿病ケトアシドーシスの1例. 日本救急医学会総会・学術集会, 福岡, 2014年10月28-30日.
20. 下元雄太郎, 植地貴弘, 新井舞, 佐野勇貴, 宮内弘子, 塚田雄大, 柴田茂貴, 小林敬明, 松田剛明, 野村英樹: 診断に難渋した複数の要因による低 Na 血症の女性の1例. 日本救急医学会総会・学術集会, 福岡, 2014年10月28-30日.
21. 高山真梨子, 植地貴弘, 新井舞, 佐野勇貴, 宮内弘子, 塚田雄大, 柴田茂貴, 小林敬明, 松田剛明, 野村英樹: 診断に苦慮した卵巣腫瘍の1例. 日本救急医学会総会・学術集会, 福岡, 2014年10月28-30日.
22. 神尾幸見, 新井舞, 植地貴弘, 佐野勇貴, 宮内弘子, 塚田雄大, 柴田茂貴, 小林敬明, 松田剛明, 野村英樹: 脾臓摘出後の肺炎球菌性髄膜炎の1例. 日本救急医学会総会・学術集会, 福岡, 2014年10月28-30日.
23. 本間聡起: 脂質異常症と生活習慣病—血清脂質の評価は生活環境も映し出す鏡になる?—. 生活習慣病予防フォーラム—肥満・脂質異常症編—, 立川, 2014年10月30日.
24. Uechi T, Tsukada T, Shibata S, Tokutsu T, Miyauchi H, Kobayashi T, Ikeda T, Yonemoto N, Nonogi H, Kimura T, Nagao K, Matsuda T, Nomura H: Ambient Temperature at the Onset of Out - of - Hospital Cardiac Arrest Affects Neurological Outcome in Ventricular Tachycardia and Ventricular Fibrillation Patients. The 31th Congress of the Pan - Pacific Surgical Association Japan Chapter (The 31th PPSA), Taiwan, October 31st, -November 2nd, 2014.
25. Arai M, Sano Y, Uechi T, Tokutsu T, Shibata S, Miyauchi H, Kobayashi T, Matsuda T, Nomura H: Bilateral Renal Infarction During Adjuvant Chemotherapy With Cisplatin and Etoposide. The 31th Congress of the Pan-Pacific Surgical Association Japan Chapter (The 31th PPSA), Taiwan, October 31st, -November 2nd, 2014.
26. Sano Y, Kobayashi T, Arai M, Uechi T, Tokutsu T, Miyauchi H, Nomura H, Matsuda T, Masaki T, Sugiyama M: A Case of Hemoptysis and Acute Respiratory Distress Syndrome (ARDS) After FOLFOX4 Plus Bevacizumab Treatment. The 31th Congress of the Pan - Pacific Surgical Association Japan Chapter (The 31th PPSA), Taiwan, October 31st, -November 2nd, 2014.
27. Kobayashi T, Masaki T, Nozaki E, Sugiyama M, Nagashima F, Furuse J, Okura Y: Epithelial-Mesenchymal Transition and the specific gene expression at the invasive front of colon cancer. The 31th Congress of the Pan-Pacific Surgical Association Japan Chapter (The 31th PPSA), Taiwan, November 1st-2nd, 2014.
28. 河合伸: 高齢者肺炎の特徴と対処法. 杏林大学公開講演会, 東京, 2014年11月1日.
29. 本間聡起, 今村晴彦, 中村亨, 藤村香央里, 伊藤良浩, 前田裕二, 金子郁容: 健康指標のテレモニタリングに伴う個別化指導法に関する比較研究—テレビ電話指導法と文書レポート指導法の効率性. 第34回日本医療情報学会連合大会, 千葉, 2014年11月7日.
30. 本間聡起: 遠隔診療実習(1)(2). 特定非営利活動法人 日本遠隔医療協会 平成26年度厚生労働省遠隔医療従事者研修事業 遠隔医療従事者研修, 東京, 2014年11月15日.
31. 本間聡起: モニタリング実習(1)(2). 特定非営利活動法人 日本遠隔医療協会 平成26年度厚生労働省遠隔医療従事者研修事業 遠隔医療従事者研修, 東京, 2014年11月16日.
32. 本間聡起: モニタリングの基礎(1), 循環器. モニタリング実習(1)(2). 特定非営利活動法人 日本遠隔医療協会 平成26年度厚生労働省遠隔医療従事者研修事業 遠隔医療従事者研修, 大阪, 2014年11月29日.
33. 星野崇啓, 石川智, 吉野りえ: 埼玉性的虐待研究会の5年間のあゆみ—児童福祉施設の性的問題への対応—. “人間と性”教育研究協議会第29回全国秋季セミナー, 東京, 2014年12月3日.
34. 本間聡起: 形態学的観点からみた動脈硬化の進行. 第6回近畿血管バイオメカニクスセミナー 関西CVT連絡会, 大阪, 2014

年12月6日。

35. 菅野恵, 島田正亮, 元永拓郎: 学生相談における精神科受診ケースのフォローアップ面接—予備校生と大学生の比較検討を通して—。日本学校メンタルヘルス学会第18回大会, 神戸, 2015年1月10-11日。
36. 山本実: 脂質異常症の管理法。小金井市高脂血症予防教室, 小金井, 2015年1月23日。
37. 宮内弘子, 小林敬明, 植地貴弘, 新井舞, 佐野勇貴, 得津敬之, 柴田茂貴, 松田剛明: アンギオテンシン阻害薬による薬物誘発血管浮腫の一例。第64回日本救急医学会関東地方会学術集会, 横浜, 2015年2月7日。
38. 新井舞, 佐野勇貴, 植地貴弘, 得津敬之, 宮内弘子, 小林敬明, 松田剛明, 野村英樹: 初期診療現場における壊死性筋膜炎の早期診断: 壊死性筋膜炎と診断した3例の報告及び文献的考察。第64回日本救急医学会関東地方会学術集会, 横浜, 2015年2月7日。
39. 山岸夢希, 新井舞, 植地貴弘, 得津敬之, 柴田茂貴, 宮内弘子, 小林敬明, 松田敬明, 野村英樹: 初期診断に苦慮した壊死性軟部組織感染症の一例。第64回日本救急医学会関東地方会学術集会, 横浜, 2015年2月7日。
40. 宮本彩子, 植地貴弘, 得津敬之, 新井舞, 佐野勇貴, 宮内弘子, 小林敬明, 野村英樹, 松田剛明: Lemmel 症候群に伴う急性胆管炎の男性の1例。第64回日本救急医学会関東地方会学術集会, 横浜, 2015年2月7日。
41. Homma S, Hayashi J, Yamamoto M: Modified Progression of Arterial Stiffness with Aging by Atherosclerosis Risk Factors. The 2015 Ageing Summit, Great Britain, February 10th, 2015.
42. 小林敬明, 正木忠彦, 杉山正則: 結腸直腸癌の治療に関して基礎と臨床。第一回大腸癌スキルアップセミナー, 東京, 2015年2月12日。
43. 本間聡起, 中村亨, 藤村香央里, 伊藤良浩, 前田裕二: 高齢慢性疾患患者に対する遠隔診察の経験からみた遠隔聴診の活用。JTAA Spring Conference 2015, 東京, 2015年2月21日。
44. 下島裕美, 石川智, 島田正亮: 時間的展望から死について考える。日本発達心理学会第26回大会, 東京, 2015年3月20-22日。
45. 亀崎路子, 島田正亮: 養護教諭とスクールカウンセラーの連携に関する文献検討—年代順による特徴—。日本学校健康相談学会第11回学術集会, 松戸, 2015年3月21-22日。
46. 下島裕美, 石川智, 島田正亮: 時間的展望から死について考える。日本発達心理学会第26回大会, 東京, 2015年3月20-22日。
47. 河合伸: HIV 診療の現状—HIV 感染症とどうかかわるのか—。立川保健所主催 26年度 HIV/AIDS 講演会, 東京, 2015年3月24日。
48. 本間聡起: 在宅患者対象の生体センサ・モニタリングの有用性—福島県と東京を結んだ遠隔診療実験からみた検討。日本医学治療学会第31回学術大会, 広島, 2015年3月29日。
49. 竜崎崇和, 中元秀友, 本間聡起: 携帯電話網を利用した生活習慣病管理モニタ telemedicine システム(i-手帳)の開発研究。日本医学治療学会第31回学術大会, 広島, 2015年3月29日。
50. Antibiotics 67:223-232, 2014.
2. Miyoshi J¹, Hisamatsu T¹, Matsuoka K¹, Naganuma M¹, Maruyama Y¹, Yoneno K, Mori K¹, Kiyohara H¹, Nanki K¹, Okamoto S, Yajima T¹, Iwao Y¹, Ogata H¹, Hibi T¹, Kanai T¹(¹Keio University): Early intervention with adalimumab may contribute to favorable clinical efficacy in patients with Crohn's disease. Digestion 90(2):130-136, 2014.
3. Yoneno K¹, Hisamatsu T¹, Matsuoka K¹, Okamoto S, Takayama T¹, Ichikawa R¹, Sujino T¹, Miyoshi J¹, Takabayashi K¹, Mikami Y¹, Mizuno S¹, Wada Y¹, Yajima T¹, Naganuma M¹, Inoue N¹, Iwao Y¹, Ogata H¹, Hasegawa H¹, Kitagawa Y¹, Hibi T¹, Kanai T¹(¹Keio University): Risk and management of intra - abdominal abscess in Crohn's disease treated with infliximab. Digestion 89(3):201-208, 2014.
4. 秋田貴之¹, 尾坂真¹, 大森嘉彦², 菅間博², 大倉康男², 松本吉史³, 高山信之⁴, 河合伸, 片野晴隆⁵, 望月眞²(¹杏林大・医, ²杏林大・医・病理学, ³杏林大・医・耳鼻咽喉科, ⁴杏林大・医・血液内科, ⁵国立感染症研究所): HIV リンパ節炎と HIV 顎下腺炎を伴った顎下腺原発 Diffuse large B-cell lymphoma の一例。日本病理学会誌 103(1):406, 2014.
5. 河合伸: 各種抗菌薬の特徴と選択のポイント—マクロライド—。臨床と研究 92:21-25, 2014.
6. 佐野彰彦, 河合伸: 特性から導く, 外来診療における抗菌薬の役割 β-ラクタム系抗菌薬 ペニシリン系抗菌薬 セフェム系抗菌薬 カルバペネム系抗菌薬。感染と抗菌薬 17(2):110-116, 2014.
7. Sakuraba A¹, Okamoto S, Matsuoka K¹, Sato T¹, Naganuma M¹, Hisamatsu T¹, wao Y¹, Ogata H¹, Kanai T¹, Hibi T¹(¹Keio University): Combination therapy with infliximab and thiopurine compared to infliximab monotherapy in maintaining remission of postoperative Crohn's disease. Digestion 91(3):233-238, 2015.
8. Wada Y¹, Hisamatsu T¹, Naganuma M¹, Matsuoka K¹, Okamoto S, Inoue N¹, Yajima T¹, Kouyama K¹, Iwao Y¹, Ogata H¹, Hibi T², Abe T¹, Kanai T¹(¹Keio University, ²Kitasato University): Risk factors for decreased bone mineral density in inflammatory bowel disease: A cross-sectional study. Clin Nutr. doi:10.1016/j.clnu.2015.01.003. (Epub ahead of print 2015).
9. 西圭史¹, 中村貴枝子¹, 高橋陽子¹, 種岡貴子¹, 佐野彰彦, 小林治², 河合伸, 池田俊也³, 操華子⁴, 山田治美³(¹杏林大・病院・医療安全管理部, ²杏林大・保・看護学科, ³国際医療福祉大学, ⁴宮城大学): カテーテル関連血流感染症に対する抗菌薬適正使用がその後の菌血症再発に及ぼす影響。環境感染誌 30(1):7-13, 2015.
10. 本間聡起, 中村亨, 藤村香央里, 伊藤良浩, 前田裕二: 高齢者対象の汎用性の高いシステムを用いた遠隔診療実験—効率性の運用法に関する考察。遠隔医療学会誌 10(2):205-208, 2014.
11. 本間聡起, 今村晴彦, 中村亨, 藤村香央里, 伊藤良浩, 前田裕二, 金子郁容: 健康指標のテレモニタリングに伴う個別化指導法に関する比較研究—テレビ電話指導法と文書レポート指導法の効率性。医療情報学 34(Suppl.):484-487, 2014.
12. Homma S, Kato K, Hayashi J, Yamamoto M: Negative associations between arterial stiffness parameter evaluated by cardio-ankle vascular index and serum low-density lipoprotein cholesterol concentration in early-stage atherosclerosis. Angiology 66(2):143-149, 2015.
13. 下島裕美¹, 島田正亮(¹杏林大・保): 生徒指導における不足情報の認識について—教職実践演習におけるメタ認知能力を促

論文

1. Yamamoto Y, Ohmichi M, Watanabe A, Niki Y, Aoki N, Kawai S, Chida K, Mikasa K, Seki M, Ishida T, Kadota J, Matsuse H, Fujita J, Kohno S: A study on the management of acute respiratory tract infection in adult. The Japanese journal of

す試みー. 杏林教職課程年報 1:45-52,2015.

14. Kobayashi T, Masaki T, Takayasu K, Kishiki T, Kojima K, Mastuoka H, Sugiyama M, Kasuga A, Nagashima F, Furuse J: Efficacy of anti - EGFR antibody monotherapy for patients with colorectal cancer with the *Kras G13D* mutation: report of four cases. Hepato-Gastroenterology.(in press).

著書

1. 河合伸:敗血症. JAID/JSC 感染症治療ガイド 2014. JAID/JSC 感染症治療ガイドライン作成委員会編集. 東京, ライフ・サイエンス出版, 2014. p.10-15.
2. 河合伸:感染症. カレント 人体の構造と機能及び疾病の成り立ち2. 志村二三夫, 石田均編集. 東京, 建帛社, 2015. p.272-276.

リハビリテーション医学教室

講演

1. 山田深:宇宙と脳とリハビリテーション. 第20回道北脳神経懇話会, 旭川, 2014年4月10日.
2. 林光俊, 安部学, 上園紗映, 奥出聡, 平川淳一, 川上純範, 岡島康友:精神科病院における身体リハビリテーション:第2報〜高所飛び降りによる多発損傷例を主として〜. 第51回日本リハビリテーション医学会学術集会, 名古屋, 2014年6月5-7日.
3. 藤澤祐基, 岡島康友, 山田深, 橋立博幸, 潮見泰蔵:片麻痺の麻痺手書字における手の遠位・近位運動の分離性とパフォーマンス 小脳性運動失調症の3次元書字運動解析. 第51回日本リハビリテーション医学会学術集会, 名古屋, 2014年6月5-7日.
4. 大森まいこ, 矢萩まどか, 長谷公隆, 山田深, 杉山瑠, 楠永薫, 大高洋平, 辻哲也, 里宇明元:訪問リハビリテーションの実施状況の報告(第一報) 目標達成についての検討. 第51回日本リハビリテーション医学会学術集会, 名古屋, 2014年6月5-7日.
5. 大本将之, 松瀬 博夫, 名護健, 篠崎夏子, 田中順子, 山田深, 大島博, 志波直人:ハイブリッドトレーニングシステムを用いたエルゴメータ運動の長期訓練効果. 第51回日本リハビリテーション医学会学術集会, 名古屋, 2014年6月5-7日.
6. 松瀬博夫, 名護健, 田中順子, 篠崎夏子, 大本将之, 山田深, 大島博, 志波直人:ハイブリッドトレーニングシステムを用いたエルゴメータの呼吸ガス分析. 第51回日本リハビリテーション医学会学術集会, 名古屋, 2014年6月5-7日.
7. 正木瑤子, 山田深, 仁科彩子, 塩川芳昭, 岡島康友:90歳以上の脳卒中患者における急性期リハビリテーションの帰結. 第51回日本リハビリテーション医学会学術集会, 名古屋, 2014年6月5-7日.
8. 高橋宣成, 高橋修, 西川順治:橈骨神経伝導検査 示指伸筋で記録される複合筋活動電位の振幅に関する検討. 第51回日本リハビリテーション医学会学術集会, 名古屋, 2014年6月5-7日.
9. 高橋秀寿:脳性麻痺の装具療法. 第51回日本リハビリテーション医学会学術集会, 名古屋, 平成26年6月7日.
10. 石田幸平, 森光代, 山田深, 岡島康友:急性期入院の重症熱傷患者の ADL. 第16回世界作業療法連盟大会・第48回日本作業療法学会, 横浜, 2014年6月18-21日.
11. 森光代, 石田幸平, 山田深, 岡島康友:上肢熱傷急性期の OT の視点〜ADL が機能障害を改善する〜. 第16回世界作業療法連盟大会・第48回日本作業療法学会, 横浜, 2014年6月18-21日.
12. Mori M, Ishita K, Yamada S, Okajima Y: Acute phase occupational therapy for patients with burn injury in upper extremities-Do ADLs improve impairment? -. The 16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists, Yokohama, June 18th-21st, 2014.
13. Ishita K, Mori M, Yamada S, Okajima Y: Physical Disabilities in Severe Burn Injuries. The 16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists, Yokohama, June 18th-21st, 2014.
14. 岡島康友:ボツリヌス毒素を用いた痙攣治療の実践. 痙攣に対するボツリヌス療法・ハンズオンセミナー, 東京, 2014年6月19日.
15. 山田深:宇宙飛行とリハビリテーション〜人類の挑戦〜. 七栗リハビリテーションセミナー, 津, 2014年7月1日.
16. 山田深:宇宙飛行士の健康管理から学ぶ運動とリハビリテーション. 杏林大学市民公開講演会, 三鷹, 2014年7月5日.
17. 岡島康友:機能的自立度評価法の歴史的背景. 第13回看護師・コメディカルのための FIM 講習会【基礎編】, 三鷹, 2014年7月13日.
18. 山田深: FIM の歴史的背景・ダイジェスト. 第4回 看護師・コメディカルのための FIM 講習会【応用編】, 三鷹, 2014年7月13日.
19. 高橋秀寿:脳卒中患者の経路抑制装具療法について. 埼玉医科大学国際医療センター脳血管内治療地域勉強会, 川越, 2014年8月21日.
20. 高橋秀寿:脳卒中急性期リハビリテーションの重要性について. 第12回日本臨床医療福祉学会 シンポジウム“脳卒中における地域連携の視点”, 川越, 2014年8月29日.
21. 林良幸, 山田深, 岡島康友:内視鏡下のバイオフィードバックにより経口摂取が可能になった口腔・咽頭癌術後の1例. 第20回日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会, 東京, 2014年9月6-7日.
22. 寺田昌弘, 須藤正道, 大平宇志, 関真也, 高橋理佳, 東端晃, 馬嶋秀行, 石岡憲昭, 山田深, 大島博, 向井千秋:長期宇宙滞在による毛髪での遺伝子変化. 第131回成医会総会, 東京, 2014年10月9-10日.
23. Hirano Y, Nitta O, Takahashi H, Nishio D, Minakawa T, Kigawa H: Factor affecting walking ability for severe hemiplegic patients using a logistic regression analysis in a convalescent rehabilitation ward. The 9th World Stroke Congress, Turkey, October 22nd-25th, 2014.
24. Minakawa T, Nishio D, Hirano Y, Nitta O, Takahashi H, Kigawa H: Factor affecting the using short leg brace of hemiplegic patients after discharge. The 9th World Stroke Congress, Turkey, October 22nd-25th, 2014.
25. Nishio D, Hirano Y, Takahashi H, Kigawa H: Factors influencing burden on caregivers of stroke patients with hemiplegia at home. The 9th World Stroke Congress, Turkey, October 22nd-25th, 2014.
26. Abe S, Takahashi H, Kitayama A, Takazawa C, Hara M, Omata C, Fujiwara A, Tamura T, Kigawa H: Comparison of the staple food of Japanese (rice, bread and noodles) for stroke patients with dysphagia in convalescence rehabilitation wards by video fluorography. The 9th World Stroke Congress, Turkey, October 22nd-25th, 2014.
27. 山田深:宇宙医学とリハビリテーション. 第4回南那珂リハビリテーション懇話会, 日南, 2014年10月25日.
28. 高橋秀寿:脳卒中リハビリの最新知識. 第5回埼玉医科大学国

際医療センター市民公開講座“脳卒中に負けないパートⅡ”，日高，2014年11月8日。

29. 山田深:急性期リハビリテーションの現状と展望 脳卒中の急性期リハビリテーション. リハビリテーション科専門医会学術集会, 鹿児島, 2014年11月16日.
30. 高橋宣成, 西川順治, 牛島良介, 高橋修:橈骨神経伝導検査「仮の最大上刺激」の提唱. 第44回日本臨床神経生理学会学術大会, 福岡, 2014年11月19-21日.
31. 相羽達弥, 山田深, 石田暁, 大島博, 向井千秋:国際宇宙ステーションにおける軌道上診断システムの機能検証. 第60回宇宙航空環境医学会, 東京, 2014年11月28-29日.
32. 神山慶人, 金子祐樹, 川島紫乃, 山田深, 大島博:運動生理的対策の現状と今後の課題. 第60回宇宙航空環境医学会, 東京, 2014年11月28-29日.
33. 山田深:重力と人間の活動から廃用とリハビリテーションを考える. 第2回西多摩リハビリテーション研修会, 福生, 2014年11月30日.
34. 岡島康友:機能的自立度評価法の歴史的背景. 第14回 看護師・コメディカルのための FIM 講習会【基礎編】, 三鷹, 2014年12月14日.
35. 山田深:FIMの歴史的背景・ダイジェスト. 第5回 看護師・コメディカルのためのFIM講習会【応用編】, 三鷹, 2014年12月14日.
36. 高橋秀寿:脳卒中片麻痺患者に対する下肢痙縮抑制足底板の標準化と効果の検証. 第59回日本リハビリテーション医学会関東地方会 専門医・臨床認定医生涯教育研修会, さいたま, 2015年1月10日.
37. 岡島康友:関節リウマチのリハビリテーションの考え方と装具の意義【特別講演】. 第16回神奈川リウマチ・リハケア研究会, 横浜, 2015年1月17日.
38. 山田深:ICF コアセット日本語版翻訳チームリーダーの立場から. 第4回 ICF シンポジウム, 東京, 2015年3月8日.
39. 高橋秀寿:運動・呼吸器リハビリテーション科からの報告. 第66回埼玉医科大学国際医療センター地域医療連携懇話会, 日高, 2015年3月18日.
40. 林良幸, 山田深, 鳥居正剛, 岡島康友, 平野照之, 塩川芳昭:頸動脈内膜剥離術後の迷走および舌下神経麻痺による嚥下障害を呈した1例. 第40回日本脳卒中学会総会, 広島, 2015年3月26-29日.
41. 佐藤敦子, 山田深, 藤澤祐基, 岡島康友, 平野照之, 塩川芳昭:高齢急性期脳卒中患者の血清アルブミン値と Functional Independence Measure (FIM)の関係. 第40回日本脳卒中学会総会, 広島, 2015年3月26-29日.
42. 正木瑤子, 山田深, 仁科彩子, 岡島康友, 鳥居正剛, 平野照之, 塩川芳昭:90歳以上の急性期脳卒中患者における ADL に影響を与える因子の検討. 第40回日本脳卒中学会総会, 広島, 2015年3月26-29日.
43. 川原奈津子, 山田深, 蛭沢志織, 中村みゆき, 遠藤沙耶香, 林良幸, 阿部光世, 平野照之, 塩川芳昭:脳卒中急性期患者に対する安全な経口摂取へ向けた看護介入. 第40回日本脳卒中学会総会, 広島, 2015年3月26-29日.
44. 永田真佑美, 山田深, 中野真由美, 根本圭子, 小林夏紀, 加藤雅江, 平野照之, 塩川芳昭:高次脳機能障害を有する脳卒中患者に対する急性期からの支援. 第40回日本脳卒中学会総会, 広島, 2015年3月26-29日.
45. 岡田啓, 脊山英徳, 鳥居正剛, 岡村耕一, 丸山啓介, 山田深, 傳法倫久, 塩川芳昭:CEA 周術期における INVOS のパターン解析. 第40回日本脳卒中学会総会, 広島, 2015年3月26-29

日.

論文

1. 林光俊¹, 安部学², 上園紗映³, 奥出聡³, 平川淳一³, 川上純範, 岡島康友(¹杏林大・医・整形外科, ²目白第2病院, ³平川病院):精神科病院における身体リハビリテーション～高所飛び降りによる多発損傷例を主として～. 臨床リハビリテーション 23: 1222-1229, 2014.
2. 仁科彩子, 山田深:脳卒中ユニットにおける集中治療とリハビリテーション. 【特集 急性期病院における脳卒中リハビリテーション】. 臨床リハ23(5):430-435, 2014.
3. 正木瑤子, 岡島康友:脳卒中ユニットにおけるリハビリテーション. Modern Physician 34(7):749-753, 2014.
4. 山田深:ストロークケアユニット. 【特集 総合病院におけるリハビリテーション急性期を中心に】. 総合リハ42(10):937-942, 2014.
5. Jin JS^{1, 2}, Touyama M², Yamada S, Yamazaki T³, Benno Y² (¹Chonbuk National University, ²RIKEN, ³Teikyo University): Alteration of a Human Intestinal Microbiota under Extreme Life Environment in the Antarctica. Biol Pharm Bull. 37(12):1899-1906, 2014.
6. 正木瑤子, 山田深:超高齢脳卒中患者における急性期リハビリテーション. 【特集 超高齢社会の脳卒中リハビリテーション】. 臨床リハ24(3):247-254, 2015.
7. 高橋秀寿:急性期のシステム. 脳卒中リハビリテーションのエビデンス. 総合リハ43(3):185-191, 2015.
8. 岡島康友:脳卒中後の痙縮治療における医療介護連携の必要性. 杏林医学会誌46:53-56, 2015.

著書

1. Bickenbach JE, Rauch A, Stucki G, Cieza A(著), 日本リハビリテーション医学会(訳), 山田深(翻訳チームリーダー):ICF コアセット 臨床実践のためのマニュアル. 東京, 医歯薬出版, 2015.

その他

1. 山田深:飛行士リハビリに興味 県南の療法師ら懇話会. 宮崎日日新聞, 2014年11月4日(新聞掲載).
2. 高橋宣成:典型事例から学ぶ! 摂食嚥下のリハビリテーション. 東京, 東京都福祉保健局医療政策部医療政策課, 2014.

「リハビリテーション室」

講演

1. 須崎由香, 炭谷由計, 藤澤祐基, 長谷川純子, 犬飼浩二, 岡島康友, 石田均:脈拍を指標にした運動療法の効果～携帯型脈拍計を使用した慢性運動療法～. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
2. 森光代, 石田幸平, 山田深, 岡島康友:上肢熱傷急性期の OT の視点～ADLが機能障害を改善する～. 第48回日本作業療法学会, 横浜, 2014年6月18-21日.
3. 石田幸平, 森光代, 山田深, 岡島康友:急性期入院の重症熱傷患者の ADL. 第48回日本作業療法学会, 横浜, 2014年6月18-21日.
4. Mori M, Ishita K, Yamada S, Okajima Y: Acute phase occupational therapy for patients with burn injury in upper extremities-Do ADLs improve impairment? -. The 16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists, Yokohama, June 18th-21st, 2014.

5. Ishita K, Mori M, Yamada S, Okajima Y: Physical Disabilities in Severe Burn Injuries. The 16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists, Yokohama, June 18th-21st, 2014.
6. 佐藤敦子, 石田幸平, 間藤翔悟: 脳卒中リハビリテーション 急性期から回復期そして維持期へ. 平成26年度 クリティカルケア看護公開講座【脳卒中編】, 東京, 2014年7月12日.
7. 境哲生: 各腫瘍患者におけるリハビリテーションの関わりについて. 第22回日本ホスピス・在宅ケア研究会, 神戸, 2014年7月12-13日.
8. 石田幸平: 第13回看護師・コメディカルのための FIM 講習会【基礎編】, 三鷹, 2014年7月13日.
9. 森光代: 第4回看護師・コメディカルのための FIM 講習会【応用編】, 三鷹, 2014年7月13日.
10. 田中耕史, 鈴木和基, 横山さち, 西田悠一郎, 合田あゆみ, 岡島康友, 吉野秀朗, 佐藤徹: 肺高血圧患者における外来運動療法の有効性. 第20回日本心臓リハビリテーション学会学術集会, 京都, 2014年7月19-20日.
11. 鈴木和基, 合田あゆみ, 西田悠一郎, 柳澤亮爾, 岡島康友, 吉野秀朗, 佐藤徹: 肺高血圧症患者に対する運動中の肺動脈圧上昇に関する検討. 第20回日本心臓リハビリテーション学会学術集会, 京都, 2014年7月19-20日.
12. 林良幸, 山田深, 岡島康友: 内視鏡下のバイオフィードバックにより経口摂取が可能になった口腔・咽頭癌術後の1例. 第20回日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会, 東京, 2014年9月6-7日.
13. 神山裕司, 荏澤融司, 渡辺佳子, 岡島康友: 腫瘍による運動発達遅滞に対して術前化学療法時から理学療法介入を行った肝芽腫の1例. 第25 回日本小児外科 QOL 研究会, 東京, 2014年10月18日.
14. 西田悠一郎, 合田あゆみ, 佐藤徹: 肺高血圧症の運動耐容能評価とリハビリテーション. PAHを考えるフォーラム2014, 名古屋, 2014年11月22日.
15. 石田幸平: 第14回看護師・コメディカルのための FIM 講習会【基礎編】, 三鷹, 2014年12月14日.
16. 森光代: 第5回看護師・コメディカルのための FIM 講習会【応用編】, 三鷹, 2014年12月14日.
17. 佐藤敦子, 林良幸: 脳卒中リハビリテーション(急性期～回復期へ). 第20回日本脳神経外科救急学会 クリティカルケア看護公開講座, 東京, 2015年1月30-31日.
18. 相原さより, 竹田紘崇: 介護が必要とならないために～ロコモからの最新の運動器疾患外科療法～. 三鷹市老人クラブ連合会共済講演会, 東京, 2015年2月20日.
19. 竹田紘崇: 身体感覚について. 平成26年度 育児支援サークル ぴあんず, 東京, 2015年2月28日.
20. 穂村美津子: こどもの嚥下と摂食～飲み込むことと, ご飯を食べること～. 平成26年度 育児支援サークル ぴあんず, 東京, 2015年2月28日.
21. 林良幸, 山田深, 鳥居正剛, 岡島康友, 平野照之, 塩川芳昭: 頸動脈内膜剥離術後の迷走および舌下神経麻痺による嚥下障害を呈した1例. 第40回日本脳卒中学会総会, 広島, 2015年3月26-29日.
22. 佐藤敦子, 山田深, 藤澤祐基, 岡島康友, 平野照之, 塩川芳昭: 高齢急性期脳卒中患者の血清アルブミン値と Functional Independence Measure(FIM)の関係. 第40回日本脳卒中学会総会, 広島, 2015年3月26-29日.

その他

1. 石田幸平: 熱傷専門施設におけるリハビリテーション～重症熱傷に対するリハビリテーションの早期介入と継続の必要性～. 第40回日本熱傷学会総会・学術集会学術奨励賞, 埼玉, 2014年6月5日.

脳卒中医学教室

講演

学会発表等

1. Hirano T, Aso Y, Himeno T, Amano Y, Ishibashi M, Chikawazawa R, Yabuuchi K, Takemaru M, Kimura N, Matsubara E: Surveillance of initial therapy for patients with mild stroke admitted within 4.5 hours of onset. 9th World Stroke Congress, Turkey, October, 22nd-25th, 2014.
2. 平野照之: 救急医療における脳卒中診療の位置付け 内科医の立場から. 第20回日本脳神経外科救急学会, 東京, 2015年1月30日.
3. 平野照之: 脳卒中急性期の実践的 MRI. 第40回日本脳卒中学会総会, 広島, 2015年3月27日.
4. 平野照之: CKD 患者への rt-PA 静注療法. 第40回日本脳卒中学会総会, 広島, 2015年3月27日.

講演等

1. 平野照之: 頭痛の imaging. Headache Master School Japan (HMSJ) -Tokyo-, 東京, 2014年9月7日.
2. 平野照之: NOAC 時代の脳梗塞連携医療. 第7回福岡ストローク・ラボラトリー・フォーラム, 福岡, 2014年9月11日.
3. 平野照之: 脳梗塞再発予防における DTI の意義. 飯塚医師会学術講演会, 飯塚, 2014年9月12日.
4. 平野照之: 脳梗塞の血圧管理 The lower, “really” the better?. 第10回高知高血圧と臓器障害研究会, 高知, 2014年9月19日.
5. 平野照之: 再発予防のための抗血小板療法 update. Tama Expert Meeting ～脳卒中治療最前線～, 東京, 2014年9月24日.
6. 平野照之: 心原性脳塞栓症のリスク回避. 大分県北部 Network Meeting, 中津, 2014年9月30日.
7. 平野照之: シロスタグロールを活かした脳梗塞治療. 慈恵医科大学学術講演会, 東京, 2014年10月2日.
8. 平野照之: 心原性脳塞栓症: 予防と治療の最新動向. 高知県 Care AF 講演会, 高知, 2014年10月17日.
9. 平野照之: 心房細動に伴う脳卒中の予防～抗凝固療法の均てん化を目指して～. Kyoto Stroke Summit, 京都, 2014年11月1日.
10. 平野照之: NOAC 時代の医療連携, 見逃してはいけない脳卒中の兆候. エリキュースインターネット座談会, 東京, 2014年11月4日.
11. 平野照之: 脳梗塞再発予防における DTI の意義. 脳卒中連携 Forum, 福岡, 2014年11月6日.
12. 平野照之: 脳梗塞再発予防における DTI の意義. 第6回北海道「脳と循環」講演会, 札幌, 2014年11月8日.
13. 平野照之: 脳梗塞急性期の3本の矢. 第4回 Neurology セミナー, 大分, 2014年11月12日.
14. 平野照之: 脳卒中専門医はどう NOAC を使い分ける?. 府中市薬剤師会定例研修会, 府中, 2014年11月19日.
15. 平野照之: 心房細動に伴う脳卒中の予防～抗凝固療法の均てん化を目指して～. エリキュース二次予防セミナー in Gifu, 岐阜, 2014年11月20日.
16. 平野照之: 心原性脳塞栓症の再発予防～治療の均てん化を目

指して～. 第32回日本神経治療学会総会, 東京, 2014年11月21日.

17. 平野照之: 脳梗塞再発予防における DTI の意義. 北多摩南部地区抗凝固療法 Network Meeting, 武蔵野, 2014年11月25日.
18. 平野照之: 心原性脳塞栓症のリスク回避. 大分県南地区 Network Meeting, 佐伯, 2014年11月26日.
19. 平野照之: 脳梗塞再発予防における DTI の意義. 京都地区第4回 Network Meeting, 京都, 2014年11月29日.
20. 平野照之: 心房細動に伴う脳卒中の予防～抗凝固療法の均てん化を目指して～. 第16回鹿児島脳卒中地域連携ネットワーク研究会, 鹿児島, 2014年12月8日.
21. 平野照之: 脳梗塞再発予防における DTI の意義. Clinical Expert Meeting, 盛岡, 2015年1月8日.
22. 平野照之: 脳卒中専門医から見たエドキサバンの位置付け. Stroke Conference 学術講演会, 熊本, 2015年1月9日.
23. 平野照之: 脳梗塞の診断と治療 最近の話題. 武田薬品社外講師勉強会, 武蔵野, 2015年1月14日.
24. 平野照之: 脳梗塞のための抗血小板療法 update. Round Table Discussion ～ATIS エキスパート座談会～, 横浜, 2015年1月17日.
25. 平野照之: 心原性脳塞栓症の最新治療. Mitaka Embolism Seminar, 三鷹, 2015年1月20日.
26. 平野照之: 脳卒中の基礎知識, 全身病としての脳卒中. 第20回日本脳神経外科救急学会クリティカルケア看護公開講座, 東京, 2015年1月31日.
27. 平野照之: 治療選択に役立つ脳卒中画像診断. 第49回横浜内科学会神経研究会, 横浜, 2015年2月17日.
28. 平野照之: 日本人の抗血栓療法を考える. 第4回京滋 Stroke Neurology 研究会, 京都, 2015年2月20日.
29. 平野照之: 日本人の抗血栓療法を考える～リスク・ベネフィットバランス. 世田谷医療連携講演会, 東京, 2015年2月25日.
30. 平野照之: 超高齢社会における抗凝固療法の均てん化. 高齢者-脳卒中予防の秘訣を考える, 東京, 2015年2月26日.
31. 平野照之: 脳梗塞再発予防における DTI の意義. Tochigi STROKE Core Member Meeting, 宇都宮, 2015年2月27日.
32. 平野照之: 地域で取り組む脳卒中診療. 第9回横浜東部脳卒中連携の会, 横浜, 2015年3月2日.
33. 平野照之: 心房細動に伴う脳卒中の予防～抗凝固療法の均てん化を目指して～. 第2回城南地区脳卒中予防セミナー, 東京, 2015年3月3日.
34. 平野照之: 脳卒中専門医から見たエドキサバンの位置付け. リクシアナ AF/VTE 効能追加講演会～抗血栓療法の新しい流れ～, 岡山, 2015年3月4日.
35. 平野照之: 心原性脳塞栓症の予防で意識すべき3つの視点～アピキサバンは, 抗凝固療法の主役になれるか?～. 第3回エリキュース適正使用セミナー, 福岡, 2015年3月6日.
36. 平野照之: 脳卒中専門医が行う抗凝固療法. イグザレト WEBカンファレンス「心原性脳塞栓症における抗凝固療法 update」, 府中, 2015年3月9日.
37. 平野照之: 脳梗塞再発予防における DTI の意義. 愛媛県 Core Member Meeting, 愛媛, 2015年3月13日.
38. 平野照之: チームで取り組む脳卒中医療. 北多摩西部脳卒中地域連携パス講演会, 東大和, 2015年3月16日.
39. 平野照之: 脳梗塞再発予防における DTI の意義. 抗凝固療法を考える会～服薬管理とこれからの脳梗塞予防～, 仙台, 2015年3月18日.
40. 平野照之: 心原性脳塞栓症の予防で意識すべき3つの視点～

アピキサバンは, 抗凝固療法の主役になれるか?～. 庄内地区エリキュース発売2周年講演会, 酒田, 2015年3月20日.

41. 星野晴彦, 神澤孝夫, 長尾毅彦, 平野照之, Diener HC: ESUS-新たな疾患概念をどう捉えるか-. ダビガトラン座談会, 広島, 2015年3月27日.

社会貢献

1. 平野照之: こんな時には救急車! 脳卒中の治療と連携. 2014年度北多摩南部保健医療圏医療安全支援講演会, 調布, 2014年10月31日.

教育活動

1. 平野照之: 虚血性脳卒中: 病態と治療. 金沢大学大学院医学系研究科・医薬保健学類域医学類医学部医学科 脳神経外科系統講義, 金沢, 2014年10月8日.

論文

論文

1. Yamashita S¹, Sakashita N², Yamashita T¹, Tawara N¹, Tasaki M¹, Kawakami K¹, Komohara K¹, Fujiwara Y¹, Kamikawa M¹, Nakagawa T¹, Hirano T, Maeda Y¹, Hasegawa M¹, Takeya M¹, Ando Y¹ (¹Kumamoto University, ²Tokushima University): Concomitant accumulation of α -synuclein and TDP-43 in a patient with corticobasal degeneration. J Neurol 261(11):2209-2217, 2014.
2. Sakaguchi H¹, Yamashita S¹, Ueda A¹, Hirahara T¹, Honda S¹, Kimura E¹, Yamashita T¹, Maeda Y¹, Hirano T, Uchino M² (¹Kumamoto University, ²Johann Hospital): Chronic inflammatory demyelinating polyneuropathy triggered by interferon- α for chronic hepatitis B virus infection. Neurol Clin Neurosci 3(1):36-38, 2015.
3. 鈴木由希子¹, 稲富雄一郎¹, 米原敏郎¹, 平野照之 (¹済生会熊本病院): ローマ字読み書き障害によりキーボード入力障害を生じた脳梗塞の1例. 臨床神経 55(1):8-12, 2015.
4. Amano Y¹, Kimura N¹, Hanaoka T¹, Aso Y¹, Hirano T, Murai H², Satoh K¹, Matsubara E¹ (¹Oita University, ²Kyushu University): Creutzfeldt-Jakob Disease with a prion protein gene codon 180 mutation presenting asymmetric cortical high-intensity on magnetic resonance imaging. Prion 9(1):29-33, 2015.

総説 Review

1. Hirano T: Searching for Salvageable Brain: the Detection of Ischemic Penumbra using Various Imaging Modalities? J Stroke Cerebrovasc Dis 23(5):795-798, 2014.
2. 平野照之: ASPECTS, DWI-ASPECTS. 日本臨牀2014年7月増刊「最新臨牀脳卒中(上)」72(Suppl 5):528-532, 2014.
3. 平野照之: rt-PA 血栓溶解療法における脳血流状態の評価. 脳と循環 19:219-223, 2014.
4. 平野照之: 学会印象記 World Stroke Congress 2014(イスタンブール, トルコ). BRAIN and NERVE 67:225-227, 2015.
5. 平野照之: 抗凝固療法中の rt-PA 静注療法. Cardio-Coagulation 2:17-24, 2015.
6. 平野照之: 杏林大学と地域医療: 脳卒中センター. 杏林医学誌 46:49-52, 2015.
7. 平野照之: 外来で遭遇することの多い神経症候: しびれ. 臨牀と研究 92:709-714, 2015.

著書

1. 平野照之: 静注血栓溶解療法. 脳梗塞診療読本. 豊田一則編. 東京, 中外医学社, 2014. p.65-83.
2. 平野照之: 頭部 CT と CT angiography. 脳血管障害の治療最前線. 辻省次, 鈴木則宏編. 東京, 中山書店, 2014. p.49-55.
3. 平野照之: 総論-無症候性脳血管障害のイメージングの選定.

脳神経外科診療プラクティス:無症候性脳血管障害を解く. 橋本信夫監修, 飯原弘二編. 東京, 文光堂, 2014.p.58-63.

その他

1. 平野照之:「21世紀の医療と介護をみつめて」脳卒中について, ラジオ日本, 2015年1月23日, 30日.
2. 平野照之:「ノンストップ!」“脳梗塞”の最新治療&予防法, フジテレビ, 2015年2月25日.

解剖学教室 (肉眼解剖学)

講演

1. 松村譲児:医学教育の現状と課題. 2014年度 MR 認定センターセミナー. チーム医療における MR の存在意義, 東京, 2014年8月30日.
2. 小林靖, 松井利康, 灰塚嘉典, 松村譲児:現生日本人の冠状縫合と中心前溝の位置関係.第68回(2014年)日本人類学会大会, 浜松,2014年11月1日.
3. 灰塚嘉典, 松村譲児, 小林靖, 藤倉義久:ホルマリン代替液(N-Vinyl-2Phrrolidone;NVP)固定遺体の肉眼解剖所見. 日本解剖学会関東支部第102回学術集会, 東京, 2014年11月22日.
4. 天野カオリ:ヒト胎児・成人の耳下腺開口部の形態と機能の関連. 第365回明海大学歯学部研修会, 坂戸, 2014年12月1日.
5. 松村譲児:ピロリド固定遺体の解剖:臨床解剖への適用可能性. 第6回有明臨床解剖シンポジウム-保健医療における解剖学-, 東京, 2014年12月13日.
6. 松村譲児:脾臓を眺める:構造・機能. 第28回日本小児脾臓研究会, 三鷹, 2015年2月28日.
7. Matsumura G, Sakai T:“La raison d’être” of the Associations, Councils, Committees and Unions of the Academic Societies. Proceedings of the 120th Annual Meeting of The Japanese of Anatomists and the 92th Annual Meeting of The Physiological Society of Japan. Kobe, March 21st-23rd,2015.
8. Haizuka Y, Matsumura G, Kobayashi Y, Fujikura Y: Anatomical observation of cadavers embalmed with 10% N-Vinyl-2-Pyrrolidone. Proceedings of the 120th Annual Meeting of The Japanese of Anatomists and the 92th Annual Meeting of The Physiological Society of Japan, Kobe, March 21st-23rd,2015.
9. Amano K, Shimada K, Matsumura G:Morphological study of human submandibular duct : nerve distribution of sublingual caruncula, the common opening area . Proceedings of the 120th Annual Meeting of The Japanese of Anatomists and the 92th Annual Meeting of The Physiological Society of Japan, Kobe, March 21st-23rd,2015.
10. Matsumura G:Ethics Subcommittee on the Cadaver Study in Kyorin University. Proceedings of the 120th Annual Meeting of The Japanese of Anatomists and the 92th Annual Meeting of The Physiological Society of Japan, Kobe, March 21st-23rd,2015.

著書

1. 松村譲児:PT・OT 必修シリーズ 消して忘れない解剖学要点整理ノート 改訂第2版. 東京, 羊土社, 2014.
2. 松村譲児:脳の機能と解剖・役割 ~脳について知っておくべきこと~. 急性・重症患者ケア 3苦手から一歩ぬけ出す! ICUでの脳神経看護-脳の解剖生理・疾患を知って的確なケアをするために-. 岡元和文, 道又元裕編. 東京, 総合医学社, 2014.

p.191-202.

3. 松村譲児:病気がみえる Vol.8. 腎・泌尿器 第2版. 東京, メディックメディア, 2014.
4. 松村譲児:病気がみえる Vol.3. 糖尿病・代謝・内分泌 第4版. 東京, メディックメディア, 2014.
5. 川上速人, 松村譲児:ガートナー／ハイアット 組織学アトラスとテキスト 第3版. 東京, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 2014.
6. 松村譲児:MR テキストⅡ 疾病と治療2012 基礎. 公益財団法人 MR 認定センター教育研修委員会監修. 東京, 南山堂, 2015.
7. 松村譲児:MR テキストⅡ 疾病と治療2012 臨床. 公益財団法人 MR 認定センター教育研修委員会監修. 東京, 南山堂, 2015.
8. 松村譲児:みでわかる薬学 図解 機能形態学. 東京, 南山堂, 2015.
9. 松村譲児:新改訂 人体解剖ビジュアル からだの仕組みと病気. 東京, サイオ出版, 2015.
10. 松村譲児:造血. ジュンケイラ組織学. 坂井建雄, 川上速人監訳. 東京, 丸善, 2015. p.263-274.

その他

1. 松村譲児:もっと知りたい からだの仕組み 第26回 血圧計の話. NHK テレビテキスト きょうの健康 5:117, 東京, NHK, 2014.
2. 松村譲児:もっと知りたい からだの仕組み 第27回 指紋は何のためにある?. NHK テレビテキスト きょうの健康 6:117, 東京, NHK, 2014.
3. 松村譲児:もっと知りたい からだの仕組み 第28回 朝のトイレは混んでいる!?. NHK テレビテキスト きょうの健康 7:117, 東京, NHK, 2014.
4. 松村譲児:もっと知りたい からだの仕組み 第29回 肩やお尻の注射は痛い?. NHK テレビテキスト きょうの健康 8:117, 東京, NHK, 2014.
5. 松村譲児(監修):?なぞとき自然ファイル 人体06 爪や髪はどうしてのびるの? 爪と毛の役割や, のびる理由を知ろう! 朝日ジュニア百科 好奇心, ひろげる, ひろがる週刊なぞとき 14:17-22, 東京, 朝日新聞出版, 2014.
6. 松村譲児:もっと知りたい からだの仕組み 第30回 髪の色のでり立ち. NHK テレビテキスト きょうの健康 9:117, 東京, NHK, 2014.
7. 松村譲児:もっと知りたい からだの仕組み 第31回 塗り薬の種類. NHK テレビテキスト きょうの健康 10:117, 東京, NHK, 2014.
8. 松村譲児:もっと知りたい からだの仕組み 第32回 鼻づまりの謎. NHK テレビテキスト きょうの健康 11:117, 東京, NHK, 2014.
9. 松村譲児:もっと知りたい からだの仕組み 第33回 あくびの役割. NHK テレビテキスト きょうの健康 12:117, 東京, NHK, 2014.
10. 松村譲児:もっと知りたい からだの仕組み 第34回 「たそがれ」の色は灰色?. NHK テレビテキスト きょうの健康 1:117, 東京, NHK, 2015.
11. 松村譲児:もっと知りたい からだの仕組み 第35回 日本人はお酒に弱い!. NHK テレビテキスト きょうの健康 2:117, 東京, NHK, 2015.
12. 松村譲児:もっと知りたい からだの仕組み 最終回 意外と知らない熱のこと. NHK テレビテキスト きょうの健康 3:117, 東京,

**解剖学教室
(顕微解剖学)**

講演

- 秋元義弘, 三浦ゆり, 戸田年総, 福富俊之, 菅原大介, 松原幸枝, 遠藤玉夫, 川上速人: 糖尿病性腎症に伴う糸球体における α -アクチニン4の局在の変化. 日本顕微鏡学会第70回学術講演会, 千葉, 2014年5月11-13日.
- Ikehara Y, Sakakita H, Ikehara S, Shimizu N, Yamaguchi T, Kim J, Nakanishi H, Akimoto Y: An application of low temperature plasma to achieve minimal invasive surgery. 5th International Conference on Plasma Medicine, Nara, May 18th-23rd, 2014.
- Akimoto Y, Sakakita H, Ikehara S, Yamaguchi T, Kim J, Ikehara Y: Molecular morphological analysis of the effect of low temperature plasma on the wound healing of skin. 5th International Conference on Plasma Medicine, Nara, May 18th-23rd, 2014.
- 石橋亮一, 竹本稔, 秋元義弘, 河村治清, 小林一貴, 大西俊一郎, 石川崇広, 賀鵬, Christer Betsholtz, 横手幸太郎: ポドサイト分泌タンパク Semaphorin3G の糸球体における機能解析. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
- 岡村耕一, 坪川民治, 城下博夫, 塩川芳昭, 轉石小百合, 松原幸枝, 宮東昭彦, 川上速人: フリーラジカルスカベンジャー, エダラボンによる脳梗塞および出血性脳梗塞の抑制効果について, 高血糖ラットを用いた実験. 第14回日本抗加齢医学会総会, 大阪, 2014年6月6日.
- 秋元義弘, 榊田創, 池原早苗, 山口高志, 金載浩, 池原譲: プラズマ照射による皮膚創傷治癒への影響の分子形態学的解析. 研究会「プラズマが拓く新学術領域と今後の展開」, 名古屋, 2014年6月14日.
- 秋元義弘, 榊田創, 池原早苗, 山口高志, 金載浩, 池原譲: プラズマ照射による皮膚創傷治癒への影響の分子形態学的解析. 新学術領域研究「プラズマ医療科学の創成」第3回公開シンポジウム, 名古屋, 2014年8月9日.
- Akimoto Y, Miura Y, Toda T, Fukutomi T, Sugahara D, Wolfert MA, Wells L, Boons G, Hart GW, Endo T, Kawakami H: Molecular morphological changes in the glomerulus associated with the elevation of O-GlcNAcylation in the diabetic nephropathy. 18th International Microscopy Congress, Czech Republic, September 7th-12th, 2014.
- 三浦ゆり, 津元裕樹, 小笠原大介, 鈴木孝禎, 秋元義弘, 遠藤玉夫: 新規 O-GlcNAc 化ペプチド濃縮法の開発と糖尿病モデル動物への応用. 第67回日本酸化ストレス学会, 京都, 2014年9月4-5日.
- Nakamura M, Wada H, Noue S, Inui T, Honda K, Nakamoto K, Higaki M, Sata M, Takata S, Yokoyama T, Kudo A, Hanawa T, Kobayashi F, Kamma H, Goto H, Takizawa H: Interleukin-17A / F regulates MMP-9 expression in the lung of mice after inhalation of cigarette smoke. ERS International Congress 2014, Germany, September 6th - 10th, 2014.
- 光永敬子, 秋元義弘, 安井金也, 山下一郎, 川上速人, 安増茂樹: メダカアリアルスルファターゼ B (ArsB) の脳における分子環境構築. 日本動物学会第85回大会, 仙台, 2014年9月11-13日.
- 秋元義弘: シンポジウム「糖鎖生物学と組織細胞化学の接点」タンパク質の O-GlcNAc 修飾と糖尿病. 第55回日本組織細胞化学会総会・学術集会, 松本, 2014年9月27-28日.
- 石橋亮一, 竹本稔, 秋元義弘, 河村治清, 小林一貴, 大西俊一郎, 石川崇広, 賀鵬, 坂本憲一, 服部暁子, 正司真弓, 山賀政弥, Christer Betsholtz, 横手幸太郎: ポドサイト分泌タンパク Semaphorin3g は糸球体において抗炎症的に作用する. 第29回日本糖尿病合併症学会, 東京, 2014年10月3-4日.
- 楊國昌, 秋元義弘, 福富俊之, 西堀由紀野: (平成26年度医学部共同研究プロジェクト中間報告) メタボロームとプロテオームの癒合解析による糸球体硬化の病態解明と創薬化研究. 第43回杏林医学会総会, 三鷹, 2014年11月15日.
- 菊池将平, 三浦ゆり, 秋元義弘, 副島友莉恵, 遠藤玉夫, 沢辺元司: 糖尿病モデルラット腎組織のプロテオーム解析. 第61回日本臨床検査医学会学術集会, 福岡, 2014年11月22-25日.
- 秋元義弘, 榊田創, 池原早苗, 山口高志, 金載浩, 池原譲: プラズマ照射による皮膚創傷治癒への影響の超微形態学的解析. 第3回プラズマ医療科学の創成研究会, 帯広, 2014年11月22日.
- 光永敬子, 秋元義弘, 安井金也, 山下一郎, 川上速人, 安増茂樹: アリアルスルファターゼ B (ArsB) のメダカ脳における分子環境. 日本動物学会中国四国支部 広島県例会, 東広島, 2015年3月3日.
- 宮東昭彦, 松原幸枝, 三浦知子, 関口純理, 川上速人: 齧歯類精細管における精上皮の波の加齢変化. 第120回日本解剖学会総会・全国学術集会/第92回日本生理学会大会合同大会, 神戸, 2015年3月21-23日.
- 菅原大介, 福富俊之, 秋元義弘, 川上速人: マウス腸管におけるフコシル化糖タンパク質の多様性に関する組織化学的検討. 第120回日本解剖学会総会・全国学術集会/第92回日本生理学会大会 合同大会, 神戸, 2015年3月21-23日.
- Kataoka H, Ushiyama A, Kawakami H, Akimoto Y, Matsubara S, Miyao H, Iijima T: Behavior of endothelial glycocalyx layer during sepsis in mice as observed using fluorescence in vivo microscopy. 89th Annual Meeting of the International Anesthesia Research Society, USA, March 21st-24th, 2015.
- 小川裕子, 秋元義弘, 桑田奈宝子, 谷口由真, 米川綾, 小倉葵, 矢ノ下良平: ヒト唾液由来エキソソームの消化酵素に対する安定性の検討. 日本薬学会第135年会, 神戸, 2015年3月25-28日.

論文

- Akimoto Y, Miyaji M¹, Morimoto - Kamata R¹, Kosaka Y¹, Obinata A¹ (¹Teikyo University): [Review] Retinoic acid -induced epidermal transdifferentiation in skin. J Dev Biol 2 : 158-173, 2014.
- Akimoto Y, Kawakami H: Histochemical staining using lectin probes. Methods Mol Biol 1200:153-163, 2014.
- Handa K¹, Inukai K¹, Onuma H¹, Kudo A, Nakagawa F², Tsugawa K³, Kitahara A¹, Moriya R¹, Takahashi K¹, Sumitani Y¹, Hosaka T¹, Kawakami H, Oyadomari S³, Ishida H¹ (¹Third Department of Internal Medicine, Division of Diabetes, Endocrinology and Metabolism, Kyorin University School of Medicine, ²Shiga University of Medical Science, ³The University of Tokushima): Long-term low carbohydrate diet leads to deleterious metabolic manifestations in diabetic mice. PLoS One 9:e104948, 2014.
- Shirai A¹, Yamazaki O¹, Horita S¹, Nakamura M¹, Satoh N¹, Yamada H¹, Suzuki M¹, Kudo A, Kawakami H, Hofmann F², Nishiyama A³, Kume H¹, Enomoto Y¹, Homma Y¹, Seki G¹ (¹The University of

Tokyo, ²der Technischen Universität München, ³Kagawa University): Angiotensin II dose-dependently stimulates human renal proximal tubule transport by the nitric oxide/guanosine 3',5'-cyclic monophosphate pathway. J Am Soc Nephrol 25: 1523-1532, 2014.

5. Miyahara N¹, Shoda J², Kawamoto T³, Shida H⁴, Ueda T⁵, Akimoto Y, Kawakami H, Irimura T⁶ (¹Ushiku - Aiwa General Hospital, ²University of Tsukuba, ³Tokyo Women's Medical University, ⁴National Hospital Organization Mito Medical Center, ⁵Mitsubishi Kagaku Bio - Clinical Laboratories, Inc., ⁶St. Luke's International Medical Center): Interaction of Muc4 and ErbB2 in a transgenic mouse model of gallbladder carcinoma: potential pathobiological implications. Oncol Rep 32:1796-1802, 2014.

著書

1. 川上速人:第1章 細胞. ガートナー/ハイアット組織学 アトラスとテキスト 第3版. 川上速人, 松村譲児監訳. 東京, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 2014.p.2-31.
2. 川上速人:第2章 上皮と腺. ガートナー/ハイアット組織学 アトラスとテキスト 第3版. 川上速人, 松村譲児監訳. 東京, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 2014.p.32-54.
3. 秋元義弘:第3章 結合組織. ガートナー/ハイアット組織学 アトラスとテキスト 第3版. 川上速人, 松村譲児監訳. 東京, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 2014.p.56-77.
4. 菅原大介:第5章 血液と造血. ガートナー/ハイアット組織学 アトラスとテキスト 第3版. 川上速人, 松村譲児監訳. 東京, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 2014.p.106-123.
5. 菅原大介:第9章 リンパ組織. ガートナー/ハイアット組織学 アトラスとテキスト 第3版. 川上速人, 松村譲児監訳. 東京, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 2014.p.198-227.
6. 秋元義弘:第11章 外皮. ガートナー/ハイアット組織学 アトラスとテキスト 第3版. 川上速人, 松村譲児監訳. 東京, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 2014.p.254-276.
7. 川上速人:第13章 消化器系 I. ガートナー/ハイアット組織学 アトラスとテキスト 第3版. 川上速人, 松村譲児監訳. 東京, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 2014.p.302-329.
8. 宮東昭彦:第17章 女性生殖系. ガートナー/ハイアット組織学 アトラスとテキスト 第3版. 川上速人, 松村譲児監訳. 東京, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 2014.p.406-435.
9. 宮東昭彦:第18章 男性生殖系. ガートナー/ハイアット組織学 アトラスとテキスト 第3版. 川上速人, 松村譲児監訳. 東京, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 2014.p.436-454.
10. 川上速人:付録. ガートナー/ハイアット組織学 アトラスとテキスト 第3版. 川上速人, 松村譲児監訳. 東京, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 2014.p.481-485.
11. 川上速人, 松村譲児(監訳):ガートナー/ハイアット組織学 アトラスとテキスト 第3版. 東京, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 2014.
12. 菅原大介:ことば「Lectin-IGOT-LC/MS 法」. 生化学86(4). 2014.p.538.
13. 川上速人:第2章 細胞質. ジュンケイラ組織学 第4版. 坂井建雄, 川上速人監訳. 東京, 丸善, 2015. p.19-56.
14. 川上速人:第4章 上皮組織. ジュンケイラ組織学 第4版. 坂井建雄, 川上速人監訳. 東京, 丸善, 2015. p.77-101.
15. 秋元義弘:第5章 結合組織. ジュンケイラ組織学 第4版. 坂井建雄, 川上速人監訳. 東京, 丸善, 2015. p.103-129.
16. 宮東昭彦:第20章 内分泌腺. ジュンケイラ組織学 第4版. 坂井

建雄, 川上速人監訳. 東京, 丸善, 2015. p.423-448.

17. 坂井建雄, 川上速人(監訳):ジュンケイラ組織学 第4版. 東京, 丸善, 2015.

統合生理学教室

講演

1. 鈴木伸弥, 中島剛, 二橋元紀, 大塚裕之, 小宮山伴与志:足部皮膚神経刺激によるヒラメ筋H反射に対する交叉性反射効果の歩行位相依存性. 第49回日本理学療法学会大会, 横浜, 2014年5月30日-6月1日.
2. 平井直樹, 本郷利憲, 稲富貴美, 魚谷恭太郎, 佐々木成人:道具使用の運動学習:ニホンザルのピンセット使用時の順序学習. 第30回日本霊長類学会, 大阪, 2014年7月4-5日.
3. 中島剛, 鈴木伸弥, 大塚裕之, 小宮山伴与志, 大木紫:ヒト間接的皮質脊髄路の可塑性変化. 第8回 Motor Control 研究会, 筑波, 2014年8月7-9日.
4. Nakajima T, Suzuki S, Ohtsuka H, Endoh T, Masugi Y, Irie S, Komiyama T, Ohki Y: Long-term potentiation of indirect cortico-motoneuronal excitations in relaxed hand muscles in humans. 第37回日本神経科学学会, 横浜, 2014年9月11-13日.
5. 渋谷賢, 大木紫:拡張した仮想身体による身体性自己意識と身体表現の変化. 第37回日本神経科学学会, 横浜, 2014年9月11-13日.
6. 大木紫:身体意識-神経基盤解析とリハビリ応用の可能性-. 文部科学省科研費新学術領域「脳内身体表現の変容機構の理解と制御」キックオフシンポジウム, 東京, 2014年9月29日.
7. 大森雅夫, 五十嵐一峰, 佐野秀仁, 市村正一, 中島剛, 渋谷賢, 大木紫, 遠藤隆志:頸髄症患者における巧緻運動障害の客観的評価法の開発. 第29回日本整形外科学会基礎学術集会, 鹿児島, 2014年10月9-10日.
8. 中島剛, 大木紫:脊髄代償神経システム強化による新たな運動機能回復戦略. 東北大学医学部肢体不自由学セミナー, 招待講演, 仙台, 平成26年10月16日.
9. 平井直樹, 魚谷恭太郎, 稲富貴美, 本郷利憲, 佐々木成人:具使用の学習過程:サルの道具による把持動作のための pre-shaping 動作形成過程. 第68回日本人類学会, 浜松, 2014年10月31日-11月2日.
10. Suzuki S, Nakajima T, Futatsubashi G, Mezzarane RA, Ohtsuka H, Komiyama T: Limb - specific control of interlimb reflex transmission during walking in humans. Neuroscience 2014, USA, November 9th-13th, 2014.
11. Nakajima T, Suzuki S, Ohtsuka H, Endoh T, Masugi Y, Irie S, Komiyama T, Ohki Y: Long-term potentiation of indirect cortico-motoneuronal excitations in relaxed hand muscles in humans. Neuroscience 2014, USA, November 9th-13th, 2014.
12. Komiyama T, Nakajima T, Zehr EP, Suzuki S, Mezzarane RA, Ohtsuka H, Futatsubashi G, Klarner T, Barss TS: Phase-dependent cutaneous reflex reversal during walking emerges from reflex signs produced by afferents in discrete foot sole region. Neuroscience 2014, USA, November 9th-13th, 2014.
13. 渋谷賢, 大木紫:拡張した仮想身体による時間遅れが身体性自己意識と身体表現に及ぼす影響. 第6回多感覚研究会, 広島, 2014年11月12-13日.
14. 渋谷賢, 大木紫:仮想身体による身体性自己意識と身体表現の変化. 第6回多感覚研究会, 広島, 2014年11月12-13日.

日.

15. Yagi J, Kobayashi Y, Hirai N, Ohki Y: Electrophysiological characteristics of chloroquine - sensitive dorsal root ganglion neurons in rats. The 44th Annual Meeting-Soc.for Neuroscience, USA, November 15th-19th, 2014.
16. 渋谷賢, 大木紫: 拡張した仮想身体が身体性自己意識および身体表現に与える影響. 第33回日本基礎心理学会, 東京, 2014年12月6-7日.
17. 渋谷賢, 畠中智志, 大木紫: 拡張した仮想身体による身体性自己意識と身体表現の変容. 第1回身体性システム領域全体会議, 花巻, 2015年3月9-11日.
18. 大木紫: 身体意識-神経基盤研究とリハビリ応用の可能性-. 東北大学電気通信研究所共同プロジェクト研究会, 仙台, 2015年3月21日.
19. 八木淳一, 小林靖, 平井直樹, 大木紫: かゆみ受容性ラット脊髄後根神経節ニューロンの機能的特性. 第92回日本生理学会, 神戸, 2015年3月21-23日.
20. Nakajima T, Suzuki S, Ohtsuka H, Endoh T, Masugi Y, Irie S, Komiyama T, Ohki Y: Plasticity of indirect cortico-motoneuronal excitations in relaxed hand muscles in humans. 第92回日本生理学会大会, 神戸, 2015年3月21-23日.

論文

1. Nakajima T, Mezzarane RA¹, Hundza SR², Komiyama T³, Zehr EP² (¹University of Brasilia, ²University of Victoria, ³Chiba University): Convergence in reflex pathways from multiple cutaneous nerves innervating the foot depends upon the number of rhythmically active limbs during locomotion. PLOS ONE 9: e104910, 2014.
2. Suzuki S, Nakajima T, Mezzarane RA¹, Ohtsuka H², Futatsubashi G³, Komiyama T⁴ (¹University of Brasilia, ²Health Sciences University of Hokkaido, ³Jobu University, ⁴Chiba University): Differential regulation of crossed cutaneous effects on the soleus H - reflex during standing and walking in humans. Exp. Brain Res. 232: 3069-3078, 2014.
3. Zehr EP¹, Nakajima T, Barss T¹, Klarner T¹, Miklosovic S¹, Mezzarane RA², Nurse M³, Komiyama T⁴ (¹University of Victoria, ²University of Brasilia, ³NIKE Inc, ⁴Chiba University): Cutaneous stimulation of discrete regions of the sole during locomotion produces "sensory steering" of the foot. BMC Sports Sci Med Rehabil. 6:332014, 2014.
4. Sakamoto M¹, Tazoe T², Nakajima T, Endoh T³, Komiyama T⁴ (¹Kumamoto University, ²University of Pittsburgh, ³Uekusa Gakuen University, ⁴Chiba University): Leg automaticity is stronger than arm automaticity during simultaneous arm and leg cycling. Neurosci Lett. 564:62-66, 2014.
5. 鈴木伸弥, 二橋元紀¹, 大塚裕之², 原口慧史¹, 中島剛, 大森茂樹³, 笹田周作⁴, 小宮山伴与志⁵ (¹上武大学, ²北海道医療大学, ³医療法人社団鎮誠会姫島クリニック, ⁴相模女子大学, ⁵千葉大学): 立位および歩行時における足部皮膚神経刺激によって誘発された体幹筋群皮膚反射の動態. 体力科学 64:135-144, 2014.
6. 中島剛, 小宮山伴与志¹, 大木紫 (¹千葉大学): ヒト脊髄固有ニューロンの機能とその可塑性について. 日本運動生理学雑誌, (印刷中).

著書

1. 八木淳一, 大木紫: GABA の機能-GABA_A, GABA_B の多彩な伝達様式. Clinical Neuroscience. 青木滋編. 東京, 中外医薬

社, 2015. p.58-61.

2. 大木紫: 第34章運動単位と筋活動. カンデル神経科学. 金澤一郎, 宮下保司 日本語版監修. 東京, メディカルサイエンスインターナショナル, 2014. p.755-775.

細胞生理学教室

講演

1. 小藤剛史, 林優子, 田丸政男, 赤川公朗: 広汎性発達障害 (PDD) と syntaxin1A 遺伝子の関連性の検討. 第56回日本小児神経学会, 浜松, 2014年5月29-31日.
2. Fujiwara T, Kofuji T, Sanada M, Akagawa K: Impairment of social behavior in HPC-1/syntaxin1A knockout mice relate with reduction of DA and OXT release. 第37回日本神経科学会, 横浜, 2014年9月11-13日.
3. 小藤剛史, 林優子, 藤原智徳, 真田ますみ, 田丸政男, 赤川公朗: 自閉症スペクトラム障害と HPC-1/syntaxin1A 遺伝子発現異常の関連性の検討. 第57回日本神経化学学会大会, 奈良, 2014年9月29日-10月1日.
4. Suga K, Saito A, Mishima T, Akagawa K: Upregulation of ER-Golgi SNARE Syntaxin5 by ER stress and its relationship with β APP processing. 第57回日本神経化学学会大会, 奈良, 2014年9月29日-10月1日.
5. 中山高宏, 赤川公朗: Syntaxin 1A 遺伝子の PKA を介した転写制御機構. 第87回日本生化学学会大会, 京都, 2014年10月15-18日.

論文

1. Kofuji T, Fujiwara T, Sanada M, Mishima T, Akagawa K: HPC-1/syntaxin 1A and syntaxin 1B play distinct roles in neuronal survival. J Neurochem 130:514-25, 2014.
2. Suga K, Saito A, Akagawa K: ER stress response in NG108-15 cells involves upregulation of syntaxin 5 expression and reduced amyloid β peptide secretion. Exp. Cell Res. 332:11-23, 2015.

生化学教室(1)

講演

1. 高瀬暁, 石浦浩之, 三井純, 藤田逸人, 原一雄, 関谷元博, 五十嵐正樹, 高梨幹生, 泉田欣彦, 久保田みどり, 升田紫, 平美乃, 岡崎佐智子, 飯塚陽子, 矢作直也, 大橋健, 吉田博, 柳内秀勝, 多田紀夫, 後藤田貴也, 大須賀淳一, 石橋俊, 辻省次, 門脇孝, 岡崎啓明: Whole genome sequence 解析を用いた apoC-II 低下症の原因遺伝子変異同定の試み. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
2. 後藤田貴也: 代謝性疾患(単一遺伝子疾患から複合遺伝形質まで)の成因解明にむけた分子遺伝学的アプローチ. 杏林医学会第8回例会講演会, 三鷹, 2014年6月18日.
3. 後藤田貴也, 山本隆史: 高血圧自然発症ラット(SHR)の遺伝解析から同定された内臓脂肪蓄積関連遺伝子 Slc22a18 の発現調節機構および肝脂肪蓄積への関与の解明. 第87回日本生化学会, 京都, 2014年10月15-18日.
4. 後藤田貴也: メタボリックシンドローム Update. 第9回大分中性脂肪・代謝研究会, 大分, 2014年11月7日.
5. 後藤田貴也: EBM に基づくコレステロール吸収阻害の重要性. LA-SUMMIT in TAMA, 立川, 2014年11月18日.
6. 後藤田貴也: メタボリックシンドローム Update. 西東京糖尿病眼合併症フォーラム2015, 東京, 2015年3月12日.

論文

1. Nakagawa Y¹, Satoh A¹, Yabe S¹, Furusawa M¹, Tokushige N¹, Tezuka H¹, Mikami M¹, Iwata W¹, Shingyouchi A¹, Matsuzaka T¹, Kiwata S¹, Fujimoto Y¹, Shimizu H¹, Danno H¹, Yamamoto T, Ishii K¹, Karasawa T¹, Takeuchi Y¹, Iwasaki H¹, Shimada M¹, Kawakami Y¹, Urayama O¹, Sone H¹, Takekoshi K¹, Kobayashi K¹, Yatoh S¹, Takahashi A¹, Yahagi N¹, Suzuki H¹, Yamada N¹, Shimano H¹(¹University of Tsukuba): Hepatic CREB3L3 controls whole-body energy homeostasis and improves obesity and diabetes. *Endocrinology* 155(12):4706-4719, 2014.

生化学教室(2)

講演

1. 今泉美佳, 青柳共太, 岡村匡史, 中道洋子, 西脇知世乃, 永松信哉: CDKAL1欠損マウスでは妊娠期の代償性インスリン分泌亢進機能が低下している. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
2. 今泉美佳, 青柳共太, 岸本拓磨, 永松信哉: 有芯顆粒を介したインスリン分泌動態の可視化. 第36回日本生物学的精神医学会・第57回日本神経化学学会大会合同年会, 奈良, 2014年9月29日-10月1日.
3. 今泉美佳, 藤原智徳, 大塚弘毅: 妊娠期膵β細胞におけるインスリン分泌亢進機構の解明. 第43回杏林医学会総会, 東京, 2014年11月15日.
4. 今泉美佳, 青柳共太, 岸本拓磨, 永松信哉: ノックアウトマウスを用いたインスリン開口分泌のイメージング解析. 第29回日本糖尿病・肥満動物学会年次学術集会, 京都, 2015年2月13-14日.

論文

1. Kim K¹, Oh CM¹, Ohara - Imaizumi M, Park S^{1,2}, Namkung J^{1,3}, Yadav VK⁴, Tamarina NA⁵, Roe MW⁶, Philipson LH⁵, Karsenty G⁴, Nagamatsu S, German MS⁷, Kim H¹(¹Graduate School of Medical Science and Engineering, ²Catholic Kwandong University, ³Yonsei University, ⁴Columbia University, ⁵The University of Chicago, ⁶SUNY Upstate Medical University, ⁷University of California San Francisco): Functional role of serotonin in insulin secretion in a diet-induced insulin-resistant state. *Endocrinology* 156 (2):444-452, 2015.
2. Makino A¹, Abe M¹, Murate M¹, Inaba T¹, Yilmaz N¹, Hullin- Matsuda F^{1,2}, Kishimoto T, Schieber NL³, Taguchi T⁴, Arai H⁴, Anderluh G^{5,6}, Parton RG^{3,5}, Kobayashi T^{1,2}(¹Lipid Biology Laboratory, RIKEN, ²INSERM U1060-University, ³University of Queensland, ⁴University of Tokyo, ⁵National Institute of Chemistry, Ljubljana, Slovenia, ⁶University of Ljubljana): Visualization of the heterogeneous membrane distribution of sphingomyelin associated with cytokinesis, cell polarity, and sphingolipidosis. *FASEB J.* 29 (2):477-493, 2015.

薬理学教室

講演

講演

1. Sakurai H: Mechanism of urate reabsorption by URAT1 and SLC2A9 transporters. In Basic and clinical symposium "Gout genes identified", American Society of Nephrology Kidney Week 2014, USA, November 11th-16th, 2014.

口演

1. 堅田智久, 櫻井裕之: アミノ酸トランスポーターLAT1は眼の発生に必須である. 日本動物学会 第85回大会, 仙台, 2014年9月11-13日.
2. 堅田智久, 櫻井裕之: アフリカツメガエルを用いたアミノ酸トランスポーターLAT1の初期発生における機能解析. 第131回日本薬理学会関東部会, 横浜, 2014年10月11日.
3. 堅田智久, 櫻井裕之: Notch シグナルは proximal tubule の分化を制御し, distal tubule の伸長を阻害する. 2014年度生理学研究所研究会「粘膜免疫学と膜輸送生理学の融合」, 岡崎, 2014年10月27-28日.
4. Kimura T, Uehara I, Tsukada A, Fukutomi T, Ohtsuki S, Washita M, Sakurai H: Urate transport via paracellular route across epithelial cells. 2nd International Symposium on Epithelial Barrier and Transport, 草津, 2014年11月1-2日.
5. 中村真希子, Blanka Stiburkova, 木村徹, 櫻井裕之, 市田公美: 尿酸トランスポーター URAT1 遺伝子重複変異モデルにおける尿酸輸送活性及び URAT1 発現局在の検討. 第48回日本痛風・核酸代謝学会総会, 東京, 2015年2月19-20日.
6. Yamaga T, Endoh H, Sakurai H: Autophagy activation confers responsiveness to anti-LAT1 therapy in breast cancer cell lines. 第88回日本薬理学会年会, 名古屋, 2015年3月18-19日.
7. 堅田智久, 金井正美, 金井好克, 遠藤仁, 櫻井裕之: マウス初期発生におけるアミノ酸トランスポーターLAT1の発現解析. 第87回日本薬理学会年会, 仙台, 2015年3月19-21日.

ポスター

1. 城倉浩平, 櫻井裕之: 中腎管上皮細胞に対する間葉 BMP4 の作用. 第55回日本組織細胞化学会・学術集会, 松本, 2015年9月27-28日.
2. Johkura K, Sakurai H: Mutual action of FGF9 and BMP4 in the competence of Wolffian duct. 第120回日本解剖学会総会・全国学術集会 第92回日本生理学会大会 合同大会, 神戸, 2015年3月21-23日.

論文

1. Moro Y¹, Kogashiwa Y², Sato D¹, Matsumoto Y¹, Nakamura T¹, Yamauchi K¹, Sakurai H, Kohno N¹(¹Dept. of Otolaryngology, Kyorin Univ., ²Saitama Medical Univ.): Feasibility Study of Alternate-day S-1 as Adjuvant Chemotherapy for Head and Neck Cancer. *Anticancer Res.* 35:977-981, 2015.
2. Marumo T¹, Yagi S¹, Kawarazaki W¹, Nishimoto M¹, Ayuzawa N¹, Watanabe A¹, Ueda K¹, Hirahashi J², Hishikawa K¹, Sakurai H, Shiota K¹, Fujita T¹(¹Univ. Tokyo, ²Keio Univ.): Diabetes Induces Aberrant DNA Methylation in the Proximal Tubules of the Kidney. *J Am Soc Nephrol.* 2015.(in press).
3. Kitamura S¹, Sakurai H, Makino H¹(¹Okayama Univ.): Single adult kidney stem/progenitor cells reconstitute three-dimensional nephron structures in vitro. *Stem Cells* 33:774-784, 2015.
4. Hirano K¹, Uno K², Kuwabara H², Kojima K¹, Ohno S³, Sakurai H, Kamma H¹, Kurata A³(¹Dept. of Pathology, Kyorin Univ., ²Kyorin Univ., ³Tokyo Med. Univ.): Expression of L-type amino acid transporter 1 in various skin lesions. *Pathol. Res. Pract.* 210:634-639, 2014.
5. Uehara I¹, Kimura T, Tanigaki S¹, Fukutomi T, Sakai K¹, Shinohara Y², Ichida K², Iwashita M¹, Sakurai H¹(¹Dept. of Obstetrics and Gynecology, Kyorin Univ., ²Tokyo Univ. of Pharm. and Life Sci.): Paracellular route is the major urate transport pathway across the blood-placental barrier. *Physiol. Rep.* 2:e12013, 2014.

6. Ikari A¹, Toneyawa C², Sanada A², Kimura T, Sakai H³, Hayashi H², Hasegawa H⁴, Yamaguchi M², Yamazaki Y², Endo S¹, Matsunaga T¹, Sugatani J²(¹Gifu Pharm. Univ., ²Univ. Shizuoka, ³Univ. Toyama, ⁴Saitama Med. Univ.): Tight junctional localization of claudin-16 is regulated by syntaxin 8 in renal tubular epithelial cells. *J. Biol. Chem.* 289:13112-13123, 2014.
7. Katada T, Kanai-Azuma M, Kanai Y, Endou H, Sakurai H: Expression analysis of amino acid transporter LAT1 in mouse development. *J. Pharmacol. Sci.* 124:145, 2014.
8. Inoue T¹, Kohro T¹, Tanaka T¹, Kanki Y¹, Li G², Poh HM³, Mimura I¹, Kobayashi M¹, Taguchi A¹, Maejima T⁴, Suehiro JI, Sugiyama A¹, Kaneki K¹, Aruga H⁵, Dong S⁵, Stevens JF⁵, Yamamoto S¹, Tsutsumi S¹, Fujita T¹, Ruan X³, Aburatani H¹, Nangaku M¹, Ruan Y², Kodama T¹, Wada Y¹(¹Univ. Tokyo, ²Jackson Lab. for Genomic Medicine, ³Genome Institute of Singapore, ⁴Kowa Company Ltd, ⁵Thermo Fisher Scientific): Cross-enhancement of ANGPTL4 transcription by HIF1 alpha and PPAR beta/delta is the result of the conformational proximity of two response elements. *Genome Biol.* 15:R63, 2014.
9. Maejima T¹, Inoue T¹, Kanki Y¹, Kohro T¹, Li G², Ohta Y¹, Kimura H³, Kobayashi M¹, Taguchi A¹, Tsutsumi S¹, Iwanari H¹, Yamamoto S¹, Aruga H⁴, Dong S⁴, Stevens JF⁴, Poh HM², Yamamoto K¹, Kawamura T¹, Mimura I¹, Suehiro J, Sugiyama A¹, Kaneki K¹, Shibata H⁵, Yoshinaka Y⁵, Doi T⁵, Asanuma A⁵, Tanabe S⁵, Tanaka T¹, Minami T¹, Hamakubo T¹, Sakai J¹, Nozaki N¹, Aburatani H¹, Nangaku M¹, Ruan X⁷, Tanabe H⁸, Ruan Y², Ihara S¹, Endo A⁹, Kodama T¹, Wada Y¹(¹Univ. Tokyo, ²Jackson Lab. for Genomic Medicine, ³Osaka Univ., ⁴Thermo Fisher Scientific, ⁵Kowa Company Ltd, ⁶Mab Institute Inc, ⁷Genome Institute of Singapore, ⁸Graduate Univ. for Adv. Studies, ⁹Biopharm Research Laboratories, Inc): Direct evidence for pitavastatin induced chromatin structure change in the KLF4 gene in endothelial cells. *PLoS One* 9:e96005, 2014.
10. Suehiro J, Kanki Y¹, Makihara C¹, Schadler K², Miura M¹, Manabe Y¹, Aburatani H¹, Kodama T¹, Minami T¹(¹Univ. Tokyo, ²Univ. Pennsylvania School of Medicine): Genome-wide approaches reveal functional vascular endothelial growth factor (VEGF)-inducible nuclear factor of activated T cells (NFAT) c1 binding to angiogenesis-related genes in the endothelium. *J. Biol. Chem.* 289:29044-29059, 2014.
11. Azuma Y¹, Kükenshöner T², Ma G¹, Yasunaga J¹, Imanishi M¹, Tanaka G, Nakase I¹, Maruno T³, Kobayashi Y³, Arndt KM², Matsuoka M¹, Futaki S¹(¹Kyoto Univ., ²Univ. Potsdam, ³Osaka Univ.): Controlling leucine - zipper partner recognition in cells through modification of a-g interactions. *Chem. Commun. (Camb)* 50:6364-6367, 2014.
12. Nakase I¹, Osaki K¹, Tanaka G, Utani A¹, Futaki S¹(¹Kyoto Univ.): Molecular interplays involved in the cellular uptake of octaarginine on cell surfaces and the importance of syndecan-4 cytoplasmic V domain for the activation of protein kinase C α . *Biochem. Biophys. Res. Commun.* 446:857-862, 2014.

著書

1. 櫻井裕之: 関節リウマチ治療薬, 痛風・高尿酸血症治療薬. カラーイラストで学ぶ集中講義薬理学. 渡邊康裕編. 東京, メジカルビュー, 2015.p.72-75.
2. 櫻井裕之: 薬物療法. 血液浄化療法ハンドブック2015. 透析療法合同専門委員会編. 東京, 協同医書出版, 2015.p.351-357.

病理学教室

講演

1. 菅間博: 甲状腺腫瘍の分子病理診断と細胞診. 第87回日本内分泌学会学術総会, 福岡, 2014年4月24-26日.
2. 石井順, 矢澤卓也, 佐藤華子, 宍戸-原由紀子, 平松千恵, 下山田博明, 藤原正親, 菅間博: 肺の神経内分泌系悪性腫瘍とIII/IV型POU遺伝子. 第103回日本病理学会総会, 広島, 2014年4月24-26日.
3. 千葉知宏, 住石歩, 水谷奈津子, 矢澤卓也, 菅間博: 乳頭状増殖形態を呈した乳腺原発脂肪癌の一例. 第103回日本病理学会総会, 広島, 2014年4月25日.
4. 有益優, 寺戸雄一, 宍戸-原由紀子, 菅間博: ALT癌細胞におけるALT小体形成機序の解明. 第103回日本病理学会総会, 広島, 2014年4月24-26日.
5. 大田泰徳, 比島恒和, 望月眞, 児玉良典, 森谷鈴子, 小柳津直樹, 峰宗太郎, 塩沢由美子, 長谷川秀樹, 片野晴隆: 日本におけるエイズ関連リンパ腫の病理組織分類. 第103回日本病理学会総会, 広島, 2014年4月24-26日.
6. 尾坂真, 秋田貴之, 望月眞, 寺戸雄一, 矢澤卓也, 菅間博, 大倉康男, 西ヶ谷順子, 百村麻衣, 小林陽一: 子宮内腔, 腹膜に転移を示した卵管原発明細胞癌の一例. 第103回日本病理学会総会, 広島, 2014年4月26日.
7. 秋田貴之, 尾坂真, 望月眞, 大森嘉彦, 菅間博, 大倉康男, 松本吉史, 高山信之, 河合伸, 片野晴隆: HIVリンパ節炎とHIV顎下腺炎を伴った顎下腺原発Diffuse large B-cell lymphomaの一例. 第103回日本病理学会総会, 広島, 2014年4月26日.
8. 片野晴隆, 比島恒和, 望月眞, 児玉良典, 小柳津直樹, 大田泰徳, 峰宗太郎, 猪狩亨, 味澤篤, 照屋勝治, 田沼順子, 菊池嘉, 岡慎一, 上平朝子, 白阪琢磨, 鯉淵智彦, 岩本愛吉, 長谷川秀樹, 岡田誠治, 安岡彰: HIV感染者の剖検例における日和見感染症と腫瘍の実態. 第103回日本病理学会総会, 広島, 2014年4月26日.
9. 大木亜津子, 阿部展次, 竹内弘久, 正木忠彦, 森俊幸, 海野みちる, 大倉康男, 杉山政則: 胃癌における胃内洗浄液細胞診の検討 遊離癌細胞は検出されるのか?. 第100回日本消化器病学会総会, 東京, 2014年4月24-26日.
10. 神保陽子, 土岐真朗, 落合一成, 太田博崇, 渡辺俊介, 大野亜希子, 倉田勇, 畑英行, 蓮江智彦, 平野和彦, 山口康晴, 両角克朗, 大倉康男, 高橋信一: 胃生検にてGroup 2と判定され最終診断が癌であった11例の検討. 第87回日本消化器内視鏡学会総会, 福岡, 2014年5月15日.
11. 齋藤大祐, 林田真, 三浦みき, 平野和彦, 櫻庭彰人, 山田雄二, 小山元一, 大倉康男, 高橋信一: 当院における消化管サイトメガロウイルス感染症の検討. 第87回日本消化器内視鏡学会総会, 福岡, 2014年5月16日.
12. 神尾幸見, 橘啓盛, 武井秀史, 新井信晃, 三ツ間智也, 清水麗子, 平田佳史, 松脇りえ, 河内利賢, 菊田真, 中里陽子, 長島鎮, 平野浩一, 望月眞, 藤原正親, 菅間博, 近藤晴彦: 高周波スネアを用いて気管支鏡下に切除した腎細胞癌気管支転移の1例. 第149回日本呼吸器内視鏡学会関東支部会, 東京, 2014年6月14日.
13. 千葉知宏, 住石歩, 菅間博: アデニル酸シクラーゼ活性化剤による甲状腺癌の増殖・浸潤の抑制作用. 第2回日本甲状腺病理学会総会・学術集会, 神戸, 2014年7月12日.
14. 大原有紗, 豊田圭子, 土屋一洋, 五明美穂, 本谷啓太, 大森

- 嘉彦, 平野和彦, 菅間博, 似島俊明: 側頭骨巨細胞腫の1例. 第50回日本医学放射線学会秋季臨床大会, 神戸, 2014年9月26-28日
15. 関雅史, 式場星矢, 百瀬恵美, 桑原彩子, 佐藤範英, 平野和彦, 望月眞, 高山信之: ホジキンリンパ腫に対する化学療法後に肺小細胞癌が顕在化した重複癌の1例. 第609回日本内科学会関東地方会, 東京, 2014年10月11日.
 16. 竹内弘久, 阿部展次, 大木亜津子, 平野和彦, 大倉康男, 杉山政則: 未分化・分化型組織混在早期胃癌に対するESDの適応拡大について. 第88回日本消化器内視鏡学会総会, 神戸, 2014年10月25日.
 17. 菅間博: 第7版甲状腺癌取扱規約の病理学事項の解説. 第47回日本甲状腺外科学会学術集会, 福岡, 2014年10月30-31日.
 18. 中里陽子, 平野浩一, 藤原正親, 菅間博: 甲状腺粘表皮癌の1例. 第47回日本甲状腺外科学会学術集会, 福岡, 2014年10月30-31日.
 19. 石井順, 有益優, 千葉知宏, 矢澤卓也, 菅間博: 甲状腺髄様癌のカルシトニン産生におけるPROX1の役割について. 第18回日本内分泌病理学会学術総会, 東京, 2014年11月1日.
 20. 千葉知宏, 住石歩, 菅間博: アデニル酸シクラーゼ活性化剤による甲状腺癌の増殖・浸潤の抑制作用. 第18回日本内分泌病理学会, 東京, 2014年11月1日.
 21. 長内喜代乃, 西ヶ谷順子, 百村麻衣, 松本浩範, 水谷奈津子, 坂本憲彦, 平野和彦, 藤原正親, 望月眞, 小林陽一, 岩下光利: 若年女性に発生した子宮頸部 heterogenous sarcoma の1例. 第53回日本臨床細胞学会秋季大会, 下関, 2014年11月8-9日.
 22. 加藤拓, 藤原正親, 坂本憲彦, 水谷奈津子, 市川美雄, 鈴木瞳, 稲嶺圭祐, 海野みちる, 住石歩, 近藤凡子, 大倉康男: WHO 組織分類に基づいた胸腺腫と胸腺癌の細胞形態学的検討. 第53回日本臨床細胞学会秋期大会, 下関, 2014年11月8-9日.
 23. 鈴木瞳, 加藤拓, 坂本憲彦, 市川美雄, 稲嶺圭祐, 水谷奈津子, 海野みちる, 望月眞, 大倉康男: リンパ節細胞診における良悪性鑑別困難症例の検討. 第53回日本臨床細胞学会秋期大会, 下関, 2014年11月8-9日.
 24. 望月眞: がん登録法制化と病理情報システム がん登録を前提とした病理情報システムに求められるもの. 第60回日本病理学会秋期特別総会, 沖縄, 2014年11月20-21日.
 25. 大塚弘毅, 大西宏明, 小倉航, 松島早月, 岸野智則, 藤原正親, 古瀬純司, 渡邊卓: 転移性直腸癌症例において認められた新規 RET 遺伝子変異. 第61回日本臨床検査医学会学術集会, 福岡, 2014年11月22-25日.
 26. 須藤恵美, 岸野智則, 大西宏明, 大塚弘毅, 大坂真以子, 藤原正親, 板谷直, 西川かおり, 森秀明, 奴田原紀久雄, 高城靖志, 渡邊卓: 褐色細胞腫との鑑別が困難であった副腎癌の一例超音波画像所見の考察. 第61回日本臨床検査医学会学術集会, 福岡, 2014年11月22-25日.
 27. 大坂真以子, 岸野智則, 大西宏明, 大塚弘毅, 島森直子, 寺戸雄一, 西川かおり, 森秀明, 奴田原紀久雄, 高城靖志, 渡邊卓: 転移性腎腫瘍の3例 超音波画像所見の考察. 第61回日本臨床検査医学会学術集会, 福岡, 2014年11月25日.
 28. 片野晴隆, 比島恒和, 望月眞, 児玉良典, 小柳津直樹, 大田泰徳, 峰宗太郎, 猪狩亨, 味澤篤, 照屋勝治, 田沼順子, 菊池嘉, 岡慎一, 上平朝子, 白阪琢磨, 鯉渕智彦, 岩本愛吉, 長谷川秀樹, 岡田誠治, 安岡彰: HIV 感染者の剖検例における日和見感染症と腫瘍の頻度. 第28回日本エイズ学会学術集会・総会, 大阪2014年12月3-5日.
 29. 福田のぞみ, 皿谷健, 武井秀史, 辻本直貴, 布川寛樹, 大熊康介, 藤原正親, 塚原弥生, 近藤晴彦, 滝澤始: 著明な胸膜肥厚を呈し, 胸膜原発の悪性リンパ腫(Diffuse large B cell lymphoma)と考えられた1例. 第611回日本内科学会関東地方会, 東京, 2014年12月13日.
 30. 野坂岳志, 皿谷健, 辻本直貴, 荻田真, 布川寛樹, 大熊康介, 藤原正親, 石井晴之, 近藤晴彦, 滝澤始: 肺癌に類似した画像を呈した肺アスペルギローシスの1例. 第611回日本内科学会関東地方会, 東京, 2014年12月13日.
 31. 藤原正親, 千葉知宏, 望月眞, 菅間博, 橘啓盛, 近藤晴彦: 気胸を起こした肺囊胞性疾患の13歳男性例. 第46回呼吸器病理研究会, 東京, 2015年2月21日.
 32. 望月眞, 藤原正親, 河内利賢, 近藤晴彦: リンパ濾胞の過形成が見られる線維性結節病変. 第46回呼吸器病理研究会, 東京, 2015年2月21日.
 33. 菅間博: 甲状腺取扱い規約第7版における病理組織分類の改訂について…特に乳頭癌亜型と低分化癌に注目して…第15回茨城内分泌外科研究会, 2015年2月28日.
 34. 藤原正親, 菅間博, 武井秀史, 清水麗子, 橘啓盛, 荻田真, 河内利賢, 中里陽子, 長島鎮, 近藤晴彦: 症例20-03. 第20回中皮腫パネル, 東京, 2015年2月28日.
 35. Momomura M, Kobayashi Y, Terado Y, Sakamoto N, Osanai K, Nishigawa Y, Matsumoto H: Metastases to the uterus from sigmoid colon cancer. The 18th Japan-Korea-Taiwan Joint Conference for Gynecological Pathology, Taiwan, ROC, May 24th, 2014.
 36. Nishigaya Y, Kobayashi Y, Shibuya H, Momomura M, Matsumoto H, Iwashita M, Fujiwara M, Mochizuki M, Terado Y: A case of heterogenous sarcoma of the uterine cervix in a 19-year-old woman. The 18th Japan-Korea-Taiwan Joint Conference for Gynecological Pathology, Taiwan, ROC, May 24th, 2014.
 37. Mochizuki M: Basic Pathology of Lupus Nephritis. Renal Biopsy in Kidney Disease Training Course- a part from the C Level Sister Renal Center Pair (SRCP)- Sharing knowledge and contributing to ISN's mission to advance nephrology on Asia Pacific Region, Vietnam, July 27th, 2014.

論文

1. 磯村杏耶, 池谷紀子, 片岡郁穂, 齋藤督芸, 小路仁, 吉原堅, 駒形嘉紀, 要伸也, 有村義宏, 山田明, 岡野晴子, 塩川芳明: 維持透析中に中枢神経障害を発症して診断された好酸球性多発血管炎性肉芽腫症(EGPA:Churg-Strauss 症候群)の一例. 関東リウマチ47:202-208, 2014.
2. 菅間博, 千葉知宏, 住石歩, 海野みちる: 甲状腺結節取扱い診療ガイドラインと細胞診 甲状腺腫瘍の分子病理診断と細胞診. 日本内分泌学会雑誌 90(1):214, 2014.
3. 阿部泰明, 小林啓一, 原由紀子, 千葉知宏, 横矢重臣, 野口明男, 菅間博, 塩川芳明, 永根基雄: 退形成性上衣腫に膠芽腫成分を伴った頭頂葉悪性神経膠腫の一例: Brain Tumor Pathology 31(Suppl):75, 2014.
4. 百村麻衣, 小林陽一, 寺戸雄一, 坂本憲彦, 長内喜代乃, 西ヶ谷順子, 松本浩範: S 状結腸癌の子宮転移の1例. 日本臨床細胞学会雑誌 53:114-119, 2014.
5. 菅間博, 住石歩, 千葉知宏, 寺戸-原由紀子: 甲状腺腫瘍の遺伝子診断と細胞診. 日本内分泌甲状腺外科学会誌 31(2):125-129, 2014.
6. 竹内弘久, 阿部展次, 大倉康男, 杉山政則: これが癌?癌じゃない

- いの?—食道・胃編 全体に褪色調を呈し、発赤とひきつれを伴う陥凹性病変。消化器内視鏡 26:995-996,2014.
7. 佐藤綾, 有村義宏, 清水英樹, 窪田沙也花, 磯村杏耶, 小西文晴, 川嶋聡子, 池谷紀子, 吉原堅, 駒形嘉紀, 要伸也, 石井誠之, 佐藤衛, 山田明: 長期維持透析中に再燃した好酸球性多発血管炎性肉芽腫症(Churg-Strauss 症候群)の1例. 日本透析医学会雑誌 47(7):453-457,2014.
 8. 片岡郁穂, 軽部美穂, 磯村杏耶, 齋藤督芸, 駒形嘉紀, 山田明, 要伸也, 有村義宏: 係蹄壁優位に IgA, IgG 沈着を認めたネフローゼ症候群の1例. 日本腎臓学会誌 56(6):834,2014.
 9. 福岡利仁, 早川哲, 清水英樹, 遠藤彰子, 磯村杏耶, 齋藤督芸, 川嶋聡子, 要伸也, 有村義宏, 山田明: 当院 CKD 症例に対するトルバプタンの効果についての検討. 臨床体液 41:11-15,2014.
 10. 竹内弘久, 阿部展次, 大倉康男, 杉山政則: 隆起を呈する病変 悪性 食道原発悪性黒色腫. 消化器内視鏡 26:1620-1621,2014.
 11. 神尾幸見, 橘啓盛, 武井秀史, 新井信見, 三ツ間智也, 清水麗子, 平田佳史, 松脇りえ, 河内利賢, 荻田真, 中里陽子, 長島鎮, 平野浩一, 望月眞, 藤原正親, 菅間博, 近藤晴彦: 高周波スネアを用いて気管支鏡下に切除した腎細胞癌気管支転移の1例. 気管支学 36(5):559,2014.
 12. 中島寛隆, 大倉康男: 早期胃癌の組織型と肉眼像. 消化器内視鏡 26:1097-1105,2014.
 13. 中里陽子, 平野浩一, 藤原正親, 菅間博: 甲状腺粘表皮癌の1例. 日本内分泌・甲状腺外科学会雑誌 31(Suppl.2):277,2014.
 14. 菅間博: 新甲状腺癌取扱い規約・病理編の解説 病理学的事項の変更点および WHO 分類との比較. 日本内分泌・甲状腺外科学会雑誌 31(Suppl.2):213,2014.
 15. 石井順, 有益優, 千葉知宏, 矢澤卓也, 菅間博: 甲状腺髄様癌のカルシトニン産生における PROX1の役割について. 日本内分泌学会雑誌 90(2):806,2014.
 16. 千葉知宏, 住石歩, 菅間博: アデニル酸シンクラーゼ活性化剤による甲状腺癌の増殖・浸潤の抑制作用. 日本内分泌学会雑誌 90(2):806,2014.
 17. 住石歩, 菅間博: 知っておきたい甲状腺診療-検査から専門治療まで- 甲状腺癌の治療戦略 小児甲状腺癌の特徴. ENTONI 172:81-85,2014.
 18. 河野道弘, 望月眞, 坂本穆彦, 大倉康男: 頭頸部扁平上皮癌センチネルリンパ節の転移判定に有用なマーカーの検討 とくにCK5/6によるqRT-PCR法導入の可能性について. 診断病理 31:301-309,2014.
 19. 藤盛孝博, 菅井有, 上杉憲幸, 伊藤利江子, 市川一仁, 山田元, 佐野寧, 荒尾潤, 柏木亮一, 伊藤智雄, 富田茂樹, 大倉康男: 食道病変の病理診断と問題点. 消化器内視鏡 26:1517-1526,2014.
 20. 阿部展次, 大倉康男, 杉山政則: 隆起を呈する病変 境界領域食道顆粒細胞腫. 消化器内視鏡 26:1588-1589,2014.
 21. 中元康雄, 皿谷健, 辻吾吾, 平田彩, 渡邊崇靖, 和田翔子, 大熊康介, 金重真奈美, 下田真史, 西沢知剛, 石田学, 小田未来, 肥留川一郎, 檜垣学, 石井晴之, 小路仁, 軽部美穂, 田中良太, 武井秀史, 呉屋朝幸, 藤原正親, 滝澤始, 後藤元: PET/CT および胸腔鏡下肺生検による組織学的評価を施行し得た肺リウマチ結節の1例. 日本胸部臨床 73:1472-1477,2014.
 22. 大倉康男, 中島寛隆: 食道ポリープの病理. 消化器内視鏡 27:19-26,2015.
 23. 千葉知宏, 菅間博: 充実型乳頭癌: Thyroid Cancer Explore 1:10-13,2015.
 24. 横山政明, 大西宏明, 大塚弘毅, 渡邊卓, 大倉康男, 古瀬純司, 杉山政則: 胆道癌における増殖シグナル伝達因子の発現と遺伝子変異の多様性 KRAS 変異の胆道癌バイオマーカーとしての可能性. 胆と膵 36:143-151,2015.
 25. 上野秀樹, 望月英隆, 落合淳志, 池上雅博, 山田一隆, 白水雄, 亀岡信悟, 九嶋亮治, 高橋慶一, 味岡洋一, 正木忠彦, 大倉康男, 長谷和生, 河内洋, 岩屋啓一, 和田了, 久須美貴哉, 中村好宏: 画像診断との対比で学ぶ大腸疾患アトラス リンパ節構造のない壁外非連続性癌進展病巣(EX)のアトラス. 大腸がん perspective 2:4-10,2015.
 26. 大倉康男: 専門医のためのアトラス 進行胃癌(肉眼型と組織型). 胃がん perspective 7:262-267,2015.
 27. Ohkubo H, Masaki T, Matsushashi N, Kawahara H, Yokoyama T, Nakajima A, Ohkura Y: Histopathologic findings in patients with idiopathic megacolon: a comparison between dilated and non-dilated loops. Neurogastroenterol Motil. 26:571-580,2014.
 28. Kishiki T, Ohnishi H, Masaki T, Ohtsuka K, Ohkura Y, Furuse J, Watanabe T, Sugiyama M: Overexpression of MET is a new predictive marker for anti-EGFR therapy in metastatic colorectal cancer with wild-type KRAS. Cancer Chemother Pharmacol. 73:749-757,2014.
 29. Kishiki T, Ohnishi H, Masaki T, Ohtsuka K, Ohkura Y, Furuse J, Sugiyama M, Watanabe T: Impact of genetic profiles on the efficacy of anti-EGFR antibodies in metastatic colorectal cancer with KRAS mutation. Oncol Rep. 32:57-64, 2014.
 30. Katano H, Hishima T, Mochizuki M, Kodama Y, Oyaizu N, Ota Y, Mine S, Igari T, Ajisawa A, Teruya K, Tanuma J, Kikuchi Y, Uehira T, Shirasaka T, Koibuchi T, Iwamoto A, Oka S, Hasegawa H, Okada S, Yasuoka A: The prevalence of opportunistic infections and malignancies in autopsied patients with human immunodeficiency virus infection in Japan. BMC Infect Dis. 14:229,2014.
 31. Tsuzuki S, Fukumoto H, Mine S, Sato N, Mochizuki M, Hasegawa H, Sekizuka T, Kuroda M, Matsushita T, Katano H: Detection of trichodysplasia spinulosa-associated polyomavirus in a fatal case of myocarditis in a seven-month-old girl. Int J Clin Exp Pathol. 7(8):5308-5312,2014.
 32. Matsumoto Y, Kogashiwa Y, Mochizuki M, Kohno N: Malignant lymphoma arising in the submandibular gland in a patient with HIV infection and associated lymphadenopathy. Int Canc Conf J. 2014. (Published on line).
 33. Matsushima S, Ohtsuka K, Ohnishi H, Fujiwara M, Nakamura H, Morii T, Kishino T, Goto H, Watanabe T: V843I, a lung cancer predisposing EGFR mutation, is responsible for resistance to EGFR tyrosine kinase inhibitors. J Thorac Oncol 9:1377-1384,2014.
 34. Nakaya T, Ogawa S, Manabe I, Tanaka M, Sanada M, Sato T, Taketo MM, Nakao K, Clevers H, Fukayama M, Kuroda M, Nagai R: KLF5 regulates the integrity and oncogenicity of intestinal stem cells. Cancer Research 74:2882-2891,2014.
 35. Nakaya T, Morita K, Kurata A, Ushiku T, Igarashi T, Kuroda M, Fukayama M: Multifocal Kaposiform Hemangioendothelioma in Multiple Visceral Organs: An Autopsy of 9-Day-Old Female Baby: Human Pathology 45:1773-1777,2014.
 36. Oshiro H, Miura M, Iobe H, Kudo T, Shimazu Y, Aoba T, Okudela K, Nagahama K, Sakamaki K, Yoshida M, Nagao T,

Nakaya T, Kurata A, Ohtani O: Lymphatic stomata in the adult human pulmonary ligament. *Lymphatic Research and Biology* 2014.(Online ahead of print).

37. Belzil C, Asada N, Ishiguro KI, Nakaya T, Parsons K, Pendolino V, Neumayer G, Mapelli M, Nakatani Y, Sanada K, Nguyen MD: p600 regulates spindle orientation in apical neural progenitors and contributes to neurogenesis in the developing neocortex. *Biology Open* 3:475-485,2014.
38. Endo T, Yazawa T, Shishido-Hara Y, Fujiwara M, Shimoyamada H, Ishii J, Sato H, Tachibana K, Takei H, Kondo H, Goya T, Endo S, Kamma H. Expression of developing neural transcription factors in lung carcinoid tumors. *Pathol Int.* 64:365-374,2014.
39. Horita A, Kurata A, Ohno S, Shimoyamada H, Saito I, Kamma H, Kuroda M: Immaturity of smooth muscle cells in the neointima is associated with acute coronary syndrome. *Cardiovasc Pathol.* 24(1):26-32,2015.
40. Ishii J, Sato H, Yazawa T, Shishido-Hara Y, Hiramatsu C, Nakatani Y, Kamma H: Class III / IV POU transcription factors expressed in small cell lung cancer cells are involved in proneural / neuroendocrine differentiation. *Pathol Int.* 64(9):415-422,2014.
41. Hirano K, Uno K, Kuwabara H, Kojima K, Ohno SI, Sakurai H, Kamma H, Kurata A: Expression of L-type amino acid transporter 1 in various skin lesions. *Pathol Res Pract.* 210(10):634-639,2014.
42. Shishido-Hara Y, Yazawa T, Nagane M, Higuchi K, Abe-Suzuki S, Kurata M, Kitagawa M, Kamma H, Uchihara T : JC virus inclusions in progressive multifocal leukoencephalopathy : scaffolding promyelocytic leukemia nuclear bodies grow with cell cycle transition through an S-to-G2-like state in enlarging oligodendrocyte nuclei. *J Neuropathol Exp Neurol.* 73 (5): 442-453,2014.
43. Saraya T, Sada M, Ohkuma K, Sakuma S, Tsujimoto N, Yoshida S, Fujiwara M, Tsukahara Y, Kurai D, Ishii H, Takizawa H, Goto H: Evidence of unilateral metastatic pulmonary calcification with a prolonged Fever and arthralgia caused by acute lymphoblastic leukemia in a chronic dialysis patient. *Intern Med* 54:63-67,2015.
44. Kaise M, Kimura R, Nomura K, Kuribayashi Y, Kikuchi D, Iizuka T, Ohkura Y: Accuracy and concordance of endocytoscopic atypia for the diagnosis of gastric cancer. *Endoscopy* 46:827-832,2014.
45. Kaise M, Ohkura Y, Iizuka T, Kimura R, Nomura K, Kuribayashi Y, Yamada A, Yamashita S, Furuhashi T, Kikuchi D, Ogawa O, Matsui A, Mitani T, Hoteiya S: Endocytoscopy is a promising modality with high diagnostic accuracy for gastric cancer. *Endoscopy* 47: 19-25,2015.
46. Yokoi H, Kodama S, Kogashiwa Y, Matsumoto Y, Ohkura Y, Nakagawa T, Kohno N: An endoscopic endonasal approach for early-stage olfactory neuroblastoma: an evaluation of 2 cases with minireview of literature. *Case Rep Otolaryngol* 2015. (Article ID 541026.7pages,2015.01).

著書

1. 寺戸雄一: その他の間葉性(系)腫瘍. 腫瘍病理鑑別アトラス 子宮体癌. 森谷卓也, 柳井広之編. 東京, 文光堂, 2014. p.102-107.
2. 藤原正親: 第12章 呼吸器系の疾患/第14章 腎・泌尿器, 生殖

器系および乳腺の疾患/第15章 内分泌系の疾患. 系統看護学講座 専門基礎分野 病理学 第5版. 東京, 医学書院, 2015. p.202-225,254-275,276-287.

感染症学教室 (微生物学)

講演

1. 大崎敬子, 蔵田訓, 神谷茂: 家族由来 *Helicobacter pylori* 菌株の動物感染性の比較. 第88回日本感染症学会, 福岡, 2014年6月18-20日.
2. 花輪智子, 大崎敬子, 蔵田訓, 神谷茂: 院内感染対策のためのナノ分子コーティング消毒剤の効果. 第88回日本感染症学会, 福岡, 2014年6月18-20日.
3. 蔵田訓, 大崎敬子, 神谷茂, 櫻井一志, 柴森雅文, 中島貴子, 植松直也: Rebamipide は小腸細菌叢に作用し, NSAIDs 誘導小腸潰瘍を予防する. 第88回日本感染症学会, 福岡, 2014年6月18-20日.
4. 小林治, 大崎敬子, 蔵田訓, 神谷茂: インフルエンザ, ILI の臨床像とxTAG RVP FAST を用いたウイルス検出状況. 第88回日本感染症学会, 福岡, 2014年6月18-20日.
5. 神谷茂: ディフィシル菌による院内感染とその対策における最近のトレンド. 島根消化管感染症セミナー特別講演, 出雲, 2014年6月26日.
6. シンシアザマン, 大崎敬子, 今野武津子, 米澤英雄, 神谷茂: The comparison of animal infectivity among strains isolated from family members. 第20回日本ヘリコバクター学会, 東京, 2014年6月28-29日.
7. 大崎敬子, シンシアザマン, 北条史, 米澤英雄, 神谷茂: 鉄制限スナネズミにおける *Helicobacter pylori* 感染の宿主鉄保有状況に対する効果. 第20回日本ヘリコバクター学会, 東京, 2014年6月28-29日.
8. 米澤英雄, 大崎敬子, 神谷茂: ヘリコバクター・ピロリのバイオフィルム形成が及ぼす抗菌薬抵抗性への影響. 第20回日本ヘリコバクター学会, 東京, 2014年6月28-29日.
9. 北条史, 大崎敬子, 米澤英雄, 花輪智子, 蔵田訓, 山口博之, 神谷茂: *Helicobacter pylori* の *Acanthamoeba castellanii* 共培養系における生存性の向上について. 第20回日本ヘリコバクター学会, 東京, 2014年6月28-29日.
10. 米澤英雄, 大崎敬子, 花輪智子, 蔵田訓, 神谷茂: *Helicobacter pylori* バイオフィルム形成が及ぼすアモキシシリン, メトロニダゾールへの抵抗性への影響. 第28回 Bacterial Adherence & Biofilm 学術集会, 東京, 2014年7月9日.
11. Kamiya S, Kurata S, Arae K, Taguchi H: Virulence factors and pathogenesis of *Mycoplasma pneumoniae* infection. (Special lecture) Joint Conference of The 6th Meeting of the Asian Organization for Mycoplasmaology (AOM) & The 7th Meeting of the Chinese Society for Mycoplasmaology (CSM), China, August 22nd-25th, 2014.
12. Taguchi H, Arae K, Kurata S, Kaimiya S: *Mycoplasma pneumoniae* antigens induce IL-8 production via epidermal growth factor receptor pathway. (Special lecture) Joint Conference of The 6th Meeting of the Asian Organization for Mycoplasmaology (AOM) & The 7th Meeting of the Chinese Society for Mycoplasmaology (CSM), China, August 22nd-25th, 2014.
13. Kurata S, Arae K, Taguchi H, Kamiya S: In vitro and in vivo analyses of Th17 response stimulated by *Mycoplasma pneumoniae* antigens.

- Joint Conference of The 6th Meeting of the Asian Organization for Mycoplasmaology (AOM) & The 7th Meeting of the Chinese Society for Mycoplasmaology (CSM), China, August 22nd-25th, 2014.
14. Kamiya S, Zaman C, Yonezawa H, Hojo F, Osaki T: Microbial-ecological study on colonization of human *H. pylori* isolates from father, mother and 3 children of a family in gastric mucosa of Mongolian gerbil. European *Helicobacter* Study Group XXVIIth International Workshop, Italy, September 11th-13th, 2014.
 15. Yonezawa H, Osaki T, Kamiya S: Susceptibility of amoxicillin and metronidazole to *Helicobacter pylori* biofilm. European *Helicobacter* Study Group XXVIIth International Workshop, Italy, September 11th-13th, 2014.
 16. Hojo F, Osaki T, Yonezawa H, Hanawa T, Kurata S, Yamaguchi H, Kamiya S: Effect of *Acanthamoeba castellanii* on survival of *Helicobacter pylori* in co-culture. European *Helicobacter* Study Group XXVIIth International Workshop, Italy, September 11th-13th, 2014.
 17. Kurata S, Osaki T, Nakashima T, Uematsu N, Shibamori M, Sakurai K, Kamiya S: Effect of rebamipide on indomethacin-induced small intestinal injury physiological role of intestinal microbiota. The Join Meeting The XVIII International Symposium on Gnotobiology (XVIII-ISC) III International Ecologic Forum "Environment and human health" (EcoForum), Russia, September 21st-24th, 2014.
 18. Osaki T, Zaman C, Hojo F, Yonezawa H, Kurata S, Hanawa T, Kamiya S: Comparative study on infectivity and adhesion among *Helicobacter pylori* strains isolated from family members. The Join Meeting The XVIII International Symposium on Gnotobiology (XVIII-ISC) III International Ecologic Forum "Environment and human health" (EcoForum), Russia, September 21st-24th, 2014.
 19. Kamiya S: Summary and prospect of Gnotobiology. (Plenary lecture) The Join Meeting The XVIII International Symposium on Gnotobiology (XVIII-ISC) III International Ecologic Forum "Environment and human health" (EcoForum), Russia, September 21st-24th, 2014.
 20. Kamiya S, Yonezawa H, Osaki T, Sugisaki K, Hanawa T, Matsuda H, Nakamura S: Biofilm and bacterial pathogenesis. (Symposium) The Join Meeting The XVIII International Symposium on Gnotobiology (XVIII-ISC) III International Ecologic Forum "Environment and human health" (EcoForum), Russia, September 21st-24th, 2014.
 21. シンシアザマン, 大崎敬子, 神谷茂: 家族由来 *Helicobacter pylori* 菌株の遺伝子型別とスナネズミ感染性の比較. 第17回臨床腸内微生物学会, 東京, 2014年10月4日.
 22. 米澤英雄, 神谷茂: *Helicobacter pylori* のバイオフィルム形成と抗菌薬抵抗性. 第17回日本臨床腸内微生物学会, 東京, 2014年10月4日.
 23. 神谷茂: 小腸正常細菌フローラと生体との関連性-炎症性病変に及ぼすフローラの役割-. Hokkaido Digestive Disease Forum 2014, 札幌, 2014年10月11日.
 24. 神谷茂: *Clostridium difficile* 感染症における probiotics の効果. 第63回日本感染学会東日本地方会学術集会・第61回日本化学療法学会東日本支部総会合同学会, 東京, 2014年10月29-31日.
 25. Kamiya S: Introduction for "Intestinal Microbiota, Intractable disease and Autoimmunity". 第23回ヤクルト腸内フローラシンポジウム, 東京, 2014年10月31日.
 26. 神谷茂: 無菌マウスを用いた感染病態の研究. 佐々木正五先生百歳長寿記念講演会, 東京, 2014年11月3日.
 27. 神谷茂: *Helicobacter pylori* の新たな基礎的知見〜細菌生態学的研究を中心として〜. 第55回日本消化器病学会甲信越支部例会・第77回日本消化器内視鏡学会甲信越支部例会合同支部例会, 新潟, 2014年11月22日.
 28. 蔵田訓, 大崎敬子, 米澤英雄, 花輪智子, 田口晴彦, 神谷茂: *Mycoplasma pneumoniae* 菌体抗原感作がT細胞サブセットに及ぼす影響. 第48回日本無菌生物ノートバイオロジー学会総会, 広島, 2015年1月30-31日.
 29. 神谷茂: *Clostridium difficile* の病原因子と院内感染対策. 日本消化器病学会近畿支部第102回例会, 京都, 2015年2月21日.
 30. Hojo F, Osaki T, Yonezawa H, Hanawa T, Kurata S, Yamaguchi H, Kamiya S: Transcriptome analysis of *Helicobacter pylori* in co culture with *Acanthamoeba castellanii*. 第12回韓日合同 *H. pylori* カンファレンス, 韓国, 2015年3月21日.
 31. 蔵田訓, 大崎敬子, 米澤英雄, 花輪智子, 田口晴彦, 神谷茂: マウス脾臓細胞を用いた肺炎マイコプラズマ菌体抗原による喘息関連ケモカインの誘導. 第88回日本細菌学会総会, 岐阜, 2015年3月26-28日.
 32. 大崎敬子, シンシアザマン, 北条史, 米澤英雄, 蔵田訓, 花輪智子, 神谷茂: Metagenomic study for gastric microbiota of chronic gastritis patients with or without *Helicobacter pylori* infection. 第88回日本細菌学会総会, 岐阜, 2015年3月26-28日.
 33. 花輪智子, 米澤英雄, 蒲地一成, 大崎敬子, 蔵田訓, 北条史, シンシアザマン, 神谷茂: 百日咳菌3型分泌装置はバイオフィルム形成を促進する. 第88回日本細菌学会総会, 岐阜, 2015年3月26-28日.
 34. 米澤英雄, 大崎敬子, 花輪智子, 蔵田訓, 北条史, シンシアザマン, 神谷茂: *Helicobacter pylori* 外膜タンパク AlpB のバイオフィルム形成への関与. 第88回日本細菌学会総会, 岐阜, 2015年3月26-28日.
 35. 北条史, 大崎敬子, 米澤英雄, 花輪智子, 蔵田訓, 山口博之, 神谷茂: *Helicobacter pylori* の *Acanthamoeba castellanii* 共培養系における生存性の向上とトランスクリプトーム解析. 第88回日本細菌学会総会, 岐阜, 2015年3月26-28日.

論文

1. Okuda M¹, Osaki T, Kikuchi S², Ueda J², Lin Y², Yonezawa H, Maekawa K¹, Hojo F³, Kamiya S, Fukuda Y¹ (Hyogo College of Medicine, ²Aichi Medical University, ³Institute of Laboratory Animals, Kyorin University School of Medicine): Evaluation of a stool antigen test using a monoclonal antibody for native catalase for diagnosis of *Helicobacter pylori* infection in children and adults. J Med Microbiol 63(12):1621-1625, 2014.
2. Zaman C, Osaki T, Yonezawa H, Hanawa T, Kurata S, Kamiya S: Analysis for microbial ecology between *Helicobacter pylori* and gastric microbiota of Mongolian gerbil. J Med Microbiol 63(1):129-137, 2014.
3. Kobayashi T^{1,2}, Osaki T, Oikawa S¹ (Miyagi University, ²RIKEN): Applying data mining to classify age by intestinal microbiota in 92 healthy men using a combination of several restriction enzymes for T-RFLP experiments. Bioscience of Microbiota, Food and Health 33(2):65-78, 2014.
4. Matsui H¹, Takahashi T², Murayama SY³, Uchiyama I⁴, Yamaguchi K⁴, Shigenobu S⁴, Matsumoto T⁵, Kawakubo M⁵, Horiuchi K⁵, Ota H⁵, Osaki T, Kamiya S, Smet A⁶, Flahou B⁶, Ducatelle R⁶,

- Haesebrouck F⁶, Takahashi S⁷, Nakamura S⁸, Nakamura M² (¹Kitasato Institute for Life Sciences and Graduate School of Infection Control Sciences Kitasato University, ²Kitasato University, ³Nihon University, ⁴National Institute for Basic Biology, ⁵Shinshu University, ⁶Ghent University, ⁷Third Department of Internal Medicine, Kyorin University School of Medicine, ⁸Tokyo Women's Medical University): Development of new PCR primers by comparative genomics for the detection of *Helicobacter suis* in gastric biopsy specimens. *Helicobacter* 19(4):260-271, 2014.
5. Kurata S, Osaki T, Yonezawa H, Arae K¹, Taguchi H¹, Kamiya S (¹ Department of Immunology, Faculty of Health Sciences, Kyorin University): Role of IL-17A and IL-10 in the antigen induced inflammation model by *Mycoplasma pneumoniae*. *BMC Microbiology* 14(1):156, 2014.
 6. Inoue S, Niikura M, Inoue M, Mineo S, Kawakami Y¹, Uchida A², Ohnishi H³, Kamiya S, Watanabe T³, Kobayashi F¹ (Azabu University, ²Yamazaki Gakuen University, ³Laboratory Medicine, Kyorin University School of Medicine): The protective effect of CD40 ligand-CD40 signalling is limited during the early phase of *Plasmodium* infection. *FEBS Lett.* 588(13):2147-2153, 2014.
 7. Aiso T¹, Kamiya S, Yonezawa H, Gamou S¹ (¹Department of Molecular Biology, Faculty of Health Sciences, Kyorin University): Overexpression of an antisense RNA, ArrS, increases the acid resistance of *Escherichia coli*. *Microbiology* 160(5): 954- 961, 2014.
 8. Usui M¹, Nanbu Y¹, Oka K², Takahashi M², Inamatsu T³, Asai T⁴, Kamiya S, Tamura Y¹ (¹Rakuno Gakuen University, ²Miyarisan Pharmaceutical Co., Ltd, ³Tokyo Metropolitan Geriatric Hospital, ⁴Gifu University): Genetic relatedness between Japanese and European isolates of *Clostridium difficile* originating from piglets and their risk associated with human health. *Front Microbiol* 5:513. doi:10.3389/fmicb.2014.00513. eCollection 2014.
 9. Kurata S, Nakashima T¹, Osaki T, Uematsu N¹, Shibamori M¹, Sakurai K¹, Kamiya S (¹Otsuka Pharmaceutical Co., Ltd.) : Rebamipide protects small intestinal mucosal injuries caused by indomethacin by modulating intestinal microbiota and the gene expression in intestinal mucosa in a rat model. *J Clin Biochem Nutr* 56(1):20-27, 2015.
 10. Osaki T, Konno M¹, Yonezawa H, Hojo F², Zaman C, Takahashi M¹, Fujisawa S¹, Kamiya S (¹Sapporo Kosei General Hospital, ²Institute of Laboratory Animals, Kyorin University School of Medicine): Analysis of intra - familiar transmission of *Helicobacter pylori* in Japanese families. *J Med Microbiol* 64(1):67-73, 2015.
 11. 北条史¹, 大崎敬子, 米澤英雄, 花輪智子, 蔵田訓, 山口博之², 神谷茂 (¹杏林大・医・実験動物, ²北海道大学): *Helicobacter pylori* の自由生活性アメーバ共培養系における生存性の向上について. *無菌生物 J.germfree life gnotobiol* 44(2): 139-141, 2014.
 12. 米澤英雄, 大崎敬子, 神谷茂: *Helicobacter pylori* のバイオフィーム形成. *無菌生物 J.germfree life gnotobiol* 44(1):41-44, 2014.
 13. 花輪智子, 新庄克也¹, 中里仁美¹, 米澤英雄, 大崎敬子, 蔵田訓, シンシアザマン, 川上速人², 海保房夫¹, 神谷茂 (¹東京理科大学, ²杏林大・医・解剖学): 黄色ブドウ球菌の形成するバイオフィームに対するリネゾリドの影響. *Bacterial Adherence & Biofilm* 27:27-30, 2014.
 14. 今野武津子¹, 横田伸一², 高橋美智子¹, 藤原伸一¹, 大崎敬子, 神谷茂 (¹札幌厚生病院, ²札幌医科大学): 日本人小児の最近のピロリ菌感染率と感染経路について. *ヘリコバクター学会誌* 15(2):68-74, 2014.
 15. 岡健太郎¹, 神谷茂 (¹ミヤリサン製薬株式会社): 腸内フローラと健康・疾病とのかかわり 腸管感染症. *臨床と微生物* 41(2): 137-141, 2014.
 16. 神谷茂: *Clostridium difficile*: 病原性と疫学. *感染症内科* 2(4): 410-417, 2014.
 17. 神谷茂: 腸内細菌叢(フローラ)研究の進歩と臨床への応用. *診断と治療* 102(7):1069-1074, 2014.
 18. 神谷茂, 蔵田訓, 田口晴彦¹ (¹杏林大・保健・免疫学): 医学領域における肺炎マイコプラズマ感染症の基礎と臨床. *家畜診療* 61(6):331-338, 2014.
 19. 神谷茂, 大崎敬子: 腸内細菌研究の基礎分野における近年の進歩-腸内細菌の解析方法, 代謝-. *医学のあゆみ* 251(1): 5-11, 2014.
 20. 神谷茂: 嫌気性菌 破傷風菌, 微生物検査イエローページ. *臨床検査* 58(11):1394-1396, 2014.
 21. 神谷茂: 嫌気性菌 バクテロイデス, 微生物検査イエローページ. *臨床検査* 58(11):1397-1400, 2014.
 22. 神谷茂: ディフィシル菌感染症の基礎と臨床-院内感染とその対策を含めて. *臨床腸内微生物学誌* 17(1):20-23, 2014.
 23. 米澤英雄, 神谷茂: *Helicobacter pylori* のバイオフィーム形成と抗菌薬抵抗性. *臨床腸内微生物学誌* 17(1):59-64, 2014.
 24. シンシアザマン, 神谷茂: 家族由来 *Helicobacter pylori* 菌株の遺伝子型別とスナネズミ観戦性の比較. *臨床腸内微生物学誌* 17(1):69-71, 2014.
 25. 神谷茂: 腸内マイクロビオータと糞便移植療法. *化学療法の領域* 31(1):74-81, 2015.
 26. 神谷茂: 乳酸菌製剤の菌交代現象への効果. *日本医事新報* 4732:103-104, 2015.
 27. 大崎敬子, 神谷茂: *H. pylori* 感染症の疫学, 感染経路. *臨床と微生物* 42(2):113-118, 2015.
- 著書**
1. 神谷茂: ブラック微生物学 第3版(原書8版). 神谷茂, 高橋秀実, 林英生, 俣野哲朗監訳. 東京, 丸善出版, 2014.
 2. 神谷茂: 第3章 顕微鏡と染色. ブラック微生物学 第3版(原書8版). 神谷茂, 高橋秀実, 林英生, 俣野哲朗監訳. 東京, 丸善出版, 2014. p.50-73.
 3. 神谷茂: 腸内フローラシンポジウム22. 東京, 医薬出版, 2014.
 4. 神谷茂: はじめに, 腸内フローラと加齢. 腸内フローラシンポジウム22. 東京, 医薬出版, 2014. p.1-4.
 5. 神谷茂: 病原微生物学 基礎と臨床. 荒川宜親, 神谷茂, 柳雄介編. 東京, 東京化学同人, 2014.
 6. 神谷茂: 微生物学概論. 病原微生物学 基礎と臨床. 荒川宜親, 神谷茂, 柳雄介編. 東京, 東京化学同人, 2014. p.1-6.
 7. 神谷茂: グラム陰性偏性嫌気性桿菌および球菌. 病原微生物学 基礎と臨床. 荒川宜親, 神谷茂, 柳雄介編. 東京, 東京化学同人, 2014. p.92-96.
 8. 神谷茂: グラム陰性らせん菌. 病原微生物学 基礎と臨床. 荒川宜親, 神谷茂, 柳雄介編. 東京, 東京化学同人, 2014. p.97-114.
 9. 神谷茂: 芽胞形成菌. 病原微生物学 基礎と臨床. 荒川宜親, 神谷茂, 柳雄介編. 東京, 東京化学同人, 2014. p.114-119.
 10. 神谷茂: グラム陽性無芽胞桿菌. 病原微生物学 基礎と臨床. 荒川宜親, 神谷茂, 柳雄介編. 東京, 東京化学同人, 2014. p.119-120.

11. 神谷茂:細菌および寄生虫による消化器感染症. 病原微生物学 基礎と臨床. 荒川宜親, 神谷茂, 柳雄介編. 東京, 東京化学同人, 2014. p.231-236.
12. 神谷茂:ベクターが介在する細菌感染症. 病原微生物学 基礎と臨床. 荒川宜親, 神谷茂, 柳雄介編. 東京, 東京化学同人, 2014. p.268-270.
13. 神谷茂:ベクターが介在する寄生虫感染症. 病原微生物学 基礎と臨床. 荒川宜親, 神谷茂, 柳雄介編. 東京, 東京化学同人, 2014. p.270-272.
14. 神谷茂:敗血症・血流感染症. 病原微生物学 基礎と臨床. 荒川宜親, 神谷茂, 柳雄介編. 東京, 東京化学同人, 2014. p.274-275.
15. 神谷茂:コラム4「クオラムセンシング」. 病原微生物学 基礎と臨床. 荒川宜親, 神谷茂, 柳雄介編. 東京, 東京化学同人, 2014. p.88.
16. 神谷茂:コラム5「プレデター細菌」. 病原微生物学 基礎と臨床. 荒川宜親, 神谷茂, 柳雄介編. 東京, 東京化学同人, 2014. p.90.
17. 神谷茂:コラム6「プロバイオティクス」. 病原微生物学 基礎と臨床. 荒川宜親, 神谷茂, 柳雄介編. 東京, 東京化学同人, 2014. p.118.
18. 花輪智子:第3章 細菌感染症 B.主要な細菌と疾患. みてわかる薬学 図解 微生物学・感染症・化学療法. 藤井暢弘, 山本友子編. 東京, 南山堂, 2014. p.168-231.

その他

1. 神谷茂, 北条史:クリーニングに使用される界面活性剤と溶媒の病原性原生動物に及ぼす効果. 平成25年度クリーニングと公衆衛生に関する研究報告書(クリーニングと公衆衛生に関する研究委員会委員長, 相澤好治編), 第40巻 p.19-25, 2014.
2. Shigeru Kamiya (Chairperson): "New Strategies for *H. pylori* Eradication Treatment.", The 12th Japan-Korea Joint Meeting on *Helicobacter* Infection- New Perspective in *Helicobacter* Research and Practice -, Korea, March 20th- 21st, 2015.
3. 神谷茂:ヘリコバクター感染症の最新知見-*H. pylori* の感染病態, 診断, 治療を中心として はじめに. 臨床と微生物 42(2):97, 2015.
4. 神谷茂:大山健康財団創立40周年に際して-偉大な諸先輩に接して-. 公益財団法人 大山健康財団 40年のあゆみ (1974-2014), page iii, 2015.
5. 神谷茂:「微生物って悪者なの?」ビフィズス菌電子顕微鏡写真提供. もっと知りたい感染症 Science Window 子ども版. 独立行政法人科学技術振興機構, p. 30-31, 2015.
6. 神谷茂:「腸から始まる健康ライフ」腸内フローラについて解説, TBS ラジオ, 2015年3月30日.

感染症学教室 (寄生虫学)

講演

学会・研究会, 国際学会, ポスターセッション

1. 井上信一, 新倉保, 井上愛美, 小林富美恵:マラリア原虫感染防御の感染初期における $\gamma \delta$ T 細胞を介した樹上細胞活性化の重要性. 第25回日本生体防御学会学術総会・日本比較免疫学会第26回学術集会, 仙台, 2014年7月9-11日.
2. Niikura M, Inoue S, Inoue M, Kobayashi F: The role of nucleoside transporters during asexual phase of *Plasmodium berghei* parasites. International Congress of Parasitology (ICOPA XIII), Mexico, August 10th-15th, 2014.
3. Inoue S, Niikura M, Inoue M, Mineo S, Kobayashi F: $\gamma \delta$ T cell-involved protective immunity against *Plasmodium berghei* XAT. International Congress of Parasitology (ICOPA XIII), Mexico, August 10th-15th, 2014.
4. 新倉保, 井上信一, 井上愛美, 小林富美恵:妊娠によるマラリアの重症病態化機構の解明. 第22回分子寄生虫学ワークショップ&第12回分子寄生虫マラリアフォーラム合同大会, 帯広, 2014年8月31日-9月3日.
5. 鈴木重雄, 彦坂健児, 小松谷啓介, Balogun O. Emmanuel, 新倉保, 小林富美恵, 高橋究, 田中徹, 中島元夫, 北潔: アミノレブリン酸(ALA)/鉄化合物のマラリア原虫感染マウスに対する治療・予防 効果第22回分子寄生虫学ワークショップ&第12回分子寄生虫マラリアフォーラム合同大会, 帯広, 2014年8月31日-9月3日.
6. 井上信一, 新倉保, 井上愛美, 小林富美恵: マラリア原虫感染防御の免疫機構を探る ~*Plasmodium burgher* XAT と $\gamma \delta$ T 細胞を通じて-. 第22回分子寄生虫学ワークショップ&第12回分子寄生虫マラリアフォーラム合同大会, 帯広, 2014年8月31日-9月3日.
7. Nakamura M, Wada H, Sata M, Inui T, Honda K, Nakamoto K, Higaki M, Takata S, Yokoyama T, Kudo A, Inoue S, Hanawa T, Kobayashi F, Kamma H, Takizawa H, Goto H: Interleukin-17A/F regulates MMP-9 expression in the lung of mice after inhalation of cigarette smoke. European Respiratory Society Congress 2014, Germany, September 6th-10th, 2014.
8. Niikura M, Inoue S, Inoue M, Kobayashi F: Severe pathology in pregnant mice during malaria. The 18th Japanese-German Cooperative Symposium on Protozoan Diseases. Germany, October 1st-3rd, 2014.
9. Inoue S, Niikura M, Inoue M, Kobayashi F: $\gamma \delta$ T cells are key player for protective immunity against *Plasmodium berghei* XAT infection. The 18th Japanese-German Cooperative Symposium on Protozoan Diseases. Germany, October 1st-3rd, 2014.
10. Inoue M, Tang J, Miyakoda M, Kaneko O, Yui K, Culleton R: The species specificity of immunity generated by whole parasite immunization against the blood stages and pre - erythrocytic stages of *Plasmodium yoelii*. The 18th Japanese - German Cooperative Symposium on Protozoan Diseases. Germany, October 1st-3rd, 2014.
11. 峯松松一郎, 新倉保, 井上信一, 黒田雅彦, 小林富美恵: マウスモデルを用いた妊娠中のマラリアによる胎盤組織障害機序の解明. 第22回日本胎盤学会学術集会, 京都, 2014年10月3-4日.
12. 新倉保, 井上信一, 井上愛美, 小林富美恵: 赤内期マラリア原虫における nucleoside transporter の生理的役割 Nucleoside transporter 1 plays an essential role for transporting nucleosides and nucleobases in *Plasmodium burgher* in the asexual phase. 第55階日本熱帯医学会・第29回日本国際保健医療学会合同大会, 東京, 2014年11月1-3日.
13. 小林富美恵: 「女性研究者のキャリアパス形成」 テーマ A: 如何にしてキャリアを積み上げてきたか ~産官学の各領域から~. 熱日本熱帯医学会男女共同参画推進委員会主催ミニシンポジウム in 第55回日本熱帯医学会・第29回日本国際保健医療学会合同大会, 東京, 2014年11月1-3日.
14. Sasaoka C, Sakamoto H, Ito D, Takeo T, Sattabongkot J, Takashima E, Tsuboi T: Characterization of *Plasmodium falciparum* MAS170

- as novel malaria blood-stage vaccine candidate. 63rd Annual Meeting of American Society of Tropical Medicine and Hygiene, USA, November 2nd-6th, 2014.
15. Kobayashi F, Inoue S, Niikura M, Inoue M: The role of $\gamma \delta$ T cells in protective immunity to malaria. Seminars in Departmental Lecture Theatre of PGIMER, India, November 11th-12th, 2014.
 16. Niikura M: Mouse models of pregnancy-associated malaria. Seminars in Departmental Lecture Theatre of PGIMER, India, November 11th-12th, 2014.
 17. 井上信一, 新倉保, 井上愛美, 石川香, 中田和人, 林純一, 小林富美恵: 免疫細胞内ミトコンドリア活性酸素がマラリア感染防御において果たす役割. 第43回杏林医学会総会(平成26年度杏林大学医学部研究奨励賞中間報告), 三鷹, 2014年11月15日.
 18. 関根将, 新倉保, 井上信一, 小林富美恵: マラリアにおけるプリンスクレオチド合成と ATP 産生との関係. 第43回杏林医学会総会, 三鷹, 2014年11月15日.
 19. 井上信一, 新倉保, 井上愛美, 小林富美恵: マラリア原虫感染初期における $\gamma \delta$ T 細胞を介した樹上細胞活性化の重要性. 第37回日本分子生物学会年会, 横浜, 2014年11月25-27日.
 20. 本間一, 平井誠, 新倉保, 美田敏宏, 小林富美恵, 堀井俊宏, 遠藤弘良: DNA ポリメラーゼ δ の校正機能欠損による高頻度突然変異発生型ネズミマラリア原虫のゲノムワイド変異解析. 第37回日本分子生物学会年会, 横浜, 2014年11月25-27日.
 21. Niikura M, Inoue S, Inoue M, Kobayashi F: Purine nucleosides were mainly transported by nucleoside transporter 1 during the asexual phase of *Plasmodium*. The 2nd Asian Congress of Protistology (ACOP 2014) and the 9th conference on ciliate biology, India, November 27th-29th, 2014.
 22. Inoue S, Niikura M, Inoue M, Kobayashi F: $\gamma \delta$ T cells promote humoral immunity to *Plasmodium berghei* XAT. 第43回日本免疫学会学術集会, 京都, 2014年12月10-12日.
 23. Moriyasu T, Nakamura R, Inoue M, Abkhallo H, Culleton R, Hamano S: *Schistosoma* infection protects against liver stage malaria parasites, and does not impair the efficacy of a live sporozoite vaccine. 第8回寄生虫感染免疫研究会, 大阪, 2015年2月27-28日.
 24. Inoue M, Inoue S, Niikura M, Osaka M, Culleton R, Kobayashi F: The effect of *Schistosoma mansoni* infection on malaria sporozoite induced immunity. 第8回寄生虫感染免疫研究会, 大阪, 2015年2月27-28日.
 25. Abkhallo H, Inoue M, Xangsayath P, Hunt P, Zoungana A, Mitake H, Kaneko O, Mustonen V, Fischer A, Illingworth C, Martinelli A, Shwen HY, Pain A, Culleton R: Quantitative whole genome resequencing and genetic linkage analyses to identify genes controlling virulence in malaria parasites. 第84回日本寄生虫学会大会, 三鷹, 2015年3月21-22日.
 26. 井上愛美, 井上信一, 新倉保, 尾坂真, 森保妙子, 濱野真二郎, カレトン リチャード, 小林富美恵: スポロゾイト接種による赤外期マラリア免疫に対するマンソン住血吸虫感染の影響. 第84回日本寄生虫学会大会, 三鷹, 2015年3月21-22日.
 27. 森保妙子, 濱野淳朗, Richard Culleton, 中村梨沙, Hussein Abkhallo, 井上愛美, 濱野真二郎: *Schistosoma* infection protects against liver stage malaria parasites, and does not impair the efficacy of a live sporozoite vaccine. 第84回日本寄生虫学会大会, 三鷹, 2015年3月21-22日.
 28. 井上信一, 新倉保, 井上愛美, 小林富美恵: $\gamma \delta$ T 細胞は *Plasmodium berghei* XAT 感染に対する液性免疫の維持に働く. 第84回日本寄生虫学会大会, 三鷹, 2015年3月21-22日.
 29. Culleton R, Abkhallo H, Akamatsu M, Hunja C, Inoue M, Konote S, Mitake H, Moriyasu T, Yonemura Y, Nakamura R, Hamano S: The role of the innate immune response in blocking the transmission of the rodent malaria parasite *Plasmodium yoelii* to mosquitoes. 第84回日本寄生虫学会大会, 三鷹, 2015年3月21-22日.
 30. 本間一, 平井誠, 新倉保, 美田敏宏, 小林富美恵, 堀井俊宏, 遠藤弘良: ミューテーターマラリア原虫を用いた突然変異蓄積パターンの解析. 第84回日本寄生虫学会大会, 三鷹, 2015年3月21-22日.
- 一般向け公開講座
1. 小林富美恵: 身近に迫る寄生虫 ～寄生虫感染症の現状とその対策・予防法～. 杏林大学オープンキャンパス模擬講義. 三鷹, 2014年7月26日.
- ### 論文
- 原著論文
1. Inoue S-I, Niikura M, Inoue M, Mineo S, Kawakami Y¹, Uchida A², Ohnishi H³, Kamiya S, Watanabe T³, Kobayashi F (¹Azabu University, ²Yamazaki Gakuen University, ³Laboratory of Medicine, Kyorin University School of Medicine): The protective effect of CD40 ligand-CD40 signalling is limited during the early phase of *Plasmodium* infection. FEBS lett. 588(13): 2147-2153, 2014.
 2. Abkhallo HM¹, Tangena JA¹, Tang J¹, Kobayashi N¹, Inoue M, Zoungana A¹, Colegrave N², Culleton R¹ (¹Nagasaki University, ²University of Edinburgh): Within-host Competition Does Not Select for Virulence in Malaria Parasites; Studies with *Plasmodium yoelii*. PLoS Pathog. 11(2):e1004628. doi:10.1371/journal.ppat.1004628. eCollection (2015).
- ### 報告書
1. 小林富美恵, 渡邊卓, 大西宏明, 井上信一, 新倉保: 平成25年度杏林大学医学部共同研究プロジェクト受賞 研究成果報告「マウスにおける造血系攪乱とその制御機構の解明」, 杏林医学会雑誌 45(3) (補遺), s27-s29, 2014.
 2. 新倉保: 第3回杏林医学会研究奨励賞受賞報告「妊娠中のマラリアの病態モデルを用いた病態発症機構の解明」, 杏林医学会雑誌 45(4) (補遺):s61, 2014.
 3. 井上信一: 公益財団法人 加藤記念バイオサイエンス振興財団 第24回研究助成報告書「 $\gamma \delta$ T細胞によるマラリア免疫記憶の制御機構の解明」.
 4. 井上信一: 公益財団法人 上原記念生命科学財団 平成25年度研究助成報告書「 $\gamma \delta$ T細胞によるマラリア免疫記憶の制御」.
 5. 井上信一: 一般財団法人 守谷育英会 第30回研究助成中間報告書「ミトコンドリア活性酸素によるマラリア防御免疫の制御機構の解明」.
- ### その他
- 新聞掲載など
1. 小林富美恵: 「ぎょう虫症」, 夕刊フジ, 健康・医療欄, 2014年6月12日号.
- 受賞
1. 井上信一: 平成26年度 医学部研究奨励賞「免疫細胞のミトコンドリア活性酸素がマラリア感染防御において果たす役割」. 2014年4月16日.
 2. 新倉保: 第3回杏林医学会研究奨励賞受賞. 2014年11月15日.

学会主催

1. 小林富美恵：第84回日本寄生虫学会大会主催，三鷹，2014年3月21-22日。

その他

1. 小林富美恵：編集後記。杏林医学会雑誌，45(4)（補遺），2014。
2. 小林富美恵：Hindustan Times：“Japanese scientist delivers lecture on malaria at PGI.”Hindustan Times, Chandigarh, November 11th, 2014.
3. 小林富美恵：Chandigarh Newline：“PU professor entrusted with Japanese project on malaria.”Express News Service, Chandigarh, November 11th, 2014.
4. 小林富美恵：Times of Chandigarh：“PGI, Japan university to decode severe malaria cases.”Candigarh, November 11th, 2014.

衛生学公衆衛生学教室

講演

1. Yoshida M, Mizuki N, Kawagoe T, Nakamura J, Takeuchi M, Okada E: The large-scale epidemiological study of the change in the number of prescriptions of various contact lenses in Japan - The results of analysis of 8 years of prospective research of approximately 930,000 eyes of Japanese subjects. ARVO2014, USA, May 4th-8th, 2014.
2. Okada E, Mizuki N, Kawagoe T, Nakamura J, Takeuchi M, Yoshida M: The large-scale epidemiological study of the change in the number of prescription for single vision and multifocal contact lenses - The results of comparative analysis of 8 years prospective research of approximately 180,000 eyes of Japanese subjects aged 40 years or older. ARVO2014, USA, May 4th-8th, 2014.
3. 松井知子：ストレスの基礎理解とストレスマネジメント(リラクゼーション)。町田市教育委員会初任者研修会セミナー，町田，2014年5月8日。
4. 小笠原準悦，伊藤知洋，高成準，三浦健人，櫻井拓也，井澤鉄也，中野法彦，長澤純一，木崎節子，大野秀樹：アスパラガス茎熱水抽出物(ETAS)はアミロイド β による細胞障害性を抑制する。第84回日本衛生学会学術総会，岡山，2014年5月25-27日。
5. 田村憲治，近藤美則，荻田香苗，矢野栄二，井上まり子，本間純一，原邦夫：SPM 時間値による異常な PM2.5時間値の同定第84回日本衛生学会学術総会，岡山，2014年5月25-27日。
6. 櫻井拓也，小笠原準悦，木崎節子，白土健，石橋義永，斎藤大蔵，大石修司，芳賀脩光，鈴木健二，大野秀樹：運動は肥満による脂肪組織の線維化関連因子の発現増加を減弱させる。第84回日本衛生学会学術総会，岡山，2014年5月25-27日。
7. 谷口善仁，大前和幸，木下政人：メダカを用いた AhR シグナルバイオモニタリング系の開発。第84回日本衛生学会学術総会，岡山，2014年5月25-27日。
8. 荻田香苗，原田まつ子，吉田正雄，井上聡，小風暁：大学生の平衡機能と心拍変動および気分・感情状態との関連。第84回日本衛生学会学術総会，岡山，2014年5月25-27日。
9. 松井知子：これからの職場復帰支援を考える～心理職の立場から～。メンタルヘルスケア・ジャパン2014セミナー，東京，2014年5月27-29。
10. 白土健，木崎節子，大野秀樹，今泉和彦：リポ多糖刺激に伴うマクロファージ炎症性応答に及ぼすグルコサミンの抑制作用とメカニズム。第68回日本栄養・食糧学会大会，札幌，2014年5月30日-6月1日。
11. 久米梢子，久保祐美子，神山麻由子，岡本博照，小泉健雄，和田貴子：二次救急病院に勤務する救急救命士に対する評価(第2報)多施設調査報告。第17回日本臨床救急医学会総会，宇都宮，2014年5月31日-6月1日。
12. 石川守，吉田正雄：特定健診・特定保健指導に対する評価の試み。第24回九州農村医学会，熊本，2014年6月7日。
13. 角田透，飯島美世子，斎藤照代，炭山隆，錦戸典子，松井知子，森崎美奈子，山田智子，野田一雄：事業場におけるメンタルヘルス対策の有用性を評価するツールの開発。第21回日本産業精神保健学会，北九州市，2014年7月11-12日。
14. 松井知子：メンタルヘルス[社内研修の進め方]。東京産業保健推進センター研修会(人事・労務・衛生管理者研修)，東京，2014年7月14日。
15. 角田透：産業保健活動 産業医としての業務について。東京産業保健推進センター研修会(日医認定産業医研修)，東京，2014年7月18日。
16. 角田透：健康の定義～これからの EAP に求められるもの～第15回日本 EAP 協会総会，東京，2014年7月26日。
17. 白土健，木崎節子，櫻井拓也，小笠原準悦，大野秀樹，今泉和彦：マクロファージ炎症性応答に及ぼすグルコサミンの効果とメカニズム。第161回日本体力医学会関東地方会，坂戸，2014年7月26日。
18. Ogasawara J, Takanari J, Sakurai T, Shirato K, Ishibashi Y, Nagasawa J, Izawa T, Ohno H, Kizaki T: ETAS, an enzyme-treated asparagus extract, has the ability to enhance both the differentiation and the neurite outgrowth in PC12 cells. The 22nd ICNIM, Sapporo, July 26-27, 2014.
19. 松井知子：ストレスの基礎理解とストレスマネジメント。昭島市教育委員会初任者研修会セミナー，昭島，2014年8月1日。
20. Yoshida M, Ishikawa M, Take S, Kokaze A, Haeada M, Karita K: Association of smoking with intraocular pressure in middle-aged and older Japanese residents. 20th IEA World Congress of Epidemiology, USA, August 17th-21st, 2014.
21. 石川守，細井克美，石崎竜太郎，保坂はるみ，高槻勝義，及川孝光，吉田正雄：人間ドック受診者が求める診察・当日結果説明とは(受診者アンケートに基づく当施設の取り組み)。第55回日本人間ドック学会学術大会，福岡，2014年9月4-5日。
22. 松井知子：メンタルヘルス[社内研修の進め方]。東京産業保健推進センター研修会(保健師・看護師研修)，東京，2014年9月8日。
23. 松井知子：メンタルヘルス[社内研修の進め方]。東京産業保健推進センター研修会(人事・労務・衛生管理者研修)，東京，2014年9月8日。
24. 櫻井拓也，小笠原準悦，白土健，藤原智徳，赤川公朗，大野秀樹：アルツハイマー病発症リスクを軽減する運動効果。第7回脳・内分泌系からの運動の意義を考える会。長崎，2014年9月18日。
25. 田中剛貴，加藤久詞，柴原拓哉，高倉久志，増田慎也，稗田睦子，白土健，小笠原準悦，櫻井拓也，木崎節子，大野秀樹，井澤鉄也：脂肪細胞の分化及び脂肪滴形成に及ぼすメラトニンの影響。第69回日本体力医学会大会，長崎，2014年9月19-21日。
26. 小笠原準悦，櫻井拓也，白土健，長澤純一，井澤鉄也，大野秀樹，木崎節子：走運動トレーニングはブライト脂肪細胞の形成を促進するか。第69回日本体力医学会大会，長崎，2014年9月19-21日。

27. 櫻井拓也, 小笠原準悦, 白土健, 石橋義永, 井澤鉄也, 大野秀樹, 木崎節子:運動によって減少するTGF- β -TIMP1経路は脂肪細胞の糖取り込みに関与する. 第69回日本体力医学会大会, 長崎, 2014年9月19-21日.
28. 鈴木英樹, 辻本尚弥, 佐藤章悟, 白土健, 立屋敷かおる, 今泉和彦:ギプス固定によるラット速筋II型線維の萎縮は β_2 -作動薬投与で抑制される. 第69回日本体力医学会大会, 長崎, 2014年9月19-21日.
29. 加藤久詞, 柴原拓哉, 田中剛貴, 増田慎也, 高倉久志, 稗田睦子, 白土健, 小笠原準悦, 櫻井拓也, 木崎節子, 大野秀樹, 井澤鉄也:時計遺伝子の発現リズムに合わせたイソプロテレノール刺激が脂肪分解反応に及ぼす影響. 第69回日本体力医学会大会, 長崎, 2014年9月19-21日.
30. 柴原拓哉, 加藤久詞, 田中剛貴, 増田慎也, 高倉久志, 稗田睦子, 白土健, 小笠原準悦, 櫻井拓也, 木崎節子, 大野秀樹, 井澤鉄也:運動トレーニングが脂肪組織のホメオステック遺伝子と骨形成タンパク質に及ぼす影響. 第69回日本体力医学会大会, 長崎, 2014年9月19-21日.
31. 今野正弘, 高井健太郎, 山下としえ, 岳真一郎, 吉田正雄:拘縮により腋窩に生じた皮膚トラブル改善に向けての試み(ハイガーゼからファイバータオルへ). 第56回全日本病院学会, 福岡, 2014年9月20-21日.
32. 松井知子:メンタルヘルス不調者への気づきと対応. 神奈川県労務安全衛生協会平塚支部「事業場内メンタルヘルス推進担当者養成研修」, 平塚, 2014年9月25日.
33. 白土健, 櫻井拓也, 小笠原準悦, 佐藤章悟, 今泉和彦, 大野秀樹, 木崎節子:マクロファージ時計遺伝子 Rev-erba の発現に及ぼす高血糖の影響. 第87回日本生化学会大会, 京都, 2014年10月15-18日.
34. 角田透:産業保健活動 産業医としての業務について. 東京産業保健推進センター研修会(日医認定産業医研修), 東京, 2014年10月20日.
35. 久米梢子, 久保祐美子, 神山麻由子, 岡本博照, 小泉健雄, 和田貴子:救急救命士に対する二次救急病院での評価(第2報)多施設調査の報告. 第42回日本救急医学会総会, 福岡, 2014年10月28-30日.
36. 松井知子:産業・組織臨床の基礎知識と応用と魅力. 山口県臨床心理士会主催平成26年度第2回全体研修会, 山口, 2014年10月18日.
37. 楠田美奈, 岩見文博, 石野晶子, 加藤英世, 大屋千鶴, 片桐朝美, 太田ひろみ, 大嶺智子, 照屋浩司:幼児・児童を対象とした音響的骨評価値の標準域設定に関する研究. 第73回日本公衆衛生学会総会, 宇都宮, 2014年11月5-7日.
38. 中島宏, 照屋浩司, 島田直樹, 真鍋知子, 櫻井裕:食後高血糖のスクリーニング検査としての1,5-anhydroglucitol. 第73回日本公衆衛生学会総会, 宇都宮, 2014年11月5-7日.
39. 岡本博照, 照屋浩司, 大嶺智子, 楠田美奈, 深澤進次, 岩見文博, 松井知子, 角田透:中高年者の脳性ナトリウム利尿ペプチド(BNP)に影響を及ぼす要因について. 第73回日本公衆衛生学会総会, 宇都宮, 2014年11月5-7日.
40. 原田まつ子, 吉田正雄, 井上聡, 小風暁, 荻田香苗:若年女性の味覚感度と食生活習慣との関係. 第73回日本公衆衛生学会総会, 宇都宮, 平成26年11月5-7日.
41. 吉田正雄, 井上真奈美, 岩崎基, 岳真一郎, 津金昌一郎:白内障のリスク要因と一次予防対策解明のための分析疫学的研究. 第22回日本慢性期医療学会, 熊本, 2014年11月20-21日.
42. 吉田正雄, 井上真奈美, 岩崎基, 岳真一郎, 津金昌一郎:白内障, 緑内障および高度近視のリスク要因と一次予防対策解明のための分析疫学的研究—白内障研究の解析結果について—. 第43回杏林医学会総会, 三鷹, 2014年11月15日.
43. 白土健, 櫻井拓也, 小笠原準悦, 木本紀代子, 高橋和人, 住谷由, 石田均, 大野秀樹, 木崎節子:高グルコース培養によるマクロファージの時計遺伝子 Rev-erb α の発現変化とその生理的役割. 第43回杏林医学会総会, 三鷹, 2014年11月15日.
44. 松井知子:厚生労働行政と産業・組織心理臨床との関わり—関連法規(労働安全衛生法)の理解, 職場環境改善と心理職の役割, メンタルヘルスと法遵守関連法規など—. 平成26年度一般社団法人日本臨床心理士会臨床心理講座「継続講座—産業・組織心理臨床基礎研修(全6回)〜」, 東京, 2014年11月15日.
45. 荻田香苗, 原田まつ子, 吉田正雄, 井上聡:大学生の自律神経機能と味覚感度および気分プロフィールとの関連. 第79回日本民族衛生学会総会, つくば, 2014年11月21-22日.
46. 竹前理映子, 岡本博照, 松井知子, 阿部淑子, 照屋浩司, 角田透, 竹前健彦:玄米酵素ハイゲンキスピリナ入り摂取と冷え性との関連について. 第79回日本民族衛生学会総会, つくば, 2014年11月21-22日.
47. 谷口善仁, 殿山泰弘, 亀井保博:老化関連因子 Zmpste24の欠損がメダカに与える影響. 第37回日本分子生物学会年会, 横浜, 2014年11月25-27日.
48. 松井知子:メンタルヘルスの基礎理解ストレスをためないコミュニケーション方法. 社会福祉法人至誠学舎東京サンメール尚和, 西東京, 2014年12月1-2日.
49. 荻田香苗:杏林大学 女性・若手研究者支援の取り組み. 平成26年度文部科学省科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業(一般型)」女性研究者研究活動支援事業キックオフシンポジウム, 三鷹, 2015年1月24日.
50. 加藤久詞, 田中剛貴, 柴原拓哉, 増田慎也, 小笠原準悦, 櫻井拓也, 木崎節子, 大野秀樹, 井澤鉄也:3T3-L1細胞におけるメラトニン添加はミトコンドリア新生を促すか. 第29回日本体力医学会近畿地方会, 京都, 2015年1月24日.
51. 柴原拓哉, 加藤久詞, 田中剛貴, 増田慎也, 小笠原準悦, 櫻井拓也, 木崎節子, 大野秀樹, 井澤鉄也:運動トレーニングが脂肪組織の発生遺伝子と骨形成タンパク質に及ぼす影響. 第29回日本体力医学会近畿地方会, 京都, 2015年1月24日.
52. 田中剛貴, 加藤久詞, 柴原拓哉, 増田慎也, 小笠原準悦, 櫻井拓也, 木崎節子, 大野秀樹, 井澤鉄也:運動トレーニングが脂肪組織のポジティブモデリングに及ぼす影響. 第29回日本体力医学会近畿地方会, 京都, 2015年1月24日.
53. 松井知子:女性のキャリアに影響する心理的課題—マタニティブルー, 更年期, キャリアの悩み—. 東京経営者協会セミナー, 東京, 2015年1月28日.
54. 松井知子:はたらく場所での心理臨床と労働行政について—法改正など—最新情報をふまえて. 千葉県臨床心理士研修会, 千葉, 2015年2月2日.
55. 角田透:室内空気の性状と健康. 建築物環境衛生管理技術者講習会, 東京, 2015年2月6日.
56. 角田透:感染症の予防. 建築物環境衛生管理技術者講習会, 東京, 2015年2月7日.
57. 角田透:音・振動と健康. 建築物環境衛生管理技術者講習会, 東京, 2015年2月6日.
58. 角田透:磁場・電場・電磁場と影響. 建築物環境衛生管理技術者講習会, 東京, 2015年2月7日.
59. 松井知子:メンタルヘルスの基礎理解 職場のラインケア—. 練馬区教育委員会生活指導主任セミナー, 東京, 2015年2月10

- 日.
60. 角田透:水と健康. 建築物環境衛生管理技術者講習会, 東京, 2015年2月12日.
 61. 松井知子:事例対応における留意点・事例検討. 第4回メンタルヘルス基礎講座 神奈川労務安全衛生協会平塚支部, 平塚, 2015年2月20日.
 62. 松井知子:メンタルヘルスの基礎理解とストレスへの対処法. 至誠学舎メンタルヘルスセミナー, 立川, 2015年3月6日.
 63. 角田透:「知らなかった! ではすまされないストレスチェックの法制化」(第1回)労働政策審議会安全衛生分科会での最近の動向. 日本 EAP 協会全6回シリーズ研修会, 東京, 2015年3月26日.
 64. 荻田香苗:日本衛生学会における男女共同参画推進への取り組み. 自然科学系学会の女性研究者支援活動の現状と課題. 第85回日本衛生学会学術総会, 和歌山, 2015年3月26-28日.
 65. 荻田香苗, 原田まつ子, 吉田正雄, 井上聡:女子短期大学生の自律神経系機能と身体活動量との関係. 第85回日本衛生学会学術総会, 和歌山, 2015年3月26-28日.
 66. 田村憲治, 近藤美則, 荻田香苗, 矢野栄二, 原邦夫, 本間純一:大気汚染常時監視測定局における PM2.5と SPM 濃度の異常現象. 第85回日本衛生学会学術総会, 和歌山, 2015年3月26-28日.
 67. 小笠原準悦, 櫻井拓也, 白土健, 石橋義永, 井澤鉄也, 大石修司, 芳賀脩光, 大野秀樹, 木崎節子:ブライト脂肪細胞の形成を修飾する持久的走運動トレーニングの効果. 第85回日本衛生学会学術総会, 和歌山, 2015年3月26-28日.
 68. 櫻井拓也, 小笠原準悦, 白土健, 石橋義永, 井澤鉄也, 大石修司, 芳賀脩光, 大野秀樹, 木崎節子:脂肪細胞の糖取り込みを抑制する TGF- β -TIMP1経路は運動によって減弱される. 第85回日本衛生学会学術総会, 和歌山, 2015年3月26-28日.
 69. 白土健, 櫻井拓也, 小笠原準悦, 石橋義永, 佐藤章悟, 今泉和彦, 大野秀樹, 木崎節子:高グルコースによるマクロファージ炎症反応の亢進における時計遺伝子 Rev-erba の役割. 第85回日本衛生学会学術総会, 和歌山, 2015年3月26-28日.
 70. 谷口善仁, 殿山泰弘, 谷口知行, 亀井保博:早老症メダカモデル作製の試み. 第85回日本衛生学会学術総会, 和歌山, 2015年3月26-28日.
 71. 小風暁, 吉田正雄, 石川守, 荻田香苗, 大津忠弘, 落合裕隆, 白澤貴子, 南里妃名子, 佐藤正夫, 高島豊:長寿関連ミトコンドリア DNA 多型におけるコーヒー飲用と肝機能検査成績との関連解析. 第85回日本衛生学会学術総会, 和歌山, 2015年3月26-28日.
 72. 岡本博照, 照屋浩司, 谷口善仁, 角田透:救命救急センター勤務医師の職業性ストレス:性差での検討. 第85回日本衛生学会学術総会, 和歌山, 2015年3月26-28日.
 3. Suzuki H¹, Tsujimoto H², Shirato K, Mitsuhashi R³, Sato S³, Tachiyashiki K⁴, Imaizumi K³ (¹Aichi University of Education, ²Kurume University, ³Waseda University, ⁴Joetsu University of Education): Clenbuterol attenuates immobilization-induced atrophy of type II fibers in the fast-twitch extensor digitorum longus but not in the slow-twitch soleus muscle. *Glob J Human Anat Physiol Res* 1(1):10-17, 2014.
 4. Sato S, Sakurai T, Ogasawara J, Shirato K, Ishibashi Y, Oh-ishi S¹, Imaizumi K², Haga S³, Hitomi Y⁴, Izawa T⁵, Ohira Y⁵, Ohno H, Kizaki T (¹Ibarakihigashi National Hospital, ²Waseda University, ³University of Tsukuba, ⁴Kanazawa University, ⁵Doshisha University) : Direct and indirect suppression of interleukin-6 gene expression in murine macrophages by nuclear orphan receptor REV-ERB α . *The Scientific World Journal*: 685854, 2014.
 5. Ohira T¹, Wang XD², Ito T³, Kawano F², Goto K⁴, Izawa T⁵, Ohno H, Kizaki T, Ohira Y⁵ (¹Japan Aerospace Exploration Agency, ²Osaka University, ³Yamagata University School of Medicine, ⁴Toyohashi SOZO University, ⁵Doshisha University) : Macrophage deficiency in osteopetrotic (op/op) mice inhibits activation of satellite cells and prevents hypertrophy in single soleus fibers. *Am J Physiol Cell Physiol* 308(10):C848-855, 2014.
 6. Kokaze A¹, Ishikawa M², Matsunaga N, Karita K, Yoshida M, Ohtsu T¹, Ochiai H¹, Shirasawa T¹, Nanri H¹, Saga N¹, Ohtsu I¹, Hoshino H¹, Takashima Y (¹Showa University School of Medicine, ²Mito Red Cross Hospital): Longevity-associated mitochondrial DNA 5178 C/A polymorphism modulates the effects of coffee consumption on erythrocytic parameters in Japanese men: an exploratory cross-sectional analysis. *J Physiol Anthropol* 33:37, doi: 10.1186/1880-6805-33-37 (2014).
 7. Kokaze A¹, Yoshida M, Ishikawa M², Matsunaga N, Karita K, Ohtsu T¹, Ochiai H¹, Shirasawa T¹, Nanri H¹, Baba Y¹, Hoshino H¹ & Takashima Y (¹Showa University School of Medicine, ²Mito Red Cross Hospital): NADH dehydrogenase subunit-2 237 Leu/Met polymorphism modifies effects of cigarette smoking on risk of elevated levels of serum liver enzyme in male Japanese health check-up examinees: a cross-sectional study. *Tob Induc Dis* 12(1):11, doi: 10.1186/1617-9625-12-11 (2014).
 8. 岡本博照, 照屋浩司:M 市運動相談事業データからみた中高年住民の循環器機能-脳性ナトリウム利尿ペプチド(BNP)からの検討-. *日本臨床内科医会誌*29(2):265-270, 2014.
 9. 久保祐美子¹, 岡本博照, 小泉健雄¹, 山口芳裕², 松田剛明², 照屋浩司, 和田貴子¹(¹杏林大・保・救命救急, ²杏林大・医・救急医学):西多摩医療圏の一病院における二次救急患者の搬送実態:地理的要因から見た分析. *日臨救医誌*17(4):522-529, 2014.
 10. 岡本博照, 神山麻由子¹, 細田武伸², 照屋浩司, 角田透, 和田貴子¹(¹杏林大・保・救命救急, ²鳥取大・医・社会医学):某市消防局の消防指令要員の職業性ストレス, 燃えつきおよび抑うつについて. *民族衛生*80(4):184-198, 2014.
 11. 土田幸介:口腔内アメニティと定期健診成績との関連について 沖縄県 S 町住民の健診結果より口腔内アメニティと定期健診成績との関連について 沖縄県 S 町住民の健診結果より. *杏林医学雑誌*45(1):3-14, 2014.
 12. 吉田正雄, 岳眞一郎(¹埼玉回生病院):白内障のリスク要因と一次予防対策解明のための分析疫学的研究-Association of

論文

原著論文

1. Shirato K, Imaizumi K¹ (¹Waseda University): Posttranscriptional suppression of lipopolysaccharide-stimulated inflammatory responses by macrophages in middle-aged mice:a possible role for eukaryotic initiation factor 2 α . *Int J Inflamm* 2014: 292986, doi:10.1155/2014/292986 (2014).
2. Hashizume Y¹, Shirato K, Tachiyashiki K², Imaizumi K¹ (¹Waseda University, ²Joetsu University of Education): Diallyl disulfide administration increases the number of B-lymphocytes in the rat spleen. *Fund Toxicol Sci* 1(4):115-121, doi:10.2131/fts.1.115 (2014).

body mass index with risk of age-related cataracts in a middle-aged Japanese population -. 全日本病院協会雑誌25(1):51-53, 2014.

13. 山崎絵里¹, 篠塚也寸², 渡邊舞子¹, 岳眞一郎¹, 吉田正雄¹(¹埼玉回生病院, ²メディカルトピア草加病院):胃瘻患者への言語聴覚士の介入と経口移行の可能性に関するレトロスペクティブ・スタディ. 全日本病院協会雑誌25(1):97-100, 2014.
14. 岳眞一郎¹, 吉田正雄, 宗邦雄¹, 伊藤菜那², 田口栄治¹, 海老名泰子¹(¹埼玉回生病院, ²日本大学松戸歯学部有床義歯補綴学教室):当院における在宅療養支援の取り組み. 日本慢性期医療協会誌92(1):44-47, 2014.

総説論文

1. 白土健, 大野秀樹, 木崎節子:低酸素誘導性因子(HIF)と低酸素. THE LUNG perspectives 22(3): 92-96, 2014.
2. 大野秀樹:糖質が登山では最重要のエネルギー源である. 山岳文化15:34-39, 2014.
3. 大野秀樹:山は身も心も豊にする. 日本山岳文化学会論集12: 135-136, 2015.

著書

分担執筆

1. 大野秀樹, 木崎節子:身体活性酸素消去を高める方法. 活性酸素の本当の姿. 鈴木敬一郎編. 東京, ナップ, 2014. pp.149-169.
2. 大野秀樹:医療制度. イギリス文化事典. イギリス文化事典編集委員会編. 東京, 丸善出版, 2014. pp.96-97.
3. 大野秀樹, 野口いづみ, 木崎節子:テント登山は人類の知性の劣化を救うかもしれない. 山歩きと健康管理の秘訣. 齋藤繁, 飯野佐保子編. 前橋, 朝日印刷工業, 2015. pp.240-241.
4. 小笠原準悦, 井澤鉄也, 大野秀樹:ホルモン受容体. ニュー運動生理学. 宮村実晴編. 東京, 真興交易医書出版部, 2015. pp.270-282.
5. 岡本博照:エビデンスに基づく保健対策. エッセンシャル 社会・環境と健康第2版第5刷. 高島豊, 櫻井裕編. 東京, 医歯薬出版, 2014. pp.92-96.
6. 岡本博照:飲酒行動. エッセンシャル 社会・環境と健康第2版第5刷. 高島豊, 櫻井裕編. 東京, 医歯薬出版, 2014. pp.125-129.
7. 吉田正雄:食習慣. エッセンシャル 社会・環境と健康第2版第6刷. 高島豊, 櫻井裕編. 東京, 医歯薬出版, 2014. pp.111-114.
8. 吉田正雄:学校保健対策. エッセンシャル 社会・環境と健康第2版第6刷. 高島豊, 櫻井裕編. 東京, 医歯薬出版, 2014. pp.237-242.
9. 吉田正雄:予防と救急. 化学実験における事故例と安全 第1版第2刷. 田村昌三編. 東京, オーム社, 2014. pp.296-305.
10. 松井知子:歯科保健行動. エッセンシャル 社会・環境と健康第2版第6刷. 高島豊, 櫻井裕編. 東京, 医歯薬出版, 2014. pp.132-136.
11. 長見まき子, 松井知子:特集今どきの若者を理解するー若年層のメンタルヘルス不調の特徴と対応. 健康管理61(11). 東京, 保健文化社, 2014. pp.2-22.

特許等知的財産関係, 報告書

1. 小笠原準悦, 櫻井拓也, 木崎節子, 大野秀樹:運動は骨格筋前駆細胞から褐色脂肪細胞への分化を誘導するか:肥満予防・治療への応用(平成25年度医学部研究奨励賞報告). 杏林医学会雑誌45(1):s31-33, 2014.
2. 橋口仁美, 福留斉, 恩田智子, 高畑彦松, 岡田真人, 吉田佳

奈, 岡本博照:僻地診療所での見学 ー第1報 医療過疎の実態ー(第3回学生リサーチ賞受賞者 受賞報告). 杏林医学会雑誌45(1):s3-6, 2014.

3. 恩田智子, 福留斉, 高畑彦松, 橋口仁美, 岡田真人, 吉田佳奈, 岡本博照:僻地診療所での見学 ー第2報 診療所の外来見学から見た僻地での医師像ー(第3回学生リサーチ賞受賞者 受賞報告). 杏林医学会雑誌45(1):s7-10, 2014.
4. 高畑彦松, 福留斉, 恩田智子, 橋口仁美, 岡田真人, 吉田佳奈, 岡本博照:僻地診療所での見学 ー第3報 通院患者の生活と健康の調査結果ー(第3回学生リサーチ賞受賞者 受賞報告). 杏林医学会雑誌45(1):s11-15, 2014.
5. 村田勝敬, 吉田稔, 荻田香苗, 龍田希, 仲井邦彦, 岩井美幸, 柳沼梢, 坂本峰至, 岩田豊人:「水俣病に関する総合的研究(重金属等の健康影響に関する総合研究)」メチル水銀曝露による健康障害に関するレビュー. 環境省受託研究・平成26年度成果報告書.
6. 荻田香苗:化学物質有害性評価書ー物質名:1,2-ジクロロエタン. 厚生労働省受託(職場の化学物質のリスク評価推進事業)平成26年度報告書.

その他

1. 角田透:平成26年度第15回日本 EAP 協会総会・講演会主催, 東京, 2014年7月26日.
2. 谷口善仁:第20回小型魚類研究会主催, 東京, 2014年9月20-21日.
3. 岡本博照:平成26年度日本民族衛生学会優秀論文賞受賞「某市消防局の消防指令要員の職業性ストレス, 燃えつきおよび抑うつについて」. 第79回日本民族衛生学会総会, つくば, 2014年11月21-22日.
4. 角田透:平成26年度三鷹市医師会産業医講習会/第42回日本産業精神保健学会研修セミナー主催, 三鷹市, 2014年12月13日.
5. 荻田香苗:環境と公衆衛生. 大日本図書 小・中学校教授用資料, 2014.
6. 荻田香苗:自然科学研究分野における男女共同参画の推進に向けて. 民族衛生80(5):巻頭言. 2014.
7. 小笠原準悦, 高成準, 櫻井拓也, 白土健, 石橋義永, 長澤純一, 井澤鉄也, 大野秀樹, 木崎節子:酵素処理アスパラガス茎熱水抽出物は PC12細胞の神経細胞への分化と神経突起の形成を促進する. 第22回統合医療機能性食品国際会議議事録. 札幌, AHCC 研究会, 2014. pp.59-64.
8. 角田透:第43回日本産業精神保健学会研修セミナー主催, 東京, 2015年3月19日.
9. 松井知子:ストレスチェックをめぐる. 東京経営者協会会報 No.83, 2015.p.18.

法医学教室

講演

1. Takagi T, Takashino S, Yoshida M, Yamada C, Kigasawa H, Iwadata S, Sato Y: An autopsy case of a child who died from tension pneumothorax due to the stomach penetrating into the thorax : Is the hole of the diaphragm congenital or acquired?. 9th International Symposium on Advances in Legal Medicine (ISALM), Fukuoka, June 16th-20th, 2014.
2. Yoshida M, Takashino S, Kigasawa H, Yamada C, Iwadata S, Takagi T, Sato Y: Cadaver restoration using silicone-based artificial skin for special effects makeup. 9th International

Symposium on Advances in Legal Medicine (ISALM), Fukuoka, June 16th–20th, 2014.

3. Takashino S, Yoshida M, Takagi T, Ishida S, Matsumura G, Sato Y: Development of an embalming fluid for jaundiced cadavers using a titanium oxide photocatalyst. 9th International Symposium on Advances in Legal Medicine (ISALM), Fukuoka, June 16th–20th, 2014.
4. 都築民幸, 岩原香織, 高篠智, 吉田昌記, 山田千歩, 氣賀澤秀明, 上野麻夫, 岩楯桜子, 高木徹也, 佐藤喜宣: 歯科検査のための遺体を傷つけない開口法と開口器の開発. 第98次日本法医学会学術全国集会, 福岡, 2014年6月16–20日.
5. 氣賀澤秀明, 岩楯桜子, 大谷正紀, 吉田昌記, 山田千歩, 高篠智, 高木徹也, 佐藤喜宣: C型慢性肝炎により糖尿病の急激な増悪を呈したと考えられる1剖検例. 第83回日本法医学会学術関東地方集会, 東京, 2014年11月8日.

その他

1. 高木徹也: ドラマ「BORDER 警視庁捜査一課殺人犯捜査第4係」法医学監修, テレビ朝日, 2014年4月10日–6月5日.
2. 高木徹也: ドラマ「ドクター検事モロハシ」法医学監修, フジテレビ, 2014年7月1日.
3. 高木徹也: ドラマ「松本清張 強き蟻」法医学監修, テレビ東京, 2014年7月2日.
4. 佐藤喜宣: ドラマ「ラスト・ドクター〜監察医アキタの検死報告〜」法医学監修, テレビ東京, 2014年7月11日.
5. 高木徹也: ドラマ「ゼロの真実〜監察医・松本真央〜」法医学監修, テレビ朝日, 2014年7月17日–9月4日.
6. 高木徹也: ドラマ「ST 警視庁科学特捜班」法医学監修, 日本テレビ, 2014年7月16日–9月17日.
7. 高木徹也: ドラマ「監察医・篠宮葉月 死体は語る」法医学監修, テレビ東京, 2014年8月27日.
8. 高木徹也: ドラマ「最後の審判」法医学監修, WOWOW, 2014年9月14日.
9. 高木徹也: 映画「ソロモンの偽証 前篇・事件」法医学監修, 松竹, 2015年3月7日.

共同研究施設 RI部門

講演

1. 小藤剛史, 林優子, 田丸政男, 赤川公朗: 広汎性発達障害(PDD)と syntaxin1A 遺伝子の関連性の検討. 第56回日本小児神経学会, 浜松, 2014年5月29–31日.
2. 藤原智徳, 小藤剛史, 真田ますみ, 赤川公朗: STX1A 欠損マウスにおける社会行動の障害. 第37回日本神経科学大会, 横浜, 2014年9月11–13日.
3. 小藤剛史, 林優子, 藤原智徳, 真田ますみ, 田丸政男, 赤川公朗: 自閉症スペクトラム障害と HPC-1/syntaxin1A 遺伝子発現異常の関連性の検討. 第57回日本神経化学学会大会, 奈良, 2014年9月29日–10月1日.

論文

1. Kofuji T, Fujiwara T¹, Sanada M¹, Mishima T¹, Akagawa K¹(¹Kyorin Univ. Sch. Med., Dept. Cell Physiol.): HPC-1/syntaxin1A and syntaxin1B play distinct roles in neuronal survival. J Neurochem. 130(4):514–25, 2014.

フローサイトメトリ部門

講演

1. Takahashi R, Ushigome Y, Shiohara T: *Mycoplasma Pneumoniae* Infections Serve To Enhance The Risk Of Subsequently Developing Severe Allergic Diseases By Chronically Abrogating Treg-mediated Suppression. The 6th drug hypersensitivity meeting (DHM6), Bern, Switzerland, April 9th–12th, 2014.
2. Shiohara T, Takahashi R, Kano Y, Ushigome Y: Monocytes control Treg in severe drug eruption. The 6th drug hypersensitivity meeting (DHM6), Bern, Switzerland, April 9th–12th, 2014.
3. Ushigome Y, Takahashi R, Shiohara T: Patrolling monocytes sensing herpes simplex virus in severe drug eruption. The 6th drug hypersensitivity meeting (DHM6), Bern, Switzerland, April 9th–12th, 2014.
4. Mizukawa Y, Takahashi R, Kano Y, Shiohara T: Mycoplasma infection as an inhibitory factor for developing DIHS / DRESS. The 6th drug hypersensitivity meeting (DHM6), Bern, Switzerland, April 9th–12th, 2014.
5. Takahashi R, Ushigome Y, Shiohara T: Monocytes are crucial for a shift away from a Treg to Th17 response in *mycoplasma pneumoniae* infection and SJS/TEN. The 39th Annual Meeting of the Japanese Society for Investigative Dermatology, Osaka, December 12th–14th, 2014.

論文

1. Shiohara T¹, Ushigome Y¹, Kano Y¹, Takahashi R (¹Dept of Dermatology): Crucial Role of Viral Reactivation in the Development of Severe Drug Eruptions: a Comprehensive Review. Clinical Reviews in Allergy & Immunology 2014. (Published online).

実験動物施設部門

講演

1. 北条史, 大崎敬子, 米澤英雄, 花輪智子, 蔵田訓, 山口博之, 神谷茂: *Helicobacter pylori* の *Acanthamoeba castellanii* 共培養系における生存性の向上について. 第20回日本ヘリコバクター学会学術会議, 東京, 2014年6月28–29日.
2. Hojo F, Osaki T, Yonezawa H, Hanawa T, Kurata S, Yamaguchi H, Kamiya S: Effect of *Acanthamoeba castellanii* on survival of *Helicobacter pylori* in co-culture. European Helicobacter Study Group XXVIIth International Workshop on Helicobacter & Microbiota in Inflammation & Cancer, Italy, September 10th–13th, 2014.
3. Hojo F, Osaki T, Yonezawa H, Hanawa T, Kurata S, Yamaguchi H, Kamiya S: Transcriptome analysis of *Helicobacter pylori* in co culture with *Acanthamoeba castellanii*. 第12回韓日合同 *H. pylori*カンファレンス, 韓国, 2015年3月21日.
4. 北条史, 大崎敬子, 米澤英雄, 花輪智子, 蔵田訓, 山口博之, 神谷茂: *Helicobacter pylori* の *Acanthamoeba castellanii* 共培養系における生存性の向上とトランスクリプトーム解析. 第88回日本細菌学会総会, 岐阜, 2015年3月28–29日.
5. 花輪智子, 米澤英雄, 大崎敬子, 蔵田訓, シンシア ザマン, 北条史, 神谷茂: グルタミン酸飢餓環境における百日咳菌Ⅲ型分泌装置および線毛の発現調節. 第87回日本細菌学会総会, 東京, 2015年3月26–28日.

論文

1. Okuda M, Osaki T, Kikuchi S, Ueda J, Lin Y, Yonezawa H,

Maekawa K, Hojo F, Kamiya S, Fukuda Y: Evaluation of a stool antigen test using a mAb for native catalase for diagnosis of *Helicobacter pylori* infection in children and adults. J Med Microbiol. 63(Pt 12):1621-1625, doi: 10.1099/jmm.0.077370-0. (2014).

- Osaki T, Konno M, Yonezawa H, Hojo F, Zaman C, Takahashi M, Fujiwara S, Kamiya S: Analysis of intra-familial transmission of *Helicobacter pylori* in Japanese families. J Med Microbiol. 64(Pt 1):67-73, 2014.(Epub).

その他

- 北条史: Young investigator award 受賞, 第12回韓日合同 *H. pylori* カンファレンス, 韓国, 2015年3月21日.

生物学教室

講演

- Kato K, Awasaki T: Remodeling of glial assembly in *Drosophila* brain during metamorphosis. 第47回日本発生物学会年会, 名古屋, 2014年5月27-30日.
- Awasaki T, Umeki Y, Kato K: Remodeling of glial assembly in *Drosophila* brain during metamorphosis. 第11回日本ショウジョウバエ研究会, 金沢, 2014年6月4-6日.
- Hirai K, Kudo A, Shima Y, Minakuchi Y, Toyoda A, Matsuda M: *De novo* centrosome synthesis and diploidization in parthenogenetic embryos of *Drosophila ananassae*-complex species. 第11回日本ショウジョウバエ研究会, 金沢, 2014年6月4-6日.
- Sato H, Matsuda M: A comparative study of meiotic recombination in *Drosophila* species. 第11回日本ショウジョウバエ研究会, 金沢, 2014年6月4-6日.
- Watada M, Matsuda M: Ehime-fly and Kyorin-fly Provide Reliable Stocks of "non-melanogaster" species for Japanese and World *Drosophila* Researchers. 第11回日本ショウジョウバエ研究会, 金沢, 2014年6月4-6日.
- Ueda R, Takano T, Watada M, Matsuda M, Akashi R: National BioResource Project "Drosophila". 第11回日本ショウジョウバエ研究会, 金沢, 2014年6月4-6日.
- Kato K, Umeki Y, Awasaki T: Scrap and rebuild glial assembly in *Drosophila* brain during metamorphosis. 第37回日本神経科学大会, 横浜, 2014年9月11-13日.
- 平井和之, 島幸夫, 水口洋平, 豊田敦, 松田宗男: アナナスショウジョウバエの単為発生における二倍体核形成機構. 日本遺伝学会第86回大会, 長浜, 2014年9月17-19日.
- 松田宗男: 何故ショウジョウバエ雄は減数分裂期の組換えを起こさないのか. 日本遺伝学会第86回大会, 長浜, 2014年9月17-19日.
- 伊藤啓, 栗崎健: もう一つのグリアアセンブリ: ショウジョウバエのグリア細胞種と機能分類 Another type of glia assembly, functional classification of *Drosophila* glial cells. 第57回日本神経化学会, 奈良, 2014年9月29日-10月1日.
- Hirai K, Shima Y, Minakuchi Y, Toyoda A, Matsuda M: *De novo* synthesis of centrosome-like structures and diploidization in partheogenetic embryos of *Drosophila ananassae*. Cold Spring Harbor Laboratory meeting on Germ Cells, USA, October 7th-11th, 2014.
- 栗崎健: グリア細胞による神経軸索の貪食・除去を介した脳神経ネットワークのリモデリング. 第87回日本生化学会, 京都, 2014年10月15-18日.

- Kato K, Forero M, Hidalgo A: ショウジョウバエ神経損傷のグリア応答を支える遺伝子ネットワーク. 山田科学振興財団2014年度長期派遣者研究交歓会, 大阪, 2014年11月1日.

論文

- Awasaki T, Kao CF¹, Lee YJ¹, Yang CP¹, Huang Y¹, Pfeiffer BD¹, Luan H¹, Jing X¹, Huang YF¹, He Y¹, Schroeder MD¹, Kuzin A², Brody T², Zugates CT¹, Odenwald WF², Lee T¹ (¹JFRC, HHMI, ²NIH): Making *Drosophila* lineage-restricted drivers via patterned recombination in neuroblasts. Nat Neurosci. 17(4): 631-637, 2014.
- Masuda-Nakagawa LM¹, Ito K², Awasaki T, O'Kane CJ¹ (¹Cambridge Univ., ²Univ. of Tokyo.): A single GABAergic neuron mediates feedback of odor-evoked signals in the mushroom body of larval *Drosophila*. Front Neural Circuits. 8:35, 2014.
- 澤村京一¹, 佐藤玄, Chow-Yang Lee², 上村佳孝³, 松田宗男 (¹筑波大・²University of Science Malaysia, ³慶應義塾大): アナナスショウジョウバエ類における種間浸透の分子生物学的証拠: ペナン島(マレーシア)集団の事例. 昆虫 DNA 研究会ニュースレター 20:41-44, 2014.

物理学教室

講演

- Ohtani M: Reformulation of chiral random matrix model in the thermodynamic limit. The 4th Joint Meeting of the APS Division of Nuclear Physics and the JPS, USA, October 7th-11th, 2014.

論文

- Tohyama M: Application of extended random phase approximation with ground-state correlations to collective excitations of ¹⁶O. J Phys Conference Series 529:012026-1-5, 2014.
- Tohyama M, Schuck P (¹IPN Orsay): Truncation scheme of time-dependent density-matrix approach. Eur Phys J A50:7, 2014.
- Tohyama M: New truncation scheme for a time-dependent density-matrix approach applied to the ground state of ¹⁶O. Phys Rev C91: 017301-1-4, 2015.
- Tohyama M, Schuck P (¹IPN Orsay): Extension of time-dependent Hartree-Fock-Bogoliubov equations. Phys Rev C 91: 034316-1-12, 2015.

化学教室

講演

- 誉田晴夫, 大津昌弘, 山本幸子, 丑丸真, 原論吉: カイコ由来培養細胞 BM-N におけるカイコ Na⁺/K⁺-ATPase の発現. 日本生体エネルギー研究会第40回討論会, 松山, 2014年12月11-13日.

英語学教室

講演

- Kuroda K: Formal Concept Analysis meets grammar typology. In *Proceedings of the 21st Annual Meeting of the Natural Language Processing Association*, Kyoto, March 16th-21st, 2015.

保健学部

●臨床検査技術学科●		●看護学科・看護養護教育学専攻●	
物理学・医用工学研究室	119	母子看護学研究室	128
臨床薬理学Ⅰ・Ⅱ研究室	119	基礎看護学研究室	129
分子生物学的研究室	119	学校看護学研究室	129
解剖学・細胞生物学的研究室	119	精神保健看護学研究室	129
病理学研究室	120	在宅看護学研究室	129
臨床血液学研究室	120	成人老年看護学教室	130
免疫学研究室	120	病態学研究室	130
臨床微生物学教室	121		
臨床検査学研究室	121	●臨床工学科●	
生体検査学	121	生命支援工学研究室	131
細胞診断学研究室	121	先端臨床工学研究室	132
臨床検査教育学研究室	121	生理・生体・情報工学研究室	132
		血液浄化療法学的研究室	133
		循環器病態生理学研究室	133
		生理機能検査学研究室	134
●健康福祉学科●			
環境保健学研究室	121	●理学療法学科●	
公衆衛生学研究室	122	基礎理学療法学的研究室	134
心理学・社会福祉学研究室	123	運動障害系理学療法学的研究室	135
健康教育学的研究室	123	小児発達障害系理学療法学的研究室	136
生理学研究室	124	神経障害系理学療法学的研究室	136
		内部障害系理学療法学的研究室	137
●救急救命学科●			
救急救命学研究室	124	●作業療法学科●	
救急処置病態学研究室	124	母子保健学研究室	138
医療安全管理学研究室	125	運動器障害作業療法学的研究室	138
		精神障害作業療法学的研究室	138
●看護学科・看護学専攻●	125	認知障害作業療法学的研究室	139
基礎・在宅看護学研究室	125	中枢神経障害作業療法学的研究室	140
成人・高齢者看護学研究室	126		
母子看護学研究室	126	●診療放射線技術学科●	
助産学研究室	126	画像診断学研究室	141
小児看護学研究室	126	診療放射線技術学的研究室	141
地域看護学研究室	126	医用理工学研究室	142
精神看護学研究室	128	放射線安全管理学研究室	142
医療科学Ⅰ研究室	128	量子医療技術学的研究室	142
		分析化学Ⅱ研究室	143

● 臨床検査技術学科 ●

物理学・医用工学研究室

講 演

1. 田村陽介, 田中薫, 川澄岩雄: ノニバミド(Nonivamide) の水素供与に関与する分子軌道と結合解離エネルギーの検討. 日本薬学会第135年会, 神戸, 2014年3月25-28日.

その他

1. 川澄岩雄: 平成26年度第1回～第3回臨床検査技師模擬試験問題, 医歯薬出版株式会社, 2014年9月, 11月, 2015年1月.

臨床薬理学Ⅰ・Ⅱ研究室

講 演

1. Yokokawa A, Motoo M, Sakai S, Shibasaki-Hirano H, Hosoda K, Ishii K, Furuta T: A novel index for assessing 3β -hydroxysteroid dehydrogenase activity in humans based on the measurement of plasma concentrations of dehydroepiandrosterone and androstenedione. 20th IMSC International Mass Spectrometry Conference, Switzerland, August 24th-29th, 2014.
2. Shibasaki-Hirano H, Hosoda K, Yokokawa A, Ishii K, Furuta T: In vivo cytochrome P450 3A activity in a pregnant woman as measured by endogenous 6β -hydroxylation clearance. 20th IMSC International Mass Spectrometry Conference, Switzerland, August 24th-29th, 2014.
3. 細田香織, 柴崎浩美, 横川彰朋, 石井和夫: 大豆イソフラボン摂取が血清エストロジオール濃度と月経周期へ及ぼす影響. 日本薬学会第135年会, 神戸, 2015年3月25-28日.
4. 横川彰朋, 山崎祐理子, 柴崎浩美, 細田香織, 石井和夫, 古田隆: HPLC-UVによるEGFRチロシンキナーゼ阻害剤ゲフィチニブとエルロチニブの血中濃度測定法の開発. 日本薬学会第135年会, 神戸, 2015年3月25-28日.

論 文

1. 石川千尋, 細田香織, 石井和夫: きな粉摂取後のヒト血漿および尿中における (R)-equol および (S)-equol の検出. 杏林医会誌 45(補遺): s1, 2014.

分子生物学研究室

論 文

原著

1. Momose Y, Aimi Y, Hirayama T, Kataoka M, Ono M, Yoshino H, Satoh T, Gamou S: *De novo* mutations in the BMPR2 gene in patients with heritable pulmonary arterial hypertension. *Ann Human Genet* 79(2):85-91, 2015.
2. Fujiwara K, Takahashi T, Nguyen P, Kubota Y, Gamou S, Sakurai S, Takahashi S: Uptake and retention of radio-caesium in earthworms cultured in soil contaminated by the Fukushima nuclear power plant accident. *J Environ Radioact* 139: 1-5, 2015.

総説

1. 下島裕美, 三浦雅文, 門馬博, 齋藤昭彦, 蒲生忍: メタ認知を促す医学教育—4ボックス法の可能性を探る—(Medical Education that Stimulates Metacognition: Examination of the Possibilities of the Four-Box Method). *杏林医学会雑誌* 46(1): 3-10, 2015.

解剖学・細胞生物学研究室

講 演

1. 堀口幸太郎, 吉田彩舟, 藤原研, 樋口雅司, 塚田岳大, 加藤たか子, 館野こずえ, 長谷川瑠美, 瀧上周, 大迫俊二, 屋代隆, 加藤幸雄: 樹状細胞様S100タンパク質陽性細胞から分泌されるケモカインCXCL10の機能解析. 第29回日本下垂体研究会学術集会, 八王子, 2014年8月9-11日.
2. 東森生, Khongorzul Batchuluun, 堀口幸太郎, 屋代隆: ラット下垂体前葉におけるtissue inhibitor of metalloproteinase発現細胞の同定. 第29回日本下垂体研究会学術集会, 八王子, 2014年8月9-11日.
3. 瀧上周, 新井景子, 遠藤花奈, 加藤愛理, 金内勇人, 吉澤友理恵, 長谷川瑠美, 堀口幸太郎, 大迫俊二: 慢性ストレス負荷ラットにおける眼優位可塑性. 第157回日本獣医学会学術集会, 札幌, 2014年9月9-12日.
4. 堀口幸太郎, 吉田彩舟, 藤原研, 樋口雅司, 塚田岳大, 加藤たか子, 館野こずえ, 長谷川瑠美, 瀧上周, 大迫俊二, 屋代隆, 加藤幸雄: 下垂体前葉内S100タンパク質陽性細胞から分泌されるケモカインCXCL10のIFN- γ による制御. 第41回日本神経内分泌学会学術集会, 東京, 2014年11月1-3日.
5. 大迫俊二, 瀧上周, 堀口幸太郎, 長谷川瑠美, 館野こずえ: ニューロン分化におけるC2HC型Znフィンガー転写因子の機能解析. 第43回杏林医学会総会, 三鷹, 2014年11月15日.
6. 村田麻喜子, 蒲生忍: ヤマトヒメミズの2つの生活史とその転換. 第43回杏林医学会, 三鷹, 2014年11月15日.
7. 村田麻喜子, 大迫俊二: ヤマトヒメミズの再生・分化に関与する遺伝子探索と発現プロファイル. 第37回日本分子生物学会年会, 横浜, 2014年11月26日.
8. 東森生, Khongorzul Batchuluun, 堀口幸太郎, 菊地元史, 屋代隆: ラット下垂体前葉内における各種細胞外マトリックスの動態: I. 性腺刺激ホルモン産生細胞のホルモン放出への影響. 第120回日本解剖学会総会, 京都, 2015年3月21-23日.
9. 上春浩貴, 吉田彩舟, 西村直人, 樋口雅司, 堀口幸太郎, 加藤たか子, 加藤幸雄: 下垂体における神経堤由来細胞とS100 β の発現. 第119回日本畜産学会, 宇都宮, 2015年3月27-30日.
10. 西村直人, 上春浩貴, 西原大翔, 渋谷汐里, 吉田彩舟, 樋口雅司, 堀口幸太郎, 加藤たか子, 加藤幸雄: 下垂体特異的転写因子PROP1のプロモーター活性とその制御. 第119回日本畜産学会, 宇都宮, 2015年3月27-30日.

論 文

1. Horiguchi K, Fujiwara K¹, Yoshida S², Higuchi M², Tsukada T¹, Kanno N², Yashiro T¹, Tateno K, Ohsako S, Kato T², Kato Y²(¹Jichi Medical University, ²Meiji University): Isolation of dendritic cell-like S100 β -positive cells in rat anterior pituitary gland. *Cell Tissue Res*. 357:301-308, 2014.
2. Fujiwara K¹, Maliza R¹, Tofrizal A¹, Batchuluun K¹, Ramadhani D¹, Tsukada T¹, Horiguchi K, Kikuchi M¹, Yashiro T¹(¹Jichi Medical University): In situ hybridization analysis of the temporospatial expression of the midkine/pleiotrophin family in rat embryonic pituitary gland. *Cell Tissue Res*. 357: 337-344, 2014.
3. Horiguchi K, Fujiwara K¹, Higuchi M², Yoshida S², Tsukada T¹, Ueharu H², Hasegawa R, Takigami S, Ohsako S, Yashiro T¹, Kato T², Kato Y²(¹Jichi Medical University, ²Meiji University): Expression of chemokine CXCL10 in dendritic

cell-like S100 β -positive cells in rat anterior pituitary gland. Cell Tissue Res. 357:757-765, 2014.

4. Yoshida S¹, Ueharu H¹, Higuchi M¹, Horiguchi K, Nishimura N¹, Shibuya S¹, Mitsuishi H¹, Kato T¹, Kato Y¹(¹Meiji University): Molecular Cloning of Rat and Porcine Retina-Derived POU Domain Factor 1 (POU6F2) from Pituitary cDNA Library J Reprod Dev. 60:288-294, 2014.
5. Horiguchi K, Higuchi M¹, Yoshida S¹, Nakakura T², Tateno K, Hasegawa R, Takigami S, Ohsako S, Kato T¹, Kato Y¹(¹Meiji University, ²Teikyo University): Proton receptor GPR68 expression in dendritic cell-like S100 β -positive cells of rat anterior pituitary gland: GPR68 induces interleukin-6 gene expression in extracellular acidification. Cell Tissue Res. 358:515-525, 2014.
6. 堀口幸太郎, 館野こずえ, 長谷川瑠美, 瀧上周, 大迫俊二: 下垂体前葉内に存在するS100 β タンパク陽性細胞のサブタイプの単離とその機能解析. 杏林医学会誌 45(4):137-143, 2014.
7. Tsukada T¹, Fujiwara K¹, Horiguchi K, Azuma M¹, Ramadhani D¹, Tofrizal A¹, Batchuluun K¹, Maliza R¹, Syaidah R¹, Kikuchi M¹, Yashiro T¹(¹Jichi Medical University): Folliculostellate cells are required for laminin release from gonadotrophs in rat anterior pituitary. Acta Histochem Cytochem. 47:239-245, 2014.

著書

1. 長谷川瑠美:第4章軟骨と骨, 8章循環系. ガードナー/ハイアット 組織学第3版アトラスとテキスト. 松村譲児, 川上速人監訳. 東京, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 2014.p.78-105, p.176-197.
2. 大迫俊二:第6章筋, 7章神経組織. ガードナー/ハイアット 組織学第3版アトラスとテキスト. 松村譲児, 川上速人監訳. 東京, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 2014.p.124-149, p.150-175.
3. 堀口幸太郎:第10章内分泌系, 16章泌尿器系. ガードナー/ハイアット 組織学第3版アトラスとテキスト. 松村譲児, 川上速人監訳. 東京, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 2014.p.228-253, p.382-405.
4. 瀧上周:第12章呼吸器系, 19章特殊感覚. ガードナー/ハイアット 組織学第3版アトラスとテキスト. 松村譲児, 川上速人監訳. 東京, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 2014.p.278-301, p.456-480.

特許等知財関係, 報告書

1. 堀口幸太郎:プロテオグリカンによる下垂体前葉細胞の形態・機能調節機構の解明. 科学研究費補助金(若手研究B) 2014年度代表研究報告書.

病理学研究室

講演

1. 大河戸光章:子宮頸部上皮内腫瘍における新しいハイリスク型HPVの検出状況. 京都・金沢STIエキスパートミーティング, 京都, 2014年6月13日
2. 岡山香里, 大河戸光章, 熊谷朋子, 藪崎宏美, 椎名義雄, 吉永陽樹, 福井正, 藤井雅彦:免疫細胞化学技術の進歩 その臨床実践的アプローチ 細胞診標本のための改良in situ PCR法.第55回日本臨床細胞学会春季大会, 横浜, 2014年6月5日.
3. 佐藤亮太, 伊藤彩美, 木戸晴菜, 和泉大輝, 加藤千裕, 鳥塚由貴,

中里真依, 山本寛, 大河戸光章, 藤井雅彦:試作プロテイン銀のBodian染色への検討. 第9回日本臨床検査学教育学会学術大会, 蒲田, 2014年8月20-22日.

臨床血液学研究室

講演

1. 東克巳, 西村伸大, 関根名里子:血液検査学における臨床検査技師の卒前・卒後教育-技師教育施設における血液検査学教育-. 第14回日本臨床検査学教育学会学術大会, 東京, 2014年7月27-28日.
2. 武藤祐子, 富田知子, 西村伸大:美容室におけるリラックス効果の研究.-アミラーゼ測定, アンケート調査による検討-. 第73回日本公衆衛生学会, 栃木, 2014年11月5-7日.
3. 武藤祐子, 富田知子, 西村伸大:美容室におけるリラックス効果の研究.-アミラーゼ測定, アンケート調査による検討-. 第21回日本未病システム学会, 大阪, 2014年11月1-2日.
4. 西村伸大:アロマセラピー基礎講座へエッセンシャルオイルを用いたリラクゼーションへ. いちよう塾, 八王子, 2014年6月28日, 7月5,12日(第1回)/2014年7月19,26日, 8月2日(第2回).
5. 東克巳:見逃しては行けない形態と血液検査所見.平成26年度 第3回日本臨技首都圏支部医学検査学会, 木更津, 2014年9月13日.
6. 東克巳:血液専門技師と認定制度.平成26年度中部圏支部臨床血液部門研修会, 岐阜, 2014年12月14日.

免疫学研究室

講演

1. 小野川傑, 田口晴彦:臨床検査教育において「学生の考える力」をどうやって引き出すか? -免疫検査学実習の場合-. 第9回日本臨床検査学教育学会学術大会, 東京, 2014年8月20-22日.
2. Taguchi H, Arae K, Kurata S, Kamiya S: *Mycoplasma pneumoniae* antigens induce IL-8 production using EGFR pathway. The 6th Meeting of the Asia Organization for Mycoplasma (6th AOM), China, August 22nd-25th, 2014.
3. Kurata S, Arae K, Taguchi H, Kamiya S: *In vitro* and *vivo* analyses of Th 17 response stimulated by *Mycoplasma pneumoniae* antigens. The 6th Meeting of the Asia Organization for Mycoplasma (6th AOM), China, August 22nd-25th, 2014.
4. 蔵田訓, 大崎敬子, 米沢英雄, 花輪智子, 田口晴彦, 神谷茂: *Mycoplasma pneumoniae* 菌体抗原感作がT細胞サブセットに及ぼす影響. 第48回日本無菌生物ノートバイオロジー学会総会学術集会, 広島, 2015年1月30-31日.
5. Kurata S, Osaki T, Yonezawa H, Hanawa T, Taguchi H, Kamiya S: Effects of *Mycoplasma pneumoniae* antigens on asthmatic chemokine responses by murine splenocytes. 第88回日本細菌学会総会学術集会, 岐阜, 2015年3月26-28日.

論文

1. Unno H^{1,2}, Futamura K², Morita H^{2,3}, Kojima R^{2,4}, Arae K², Nakae S^{2,5,6}, Ida H¹, Saito H², Matsumoto K², Matsuda A² (¹Jikei University, ²National Research Institute for Child Health and Development, ³Keio University, ⁴National Defense Medical College, ⁵The Institute of Medical Science, The University of Tokyo and ⁶PRESTO): Silica and double-

stranded RNA synergistically induce bronchial epithelial apoptosis and airway inflammation. Am J Respir Cell Mol Biol. 51: 344-53, 2014.

2. Kurata S¹, Osaki T¹, Yonezawa H¹, Arae K, Taguchi H, Kamiya S¹ (¹Department of Infectious Diseases, Kyorin University School of Medicine): Role of IL-17A and IL-10 in the antigen induced inflammation model by *Mycoplasma pneumoniae*. BMC Microbiol. 14: 156, 2014.
3. 神谷茂¹, 蔵田訓¹, 田口晴彦(¹杏林大学医学部感染症学講座): 医学領域における肺炎マイコプラズマ感染症の基礎と臨床. 家畜診療 61: 331-338, 2014.

著書

1. 田口晴彦: 標準微生物学. 第47章臨床症状から病原診断へ実習に役立つ細菌分離培地の基礎. 中込治, 神谷茂編. 東京, 医学書院, 2015. p. 604-609.

臨床微生物学研究室

講演

1. 橘田和幸, 出嶋靖志, 出嶋優華: 癌の死亡率と, TFR・母乳育児率・初産年齢との関係-先進国と途上国および, 男女の比較. 第84回日本衛生学会学術総会, 岡山, 2014年5月25-27日.
2. 森田耕司, 渡辺登, 北島勉: 本学大学院国際協力研究科における国際医療協力の実践的な学びと研究. 第9回日本臨床検査学教育学会学術大会, 東京, 2014年8月20-22日.
3. 森田耕司, 渡辺登: 微生物学関連の講義に興味を芽生えさせるために-温故知今, 温故知新-. 第9回日本臨床検査学教育学会学術大会, 東京, 2014年8月20-22日.
4. 橘田和幸, 出嶋靖志, 出嶋優華, 鳥尾克二: 観光資源の評価における健康関連項目について. 第79回日本民族衛生学会総会, 筑波, 2014年11月21-22日.
5. 清水君恵, 出嶋靖志, 出嶋優華, 大木紫: 目隠し・耳栓の装着および室内環境が安静時の瞳孔観察によるストレスに及ぼす効果-心拍変動のスペクトル解析を用いた評価-. 第79回日本民族衛生学会総会, 筑波, 2014年11月21-22日.
6. 日暮芳己, 森田耕司, 佐藤智明, 奥川周, 森屋恭爾: CMY-2 β -lactamase産生 *E.coli*のphylogenic groupによる分類. 第26回日本臨床微生物学会総会・学術集会, 東京, 2015年1月31日-2月1日.

論文

1. 日暮芳己¹, 岡崎充宏², 森田耕司, 森屋恭爾(¹東大病院・感染制御, ²東京工科大・医療保健): 連鎖球菌. 感染症内科 2: 544-551, 2014.

著書

1. 日暮芳己, 森田耕司: 一般細菌薬剤感受性試験, PK(薬物動態)/PD(薬力学)パラメーターと感受性検査の概説. 臨床検査データブック2015-2016. 高久史磨監修. 東京, 医学書院, 2015. p.493-498.
2. 森田耕司: 保冷装置, 滅菌装置. 最新 臨床検査学講座 検査機器総論. 三村邦裕, 山藤賢編. 東京, 医歯薬出版, 2015. p.63-72.

臨床検査学研究室

講演

1. 元文綺, 菰田照子, 坂内久一: *Chlamydomonas reinhardtii* 分

離のための高度感受性HL細胞のクローニング. 第32回日本クラミジア研究会学術集会, 京都, 2014年9月27日.

著書

1. 坂内久一: III章菌種別の培養・同定方法37「クラミジア/クラミドフィラ」. 臨床検査増刊号58巻11号 微生物検査イノベーション. 岩田敏ほか編. 東京, 医学書院, 2014. p.1380-1383.

生体検査学研究室

論文

1. Aiso T, Kamiya S¹, Yonezawa H¹, Gamou S²(¹Department of Infectious Diseases, Kyorin University School of Medicine, ²Department of Molecular Biology, Faculty of Health Sciences, Kyorin University): Overexpression of an antisense RNA, ArrS, increases the acid resistance of *Escherichia coli*. Microbiology. 160(Pt 5):954-61, 2014.

著書

1. 村椿春博, 八巻明子: クレアチニン, クレアチン, 尿酸, ビリルビン. 新版「臨床化学」第3版. 片山善章, 栢森裕三, 長村洋一編. 東京, 講談社, 2014. p.161-173.

特許等知的財産関係, 報告書

1. 相磯聡子: 肺癌の早期診断を目指した血中miRNA定量に関する基盤的研究. 科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)2013年度 研究実施状況報告書.

細胞診断学研究室

講演

1. 郡秀一, 篠ひろみ, 飯島淳子, 安井英明: 核と核小体の染色法の特徴. 第56回日本臨床細胞学会総会(春期大会), 横浜, 2014年6月5-7日.

臨床検査教育学研究室

講演

1. 小野川傑, 田口晴彦: 臨床検査学教育において「学生の考える力」をどうやって引き出すか? -免疫検査学実習の場合-. 第9回日本臨床検査学教育学会学術集会, 東京, 2014年8月20-22日.

著書

1. 小野川傑: 7.3 免疫凝集反応. 新版臨床免疫学第3版. 山田俊幸, 大戸斉, 渥美達也, 三宅幸子, 山内一由編. 東京, 講談社, 2014. p.78-82.
2. 小野川傑: 8.2.3 HIVとHTLV-I 感染症. 新版臨床免疫学第3版. 山田俊幸, 大戸斉, 渥美達也, 三宅幸子, 山内一由編. 東京, 講談社, 2014. p.122-128.
3. 小野川傑: 8.2.4 その他の感染症. 新版臨床免疫学第3版. 山田俊幸, 大戸斉, 渥美達也, 三宅幸子, 山内一由編. 東京, 講談社, 2014. p.128-132.

● 健康福祉学科 ●

環境保健学研究室

講演

1. Kaneko T, Goto K, Yamada I: A public health service

model as a part of countermeasures against the risk of environmental noise. 11th International Congress on Noise as a Public Health Problem, Nara, June 1st-5th, 2014.

2. 荻津真理子:学校における救急救命の体制づくり. 東京農業大学第3高等学校, 教職員研修会, 東松山, 2014年7月4日.
3. 内田敦美, 渡辺ルカ, 高瀬初美, 大和久清子, 荻津真理子, 白橋ひろ子, 久場陽子, 大谷尚子:学校における医療用医薬品の管理・使用に関する現状と課題—学会員対象の質問紙調査結果から—日本学校救急看護学会. 第9回学術大会, 東京, 2014年7月4日.
4. 荻津真理子:心のケアと教育相談の対応. 10年次経験者研究講座(養護教諭), 友部, 2014年7月9日.
5. 荻津真理子:学校健康教育研究部会の指導助言・講話. 小美玉市教育研究発表会, 小美玉, 2014年8月1日.
6. 荻津真理子:食物アレルギーへの対応. 笠間市健康教育部研修会, 笠間, 2014年8月5日.
7. 荻津真理子:養護教諭の執務について. 鉾田市教育会養護教諭研修会, 鉾田, 2014年8月26日.
8. 松塚雅博, 金子哲也, 関健介, 松井幸恵, 大熊鈴子, 石川友美:水質プロフィールによる多摩西部と国分寺崖線の湧水の検討. 環境科学会2014年会, 筑波, 2014年9月18日.
9. 金子哲也:航空環境と健康. 第39回空港環境対策担当者研修会, 東京, 2014年10月10日.
10. 関健介, 後藤恭一, 松塚雅博, 金子哲也:学校水泳プール水の有機物量評価に関しての一考察. 第74回日本公衆衛生学会, 宇都宮, 2014年11月6日.
11. 荻津真理子:養護教諭部会研究報告会の指導助言・講話. 水戸市学校保健会養護教諭部会研修会, 水戸, 2015年2月24日.

論文

1. 有路智恵, 関健介, 金子哲也:インドネシア看護師候補者の国家試験における困難に関する研究. 民族衛生 80(3):127-143, 2014.
2. 高瀬初美, 荻津真理子, 渡辺ルカ, 内田敦美, 大和久清子, 白橋ひろ子, 久場陽子, 大谷尚子:学校における医療用医薬品の管理・使用に関する現状と課題—学会員対象の質問紙調査結果から—. 学校救急看護研究 8(1):66-75, 2015.
3. 金子哲也, 後藤恭一:騒音健康影響の動向. 航空環境研究 19:79-86, 2015.

公衆衛生学研究室

講演

1. 久米梢子, 久保祐美子, 神山麻由子, 岡本博照, 小泉健雄, 和田貴子:二次救急病院に勤務する救急救命士に対する評価(第2報)多施設調査報告. 第17回日本臨床救急医学会総会, 宇都宮, 2014年5月31日-6月1日.
2. 久米梢子, 久保祐美子, 神山麻由子, 岡本博照, 小泉健雄, 和田貴子:救急救命士に対する二次救急病院での評価(第2報)多施設調査の報告. 第42回日本救急医学会総会, 福岡, 2014年10月28-30日.
3. 楠田美奈, 岩見文博, 石野晶子, 加藤英世, 大屋千鶴, 片桐朝美, 太田ひろみ, 大嶺智子, 照屋浩司:幼児・児童を対象とした音響的骨評価値の標準域設定に関する研究. 第73回日本公衆衛生学会総会, 宇都宮, 2014年11月5-7日.
4. 岡本博照, 照屋浩司, 大嶺智子, 楠田美奈, 深澤進次, 岩見文博, 松井知子, 角田透:中高年者の脳性ナトリウム利尿ペプ

チド(BNP)に影響を及ぼす要因について. 第73回日本公衆衛生学会総会, 宇都宮, 2014年11月5-7日.

5. 中島宏, 照屋浩司, 島田直樹, 真鍋知子, 櫻井裕:食後高血糖のスクリーニング検査としての1,5-anhydroglucitol. 第73回日本公衆衛生学会総会, 宇都宮, 2014年11月5-7日.
6. 北林蒔子, 高宮朋子, 大谷由美子, 小田切優子, 福島教照, 石橋弘子, 下光輝一, 井上茂:地方自治体職員における亜鉛, 葉酸の摂取と抑うつとの関係について. 第73回日本公衆衛生学会総会, 宇都宮, 2014年11月5-7日.
7. 石橋弘子, 高宮朋子, 大谷由美子, 小田切優子, 北林蒔子, 福島教照, 下光輝一, 駒田陽子, 井上雄, 井上茂:某地方自治体職員におけるスクリーンタイムと睡眠障害の関連. 第73回日本公衆衛生学会総会, 宇都宮, 2014年11月5-7日.
8. 竹前理映子, 岡本博照, 松井知子, 阿部淑子, 照屋浩司, 角田透, 竹前健彦:玄米酵素ハイゲンキスピリナ入り摂取と冷え性との関連について. 第79回日本民族衛生学会総会, つくば, 2014年11月21-22日.
9. 岡本博照, 照屋浩司, 谷口善仁, 角田透:救命救急センター勤務医師の職業性ストレス 性差での検討. 第85回日本衛生学会学術総会, 和歌山, 2015年3月26-28日.

論文

1. 岡本博照, 照屋浩司:M市運動相談事業データからみた中高年住民の循環器機能—脳性ナトリウム利尿ペプチド(BNP)からの検討—. 日本臨床内科医会誌29(2):265-270, 2014.
2. 久保祐美子¹, 岡本博照, 小泉健雄¹, 山口芳裕², 松田剛明², 照屋浩司, 和田貴子¹(¹杏林大・保・救命救急, ²杏林大・医・救急医学):西多摩医療圏の一病院における二次救急患者の搬送実態:地理的要因から見た分析. 日臨救医誌 17(4):522-529, 2014.
3. 岡本博照, 神山麻由子¹, 細田武伸², 照屋浩司, 角田透, 和田貴子¹(¹杏林大・保・救命救急, ²鳥取大・医・社会医学):某市消防局の消防指令要員の職業性ストレス, 燃えつきおよび抑うつについて. 民族衛生80(4):184-198, 2014.

著書

1. 岡本博照:エビデンスに基づく保健対策. エssenシャル 社会・環境と健康 第2版第5刷. 高島豊, 櫻井裕編. 東京, 医歯薬出版, 2014, pp.92-96.
2. 岡本博照:飲酒行動. エssenシャル 社会・環境と健康 第2版第5刷. 高島豊, 櫻井裕編. 東京, 医歯薬出版, 2014, pp.125-129.

特許等知的財産関係, 報告書

1. 橋口仁美, 福留斉, 恩田智子, 高畑彦松, 岡田真人, 吉田佳奈, 岡本博照:僻地診療所での見学—第1報 医療過疎の実態—(第3回学生リサーチ賞受賞者 受賞報告). 杏林医学会雑誌45(1):s3-6, 2014.
2. 恩田智子, 福留斉, 高畑彦松, 橋口仁美, 岡田真人, 吉田佳奈, 岡本博照:僻地診療所での見学—第2報 診療所の外来見学から見えた僻地での医師像—(第3回学生リサーチ賞受賞者 受賞報告). 杏林医学会雑誌45(1):s7-10, 2014.
3. 高畑彦松, 福留斉, 恩田智子, 橋口仁美, 岡田真人, 吉田佳奈, 岡本博照:僻地診療所での見学—第3報 通院患者の生活と健康の調査結果—(第3回学生リサーチ賞受賞者 受賞報告). 杏林医学会雑誌45(1):s11-15, 2014.

その他

1. 岡本博照:平成26年度日本民族衛生学会優秀論文賞受賞「某市消防局の消防指令要員の職業性ストレス, 燃えつきおよび抑うつについて」. 第79回日本民族衛生学会総会, つくば,

2014年11月21日.

心理学・社会福祉学研究室

講 演

1. 下島裕美:死生学教育を考えるー五色カード法を体験してみようー. 在宅ホスピスケア・ボランティアさくら研修講演会, 東京, 2014年6月12日.
2. 下島裕美:死生学教育を考える. 第6回杏林大学CCRC研究所セミナー, 東京, 2014年6月20日.
3. 下島裕美:時間的展望から死生学教育を考える. 日本心理学会公開シンポジウム「医療の質・安全に役立つ心理学研究を考える」, 東京, 2014年7月26日.
4. 下島裕美:エンディングノートの記入項目と時間的展望. 日本パーソナリティ心理学会第23回大会, 甲府, 2014年10月5日.
5. 下島裕美:死について考える教育. 日本認知心理学会公開シンポジウム, 京都, 2014年10月18日.
6. 楠田美奈, 岩見文博, 片桐朝美, 石野晶子, 加藤英世, 大屋千鶴, 太田ひろみ, 大嶺智子, 照屋浩司:幼児・児童を対象とした音響的骨評価値の標準域設定に関する研究. 第73回日本公衆衛生学会総会, 宇都宮, 2014年11月5-7日.
7. 熊井利廣:地域のネットワークはなぜ大切かー狛江市の子育て支援と虐待防止. 狛江市要保護児童対策地域協議会講演会, 東京, 2014年11月7日.
8. 熊井利廣:地域の連携はなぜ大切かー三鷹市の子ども家庭支援ネットワークの始まりと 今ー. 三鷹市要保護児童対策地域協議会講演会, 東京, 2015年2月16日.
9. 熊井利廣:なぜ児童委員の活動が大切か. 東京都民生委員・児童委員連合会講演会, 東京, 2015年2月24日.
10. 下島裕美, 石川智, 島田正亮:時間的展望から死について考える. 日本発達心理学会第26回大会, 東京, 2015年3月20日.
2. 松井知子:これからの職場復帰支援を考えるー心理職の立場からー. メンタルヘルスケア・ジャパン2014セミナー, 東京, 2014年5月27-29.
3. 平岡厚, 関澤浩一:悪性黒色腫細胞に対するプレオマイシンの増殖抑制作用に及ぼすp-フッ化ベンゼンスルフィン酸(Na塩)の増強効果の検討. 第25回 日本微量元素学会学術集会, 岡山, 2014年7月3日.
4. 角田透, 飯島美世子, 斎藤照代, 炭山隆, 錦戸典子, 松井知子, 森崎美奈子, 山田智子, 野田一雄:事業場におけるメンタルヘルス対策の有用性を評価するツールの開発. 第21回日本産業精神保健学会, 北九州, 2014年7月11-12日.
5. 松井知子:メンタルヘルス[社内研修の進め方]. 東京産業保健推進センター研修会(人事・労務・衛生管理者研修), 東京, 2014年7月14日.
6. 松井知子:ストレスの基礎理解とストレスマネジメント. 昭島市教育委員会初任者研修会セミナー, 昭島, 2014年8月1日.
7. 朝野聡:体育から見た芝生. 日本芝草学会公開シンポジウムさいたま, 2014年8月4日.
8. 関澤浩一, 加藤誠久, 田村高志, 関健介, 黒澤健司, 田辺秀之, 岸邦和:染色体検査教育のためのヒト核型分析学習ソフトウェア有効活用に向けてーダウンロード用ページへのアクセス解析からー. 第9回 日本臨床検査学教育学会学術大会, 東京, 2014年8月20-22日.
9. 朝野聡:ヘルスプロモーションとしての校庭芝生化. 日本芝草学会校庭芝生部会シンポジウム, 東京, 2014年8月31日.
10. 松井知子:メンタルヘルス[社内研修の進め方]. 東京産業保健推進センター研修会(保健師・看護師研修), 東京, 2014年9月8日.
11. 松井知子:メンタルヘルス[社内研修の進め方]. 東京産業保健推進センター研修会(人事・労務・衛生管理者研修), 東京, 2014年9月8日.
12. 堀川浩之, 弓桁亮介, 朝野聡, 石丸由理:園庭芝生化が幼児の体力に及ぼす影響. 国際幼児教育学会第35回大会, 富士吉田, 2014年9月13.
13. 朝野聡, 石丸由理, 堀川浩之, 弓桁亮介:幼児のレジリエンスと生活習慣. 国際幼児教育学会第35回大会, 富士吉田, 2014年9月13日.
14. 石丸由理, 朝野聡, 堀川浩之, 弓桁亮介:富士河口湖町の未来を担う子どもを育てるリトミックの取り組み. 国際幼児教育学会第35回大会, 2014年9月13日.
15. 櫻田淳, 北口和美, 大嶺智子, 大原榮子, 加納亜紀:養成大学における養護教諭初任者支援研修プログラム開発. 第22回日本養護教諭教育学会学術集会, 千葉, 2014年10月12日.
16. 大原榮子, 櫻田淳, 大嶺智子:私立学校に勤務する養護教諭の研修ニーズに関する調査. 第22回日本養護教諭教育学会学術集会, 千葉, 2014年10月12日.
17. 松井知子:産業・組織臨床の基礎知識と応用と魅力. 山口県臨床心理士会主催平成26年度第2回全体研修会, 山口, 2014年10月18日.
18. Sekizawa K, Kato T, Tanabe H :Three-dimensional relative positioning of chromosome 21 territories in the 21 trisomy cell nucleus: Comparative analysis by simulation using PC. The 65rd Annual Meeting of the Society of Chromosome Research, Kurashiki, October 24th-25th, 2014.
19. 岡本博照, 照屋浩司, 大嶺智子, 楠田美奈, 深澤進次, 岩見文博, 松井知子, 角田透:中高年者の脳性ナトリウム利尿ペプチド(BNP)に影響を及ぼす要因について. 第73回日本公衆衛

論 文

1. 大木幸子, 片桐朝美:生活保護受給世帯の児童・若者支援における効果的な支援方法の検討. 杏林CCRC研究所紀要 1:188-192, 2014.
2. 下島裕美:終末期に向けた思考整理ツールとしてのエンディングノートについて. 杏林大学研究報告教養部門 32:1-7, 2015.
3. 下島裕美, 島田正亮¹⁾(杏林大・医):生徒指導における不足情報の認識についてー教職実践演習におけるメタ認知能力を促す試みー. 杏林教職課程年報 創刊号:45-52, 2015.
4. 下島裕美, 三浦雅文²⁾, 門馬博¹⁾, 齋藤昭彦¹⁾, 蒲生忍¹⁾(杏林大・保, 杏林大・保健学研究科):メタ認知を促す医学教育ー4ボックス法の可能性を探るー. 杏林医学会雑誌 46:3-10, 2015.

著 書

1. Sircova A, Vijver FJR, Osin E, Milfont TL, Fieulaine N, Kislali-Erginbilic A, Zimbardo P, 54 members of the International Time Perspective Research Project (Shimajima Y et al.): Time perspective profiles of cultures. In Stlarski M, Fieulaine N, & Beek W (Eds.), Time perspective theory: Review, Research and Application. Springer, 2015. pp.169-187.

健康教育学研究室

講 演

1. 松井知子:ストレスの基礎理解とストレスマネジメント(リラクゼーション). 町田市教育委員会初任者研修会セミナー, 町田, 2014年5月8日.

生学会総会, 宇都宮, 2014年11月5-7日.

20. 松井知子:厚生労働行政と産業・組織心理臨床との関わりー関連法規(労働安全衛生法)の理解, 職場環境改善と心理職の役割, メンタルヘルスと法遵守関連法規などー. 平成26年度一般社団法人日本臨床心理士会臨床心理講座「継続講座～産業・組織心理臨床基礎研修(全6回)～」, 東京, 2014年11月15日.
21. 竹前理映子, 岡本博照, 松井知子, 阿部淑子, 照屋浩司, 角田透, 竹前健彦: 玄米酵素ハイゲンキスピルリナ入り摂取と冷え性との関連について. 第79回日本民族衛生学会総会, つくば, 2014年11月21-22日.
22. 松井知子:メンタルヘルスの基礎理解ストレスをためないコミュニケーション方法. 社会福祉法人至誠学舎東京サンメール尚和, 西東京, 2014年12月1-2日.
23. Hiraoka A, Sekizawa K, Kondo H: Arylsulfonyl derivatization with arylsulfonates of o-quinones employing endogenous tyrosinase and its substrates in various biomaterials. Active Enzyme Molecules 2014, Toyama, Japan, December 18th, 2014.
24. 松井知子:女性のキャリアに影響する心理的課題～マタニティブルー, 更年期, キャリアの悩み～. 東京経営者協会セミナー, 東京, 2015年1月28日.
25. 松井知子:はたらく場所での心理臨床と労働行政についてー法改正などー最新情報をふまえてー. 千葉県臨床心理士研修会, 千葉, 2015年2月2日.
26. 松井知子:メンタルヘルスの基礎理解 職場のラインケアー. 練馬区教育委員会生活指導主任セミナー, 東京, 2015年2月10日.
27. 松井知子:事例対応における留意点・事例検討. 第4回メンタルヘルス基礎講座 神奈川労働安全衛生協会平塚支部, 平塚, 2015年2月20日.
28. 松井知子:メンタルヘルスの基礎理解とストレスへの対処法. 至誠学舎メンタルヘルスセミナー, 立川, 2015年3月6日.

論文

1. 松橋明宏¹, 新井健一¹, 難波謙二¹, 朝野聡, 佐賀典夫², 弓桁亮介³, 堀川浩之³⁽¹⁾日本大, ²帝京大, ³昭和大): 土グラウンド及び芝生グラウンドにおけるサーフェイスの違いランニング時の身体活動および自律神経活動に及ぼす影響. 日本大学生産工学部研究報告48:11-15, 2015.
2. 新井健一¹, 松橋明宏¹, 難波謙二¹, 朝野聡, 弓桁亮介², 堀川浩之²⁽¹⁾日本大, ²昭和大): 土グラウンドおよび天然芝グラウンドにおける運動による心理的・生理的变化の比較. 日本大学生産工学部研究報告47:11-15, 2014.

著書

1. 松井知子: 歯科保健行動. エssenシャル 社会・環境と健康 第2版 第6刷. 高島豊, 櫻井裕編. 東京, 医歯薬出版, 2014.pp.132-136.

その他

1. 長見まき子, 松井知子: 特集今どきの若者を理解するー若年層のメンタルヘルス不調の特徴と対応. 健康管理61(11). 東京, 保健文化社, 2014.pp.2-22.
2. 松井知子: ストレスチェックをめぐって. 東京経営者協会会報 No.83, 2015. p.18.
3. 関澤浩一: ヒト末梢血Tリンパ球の分裂中期染色体画像を核型分析実習用として提供(Conventional Giemsa StainおよびGTG-banding; G-bands by trypsin using Giemsaの分裂中期染色体画像). 最新臨床検査学講座 遺伝子・染色体検査学,

医歯薬出版, 第1版第1刷発行, X VII, 2015年2月10日.

4. 大嶺智子: 「杏林」の精神を体現できる教員養成をめざして. 2014杏林大学教職課程年報 創刊号, 2-3, 2015年3月31日.

生理学研究室

講演

1. Tanaka K, Ito S, Kurokawa M: Neural control of the rectum in the penaeid shrimp, *Marsupenaeus japonicus*. The 11th International congress of Neuroethology (ICN2014), Sapporo, July 28th-August 1st, 2014.
2. Kurokawa M, Okutani M, Tanaka K: Comparative physiology of the autonomous movements of the gastrointestinal tract in mollusks. The 11th International congress of Neuroethology (ICN2014), Sapporo, July 28th-August 1st, 2014.

● 救急救命学科 ●

救急救命学研究室

講演

1. 久米梢子, 久保祐美子, 神山麻由子, 岡本博照, 小泉健雄, 和田貴子: 二次救急病院に勤務する救急救命士に対する評価(第2報)多施設調査報告. 第17回日本臨床救急医学会総会, 宇都宮, 2014年5月31日.
2. 神山麻由子, 久保祐美子, 久米梢子, 小泉健雄, 和田貴子: 救急救命士養成校学生の病院内実習の現状と課題. 第17回日本臨床救急医学会総会, 宇都宮, 2014年5月31日.
3. 久米梢子, 久保祐美子, 神山麻由子, 岡本博照, 小泉健雄, 和田貴子: 救急救命士に対する二次救急病院での評価(第2報)多施設調査の報告. 第42回日本救急医学会総会, 福岡, 2014年10月28日.
4. 神山麻由子, 久保祐美子, 久米梢子, 小泉健雄, 和田貴子: 救急救命士養成校学生の病院内実習に関する調査研究. 第43回杏林医学会, 三鷹, 2014年11月15日.

論文

1. 久保祐美子, 岡本博照, 小泉健雄, 山口芳裕, 松田剛明, 照屋浩司, 和田貴子: 西多摩医療圏の一病院における二次救急患者の搬送実態: 地理的要因から見た分析. 日臨救医誌 17(4):522-529, 2014.
2. 岡本博照, 神山麻由子, 細田武伸, 照屋浩司, 角田透, 和田貴子: 某市消防局の消防指令要員の職業性ストレス, 燃えつきおよび抑うつについて. 民族衛生80(4):184-198, 2014.

著書

1. 森数美: せん妄. Medical Practice 31(臨増). 東京, 文光堂, 2014. p.175-176.

その他

1. 和田貴子: 座長. 救急救命士の再教育. 第17回日本臨床救急医学会総会, 宇都宮, 2014年5月31日.
2. 和田貴子: 座長. 第42回日本救急医学会総会, 福岡, 2014年10月28日.

救急処置病態学研究室

講演

1. 小泉健雄: 羽村中学校BLS講演. 羽村, 2014年6月2, 9, 16日.

2. 小泉健雄:いのちを守ることを伝えるために -AED使用を含めた中学生BLS指導の経験から-. 第42回日本救急医学会総会, 福岡, 2014年10月28-30日.

医療安全管理学研究室

講 演

1. 久米梢子,岡本博照,久保佑美子,神山麻由子,小泉健雄,和田貴子:二次救急病院に勤務する救急救命士に対する評価 -第2報 多施設調査報告-. 第17回日本臨床救急医学会総会, 下野,2014年5月31日-6月1日.
2. 神山麻由子, 久保佑美子, 久米梢子, 小泉健雄, 和田貴子:救急救命士養成校学生の病院内実習の現状と課題,第17回日本臨床救急医学会総会, 宇都宮, 2014年5月31日.
3. 川村治子:これだけは知っておきたい! 看護師の直接行為による医療事故防止 (2). 三鷹市医師会・杏林大学病院医療安全連携推進講演会第6回医療安全講演会, 三鷹,2014年10月28日.
4. 久米梢子,久保佑美子,神山麻由子,岡本博照,小泉健雄,和田貴子:救急救命士に対する二次救急病院での評価(第2報)多施設調査の報告. 第42回日本救急医学会総会,福岡,2014年10月28日.
5. 神山麻由子, 久保佑美子, 久米梢子, 小泉健雄, 和田貴子:救急救命士養成校学生の病院内実習に関する調査研究. 第43回杏林医学会, 三鷹, 2014年11月15日.
6. 川村治子:これだけは知っておきたい看護師の医療事故防止. 東京都庁医療安全講演会, 東京, 2014年11月25日.
7. 川村治子:知らねばならない“危険”の知識をどう教育するか? -一具体的事例で考える医療安全教育-. 地域医療振興会医療安全講習会, 東京, 2014年11月30日.
8. 川村治子:リスクマネジメント手法インシデントリポートの有効活用. 全社会福祉施設経営者協議会「初期リスクマネジャー養成研修会」, 東京, 2014年12月24日.
9. 川村治子:転倒・転落事故の発生要因と対策～インシデント1,500事例の分析から～. 小田原市民病院講演会, 小田原, 2015年2月10日.

論 文

1. 川村治子:転倒・転落事例分析からみた対策と責任 -医療安全の立場から-. Modern Physician 34(10): 1203-1206, 2014.
2. 久保佑美子, 岡本博照, 小泉健雄, 山口芳裕, 松田剛明, 照屋浩司, 和田貴子:西多摩医療圏の一病院における二次救急患者の搬送実態:地理的要因から見た分析. 日臨救医誌 17:522-529,2014.

● 看護学科・看護学専攻 ●

基礎・在宅看護学研究室

講 演

1. 伊藤まゆみ, 金子多喜子, 大場良子, 藤桂:看護師用ストレスフルなケアに対する意味づけ尺度の開発. 日本カウンセリング学会第47回大会, 名古屋, 2014年8月29-31日.
2. 米田美智子, 齊藤茂子, 金子多喜子:社会人経験のある新人看護師の就労継続意欲を支えた要因. 第18回日本看護管理学会学術集会, 愛媛, 2014年8月29-30日.

3. 村野裕子, 齊藤茂子, 金子多喜子:集中治療室の先輩看護師が新人看護師の成長を感じた関わり. 第18回日本看護管理学会学術集会, 愛媛, 2014年8月29-30日.
4. 津田美智子:看護学生の心理的ストレス反応の特徴 第2報. 第18回日本看護管理学会学術集会, 愛媛, 2014年8月29-30日.
5. 鈴木聡, 大金ひろみ, 内山研一, 丹内まゆみ:地域で看取るとはどういうことか? SSMベースのアクションリサーチからの学びのリフレクションの場. 第18回日本看護管理学会学術集会, 松山, 2014年8月29-30日.
6. 伊藤まゆみ, 金子多喜子, 大場良子, 小玉正博:看護師用終末期ケア効力感尺度の開発. 日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第16回大会, 香川, 2014年9月13-14日.
7. 金子多喜子, 伊藤まゆみ, 大場良子, 小玉正博:看護師のストレスフルなケアに対する意味づけの検討. 日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第16回大会, 香川, 2014年9月13-14日.
8. 柴崎美紀:地域一体型で活躍が期待される歯科衛生士へ看護師として伝えたいこと. 深川塾講演, 東京, 2014年11月2日.
9. 津田美智子:看護学生のストレス反応と食生活の関連. 第73回日本公衆衛生学会学術集会, 栃木, 2014年11月5-7日.
10. 米澤純子, 美ノ谷新子, 原田静香, 柴崎美紀, 宮近郁子, 入野豊, 山口豊子, 森本喜代美, 丸山美知子:介護支援専門員のがん終末期患者へのケアマネジメントにおける重要時期とその支援. 第73回日本公衆衛生学会, 宇都宮, 2014年11月5-7日.
11. 伊藤まゆみ, 大場良子, 金子多喜子:看護師のストレスフルなケアに対する意味づけが終末期ケア効力感に及ぼす影響. 第34回日本看護科学学会学術集会, 名古屋, 2014年11月29-30日.
12. 今留忍, 佐藤智子:基礎看護学実習を挟む1年間での看護学生のコミュニケーション能力向上. 第34回日本看護科学学会学術集会, 名古屋, 2014年11月29-30日.
13. 添野民江, 千葉正博, 森みさ子, 川畑亜加里, 朝倉之基, 柴崎美紀, 建宮実和, 矢吹浩子:看護師における臨床栄養の教育問題を考える. 第30回日本静脈経腸栄養学会, 神戸, 2015年2月12-13日.
14. 伊藤まゆみ, 大場良子, 金子多喜子:終末期ケア看護師のストレスフルなケアに対する意味づけとケア効力感がバーンアウトに及ぼす影響. 第29回日本がん看護学会学術集会, 横浜, 2015年2月28日-3月1日.
15. 大場良子, 伊藤まゆみ, 金子多喜子, 藤桂:看護師の終末期ケア効力感に関する検討, 第29回日本がん看護学会学術集会, 横浜, 2015年2月28日-3月1日.
16. 原田静香, 宮本千恵美, 柴崎美紀, 中山久子, 岡本美代子:退院前合同カンファレンスに関する患者家族の受容プロセス -在宅療養での看取りを検討する家族を対象として-. 順天堂大学医療看護研究会, 浦安, 2015年3月6日.
17. 柴崎美紀:全国の地域一体型NSTから学んだ活動の現状とこれからの展望. 地域栄養ケアユニット多職種協働学習会(幸手市栄養士会), 幸手, 2015年3月20日.

論 文

1. 柴崎美紀:地域一体型NSTにおける歯科領域との連携ガイドラインの構築へ向けての予備調査. 医療の広場 54(7):27-30, 2014.

著 書

- 金子多喜子:アセスメント力がつく！臨床実践に役立つ看護過程. 石川ふみよ監修. 東京, 学研, 2014.p.62-63.
- 金子多喜子:看護に活かすカウンセリングⅠ. 伊藤まゆみ編. 名古屋, ナカニシヤ出版, 2014.p.55-61.
- 山本君子他:第104回看護師国家試験対策プレテスト-2nd問題・解説. TECOM. 東京, T・M・S, 2014.p.446.
- 津田美智子他:第104回看護師国家試験対策プレテスト-2nd問題・解説. TECOM. 東京, T・M・S, 2014.p.288,447.
- 津田美智子他:第104回看護師国家試験対策プレテスト-3rd問題・解説. TECOM. 東京, T・M・S, 2014.p.526,580,692.
- 山本君子他:TECOM インフォメーションサービス 第104回看護師国家試験解答速報(Web サイト記事)解答例の作成. 東京, ティ・エム・エス, 2015.午前問題 p.36-53,88,91-96, 午後問題 p.39-57,76,84,90-96.
- 法橋尚宏, 山本君子他:ラスパ過去問対策 第103回看護師国家試験問題 解説書 第1巻. 東京, 医学評論社, 2014.p.18,32,53,62,81.
- 大金ひろみ, 金子真理子:看護実践のためのがん看護 Vol.4 在宅におけるがん看護と家族へのケア. 東京, 医学映像教育センター, 2014. DVD.

特許等知的財産係 報告書

- 伊藤まゆみ¹, 金子多喜子, 大場良子², 藤桂³(¹共立女子大学, ²埼玉県立大学, ³筑波大学):がん看護に携わる看護師への教育的支援 ―カウンセリング技法を活用した患者の苦悩に対する支援技術の獲得, 安田研究報告書, 癌研究助成成果報告集13, p112-116, 2015.

その他

- 柴崎美紀:たまケアLiveで「野望」の話をしよう～地域包括ケアシステム編. 一般社団法人チーム医療フォーラム季刊誌「ツ・ナ・ガ・ル」夏号, p.8, 2014.

成人・高齢者看護学研究室

講演

- 佐藤澄子:派遣・委託職員教育への取り組みー実践課題6か月後, 1年後に評価を導入してー. 第18回日本看護管理学会学術集会, 愛知, 2014年8月29-30日.
- 吉井真美, 茂木美智子, 藤井知子, 小河百合子, 中島恵美子, 八並光信, 高山信之:造血幹細胞移植患者に実施した運動プログラムの効果の検討. 第37回造血細胞移植学会総会, 神戸, 2015年3月5-7日.

その他

- 中島恵美子:がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン事業連携大学合同市民公開シンポジウム主催, 三鷹, 2014年7月5日.
- 伊藤有美:重症患者の栄養管理, 2014年度ICU・CCU看護教育セミナー(初級コース), 大阪, 2014年7月10-12日.
- 伊藤有美:重症患者の栄養管理, 2014年度ICU・CCU看護教育セミナー(初級コース), 東京, 2014年9月4-6日.
- 中島恵美子:がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン事業がん患者コーディネーター養成(インテンシブ)コース主催, 三鷹, 2014年9月20日-12月13日.

母子看護学研究室

講演

- 大嶋友香, 松岡恵, 西川浩昭:妊婦の性生活に関する健康教

育の実施における助産師の意図, 行動に関連する要因ー計画的行動理論を用いてー. 第34回日本看護科学学会, 名古屋, 2014年11月29日.

- 杉山怜那, 松岡恵, 西川浩明:父子早期接触が第一子誕生後1～2か月の父親のメンタルヘルスに及ぼす影響. 第29回日本助産学会, 東京, 2015年3月29日.
- Naito T, Kubo K, Matsuoka M, Okamoto M: Prenatal and Postnatal Classes in Japan: The Effectiveness of the “Infant Crying Support Program”.第30回International Confederation of Midwives, Czech, June 1st-5th, 2014.

論文

- 長田知恵子:母乳哺育で困っています！そのトラブル, 誤解から始まっているかも. 静岡県母性衛生学会学術誌 4(1): 45-47, 2014.

著書

- 長田知恵子:エビデンスをもとに答える 妊産婦・授乳婦の疑問92. 堀内成子総編集, 飯田真理子, 中村幸代, 永森久美子, 八重ゆかり分担編集. 東京, 南江堂, 2015.

助産学研究室

論文

- 谷口綾, 大久保功子¹, 齋藤真希¹, 廣山奈津子¹, 小田柿ふみ¹, 三隅順子¹(¹東京医科歯科大学大学院):帝王切開で出産した女性の妊娠中から産後1か月までの心理的プロセスー覚悟と納得ー. 日本看護科学会誌 34:94-102, 2014.

小児看護学研究室

講演

- Kawakami C, Ideno K, Ogawa J, Amano R, Harada K, Morita N, Ishikawa F: Emotional experiences of parents caring for their children with cancer. The 46th Congress of the International Society of Paediatric Oncology, Canada, October 22nd-25th, 2014.

論文

- 吉野純:「親の発達」の概念分析. 日本小児看護学会誌 23 (2):25-33, 2014.

著書

- 吉野純:嘔吐,下痢,血便,腹痛の看護のポイント. 小児看護38 (3). 横田俊平. 東京, へるす出版, 2015.p.309-311.
- 中村明子:CⅠ プレパレーション. やさしくわかる小児看護技術第2版. 草柳浩子, 岩瀬貴美子編著. 東京, ナツメ社, 2014.p.56-58.
- 中村明子:CⅡフィジカルアセスメント. やさしくわかる小児看護技術第2版. 草柳浩子, 岩瀬貴美子編著. 東京, ナツメ社, 2014.p.59-72.
- 中村明子:CⅣ検体採取. やさしくわかる小児看護技術第2版. 草柳浩子, 岩瀬貴美子編著. 東京, ナツメ社, 2014.p.88-104.

地域看護学研究室

講演

学会

- 加藤昌代:カウンセリングワークショップ. 第577回NPO法人日本精神療法学会, 伊香保町, 2014年4月19-20日.

2. 加藤昌代: カウンセリングワークショップ. 第584回NPO法人日本精神療学会, 山ノ内町, 2014年8月30-31日.
 3. 澁川悦子, 藤原千秋, 佐藤睦子, 大塚陽子: 子ども虐待予防と保健師活動 潜在事例を顕在化へー格差縮小ー, 日本子ども虐待防止学会 第20回学術集会あいち大会, 名古屋, 2014年9月14日.
 4. 若林チヒロ, 大木幸子, 生島嗣: HIV陽性者の地域生活とエイズ政策評価. 第73回日本公衆衛生学会総会, 栃木, 2014年11月5-7日.
 5. 井上洋士, 戸ヶ里泰典, 若林チヒロ, 細川陸也, 矢島嵩, 高久陽介, 板垣貴志, 大木幸子: HIV陽性者の性生活及びセクシュアルヘルス相談経験についての調査研究. 第73回日本公衆衛生学会総会, 宇都宮, 2014年11月5-7日.
 6. 細川陸也, 井上洋士, 戸ヶ里泰典, 若林チヒロ, 大木幸子, 矢島嵩, 高久陽介, 板垣貴志: HIV陽性者の子どもを持つことへの思いと医療現場における相談体制の実態. 第73回日本公衆衛生学会総会, 宇都宮, 2014年11月5-7日.
 7. 加藤昌代: カウンセリングワークショップ. 第589回NPO法人日本精神療学会, 上田, 2014年11月22-23日.
 8. 大木幸子, 高城智圭, 阿部幸枝, 生島嗣, 岡野江美, 中澤よう子, 野口雅美, 古屋智子, 谷部陽子, 若林チヒロ: 全国保健行政機関の精神保健担当者におけるHIV陽性者の薬物相談への自己効力感とその関連要因. 第28回日本エイズ学会学術集会, 大阪, 2014年12月3-5日.
 9. 戸ヶ里泰典, 井上洋士, 高久陽介, 矢島嵩, 板垣貴志, 阿部桜子, 細川陸也, 吉澤繁行, 大木幸子, 若林チヒロ, 片倉直子, 山内麻江: HIV陽性者男性における依存性薬物使用の実態とその関連要因. 第28回日本エイズ学会学術集会, 大阪, 2014年12月3-5日.
 10. 阿部桜子, 井上洋士, 戸ヶ里泰典, 高久陽介, 矢島嵩, 板垣貴志, 細川陸也, 吉澤繁行, 大木幸子, 若林チヒロ, 片倉直子, 山内麻江: HIV陽性者におけるソーシャルサポートネットワークの実態について. 第28回日本エイズ学会学術集会, 大阪, 2014年12月3-5日.
 11. 阿部桜子, 井上洋士, 戸ヶ里泰典, 高久陽介, 矢島嵩, 板垣貴志, 細川陸也, 吉澤繁行, 大木幸子, 若林チヒロ, 片倉直子, 山内麻江: HIV関連のスティグマが陽性者のメンタルヘルスに与える影響について. 第28回日本エイズ学会学術集会, 大阪, 2014年12月3-5日.
 12. 戸ヶ里泰典, 井上洋士, 高久陽介, 矢島嵩, 板垣貴志, 阿部桜子, 細川陸也, 吉澤繁行, 大木幸子, 若林チヒロ, 片倉直子, 山内麻江: HIV陽性男性におけるメンタルヘルスとHIV/AIDSを巡る孤立状態との関連. 第28回日本エイズ学会学術集会, 大阪, 2014年12月3-5日.
 13. 山内麻江, 井上洋士, 戸ヶ里泰典, 高久陽介, 矢島嵩, 板垣貴志, 阿部桜子, 細川陸也, 吉澤繁行, 大木幸子, 若林チヒロ, 片倉直子: HIV陽性者の慢性疾患, 自覚症状及び睡眠状況に関する調査研究, 第28回日本エイズ学会学術集会, 大阪, 2014年12月3-5日.
 14. 細川陸也, 井上洋士, 戸ヶ里泰典, 高久陽介, 矢島嵩, 板垣貴志, 阿部桜子, 吉澤繁行, 大木幸子, 若林チヒロ, 片倉直子, 山内麻江: HIV陽性者の老後に対する不安について. 第28回日本エイズ学会学術集会, 大阪, 2014年12月3-5日.
 15. 井上洋士, 戸ヶ里泰典, 細川陸也, 阿部桜子, 板垣貴志, 片倉直子, 山内麻江, 吉澤繁行, 高久陽介, 矢島嵩, 若林チヒロ, 大木幸子: HIV陽性者の陽性判明後の性行動及び性の相談に関連した経験に関する調査研究. 第28回日本エイズ学会学術集会, 大阪, 2014年12月3-5日.
 16. 板垣貴志, 鈴木達郎, 井上洋士, 戸ヶ里泰典, 高久陽介, 矢島嵩, 阿部桜子, 細川陸也, 吉澤繁行, 大木幸子, 若林チヒロ, 片倉直子, 山内麻江: 「Futures Japan HIV陽性者のためのウェブ調査」における回答者属性の特徴の検討. 第28回日本エイズ学会学術集会, 大阪, 2014年12月3-5日.
 17. 細川陸也, 井上洋士, 戸ヶ里泰典, 高久陽介, 矢島嵩, 板垣貴志, 阿部桜子, 吉澤繁行, 大木幸子, 若林チヒロ, 片倉直子, 山内麻江: HIV陽性者の医療機関への通院状況. 第28回日本エイズ学会学術集会, 大阪, 2014年12月3-5日.
 18. 岩橋恒太, 高野操, 大島岳, 阿部甚兵, 柴田恵, 矢島嵩, 加藤悠二, 佐久間久弘, 大木幸子, 塩野徳史, 金子典代, 市川誠一, 生島嗣, 荒木順子: 首都圏居住のMSMを対象とした, HIV抗体検査普及のためのウェブコンテンツ「あんしんHIV検査サーチ」の構成とその検討. 第28回日本エイズ学会学術集会, 大阪, 2014年12月3-5日.
 19. 品田朋子, 市川かよ子, 原田千尋, 山本裕美, 吉原恭子, 佐藤睦子: 難病患者支援における保健師のスキルの検証ー熟練保健師が遺した物語からー. 第3回日本公衆衛生看護学会, 神戸, 2015年1月11日.
 20. 大木幸子: HIV陽性者のセクシュアルヘルス支援ー患者から受ける性の相談ー, HIV陽性者のセクシュアルヘルス支援のための研修. HIV/エイズ看護学会, 東京, 2015年2月8日.
- 地域の講演会, 研修会
1. 大木幸子: 要支援家族へのかかわりー要支援家族へのアプローチー. 東京都看護師 保健師集団研修, 東京, 2014年6月18日.
 2. 大木幸子: 横浜市保健師1年目研修(第1回). 横浜, 2014年7月28日.
 3. 大木幸子: 要支援家族のアセスメントをととして, 家族の課題・支援を考える. 東京都訪問教育研究協議会・整備訪問看護事業部合同研修, 東京, 2014年8月5日.
 4. 大木幸子: 保健師に求められる能力, 視点, 姿勢. 平成26年度青森県初任期保健師研修第1回, 青森, 2014年8月18日.
 5. 大木幸子: 地区組織活動の展開方法. 川崎市新任期看護職フォロー研修, 川崎, 2014年11月25日.
 6. 大木幸子: 保健師業務における感染症対策ー地域における保健師活動を踏まえてー(第1回) 結核対策. 町田市健康危機管理研修, 町田, 2014年12月8日.
 7. 大木幸子: 横浜市保健師1年目研修(第2回). 横浜, 2014年12月12日.
 8. 大木幸子: 保健師業務における感染症対策ー地域における保健師活動を踏まえてー(第2回) 感染症対策. 町田市健康危機管理研修, 町田, 2014年12月22日.
 9. 大木幸子: 保健師の行う地区保健活動について. 所沢市地区活動研修, 所沢, 2015年1月14日.
 10. 大木幸子: 保健師に求められる能力, 視点, 姿勢. 平成26年度青森県初任期保健師研修第2回, 青森, 2015年1月16日.
 11. 大木幸子: セクシュアリティの理解とセクシュアルヘルスへの支援. 平成26年度神奈川県保健所等HIV検査従事者のためのエイズ専門研修, 横浜, 2015年1月19日.
 12. 大木幸子: 公衆衛生看護活動の特性. 横浜市若手保健師対象研修, 横浜, 2015年2月28日.
 13. 大木幸子: 家族アセスメントの視点と手段. 東京都地域子育て支援研修, 東京, 2015年3月2日.
 14. 大木幸子: 保健師が行う家庭訪問の意義. 横浜市西区訪問指導事業研修, 横浜, 2015年3月5日.

15. 大木幸子:保健師活動指針を踏まえた保健師活動の展開～精神保健相談業務～. 町田市保健師研修, 町田, 2015年3月12日.

論文

1. 大木幸子, 高城智圭:保健師活動の原点としての家庭訪問 家庭訪問の機能と技術. 保健師ジャーナル70(10):850-856, 2014.
2. 佐伯和子¹, 村嶋幸代², 大木幸子, 尾崎章子³, 蔭山正子⁴, 河野あゆみ⁵, 西崎美和³, 松下光子⁶(¹北海道大, ²大分大, ³東邦大, ⁴東京大, ⁵大阪府立大, ⁶岐阜大):日本地域看護学会委員会報告 地域看護学の定義について. 日本地域看護学会誌17(2):75-84, 2014.
3. 大木幸子:見方を変えると“場”が変わる 事例検討会の進め方(第1回) 事例検討会の意義. 保健師ジャーナル71(1):72-76, 2015.
4. 大木幸子:見方を変えると“場”が変わる 事例検討会の進め方(第2回) 事例検討会の進め方と検討のための工夫. 保健師ジャーナル71(2):164-170, 2015.
5. 大木幸子:見方を変えると“場”が変わる 事例検討会の進め方(第3回)【事例1】家族史から家族の機能や関係性をアセスメントする. 保健師ジャーナル71(3):256-261, 2015.
6. Yokoyama Y, Hirano K, Sato M, Abe A, Uebayashi M, Kishi E, Kuroda Y, Nakaita I, Fukushima F, : Activities and Health Status of Dispatched Public Health Nurses after the Great East Japan Earthquake. Public Health Nursing 31(6):537-544, 2014.

特許等知財関係, 報告書

1. 大木幸子:HIV及び精神保健の専門機関における支援と連携に関する研究. 平成26年度厚生労働科学研究費補助金(エイズ対策研究事業)地域においてHIV陽性者等のメンタルヘルスを支援する研究 分担研究報告書.
2. 草野恵美子,佐藤睦子,樺山舞,新美志帆:乳幼児健康診査における標準的な保健指導に関する研究. 平成26年度厚生労働科学研究費補助金(成育疾患等次世代育成基盤研究事業),乳幼児健康診査の実施と評価ならびに多職種連絡による母子保健指導のあり方に関する研究 分担報告書.
3. 乳幼児健康診査の実施と評価ならびに多職種連携による母子保健指導のあり方に関する研究班(研究代表者山崎嘉久):標準的な乳幼児期の健康診査と保健指導の手引き～「健やか親子21(第2次)の達成に向けて～. 平成26年度厚生労働科学研究費補助金(成育疾患等次世代育成基盤研究事業),乳幼児健康診査の実施と評価ならびに多職種連絡による母子保健指導のあり方に関する研究.

その他

1. 大木幸子:HIV/エイズとセクシュアリティについて解説, World of Love ～Let's Talk about HIV/AIDS～, 東京都インターネット番組, 2014年12月13日.

精神看護学教室

講演

1. 吉田信子, 斉藤広子, 玉井わか子, 浅沼奈美:妊娠経過中に強い精神症状を有した妊婦への寄り添う看護～精神神経科病棟における看護実践～. 日本精神保健看護学会第24回学術集会, 横浜, 2014年6月21-22日.
2. 太田真理子, 佐藤美保, 浅沼奈美:精神科外来を受診したうつ病患者の精神症状と性格傾向との関連～職場関連性に焦

点をあてた看護介入の検討～. 日本精神保健看護学会第24回学術集会, 横浜, 2014年6月21-22日.

3. 田野将尊:「プロセスレコードカンファレンスの楽しみ方」. 井之頭病院実習指導者研修会, 三鷹, 2014年7月10日.
4. 浅沼奈美:「福祉事務所等における保健師の効果的な活動・活用事例」. 第2回生活保護受給者の健康管理の在り方に関する研究会(厚生労働省社会・援護局保護課), 東京, 2014年10月6日.
5. 原政代, 小田真智子, 浅沼奈美:生活保護受給者の健康支援から保健師の力量形成を考える～健康日本21における健康格差, 社会格差の改善に向けて～. 第3回日本公衆衛生看護学会学術集会, 神戸, 2015年1月10-11日.
6. 浅沼奈美:「援助について考える」. 東京都精神保健福祉研修(後期)地域援助技術研修・中級, 東京, 2015年1月23日.

その他

1. 浅沼奈美:兵庫県洲本市での5人殺人事件に関してコメント, 毎日新聞(関西版), 2015年3月16日.

医療科学 I 研究室

講演

1. Takagi T, Takashino S, Yoshida M, Yamada C, Kigasawa H, Iwade S, Sato Y: An autopsy case of a child who died from tension pneumothorax due to the stomach penetrating into the thorax ; Is the hole of the diaphragm congenital or acquired? . 9th ISALM (International Symposium on Advances in Legal Medicine), Fukuoka, 2014年6月16-20日.
2. Yoshida M, Takashino S, Kigasawa H, Yamada C, Iwade S, Takagi T, et al: Cadaver restoration using silicone-based artificial skin for special effects makeup. 9th ISALM (International Symposium on Advances in Legal Medicine), Fukuoka, 2014年6月16-20日.
3. 都築民幸,岩原香織,高篠智,吉田昌記,山田千歩,氣賀澤秀明,上野麻夫,(岩橋桜子)ほか: 歯科検査のための遺体を傷つけない開口法と開口器の開発. 第98次日本法医学会学術全国集会, 福岡, 2014年6月16-20日.

その他

1. 岩橋桜子:第15回アジアクラブ女子選手権大会 引率スタッフ, 帯同ドクター 派遣, タイ, 2014年4月17-25日.
2. 岩橋桜子:第17回アジア競技大会(2014/仁川) 引率スタッフ, 帯同ドクター 派遣, 韓国, 2014年9月20日-10月2日.
3. 岩橋桜子:多摩・島しょ地域監察医務検案業務に係る永年従事医師に対する福祉保健局長感謝状 授与2015年3月31日.

● 看護学科・看護養護教育学専攻 ●

母子看護学研究室

講演

1. 楠田美奈, 岩見文博, 石野晶子, 加藤英世, 大屋千鶴, 片桐朝美, 太田ひろみ, 大嶺智子, 照屋浩司:幼児・児童を対象とした音響的骨評価値の標準域設定に関する研究. 第73回日本公衆衛生学会総会, 宇都宮, 2014年11月5-7日.
2. 高橋真理,増田美恵子,青柳優子,高島えり子,植竹貴子,大田康江,鈴木紀子,藤本薫,日置智華子,湯本敦子,佐々木裕子:少子・晩婚化社会に向けたプレコンセプションケアへの看

護系大学の取り組み. 第11回 医療看護研究会, 千葉, 2015年3月6日.

3. Sasaki Y: Early Postpartum Childcare Stress Evident on IT Q&A Community Sites. The 6th World Congress on Women's Mental Health, Japan Tokyo, March 23rd-25th, 2015.

論文

1. 佐藤喜美子¹, 太田ひろみ, 佐々木裕子, 鈴木朋子^{(¹杏林大・保・看護学科, 助産学教室): ピアサポーターとつくる多胎育児準備クラス. 助産雑誌 68(4):306-309, 2014.}
2. 太田ひろみ: 都市部での子育てをめぐる課題と大学が行う子育て支援活動. 杏林医学会雑誌45(3):101-104, 2014.
3. 太田ひろみ, 朝野聡¹, 井手拓郎², 亀崎路子³, 佐々木裕子, 楠田美奈⁴, 太田真理子⁵, 大屋千鶴^{(¹杏林大・保・健康福祉学科, ²杏林大・外・観光交流文化学科, ³杏林大・保・看護・学校看護学, ⁴杏林大・保・看護・基礎看護学, ⁵杏林大・保・看護・精神保健看護学, ⁶杏林大・保・看護・成人老年看護学): 大学生と当事者の連携による発達障がい児の余暇活動支援ネットワーク生成に関する研究. 平成26年度杏林大学杏林CCRC研究所紀要1:185-187, 2014.}
4. 佐々木裕子, 高橋真理^{(¹順天堂大): インターネットのQ&Aコミュニティサイトにみる0~4ヶ月児の母親の育児における寝かしつけの悩み—テキストマイニングによる分析—. 順天堂医療看護研究 15:28-35, 2015.}

基礎看護学研究室

講演

1. 楠田美奈, 岩見文博, 石野晶子, 加藤英世, 大屋千鶴, 片桐朝美, 太田ひろみ, 大嶺智子, 照屋浩司: 幼児・児童を対象とした音響的骨評価値の標準域設定に関する研究. 第73回日本公衆衛生学会総会, 宇都宮, 2014年11月5-7日.
2. 岡本博照, 照屋浩司, 大嶺智子, 楠田美奈, 深澤進次, 岩見文博, 松井知子, 角田透: 中高年住民の脳性ナトリウム利尿ペプチド(BNP)に影響を及ぼす要因について. 第73回日本公衆衛生学会総会, 宇都宮, 2014年11月5-7日.
3. 石井博之, 楠田美奈, 星谷綾香, 原口裕希: 健康寿命延伸を目的とした, スポーツ機会の提供プログラムの紹介. 第3回南多摩福祉機器展, 八王子, 2014年11月15-16日.

その他

1. 上谷いつ子: 交流セッションⅠ「医療現場における専門職連携実践(IPW)・教育(IPE)を推進するために～ともに学び・学びあうチームづくり～」座長, 第45回日本看護学会「急性期看護」学術集会, 横浜, 2014年10月23日.
2. 上谷いつ子: 第45回日本看護学会「急性期看護」学会準備委員長, 横浜, 2014年10月23-24日.
3. 上谷いつ子: 神奈川県看護協会認定看護管理者ファーストレベル教育課程, 人材育成論「人材育成の方法」講師, 2014年7月1, 7日.
4. 上谷いつ子: 新潟県看護協会認定看護管理者ファーストレベル教育課程, 看護サービス提供論「看護サービスの概要」講師, 2014年9月15-16日.
5. 上谷いつ子: 神奈川県看護協会認定看護管理者セカンドレベル教育課程, 人的資源活用論「人的資源活用のためのマネジメント」講師, 2014年11月14, 21日.

学校看護学研究室

講演

1. 亀崎路子: 4ボックス法を使った倫理教育の授業の試案. 日本養護教諭養成大学協議会2014年度教育セミナー, 東京, 2014年9月5日.
2. 亀崎路子: 養護教諭とスクールカウンセラーの連携に関する文献検討—年代順による特徴—. 第11回日本学校健康相談学会学術集会, 松戸, 2015年3月22日.
3. 亀崎路子, 田村千恵子, 富田瑞穂: 第11回学術集会テーマ企画「実践研究への導入—困りどころから見えてくるもの—. 第11回日本学校健康相談学会学術集会, 松戸, 2015年3月22日.

論文

1. 亀崎路子: 養護教諭の地域ネットワークづくりに変化をもたらした研究者の働き—アクションリサーチを用いた研究者による実践者のための促進的アプローチ—. 学校健康相談研究 11(1):39-53, 2014.
2. 亀崎路子, 大谷尚子^{(¹養護実践研究センター): 「実践」を「論文」につなげるための学会誌編集の取り組み—養護系及び周辺領域学会における実情—. 学校健康相談研究 11(1):8-19, 2014.}

その他

1. 斉藤ふくみ, 河野千枝, 上原美子, 亀崎路子, 香野三枝子, 森田光子, 笹原和子: 子どもの理解と新たな対応の展開を求めて—ロールプレイングを含む事例検討—第12回ワークショップ報告. 学校健康相談研究, 11(1):109-118, 2014.
2. 亀崎路子(養護教諭の学校危機管理を学ぶ会): 【養護教諭なんでも相談室】養護教諭と他の職員との連携について. 心とからだの健康, 18(10):66-67, 2014年10月1日発行.
3. 亀崎路子: 第14回【教職員のメンタルヘルス】一人職の孤立—保健室から見えた姿(2). 教育家庭新聞, 2014年10月20日号.
4. 豊島素子, 手塚美恵, 奥田真里子, 大川静, 亀崎路子(養護教諭の学校危機管理を学ぶ会): 【養護教諭なんでも相談室】救急処置時の校内連絡体制について. 心とからだの健康, 19(3):66-67, 2015年3月1日発行.
5. 太田ひろみ, 朝野聡, 井手拓郎, 亀崎路子, 佐々木裕子, 楠田美奈, 太田真理子, 大屋千鶴: 大学生と当事者の連携による発達障がい児の余暇活動支援ネットワーク生成に関する研究—アクションリサーチを通じた実践研究—活動報告. 平成26年度杏林大学杏林CCRC研究所紀要, 185-187, 2015年3月20日発行.

精神保健看護学研究室

講演

1. 太田真理子, 佐藤美保, 浅沼奈美: 精神科外来を受診したうつ病患者の精神症状と性格傾向との関連—職場関連性に焦点をあてた看護介入の検討—. 第24回日本精神保健看護学会学術集会, 横浜, 2014年6月21-22日.

在宅看護学研究室

講演

1. 大金美和, 塩田ひとみ, 小山美紀, 柴山志穂美, 久地井寿哉, 岩野友里, 柿沼章子, 大平勝美, 池田和子, 湯永博之, 岡慎一: HIV感染血友病患者の健康関連QOLの実態調査. 第28

回日本エイズ学会学術集会, 大阪, 2014年12月3-5日.

2. Ogane M, Kuchii T, Kanaya F, Shibayama S, Kakinuma A, Ohira K, Tanaka J, Shimada M, Ikeda K Oka S: Barrier Assessment in Establishing Comprehensive Client-Level Coordination for Treatment and Medical Welfare of People Living with Hemophilia and HIV/AIDS in Japan. WFH 2014 World Congress, Australia, May 11th-15th, 2014.

特許等知的財産関係, 報告書

1. 大金美和, 鈴木ひとみ, 小山美紀, 谷口紅, 柴山志穂美, 今村知明, 秋山正子, 久地井寿哉, 岩野友里, 柿沼章子, 大平勝美, 中根秀之, 島田恵, 池田和子, 湯永博之, 岡慎一: コーディネーションと課題解決の提言. 平成26年度厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業. 血液凝固因子製剤によるHIV 感染被害者の長期療養体制の整備に関する患者参加型研究報告書.
2. 柴山志穂美, 中澤伸: 第6章要介護者に対する切れ目のないケアマネジメントを実現するためのケアマネジャーが使用するツールの開発ー医療機関に対する情報提供書およびセルフケアマネジメント計画様式の提案ー. 平成26年度老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等事業「ケアマネジメントの質の評価及びケアマネジメントへの高齢者の積極的な参画に関する調査研究事業報告書」東京. 株式会社日本能率協会総合研究所. 2015. 42-50.

成人老年看護学研究室

講 演

1. 角田ますみ: 介護系福祉大学における介護倫理に関する教育内容の分析-シラバスの記述内容分析を通して-. 第26回日本生命倫理学会年次大会, 浜松, 2014年10月25-26日.
2. 角田ますみ: 日本ではAdvance Care Planning: ACPとして何がなされているのか. 第26回日本生命倫理学会年次大会, 浜松, 2014年10月25-26日.
3. 角田ますみ: 看護の規範理論におけるAdvance Care Planning(ACP)の可能性-臨床倫理学の立場から-. 第34回日本看護科学学会学術集会, 名古屋, 2014年11月29-30日.
4. 兎澤恵子: 「私の案内書作り」講座3回連続講座. 三鷹ネットワーク大学における三鷹市民講座, 三鷹, 2014年12月2,9,16日.

論 文

1. 角田ますみ: 高齢者看護学におけるフィジカルアセスメント. 看護実践の科学39(4):54-58, 2014.

著 書

1. 角田ますみ: がん看護における倫理的問題. 教育・事例検討・研究に役立つ看護倫理実践事例46. 清水哲郎監修. 東京, 日総研, 2014. p.351-360.
2. 金沢善智, 角田ますみ監修: クエスチョンバンク・ケアマネ試験問題解説2015. 東京, メディックメディア, 2014.
3. 角田ますみ, 宮崎伸一監修: クエスチョンバンク・看護師国家試験問題解説2015. 東京, メディックメディア, 2014.

病態学研究室

講 演

1. 大浦紀彦, 佐藤卓士, 三上智子, 岩科祐己, 桐渕英人, 多久嶋亮彦, 波利井清紀: ハイドロサージェリーによるwound bed preparation. 第57回日本形成外科学会総会・学術集会, 長崎,

2014年4月9日.

2. 尾崎峰, 白石知大, 井原玲, 大浦紀彦, 多久嶋亮彦, 波利井清紀: リストカット痕に対する組織拡張器を用いた治療の検討. 第57回日本形成外科学会総会・学術集会, 長崎, 2014年4月9日.
3. 大浦紀彦: 第6のデブリードマン ハイドロサージェリーの可能性. 第57回日本形成外科学会総会・学術集会, 長崎, 2014年4月10日.
4. 大浦紀彦: 軟部組織・創傷からCLIを考える Real Angiosome. 第3回PADカンファレンス 重症下肢虚血の病態と治療, 東京, 2014年4月15日.
5. 大浦紀彦: CLIを救え! CLI治療を困難にしているものは何か?. 第6回日本下肢救済足病学会北海道地方会, 札幌, 2014年4月26日.
6. 大浦紀彦: 潰瘍治療最前線: 医療連携による治療効率最大化に向けて 重症下肢虚血R6に対する血管外科と形成外科のコラボレーション. 第42回日本血管外科学術集会, 青森, 2014年5月22日.
7. 大浦紀彦: 下肢慢性創傷の病態と治療 CLI DFU Leg ulcer. シルバー&ヘルスケア戦略特別セミナー慢性創傷管理の最前線, 東京, 2014年6月7日.
8. 大浦紀彦: 糖尿病性足病変の治療戦略 足病変の何に気をつけるのか Ikebukuro Heart Forum 〜こころと心臓〜. 東京, 2014年6月7日.
9. 大浦紀彦: III.創傷管理に必要な基本的知識【下肢創傷を形成外科的視点で管理する】. 日本下肢救済足病学会認定師セミナーVer. 2, 札幌, 2014年6月27日.
10. 大浦紀彦: EVTの臨床評価指標としての創傷評価と治療. 第6回日本下肢救済足病学会, 札幌, 2014年6月28日.
11. 大浦紀彦, 井原玲, 若林桂介, 多田朋子, 森重侑樹: 創傷管理と被覆材 創処置. 第6回日本下肢救済足病学会, 札幌, 2014年6月29日.
12. 大浦紀彦: CLIを救え! CLI治療を困難にしているものは何か?. 第71回兵庫県血管外科研究会, 神戸, 2014年7月5日.
13. 大浦紀彦: プロフェッショナル 育てる. 慢性創傷と戦うスーパー看護師. 第11回日本褥瘡学会関東甲信越地方会学術集会, 東京, 2014年7月11日.
14. 大浦紀彦: 重症下肢虚血 Rutherford6に対する治療 血管柄付き自家遊離組織移植術の有効性とリスクの検討. 第6回日本創傷外科学会総会・学術集会, 高松, 2014年7月24日.
15. 井原玲, 大浦紀彦, 清家志円, 若林圭介, 多田朋子, 森重侑樹, 多久嶋亮彦, 波利井清紀: 重傷下肢虚血に対する, 創縁の牽引と陰圧閉鎖療法併用についての検討. 第6回日本創傷外科学会総会・学術集会, 高松, 2014年7月24-25日.
16. 大浦紀彦: TIME理論に基づくNPWT. 2014 NPWT Expert Technical Forum. 東京, 2014年8月9日.
17. 大浦紀彦: 心臓・血管手術後創傷・感染に対する治療戦略ー心臓血管外科と形成外科のコラボレーションー. 東海心臓血管外科 VAC セミナー2014, 名古屋, 2014年8月23日.
18. 大浦紀彦: 「ずらして褥瘡を防ぐ」新しい褥瘡予防戦略. 第16回日本褥瘡学会学術総会, 名古屋, 2014年8月30日.
19. 大浦紀彦: 下肢切断の転帰を考える 糖尿病性足病変における大腿切断術, 下腿切断術の適応と工夫. 鹿児島フットケアセミナー2014, 鹿児島, 2014年9月14日.
20. 大浦紀彦: 糖尿病性足病変の患者に対するフットケアと靴装具の重要性. 第28回日本靴医学会学術集会, 福岡, 2014年9月28日.

21. 大浦紀彦:最新の褥瘡治療. がんセンター褥瘡対策委員会主催褥瘡講演会, 柏, 2014年10月17日.
22. 大浦紀彦:糖尿病性足病変に対する治療戦略 -血流の有無とチーム医療について-. 第26回北海道MMC研究会「糖尿病と血管障害」, 札幌, 2014年11月15日.
23. 大浦紀彦:軟部組織感染症に対する治療戦略. おいでまつし感染対策研究会 創傷処置と感染対策セミナー, 金沢, 2014年11月21日.
24. Ohura N: Japanese status of pressure ulcer 2014. The Asia Pacific Pressure Ulcer Prevention advisory board, Beijing, November 29th, 2014.
25. 井原玲, 大浦紀彦, 芝崎由佳, 景山大輔, 大島直也:重症下肢虚血に対し血行再建を繰り返したが, 下肢壊死の進行が止められず, 大切断に至った1例. 第3回多摩CLI研究会, 東京, 2014年11月27日.
26. 大浦紀彦:糖尿病性足病変の治療「フットケアの潮流 -チーム医療-」形成外科医の立場から. 第20回糖尿病フットケア研究会, 東京, 2014年12月13日.
27. 大浦紀彦:糖尿病性足病変の治療戦略 感染と虚血への対応. 第7回東海創傷治療フォーラム, 名古屋, 2015年1月30日.
28. 大浦紀彦:total nutritional therapy for wound care session 4. 第13回日本フットケア学会, 東京, 2015年2月14日.
29. 大浦紀彦:total nutritional therapy for wound care session 5. 第13回日本フットケア学会, 東京, 2015年2月14日.
30. 大浦紀彦:Education for young physician session-5「BTK, CLIへのアプローチ」創傷治療の基本. JET2015, 大阪, 2015年2月21日.
31. 大浦紀彦:透析患者の下肢治療戦略 -連携の光と闇-. 第3回CLINCH: Critical Limb Ischemia Network in aichi, 名古屋, 2015年3月21日.
32. 大浦紀彦:高齢化社会における創傷治療. 第33回日本臨床皮膚外科学会学術集会, 千葉, 2015年3月27日.

論文

1. 大浦紀彦, 清家志円, 井原玲, 森重侑樹, 多久嶋亮彦, 波利井清紀:糖尿病性足病変に対する創傷治療と靴装具の重要性. 靴の医学 28:186-191, 2014.
2. 大浦紀彦, 井原玲:褥瘡の診断と治療過程 エビデンスに基づく褥瘡ケアUPDATE. 臨床栄養 124(6):688-692, 2014.
3. 木村勇亮, 大浦紀彦, 匂坂正信, 多久嶋亮彦, 波利井清紀:アルベカシン硫酸塩の血中・組織浸出液濃度の比較および組織移行性の検討. 日本形成外科学会会誌 34(8):573-579, 2014.
4. 鈴木理央¹, 大浦紀彦(¹横須賀市立市民病院):低栄養と創傷治療. WOC Nursing 2(7):12-20, 2014.
5. 木下幹雄¹, 大浦紀彦(¹東京西徳洲会病院):治す 重症虚血肢に対する集学的治療. Heart View 18(6):648-654, 2014.
6. 大浦紀彦, 清家志円, 井原玲, 岩科裕己, 桐渕英人, 北幸紘, 多久嶋亮彦, 波利井清紀:踵部褥瘡の局所治療. WOC Nursing 2(5):22-28, 2014.
7. 木村勇亮, 大浦紀彦, 梶谷彩奈, 多田朋子, 菅浩隆, 多久嶋亮彦, 波利井清紀:重症下肢虚血に対する創傷治療. Circulation 4(2):67-72, 2014.
8. 木村勇亮, 大浦紀彦, 梶谷彩奈, 多田朋子, 菅浩隆, 多久嶋亮彦, 波利井清紀:足潰瘍, 壊疽の局所療法. 総合リハビリテーション42(4):305-312, 2014.
9. 大浦紀彦:手術室. WOC Nursing 2(4):12-16, 2014.
10. Kagaya Y, Ohura N, Suga H, Eto H, Takushima A, Harii K: 'Real

angiosome' assessment from peripheral tissue perfusion using tissue oxygen saturation foot-mapping in patients with critical limb ischemia. Eur J Vasc Endovasc Surg 47:433-441, 2014.

11. 安井佑¹, 木下幹雄, 栗田恵里奈, 佐藤大介, 大浦紀彦(¹東京西徳洲会病院 形成外科):全身性炎症反応症候群を呈した重症感染性足壊疽に対し二期的切断術が有用であった2例. 形成外科57(3):303-309, 2014.
12. 菅浩隆, 大浦紀彦:形成外科の基本手技 褥瘡. 手術68(3):321-324, 2014.
13. Kagaya Y, Ohura N, Suga H, Eto H, Takushima A, Harii K: 'Real angiosome' assessment from peripheral tissue perfusion using tissue oxygen saturation foot-mapping in patients with critical limb ischemia. Eur J Vasc Endovasc Surg. Apr. 47(4):433-41, 2014.
14. Kagaya Y, Ohura N, Kurita M, Takushima A, Harii K: Examination of tissue oxygen saturation (StO2) changes associated with vascular pedicle occlusion in a rat Island flap model using near-Infrared spectroscopy. Microsurgery. 2015.(Published online).
15. Okamoto S, Iida O, Nakamura M, Yamauchi Y, Fukunaga M, Yokoi Y, Soga Y, Zen K, Hirano K, Suematsu N, Suzuki K, Shintani Y, Miyashita Y, Urasawa K, Kitano I, Yamaoka T, Ohura N, Hamasaki T, Uematsu M, Nanto S: Postprocedural Skin Perfusion Pressure Correlates With Clinical Outcomes 1 Year After Endovascular Therapy for Patients With Critical Limb Ischemia on behalf of the OLIVE Investigators. Angiology. 2015. (Published online).

著書

1. 水原章浩, 大浦紀彦:症例でみるよくわかる創傷の陰圧閉鎖療法. 東京, 医学と看護社, 2015.
2. 大浦紀彦:皮膚・軟部組織感染症1)皮膚感染症2)蜂窩織炎, 壊死性軟部組織感染症. 形成外科治療手技全書 III創傷外科. 東京, 克誠堂, 2015.

その他

1. 大浦紀彦:研究会主催 第10回東京CLI検討会. 新宿, 2014年4月17日.
2. 大浦紀彦:研究会主催 第11回東京CLI検討会. 新宿, 2014年9月11日.
3. 大浦紀彦:研究会主催 第2回Tama Limb Salvage and wound care Nursing Network. 吉祥寺, 2014年5月10日.
4. 大浦紀彦:研究会主催 第2回「透析患者の足を救う」多摩地区CLIカンファレンス. 杏林大学大学院講堂, 2014年8月2日.
5. 大浦紀彦:研究会主催 第1回TAMA Outpatients and Home-care Wound care meeting. 吉祥寺, 2015年2月12日.

● 臨床工学科 ●

生命支援工学研究室

講演

1. Onuki M, Fukunaga K, Hoshihara T, Saito I, Isoyama T, Abe Y, Fukui Y: Reduction of radial shaft deflection by symmetric arrangement of flow channels in cascade blood pump. 22nd Congress of the International Society for Rotary Blood Pumps, USA, September 25th-27th, 2014.
2. Hoshihara T, Fukunaga K, Onuki M, Nakajima A, Shimazu H,

Funakubo A, Fukui Y: Design and experimental testing of diffuserless catheter pump for right ventricular support. 22nd Congress of the International Society for Rotary Blood Pumps, USA, September 25th-27th, 2014.

3. 大貫雅也, 福長一義, 星原卓弥, 斎藤逸郎, 磯山隆, 阿部裕輔, 福井康裕: カスケードポンプの流路の軸対称配置がもたらす偏心力の軽減. 日本生体医工学会関東支部若手研究者発表会2014, 東京, 2014年11月22日.
4. 星原卓弥, 福長一義, 大貫雅也, 中島章夫, 嶋津秀昭, 福井康裕: 右心補助用ディフューザレスカテーテルポンプの開発. 日本生体医工学会関東支部若手研究者発表会2014, 東京, 2014年11月22日.

論文

1. Sawa Y¹, Tatsumi E², Tsukiya T², Matsuda K³, Fukunaga K, Kishida A⁴, Masuzawa T⁵, Matsumiya G⁶, Myoui A⁷, Nishimura M⁸, Nishimura T⁹, Nishinaka T¹⁰, Okamoto E¹¹, Tokunaga S¹², Tomo T¹³, Yagi Y¹⁴, Yamaoka T² (¹Osaka University Graduate School, ²National Cerebral and Cardiovascular Center Research Institute, ³University of Yamanashi Hospital, ⁴Tokyo Medical and Dental University, ⁵Ibaraki University, ⁶Chiba University Graduate School, ⁷Osaka University Hospital, ⁸Tottori University, ⁹The University of Tokyo, ¹⁰Tokyo Woman's Medical University, ¹¹Tokai University, ¹²Kanagawa Cardiovascular and Respiratory Center, ¹³Oita University, ¹⁴Kyoto Prefectural University of Medicine): Journal of Artificial Organs 2013: the year in review. J Artif Organs 17: 1-8, 2014.
2. 福長一義: コメディカルと人工心臓要素技術. 人工臓器43: 56-60, 2014.

著書

1. 福長一義: 臨床工学講座 医用電気工学1 第2版. 戸畑裕志, 中島章夫, 福長一義編. 東京, 医歯薬出版, 2015.
2. 福長一義: 臨床工学講座 医用電気工学2 第2版. 福長一義, 中島章夫, 堀純也編. 東京, 医歯薬出版, 2015.
3. 福長一義: 臨床工学講座 医用電子工学 第2版. 中島章夫, 福長一義, 佐藤幸希編. 東京, 医歯薬出版, 2015.
4. 福長一義: 臨床工学技士ポケット・レビュー帳. 福長一義編. 東京, メジカルビュー社, 2015.

先端臨床工学研究室

講演

1. 中島章夫, 鈴木哲治, 水島岩徳, 萬知子: 手術環境下での電気メスからの放射電磁波電界強度の定量測定～可視化システムの構築～. 第89回日本医療機器学会大会, 新潟, 2014年6月13日.
2. 中島章夫: 安全の基礎とトラブル事例～医療機器を安全に扱うための電気の基礎知識～. 第36回ME技術講習会, 札幌, 2014年6月29日.
3. 中島章夫: 安全の基礎とトラブル事例～医療機器を安全に扱うための電気の基礎知識～. 第36回ME技術講習会, 東京, 2014年7月12日.
4. 中島章夫: 安全の基礎とトラブル事例～医療機器を安全に扱うための電気の基礎知識～. 第36回ME技術講習会, 東京, 2014年7月27日.
5. 中島章夫: 治療機器の原理・取扱い上の注意と保守点検. 第7回MDIC認定セミナー, 東京, 2014年10月25日.

6. 中島章夫: コンピュータ・情報セキュリティの基礎. 第7回MDIC認定セミナー, 東京, 2014年10月26日.
7. 中島章夫: 医用レーザーの基礎. 日本レーザー医学会 安全教育セミナー, 東京, 2014年6月29日.
8. 中島章夫, 佐藤俊一: 医用レーザー機器の安全. 第30回レーザー安全スクール, 東京, 2014年11月19日.
9. 中島章夫, 萬知子: 手術室環境下における電気メス放射電磁波の影響に関する検討2. 第43回日本医療福祉設備学会, 東京, 2014年11月13日.
10. 中島章夫, 水島岩徳, 萬知子: 手術室内電気メス放射電磁波の解析システムの開発～電界強度の可視化システムの構築～. 第43回杏林医学会総会, 三鷹, 2014年11月17日.

著書

1. 中島章夫: 臨床工学講座 医用電気工学1. 中島章夫編・著. 東京, 医歯薬出版(株), 2014. p.1-66, p.139-152.
2. 中島章夫: 臨床工学講座 医用電子工学. 中島章夫編・著. 東京, 医歯薬出版(株), 2014.
3. 中島章夫: VI. 関係法規. 臨床工学技士標準テキスト 第2版増補. 東京, 医歯薬出版(株), 2014. p.649-695.
4. 中島章夫: 第4章レーザー手術・超音波手術装置. 第1種ME技術実力検定試験テキスト. (一社)日本生体医工学会ME技術教育委員会・監修, 東京, 第1種ME技術実力検定試験テキスト編集委員会, 2014. p.649-695.
5. 中島章夫: 臨床工学技士 ポケット・レビュー帳. 鈴木哲治著. 東京, メジカルビュー(株), 2015. p.228-238.
6. 中島章夫: MEの基礎, レーザ治療装置. MEの基礎知識と安全管理改訂第6版. (一社)日本生体医工学会ME技術教育委員会・監修. 東京, 南江堂(株), 2014. p.16-19, p.422-435.
7. 中島章夫: 臨床工学講座 医用治療機器学. 篠原一彦著. 東京, 医歯薬出版(株), 2014. p.89-118, p.157-163.

報告書

1. 中島章夫, 須田健二, 中村淳史, 中野壮階, 櫛引俊宏: 医療機器保守管理のガイドライン策定の普及に向けた諸課題の調査研究 1. 輸液ポンプの保守点検に関する教育Webサイトの解説 4. 輸液ポンプの保守点検ガイドライン策定に向けた調査研究, 厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業) 平成26年度総括・分担研究報告書.

生理・生体・情報工学研究室

講演

1. 嶋津秀昭: 痛みの基礎をふまえた定量評価法. R&D支援センター セミナー, 東京, 2014年5月23日.
2. 木暮英輝, 渡辺篤志, 瀬野晋一郎, 加藤幸子, 小林博子, 嶋津秀昭: Development of a monitoring system of the intrapulmonary regional ventilation dynamics using multi channel thorax transfer admittance measurement. 第53回日本生体医工学会, 仙台, 2014年6月24日.
3. 瀬野晋一郎, 木暮英輝, 渡辺篤志, 加藤幸子, 小林博子, 嶋津秀昭: Development of a perception threshold assessment system using non-contact air pressure stimulation. 第53回日本生体医工学会, 仙台, 2014年6月26日.
4. 渡辺篤志, 瀬野晋一郎, 木暮英輝, 関健介, 坂本岳士, 岡田洋二, 嶋津秀昭: フリーラジカルに対する唐辛子辛味成分カプサイシンの捕捉活性に関する速度論的研究. 第12回日本機能性食品医工学会, 京都, 2014年12月13日.
5. 嶋津秀昭: 生体循環モデルを用いた血行動態測定. iMEP教

育講演, 草津, 2015年2月8日.

6. 嶋津秀昭: 痛みの基礎をふまえた定量評価法. R&D支援センター セミナー, 東京, 2015年3月16日.

論文

1. Watanabe A, Seno S, Kogure E, Seki K¹, Sakamoto T², Okada Y³, Shimazu H¹(Dept. of Radiation Safety Management, Faculty of Health Sciences, Kyorin Univ., ²Dept. of Medical Radiological Technology, Faculty of Health Sciences, Kyorin Univ., ³Dept. of Analytical Chemistry, Faculty of Health Sciences, Kyorin Univ.): Kinetic Study of the Radical Scavenging of Capsaicin in Homogeneous Solutions and Aqueous Triton X-100 Micellar Suspensions. Journal of Food Science. 80(3):C577-C583, 2015.

著書

1. 嶋津秀昭: 第5節 痛みの定量評価法と痛み評価. 官能評価活用ノウハウ・感覚の定量化・数値化手法. 技術情報協会編. 東京, 技術情報協会, 2014.
2. 瀬野晋一郎: 第6章 生体物性材料工学. 臨床工学技士 ポケット・レビュー帳. 福長一義編. 東京, メジカルビュー社, 2015. p.85-97.

血液浄化療法学研究室

講演

1. 鈴木祥史, 須田健二, 松山幸枝, 寺田知新, 恵良聖一, 副島昭典: 透析液への還元薬剤(N-acetyl cysteine: NAC)の0.03%添加により血漿アルブミンの還元率は著しく改善する. 第59回日本透析医学会, 神戸, 2014年6月13日.
2. 須田健二, 五十嵐友, 鈴木祥史, 副島昭典: 電気的インピーダンスを用いた抜針検知システムに関する基礎的研究. 第59回日本透析医学会, 神戸, 2014年6月15日.
3. 五十嵐友, 須田健二, 鈴木祥史, 副島昭典: 血液透析における実血流量測定法に関する実験的研究. 第59回日本透析医学会, 神戸, 2014年6月13日.
4. 山内大輔, 酒井恭平, 須田健二, 副島昭典: 血液透析における抜針検知システムの開発(第二報). 第67回三多摩腎疾患治療医学会, 三鷹, 2014年6月22日.
5. 鈴木祥史, 須田健二, 二宮亜具里, 寺田知新, 高橋哲平, 恵良聖一, 副島昭典: 血漿アルブミンの還元化率を改善するN-acetyl cysteine(NAC)の保存・投与法およびNACの還元力に影響を及ぼす因子の検討. 第26回腎とフリーラジカル研究会, 名古屋, 2014年9月20日.
6. 山内大輔, 酒井恭平, 須田健二, 副島昭典: 血液透析における抜針検知システムの開発(第三報). 第68回三多摩腎疾患治療医学会, 三鷹, 2014年11月9日.
7. 副島昭典: 血液透析の原理と技術の進歩. 第6回杏林大学大学院保健学研究科講演会, 三鷹, 2015年1月22日.

論文

1. 副島昭典: 医師が期待する大学院教育—血液浄化分野—. Clinical Engineering 25: 638-640, 2014.
2. Suzuki Y, Suda K, Soejima A: Close relationship between redox state of human serum albumin and serum cysteine levels in non-diabetic CKD patients with various degrees of renal function. Clin Nephrol 82: 320-325, 2014.

著書

1. 鈴木祥史, 須田健二, 松山幸枝, 寺田知新, 恵良聖一, 副島昭典: 赤血球寿命に影響を与える血漿の還元能とその改善に

関する実験的検討. 腎とエリスロポエチン研究会proceedings. 東京, ライフサイエンス出版, 2014.p.6-9.

2. 副島昭典: 第108回医師国家試験問題解説書. 東京, 医学評論社, 2014.
3. 副島昭典: 臨床推論がわかる. 安田幸雄編, 東京, 医学評論社, 2014.
4. 副島昭典: こあかり2015雪の章 リコ 最新問題集. 東京, 医学評論社, 2014.
5. 鈴木祥史, 須田健二, 松山幸枝, 寺田知新, 恵良聖一, 副島昭典: 血漿アルブミンの還元化率を改善する還元薬剤の透析液への添加とその有効濃度. 腎とフリーラジカル第12集. 富野康日己, 他編. 東京, 東京医学社, 2015.p.66-70.
6. 副島昭典: 臨床工学技士ポケットレビュー帳. 福長一義編, 東京, メジカルビュー社, 2015.
7. 副島昭典: 基礎から始める腎臓内科学. 東京, 東京医学社, 2015.

報告書

1. 石田陽一, 副島昭典, 川端雅彦, 供田文宏, 金木潤: カドミウムによる近位尿細管機能異常に関する研究. 平成26年度イタイイタイ病および慢性カドミウム中毒に関する総合的研究. 平成26年度環境省委託業務報告書, p 169-184, 2015.

循環器病態生理学研究室

講演

1. 吉野秀朗, 佐藤徹, 四倉正之, 坂田好美, 副島京子: 日常臨床における循環器Q & A. 第29回府中市医師会循環器勉強会, 府中, 2014年5月19日.
2. 四倉正之: 心電図の読み方. 三鷹市医師会学術講演会, 三鷹, 2014年9月25日.
3. 吉野秀朗, 佐藤徹, 四倉正之, 坂田好美: 日常臨床における循環器Q & A. 第30回府中市医師会循環器勉強会, 府中, 2014年10月20日.
4. 四倉正之: 心電図の読み方. 三鷹市医師会学術講演会, 三鷹, 2014年11月28日.
5. 四倉正之: 心電図の読み方. 三鷹市医師会学術講演会, 三鷹, 2015年1月23日.
6. 四倉正之: 心電図の読み方. 三鷹市医師会学術講演会, 三鷹, 2015年2月27日.

論文

1. 中村淳史: 電解気泡法による人工心肺回路内における微小気泡の基本的変動. 体外循環技術 41:441-450, 2014.
2. 中村淳史: 人工心肺中におけるリアルタイム血液粘度測定法の開発と有用性. 体外循環技術 41:123-130, 2014.

著書

1. 四倉正之: 内科学概論, 外科学概論, 呼吸器系, 循環器系, 神経・筋肉系. 臨床工学技士ポケット・レビュー帳. 福長一義編. 東京, メジカルビュー社, 2015. p.290-306, p.310-312.

報告書

1. 中村淳史, 中島章夫, 須田健二, 新秀直: 人工心肺装置の保守点検ガイドライン策定に向けた調査研究結果, 医療機器保守点検のガイドライン策定の普及に向けた諸課題の調査研究(H26-医療-指定-032), 厚生労働科学研究補助金(地域医療基盤開発推進事業) 平成26年度 総括・分担研究報告書, 70-93. 2014.

生理機能検査学研究室

講 演

1. 森秀明, 西川かおり, 本田普久, 塚田幾太郎, 尾股佑, 關里和, 峯佳毅, 小樽二世, 高橋信一, 岸野智則, 賛田真由美: 消化器領域における3次元超音波検査「Fly Thru」の検討. 日本超音波医学会第87回学術集会, 東京, 2014年5月9-11日.
2. 三輪隆, 佐野晃士, 佐々木順子, 原島敬一郎, 秋本孝之, 久米雅彦, 志熊淳平, 伊藤祿郎, 添田仁, 金澤真雄, 林潤一, 小田原雅人: インスリンからエキセナチド1日2回注への切り替え 24ヵ月経過例の検討. 第57回日本糖尿病学会年次学術集会, 大阪, 2014年5月22-24日.
3. 神谷具巳, 渡辺圭一, 原島敬一郎, 林潤一, 石田信彦: 継続的中強度運動が血管Arterial Stiffnessに及ぼす影響. 第39回日本運動療法学会, 千葉, 2014年6月21日.
4. 浦田毅, 岸野智則, 大西宏明, 山本明日香, 島森直子, 飯田綾子, 渡辺敬子, 森秀明, 楊國昌, 渡邊卓: 腎臓に浸潤したパーキットリンパ腫の一例: 転移性腎腫瘍との鑑別点について. 日本超音波医学会 関東甲信越地方会 第26回学術集会, 東京, 2014年10月18-19日.
5. 島森直子, 岸野智則, 西川かおり, 板谷直, 浦田毅, 下山田博明, 森秀明, 奴田原紀久雄, 大西宏明, 渡邊卓: 乳頭状腎細胞癌の一例. 日本超音波医学会 関東甲信越地方会 第26回学術集会, 東京, 2014年10月18-19日.
6. 宮脇晴子, 岸野智則, 森秀明, 福岡利仁, 下山田博明, 浦田毅, 島森直子, 飯田綾子, 大西宏明, 渡邊卓: 腎辺縁にhypoechoic cortical rimを認めた一例. 日本超音波医学会 関東甲信越地方会 第26回学術集会, 東京, 2014年10月18-19日.
7. 奥山美樹, 原島敬一郎, 鬼頭桃子, 津留衿奈, 三谷博子, 司茂幸英, 嶋津秀昭, 岸野智則: 新たなソフトウェアで解析したarterial stiffness index(ASI)に関する検討. 第1回日本血管血流学会学術集会, 東京, 2014年11月15日.
8. 佐藤秀昭, 原島敬一郎: 上下肢のASIと動脈硬化の危険因子と関連について～新しいASIの有用性の検討～. 第1回日本血管血流学会学術集会, 東京, 2014年11月15日.
9. 大塚弘毅, 大西宏明, 小倉航, 松島早月, 岸野智則, 藤原正親, 古瀬純司, 渡邊卓: 転移性直腸癌症例において認められた新規RET遺伝子変異. 第61回日本臨床検査医学会学術集会, 福岡, 2014年11月22-25日.
10. 三谷博子, 石山陽事, 原島敬一郎, 岸野智則: 意識水準低下時の眠気改善を目的とした冷気刺激の可能性について: 神経生理学的パラメータを用いた検討. 第61回日本臨床検査医学会学術集会, 福岡, 2014年11月22-25日.
11. 大西宏明, 滝田順, 松島早月, 大塚弘毅, 岸野智則, 細井健一郎, 大倉康夫, 小川誠司, 渡邊卓: 遺伝性骨髄増殖性腫瘍の家族例における網羅的遺伝子解析. 第61回日本臨床検査医学会学術集会, 福岡, 2014年11月22-25日.
12. 原島敬一郎, 三谷博子, 司茂幸英, 岸野智則: Arterial pressure volume index の複数回測定下における安定性の検討: 推奨測定法の確立に向けて. 第61回日本臨床検査医学会学術集会, 福岡, 2014年11月22-25日.
13. 島森直子, 岸野智則, 大西宏明, 大塚弘毅, 一瀬由香里, 大倉康男, 平野浩一, 高城靖志, 渡邊卓: 耳下腺深葉脂肪腫の一例 一超音波画像所見の考察. 第61回日本臨床検査医学会学術集会, 福岡, 2014年11月22-25日.
14. 須藤恵美, 岸野智則, 大西宏明, 大塚弘毅, 大坂真以子, 藤

原正親, 板谷直, 西川かおり, 森秀明, 奴田原紀久雄, 高城靖志, 渡邊卓: 褐色細胞腫との鑑別が困難であった副腎癌の一例 一超音波画像所見の考察. 第61回日本臨床検査医学会学術集会, 福岡, 2014年11月22-25日.

15. 大坂真以子, 岸野智則, 大西宏明, 大塚弘毅, 島森直子, 寺戸雄一, 西川かおり, 森秀明, 奴田原紀久雄, 高城靖志, 渡邊卓: 転移性腎腫瘍の3例 一超音波画像所見の考察. 第61回日本臨床検査医学会学術集会, 福岡, 2014年11月22-25日.
16. 佐藤秀昭, 原島敬一郎, 中村守秀, 奥田信之, 岩堀公基: 男性の内臓脂肪面積と健康障害の検討. 日本総合健診医学会第43回大会, 富山, 2015年2月20-21日.

論 文

1. Kishino T^{1,2}, Mori T³, Kawai S², Mori H⁴, Nishikawa K⁴, Hirano K⁵, Matsushima S¹, Ohtsuka K^{1,2}, Ohnishi H^{1,2}, Watanabe T^{1,2} (1Department of Laboratory Medicine Kyorin University School of Medicine, 2Department of Clinical Laboratory Kyorin University Hospital, 3Department of Surgery Kyorin University School of Medicine, 4The Third Department of Internal Medicine Kyorin University School of Medicine, 5Department of Pathology Kyorin University School of Medicine): Carcinosarcoma, an atypical subset of gallbladder malignancies. J Med Ultrason 41: 487-490, 2014.
2. Matsushima S¹, Ohtsuka K¹, Ohnishi H¹, Fujiwara M², Nakamura H³, Morii T⁴, Kishino T¹, Goto H⁵, Watanabe T¹ (1Department of Laboratory Medicine Kyorin University School of Medicine, 2Department of Pathology Kyorin University School of Medicine, 3Chemical Resources Laboratory Tokyo Institute of Technology, 4Department of Orthopedic Surgery Kyorin University School of Medicine, 5Department of Respiratory Medicine Kyorin University School of Medicine): V843I, a lung cancer predisposing EGFR mutation, is responsible for resistance to EGFR tyrosine kinase inhibitors. J Thorac Oncol 9: 1377-1384, 2014.
3. Watanabe K¹, Kishino T^{1,2}, Sano J¹, Ariga T¹, Okuyama S³, Mori H³, Matsushima S², Ohtsuka K^{1,2}, Ohnishi H^{1,2}, Watanabe T^{1,2} (1Department of Clinical Laboratory Kyorin University Hospital, 2Department of Laboratory Medicine Kyorin University School of Medicine, 3The Third Department of Internal Medicine Kyorin University School of Medicine): Relationship between epicardial adipose tissue thickness and early impairment of left ventricular systolic function in patients with preserved ejection fraction. Heart Vessels (in press)

著 書

1. 岸野智則: 第14章 臨床医学総論 7. 感染症/9. 消化器系/11. 麻酔科学/12. 集中治療学/13. 手術医学/15. 臨床免疫学. 臨床工学技士 ポケットレビュー帳. 福長一義編. 東京, メジカルビュー社, 2015. p.313-316/325-329/333-342/347-351.

● 理学療法学科 ●

基礎理学療法学研究室

講 演

講演

1. 石川綾子, 一場友実, 中村花穂, 栗原恵蘭, 宮田翔平, 芝原美由紀, 石井博之, 八並光信:高齢者疑似体験装具を用いた傾斜杖歩行時の呼吸循環応答の検討. 第49回日本理学療法学会大会, 横浜, 2014年5月30日-6月1日.
2. 芝原美由紀, 一場友実:障害者スポーツ「ボッチャ」による高齢者へ健康延伸への取り組み. 第3回南多摩福祉機器展, 八王子, 2014年11月15-16日.
3. 石井博之:健康寿命延伸を目的とした, スポーツ機会の提供プログラムの紹介. 平成26年度 福祉用具講習会 南多摩福祉機器展, 八王子, 2014年11月15-16日.
4. Ichiba T, Miyagawa T, Tsuda T :The combined effects of manual chest squeezing coordinated expiration with relaxation postures in patients with chronic obstructive pulmonary disease(COPD). 60th International Respiratory congress, America, December 9th-12th,2014.
5. Miyagawa T, Ichiba T: Effects of cough with mechanical assisted cough (MAC) and high frequency chest wall oscillation (HFCWO) for airway clearance. 60th International Respiratory congress, America, December 9th-12th,2014.

講習会講師

1. 石井博之:ロコモティブシンドローム～健康で活力ある人生を送るために～. はむら健康の日 健康講座, 羽村, 2014年5月18日.
2. 石井博之:骨太教室 運動編 骨の健康づくり～体を動かして丈夫な骨を保つ～. 羽村市健康講座 骨粗鬆症セミナー, 羽村, 2014年7月30日.
3. 石井博之:理学療法士協会東京都士会新人教育プログラム. 国際社会と理学療法, 東京, 2014年9月6日.
4. 石井博之:公開講座 健康とスポーツ. 八王子, 2014年10月25日.
5. 石井博之:国際協力へ自分を動かした動機とその後にどのように結びつけたか. JOCV(青年海外協力隊)リハビリテーションネットワークセミナー, 東京, 2015年3月29日.

論文

1. 石井博之, 進邦徹夫, 富田泰彦, 古本泰之:杏林CCRC 構想における教育活動「地域と大学の在り方」. 杏林大学杏林CCRC研究所紀要 1:156-166,2014.
2. 太田ひろみ, 石井博之, 八木橋宏勇:杏林CCRC 構想における地域活動「大学の地域活動の在り方」. 杏林大学杏林CCRC研究所紀要 1:143-155,2014.

運動障害系理学療法学研究室

講演

学会発表

1. 村上幸士, 齋藤昭彦, 吉川幸次郎:腰痛の有無において比較した腹横筋の収縮に伴う内腹斜筋の変化. 日本超音波医学会第87回学術集会, 横浜, 2014年5月9-11日.
2. 村上幸士:超音波診断装置Real-time Tissue Elastographyを用いた腰部筋群の筋硬度測定における信頼性. 第69回日本体力医学会大会, 長崎, 2014年9月19-21日.

講演・一般向け公開講座

1. 榎本雪絵:高齢者が効果的に運動を行うために～筋肉が動くメカニズム. 八王子市地域包括支援センター子安, 八王子, 2014年4月12日.
2. 榎本雪絵:高齢者が効果的に運動を行うために～筋の加齢に

ついて. 八王子市地域包括支援センター子安, 八王子, 2014年4月26日.

3. 榎本雪絵:高齢者が効果的に運動を行うために～高齢者の筋力トレーニングについて. 八王子市地域包括支援センター子安, 八王子, 2014年5月10日.
4. 榎本雪絵:高齢者が効果的に運動を行うために～高齢者のバランスについて. 八王子市地域包括支援センター子安, 八王子, 2014年5月24日.
5. 榎本雪絵:高齢者が健やかな生活を持てるために. 八王子市地域包括支援センター子安, 八王子, 2014年6月7日.
6. 榎本雪絵:高齢者が効果的に運動を行うために～バランストレーニングについて. 八王子市地域包括支援センター子安, 八王子, 2014年6月14日.
7. 榎本雪絵:高齢者における運動の継続の重要性について. 八王子市地域包括支援センター子安, 八王子, 2014年6月28日.
8. 榎本雪絵:高齢者のための運動のポイント～高齢者における運動の重要性とその効果. 八王子学園都市大学いちよう塾, 八王子, 2014年7月1日.
9. 榎本雪絵:高齢者のための運動のポイント～高齢者における運動の注意点. 八王子学園都市大学いちよう塾, 八王子, 2014年7月8日.
10. 榎本雪絵:高齢者のための運動のポイント. 八王子学園都市大学いちよう塾, 八王子, 2014年7月15日.
11. 榎本雪絵:高齢者における運動の効果と注意点. 八王子市地域包括支援センター子安, 八王子, 2014年9月20日.
12. 榎本雪絵:高齢者における運動の注意点～脈拍と血圧管理. 八王子市地域包括支援センター子安, 八王子, 2014年10月11日.
13. 榎本雪絵:生活期のリハビリテーション～自立支援と地域連携. 第5回西多摩南多摩ブロック学術集会, 青梅, 2014年11月2日.
14. 榎本雪絵, 小平めぐみ:従来型施設からユニット型施設変換における比較～利用者のADLの視点から. リハビリテーション・ケア合同研究大会長崎2014, 長崎, 2014年11月6-8日.
15. 榎本雪絵, 新井尚子, 中村真理, 萩原直美:健康教室の住民による自主運営化に向けた実践. リハビリテーション・ケア合同研究大会長崎2014, 長崎, 2014年11月6-8日.
16. 小平めぐみ, 榎本雪絵:従来型からユニット型施設変換における比較～職員の意識・利用者との関わりから～. リハビリテーション・ケア合同研究大会長崎2014, 長崎, 2014年11月6-8日.
17. 榎本雪絵, 新井尚子, 中村真理, 萩原直美:健康教室への参加が地域在住高齢者の身体機能に及ぼす影響. 日本在宅ケア学会学術大会2014, 福岡, 2014年11月29-30日.
18. 榎本雪絵:高齢者の呼吸について. 八王子市地域包括支援センター子安, 八王子, 2014年11月18日.
19. 榎本雪絵:高齢者におけるストレッチについて. 八王子市地域包括支援センター子安, 八王子, 2014年12月12日.
20. 榎本雪絵:体力測定結果と生活改善について. 八王子市地域包括支援センター子安, 八王子, 2015年1月10日.
21. 榎本雪絵:高齢者における運動プログラムについて. 三鷹いきいき健康サロン, 三鷹, 2015年1月13日.
22. 榎本雪絵:高齢者の筋力トレーニングについて. 八王子市地域包括支援センター子安, 八王子, 2015年1月24日.
23. 榎本雪絵:自宅でもできる運動プログラム. 三鷹いきいき健康サロン, 三鷹, 2015年2月15日.

24. 榎本雪絵:高齢者のバランスについて. 八王子市地域包括支援センター子安, 八王子, 2015年2月28日.
25. 榎本雪絵:運動効果と生活状況について. 三鷹いきいき健康サロン, 三鷹, 2015年3月28日.

論文

1. 榎本雪絵:健やかな生活を続けるための運動のポイント. 杏林医学会雑誌45(2別):69-70,2014.
2. 村上幸士:超音波診断装置Real-time Tissue Elastographyを用いた腰部筋群の筋硬度測定における信頼性. 体力科学 63(6):718, 2014.
3. 齋藤昭彦:モーターコントロールアプローチと腰痛. 医道の日 73(8):40-43,2014.

著書

1. 齋藤昭彦:クリニカルリーズニング. 系統別・治療手技の展開改訂第3版. 竹井仁・他編. 東京, 協同医書, 2014.p71-76.
2. 齋藤昭彦:神経系のメカニズムと主な神経の触診. 東京, ジャパンライム, 2014.
3. 齋藤昭彦:ニューロダイナミックテスト1(胸腰部〜下肢). 東京, ジャパンライム, 2014.
4. 齋藤昭彦:ニューロダイナミックテスト2(上肢). 東京, ジャパンライム, 2014.
5. 齋藤昭彦:神経系機能障害の治療. 東京, ジャパンライム, 2014.

小児発達障害系理学療法学研究室

講演

1. 中野尚子, 木原秀樹, 多賀厳太郎, 渡辺はま, 中野純司, 小西行郎:超・極低出生体重児におけるGeneral Movements (GMs)評価と発達予後の関連性. 第49回日本理学療法学会大会, 横浜, 2014年5月30日-6月1日.
2. 芝原美由紀:小学生の障がい者(児)スポーツ理解とアダプテッドスポーツの可能性. 車いすバスケット体験事業から. 第61回日本小児保健学会大会, 福島, 2014年6月20日.
3. 儀間裕貴, 木原秀樹, 中野尚子, 渡辺はま, 中村友彦, 多賀厳太郎:広汎性発達障がい児の出生早期における運動・行動特性. 日本赤ちゃん学会第14回学術集会, 川崎, 2014年6月21-22日.
4. 中野尚子:自発運動評価(GMs)での発達予後予測 Prediction of neurodevelopmental outcome in infants by means of general movements assessment. 第50回日本周産期・新生児医学会学術集会, 浦安, 2014年7月13-15日.
5. 中野尚子, 荒井洋, 北原エリ子:ボバースアプローチの有効性の検証. 第4回日本ボバース研究会学術大会, 大阪, 2014年7月26-27日.
6. 中野尚子:脳性麻痺児の評価と治療. 脳性麻痺8週間講習会, 東京, 2014年7月31日.
7. 中野尚子:脳性麻痺児の治療. 脳性麻痺8週間講習会, 東京, 2014年8月14日.
8. 中野尚子:新生児の評価general movements (GMs). 理学療法士講習会 NICUにおける理学療法, 安曇野, 2014年11月1-2日.
9. 芝原美由紀, 一場友実:地(知)の拠点整備事業. 地域志向教育研究. 障害者スポーツ「ボッチャ」による高齢者へ健康延伸への取り組み. 第3回南多摩福祉機器展, 八王子, 2014年11月15日.
10. 芝原美由紀:学齢児のアダプテッドスポーツへの取り組み. 車

いすバスケット種目, 第35回医療体育研究会・第18回日本アダプテッド体育・スポーツ学会第16回合同大会, 西宮, 2014年12月6日.

11. 中野尚子:general movements(GMs)の正常発達軌跡. GMs研究会, 東京, 2014年12月27日.
12. 中野尚子:小児領域の理学療法について. 国立障害者リハビリテーションセンター, 所沢, 2015年1月20日.
13. 中野尚子:成人脳性麻痺の評価と治療. さいたまみずき園, さいたま, 2015年3月10日.

論文

1. Shibahara M, Makita M, Makita H: The current status of sports participation by children with physical disabilities and the expectations and anxieties mothers regarding sports participation. BIOPHILIA 2014(1):25-31,2014.
2. Kanemaru N¹, Watanabe H¹, Kihara H², Nakano H, Nakamura T², Nakano J³, Taga G¹, Konishi Y⁴ (¹The University of Tokyo, ²Nagano Children's Hospital, ³The Institute of Statistical Mathematics, ⁴Doshisha University): Jerky spontaneous movements at term age in preterm infants who later developed cerebral palsy. Early Human Development 90:387-392, 2014.

著書

1. 中野尚子:抱っこと移動. 脳性まひ児の家庭療育. 原著第4版. Eva Bower著, 上杉雅之監訳. 東京, 医歯薬出版株式会社, 2014.p.175-191.

神経障害系理学療法学研究室

講演

学会発表

1. 橋立博幸, 澤田圭祐, 浅野克俊, 嶋崎聡美, 鈴木友紀, 千葉美幸, 笹本憲男:発症4か月後にADL全介助レベルで自宅退院した脳梗塞両片麻痺者に対する30か月間の訪問リハビリテーションが日常生活動作および介護負担に及ぼす効果の検討. 第49回日本理学療法学会大会, 横浜, 2014年5月30日-6月1日.
2. 橋立博幸, 大沼剛, 澤田圭祐, 原田和宏:屋外活動が困難な地域在住高齢者における屋内生活空間での日常生活動作と離床時間の縦断的変化の関連. 第49回日本理学療法学会大会, 横浜, 2014年5月30日-6月1日.
3. 橋立博幸, 大沼剛, 澤田圭祐, 阿部勉:屋外活動が困難な地域在住高齢者における立ち上がり着座動作能力と屋内生活空間の日常生活動作との関連. 第49回日本理学療法学会大会, 横浜, 2014年5月30日-6月1日.
4. 妹尾浩一, 橋立博幸:障害者支援施設に入所した維持期脳卒中片麻痺者の歩行機能に対する長期的なリハビリテーションの介入効果. 第49回日本理学療法学会大会, 横浜, 2014年5月30日-6月1日.
5. 大沼剛, 橋立博幸, 阿部勉:訪問リハビリテーション利用者における屋内生活空間の身体活動低下に関わる要因. 第49回日本理学療法学会大会, 横浜, 2014年5月30日-6月1日.
6. 澤田圭祐, 橋立博幸, 大沼剛, 浅野克俊, 嶋崎聡美, 千葉美幸, 笹本憲男:屋外活動が困難な地域在住高齢者における床からの立ち上がり動作能力の低下が屋内生活空間の活動に及ぼす影響. 第49回日本理学療法学会大会, 横浜, 2014年5月30日-6月1日.
7. 橋立博幸, 原田和宏, 藤澤祐基, 潮見泰藏:維持期脳卒中片

麻痺者における麻痺側および非麻痺側のFunctional reachの差異と片脚立位バランスとの関連. 第51回日本リハビリテーション医学会学術集会, 名古屋, 2014年6月5-7日.

8. 藤澤祐基, 岡島康友, 山田深, 橋立博幸, 潮見泰蔵: 片麻痺の麻痺手書字における手の遠位・近位運動の分離性とパフォーマンス. 第51回日本リハビリテーション医学会学術集会, 名古屋, 2014年6月5-7日.
9. 橋立博幸, 澤田圭祐, 古屋仁美, 芦川聡宏, 千葉美幸, 広瀬知宏, 笹本憲男: 維持期脳卒中両片麻痺者に対する長期訪問リハビリテーションが収縮期血圧改善に及ぼす効果の検討. 第33回関東甲信越ブロック理学療法士学会, 千葉, 2014年10月25-26日.
10. 澤田圭祐, 橋立博幸, 千葉美幸, 古屋仁美, 笹本憲男: 転倒後に生活機能が低下した高齢の慢性閉塞性肺疾患既往者に対する訪問リハビリテーションの介入効果. 第33回関東甲信越ブロック理学療法士学会, 千葉, 2014年10月25-26日.
11. 大沼剛, 橋立博幸, 張振志, 阿部勉, 井口大平, 齋藤崇志, 柴喜崇: 訪問リハビリテーションを利用する在宅要介護者の屋内生活空間の身体活動と生活意欲, 動作能力との関連. 第33回関東甲信越ブロック理学療法士学会, 千葉, 2014年10月25-26日.
12. 澤口知良, 橋立博幸, 小池俊人, 森井翔大, 新實良太, 藤澤祐基, 潮見泰蔵: 異なる駆動条件によって測定した車椅子直線駆動能力評価の信頼性と測定結果の差異. 第33回関東甲信越ブロック理学療法士学会, 千葉, 2014年10月25-26日.
13. 橋立博幸, 原田和宏, 山上徹也, 浅川康吉, 二瓶健司, 吉井智晴, 金谷さとみ: 脳血管疾患を有する軽度認知障害高齢者におけるアバシーの有無と離床時間との関連. 第73回日本公衆衛生学会総会, 宇都宮, 2014年11月5-7日.
14. 原田和宏, 橋立博幸, 二瓶健司, 山上徹也, 浅川康吉, 吉井智晴, 金谷さとみ: 軽度認知障害高齢者の同居家族における介護負担感と介護に対する態度の関連. 第73回日本公衆衛生学会総会, 宇都宮, 2014年11月5-7日.
15. 金谷さとみ, 橋立博幸, 原田和宏, 浅川康吉, 山上徹也, 二瓶健司, 吉井智晴: 脳血管性認知症を有する地域在住高齢者における日常生活活動と行動心理症状との関連. 第73回日本公衆衛生学会総会, 宇都宮, 2014年11月5-7日.
16. 池内貴美, 橋立博幸, 山本久美, 守口慎吾, 堀内典生: 回復期リハビリテーション病棟における脳卒中者の身体能力簡易テストによる入院日数の予測. 回復期リハビリテーション病棟協会第25回研究大会, 松山, 2015年2月27-28日.
17. 池内貴美, 橋立博幸, 山本久美, 守口慎吾, 堀内典生: 回復期リハビリテーション病棟の脳卒中者における身体能力簡易テストの検者間信頼性と妥当性. 回復期リハビリテーション病棟協会第25回研究大会, 松山, 2015年2月27-28日.
18. 守口慎吾, 池内貴美, 橋立博幸, 山本久美, 堀内典生: 回復期リハビリテーション病棟入院時における脳卒中者の身体能力簡易テストと自宅退院との関連. 回復期リハビリテーション病棟協会第25回研究大会, 松山, 2015年2月27-28日.

講演・一般向け公開講座

1. 橋立博幸: 高齢者が健やかに生活するための運動とリハビリテーション～介護の必要がない日常生活のために～. 八王子学園都市大学いちょう塾, 八王子, 2014年11月18, 25日, 12月2, 9, 16日.

論文

1. 原田和宏¹, 大川直美², 赤澤直紀², 井上優¹, 橋立博幸⁽¹⁾ 吉備国際大学, ⁽²⁾河西田村病院): 脳血管障害片麻痺者に生じる

二次性筋量減少に関するレビュー. 吉備国際大学保健福祉研究所研究紀要15:1-5, 2014.

2. 潮見泰蔵¹, 橋立博幸⁽¹⁾ 杏林大学保健学部理学療法学科): 高齢者の生活機能に対する理学療法 神経疾患を有する高齢者の生活機能に対する理学療法の取り組み. 理学療法 31:383-391, 2014.
3. 橋立博幸: 老年症候群と理学療法 理学療法で頻尿・失禁や便秘は改善するか?. 理学療法ジャーナル48:423-432, 2014.

著書

1. 橋立博幸: 評価の進め方. PT・OTビジュアルテキストリハビリテーション基礎評価学. 潮見泰蔵編. 東京, 羊土社, 2014. p.25-32.
2. 橋立博幸: 医療面接と情報収集. PT・OTビジュアルテキストリハビリテーション基礎評価学. 潮見泰蔵編. 東京, 羊土社, 2014. p.33-48.
3. 橋立博幸: 関節可動域(ROM). テキストリハビリテーション基礎評価学. 潮見泰蔵編. 東京, 羊土社, 2014. p.178-200.
4. 橋立博幸: 姿勢バランス. リハビリテーション基礎評価学. 潮見泰蔵編. 東京, 羊土社, 2014. p.227-250.
5. 藤澤祐基: 観察に基づく動作分析. リハビリテーション基礎評価学. 潮見泰蔵, 下田信明編. 東京, 羊土社, 2014. p.313-323.

内部障害系理学療法学研究室

講演

1. Saito R, Yatsunami M, Shibahara M, Niwa M: Prediction of care burden using a three - dimensional accelerometer that assesses sleep in home stroke patients and their caregivers. The 16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists in collaboration with the 48th Japanese Occupational Therapy congress and Expo, Yokohama, June 18th-21st, 2014.
2. 遠藤辰明, 土居健次郎, 河原常郎, 大森茂樹, 倉林準, 門馬博, 八並光信: 荷重による足部横アーチ高の変化と足部形状の比較. 第49回日本理学療法学会大会, 横浜, 2014年5月30日-6月1日.
3. 土居健次郎, 遠藤辰明, 河原常郎, 大森茂樹, 倉林準, 吉岡伸彦: 歩行時床反力と足部アーチ構造荷重応答能の関係: 第49回日本理学療法学会大会, 横浜, 2014年5月30日-6月1日.
4. 齋藤匠, 土居健次郎, 河原常郎, 大森茂樹, 倉林準, 門馬博, 八並光信: バイゼーションによる神経伸長と筋出力の変化の関連について. 第49回日本理学療法学会大会, 横浜, 2014年5月30日-6月1日.
5. 大堀航輔, 土居健次郎, 河原常郎, 大森茂樹, 倉林準, 門馬博, 八並光信: カーフレイズにおける足部構造の変化とCOPの関係性. 第49回日本理学療法学会大会, 横浜, 2014年5月30日-6月1日.
6. 冬部拓海, 栗野宏志, 土居健次郎, 遠藤辰明, 河原常郎, 大森茂樹, 倉林準, 門馬博, 八並光信: 下肢変形性関節症患者における足部形態の特徴. 第49回日本理学療法学会大会, 横浜, 2014年5月30日-6月1日.
7. 内野翔太, 土居健次郎, 河原常郎, 大森茂樹, 倉林準, 門馬博, 八並光信: 体幹肢位の違いが片脚スクワット動作時に下肢3関節へ与える影響. 第49回日本理学療法学会大会, 横浜,

2014年5月30日-6月1日。

8. 齋藤利恵, 八並光信: 日中活動量と夜間睡眠の解析による在宅生活支援へのアプローチ-Actigraphを用いて-。第11回東京都作業療法学会, 八王子, 2014年10月26日。

論文

1. 石濱裕規¹, 都丸哲也¹, 大高恵莉¹, 千野直一¹, 金森宏¹, 門馬博, (¹医療法人社団永生会): 下肢ボツリヌス治療とリハビリテーション. POアカデミージャーナル 22: 121-126, 2014.
2. 門馬博, 下島裕美, 三浦雅文¹, 齋藤昭彦(¹群馬医療福祉大・リハビリテーション学部): 臨床実習における患者全体像把握を促すツールとしての4ボックス法活用の試み. リハビリテーション教育研究 20: 140-141, 2015.

● 作業療法学科 ●

母子保健学研究室

講演

1. 加藤英世, 石野晶子: 看護師の職務と使命. 東京都立小平高等学校キャリア教育, 東京, 2014年5月27日。
2. 加藤英世: 子育て相談で大切にしたいこと「子どもとお母さんも笑顔になあれ」。羽村市子育て研修会. 羽村, 2014年6月17日。
3. 加藤英世: いのちの教育. 八王子学園八王子中学校, 八王子, 2014年6月18日。
4. 石野晶子, 加藤英世, 場家美沙紀, 松田博雄: 乳幼児をもつ保護者の予防接種に対する認識と要望. 第61回日本小児保健学会, 福島, 2014年6月20-22日。
5. 加藤英世: 現代の中学生の健康課題と生活指導. 八王子学園八王子中学校, 八王子, 2014年8月23日。
6. 加藤英世, 石野晶子: 幼児の発達と生活習慣. 八王子中村学園 なかの幼稚園, 八王子, 2014年9月20日。
7. 楠田美奈, 岩見文博, 石野晶子, 加藤英世, 大屋千鶴, 片桐朝美, 太田ひろみ, 大嶺智子, 照屋浩司: 幼児・児童を対象とした音響的骨評価値の標準域設定に関する研究. 第73回日本公衆衛生学会, 宇都宮, 2014年11月5-7日。
8. 古橋晃一, 加藤英世, 石野晶子, 酒井順子, 大塚絢子, 田邊郁恵, 太田ひろみ, 岩見文博, 楠田美奈, 照屋浩司: 幼児および学童の重心動揺量の変化とその関連要因に関する研究. 第61回日本学校保健学会, 金沢, 2014年11月14-16日。

論文

1. 石野晶子, 加藤英世: HPVワクチン接種対象年齢児をもつ保護者のHPVワクチンに対する認識に関する研究. 保健の科学 57(5).2014. (印刷中)

著書

1. 加藤英世: 保健医療・保健福祉編 母子保健対策. エssenシャル 社会・環境と健康第2版第7刷. 高島豊編著. 東京, 医歯薬出版, 2015.

運動器障害作業療法学研究室

講演

1. Mochizuki H, Takeda K, Shimoda N: Sex differences of behavioral ability in mental rotation tasks of hand pictures. 16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists in the 48th

Japanese Occupational Therapy Congress and Expo, Yokohama, Japan. June 18th, 2014.

2. 望月秀樹: パワーリハビリテーション疾患別運営方法. パワーリハビリテーション指導員研修会, 東京, 2014年6月28-29日。
3. 望月秀樹: パワーリハビリテーション各論・評価学・トレーニング学. 富山パワーリハビリテーション基礎課程研修会, 富山, 2014年7月12-13日。
4. 望月秀樹: パワーリハビリテーション概論および各論. パワーリハビリテーション実務者研修会, 広島, 2014年8月3日。
5. 望月秀樹: パワーリハビリテーション概論・各論・評価学・トレーニング学. パワーリハビリテーション実務者研修会, 仙台, 2014年9月14日。
6. 望月秀樹: パワーリハビリテーション概論・各論・評価学・トレーニング学. パワーリハビリテーション実務者研修会, 仙台, 2014年11月9日。
7. 望月秀樹: パワーリハビリテーション運営理論Ⅱ. パワーリハビリテーション上級指導員研修会, 東京, 2014年11月30日。
8. 原田祐輔, 望月秀樹, 森田千晶, 下田信明: 脳血管疾患を対象とした訪問リハビリテーションの効果判定指標に関する文献的研究. 第19回日本在宅ケア学会学術集会, 福岡, 2014年11月29-30日。
9. 森田千晶: 筋電義手-適合と作業療法. 東京大学附属病院三四郎セミナー, 東京, 2014年9月25日。

論文

1. 原田祐輔, 長谷川利夫¹(¹杏林大・保・精神障害作業療法学): 訪問リハビリテーションに従事する作業療法士のメンタルヘルスに関する研究-病院に勤務する作業療法士との比較を通して-。作業療法 33:324-336, 2014.

著書

1. 森田千晶: 三輪書店国家試験模試専門問題義肢装具・福祉用具. 東京, 三輪書店, 2014.

受賞, 特許等知的財産関係, 学会主催, 報告書

1. 望月秀樹: 日本自立支援介護学会第8回学術大会企画・開催, 東京, 2014年5月24-25日。
2. 望月秀樹: 第14回パワーリハビリテーション学術大会企画・開催, 東京, 2015年3月7-8日。

精神障害作業療法学研究室

講演

1. 早坂友成: 第2回OT塾-作業療法を後進に正しく伝える. OT塾実行委員会, 東京, 2014年4月19-20日。
2. 長谷川利夫: 隔離・身体拘束縮減のために何かできるか. 桜ヶ丘記念病院 行動制限最小化委員会主催研修会, 多摩, 2014年5月30日。
3. 長谷川利夫, 鈴木健太郎, 原田祐輔, 田中忍, 金谷光子: Multidisciplinary in Psychiatric care-Promoting factor and inhibiting factor on cooperation-, 第16回世界作業療法士連盟大会・第48回日本作業療法学会, 横浜, 2014年6月20日。
4. Hayasaka T: Current state of return-to-work support program in the treatment of depression. 16th International congress of the world federation of occupational therapists, Yokohama, June 20th, 2014.
5. 鈴木健太郎, 佐藤知正: The making of the support network for elderly people life in the region. 第16回世界作業療法士連盟大会・第48回日本作業療法学会, 横浜, 2014年6月20日。

6. 鈴木健太郎: 食事のケア。介護職員研修会, 東金, 2014年6月22日。
7. 鈴木健太郎: リハビリテーションとソフト・ハード支援。NPHC研究会, 東京, 2014年7月5日。
8. 長谷川利夫: 病棟転換型居住系施設の本質。全国精神障害者地域生活支援協議会第18回全国大会in大阪, 大阪, 2014年7月19日。
9. 早坂友成: 精神科リエゾンチームにおける作業療法の役割-作業療法士の立場から。日本総合病院精神医学会-精神科リエゾンチーム講習会基礎編2014, 東京, 2014年7月19日。
10. 早坂友成: うつ病治療と復職支援-大学病院とクリニックと作業療法。第94回東京デイクア連絡会, 東京, 2014年7月26日。
11. 長谷川利夫: 職員は何故身体拘束をしようと思うのか? ~心理面的側面の大規模調査から見えてきたもの。高齢者新聞社高齢者住宅フェア2014, 東京, 2014年7月30日。
12. 鈴木健太郎: 作業療法と感覚統合。相談職員向け講座, 東京, 2014年8月14日。
13. 鈴木健太郎: 子どもの発達と感覚統合。通園職員向け講座, 東京, 2014年8月14日。
14. 早坂友成: うつ病患者に対する作業療法研修会。日本作業療法士協会重点課題研修会, 札幌, 2014年8月23-24日。
15. 長谷川利夫: 障害者権利条約からみる我が国の精神医療の現状と展望。埼玉県精神障害者社会福祉事業所運営協議会2014年度全体研修会, 埼玉, 2014年9月2日。
16. 長谷川利夫: 病棟転換問題は我が国の精神医療にどう影響を与えるか。東京, 2014年9月3日。
17. 長谷川利夫: 隔離身体拘束の実施と権利擁護。第22回日本精神科救急学会, 旭川, 2014年9月5日。
18. 長谷川利夫: 病棟転換問題の経緯と現状。作業療法と作業科学の勉強会, 広島, 2014年9月6日。
19. 長谷川利夫: 身体拘束を巡る状況は危機的である。身体拘束廃止の立法化を求める会東京集会シンポジウム, 東京, 2014年9月14日。
20. 長谷川利夫: 我が国の精神保健福祉の今後の方向性。大阪精神医療人権センター, 全国精神障害者地域生活支援協議会合同研修会, 大阪, 2014年10月3日。
21. 長谷川利夫: 地域生活を取り戻すために何ができるか。青梅ピアサポートグループぶーけ研修会, 青梅, 2014年10月4日。
22. 長谷川利夫: 精神障害を持つ人の地域生活。社会福祉法人うるおいの里職員研修, 東京, 2014年10月7日。
23. 鈴木健太郎: 地域における高齢者生活支援ネットワーク作り。第11回東京都作業療法士学会, 八王子, 2014年10月26日。
24. 長谷川利夫: 出鼻をくじかれた障害者権利条約批准元年。日本病院・地域精神医学会第57回仙台総会, 仙台, 2014年10月31日。
25. 長谷川利夫: 隔離・身体拘束の実態と権利擁護。日本病院・地域精神医学会第57回仙台総会, 仙台, 2014年11月1日。
26. 長谷川利夫: 病棟転換型居住系施設の本質。日本作業科学研究会 第18回作業科学セミナー, 宇部, 2014年11月15日。
27. 早坂友成: リワークプログラムにおける作業療法の活用。2014年度臨床精神科作業療法研究会, 福島, 2014年11月29日。
28. 長谷川利夫: 精神障害を持つ方の「住まい」と「暮らし」を街の中で ~障害者権利条約と精神保健福祉法の示す未来~。内閣府障害者週間連続セミナー, 東京, 2014年12月6日。
29. 早坂友成: うつ病の見立て-人と病と作業療法。平成26年度静岡県精神科作業療法研究会, 静岡, 2015年2月21日。

論文

1. 長谷川利夫: 今, 改めて隔離・身体拘束を問う 隔離・身体拘束についての問題提起。病院・地域精神医学57(1):40-42, 2014。
2. 長谷川利夫: 「病棟転換型居住系施設」問題からみるわが国の人権意識。ノーマライゼーション34(7):30-32, 2014。
3. 長谷川利夫: 現場からのレポート病棟転換型居住系施設の問題点と我が国の精神保健医療福祉のあるべき方向。福祉労働 144:117-123, 2014。
4. 長谷川利夫: ウォッチング! 総合支援法 精神科病院「病棟転換」問題をめぐって これまでとこれからの動き。DPI われら自身の声 30(2):25-27, 2014。
5. 原田祐輔, 長谷川利夫: 訪問リハビリテーションに従事する作業療法士のメンタルヘルスに関する研究~病院に勤務する作業療法士との比較を通して。作業療法33(4):324-336, 2014。
6. 長谷川利夫: 「平等」という考えを根底から覆す病棟転換。精神医療 77:43-47, 2015。
7. 長谷川利夫: すべての人はどこに誰と住むか自由である「病棟転換型居住系施設」の問題点。部落解放705:46-55, 2015。

著書

1. 長谷川利夫: 病院を出て地域で暮らしたい~精神科病院の社会的入院問題を検証する。東京, やどかり出版, 2014。
2. 早坂友成: 作業療法実践の仕組み-改訂第2版。東京, 協同医書出版, 2014。
3. 早坂友成: 第1回PT・OT国家試験模擬試験-精神神経系。東京, 医歯薬出版株式会社, 2014。
4. 早坂友成: 第2回PT・OT国家試験模擬試験-精神神経系。東京, 医歯薬出版株式会社, 2014。

その他

1. 鈴木健太郎: NPHC研究会企画・開催, 東京, 2014年7月5日。
2. 早坂友成: 第54回作業療法全国研修会企画・開催。青森, 2014年8月30-31日。
3. 早坂友成: 第55回作業療法全国研修会企画・開催。奈良, 2014年12月6-7日。
4. 鈴木健太郎: 日本建築学会建築計画委員会高齢者・障害者等居住小委員会平成26年度公開講座企画, 東京, 2015年2月26日。

認知障害作業療法学研究室

講演

1. 河野眞, 春原るみ, 石本馨, 田中紗和子, 西本敦子, 田畑梨杏里, 古郡恵, 知脇希: 原発事故避難者支援活動における参加住民グループの3年間の変遷~福島県二本松市の浪江町出身者向け仮設団地2か所での活動経験から~。第21回多文化間精神医学会学術総会, 長崎, 2014年5月24日。
2. 三浦和, 伊藤智典, 河野眞: 日本におけるリハビリテーション災害支援システムの現状と流れ。第49回日本理学療法学会大会, 横浜, 2014年6月1日。
3. Mochizuki H, Takeda K, Shimoda N: Sex differences of behavioral ability in mental rotation tasks of hand pictures. 16th World Congress of Occupational Therapists, Yokohama, June 18th, 2014。
4. Kono M, Ishii K, Tomita C, Tabata R, Ishimoto K: Use of Occupational Activities for Community Re-Building-Report on support activity for refugees from nuclear plant accident in Fukushima. 16th International Congress of WFOT, Yokohama,

June 19th, 2014.

5. Hayashi Y, Thomas Y, Kono M, Hai HH: Seeding Occupational Therapy in Cambodia, Laos, Myanmar and Vietnam-A collaborative approach of on line education. 16th International Congress of WFOT, Yokohama, June 19th, 2014.
6. Kono M, Ueno E, Nozaki T: Introduction to Community-centered Occupational Therapy. 16th International Congress of WFOT, Yokohama, June 21st, 2014.
7. Furugori M, Kono M, Sunohara R, Morishita N, Nishimoto A: Effective activity and role of Occupational Therapist in Disaster support-Experiences from Pakistan earthquake and the great Japan earthquake. 16th International Congress of WFOT, Yokohama, June 21st, 2014.
8. Ishii K, Kono M: Activity Report-The Project of Rehabilitation Capacity Improvement in National Rehabilitation Center for Children with Disabilities in Tajikistan-Possibility of the Introduction of Occupational Therapy in Tajikistan. 16th International Congress of WFOT, Yokohama, June 21st, 2014.
9. Kono M: Puberty and Sexuality of Children with Disabilities. School No.72, Tajikistan, August 31st, 2014.
10. Kono M: Inclusive Education in Japan, Ministry of Education. Tajikistan, September 3rd, 2014.
11. Miura N, Ito T, Kono M, Morishita N: Challenges to support activities by therapists for survivors from the Eastern Japan earthquake. 12th Asia Pacific Conference on Disaster Medicine, Tokyo, September 17th, 2014.
12. 下田信明:障がいを持つ人の生活とリハビリテーション・作業療法. 八王子学園都市大学いちょう塾, 八王子, 2014年10月7, 14, 21, 28日, 11月4日.
13. 原田祐輔, 望月秀樹, 森田千晶, 下田信明:脳血管疾患を対象とした訪問リハビリテーションの効果判定に関する文献的研究. 第19回日本在宅ケア学会学術集会, 福岡, 2014年11月30日.
14. 長島泉, 望月秀樹, 武田湖太郎, 下田信明:手の心的回転課題遂行に年齢が及ぼす影響. 第6回日本ニューロリハビリテーション学会学術集会, 秋田, 2015年2月21日.
15. 森下賀子, 河野眞, 三浦和:コミュニティの再構築に向けたリハビリテーション -福島県浪江町への災害リハビリテーション支援活動の報告-. 第20回日本集団災害医学会学術集会, 東京, 2015年2月27日.
16. 三浦和, 半田一登, 河野眞:生活機能に特化したトリアージ法の開発 -災害リハビリテーション活動を円滑に進めるために-. 第20回日本集団災害医学会学術集会, 東京, 2015年2月28日.
17. 河野眞:私の国際協力遍歴とこれから. JOCVリハビリテーションネットワークセミナー2015, 東京, 2015年3月29日.

論文

1. 長島泉, 塚原健介¹, 園田圭一¹, 成嶋のり子¹, 下川和佳², 濱田剛利¹, 下田信明¹(¹土浦厚生病院, ²グループホームオアシス):居場所の再獲得-避難転院した慢性期統合失調症者の2年間・作業療法士の視点から-. 精神科治療学29:1319-1324, 2014.
2. 知脇希, 河野眞, 石本馨:福島第一原発事故避難者への支援活動-JOCVリハビリテーションネットワークの活動とその変化-. 暮らしとリハビリテーション2:50-56, 2014.

著書

1. 下田信明:意欲・自己効力感の評価. リハビリテーション基礎評価学. 潮見泰蔵・下田信明編集. 東京, 羊土社, 2014. pp.111-121.
2. 下田信明:摂食・嚥下検査. リハビリテーション基礎評価学. 潮見泰蔵・下田信明編集. 東京, 羊土社, 2014. pp.122-125.
3. 下田信明:上肢機能検査. リハビリテーション基礎評価学. 潮見泰蔵・下田信明編集. 東京, 羊土社, 2014. pp. 274-282.
4. 下田信明:作業療法評価. リハビリテーション基礎評価学. 潮見泰蔵・下田信明編集. 東京, 羊土社, 2014. pp. 340-342.
5. 下田信明:起居・移動. 日常生活活動・社会生活行為学. 濱口豊太編集. 東京, 医学書院, 2014. pp.62-82.
6. 河野眞:気分(うつ・不安)・思考の評価. リハビリテーション基礎評価学. 潮見泰蔵・下田信明編集. 東京, 羊土社, 2014. pp.102-110.
7. 河野眞:運動発達の評価. リハビリテーション基礎評価学. 潮見泰蔵・下田信明編集. 東京, 羊土社, 2014. pp.324-334.
8. 河野眞, JANNET事務局:CBRガイドライン概要版&CBRマトリックス使用の手引き. 東京. 障害分野NGO連絡会, 2014.

その他

1. 下田信明:エンド・オブ・ライフケア:市民と専門家の協働・連携 総論. 日本在宅ケア学会誌18:31, 2014.
2. 河野眞:地域ささえあいネットワーク作りに向けて-CBRセミナー・ワークショップ企画・開催, 福島, 2014年11月1日.
3. 下田信明:日本在宅ケア学会平成26年度第1回公開講座企画・開催, 福岡, 2014年11月29日.
4. 河野眞:第1回リハビリテーション災害支援 研修・意見交換会企画・開催, 東京, 2015年3月22日.

中枢神経障害作業療法学研究室

講演

1. 村松憲, 玉木徹, 駒形純也, 丹羽正利, 升佑二郎, 石黒友康, 佐々木誠一:糖尿病性ニューロパチーによって γ 運動ニューロンが減少する. 第21回脳機能とリハビリテーション研究会学術集会, 千葉, 2014年4月20日.
2. 村松憲, 玉木徹, 駒形純也, 丹羽正利, 升佑二郎, 長谷川達也, 佐々木誠一, 石黒友康:OLETFラット(2型糖尿病モデルラット)の γ 運動ニューロンが選択的に減少する. 第49回日本理学療法学会大会, 横浜, 2014年5月30日-6月1日.
3. Saito R, Yatsunami M, Shibahara M, Niwa M:Prediction of care burden using a three-dimensional accelerometer that assesses sleep in home stroke patients and their caregivers. The 16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists in collaboration with the 48th Japanese Occupational Therapy congress and Expo, Yokohama, June 18th-21st, 2014.
4. 大城直美, 村松憲, 佐々木誠一, 丹羽正利:高血糖によって誘発される腹壁筋運動ニューロンの障害. 第48回日本運動障害研究会, 東京, 2014年7月19日.
5. Naomi O, Muramatsu K, Sasaki S, Niwa M:Hyperglycemia causes the reduction of numbers and sizes of abdominal motoneurons in STZ rats. 第37回日本神経科学大会, 横浜, 2014年9月11-13日.
6. Muramatsu K, Tamaki T, Komagata J, Niwa M, Ishiguro T, Hasegawa T, Sasaki S:The number of gamma motoneurons decreased in Otsuka Long-Evans Tokushima Fatty (OLETF)

rat.第37回 日本神経科学大会, 横浜, 2014年9月11-13日.

7. 村松憲, 玉木徹, 丹羽正利, 長谷川達也, 佐々木誠一, 石黒友康. DPN はOLETF ラットの γ 運動ニューロンを選択的に減少させる. 第29回日本糖尿病合併症学会, 東京, 2014年10月3-4日.
8. 齋藤利恵, 八並光信: 日中活動量と夜間睡眠の解析による在宅生活支援へのアプローチ-Actigraphを用いて-. 第11回東京都作業療法学会, 東京, 2014年10月26日.
9. 田中紗和子: ニカラグアにおける障害者支援の現状-青年海外協力隊, 障害児通所施設での活動経験-. 国際保健医療学会, 東京, 2014年11月3日.
10. 村松憲, 玉木徹, 丹羽正利, 長谷川達也, 石黒友康, 佐々木誠一: 運動療法はOLETFラットの γ 運動ニューロン障害を予防する. 第49回日本運動障害研究会, 東京, 2015年1月17日.

論文

1. 村松憲¹, 玉木徹¹, 丹羽正利, 升佑二郎¹, 永野克人¹, 長谷川達也², 石黒友康¹, 佐々木誠一³(¹健康科学大学, ²山梨県富士山科学研究所, ³茨城県立医療大学): 2型糖尿病ラットの運動ニューロンが減少する. 運動障害研究会誌24(1): 25-28, 2014.
2. Niwa M, Muramatsu K¹, Sasaki S²(¹Health Science University, ²Ibaraki Prefectural University of Health Sciences): Discharge patterns of abdominal and pudendal nerves during induced defecation in anesthetized cats. Journal of Physiological Sciences 65:223-231, 2015.

● 診療放射線技術学科 ●

画像診断学研究室

講演

1. 土屋充輝, 本谷啓太, 似鳥俊明: 9年後に骨転移にて診断された頸動脈小体原発悪性傍神経節腫の1例. 第445回日本医学放射線学会関東地方会, 東京, 2014年6月14日.
2. 黒木一典: 「出血と虚血 腹部: IVRも併せて」. 第6回吉祥寺画像診断セミナー. 武蔵野, 2014年8月2日.
3. 黒木一典: 「急性肺血栓塞栓の画像診断とIVR」. 第31回多摩画像医学カンファレンス, 武蔵野, 2015年2月7日.
4. 黒木一典: 「出血と虚血の画像診断とIVR」. 第3回鎌倉画像診断セミナー, 藤沢, 2015年3月26日.

論文

1. 黒木一典: すとりびすむすーある市民ランナーの悩み?-. 画像診断 34(5):399, 2014.
2. 本谷啓太: 骨軟部腫瘍における画像評価最前線 骨軟部腫瘍におけるMRI診断. 臨床整形外科 50(3):223-228, 2015.

著書

1. 本谷啓太: 5章外傷, 障害 疲労骨折 脆弱性骨折 軟骨下脆弱性骨折. 骨軟部画像診断スタンダード. 青木純, 青木隆敏, 上谷雅孝, 江原茂, 神島保, 杉本英治, 福田国彦, 藤本肇編. 東京, メディカルサイエンスインターナショナル, 2014. p.200-207.

その他

1. 黒木一典: 座長, 第73回日本医学放射線学会総会, 一般演題(CyPos+口演) 診断: 心血管1, 横浜, 2014年4月11日.
2. Kazunori Kuroki: 13th Nordic Japan PACS Symposium: Session 5: Intervention - part 2, Turku(Finland), June 11-13,

2014.

3. 黒木一典: 座長, 多摩TACEを考える会, 特別講演「Intermediate Stage 肝細胞の治療と予後」, 国分寺, 2015年3月11日.

診療放射線技術学研究室

講演

1. Sakamoto T, Adachi T, Murakami S, Ikeda I, Saito H: A basic study of 3D linear attenuation coefficient reconstruction by MVCBCT. 第107回日本医学物理学学会学術大会, 横浜, 2014年4月10-13日.
2. Arai T, Sakamoto T, Ikeda I, Adachi T, Murakami S, Takagi M, Furuya J, Hashimoto N, Takahashi S, Maruyama Y: A study of source position measurement for RALS using Imaging Plate. 第107回日本医学物理学学会学術大会, 横浜, 2014年4月10-13日.
3. 賀山恒, 坂本岳士, 清水裕太, 安達卓哉, 清水真太郎, 市川浩三, 大戸眞喜男: 320列CT における高速Volume撮影に関する基礎的検討. 第70回日本放射線技術学会総会学術大会, 横浜, 2014年4月10-13日.
4. 森美加, 服部理恵, 浜野麻美, 酒田美香, 吉田和広, 天野与稔: Dynamic CT/切除標本CT fusion画像を用いた乳癌組織型の検討. 第11回日本乳癌学会中部地方会, 岐阜, 2014年9月13-14日.
5. 森美加, 小林邦典, 宮崎功, 大戸眞喜男, 木村徳典, 五明美穂, 似鳥俊明: Real-IR 3D T1-Weighted Black-Blood法を用いたVessel wallイメージングの検討. 第42回日本磁気共鳴医学会大会, 京都, 2014年9月18-20日.
6. 高久啓志, 安達卓哉, 賀山恒, 坂本岳士, 市川浩三, 高橋正勝, 大戸眞喜男, 清水真太郎: 高速CT撮影を用いた息止め困難な患者の動きに対する基礎的検討. 第42回日本放射線技術学会秋季学術大会, 札幌, 2014年10月9-11日.
7. 森美加: 外傷症例の読影. 救急撮影技師認定機構・東京部会一般撮影班共催講習会, 東京, 2014年10月18日.
8. 小林邦典: 多発性嚢胞腎-腎容積の測定法-. 第10回千葉エコー研究会, 千葉, 2014年11月30日.
9. 渡辺篤志, 瀬野晋一郎, 木暮英輝, 関健介, 坂本岳士, 岡田洋二, 嶋津秀昭: フリーラジカルに対する唐辛子辛味成分カプサイシンの捕捉活性に関する速度論的研究. 第12回日本機能性食品医学会総会, 京都, 2014年12月13-14日.

論文

1. Higashihara E, Nutahara K, Tanbo M, Hara H, Miyazaki I, Kobayashi K, Nitatori T: Does increased water intake prevent disease progression in autosomal dominant polycystic kidney disease?. Nephrol Dial Transplant. 2014. doi: 10.1093/ndt/gfu093. (published online).
2. Watanabe A¹, Seno S¹, Kogure E¹, Seki K², Sakamoto T, Okada Y, Shimazu H¹ (¹Dept. of Physiology, Biological Engineering & Medical Information Engineering, ²Dept. of Radiation Safety Management): Kinetic Study of the Radical Scavenging of Capsaicin in Homogeneous Solutions and Aqueous Triton X-100 Micellar Suspensions. Journal of Food Science 80(3): 577-583, 2015.
3. 小山謙¹, 森美加, 河島あき²(¹東京ベイ・浦安市川医療センター, ²東京北医療センター): Fracture Cross search 第4回上腕骨近位端骨折①診断, 東京放射線 61(718):18-22, 2014.

4. 小山謙¹, 森美加, 河島あき²(¹東京ベイ・浦安市川医療センター, ²東京北医療センター): Fracture Cross search 第5回上腕骨近位端骨折①治療, 東京放射線 61(719):17-20, 2014.

医用理工学研究室

著書

1. 佐々木博, 小池貴久, 勝俣健一郎共著: 診療放射線技師を目指す学生のための医用X線CT工学. 東京, コロナ社, 2015.

放射線安全管理学研究室

講演

1. 松塚雅博, 金子哲也, 関健介, 松井幸恵, 大熊鈴子, 石川友美: 水質プロフィールによる多摩西部と国分寺崖線の湧水の検討. 環境科学会2014年会, つくば, 2014年9月18-19日.
2. 関健介, 後藤恭一, 松塚雅博, 金子哲也: 水泳プール水の有機物量評価に関しての一考察. 第73回日本公衆衛生学会総会, 宇都宮, 2014年10月5-6日.
3. 渡辺篤志, 瀬野晋一郎, 木暮英輝, 関健介, 坂本岳士, 岡田洋二, 嶋津秀昭: フリーラジカルに対する唐辛子辛味成分カプサイシンの捕捉活性に関する速度論的研究. 第12回日本機能性食品医用学会総会, 京都, 2014年12月13-14日.

論文

1. Watanabe A¹, Seno S¹, Kogure K¹, Seki K, Sakamoto T², Okada Y³, Shimazu H¹(¹ Dept. of Physiology, Biological Engineering & Medical Information Engineering, Faculty of Health Sciences, Kyorin Univ., ²Dept. of Medical Radiological Technology, Faculty of Health Sciences, Kyorin Univ., ³ Dept. of Analytical Chemistry, Faculty of Health Sciences, Kyorin Univ.): Kinetic Study of the Radical Scavenging of Capsaicin in Homogeneous Solutions and Aqueous Triton X-100 Micellar Suspensions. Journal of Food Science 80(3): 577-583, 2015.

量子医療技術学研究室

講演

1. Yamamoto T, Koike T, Muroi K: Investigation of fission products in the atmosphere at elementary schools using a portable dust sampler. 第70回 日本放射線技術学会総会, 横浜, 2014年4月13日.
2. Komi S, Sato E, Hakamata Y, Hata H, Inoue Y: Preliminary investigation of the optimal slice angle for measuring amygdala activity in fMRI. Section for Magnetic Resonance Technologists 23rd Annual Meeting, Italy, May 10th-16th, 2014.
3. Isobe T, Okamoto Y, Shida T, Hirano Y, Sato E, Shoda J: Non-Invasive Assessment of Ectopic Fat in Non-Alcoholic Fatty Liver Disease Using ¹H-MRS. Section for Magnetic Resonance Technologists 23rd Annual Meeting, Italy, May 10th-16th, 2014.
4. Sato E, Isobe T, Yamamoto T, Tadano K, Akutsu H, Matsumura A: Method for selectively depicting each motor tract by diffusion tensor tractography using probabilistic diffusion tractography analysis. Section for Magnetic

Resonance Technologists 23rd Annual Meeting, Italy, May 10th-16th, 2014.

5. 佐藤英介: スタンフォード大学研修「何を見て, 何を学び, 何を感じ, 今後はどう活かすか」. 第42回日本放射線技術学会秋季学術大会, 札幌, 2014年10月9-11日.
6. Komi S, Sato E, Hakamata Y, Mizuno K, Hata H, Tagaya H, Inoue Y: A Pilot study Optimal slice angle to Inhibit the BOLD signal loss of the Amygdala in 3T-MRI. Asia-Oceania Congress of Medical Physics, Vietnam, October 23rd-25th, 2014.
7. Watanabe Y, Takei H, Isobe T, Takada K, Sato E, Shuto N, Noda S, Inoue S, Nakagawa T, Yogo K, Hayakawa K: EPID response to the energy spectrum changes by human body transmission. Asia-Oceania Congress of Medical Physics, Vietnam, October 23rd-25th, 2014.
8. 山本智朗: Unclear MedicineからNuclear Medicine. 第2回吉祥寺セミナー散乱線, 武蔵野, 2014年10月25日.
9. Takei H, Watanabe Y, Isobe T, Takada K, Shigematsu N, Sato E, Hara H, Muraishi H, Hasegawa T: Response of Electric Portal Imaging Device to Energy Spectrum of Therapeutic Photons. European Congress of Radiology, Austria, March 4th-8th, 2015.
10. Yamamoto T: The Status of Radiological Technologist and Education for Radiological Technology in JAPAN. Japan-China Nuclear Medicine joint symposium in Okinawa, Okinawa, March 14th-15th, 2015.

論文

1. Sato E, Yamamoto T¹, Shikano N², Ogura M², Nakai K¹, Yoshida F¹, Uemae Y¹, Takada T¹, Isobe T¹, Matsumura A¹ (¹University of Tsukuba, ²Ibaraki Prefectural University of Health Sciences): Intracellular boron accumulation in CHO-K1 cells using amino acid transport control. Appl Radiat Isot 88:99-103, 2014.
2. 吉田 冴子¹, 根部谷 吾¹, 藤原康作¹, 佐藤英介¹, 廣瀬稔¹ (¹北里大学): 有限要素法を用いた電気メスの伝導電流による植込み型心臓ペースメーカーに対する電磁干渉評価法. 医療機器学 84(3):343-348, 2014.
3. Isobe T¹, Fujibuchi T², Takada K¹, Mori S³, Kato H⁴, Kasahara T⁵, Sato E, Sakae T¹ (¹University of Tsukuba, ²Ibaraki Prefectural University of Health Sciences, ³Toranomon Hospital, ⁴Chiba University): Measurement of dose distribution during combined IVR procedure using the film method. Progress in Nuclear Science and Technology 4: 816-819, 2014.
4. Okamoto Y¹, Kemp GJ², Isobe T¹, Sato E, Hirano Y¹, Shoda J¹, Minami M¹ (¹University of Tsukuba, ²University of Liverpool): Changes in diffusion tensor imaging (DTI) eigenvalues of skeletal muscle due to hybrid exercise training. Magn Reson Imaging 32(10): 1297-1300, 2014.

著書

1. 山本智朗: 第5部ガンマカメラを用いた検査第6章消化器系. 核医学技術総論. 日本核医学技術学会編. 京都, 山代印刷, 2014. p.341-361.
2. 佐藤英介, 高田健太: 1章 基礎医学大要. 診療放射線技師 先手必勝 弱点克服 完全ガイド 第1版. 福士政広編集. 東京, メジカルビュー社, 2014. p.2-33.
3. 佐藤英介, 高田健太: 診療放射線技師 第66回国家

試験(2014年) 対照表ダウンロードサービス 基礎医学
大要. 診療放射線技師 ブルー・ノート 基礎編 3rd
edition 第3版. 福士政広編集. 東京, メジカルビュー
社, 2014. p.1-4.

その他

1. 山本智朗:本棚(「逐次近似画像再構成法の基礎」に関する書評). アイソトープニュース(No. 721). 2014年5月.
2. Komi S, Sato E, Hakamata Y, Hata H, Inoue Y: The SMRT First Place Research Focus Award, Section for Magnetic Resonance Technologists 23rd Annual Meeting, Italy, May 10th-16th, 2014.
3. Isobe T, Okamoto Y, Shida T, Hirano Y, Sato E, Shoda J: The 2nd Place Research Focus Poster Award, Section for Magnetic Resonance Technologists 23rd Annual Meeting, Italy, May 10th-16th, 2014.

分析化学Ⅱ研究室

講 演

1. 渡辺篤志, 瀬野晋一郎, 木暮英輝, 関健介, 坂本岳士, 岡田洋二, 嶋津秀昭: フリーラジカルに対する唐辛子辛味成分カプサイシンの捕捉活性に関する速度論的研究. 第12回日本機能性食品医用学会総会, 京都, 2014年12月13-14日.

論 文

1. Watanabe A, Seno S, Kogure E, Seki K, Sakamoto T, Okada Y, Shimazu H: Kinetic study of the radical scavenging of capsaicin in homogeneous solutions and aqueous Triton X-100 micellar suspensions. J Food Sci 80:C577-C583, 2015.

総合政策学部

阿久澤利明

その他(学会等および社会における主な活動)

1. (翻訳)阿久澤利明:ドイツ労働法. ペーター・ハナウ, クラウス・アドマイト著. 手塚和彰・阿久澤利明訳. 東京. 信山社, 2015 年. 1-503.

伊藤 敦司

論文

1. 伊藤敦司:平成 26 年会社法改正に関する一考察(1).杏林社会科学 30(2):1-23,2014 年 9 月.
2. 伊藤敦司:平成 26 年会社法改正に関する一考察(2).杏林社会科学 30(3):1-16,2014 年 12 月.
3. 伊藤敦司:平成 26 年会社法改正に関する一考察(3).杏林社会科学 30(4):1-14,2015 年 3 月.

岩隈 道洋

講演

1. 岩隈道洋:法情報の世界. ロー・ライブラリアン研究会研修事業「法情報提供サービス入門」, 東京, 2014 年 6 月 27 日.
2. 岩隈道洋, 松田正巳:支援法を考える—女性の健康包括支援法と障害者総合(自立)支援法. 健康福祉政策学会, 茨城, 2014 年 11 月 23 日.
3. 岩隈道洋:支援法を巡る法的視点. 千代田学探択事業 現代都市生活の質・公開研究会, 東京, 2015 年 3 月 7 日.

論文

1. 岩隈道洋:「支援法」を巡る法的視点. 精神保健福祉ジャーナル 響き合う街で 72:2-10,2015 年 2 月 28 日.
2. 岩隈道洋:国公立学校における政教分離に対する批判的言説の検討. 杏林大学教職課程年報 創刊号:35-44,2015 年 3 月 31 日.

著書

1. 岩隈道洋:法情報の世界. 法情報の調べ方入門. ロー・ライブラリアン研究会編. 東京. 日本図書館協会, 2015 年.

特許等知的財産関係, 報告書等

1. 岩隈道洋:平成 26 年度 板橋区個人情報保護に関する外部評価委員会改善・提案事項報告書, 2015 年 3 月.

馬田 啓一

著書

1. 馬田啓一:通商戦略の論点:世界貿易の潮流を読む. 馬田啓一・木村福成編著. 東京. 文眞堂, 2014 年 6 月.
2. 馬田啓一:TPP 交渉の論点と日本:国益をめぐる攻防. 石川幸一・馬田啓一・渡邊頼純編著. 東京. 文眞堂, 2014 年 6 月.
3. 馬田啓一:国際関係の論点—グローバル・ガバナンスの視点から—. 馬田啓一・小野田欣也・西孝編著. 東京. 文眞堂, 2015 年 2 月.
4. 馬田啓一:FTA 戦略の潮流:課題と展望. 石川幸一・馬田啓一・国際貿易投資研究会編著. 東京. 文眞堂, 2015 年 3 月.

その他(メディア出演)

1. (経済コラム掲載)馬田啓一:今夏の大筋合意はあるのか, TPP 交渉の募る不安. 世界経済評論 IMPACT, 2014 年 6 月 16 日.
2. (経済コラム掲載)馬田啓一:メガ FTA 時代の通商戦略:拡がる中国包囲網. 世界経済評論 IMPACT, 2014 年 9 月 29 日.
3. (経済コラム掲載)馬田啓一:APEC の新たな争点:FTAAP 構想をめぐる米中の対立. 国際貿易投資研究所・フラッシュ 215, 2014 年 12 月 9 日.
4. (経済コラム掲載)馬田啓一:(巻頭コラム)21 世紀型貿易と

WTO の将来. 日本関税協会・貿易と関税 63(2), 2015 年 2 月 1 日.

5. (経済コラム掲載)馬田啓一:妥結か漂流か, TPP 交渉と TPA の行方. 世界経済評論 IMPACT, 2015 年 2 月 9 日.
6. (経済コラム掲載)馬田啓一:今春の大筋合意はあるのか, 楽観できない TPP 交渉の行方. 国際貿易投資研究所・フラッシュ 224, 2015 年 3 月 13 日.
7. (経済コラム掲載)馬田啓一:日本のメガ FTA 戦略の課題は何か. 世界経済評論 IMPACT, 2015 年 3 月 23 日.

その他(団体役員)

1. 日本国際経済学会常任理事
2. 日本経済学会連合評議員
3. (一社)世界経済研究協会理事
4. (一財)国際貿易投資研究所理事・客員研究員
5. 中央大学経済研究所客員研究員
など兼務.

岡村 裕

講演

1. Hiroshi Okamura:Introduction about Long-Term Care in Japan and the Global Issues. New Global Health Symposium, Oregon, the United States, June 5 2014.
2. 岡村 裕:これからの高齢者介護—誰がどのように担うべきか—. 杏林大学公開講演会, 八王子, 2014 年 11 月 15 日.

著書

1. 岡村裕:外国人介護労働者受け入れ政策の新潮流. 国際関係の論点. 馬田啓一・小野田欣也・西孝編著. 東京. 文眞堂, 2015 年. 41-47.

特許等知的財産関係, 報告書等

1. 岡村裕:高齢者介護におけるタスクフティングの可能性と課題に関する研究. 杏林 CCRC 研究所紀要:165-168, 2015 年 2 月.

その他(学会等および社会における主な活動)

1. これからの高齢者介護. 健康福祉政策情報 70:1-2, 2014 年 10 月.

大川 昌利

著書

1. 大川昌利:成長の限界と「脱成長」論. 国際関係の論点—グローバル・ガバナンスの視点から—. 馬田啓一, 小野田欣也, 西孝編著. 東京. 文眞堂, 2015 年. 196-205.

小野田欣也

著書

1. 小野田欣也:日本における地球温暖化対策の苦悩(第 11 章). 通商戦略の論点:世界貿易の潮流を読む. 馬田啓一・木村福成編著. 東京. 文眞堂, 2014 年 6 月.
2. 小野田欣也:地球温暖化対策と日本の対応(第 14 章). 国際関係の論点—グローバル・ガバナンスの視点から—. 馬田啓一・小野田欣也・西孝編著. 東京. 文眞堂, 2015 年 2 月.

その他(学会等および社会における主な活動)

1. (社会活動)杏林大学大学院国際協力研究科国際開発専攻講演会司会, 2014 年 11 月 13 日.
2. (社会活動)馬田啓一「妥結か漂流か, 正念場の TPP 交渉と日本の対応」司会, 杏林大学大学院国際協力研究科国際開発専攻講演会, 2014 年 11 月 13 日.

その他(教育内容・方法の工夫)

1. 講義科目において, 講義の復習としての論述型出席確認, 確

認小テストの半期 2 回実施, パワーポイントの利用などを以前より実施していたが, 平成 26 年度は出席確認や小テストを基に, 期末試験前に第1次評価を行い公表し, 期末試験で第2次評価を行った。これにより履修者の授業理解度を高め, 合わせて単位取得機会を増加させた。

川村 真理

著 書

1. 川村真理:国連の人道活動におけるアカウンタビリティ—法の支配と人権に基づく新たな取組み—。国際関係の論点—グローバル・ガバナンスの視点から—。馬田啓一, 小野田欣也, 西孝編著。東京。文眞堂, 2015 年。102-112。

北島 勉

講 演

1. 北島勉:これからの国際保健医療〜経済から見たグローバルヘルス〜日本国際保健医療学会第 29 回東日本地方会, 東京, 2014 年 5 月 24 日。
2. Tsutomu Kitajima: A cost-consequences analysis of advanced health education intervention to reduce salt consumption for preventing cardiovascular diseases in high-risk patients in northern Thailand. 10th World Congress in Health Economics at Dublin, Ireland, 12-16 July 2014.
3. Tsutomu Kitajima: Developing a format to evaluate public private partnership projects in provision of health services in developing countries 46th Asia-Pacific Academic Consortium for Public Health at Kuala Lumpur, Malaysia, 17-19 October 2014.
4. 北島勉:官民連携フォーマット活用によるマラリア対策蚊帳普及事業の評価。第 29 回日本国際保健医療学会, 東京, 2014 年 11 月 21-22 日。
5. Tsutomu Kitajima: Are HIV patients receiving antiretroviral therapy at health centers satisfied with the services? A cross-sectional study in northern Thailand. 日本国際保健医療学会第 33 回西日本地方会, 薩摩川内, 2015 年 2 月 28 日。
6. 北島勉:国際保健領域における官民連携事例のシステムティック・レビュー。日本国際保健医療学会第 33 回西日本地方会, 薩摩川内, 2015 年 2 月 28 日。

論 文

1. Tsutomu Kitajima: Challenges for smoking cessation intervention as part of primary health care services in developing countries. Journal of Smoking Cessation. 2014: 1-8. DOI: 10.1017/jsc.2014.28.

著 書

2. 北島勉:ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ達成に向けて。国際関係の論点—グローバル・ガバナンスの視点から—。馬田啓一・小野田欣也・西孝編著。東京。文眞堂, 2015 年。

その他(団体役員)

1. 日本国際保健医療学会代議員
2. 日本エイズ学会誌編集委員
3. 北多摩南部地域保健医療協議会委員
4. 青梅市健康増進計画策定委員
5. 武蔵野市立保健センター運営委員会委員
6. 武蔵野市健康福祉総合計画推進会議委員
府中市立第四中学校学校運営連絡協議会委員

久野 新

講 演

1. Arata Kuno: Impacts of TPP on Economic Integration and Production Linkage in Asia Pacific. 2014 ROC (Taiwan)-US-Japan Trilateral Dialogue by The Chung-Hua Institution for Economic Research, Center for Strategic and International Studies, and Institute for International Policy Studies, Taipei, 1st July 2014.
2. Arata Kuno: Policy Issues regarding the Promotion of FTA Utilization in Japan. The 26th GSDM platform seminar "Mega-FTAs and Global Trade Governance", Tokyo, 8th December 2014.

論 文

1. Arata Kuno: Beyond TPP negotiation: policy proposals for promoting FTA utilization. Social Science Japan. Institute of Social Science 52:25-27, March 2015.
2. 久野新:貿易自由化実現のための補償措置は支持されるのか?—調査実験による実証分析—。経済産業研究所, RIETI Discussion Paper 15-J-002, 2015 年。

著 書

1. 久野新:メガ FTA 交渉妥結後の新たな政策課題:FTA の利用促進に向けて。国際関係の論点—グローバル・ガバナンスの視点から—。馬田啓一, 小野田欣也, 西孝編著。東京。文眞堂, 2015 年。

木暮健太郎

論 文

1. 木暮健太郎:地域活性化における若年層の活用と課題 : 東京都羽村市の事例から。杏林社会科学研究 30(4):15-28, 2014.
2. 木暮健太郎:メディアの発展と新しい市民像。行政&情報システム 50(1): 50-52, 2014.
3. 木暮健太郎:国連による電子政府調査(2014 年版)。行政&情報システム 50(5): 81-83, 2014.
4. 木暮健太郎:若年層のネット利用 : 選挙から地域活性化まで。行政&情報システム 51(1) 70-73, 2015.

斉藤 崇

講 演

1. Takashi Saito: An Economic Analysis on the Collection of Waste and Location of Recycling Plants. The 11th International Conference of Western Economic Association International, New Zealand, 7-11th January 2015.

論 文

1. 斉藤崇, 澤田英司, 佐藤一光:資源循環政策としての家電リサイクルシステム。環境経済・政策研究 8(1):103-106, 2015 年 3 月。

著 書

1. 斉藤崇:アジアにおける国際資源循環と拡大生産者責任。国際関係の論点。馬田啓一, 小野田欣也, 西孝編著。東京。文眞堂, 2015 年。173-183。

佐藤美由紀

講 演

1. 佐藤美由紀:メルコスル原加盟 4 カ国の違憲審査制の比較検討。ラテンアメリカ政経学会大会, 神戸, 2014 年 11 月 15 日。

論 文

1. 佐藤美由紀:マカオ特別行政区基本法の解釈権。杏林社会科

学研究 30(1):51-66, 2014 年 6 月.

2. 佐藤美由紀:アルゼンチンの諸州の集中型違憲審査制. 杏林社会科学 30(2):25-37, 2014 年 9 月.

著 書

1. 佐藤美由紀:憲法と人権:ラテン・アメリカ社会科学ハンドブック. ラテンアメリカ政経学会編. 東京. 新評論, 2014.
2. Miyuki Sato: Os três modos dos efeitos da declaração de inconstitucionalidade das leis no sistema difuso: os modos brasileiro, português e japonês: *Estudo sobre o direito constitucional contemporâneo*. Ives Gandra da Silva Martins, Carlos Valder do Nascimento e Dircêo Torrecillas Ramos, Ilhéus-Bahia, Editora da UESC, 2014.

その他(メディア出演)

1. 読売新聞, 2014 年 9 月
2. TV 大阪, 2014 年 5 月

島村 直幸

著 書

1. 島村直幸:現代アメリカ合衆国政治外交と国際秩序の変容. アメリカ観の変遷 下. 杉田米行編. 岡山. 大学教育出版, 2014 年.
2. 島村直幸:中間選挙とアメリカ外交(1-4). 2014 年 アメリカの中間選挙. 東京財団「現代アメリカ」研究プロジェクト. 東京. 東京財団, 2015 年.
3. 島村直幸:国際システムそのものを俯瞰する. 国際関係の論点—グローバル・ガバナンスの視点から. 馬田啓一・小野田欣也・西孝編著. 東京. 文眞堂, 2015 年.

進邦 徹夫

論 文

1. 進邦徹夫:東京都八王子市における持続可能なコミュニティ創出の試み. 第 76 回全国都市問題会議文献集, 2015 年 10 月.

著 書

1. 進邦徹夫:コミュニティにおける「参加」と「協働」～次世代の参加につなげて～. 都市自治体とコミュニティの協働による地域運営をめざして—協議会型住民自治組織による地域づくり—. 東京. 公益財団法人日本都市センター, 2015 年. 10-36.

高坂 宏一

論 文

1. 高坂宏一:インドネシア・スダ農村の変貌[巻頭言]. 民族衛生 81:43-44, 2015 年 3 月.

著 書

1. 高坂宏一:第 1 章 衛生学・公衆衛生学の意義 衛生学・公衆衛生学. 東洋療法学校編. 東京. 医歯薬出版. 2015 年. 1-9. (新年度用資料更新版)
2. 高坂宏一:第 12 章 保健統計 衛生学・公衆衛生学. 東洋療法学校編. 東京. 医歯薬出版. 2015 年. 227-246. (新年度用資料更新版)

知原 信良

講 演

1. 知原信良:これからの税制—消費税と法人税の話題を中心に—, フォーラム'80(一般社団法人総合研究フォーラム), 東京, 2014 年 7 月 1 日.
2. 知原信良:くらしと税金 —消費税、相続税、所得税を解き明かす—. 杏林大学公開講演会, 八王子, 2014 年 12 月 5 日.

論 文

1. 知原信良:消費税と不動産取引 租税法研究会(論究ジュリスト = Quarterly jurist) 164(10):200-204, 2014 年 8 月.
2. 知原信良:知原信良; 上西左大信, PERSON 消費税 (10%) についての諸問題. 税研 30(5):1-11, 2015 年 1 月.

著 書

1. 知原信良:第 12 章 金融取引税(トービン税)の課題. 国際関係の論点—グローバル・ガバナンスの視点から—. 馬田啓一・小野田欣也・西孝編著. 東京. 文眞堂, 2015 年. 137-150.

西 孝

著 書

1. 西孝:アベノミクスと通貨戦争の虚実. 馬田啓一, 木村福成編著:通商政策の論点—世界貿易の潮流を読む—. 東京. 文眞堂, 2014 年. 125-137.
2. 馬田啓一, 小野田欣也, 西孝編:国際関係の論点—グローバル・ガバナンスの視点から—. 東京. 文眞堂, 2015 年.

橋本雄太郎

講 演

1. 橋本雄太郎:新任消防長研修:訴訟問題. 消防大学校, 調布, 2014 年 4 月 17 日, 5 月 22 日.
2. 橋本雄太郎:救急現場学セミナー in 秋田. 橋本救急法務研究所, 秋田, 2014 年 6 月 21 日.
3. 橋本雄太郎:救急現場学セミナー in 首都圏. 橋本救急法務研究所, 東京, 2014 年 7 月 12 日.
4. 橋本雄太郎:救急活動をめぐる喫緊の法律問題. 取手地域 MC 協議会, 取手, 2014 年 8 月 7 日.
5. 橋本雄太郎, 野口宏:拡大 2 行為. 新日本法規出版セミナー, 名古屋, 2014 年 8 月 30 日.
6. 橋本雄太郎:消防活動と危機管理. 頼と絆の会, 桶川, 2014 年 9 月 7 日.
7. 橋本雄太郎:処置範囲拡大をめぐる法律問題. 秋田県 MC 協議会, 秋田, 2014 年 9 月 13 日.
8. 橋本雄太郎:救急科:救急訴訟問題. 消防大学校, 調布, 2014 年 9 月 25 日.
9. 橋本雄太郎:救急現場学セミナー in 大阪. 橋本救急法務研究所, 大阪, 2014 年 9 月 28 日.
10. 橋本雄太郎:終末期医療を法律学の視点から考えてみよう ①～⑤. いちよう塾, 八王子, 2014 年 10 月 2, 9, 16, 23, 30 日.
11. 橋本雄太郎:救急活動をめぐる法律問題, 福井, 2014 年 10 月 18 日.
12. 橋本雄太郎:救急活動をめぐる喫緊の法律問題. 中河内地域消防本部, 大阪, 2014 年 10 月 21 日.
13. 橋本雄太郎:救急医療をめぐる法律問題. 江東区救急業務連絡会, 東京, 2014 年 10 月 23 日.
14. 橋本雄太郎:救急活動をめぐる喫緊の法律問題. 鹿児島県救急救命士会, 鹿児島, 2014 年 11 月 8 日.
15. 橋本雄太郎:救急医療をめぐる法律問題. 救急医療財団救急医実地修練研修, 東京, 2014 年 11 月 17 日.
16. 橋本雄太郎:消防行政をめぐる訴訟事案. 全国消防長会関東支部大会, 2014 年 11 月 19 日.
17. 橋本雄太郎:救急活動をめぐる法律問題. 東京消防庁第方面本部研修, 東京, 2014 年 11 月 28 日.
18. 橋本雄太郎:救急活動をめぐる法律問題. 三重県 MC 協議会, 三重, 2014 年 12 月 6 日.
19. 橋本雄太郎:救急活動現場学セミナー in 茨城. 橋本救急法務

研究所, つくば, 2014 年 12 月 13 日.

20. 橋本雄太郎:救急医と薬物事案. 日本中毒学会東日本大会, 大宮, 2015 年 1 月 10 日.
21. 橋本雄太郎:救急救命士の処置範囲拡大に関する法律学の視点からの考察. 総務省消防庁全国救急隊員シンポジウム, 相模原, 2015 年 1 月 29 日.
22. 橋本雄太郎:救急活動をめぐる喫緊の法律問題. 千葉市消防局, 千葉, 2015 年 2 月 13 日.
23. 橋本雄太郎:消防活動をめぐる訴訟事案. 藤沢市消防局, 藤沢, 2015 年 2 月 16 日.
24. 橋本雄太郎:消防活動をめぐる法律問題. 印西市消防本部, 印西, 2015 年 2 月 19 日.
25. 橋本雄太郎:処置範囲拡大及び通信指令をめぐる法律問題. 茨城県医師研修, 茨城, 2015 年 3 月 15 日.
26. 橋本雄太郎:救急活動をめぐる喫緊の法律問題. 阪神地域MC協議会, 西宮市, 2015 年 3 月 17, 18 日.

論文

1. 橋本雄太郎:救急救命士の処置範囲拡大(ショックへの輸液・ブドウ糖投与)に関する法律学の視点からの留意点. 消防研修 97:29-35, 2015 年 3 月.
2. 橋本雄太郎:続・救急活動をめぐる法律問題 43~48(連載).ブレピタルケア 27(2)-28(1), 2014 年 4 月-2015 年 2 月.

著書

1. 橋本雄太郎編著:救急活動の法律相談 追録6.名古屋. 新日本法規出版, 2014 年.
2. 橋本雄太郎編著:救急活動の法律相談 追録7.名古屋. 新日本法規出版, 2015 年

その他(学会等および社会における主な活動)

1. (論考掲載)チーム・デンケン. 法苑 174:1-3. 名古屋. 新日本法規出版, 2015 年.

半田 英俊

論文

1. 半田英俊 : 井上財政の終焉. 杏林社会科学研究 30:29-47, 2015 年 3 月.

藤原 究

論文

1. 藤原究:宗教団体の公益性と公益活動. 早稲田大学社会安全政策研究所紀要 6:29-47, 2014 年 6 月.

マルコム・ヘンリフィールド

講演

1. Field, M.H. : The Quest for Creating Institutional Value, Leadership and Management in Higher Education for Sustainable Development. SEAMEO Retrac & RMIT International Conference, Ho Chi Minh City, Viet Nam, 24-25th July, 2014.

論文

1. Field, M.H.: Developing Health & Welfare by Digital Literacy Narratives, Kyorin University Social Science Research Association Journal 30(1):25-50, 2014 年 6 月.

その他(学会等および社会における主な活動)

1. Instructor, Institute of Educational Managers, Ministry of Education and Training, Ho Chi Minh City, Viet Nam, Workshop, CT and Organisational Cultures, 18-20th December 2014.
2. Instructor(with Dr. Ian Frank), Workshop, Employment of Education, Experience Global Resource, held at Hakodate

Future University Satellite Office, Akihabara, 25th January 2014.

三浦 秀之

論文

1. Hideyuki Miura:TPP & RCEP: US-China Competitive Regional Integration & Japan. Japan Spotlight 18-19, May/June 2014.
2. 三浦秀之:アジア太平洋地域経済統合の枠組みをめぐる米中の競争. 杏林社会科学研究 30(4). 2015 年 3 月.

著書

1. 三浦秀之:TPP と RCEP:米中の相克と日本. 通商戦略の論点:世界貿易の潮流を読む.馬田啓一・木村福成編.東京. 文眞堂, 2014 年.
2. 三浦秀之:農産物貿易自由化をめぐる政策決定過程の変遷—自民党政権下の変化に注目して—. 国際関係の論点—グローバル・ガバナンスの視点から—. 馬田啓一, 小野田欣也, 西孝編著. 東京. 文眞堂, 2015 年.

劉 迪

講演

1. 劉迪:中国にとって日本とは何か. 日本吉林大学校友会, 長春, 2014 年 4 月 12 日.
2. 劉迪:日中関係の可能性. 西東京日中友好協会, 西東京, 2014 年 4 月 19 日.
3. 劉迪:21 世紀日本共同体主義の崛起. 吉林大学東北亜研究院, 長春, 2014 年 6 月 20 日.
4. 劉迪:中日関係の現状と展望. 黒龍江大学, 哈爾濱, 2014 年 6 月 23 日.
5. 劉迪:日中関係の過去、現在と未来. 全日本中国人博士協会, 2014 年 12 月 20 日.

論文

1. 劉迪:中日信任外交(2014 年 7 月『外交觀察』(広東中観発展研究院主催, 社会科学文献出版社)転載). 21 世紀商業評論, 2014 年 4 月.
2. 劉迪:為何“華二代”成績傲人. 日本新華僑報, 2014 年 4 月.
3. 劉迪:中日民間外交與信任. 日本新華僑報, 2014 年 4 月.
4. 劉迪:中国需要創造“複雜外交”模式. 新民週刊, 2014 年 4 月.
5. 劉迪:悠久的鐘聲. 日本新華僑報, 2014 年 5 月.
6. 劉迪:不妨開展對日“地方外交”. 新民週刊, 2014 年 5 月.
7. 劉迪:亞共体は超越中日衝突的方式. 中文導報, 2014 年 5 月.
8. 劉迪:渡辺淳一の回憶. 日本新華僑報, 2014 年 5 月.
9. 劉迪:亞洲, 將是一個整體. 日本新華僑報, 2014 年 5 月.
10. 劉迪:當兩個國家不友好後. 日本新華僑報, 2014 年 6 月.
11. 劉迪:怎樣面對東亞民族主義?. 新民週刊, 2014 年 6 月.
12. 劉迪:政治的周期問題與結構方法, 日本新華僑報, 2014 年 6 月.
13. 劉迪:近代日本中國觀與認知模式. 日本新華僑報, 2014 年 6 月.
14. 劉迪:為何仍要負笈日本?. 新民週刊, 2014 年 7 月.
15. 劉迪:應該畢業了的“速成班”. 日本新華僑報, 2014 年 7 月.
16. 劉迪:中日關係中的美國因素. 日本新華僑報, 2014 年 7 月.
17. 劉迪:如何拿捏政黨與個人的關係?. 日本新華僑報, 2014 年 7 月.
18. 劉迪:為何中方“冷淡”日本民主黨?. 新民週刊, 2014 年 7 月.
19. 劉迪:強拆報亭是無知和傲慢. 環球時報, 2014 年 8 月.
20. 劉迪:眼睛只盯着中日高層,或有錯覺. 環球時報, 2014 年 10 月.
21. 劉迪:日本考研, 外語并非絕對條件. 新民週刊, 2014 年 11 月.

22. 劉迪: 高倉健與中日關係的“蜜月期”. 環球時報, 2014 年 11 月.
23. 劉迪: 卸任大使後的丹羽宇一郎. 新民週刊, 2014 年 12 月.
24. 劉迪: 日本応留意公祭日的和平宣示. 環球時報, 2014 年 12 月.
25. 劉迪: “新亞洲主義”能否新年崛起?. 新民週刊, 2015 年 1 月.
26. 劉迪: 加強民族認同絲毫不能放鬆. 環球時報, 2015 年 3 月.

著 書

1. 劉迪: 21 世紀中日關係轉變的結構要因. 日本學研究記念文集. 陳百海編. 東京. 黒龍江大学出版社, 2014 年.
2. 劉迪: 中国外交戰略の変容—「周辺外交」の意味を問い直す—. 国際關係の論点—グローバル・ガバナンスの視点から—. 馬田啓一, 小野田欣也, 西孝編著. 東京. 文眞堂, 2015 年.
3. 劉迪: 現代中国の中央と地方關係. 現代中国政治概論. 熊達雲, 毛桂榮, 王元, 劉迪編著. 東京. 明石書店, 2015 年.
4. 劉迪: 中国政治におけるシンクタンク. 現代中国政治概論. 熊達雲, 毛桂榮, 王元, 劉迪編著. 東京. 明石書店, 2015 年.

その他 (学会等および社会における主な活動)

1. 中日關係のために促進する留学生と市民の交流. 在日中国人の 33 人のそれでも私たちが日本を好きな理由. 趙海成著. 東京. CCC メディアハウス, 2015 年 3 月.

渡 辺 剛

講 演

1. 渡辺剛: 超低支持率政権下の台湾情勢. 内閣府中国研究会, 東京, 2014 年 5 月 19 日.

論 文

1. 渡辺剛: 信用失った一国二制度—民主化デモは台湾に飛び火. エコノミスト 92(46):14, 2014 年 10 月.

その他 (団体役員)

1. 内閣府中国研究会研究委員.
2. 公益法人交流協会奨学金審査委員.

糟 谷 崇

論 文

1. 糟谷 崇: ビッグデータとマネジメント. 杏林社会科学 研究 30(2):39-52. 2014 年 9 月.
2. 糟谷 崇: 高等教育の質的転換と学習法. 杏林社会科学 研究 30(3):17-33. 2014 年 12 月.

加 藤 拓

講 演

1. Taku Kato: How Should Service Retailers Develop Store Networks?—Case Study for Japanese School and Education Service—. 2014 Global Marketing Conference at Singapore, Marina Bay Sands, July 2014.

論 文

1. Taku Kato: Should Service Retailers Expand Store Networks Nationally?—Case Study of Cramming School Business in Japan—. International Review of Management and Business Research (IRMBR) :376-385 ,(Accepted).

木 村 有 里

論 文

1. 木村有里: タイ 2014 年クーデターに関する一考察—タイ社会における人間の価値の問題—. 地域文化研究 16:130-153, 2015 年 3 月.

著 書

1. 木村有里: グローバリゼーションと経営の多様性—「働くこと」の

再考—. 国際關係の論点—グローバル・ガバナンスの視点から—. 馬田啓一, 小野田欣也, 西孝編著. 東京. 文眞堂, 2015 年. 127-136.

田 中 信 弘

講 演

1. 田中弘: CSR 国際規格と日本企業の対応—非財務情報開示と企業実践. 日本経営学会関東部会シンポジウム(『CSR の新課題への対応—非財務情報開示と企業実践』), 東京, 2014 年 12 月.
2. 田中弘: ソフトローとしての CSR 国際規格の有効性—ISO26000 による情報開示とエンゲージメント. 日本経営学会関東部会報告, 千葉, 2014 年 5 月

著 書

1. 田中弘: EU におけるコーポレート・ガバナンス—『遵守か説明か』原則を中心に. 国際關係の論点—グローバル・ガバナンスの視点から—. 馬田啓一, 小野田欣也, 西孝編著. 東京. 文眞堂, 2015 年.
2. 田中弘: 三方よしのための CSR 報告. 三方よしに学ぶ, 人に好かれる会社. 水尾順一・田中宏司編. 滋賀. サンライズ出版, 2015 年.

その他 (メディア出演)

1. (新聞掲載) 産経新聞. 大和信金 犯罪率連動の定期預金 実益兼ね, 専門家も注目. 2014 年 4 月 24 日.

その他 (学会等および社会における主な活動)

1. (社会活動) 日本マネジメント学会関東部会コメンテーター, 2014 年 5 月.
2. (社会活動) 日本経営学会全国大会自由論題報告司会, 2014 年 9 月.

その他 (団体役員)

1. 日本経営学会幹事
2. 財政改革検討委員会委員
3. 日本マネジメント学会理事

原 田 奈 々 子

特許等知的財産関係, 報告書等

1. 原田奈々子: 近世日本の簿記法—三井越後屋呉服店の決算構造と特徴—. 慶應義塾大学三田商学会特別報告, 2015 年 3 月 19 日.

外国語学部

稲垣 大輔

その他(教育活動上特記すべき事項)

1. (他大学出講)英語実習1W・英語実習2LR. 横浜国立大学.
2. (他大学出講)英語学概論. 明治学院大学.

木崎 英司

講 演

1. Eiji Kizaki, Shinya Fujino: Formation of a new business entity and Hospitality Management: Through the case of practical use of automatic operation automobile. International Conference on Business Management 2014, ゴールドコースト, 2014年8月28日.

論 文

1. Eiji Kizaki, Shinya Fujino: Formation of a New Business Entity in the Context of Modern Hospitality Management: A Consideration of the Role of Fiduciary in a Context of Organizational Integration. Journal of Management Science 5:51-61, 2014年12月.
2. 木崎英司: 日本の航空会社における顧客満足度向上の方向性—適正な顧客接点人材確保の観点から—. 杏林大学外国語学部紀要 27:87-97, 2015年3月.

その他(学会等および社会における主な活動)

1. (講師)ホスピタリティマネジメント. 第10回スポーツクラブマネジャー養成(資格認定)講習会, 東京, 2014年7月19日.

その他(教育活動上特記すべき事項)

1. (他大学出講)ビジネススキルズ・ホスピタリティ演習. 相模女子大学.
2. (他大学出講)観光ビジネスプロジェクト. 立教大学.

黒田 有子

論 文

1. 黒田有子:メルヴィルと墓碑銘. 杏林大学研究報告教養部門 32:113-121, 2015年2月.

小山 三郎

論 文

1. 小山三郎:台湾現代文学史年表—1949年から79年まで 試論一. 杏林大学外国語学部紀要 27:279-374, 2015年3月.

齋藤 智志

講 演

1. 齋藤智志:普遍性と多元性の出会う場所——ショーペンハウアーにおける全体表象とプラトンのイデー. 日本学術振興会学術研究助成基金助成金(基盤研究)「普遍主義と多元主義の相互検討——ショーペンハウアーとニーチェを中心に」第3回研究会, 東京, 2014年8月25日.
2. 齋藤智志:ディルタイの先導者としてのシュライアーマッハー. 日本ディルタイ協会 2015年度大会, 東京, 2014年12月6日.
3. 齋藤智志:認識における普遍性と多元性——理性・歴史・パースペクティヴィズム, 日本学術振興会学術研究助成基金助成金(基盤研究)「普遍主義と多元主義の相互検討——ショーペンハウアーとニーチェを中心に」第4回研究会, 京都, 2015年3月2日.

論 文

1. 齋藤智志:道徳授業カリキュラム編成における原理的諸題. 杏林

大学研究報告教養部門 32:9-18, 2015年2月.

2. 齋藤智志:普遍性と多元性の出会う場所——ショーペンハウアーにおける全体表象とプラトンのイデー. 杏林大学外国語学部紀要 27:31-43, 2015年3月.
3. 齋藤智志:道徳授業教材作成に際して学生が抱えている課題は何か——教職実践演習での実例分析に基づいて. 杏林大学教職課程年報 創刊号:17-26, 2015年3月.

著 書

1. 齋藤智志, 森田孝, 麻生建, 藺田坦, 竹田純郎 編集・校閲:ディルタイ全集 第9巻:シュライアーマッハーの生涯(上). 東京. 法政大学出版局, 2014年7月.

特許等知的財産関係, 報告書等

1. (実践報告) 齋藤智志:教職実践演習一年目の成果と課題. 杏林大学教職課程年報 創刊号:53-62, 2015年3月.

その他(団体役員)

1. 日本ショーペンハウアー協会(理事・協会誌編集委員)
2. 日本ディルタイ協会(理事・協会誌編集委員)
3. 実存思想協会(幹事)
4. 三鷹市社会教育委員会(委員)

その他(教育活動上特記すべき事項)

1. (他大学出講)教育の歴史. 日本大学理工学部.
2. (他大学出講)近代・現代哲学史 2. 立正大学文学部.

坂本 ロビン

講 演

1. Robin Sakamoto:Pre-Service Lesson Study as a means for Professional Development—Report on Macro Demo Teaching in the Philippines. 日本比較教育学会第50回大会, 名古屋, 2014年7月13日.
2. Robin Sakamoto:Transforming Practice through Pre-Service Recognition. 第26回日米教員養成協議会年次大会, 東京, 2014年9月20日.
3. Robin Sakamoto:Investing in Higher Education, Research and Development for Technological Upgrading, Innovation, and Competitiveness. Joint ERIA-ASEC Project on Framing the ASEAN Socio-Cultural Community Post 2015, ジャカルタ, 2015年1月17日.

論 文

1. Robin Sakamoto:Exploring Paths towards a “Global Village” through Intercultural Moral Text Comprehension Research. Journal of Intercultural Communication 17: 15-30, 2014年5月.
2. Robin Sakamoto, Yumiko Ono:Transforming Practice through Pre-service Recognition: An Innovative Use of Lesson Study in the Philippines. NUE Journal of International Educational Cooperation 8:9-16, 2014年11月.

著 書

1. Robin Sakamoto:Global Citizenship in the 21st Century:The Contribution of a Hybrid Generation. People without Borders: Becoming Members of Global Communities. Xiao-lei Wang and Ronan Bernas (eds). New York. Untested Ideas Research Center, 2014年. 43-58.

その他(団体役員)

1. Association of International Education Administrators (AIEA) (編集委員)

詹 満江

講 演

1. 詹満江:新井白石の漢詩—『陶情詩集』を読む—。全国漢文教育学会第30回漢文教育研修会, 東京, 2014年8月22日。

論 文

1. 詹満江:大沼枕山江戸時代末期の詠史詩について。杏林大学外国語学部紀要 27:1-10, 2015年3月。

その他(教育活動上特記すべき事項)

1. (他大学出講)中国文学研究Ⅰ・Ⅱ。慶應義塾大学大学院文学研究科。
2. (他大学出講)中国語基礎級。慶應義塾外国語学校。

高木 眞佐子

講 演

1. Masako Takagi : A Retrograde Text as Manifestation of Authenticity? in the symposium entitled “Does Spelling Matter in Pre-Standardised Middle English?”. 30th Congress of the Japan Society for Medieval English Studies, Kyoto, 6 December 2014.

論 文

1. 高木眞佐子:英語による地域活動情報の動画発信の実施とその教育方法に関する研究。平成26年度杏林大学杏林CCRC研究所紀要:196-201, 平成27年3月。

その他(学会等および社会における主な活動)

1. (通訳)杏林大学—御岳山地域交流イベント「天空芸者ナイト」。御岳山特設ステージ・宿坊麻知家, 2014年9月17日, 11月14日, 12月9日。
2. (表彰)平成26年度科学研究費第1段審査(書面審査)委員。
3. (主催)日本中世英語英文学会第14回研究助成セミナー“‘Word by Word / and Letter by Letter’: the Close Reading of Scribal Texts”(講師 Daniel Wakelin)。東京, 2014年11月27-28日。
4. (講演会開催)日本中世英語英文学会 Daniel Wakelin 講演会“Scribes, Readers and Page Design in Late Medieval England”。東京, 2014年12月2日。
5. (外部委員)日本政府観光局(JNTO)。東京, 2014年12月7日。

玉村 禎郎

講 演

1. 玉村禎郎:比喩の種類と働き。龍谷大学 REC, 京都, 2014年5月12日。
2. 玉村禎郎:字訓の世界。八王子市学園都市大学, 八王子, 2014年5月14日。
3. 玉村禎郎:(学会基調講演)日本語の特徴—中国語・韓国朝鮮語・英語・仏語などとの比較対照を軸にして—。台湾應用日語學會 日語教學國際學術研討會—多元・創新・再造—, 台湾, 2014年5月24日。
4. 玉村禎郎:社会と言語文化—位相と言葉—。NHK文化講座, 2014年6月7日。
5. 玉村禎郎:歌における比喩表現。龍谷大学 REC, 京都, 2014年6月16日。
6. 玉村禎郎:社会と言語文化—中央と地方—。NHK文化講座, 2014年7月5日。
7. 玉村禎郎:音声・音韻と文字・表記。八王子市学園都市大学, 八王子, 2014年7月10日。

8. 玉村禎郎:京ことば京文化—言葉と表現—。NHK文化講座, 2014年11月1日。
9. 玉村禎郎:コミュニケーションと比喩。八王子市学園都市大学, 八王子, 2014年11月27日。
10. 玉村禎郎:京ことば京文化—生活と行事—。NHK文化講座, 2014年12月6日。
11. 玉村禎郎:日本語における漢語。八王子市学園都市大学, 八王子, 2015年1月7日。
12. 玉村禎郎:(体系性)から見た日本語。立命館大学大学院学術講演会, 京都, 2015年3月14日。

著 書

1. 玉村禎郎:日本語大事典 上・下。佐藤武義・前田富祺他編。東京。朝倉書店, 2014年。

その他(学会等および社会における主な活動)

1. (研究分担者)仏教写本の文献学的研究。龍谷大学仏教文化研究所。
2. (集中講義)國立高雄第一科技大學大学院。台湾, 2014年5月。
3. (集中講義)北京日本学研究所センター大学院。中国, 2014年9月。
4. (審査委員)八王子地域23大学等留学生日本語弁論大会(大学コンソーシアム八王子主催。八王子市学園都市推進会議主管。八王子市・八王子市教育委員会後援)。八王子, 2014年11月。

その他(団体役員)

1. (財)新村出記念財団(評議員 2014年4月-2015年3月)

遠山 菊夫

論 文

1. 遠山菊夫:コミュニケーション以前:古英語・中英語話者による相互行為(1)—『ベーオウルフ』および『ガウェイン卿と緑の騎士』における会話の原則—。杏林大学外国語学部紀要 27:45-86, 2015年3月。

長谷川 弘子

論 文

1. 長谷川弘子:ベッティーネとゲーテ—1806年から1807年—。杏林大学研究報告教養部門 32:133-143, 2015年2月。

柳田 義男

その他(学会等および社会における主な活動)

1. (講師)ホテル経営概論。厚生労働省規格ホテル業職業能力検定試験資格取得必修講義, 東京, 2015年1月24日。

上野 景文

講 演

1. 上野景文:パチカンから見た世界。うらやす市民講座, 浦安, 2013年1月11日。
2. 上野景文:パチカンの聖と俗(パチカンを通して世界を見る)。水霜談話会, 東京, 2013年1月24日。
3. 上野景文:パチカンの聖と俗——日本大使の一四〇〇日。経済同友会・産業懇談会, 東京, 2013年2月13日。
4. 上野景文:パチカンを通して見た西洋。東京芸術大学, 東京, 2013年7月11日。
5. 上野景文:パチカンの聖と俗——日本大使の一四〇〇日。経済同友会・産業懇談会, 東京, 2013年9月17日。
6. 上野景文:パチカンから見た世界。早稲田大学/エクステンション

センター, 東京, 2013 年 10 月 16 日.

7. 上野景文: 西欧文明の真髄とは. 杏林大学公開講座, 八王子, 2013 年 10 月 17 日.
8. 上野景文: パチカンの聖と俗——日本大使の一四〇〇日. 経済同友会・産業懇談会, 東京, 2013 年 10 月 25 日.
9. 上野景文: 混迷を深める世界を読む(エジプト, シリヤから中国, 北朝鮮まで). 水沢日本外交協会, 奥州, 2013 年 10 月 26 日.
10. 上野景文: 大使の素顔. 杏林大学学生塾, 八王子, 2013 年 11 月 15 日.
11. 上野景文: パチカンから見た欧州. 学習院女子大学, 東京, 2013 年 11 月 28 日.
12. 上野景文: パチカンを通じてみた西欧, 米国. カトリック医師会東京支部, 東京, 2014 年 1 月 19 日.
13. 上野景文: 日欧比較文化論. うらやす市民大学, 浦安, 2014 年 1 月 30 日.
14. 上野景文: 外交官時代を振り返る. 西武学園文理中学校, 狭山, 2014 年 2 月 28 日.
15. 上野景文: パチカンを通じて見た西欧. 和敬塾・塾友会, 東京, 2014 年 4 月 19 日.
16. 上野景文: 教養学科での修行の持つ意味. リベラルアーツ 21, 東京, 2014 年 4 月 25 日.
17. 上野景文: パチカンを通して見た西欧文明の本質. 早大エクステンションセンター, 東京, 2014 年 6 月 24 日.
18. 上野景文: パチカンの聖と俗——日本大使の一四〇〇日. 経済同友会・産業懇談会・第 3 水曜 GR, 東京, 2014 年 7 月 10 日.
19. 上野景文: 平和構築における宗教の役割. 平和政策研究所・研究部会, 東京, 2014 年 8 月 1 日.
20. 上野景文: パチカンを通して見た西欧の真髄. イグナチオ教会・真和会, 東京, 2014 年 10 月 15 日.
21. 上野景文: パチカンを通して見た西欧, 米国. 早大エクステンションセンター, 東京, 2014 年 10 月 22 日.
22. 上野景文: 文明論から見た西欧. 平成 26 年度杏林大学公開講座, 八王子, 2014 年 10 月 30 日.
23. 上野景文: 『混沌の時代』を紐解く. 平和政策研究所・平和政策フォーラム, 東京, 2014 年 11 月 8 日.
24. 上野景文: 西欧文明の本質を考える. うらやす市民講座, 浦安, 2014 年 12 月 12 日.
25. 上野景文: パチカンから見た西欧. 聖心女子大学・特別講演会, 東京, 2015 年 1 月 6 日.
26. 上野景文: パチカンから見たアジア, 仏教. 国際日本文化研究センター・国際研究集会, 京都, 2015 年 1 月 21 日.
27. 上野景文: パチカンを通して見た西欧の真髄. 国際ロータリークラブ第 2600 地区会員セミナー, 松本, 2015 年 2 月 14 日.

論文

1. Kagefumi Ueno: “Japan-Vatican, like-minded powers”. *Rivista di Studi Politici Internazionali*(伊国際政治学会誌) 323:474-476. 2014 年

特許等知的財産関係, 報告書等

1. (報告書) 上野景文(富山市文化デザイン懇話会座長): 富山市文化デザイン懇話会報告書. 2015 年 3 月.

その他(メディア出演)

1. (放送) 東海ラジオ. 夕焼けナビ(ローマ法王, パチカンについて解説). 2013 年 2 月 13-15 日.

2. (放送) TBS ラジオ. ニュース探究ラジオ DIG の「世界一受けたいカトリック講座」(ローマ法王, パチカンについて解説). 2013 年 2 月 13 日.
3. (放送) NHKBS1. ワールド WAVE モーニングの「世界の扉」コーナー(ローマ法王退位とパチカンの将来像につき解説). 2013 年 2 月 25 日.
4. (放送) NHK 総合1. おはよう日本(ローマ法王退位とパチカン将来像に関しコメント). 2013 年 3 月 1 日.
5. (発言掲載) 信濃毎日・京都・佐賀新聞. ローマ法王退位と今後の見通しに関する発言(共同配信)を掲載. 2013 年 3 月 1 日.
6. (放送) 読売テレビ. 情報ライブミヤネ屋(ローマ法王選出, コンクラーベにつき解説). 2013 年 3 月 13 日.
7. (放送) NTV. ニュース every(コンクラーベ, パチカンの抱える問題について解説). 2013 年 3 月 13 日.
8. (放送) TBS. ニュース23X(コンクラーベ, パチカンのかかえる問題について解説). 2013 年 3 月 13 日.
9. (放送) TBS. みのもんたの朝ズバッ! (コンクラーベ, パチカンのかかえる問題について解説). 2013 年 3 月 14 日.
10. (放送) 「くに来るジャパン:新ローマ法王フランシスコ」, 文化放送, 2013 年 4 月 1 日
11. (論考掲載) 小さなカミ, 大きな神. 明治神宮『神園』第 9 号. 2013 年 5 月 3 日.
12. (論考掲載) 新ローマ法王フランシスコの船出. 『霞関会 HP』時事コラム. 2013 年 5 月 9 日.
13. (論考掲載) 新法王, パチカンに新風. 毎日新聞. 2013 年 5 月 16 日.
14. (論考掲載) “Winds of Change Blowing Over the Vatican”. ESUJ. 2013 年 6 月 17 日.
15. (論考掲載) “Pope Francis is poised to make history——Will his ‘frontier culture’ prevail over Vatican tradition?”. UCANEWS. 2013 年 7 月 1 日.
16. (論考掲載) フランシスコ新法王登場の歴史的意味. 『ラテンアメリカ時報』2013 年夏号. 2013 年 7 月 25 日.
17. (論考掲載) 新法王, イエズス会流新風を吹かす. 聖三木図書館友の会々報『ゆるし』第 6 号. 2013 年 7 月 31 日.
18. (書評掲載) 西洋人の神道観(平川祐弘著). 神社新報. 2013 年 8 月 12 日.
19. (論考掲載) 新法王, イエズス会流新風を吹かす. 日本外交協会会報. 2013 年 8 月 19 日.
20. (論考掲載) オリンピック, 世界遺産に『一喜一憂』する日本. 神社新報. 2013 年 9 月 9 日.
21. (書評掲載) J. ハインズ『宗教と開発』を読んで(宗教抜きには開発を語れない時代). 『霞関会 HP』. 2013 年 10 月 3 日.
22. (放送) テレビ朝日. モーニングバード(法王による独司教解任). 2013 年 10 月 25 日.
23. (放送) グローバルトライ:若者への言葉. 全国コミュニティFM 56 局ネット. 2013 年 11 月 2 日.
24. (放送) NHKBS1. ワールド WAVE モーニングの「世界の扉」(庶民派ローマ法王の“パチカン外交力”). 2014 年 2 月 24 日.
25. (論考掲載) 『周辺』体现の法王 カトリック現代化の決意. 読売新聞. 2014 年 1 月 20 日.
26. (論考掲載) 法王フランシスコ, 歴史に挑む. 『霞関会 HP』. 2014 年 1 月 31 日.
27. (対談掲載) 新教皇誕生の意義と変革への期待. 『世界平和研究』2014 年冬季号. 2014 年 2 月 1 日.

28. (報道)元バチカン大使が講演。テレビ埼玉。2014年2月28日。
29. (報道)日本経済新聞「春秋」欄(新法王に関する拙論に言及)。2014年3月1日。
30. (論考掲載)新法王アジアにも旋風?。ESUJ。2014年3月5日。
31. (論考掲載)“Will Pope Francis Bring the Winds of Change to Asia?”。ESUJ。2014年3月5日。
32. (論考掲載)“Will Asia feel the benefit of the pope’s wind of change?”。UCANews。2014年3月7日。
33. (報道)(外交は)言葉のボクシング——元バチカン大使 外交を語る。埼玉新聞。2014年3月10日。
34. (論考掲載)反捕鯨論を甘く見るな——神道関係者の出番到来。神社新報。2014年3月17日。
35. (論考掲載)Vatican meet as ‘like-minded’ powers。The Japan News。2014年6月21日。
36. (論考掲載)The Third Asian Voyage for Francis Will Be to Japan。chiesa espresso(伊)。2014年7月4日。
37. (解説)いま世界は。BSテレ朝。2014年8月17日。
38. (論考掲載)今日の混沌に思う——宗教、ナショナリズム、暴力が乱舞する世界。世界平和研究所・政策オピニオン。2014年9月12日。
39. (ラジオ番組出演)現代の混沌。くに来るジャパン。文化放送。2014年10月13日。
40. (論考掲載)『混沌の時代』に思う——カミ・正義が乱立し、暴力が乱舞する世界。霞関会HP(論壇)。2014年12月26日。
41. (論考掲載)『混沌の時代』を占う。日本外交協会報(OPINION)。2014年12月号。
42. (論考掲載)『表現の自由』と『宗教たたき』。讀賣新聞(文化面)。2015年2月2日。
43. (論考掲載)Free speech and the desecration of religion。The Japan News。2015年2月12日。

その他(学会等および社会における主な活動)

1. (社会活動)富山市文化デザイン懇話会座長。2014年8月11日、11月4日、2015年1月29日。

神保 真一

講演

1. 神保真一:ホスピタリティとおもてなしの心。生田東高等学校出張講義。川崎。2015年3月19日。

ピーター ジェイ マクミラン

講演

1. ピーター ジェイ マクミラン:伊勢物語 恋愛百景。株式会社グローバル ユース ビューロー。東京。2014年5月20日。
2. ピーター ジェイ マクミラン:富士文学 霊峰百景。株式会社グローバル ユース ビューロー。東京。2014年7月1日。
3. ピーター ジェイ マクミラン:百人一首 悠久の日本文化百景を世界に。株式会社グローバル ユース ビューロー。東京。2014年11月25日。
4. ピーター ジェイ マクミラン:詩の翻訳について。龍谷大学。京都。2014年11月14日。
5. ピーター ジェイ マクミラン:琵琶湖ビエンナーレ シンポジウム 未来へのパースペクティブ。まちや倶楽部会場。滋賀。2014年10月25日。
6. ピーター ジェイ マクミラン:新・富嶽三十六景と日本文化の素晴らしさ。宗像リーダー塾。福岡。2015年1月11日。

著書

1. ピーター ジェイ マクミラン:We Are Tomodachi Spring/Summer。マクミランオフィス翻訳・監修。東京。2014年。
2. ピーター ジェイ マクミラン:We Are Tomodachi Summer。マクミランオフィス翻訳・監修。東京。2014年。
3. ピーター ジェイ マクミラン:We Are Tomodachi Autumn。マクミランオフィス翻訳・監修。東京。2014年。
4. ピーター ジェイ マクミラン:We Are Tomodachi Womenomics Edition。マクミランオフィス翻訳・監修。東京。2014年。
5. ピーター ジェイ マクミラン:We Are Tomodachi Winter。マクミランオフィス翻訳・監修。東京。2014年。
6. ピーター ジェイ マクミラン:We Are Tomodachi Disaster Prevention Edition。マクミランオフィス翻訳・監修。東京。2015年。
7. ピーター ジェイ マクミラン:We Are Tomodachi Spring 2015。マクミランオフィス翻訳・監修。東京。2015年。

その他(学会等および社会における主な活動)

1. (展示)ピーター ジェイ マクミラン展示会:日本橋三越。東京。2014年5月。
2. (展示)ピーター ジェイ マクミラン展示会:伊勢丹新宿。東京。2014年7月。
3. (展示)ピーター ジェイ マクミラン展示会:ANA インターコンチネンタルホテル。東京。2014年8月。
4. (展示)琵琶湖ビエンナーレ展示出展:滋賀。2014年10月。
5. (出演)NHK 短歌出演:NHK。東京。2014年10月5日。
6. (展示)富士のイメージ 日本の伝統と現代—展示出展:東洋大学。東京。2014年11月。

荒川 みどり

論文

1. 荒川みどり:大出正篤著『効果的速成式標準日本語読本』にみる中国東北部の成人日本語学習者像。杏林大学外国語学部紀要 27:255-267。2015年3月。

その他(教育内容・方法の工夫)

1. (研究代表者)杏林大学学内教育 GP「国内での多文化体験交流の促進」

嵐 洋子

講演

1. 嵐洋子ほか:日本語教育における音声教育について日本語教師が考えていること—音声教育の目標・具体的内容・困難点・改善希望の分析から—。2014年度日本語教育学会春季大会。東京。2014年6月1日。
2. 嵐洋子ほか:「地域社会により順応するための方言教材」の開発。2014年度日本語教育学会春季大会。東京。2014年6月1日。
3. 嵐洋子:日本語母語話者及び非母語話者の文内部における丁寧表現の運用の実態—「YNU 書き言葉コーパス」を用いて—。東京言語学コロキウム第16回研究会。東京。2014年6月22日。
4. 嵐洋子:日本語の音声 I, II。現職教員特別参加制度(日系)技術補完研修(全2回)(海外日系人協会主催)。横浜。2014年6月。
5. 嵐洋子ほか:学習者の習熟度測定に関する定量的分析:タスク別書き言葉コーパスの分析。京都言語学コロキウム。京都。2014年9月27日。
6. 嵐洋子ほか:日本語作文の熟達度を評価する指標の抽出—「タス

ク別書き言葉コーパス」を使って、第 25 回第二言語習得研究会 (JASLA), 筑波, 2014 年 12 月 14 日。

7. 嵐洋子: 口頭表現と音声 1~3. 日系継承教育研修教師育成 II (全 3 回) (海外日系人協会主催), 横浜, 2015 年 1 月~2013 年 2 月。

著 書

1. 嵐洋子ほか: 日本語母語話者と非母語話者によるタスク別の YNU 書き言葉コーパス. 金澤裕之(編). 東京. ひつじ書房. 2014 年 3 月。

その他(教育内容・方法の工夫)

1. (研究分担者) 杏林大学学内教育 GP「英語教育と日本語教育を結ぶ教育実践の試み」(研究代表者: 嵐洋子)

その他(教育活動上特記すべき事項)

1. テキサス A&M 大学訪問(2014 年 3 月 6 日~10 日)

井手 拓郎

講 演

1. 井手拓郎: 羽村市東口商店会ヒアリングプロジェクトファシリテーション. 羽村, 2014 年 8 月 1~2 日。
2. 井手拓郎: 羽村市東口商店会・杏林大学ダイアログワークショップファシリテーション. 羽村, 2014 年 10 月 26 日。
3. 井手拓郎: 地域活動ははじめの一步. 羽村市市民活動講座, 羽村, 2014 年 11 月 30 日。

その他(教育活動上特記すべき事項)

1. (他大学出講) ウェルネス福祉演習. 立教大学コミュニティ福祉学部。

宇佐美 貴浩

その他(学会等および社会における主な活動)

1. (企画・運営) 写真供養感謝祭. 神奈川県鎌倉市浄智寺. 2014 年 11 月 8 日。

倉林 秀男

論 文

1. 倉林秀男: アメリカの文学作品を教育にどう活かすか---その方法論を巡って---. 杏林大学研究報告教養部門 32: 75-87, 2015 年 2 月。
2. 倉林秀男: ヘミングウェイ作品にみられる曖昧性について---“The Sea Change”と“Hills Like White Elephants”を中心に---. 杏林大学外国語学部紀要 27: 171-182, 2015 年 3 月。

その他(教育内容・方法の工夫)

1. (研究分担者) 杏林大学学内教育 GP「英語教育と日本語教育を結ぶ教育実践の試み」(研究代表者: 嵐洋子)

その他(教育活動上特記すべき事項)

1. (他大学出講) 19 世紀のアメリカ文学・英語文献購読. 桜美林大学リベラルアーツ学群。
2. (他大学出講) Grammar for TOEFL and TOEIC・E-learning. 獨協大学外国語学部。

千野 万里子

講 演

1. 千野万里子: はじめて学ぶ中国語. 駒込高等学校出張講義, 東京, 2014 年 12 月 16 日。

論 文

1. 千野万里子: 現代中国語に見られる近世中国語の影響(6)一進

行・持続表現を中心に一. 杏林大学外国語学部紀要 27: 99-119, 2015 年 3 月。

鄭 英淑

講 演

1. 鄭英淑: ことばを通してみる日韓社会. 地球ことば村・世界言語博物館ことばのサロン 1 月例会, 東京, 2015 年 1 月 31 日。

著 書

1. 鄭英淑: ‘観光’ということばをめぐる. 還流する東アジアの近代新語訳語. 沈国威, 内田慶市編. 大阪. 関西大学校アジア文化研究センター, 2014 年. 139-154.
2. 鄭英淑: 어휘 (語彙). 한국인을 위한 알기 쉬운 현대일본어학(韓国人のための分かりやすい日本語学). 집編. 韓国. 人文社. 2014 年. 109-113.

野口 洋平

講 演

1. (講師) 東京の観光, 東京の交通. 東京シティガイド検定対策講座, 東京, 2014 年 10 月 26 日。
2. (講師) 東京の観光, 東京の交通. 東京シティガイド検定対策講座, 東京, 2014 年 11 月 3 日。

論 文

1. 野口洋平: ゼミナール教育と学外活動との相乗効果. 観光ホスピタリティ教育 第 8 号(日本観光ホスピタリティ教育学会): 117-120, 2015 年 3 月。
2. 野口洋平: パッケージツアーをめぐる競争と差別化の焦点. 観光ホスピタリティ教育 第 8 号(日本観光ホスピタリティ教育学会): 3-21, 2015 年 3 月。

その他(教育活動上特記すべき事項)

1. (他大学出講) 観光調査・研究入門. 立教大学観光学部。
2. (他大学出講) ホスピタリティ論. 法政大学現代福祉学部。

張 弘(宮首 弘子)

講 演

1. 張弘(宮首弘子): 中国語圏で活躍するトライリンガルの育成ー中国語学科の取り組みー. 杏林大学外国語学部第 55 回アカデミア「日中英トライリンガルの育成」, 八王子, 2014 年 6 月 18 日。
2. 張弘(宮首弘子): 中国語圏で活躍するグローバル人材を目指しましょう. 橋本高等学校出張講義, 相模原, 2014 年 7 月 17 日。
3. 張弘(宮首弘子): 中国語っておもしろい? . 所沢西高等学校出張講義, 所沢, 2014 年 11 月 6 日。
4. 張弘(宮首弘子): 一番学びやすい外国語ー中国語. 城郷高等学校出張講義, 横浜, 2014 年 11 月 27 日。
5. 張弘(宮首弘子): ことばを通してみる日中関係. 地球ことば村世界言語博物館ことばのサロン 2 月例会, 東京, 2015 年 2 月 21 日。
6. 張弘(宮首弘子): 中国語圏で活躍するグローバル人材の育成ー中国語学科の取り組みー. 杏林大学第 5 回グローバルシンポジウム「世界への架け橋となるグローバル人材の育成」, 東京, 2015 年 3 月 14 日。

論 文

1. 張弘(宮首弘子): 医療通訳者の主体的な判断についてー機能主義翻訳理論の観点からー. 杏林大学外国語学部紀要 27: 121-155, 2015 年 3 月。

著 書

1. 張弘(宮首弘子):こつこつ勉強する「コツ」の勧め. サイマル・アカデミーブログ. 2014 年 8 月 22 日公開.

その他(学会等および社会における主な活動)

1. (講義) 中文エクササイズと経済関連インタビューの中訳演習①. 外務省, 東京, 2014 年 10 月 22 日.
2. (講義) 中文エクササイズと政治関連インタビューの中訳演習①. 外務省, 東京, 2014 年 10 月 29 日.
3. (講義) 中文エクササイズと政治関連インタビューの中訳演習②. 外務省, 東京, 2014 年 11 月 5 日.
4. (講義) 中文エクササイズと経済関連記事の中訳演習②. 外務省, 東京, 2014 年 11 月 12 日.
5. (講義) 中文エクササイズと政治家インタビューの中訳演習①. 外務省, 東京, 2014 年 11 月 20 日.
6. (講義) 医療通訳者の通訳技法について. MIC かながわの医療通訳現任者研修, 横浜, 2014 年 12 月 6 日.
7. (講義) 中文エクササイズと政治家インタビューの中訳演習②. 外務省, 東京, 2015 年 1 月 7 日.
8. (講義) 中文エクササイズと日中関係に関するインタビューの中訳演習①. 外務省, 東京, 2015 年 1 月 28 日.
9. (講義) 中文エクササイズと日中関係に関するインタビューの中訳演習②. 外務省, 東京, 2015 年 2 月 4 日.
10. (通訳) ビジネス会議通訳. リクルート, 東京, 2015 年 2 月 6 日.

八木橋 宏男

講 演

1. 八木橋宏男: 申請調書と中間評価調書から見る杏林大学のグローバル人材育成. 杏林大学外国語学部第 55 回アカデミア「日中英トライリンガル」の育成, 八王子, 2014 年 6 月 18 日.
2. 高木眞佐子・八木橋宏男: 杏林大学×文部科学省一世界で活躍するスマートでタフな日中英トライリンガル人材の育成一. 北越高等学校出張講義, 東京, 2014 年 10 月 23 日.
3. 八木橋宏男: ジブリ映画字幕翻訳から学ぶ異文化間コミュニケーション. 平成 26 年度杏林大学公開講演会, 三鷹, 2014 年 11 月 23 日.
4. 八木橋宏男: 言語研究の視点—イデオロミに満ちた日常世界. いちよう塾「言語学の世界」, 八王子, 2014 年 12 月 4 日.
5. 八木橋宏男: ジブリ映画字幕翻訳から学ぶ異文化間コミュニケーション. 松が谷高等学校出張講義, 八王子, 2014 年 12 月 24 日.
6. 八木橋宏男: 英語と日本語の違いを考える—「する」型言語と「ある」型言語. 大成高等学校出張講義, 三鷹, 2015 年 3 月 4 日.
7. 八木橋宏男: 英語学習「脱丸暗記」計画—認知言語学が教えてくれる英文法・英熟語へのアプローチ. 若葉総合高等学校出張講義, 稲城, 2015 年 3 月 17 日.

論 文

1. 八木橋宏男: 英語科教員養成における対話型事例シナリオを活用した PBL 教育. 杏林大学教職課程年報 創刊号: 27-34. 2015 年 3 月.

特許等知的財産関係, 報告書等

1. (報告) 地域交流委員会(太田ひろみ・石井博之・八木橋宏男・千田晋治): 杏林大学の地域貢献活動の在り方. 平成 26 年度杏林大学杏林 CCRC 研究所紀要: 53-62, 2015 年 3 月.

その他(学会等および社会における主な活動)

1. (企画・運営) 拘束する言語と開放する言語: 言語の弾性と創造

性の獲得(慶應義塾大学名誉教授・唐須教光先生特別講演会). 東京, 2014 年 6 月 14 日.

2. (運営) 日本文体論学会第 105 回大会. 三鷹, 2014 年 6 月 28-29 日.
3. (企画) 日本文体論学会第 105 回大会研究フォーラム「太宰治と作品の文体」. 三鷹, 2014 年 6 月 29 日.
4. (運営) 認知言語学セミナー. 横浜, 2014 年 9 月 19 日.
5. (運営) 日本認知言語学会第 15 回全国大会. 横浜, 2014 年 9 月 20-21 日.
6. (企画・運営) ことばを通してみる日韓社会. 地球ことば村・世界言語博物館ことばのサロン 1 月例会, 東京, 2015 年 1 月 31 日.
7. (企画・運営) 世界のことばと文化. MIFA 交流フェスティバル(目黒区国際交流協会主催), 東京, 2015 年 2 月 8 日.
8. (企画・運営) ことばを通してみる日中関係. 地球ことば村世界言語博物館ことばのサロン 2 月例会, 東京, 2015 年 2 月 21 日.

その他(教育内容・方法の工夫)

1. (共同研究者) 博報堂財団・児童教育実践についての研究助成事業「用法依存理論に基づく小学校英語教育の学習モデル構築」(研究代表者: 菅井三実)
2. (事業責任者) 杏林大学地域交流推進室地域交流活動支援事業「小学校英語教育と中学校英語教育のスムーズな接続を目指して」

その他(団体役員)

1. 日本認知言語学会(理事・事務局代表)
2. 社会言語科学会(広報委員)
3. 日本文体論学会(運営委員)
4. NPO 法人地球ことば村世界言語博物館(理事・企画検討委員会委員長・電子出版部編集長)
5. 独立行政法人国際観光振興機構(日本政府観光局)外部委員

その他(教育活動上特記すべき事項)

1. (他大学出講) 英語学演習 IX・X (認知言語学). 慶應義塾大学文学部.
2. (他大学出講) 英語 I. 慶應義塾大学法学部.
3. (他大学出講) 英語ライティング 7. 慶應義塾大学通信教育部.

赤嶺 恵理

講 演

1. 赤嶺恵理: CLIL 研修報告会. 第 9 回グローバルセミナー, 八王子, 2014 年 7 月 16 日.

その他(団体役員)

1. ボルノ被害と性暴力を考える会(運営委員)

北村 一真

論 文

1. Kazuma Kitamura: On a Special Type of What-is-it-about cleft. 杏林大学外国語学部紀要 27: 205-232, 2015 年 3 月.

その他(教育活動上特記すべき事項)

1. (他大学出講) 英語 I・II. 慶應義塾大学文学部.
2. (他大学出講) 英語 Regular Reading・英語 C. 中央大学法学部.

藤田 由香利

講 演

1. 藤田由香利: はじめよう中国語～世界に通じるグローバル人材を目指そう～. 小平南高等学校出張講義, 小平, 2014 年 7 月.
2. 藤田由香利: はじめよう中国語～世界に通じるグローバル人材を

目指そう。 拝島高等学校出張講義, 昭島, 2015 年 3 月。

論文

1. 藤田由香利:通訳訓練法を用いた中国語のリスニング力向上のための一考察—シャドウイングとクイック・レスポンスの導入—. 杏林大学外国語学部紀要 27:155-170, 2015 年 3 月。

出嶋 靖志

講演

1. 橘田和幸, 出嶋靖志, 出嶋優華:癌の死亡率と、TFR・母乳育児率・初産年齢との関係—先進国と途上国および、男女の比較。第 84 回日本衛生学会学術総会, 岡山, 2014 年 5 月 25-27 日。
2. 橘田和幸, 出嶋靖志, 出嶋優華, 鳥尾克二:観光資源の評価における健康関連項目について。第 79 回日本民族衛生学会総会, 筑波, 2014 年 11 月 21-22 日。
3. 清水君恵, 出嶋靖志, 出嶋優華, 大木紫:目隠し・耳栓の装着および室内環境が安静時の瞳孔観察によるストレスに及ぼす効果—心拍変動のスペクトル解析を用いた評価—。第 79 回日本民族衛生学会総会, 筑波, 2014 年 11 月 21-22 日。

論文

1. 出嶋靖志:観光における環境と健康の関わり—航空機客室の空気環境と健康影響— (Interaction between health and environment in the field of tourism -health and air pollution in the airliner cabins). 航空環境研究 18:60-66, 2014 年。

著書

1. 出嶋靖志:第 4 章環境と健康. 衛生学・公衆衛生学第 2 版第 11 刷. 鈴木庄亮, 高坂宏一, 出嶋靖志, 笹澤吉明共著. 東洋療法学校協会編. 東京, 医歯薬出版, 2014 年. 71-128.
2. 出嶋靖志:第 10 章消毒法. 衛生学・公衆衛生学第 2 版第 11 刷. 鈴木庄亮, 高坂宏一, 出嶋靖志, 笹澤吉明共著. 東洋療法学校協会編. 東京, 医歯薬出版, 2014 年. 201-216.
3. 出嶋靖志:ダブルベース HIYAMA ノート〜シマンドル習得のために〜. 檜山ノート出版委員会編. 東京, ドレミ出版, 2014 年。

その他(団体役員)

1. 成田国際空港航空機騒音健康影響調査委員 (2013 年-継続)

CCRC研究所

杏林CCRC研究所

講 演

1. 松井孝太: 米国における「労働権 (right-to-work)」をめぐる法と政治: 運動・普及・帰結. 日本比較政治学会第17回大会, 東京, 2014年6月28日.

論 文

1. 蒲生忍: 少子高齢社会における医療倫理. 杏林CCRC研究所紀要 1:5-17, 2015.
2. 松井孝太: 米国における継続的ケア付高齢者コミュニティ (CCRC) の現状と課題. 杏林CCRC研究所紀要 1:18-35, 2015.
3. Momose Y, Aimi Y, Hirayama T, Kataoka M, Ono M, Yoshino H, Sato T, Gamo S: *De novo* mutations in the BMPR2 gene in patients with heritable pulmonary arterial hypertension. Ann Human Genet 79(2):85-91, 2015.
4. 相見祐輝: 大学知の公開: 公開講演会を通しての課題と方向性. 杏林CCRC研究所紀要 1:36-43, 2015.
5. 相見祐輝, 松井孝太: 地 (知) の拠点整備事業共催平成26年度杏林大学公開講演会報告. 杏林CCRC研究所紀要 1:99-124, 2015.
6. 松井孝太, 相見祐輝: 第1回～第13回杏林CCRC研究所セミナー報告. 杏林CCRC研究所紀要 1:126-142, 2015.

著 書

1. 蒲生忍: 特集「杏林大学と地域医療」. 杏林医学会雑誌 45巻3号 (2014) - 46巻1号 (2015) 編集.
2. 蒲生忍: 「平成26年度 杏林大学杏林CCRC研究所紀要」編集発行. 2015.

その他

1. 蒲生忍: (報告) 米国カリフォルニア州の日系米人及び在米邦人社会の高齢者施設調査. 杏林CCRC研究所紀要 Vol.1:83-91, 2015.
2. 蒲生忍: (地域志向教育研究費報告) 生活習慣病の遺伝的背景に関する研究 - 高齢者ネット社会でのDTC検査の問題点. 杏林CCRC研究所紀要 Vol.1:167-170, 2015.
3. 蒲生忍: (地域志向教育研究費報告) 三鷹市での医療情報ネットワーク構築に向けた問題点と検討課題の整理. 杏林CCRC研究所紀要 Vol.1:202-205, 2015.

共同研究

目 次

①医学部

1. プロバイオティクスによる下部消化管手術後の感染予防効果の検討	173
2. マイコプラズマ感染症と糖転移酵素発現の検討	174
3. 重症薬疹におけるヘルペスウィルスの関与の解明	175
4. かゆみを伝える末梢感覚神経の同定と機能解析	176
5. 自閉性障害患者の <i>syntaxin1A</i> 、 <i>1B</i> 遺伝子解析と臨床病態との関連性の検討	177
6. 肺高血圧症における代謝・炎症解析	179
7. 放射線被ばくや放射性核種による汚染を伴う外傷・熱傷の基礎診断と治療研究	180
8. 染色体異常のある子どもの保育 ―心疾患の影響―	181
9. 透析液を用いた藻類バイオマスの生産・利用に関する研究	183
10. 呼気ガス分析装置を用いた、慢性腎臓病 CKD 症例のエネルギー代謝に関する研究	184
11. 慢性腎臓病のエピジェネティック異常の解明	185
12. ヒト胎児頭蓋の形成過程―CT 画像による経時的解析と免疫組織学的観察	186
13. 角質水分量および発汗の炎症性皮膚疾患発症への関与を明らかにする	187
14. <i>JAK2</i> 遺伝子異常をもつ先天異常症候群の発症メカニズムの解明	188
15. <i>ELKS</i> ノックアウトマウス、及び妊娠マウスを用いたインスリン開口放出機構の解明	189
16. 脂肪組織由来間質細胞を用いた難治性肺動脈性肺高血圧症治療の安全性および有効性に対する研究	190
17. 剖検例を用いた冠動脈プラークの平滑筋の免疫組織化学的検討	192
18. 血管新生研究のための <i>in vitro</i> 血管ネットワークモデルの開発	193
19. 経頭蓋磁気刺激による治療抵抗性うつ病治療と治療反応性の予測因子に関する研究	194
20. 腎がん臨床サンプルを用いたメタボローム解析	196
21. 前立腺癌患者を対象としたワイヤレス制御マイクロ流路チップ・セルソーターを用いた循環がん細胞の臨床応用評価	197
22. アリールスルファターゼの機能と VI 型ムコ多糖症への関与 ― 組織化学的研究	199
23. グライコプロテオミクスによる糖尿病及び関連合併症マーカーの探索	201
24. ショウジョウバエにおける種間浸透	202
25. Na^+/K^+ -ATPase 分子の新たな機能制御機構の探究	203
26. カイコ Na^+/K^+ -ATPase β 鎖の機能	205
27. 不死化子宮内膜症細胞における ROS 生産能およびジェノゲストの影響	206
28. 消化管癌の幹細胞制御転写ネットワークの解明と大腸癌治療への応用	207
29. アミノ酸トランスポーターLAT1 慢性阻害モデルの作出と解析	208
30. 左右両循環系（心室、動脈）血行力学の情報論的解析	209
31. 高齢ドライバおよび軽度認知症ドライバにおける安全運転支援の評価方法に関する共同研究	210
32. セツキシマブの局所浸潤・遠隔転移の抑制効果についての検討	211
33. 先天性内分泌疾患のメダカモデルの作製と解析	212
34. 心不全、心肥大の慢性病態の分子制御機構の病理組織学的解明	213

目 次

②保健学部

35. 子宮頸部における新しいハイリスク型ヒト乳頭腫ウイルスの再考	217
36. LC-MS/MS による免疫抑制剤の定量法の開発	218
37. 重度心身障害児の治療的乗馬に用いる座位保持装置付き鞍の開発	219
38. 脳障害患者などに関わる腹壁筋低緊張と姿勢障害の病態解明	221
39. 糖尿病における運動神経障害の病態生理	222
40. デジタル角度計（プロトタイプ）の信頼性と操作性に関する研究	224

③総合政策学部

41. 北タイにおける HIV 陽性者への保健医療福祉サービス提供のあり方に関する研究	227
42. 女性農民工の権利保護制度及びその実施に関する研究	229

④医学研究科

43. Pregnancy-associated malaria の病態に関わる新たな宿主因子の探索	233
44. ローデントマラリア原虫のマラリア薬剤耐性遺伝子の同定	234
45. <i>Helicobacter pylori</i> 感染経路の解明のための家族分離菌株の遺伝子タイピング	235
46. 上皮細胞における尿酸の paracellular 輸送	236
47. 腸管神経系異常腸炎発症モデルマウスにおける腸内細菌叢の役割解析	237
48. オクタアルギニンによる高尿酸血症治療ペプチドの細胞内送達	239
49. 百日咳菌Ⅲ型分泌機構の臨床分離株における発現	240
50. マラリア防御免疫におけるミトコンドリア活性酸素関連性	242
51. 蛋白間相互作用阻害化合物による癌治療開発	243

①医学部

1. プロバイオティクスによる下部消化管手術後の感染予防効果の検討

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
小林 敬明	医学部総合医療学	助教	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
正木 忠彦	医学部外科学	教授	総括
松岡 弘芳	医学部外科学	准教授	データ処理
朝原 崇	ヤクルト本社中央研究所	主任研究員	便・細菌類の検査

キーワード

プロバイオティクス、下部消化管手術、SSI

研究分野

基礎研究

1. 共同研究の目的

下部消化管手術は、他消化管手術よりも術後に創感染をはじめとする SSI (surgical site infection) が高率に発生し、患者の術後 QOL を著しく低下させている。よってプロバイオティクスによる SSI 予防効果を検討することを本研究の目的とし、副次的検査項目としての便の変化(細菌および有機酸など)をヤクルト中研究所により解析して頂くことが共同研究の目的である。目標症例数 70 症例に対して、現在登録数は 18 例である。今後も該当患者の登録数の増加に努める。

2. 共同研究の内容・計画

直腸癌手術、もしくは人工肛門閉鎖術予定患者を対象とし、服用有り群、服用無し群の 2 群に分け、服用有り群患者には手術前 7 日間、及び手術翌日から 7 日間乳酸菌飲料(ヤクルト 65R)服用して頂く。術後の SSI 発生率、および便・血液検査の変化を比較検討する。

3. 研究成果(経過)

目標症例数 70 症例に対して、現在登録数は 18 例である。今後も該当患者の登録数の増加に努める。

2. マイコプラズマ感染症と糖転移酵素発現の検討

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
塩原 哲夫	医学部皮膚科学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
水川 良子	医学部皮膚科学	准教授	皮膚局在での発現の検討
高橋 良	医学部皮膚科学	学内講師	末梢血を用いた検討
古谷 安希子	協和発酵キリン株式会社	主任研究員	糖転移酵素抗体作成

キーワード

マイコプラズマ感染、糖転移酵素、ホーミング、制御性 T 細胞

研究分野

免疫学

1. 共同研究の目的

マイコプラズマ感染症は、様々な皮膚疾患の発症に関与している可能性が示唆されている。炎症局所には炎症を惹起する effector 細胞と炎症を抑制する regulatory T 細胞 (Treg) の相互関係が重要な役割を果たしている。マイコプラズマ感染が Treg の機能を抑制していることが昨年度の本研究において明らかになった。そこで本年度の本研究では、どのような機序にマイコプラズマ感染が Treg の機能を抑制するのか、糖転移酵素への影響はあるのかを明らかにする。

2. 共同研究の内容・計画

我々は各種皮膚疾患の末梢血を経時的に採取し、組織検体も適宜採取している。経時的に採取しているマイコプラズマ感染症のある皮膚疾患患者末梢血を用いて、Treg の機能の抑制をサイトカイン産生能や糖転移酵素の発現を含めた皮膚局所への遊走能を検討する。

3. 研究成果（経過）

重症薬疹の悪化因子の一つであるマイコプラズマ(MP)感染症が引き起こす免疫学的な変容の機序を明らかにすることを目的として検討を行ってきた。昨年度までの本研究で MP 感染では長期にわたり抑制性の機能を有する regulatory T 細胞(Treg)の機能が低下していることを明らかにした。そこで本年度は、MP 感染が Treg の機能を抑制する機序と糖転移酵素のかかわりを明らかにしようと考えた。

今年度の検討において、

- ①MP では機能を有する Treg(iTreg)の割合が低下していた。
- ②MP 感染では、TLR4 ではなく TLR2 を介した単球からの IL-6 の産生が著明に増加していた。
- ③単球からの IL-6 を抗体により抑制することで、iTreg の回復が認められた。

以上の結果は、MP により単球が刺激されることにより産生される IL-6 が機能的な iTreg を減少させることを示している。単球はフコース糖転移酵素により皮膚へのホーミングレセプターを発現することが知られており、今後、サイトカインによる糖転移酵素の発現が Treg に関与するかを検討する予定である。

3. 重症薬疹におけるヘルペスウィルスの関与の解明

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
塩原 哲夫	医学部皮膚科学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
小原 道法	東京都医学総合研究所	室長	In-situ PCR、PCR
水川 良子	医学部皮膚科学	准教授	In-situ PCR、免疫組織染色など

キーワード

ヘルペスウィルス、再活性化、薬剤アレルギー、PILR、単球

研究分野

皮膚免疫学

1. 共同研究の目的

我々は以前より、抗痙攣剤などによって生じる重症薬疹（薬剤過敏症症候群: DIHS）ではその発症にヘルペスウィルス(HHV-6)の再活性化が関与していることを明らかにしてきた。DIHS では、免疫反応を抑制する抑制性の T 細胞(regulatory T cell; Treg)が急性期に増加していることを我々は明らかにしているが、この Treg と単純ヘルペス (HSV) を認識するレセプターとして注目されている PILR の単球での発現に相関がある可能性が示唆されている。そこで、本年度は Treg と PILR の相互関係を検討する。

2. 共同研究の内容・計画

炎症を抑制する Treg の数の増減や機能の低下は炎症を抑制するうえで主要な反応を担っている。我々の予備実験においてこの Treg と PILR 陽性の単球に相関関係がある可能性が示唆されており、DIHS の急性期、回復期の末梢血検体を用いて両者の発現を経時的に検討する。さらに Treg は数のみでなく、機能の検討や分画の検討も行う予定にしている。これらにより、HSV が重症薬疹にどのように関わっているのかを明らかにしたいと考えている。

3. 研究成果（経過）

抗痙攣剤などによって生じる重症薬疹（薬剤過敏症症候群: DIHS）ではその発症にヘルペスウィルス(HHV-6)の再活性化が関与していることが知られている。さらに DIHS では、免疫反応を制御する抑制性の T 細胞(regulatory T cell; Treg)が急性期に増加している。Treg の発現には単球からのサイトカインが重要であることを我々は明らかにしているが、単球には単純ヘルペス (HSV) を認識する PILR (paired immunoglobulin-like type 2 receptor)が発現しており、単球へのヘルペスウィルス感染が Treg の発現をコントロールしている可能性が示唆されている。そこで、本年度は Treg と単球、PILR の相互関係を検討する。

本年度の研究で、

①単球分画のうち、HSV 感染に関与する PILR の発現は、proinflammatory monocyte (pMOs)に一致していた。

②DIHS 急性期では、PILR 陽性 pMOs は末梢血中から減少し、回復期には健常コントロールと同程度に回復していた。Stevens-Johnson 症候群や TEN ではその発現に有意な変動は認められなかった。

③急性期 DIHS での pMOs 減少は病変部皮膚への浸潤によるものと考えたが、病変部組織には PILR 陽性細胞の浸潤は認められなかった。

④pMOs と Treg は負の相関を示した。

以上の結果から、DIHS ではヘルペスウィルス感染による pMOs の減少が Treg の変動に関与していると考えられた。

4. かゆみを伝える末梢感覚神経の同定と機能解析

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
八木 淳一	医学部統合生理学	准教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
小林 靖	防衛医科大学校解剖学	教授	神経細胞の免疫組織学的解析

キーワード

皮膚感覚、掻痒、後根神経節ニューロン、パッチクランプ、起痒物質

研究分野

神経科学

1. 共同研究の目的

様々な疾患に付随して堪え難い「かゆみ」が起こる場合がある。一方、体性感覚情報の受容を司る後根神経節（DRG）ニューロンは、様々な刺激に反応できるよう多種多様に分化しているが、このうち「かゆみ」を伝える DRG ニューロンは未だに同定されていない。本研究は、まず電気生理学的解析から「かゆみ」を伝える末梢感覚神経を同定し、さらに免疫組織学的な解析を合わせて「かゆみ」の受容機構を明らかにすることを目的とする。

2. 共同研究の内容・計画

独自に開発した「麻酔下全動物標本によるパッチクランプ法」を用い、ラットの後足にかゆみ誘発物質を注入して、かゆみを人工的に誘発した状態で、DRG ニューロンからパッチクランプ記録を行う。これまで、かゆみ誘発物質クロロキンをラットに注入してかゆみを人工的に誘発させ、侵害受容性ニューロンの一部が興奮することを見出した。今後、防衛医科大学校小林靖教授との共同研究では、かゆみ受容体の候補である **Mrgpr** ファミリーの各種サブタイプの発現パターンを免疫染色法にて検討し、かゆみ治療のターゲットと成り得るかゆみ関連受容体の発見を目指す。

3. 研究成果（経過）

多様な感覚種を伝える脊髄後根神経節ニューロン（DRG ニューロン）の電気生理学的性質を独自に開発した「麻酔下全動物標本によるパッチクランプ法」を用いて解析し、熱受容・侵害受容性 DRG ニューロン（**Type I** と **Type II**）の一部が、かゆみ誘発物質クロロキンの皮内投与により興奮することを見出した。クロロキンは、低濃度では **MrgprA3** 受容体を介して **TRP** チャネルを活性化してかゆみを起こす一方、高濃度では電位依存型チャネルの活性化を修飾し、逆にかゆみを伝える神経活動を抑制することが示唆された。今後、かゆみの受容機構を解明し、さらにかゆみを抑制する薬物療法の基盤づくりを目指す。

5. 自閉性障害患者の syntaxin1A、1B 遺伝子解析と臨床病態との関連性の検討

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
赤川 公朗	医学部細胞生理学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
林 優子	県立広島大学社会福祉学部	教授	患者試料採取
田丸 政男	県立広島大学社会福祉学部	名誉教授	患者試料採取
藤原 智徳	医学部細胞生理学	准教授	遺伝子発現解析
小藤 剛史	医学部 RI 部門	助教	ゲノム解析

キーワード

自閉性障害、モノアミン、シンタキシン A、遺伝子発現異常

研究分野

神経科学

1. 共同研究の目的

Syntaxin1 遺伝子群 (syl) の欠失によりマウスでは情動行動異常が誘起されることが知られている。我々は人間のアスペルガー一症候群 (ASP) 患者の一部では sylA、及びそのアイソフォームである sy1B 遺伝子の変異は無いが、血球細胞において sylA の発現量が有意に低いことを見出し、sylA の遺伝子発現調節に異常がある可能性を見出した。本研究は ASP を含む広範な自閉性障害患者 (ASD) における血液試料での sylA 遺伝子発現異常を詳細に検討して、これがその精神・神経症状の発症に関与する可能性について検討する。

2. 共同研究の内容・計画

インフォームドコンセントを得た ASD から末梢血液試料を採取し、白血球分画を得た後、mRNA 及びゲノム DNA を抽出する。この試料の遺伝子に関して定量的 PCR 法により sylAmRNA 発現量を検討する。発現異常が推定される試料について遺伝子ゲノム構造配列を読み、bisulfate 法により発現調節領域及びイントロン内の異常メチル化の有無を調べる。また血球内のヒストン脱アセチル化酵素活性や sylA 遺伝子に関与する既知の遺伝子発現調節因子群の発現量等を調べ、想定される sylA の発現異常の原因を検討する。これらの結果に基づいて sylA 遺伝子の発現制御系の異常と自閉性障害の臨床症状との関連を明らかにする。

3. 研究成果 (経過)

症状の重症度等に関わらず無作為に選んだ自閉性障害患者 (ASD) 血液試料の例数を増やして解析した結果、その約半数にシナプスや分泌系での開口放出過程の制御因子である syntaxin1A (sylA) の mRNA 発現量に異常があることが確かめられた。昨年度までに血液試料より得たゲノム解析から 69 例中 2 例に sylA 遺伝子の copy number variation (CNV 遺伝子数変異) が haploid となっていることが分かっていた。その患者家族を精査した結果、CNV は患者のみに見られる De Novo 異常であった。また唾液試料からゲノムを抽出して CNV を調べる方法を新たに確立したので研究への協力が得やすくなった。その結果、本人の協力が得やすい知的障害の比較的軽い例を多く含む ASD 群においては、ゲノム中に高い頻度で (15 例中 4 例、27%) CNV が認められた。またゲノム内で遺伝子の分断が生じている 1 例が見出された。今後、例数を増して知的障害が比較的軽度の場合、ASD の原因として sylA 遺伝子の CNV が関与する頻度が高いことを明らかにする。更に ASD の多彩な精神・神経症状 (ADHD、感

覚過敏、パニック、社会性行動異常、言語発達遅延等）の重症度と CNV との相関を精査する。

6. 肺高血圧症における代謝・炎症解析

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
佐藤 徹	医学部内科学Ⅱ	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
柳澤 亮爾	医学部内科学Ⅱ	医員	解析、統計学的処理
竹鼻 健司	味の素製薬株式会社	主任研究員	解析
今泉 明	味の素株式会社	研究員	解析

キーワード

肺高血圧症、代謝、炎症、アミノ酸

研究分野

肺高血圧症

1. 共同研究の目的

本研究は肺高血圧症に対してアミノ酸分析等の代謝解析を行い、肺血管リモデリングや低酸素環境での代謝システムを解明することを目的とする。また、得られた知見により、新規治療薬の開発や疾患バイオマーカーの発見へつなげることも目的とする。

2. 共同研究の内容・計画

心臓カテーテル検査時、血液検体（血漿・血清）を採取し、遠心分離後、 -80°C の冷凍庫へ保存する。また、必要に応じて保存血液検体より、追加検査を行う。

3. 研究成果（経過）

本研究では肺高血圧症に対してアミノ酸分析等の代謝解析を行い、肺血管リモデリングや低酸素環境での代謝システムを解明することを目的とする。本研究よりアミノ酸の統合的指標であるフィッシャー比が肺高血圧症の重症度と関連していることを解明し報告し行った。

7. 放射線被ばくや放射性核種による汚染を伴う外傷・熱傷の基礎診断と治療研究

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
山口 芳裕	医学部救急医学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
宮内 洋	医学部救急医学	助教	情報の収集、基礎研究
山田 賢治	医学部救急医学	准教授	情報の収集、基礎研究
田嶋 克史	緊急被ばく医療研究センター	被ばく医療部長	情報の収集、基礎研究

キーワード

緊急被ばく医療、放射線障害、放射線障害の治療

研究分野

緊急被ばく医療

1. 共同研究の目的

「放射線被ばくや放射性核種による汚染を伴う外傷・熱傷の診断と治療のための基礎診断と治療研究」を共同研究課題とし、「放射線障害の高度な治療法の確立」を研究目的とする。

2. 共同研究の内容・計画

通常の医療機関で経験することの少ない多発外傷や広範囲熱傷などとの比較、特に皮膚障害の実際の症例との比較や重症の各臓器不全の治療との比較を基盤に、放射線障害の治療法についての高度化にむけた、より多くの情報収集と基礎的研究を行う。

3. 研究成果（経過）

研究代表者は、「放射線障害の高度な治療法の確立」に向けて、損傷皮膚への幹細胞移植治療分野の先進研究機関に所属する仏の研究者のもとへ5月から約3カ月間に亘り教室人員を研修に派遣し、学術的交流を図り情報収集を行った。平成26年後半から大学において脂肪由来幹細胞の臨床応用のための委員会が立ち上がり、準備期間を経て平成27年度から他施設と共同の基礎研究に着手した。広域搬送ネットワークを立ち上げ、関東圏から広範囲熱傷患者の受け入れを開始した。共同研究者は、通常の医療機関で経験することの少ない重症多発外傷（Max AISが3以上又は緊急手術施行例）106例や、重症熱傷（Artzの基準に基づく）26例、重症敗血症（感染性SIRSで臓器不全、組織低灌流又は低血圧を呈する例）62例、その他の重症例の集中治療を通じて、放射線障害の治療法についての高度化にむけた、多くの情報収集を行った。広範囲熱傷に対し自家培養表皮移植を行った症例について病理所見を含めた検討を行った（平成26年度日本熱傷学会にて報告）。広範囲熱傷における手熱傷の治療について、ある程度方針を固めることが出来た（平成26年度第57回手外科学会にて報告し論文文化済み）。広範囲熱傷における同種皮膚移植、各種創傷被覆材の有用性について継続して検討を行った。

8. 染色体異常のある子どもの保育 一心疾患の影響―

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
赤木 美智男	医学部医学教育学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
宮内 洋	東京家政大学	教授	研究責任者
高木 晴良	東京医療保健大学	准教授	研究協力者
犬塚 亮	東京大学	講師	研究協力者
萩原 教文	帝京大学	講師	研究協力者
小野 博	国立成育医療センター	医長	研究協力者

キーワード

染色体異常、ダウン症候群、先天性心疾患、心臓手術

研究分野

小児科

1. 共同研究の目的

本研究は平成 23～27 年度の科学研究費（基盤研究一般 C 課題番号 23500893）を受けて行う研究[染色体異常のある子どもの保育一心疾患の影響―、研究代表者東京家政大学高野貴子]の一環としての調査である。染色体異常児の心疾患の合併（種類、重症度）、治療、転帰、死亡等に関して、大学付属病院の小児循環器専門 医にアンケート調査を行うため、本学との共同研究が必要である。同様に帝京大学医学部附属病院および東京大学医学部附属病院との共同研究も実施する。

2. 共同研究の内容・計画

- 研究協力の得られる小児循環器専門医の所属する大学付属病院の倫理委員会に本研究の申請を行い、カルテ情報閲覧の許可を得る。
- 小児循環器専門医に調査票を郵送し、記入後、返送によるアンケート調査を行う。
- 調査票の結果の統計解析を行う。
- 合併する心疾患の種類、重症度や治療方法の予後に与える影響を分析し、公表する。

研究の実施期間は本学共同研究規定では原則 3 年間であるが、科学研究費（基盤研究一般 C 課題番号 23500893）は平成 23～27 年度の 5 年間で予定されているため、上記研究期間として計画している。

3. 研究成果（経過）

染色体異常の中で症例数の多いダウン症候群患者についての調査研究を継続した。現在までに解析の終了した 4 施設の病院カルテデータと、2 地域の患者保護者アンケートデータの結果について、平成 27 年 6 月に開催される第 62 回小児保健協会学術集会において発表予定である。有効データ総数は 920 人（男 485 人、女 435 人）、その中で先天性心疾患のある男は 235 人（48%）、女 252 人（58%）であり、女の方が先天性心疾患のある割合が有意に多かった。さらに手術の有無で分けると、「手術あり」の男は 126 人（26%）、女は 157 人（36%）で、女では重症な先天性心疾患が有意に多かった。先天性心疾患の合併頻度が女に多いだ

けでなく、その中で手術が必要となるような重度の先天性心疾患の割合も女に多いことが、ダウン症候群の予後や平均寿命の性差をもたらしている可能性があると考えられた。さらに小児専門病院数は 207 人（男 108 人、女 99 人）である。それを加えた病院 5 施設（A～E）と 2 地域のアンケート（S,T）を合わせた総数は現在のところ 1127 人（男 593 人、女 534 人）となった。そのうち先天性心疾患があるのは 610 人（54%）で、男は 302 人（51%）、女は 308 人（58%）であった。平成 27 年度はこれらの詳細について解析を行う。

9. 透析液を用いた藻類バイオマスの生産・利用に関する研究

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
福岡 利仁	医学部内科学 I	学内講師	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
渡邊 信	筑波大学生命環境科学研究科	名誉教授	研究全般の助言等

キーワード

腹膜透析、血液透析、代替エネルギー、藻類、バイオマス

研究分野

医学生物学

1. 共同研究の目的

当院で得られた腹膜透析・血液透析の排液によって、藻類バイオマスをを用いて燃料・医薬品その他の有益な化学物質を抽出することをこころみる研究である。当院では穂類を培養する技術・施設がないため、共同で研究を行う。

2. 共同研究の内容・計画

当院に通院中の腹膜透析、血液透析患者より得られた排液を、筑波大学生命環境科学研究科の藻類・エネルギー拠点に搬送し、藻類の培養・バイオマスの生産に供していただく。腹膜透析液の送料と成分の分析は当院で負担し、藻類の生育、バイオマスによる化学物質の抽出にかかる費用は筑波大学で負担する。毎月通信による情報交換を行い、2 か月に 1 回程度カンファレンスを行う。

3. 研究成果（経過）

上記共同研究プロジェクトの結果、使用後の腹膜透析液の中でミドリムシ、オーランチオキトリウムなどの藻類バイオマスが透析液中の窒素、リン、カリウムを使用して良好に発育することが明らかとなった。これにより透析液中の環境負荷物質を減少させることができ、さらにこれら藻類により生産された四塩化炭素は極めて純度が高く、化粧品などへの転用や乗用車、航空などの燃料への転用の可能性が示唆された。本研究の成果により、共同研究機関である筑波大学大学院大学院生が修士論文を作成（佐藤万里：透析排水を用いた藻類培養の有効性評価）されたとともに、本共同研究の成果は特許として公開された。

特願 2012-265617、 出願日 2012 年 12 月 4 日、 公開番号特開 2014-108101

公開日 2014 年 5 月 12 日

発明の名称 透析排水を培地として使用する藻類の培養方法

10. 呼気ガス分析装置を用いた、慢性腎臓病 CKD 症例のエネルギー代謝に関する研究

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
福岡 利仁	医学部内科学 I	学内講師	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
山口 嘉和	国土舘大学体育学部	教授	呼気ガスデータの解析
永吉 英記	国土舘大学体育学部	准教授	呼気ガスデータの解析

キーワード

慢性腎臓病（CKD）、栄養、呼気ガス分析、血液透析、エネルギー代謝

研究分野

医学生物学

1. 共同研究の目的

当院の腎臓内科に通院中の患者さんに対し、呼気ガス分析で代謝測定を行うが、当院に呼気ガス分析装置を有しておらず、使用経験もない。共同研究先の国土舘大学体育学部は、運動生理の専門であり、呼気ガス分析装置と測定のノウハウをもっており、測定機器の借り入れと、実際の測定部分を依頼し、結果の解析は共同でおこなうこととした。

2. 共同研究の内容・計画

当院に通院中の保存期 CKD の症例および血液透析中の CKD 症例に対して、国土舘大学体育学部より借り受けた、呼気ガス分析装置を用いて、エネルギー代謝を測定する。装置の調整・運搬・実際の測定業務は、当科の医員と研究代表者、国土舘大学体育学部講師が行い、消耗品にかかる費用については、国土舘大学の研究費を用いて補填する。得られたデータの解析については、国土舘大学の共同研究者と当院の研究者で行う。

3. 研究成果（経過）

プレリミナリーの結果が、下記へ掲載となった。

A study of energy metabolism in patients with chronic kidney disease based on expired gas analysis. The Annual Reports of health, physical education and sport science
vol.31. 111-112, 2012

11. 慢性腎臓病のエピジェネティック異常の解明

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
櫻井 裕之	医学部薬理学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
丸茂 丈史	東京大学 先端科学技術研究センター	特任講師	メチル化の解析

キーワード

エピジェネティクス、慢性腎臓病、糖尿病性腎症

研究分野

腎臓病学

1. 共同研究の目的

慢性腎臓病は根本的な治療法がなく、進行して腎不全、透析に至ると、患者の苦痛、社会的負担の面で大きな問題となっている。研究代表者は、慢性腎臓病の成因、増悪にエピジェネティックな要因が働いており、これを明らかにすることが、新規腎臓病治療薬の開発につながると考えている。本研究では、慢性腎臓病モデル動物のエピジェネティック異常の解析を行うことを目的とする。

2. 共同研究の内容・計画

慢性腎臓病での腎臓エピジェネティック異常を各種腎障害モデルで解析する。アルブミン尿や腎臓の組織学的変化に伴ってエピジェネティック異常が生じるかどうか、経時的に検討する。DNA メチル化は、COBRA 法、パイサルファイトシーケンス法などを用いて解析し、ヒストン修飾は ChIP 法にて明らかにする。

3. 研究成果（経過）

腎臓エピジェネティック異常を糖尿病性腎症モデルマウスで解析した。DNA メチル化の異常が、糖代謝や輸送体発現を制御する転写因子の遺伝子のプロモーター領域に見つかった。また、ヒストン修飾とメチル化両方の異常が AGT 遺伝子に見つかり、これは糖尿病の治療によっても改善しなかった。糖尿病性腎症の進展にはエピジェネティック異常が関与していることが示唆された。

12. ヒト胎児頭蓋の形成過程－CT 画像による経時的解析と免疫組織学的観察

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
松村 譲児	医学部解剖学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
天野 カオリ	医学部解剖学	講師	CT 画像解析・免疫組織学的観察
三川 信之	千葉大学医学部	准教授	CT 画像解析・免疫組織学的観察

キーワード

ヒト胎児、頭蓋部発生、CT 画像、免疫組織学的観察

研究分野

形態構造・免疫組織学的研究

1. 共同研究の目的

杏林大学に所蔵されている胎児標本ならびに胎児頭蓋晒骨標本（約 1,000 例）を用い、マイクロCT 撮影装置によって精細 3 次元画像データとし、このデータをもとに、ヒト胎児頭頸部領域の発生過程における形態学的変化をコンピュータ上における計測を含めた画像解析手法によって追究、発生学研究の基礎資料とする。

また、骨格標本と同齢の胎児頭頸部組織試料を用いて免疫組織学的染色・観察も同時に行う。

2. 共同研究の内容・計画

杏林大学の胎児標本・胎児頭蓋晒骨標本を、マイクロCT 撮影装置を用いて精細画像データとし、ヒト胎児骨格発生過程における頭蓋部経時的形態変化を画像解析する。試料には、胎生 3 カ月以降の胎児骨格標本を使用する。胎生期には副鼻腔に相当する構造は認められないが、生後の上顎洞形成部位である眼窩下部領域について前後左右径の画像計測を行い、上顎洞の形成過程における経時的観察を行う。さらに胎児頭蓋縫合部領域の形成過程における形態解析と組織構造の解明を目的にマイクロ CT にて観察し、同胎齢期の胎児標本から縫合部試料を採取し、FGF など発育因子を使用し免疫組織学的観察を進行する。

3. 研究成果（経過）

本研究の一環として、胎児頭蓋顔面領域の筋群における発達・発育過程についても同時に観察を行っている。今回胎生期鰓弓筋（表情筋・咀嚼筋）の構造について成人との比較・検討することを目的に 6 カ月胎児と日本人男性 4 3－8 6 歳を使用し、横断面積 1 mm² 中の筋線維数を計測した。

胎児における頬筋・咬筋と上腕二頭筋の筋線維解析を行ったところ、成人との比較観察から加齢に従い、1 mm² 中の筋線維数は減少する傾向が認められた。全ての筋肉において加齢に伴い 1 mm² 中の筋線維数は減少していた。また減少のピークは筋肉の種類に応じて変化していた。

骨格筋における成長や加齢による変化についての報告はみられるが、鰓弓筋由来である表情筋の報告についての詳細な報告は少ない。表情筋の成長や加齢による筋線維の変化を明らかにすること、発育段階における筋線維構成を明らかにすることは筋肉の発達や筋疾患を理解する上で有意義である。この結果は論文にて報告した。（Morphometric aspects of the facial and skeletal muscles in fetuses, Int J Pediatr Otorhinolaryngol. (15)168-8,2015）

13. 角質水分量および発汗の炎症性皮膚疾患発症への関与を明らかにする

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
塩原 哲夫	医学部皮膚科学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
水川 良子	医学部皮膚科学	准教授	発汗の評価、組織検討
小松 由莉江	医学部皮膚科学	院生	水分量などの測定 評価
土肥 孝彰	マルホ株式会社	研究員	水分量など評価

キーワード

アトピー性皮膚炎、角質水分量、発汗、汗腺

研究分野

皮膚免疫学

1. 共同研究の目的

アトピー性皮膚炎（AD）では skin barrier の破綻が病態に大きな役割を果たしていることが次々と明らかにされ、遺伝的要因に加え環境要因の重要性が再認識されてきている。我々は発汗が角質水分量を左右し、その結果として skin barrier に直接的に影響を与えていることを明らかにしてきた。本研究は、AD を代表とする各種皮膚疾患における角質水分量と発汗能の障害を系統的に調べることで、今まで漠然としていた発汗の意義を炎症の側面から明らかにすることを目的としている。

2. 共同研究の内容・計画

昨年度の本研究において AD および扁平苔癬、痒疹や帯状疱疹など発汗異常が病態に関与していると臨床的に推察される疾患のうち、AD を中心として検討を行った。AD で認められる発汗低下は罹病期間に相関し皮疹悪化から 5 年以降で顕著であった。本年度は治療効果による皮疹の改善が発汗の改善と相関しているのかを検討し、発汗の低下が皮膚病変の悪化の誘因であることを証明する。さらに AD の治療に用いられるステロイドが発汗に影響を及ぼすかについても検討を加える予定にしている。これらの検討により、発汗異常が炎症性皮膚疾患の発症にどのように関わっているのかを明らかにするだけでなく、どのような治療が適切かを明らかに出来ると考えている。

3. 研究成果（経過）

昨年度の検討において、アトピー性皮膚炎(AD)では皮疹悪化から 5 年以内の急性症例で発汗滴の大きい代償性発汗が認められ、5 年以降の慢性期では代償性発汗は消失している。

本年度は様々な皮膚疾患の病態に関与していると考えられる帯状疱疹（HZ）が発汗に及ぼす影響を検討した。

検討は発症から 10 日以内の急性期とそれ以降の回復期にわけて検討を行った。

①急性期、回復期とも温熱負荷による発汗は HZ では低下し、発汗滴数、発汗径とも健常よりも低下を認めた。

②回復期では発汗滴数と痛みの指標(VAS)は逆相関関係にあった。

③アセチルコリン（Ach）負荷による発汗も、急性期慢性期とも低下していた。

④Ach レセプターの発現は病変部、非病変部とも有意な差は認められなかった。

以上の結果は、HZ は汗腺汗管に感染することにより汗腺の機能を直接的に障害する可能性が考えられた。

14. JAK2遺伝子異常をもつ先天異常症候群の発症メカニズムの解明

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
渡邊 卓	医学部臨床検査医学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
滝田 順子	東京大学医学部小児科	准教授	遺伝子の網羅的解析
大西 宏明	医学部臨床検査医学	准教授	変異遺伝子の機能解析

キーワード

JAK2、先天異常、骨髄増殖性腫瘍、スプライシング異常

研究分野

分子生物学

1. 共同研究の目的

我々は、骨髄増殖性腫瘍（MPN）に心血管系、生殖系系の先天異常を合併した先天異常症候群の兄弟例を経験し、両症例において共通の新たな JAK2 のスプライシング変異を見いだした。本症例では別の遺伝子においてもスプライシングの異常を認めており、我々は本疾患においてスプライシング機構に異常がある可能性を検討している。本研究では、東京大学と共同で、本家族に見られる DNA 異常を遺伝子の網羅的解析により明らかにし、異常が認められた遺伝子について病態との関連について検討することを目的とする。

2. 共同研究の内容・計画

- 昨年度の本研究では、我々は両症例に十数個の共通の遺伝子変異がみられることをエクソーム解析を用いて明らかにした。26 年度は上記の目的の遂行のため以下のような項目の実験を遂行する予定である。
- (1) 異常が認められた遺伝子について、細胞への導入実験等を行って JAK2 その他の遺伝子のスプライシング異常との関連について検討する。
 - (2) 候補となる異常遺伝子をマウス に導入し、患者と同様の病態が再現できるかについて検討する。

3. 研究成果（経過）

骨髄増殖性腫瘍および外性器奇形を持ち、JAK2 スプライシング変異を認める先天性症候群において、患者およびその家族の DNA について次世代シーケンサーを用いてエクソーム解析を行ったところ、原因となる遺伝子異常の候補が複数認められた。具体的には、常染色体上に座位する遺伝子 10 個、および X 染色体上に座位する遺伝子 4 個の異常が候補として挙げられた。このうち、X 染色体上に座位する GATA1 遺伝子については、過去に報告のない G221D 変異を認めた。GATA1 は先天性の貧血患者において変異が見られることが報告されており、本患者の造血器異常に関与している可能性が示唆された。この変異について、ベクターに組み込んで HeLa 細胞への遺伝子導入を行った。現在、本細胞のスプライシング異常について、スプライシングアレイによる解析を実行中である。また、同じく本患者に X 染色体に座位する DGKK 遺伝子の変異を認めた。本遺伝子の変異は尿道下裂に関与することが報告されており、本患者に認められた外性器の奇形に関与している可能性が考えられる。

15. ELKS ノックアウトマウス、及び妊娠マウスを用いたインスリン開口放出機構の解明

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
永松 信哉	医学部生化学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
今泉 美佳	医学部生化学	教授	β 細胞のイメージング解析
青柳 共太	医学部生化学	学内講師	ノックアウトマウスの生化学的解析
大塚 稔久	山梨大学医学部生化学	教授	ノックアウトマウスの作製

キーワード

インスリン、開口放出、ELKS、TIRF

研究分野

分子細胞生物学

1. 共同研究の目的

神経伝達物質の放出は、active zone と呼ばれる限定部位で行われている。ELKS は active zone 形成に関わる重要な蛋白質の 1 つであり、我々は、ELKS が β 細胞において発現、インスリン開口放出に関わっていることを発見したが、その詳細な役割は明らかではない。今回、ELKS の conditional knock out mouse を用いて、開口放出のみならず、糖尿病との関連を明らかにする。

2. 共同研究の内容・計画

我が国における糖尿病の主な成因は、インスリン分泌不全にあるが、インスリン分泌の開口放出機構、及び糖尿病における分泌障害のメカニズムの詳細は未だ解明されていない。今回の共同研究に於いては以下の事を行うことにより、インスリン開口放出のメカニズムを明らかにする。昨年の研究では、山梨大・医・生化学・大塚教授より供与された ELKS の RIP-Cre Condition knockout を用いて、インスリン分泌の TIRF 解析を行ったところ、インスリン顆粒の極性による動態変化が観られた。

本年度は、更にその詳細を検討するため、電気生理学的手法による K^{ATP} チャンネル解析、生化学的解析を行う予定である。

3. 研究成果（経過）

神経終末のアクティブゾーンに局在している ELKS は膵 β 細胞にも局在しており、インスリン開口分泌を増加させる役割を持つことを前年度までの研究で明らかにしている。今年度はその ELKS のインスリン開口分泌増強のメカニズムについて膵 β 細胞特異的 ELKS 欠損マウスを用いて研究を進めた。ELKS 欠損マウスから調製した β 細胞ではグルコースおよび KCl 刺激応答性のインスリン分泌が低下するが、この時、細胞内 Ca^{2+} 上昇反応も大きく低下していた。また、生化学実験解析により ELKS が電位依存性 Ca^{2+} チャンネルのサブユニットに選択的に結合することがわかった。

以上の結果より、ELKS は電位依存性 Ca^{2+} チャンネルに結合することで細胞内 Ca^{2+} 流入を増加させ、インスリン開口分泌を増強していることが示唆された。来年度は ELKS の電位依存性 Ca^{2+} チャンネルへの調節機構を更に検討するため、電気生理学的解析を進める予定である。

16. 脂肪組織由来間質細胞を用いた難治性肺動脈性肺高血圧症治療の安全性および有効性に対する研究

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
佐藤 徹	医学部内科学Ⅱ	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
吉野 秀朗	医学部内科学Ⅱ	教授	研究指導者
松下 健一	医学部内科学Ⅱ	講師	研究指導者
伊波 巧	医学部内科学Ⅱ	助教	研究実施者
柳津 亮爾	医学部内科学Ⅱ	医員	研究実施者
百瀬 裕一	医学部内科学Ⅱ	医員	研究実施者
上杉 陽一郎	医学部内科学Ⅱ	医員	研究実施者
大谷 伸久	自由が丘 MC クリニック	院長	研究指導者
前村 浩二	長崎大学病院循環器内科	教授	研究指導者
江口 正倫	長崎大学病院循環器内科	医員	研究実施者

キーワード

脂肪組織由来間質細胞、肺動脈性肺高血圧症

研究分野

循環器

1. 共同研究の目的

肺動脈性肺高血圧症は、肺細動脈の平滑筋細胞や内皮細胞の異常増殖により、肺細動脈が閉塞・狭窄することで肺血管抵抗が上昇する難病指定疾患である。肺血管抵抗の上昇は肺動脈圧の上昇を引き起こし、過度の右心負荷は右心不全を引き起こして、進行すると死に至る。従来は5年生存率が約30%以下とされており、近年では肺動脈を拡張する作用のある治療薬が開発されてきたことで生命予後は5年生存率で70%近くに改善しつつあるとされるものの、依然として根治は不可能であり、使用可能な治療薬を全て用いても反応不良な症例も多く、生命予後が極めて不良の難治性疾患である。

そこで、難治性疾患である肺高血圧症に対する新しい治療法開発の試みとして、幹細胞移植治療が期待されつつある。本疾患に対する幹細胞移植のヒト臨床研究は未だ行われていないものの、前臨床研究の結果およびその他の血管疾患に対する幹細胞を用いた臨床研究の結果を見ても、幹細胞移植治療が安全かつ有効である可能性が高いと考える。

本臨床研究では、幹細胞を含む間質細胞を潤沢に含み、かつ分化・増殖・遊走能やサイトカイン放出能に優れていることが報告されている脂肪組織由来間質細胞 (Adipose Derived Regenerative Cells: ADRCs) を移植治療に用いて、その安全性を評価し、有効性を検証することを目的とする。

本臨床研究は既に本学臨床疫学研究審査委員会の承諾を得て、現在厚生労働省のヒト幹細胞臨床研究審査を受ける準備を整えている状況にある。共同研究施設として新たに申請する長崎大学病院循環器内科では小動物の肺高血圧症モデルに対して、脂肪組織由来間質細胞の投与による実際の効果を既に学術集会で発表しており知見を重ねている。このため同じ研究目標を有する相互施設がこれまでの知見と、今後の課題を共有し研鑽を重ねることは本研究の臨床応用までの過程に大いに寄与するものと考えられる。

2. 共同研究の内容・計画

今回申請する肺動脈性肺高血圧症に対する ADRCs の肺動脈内注入治療では、骨髄採取と比較しても有意に低侵襲な脂肪吸引法により細胞を採取し、かつ培養工程を必要としないため、短時間でより安全に採取から移植までを行うことができ、心筋梗塞後、或は狭心症患者に対しては冠動脈投与が安全に行われ有効性も示されている。肺動脈性肺高血圧症に対する幹細胞移植療法は、海外に於いてもいまだ数例のみで、本邦では初の試みとなる。今回、本治療法の安全性と有効性を検証することにより、現在の治療法で不応性又は難治性の患者に対して生命予後を改善する画期的な治療法となる可能性が高い。

本治療実施のためには、厚生労働省のヒト幹細胞臨床研究審査を受ける必要がある。共同研究施設として新たに申請する長崎大学病院循環器内科では小動物の肺高血圧症モデルに対して、脂肪組織由来間質細胞の投与による実際の効果を既に学術集会で発表しており知見を重ねている。今後大動物での臨床試験を行い安全性の実証を得る必要があり、相互施設間での情報交換や技術提供などにより多くの実証と多角度からの安全性の評価が行われるものと考えられる。

3. 研究成果（経過）

共同研究施設である長崎大学病院循環器内科では小動物の肺高血圧症モデルに対して脂肪組織由来間質細胞の投与による実際の効果を論文化し、杏林大学医学部内科学（Ⅱ）としても学術的協力を行いながら取り組んでいる。厚生労働省のヒト幹細胞臨床研究審査会は廃止され、施設ごとの再生医療委員会で審議することとなり、新しい審査体制での認可の準備をしている。

17. 剖検例を用いた冠動脈プラークの平滑筋の免疫組織化学的検討

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
菅間 博	医学部病理学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
倉田 厚	東京医科大学分子病理学	講師	肉眼・組織形態解析
堀田 綾子	国立病院機構相模原病院	医師	免疫組織化学的解析
下山田 博明	医学部病理学	講師	超微形解析
平野 和彦	医学部病理学	助教	免疫組織化学的解析

キーワード

動脈硬化、不安定プラーク、免疫組織化学、平滑筋

研究分野

病理学

1. 共同研究の目的

急性冠症候群の発症に関与する冠動脈の不安定プラークを病理組織学的に評価し、その肥厚内膜の平滑筋の特徴を安定プラークと対比して浮き彫りにする。不安定プラークは安定プラークとは異なり、同様の冠動脈狭窄率であっても **fibrin cap** が導く **lipid core** が厚いことが知られているが、内膜剥離術検体では両者の違いが明確ではない。そこで、剖検例を用いて、プラーク内に出現する平滑筋の分化度に関して検討する。

2. 共同研究の内容・計画

杏林大学医学部病理学教室の剖検検体を用いて、東京医科大学分子病理学講座において各種平滑筋マーカーの免疫組織化学的検索を施行する。急性心筋梗塞の責任血管となる不安定プラークと考えられる冠動脈内膜肥厚部と、急性冠動脈症候群以外で死亡した剖検例の冠動脈内膜肥厚部とを対比する。前者では不安定プラークの特徴がみられ、後者では安定プラークの特徴がみられることが予測される。さらに、前者と後者の平滑筋の分化度を免疫組織化学的検索で明らかにする。平滑筋の分化に関しては、Horita A, Kurita A, et al. Int J Gynecol Pathol. 2011;30:64-70 を参照。

3. 研究成果（経過）

杏林大学医学部病理学教室および東京医科大学分子病理学講座の剖検検体を用いて、東京医科大学分子病理学講座において各種平滑筋マーカーの免疫組織化学的検索を施行した。急性心筋梗塞の責任血管となる不安定プラークと考えられる冠動脈内膜肥厚部（A 群）と、心筋梗塞の既往があるものの心筋梗塞以外で死亡した剖検例の心筋梗塞の責任血管と考えられる冠動脈内膜肥厚部（B 群）と、心筋梗塞以外で死亡した剖検例の冠動脈内膜肥厚部（C 群）とを対比した。いずれの群においても、冠動脈内膜肥厚部には α -smooth muscle 陽性の平滑筋が多く出現していた。しかしながら、**h-caldesmon** 陽性の平滑筋は、C 群に比して B 群で、また B 群に比して A 群で有意に減少していた。**h-caldesmon** は平滑筋分化の途中から陽性になると報告されていることを考えると、不安定プラークには平滑筋の未分化性が関与することが示唆された。これらの結果は、Cardiovascular Pathology 誌に掲載された。

18. 血管新生研究のための in vitro 血管ネットワークモデルの開発

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
櫻井 裕之	医学部薬理学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
末弘 淳一	医学部薬理学	助教	細胞培養、血管ネットワーク構築
松永 行子	東京大学生産技術研究所	特任講師	In vitro モデル、装置作製

キーワード

HTS 技術、末梢血管障害、腫瘍血管新生

研究分野

薬理学

1. 共同研究の目的

東京大学生産技術研究所松永行子博士が開発した三次元コラーゲンゲルマイクロ流路デバイスを発展させ、薬剤のハイスループットスクリーニング (HTS) への応用を最終目標とし、①ネットワーク上の微小血管モデルの作製、②安定化構造の構築を行う。

2. 共同研究の内容・計画

微小血管モデルを HTS に応用へ向け、以下の 2 項目について検討を行う。

1. 二次元培養、微小血管モデルによる三次元培養における透過性の検討
2. 初代マウス大動脈内皮細胞によるスプラウティング観察

血管内皮細胞を用いて、微小血管を模擬した管腔状 3 次元培養系を構築し、安定かつ機能的な血管であるかをスプラウティング、透過性を指標にして検討し、薬剤大規模スクリーニングに応用可能かどうか有効性を評価していく (1)。また、マウス初代大動脈内皮細胞を培養して本モデルに適用し、動物モデルでも応用可能か検討を行う (2)。

3. 研究成果 (経過)

平成 26 年度は以下の 2 テーマについて検討を行った。

(1) 三次元微小血管モデルにおける VEGF による内皮透過性亢進の検討

HUVEC を用いて作製した三次元微小血管モデルにおいて、VEGF 刺激下で蛍光物質が管腔内からコラーゲンゲルへ漏出する様子を共焦点レーザー顕微鏡にて観察することで内皮透過性を検討した。2MDa、70kDa の分子量を有する蛍光デキストランを用いたところ、VEGF 刺激後 20 分にて 70kDa デキストランのみ漏出の増加が確認された。一方、2MDa デキストランでは VEGF 刺激による漏出量の変化は観察されなかった。以上より、本微小血管モデルが VEGF 刺激に対し生体内と類似した応答を示すことが明らかとなった。

(2) マウス大動脈内皮細胞を用いた三次元微小血管モデルの作成

C57BL マウスから大動脈を摘出し、コラーゲナーゼにて内皮細胞の分離を行った。分離した細胞を三次元微小血管モデルに導入すると、培養後 24 時間にて管腔構造が観察され、一部にスプラウティングする様子が観察された。LIVE/DEAD 染色にて細胞の生存率を検討したところ、管内に接着する多くの細胞が生存していることが確認された。

19. 経頭蓋磁気刺激による治療抵抗性うつ病治療と治療反応性の予測因子に関する研究

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
鬼頭 伸輔	医学部精神神経科学	講師	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
野田 隆政	(独) 国立精神・神経医療研究センター	第一精神診療部 第二精神科医長	同意取得、TMS および各種検査の実施、精神科的診断面接および症状評価、解析
中込 和幸	(独) 国立精神・神経医療研究センター	TMC 臨床研究支援部部長	研究統括、各種検査の実施
樋口 輝彦	(独) 国立精神・神経医療研究センター	理事長	研究統括
山田 麻紀	(独) 国立精神・神経医療研究センター	第一精神診療部 医員	同意取得、TMS および各種検査の実施、精神科的診断面接および症状評価
竹田 和良	(独) 国立精神・神経医療研究センター	第一精神診療部 レジデント	同意取得、TMS および各種検査の実施、精神科的診断面接および症状評価
船田 大輔	(独) 国立精神・神経医療研究センター	第一精神診療部 レジデント	同意取得、TMS および各種検査の実施、精神科的診断面接および症状評価
柴岡 三智	(独) 国立精神・神経医療研究センター	第一精神診療部 レジデント	同意取得、TMS および各種検査の実施、精神科的診断面接および症状評価
大橋 文平	(独) 国立精神・神経医療研究センター	第一精神診療部 レジデント	同意取得、TMS および各種検査の実施、精神科的診断面接および症状評価
長谷川 崇	医学部精神神経科学	専攻医	同意取得、TMS および各種検査の実施、精神科的診断面接および症状評価
田巻 龍生	医学部精神神経科学	専攻医	TMS および各種検査の実施、精神科的診断面接および症状評価
古賀 良彦	医学部精神神経科学	教授	研究統括

キーワード

治療抵抗性うつ病、経頭蓋磁気刺激、high-density EEG

研究分野

うつ病の治療

1. 共同研究の目的

この研究の目的は、治療抵抗性うつ病患者を対象とし、経頭蓋磁気刺激を行い、1. 有効性・安全性の評価、2. 神経生物学的・神経生理学的・神経画像学的アプローチから治療反応性の予測因子の探索・同定を行うことである。

2. 共同研究の内容・計画

研究のデザインは、非盲検試験であり、有効性・安全性を評価する。

研究に組み入れられた患者は、4 週間の経頭蓋磁気刺激を受ける。寛解した患者は、維持療法に移行し、抗うつ薬の単剤治療を

行う。寛解しなかった患者は、さらに2週間から4週間の経頭蓋磁気刺激を受け、その内、寛解した患者は維持療法に移行し、抗うつ薬の単剤療法を行う。

研究の説明および同意取得後に、血液検査、胸部・腹部レントゲン、心電図、頭部CTあるいはMRI、脳波などの routine 検査を行う。うつ症状の評価には HAMD17, HAMD24, MADRS, CGI を使用し、week 0 から week 12 まで2週間おきに評価する。神経生物学的検査として ACTH, Cortisol, TSH, freeT3, freeT4, BDNF を week 0 から week 8 まで4週間おきに行う。神経生理学的検査として high-density EEG, PSG を week 0 から week 8 まで2週間おきに行う。神経画像学的検査項目として SPECT を week 0 から week 8 まで4週間おきに行う。頭部 MRI は50歳以上の患者さんに対して CT の代わりに実施する。

目標症例数は、60例であり、杏林大学付属病院が40例、国立精神・神経医療研究センター病院が20例である。

研究期間 平成26年4月1日～平成27年3月31日

成果発表 平成27年3月以降

3. 研究成果（経過）

学術的な成果は、各種関連学会にて口演したほか、Brain Stimulation (2014)、日本薬物脳波学会雑誌(2014)の専門誌に発表した。

現在、専門誌に投稿するため、執筆準備中である。

20. 腎がん臨床サンプルを用いたメタボローム解析

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
桶川 隆嗣	医学部泌尿器学	臨床教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
原 隆人	武田薬品工業株式会社 癌創薬ユニット	主席研究員	研究データ管理、総括
山岡 万寿夫	武田薬品工業株式会社 癌創薬ユニット	主席研究員	代謝酵素あるいは遺伝子変異の 有無
森本 恵	武田薬品工業株式会社 癌創薬ユニット	研究員	免疫不全動物への腎がん移植

キーワード

腎がん、Metabolomic 解析

研究分野

臨床研究

1. 共同研究の目的

腎癌における臨床・in vivo 実験系・in vitro 系をつなぐ薬物評価実験系の確立、および腎癌における代謝パターンの解析情報の取得。

2. 共同研究の内容・計画

- 1)腎癌の血液および腫瘍代謝パターンの解析、病理組織像、代謝酵素発現量、遺伝子変異の有無を調べ、正常組織と比較する。
- 2) 免疫不全動物に腎癌あるいは、樹立した株化細胞を生着させ、その血液および腫瘍代謝パターンの解析、病理組織像、代謝酵素発現量、遺伝子変異の有無を調べ、腎癌と比較する。
- 3) 腎癌から直接あるいは、免疫不全動物に移植した腎癌から樹立した培養細胞の代謝パターンの解析、代謝酵素発現量、遺伝子変異の有無を調べ、腎癌と比較する。
- 4)Metabolomic 解析 (Metabolon 社あるいは HMT 社に外注) および Lipidomics 解析を行う。

3. 研究成果（経過）

現在、同意を得た 15 名の患者の手術摘出した腎がんを用いて検討している。今年度末には第 1 報を報告する予定である。

21. 前立腺癌患者を対象としたワイヤレス制御マイクロ流路チップ・セルソーターを用いた循環がん細胞の臨床応用評価

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
桶川 隆嗣	医学部泌尿器学	臨床教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
小林 雅之	(株)オンチップ・バイオテクノロジー	取締役	On-chip Sort Wi-Fi の機器管理

キーワード

前立腺癌、循環がん細胞

研究分野

臨床研究

1. 共同研究の目的

株式会社オンチップ・バイオテクノロジーで開発した血中循環がん細胞測定技術である On-chip Sort の細胞分離は交換型チップ内にマイクロ流路を形成し、約 0.1 気圧以下の圧力で細胞にレーザー照射により散乱光と蛍光で目的細胞を検出する。対象を前立腺癌患者とし、検出した CTC と臨床データを比較する。

2. 共同研究の内容・計画

肘静脈より、がん細胞の同定用（採血管 4.0mL を 2 本）の採血を行ない、常温にてオンチップ・バイオテクノロジーに輸送する。癌細胞であるマーカーである抗 EpCAM 抗体と抗サイトケラチン抗体ならびに非癌細胞マーカーである抗 CD45 抗体と合わせて用いることができるフローサイトメトリー分析する。オンチップ・バイオテクノロジーにおいて、採取された血液検体にマイクロ流路チップの検出部にレーザー光を照射して、通過する細胞の大きさや色の情報を光センサーで取得する。

3. 研究成果（経過）

【目的】

末梢循環癌細胞（circulating cancer cell : CTC）クラスター（集合体）は CTC 孤立癌細胞に比較して予後に強く関与しているとの報告がある（Cell, 2014;158(5):1110.）。今回、去勢抵抗性前立腺癌（CRPC）における治療経過において CTC クラスターおよび CTC 遺伝子解析の治療効果判定を検討した。

【対象と方法】

CRPC と診断されてドセタキセル（TXT）治療前の患者 12 例と TXT 治療後の 11 例を対象にセルソーターシステムでの CTC クラスターおよび遺伝子解析を行った。セルソーターシステムは CTC を計量的に分析し、特定の細胞を分離することができるシステムである。

【結果】

1. アピラテロンまたはエンザルタミド治療前の CTC クラスター陽性は 23 症例中 11 症例（47.8%）で全例に PSA の低下を認めなかった。CTC クラスター陽性 11 症例中 androgen-receptor splice variant (ARV)7 陽性は 10 例(90.9%)であった。TXT 前後でみると、2. TXT 前のアピラテロン投与前の 8 症例のうち CTC クラスター陽性は 3 症例で全例 PSA 低下は認めなかった。また 3 症例とも ARV7 陽性であった。CTC クラスター陰性)の 5 症例で PSA 低下 50%以上低下を認めたのは 3 症例であった。CTC クラスター陽性の 2 症例で EGFR 変異および ERBB2 変異を認めた。この 2 症例はその後肺転移、肝転移を認めた。3. TXT 前のエンザルタミド投与前の 4 症例のうち CTC クラスター陽性の 2 症例は PSA 低下を認めなかった。CTC クラスター陽性 2 症例中 1 例は ARV7 陽性であった。CTC クラスター陰性の 2 症例で PSA 低下 50%、30%をそれぞれ認めた。CTC クラスター陽性 2 症例のうち 1 例で ARV7 陽性であった。4. TXT 後のアピラテロン投与前の 8 症例のうち CTC クラスター陽性は 4 症例で全例

PSA 低下は認めなかった。また 4 症例とも ARV7 陽性であった。CTC クラスター陰性の 4 症例のうち PSA 低下 50%以上低下を認めたのは 2 症例、25%低下 1 症例、低下なしは 1 症例であった。5. TXT 後のエンザルタミド投与前の 3 症例のうち CTC クラスター陽性の 2 症例は PSA 低下を認めなかった。CTC クラスター陽性 2 症例のうち 1 例で ARV7 陽性であった。CTC クラスター陰性の 1 症例で PSA 低下 77%を認めた。

【結論】

CTC クラスターの検出は CRPC 治療における predictive biomarker になる可能性があり、さらに CTC クラスターの ARV7 検出も同様な biomarker の可能性がある。

22. アリールスルファターゼの機能と VI 型ムコ多糖症への関与 ― 組織化学的研究

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
川上 速人	医学部解剖学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
秋元 義弘	(独) 国立精神・神経医療研究センター	教授	解剖学、細胞生物学、組織細胞化学
赤坂 甲治	東京大学大学院理学系研究科	教授	分子発生学
大森 紹仁	東京大学大学院理学系研究科	特任助教	発生生物学

キーワード

アリールスルファターゼ、細胞外基質、ER ストレス、免疫電顕

研究分野

組織化学

1. 共同研究の目的

硫酸化多糖の硫酸基を加水分解する酵素であるアリールスルファターゼ A, B (ARSA, ARSB) の存在様式を明らかにすることにより、細胞外マトリックスとしてのこれらの機能を解明する。また、ARSB-KO マウス、MPSVI モデルラットを用い、VI 型ムコ多糖症を発症した個体の組織における ARSB の量的変化と局在変化を免疫組織化学的に解析し、VI 型ムコ多糖症発症の分子機構についての解明を目指す。

2. 共同研究の内容・計画

アリールスルファターゼ (ARS) は、コラーゲンにはない ARS 特有の、突起形成などのダイナミックな細胞形態の形成にかかわる細胞外マトリックス機能を有することが示唆されている。これは ARS が細胞外で不溶性マトリックス構成成分として機能することを示している。しかし一般的には、ARSA、ARSB はリソソーム酵素であるとの認識がいまだに根強い。我々は、血管内皮細胞表面に ARSA と ARSB が局在していることを報告しているが、他の組織においても ARS が細胞表面に局在しているかは検証していない。ARSA と ARSB が一般的に細胞表面・細胞外に存在することを確認するため、消化管、腎臓、肺、軟骨組織、中枢神経系など、マウスのさまざまな組織における ARSA、ARSB の存在様式を、特異抗体を用いて免疫蛍光組織学、免疫電顕組織学的に解析する。また、硫酸化ムコ多糖と結合した状態では、人工基質に対する酵素活性を失うことを確認する。さらに ARSB ノックアウトマウスと VI 型ムコ多糖症のモデルである MPSVI ラットを用い、各組織における ARSA、ARSB の存在様式を正常組織と比較することにより、ムコ多糖症発症の分子機構を、臓器特異的变化に留意しつつ明らかにする。

3. 研究成果（経過）

アリールスルファターゼ (ARS) B タンパク質はラットの血管内皮細胞、肝実質細胞の細胞表面に存在し、特に血管内皮細胞では ARSB の大部分が細胞表面に存在することを、特異抗体を用いた免疫電顕により示した。さらに ARSB 突然変異モデルラット 15 週令のホモ個体組織の電顕観察では、軟骨細胞と血管内皮細胞に多数の空胞が見られることが明らかとなった。劣性遺伝するとされてきた VI 型ムコ多糖症ではあるが、ARSB 変異モデルラットのヘテロ個体においても血管内皮細胞と軟骨細胞の細胞質に空胞が生じていた。これは、変異遺伝子の産物自体が細胞障害を引き起こすことを示している。なお、外見上のヘテロ個体は野生型個体と同じであった。細胞質に充満した空胞の膜表面にはリボソームの存在が認められ、核膜と空胞が融合していることから、粗面小胞体由来と考えられる。空胞はトルイジンブルー染色で陰性であり、ムコ多糖の蓄積は認められない。したがって空胞は、

ゴルジ体やリソソームに由来するのではなく、粗面小胞体の断片が小胞となり、小胞が細胞内に充満することにより細胞障害が引き起こされる可能性が示唆された。

23. グライコプロテオミクスによる糖尿病及び関連合併症マーカーの探索

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
秋元 義弘	医学部解剖学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
川上 速人	医学部解剖学	教授	研究の立案、指導
遠藤 玉夫	東京都健康長寿医療センター研究所 老化ゲノム機能研究チーム	副所長	研究の立案、指導
三浦 ゆり	東京都健康長寿医療センター研究所 老化ゲノム機能研究チーム	研究副部長	プロテオーム研究の指導、遂行
千葉 優子	東京都健康長寿医療センター研究所 糖尿病・代謝・内分泌内科	副部長	プロテオーム研究の指導、遂行

キーワード

糖尿病、O-GlcNAc、複合糖質、糖鎖生物学、グライコプロテオミクス

研究分野

組織化学

1. 共同研究の目的

これまで我々は、細胞質の O-GlcNAc 修飾異常タンパク質の解析を行い、糖尿病に伴い腎臓において細胞骨格タンパク質であるアクチン、チューブリン、ミオシン、アクチニンなどに顕著な O-GlcNAc 修飾の変化が生ずることを明らかにしてきた。さらに本研究では、糖尿病及び合併症により発現変動する O-GlcNAc 化蛋白質をグライコプロテオミクス法により網羅的に解析し、糖尿病の診断、治療に役立つマーカーとなる蛋白質を明らかにする。

2. 共同研究の内容・計画

糖尿病モデル動物の網膜、腎臓、神経、膵臓、血液並びにヒトの血液を用いて、O-GlcNAc の修飾が変化する蛋白質を調べる。この際、東京都健康長寿医療センター研究所プロテオミクス共同センターに設置されている機器および本学の共同研究施設の LC-MS (LTQ-Orbitrap Velos)を使用してプロテオーム解析を行う。

3. 研究成果（経過）

研究代表者らは、これまで腎臓まるごとを試料にしたプロテオミクスにより、O-GlcNAc 化タンパク質の解析を行いアクチン、 α -アクチニン 4 など細胞骨格タンパク質や、ATP synthase などミトコンドリアタンパク質に糖尿病腎症で O-GlcNAc 化の有意な増加が生ずることを見出し、O-GlcNAc 化の変化が糖尿病腎症の一因になっていることを明らかにした。本研究では、さらに糖尿病性腎症のマーカータンパク質を探索するため、糸球体を単離し、プロテオミクスにより O-GlcNAc 化タンパク質の解析を行った。その結果、上記の細胞骨格やミトコンドリアタンパク質に加えて糸球体上皮細胞に特異的に発現するシナプトポディンに O-GlcNAc 化が起こることが明らかになった。さらに O-GlcNAc 化細胞骨格タンパク質に対する数種類の抗体を作製した。今後、この抗体を用いて O-GlcNAc 化に伴う細胞骨格タンパク質の局在の変化について検討する予定である。

24. ショウジョウバエにおける種間浸透

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
佐藤 玄	医学部生物学	講師	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
澤村 京一	筑波大学大学院	准教授	DNA 多型の解析
上村 佳孝	慶應義塾大学	准教授	雑種の形態
戸張 よし子	NPO 科学教育研究所	理事	雑種の妊性
松田 宗男	医学部生物学	客員教授	染色体多型

キーワード

染色体多型、核遺伝子多型、核外遺伝子多型、雑種形成、種間浸透

研究分野

進化遺伝学

1. 共同研究の目的

2000年以降、従来生息の記載がない熱帯種のショウジョウバエが、亜熱帯の沖縄諸島、マレー半島に分布を拡げている。温暖化の影響か、温度感受性などの遺伝的変異により生息域を拡大しているのかは不明であるが、雑種を介しての異種由来の遺伝子の流入の事実が明らかになってきた。熱帯種である *D.ananassae* の同胞種で、近年になり分布を拡げた種と従来から生息していた近縁種を用い、両種の遺伝的変異を調べ、雑種形成の可能性と侵入種の特徴を明らかにすることを目的としている。

2. 共同研究の内容・計画

既に維持されている系統及び、2012年に採集した沖縄、マレーシア（アルコール標本）の系統を中心に *D.ananassae* の同胞種系統について、以下の遺伝的変異について調査をする。1) mtDNA の *COI* 領域、2) Y-染色体上の *kl-5* 領域、第4染色体上の偽遺伝子3) 唾腺染色体、4) 寄生している細菌 *Wolbachia* の有無、5) 生殖的隔離、6) 外部形態(sex comb)の遺伝的変異と、遺伝子頻度と遺伝子型頻度を推定し、種の分布域拡大化と、雑種形成、種間の遺伝子移入の結果などから種分化の萌芽について研究を行う。

3. 研究成果（経過）

既に維持されている系統及び、2012年に採集した沖縄、マレーシア（アルコール標本）の系統を中心に上記3種とその近縁種系統について、以下の遺伝的変異について調査をした。1) mtDNA の *COI* 領域、2) Y-染色体上の *kl-1* 領域、第4染色体上の偽遺伝子3) 唾腺染色体、4) 外部形態の遺伝的変異の調査がほぼ終わり、のこり1) 寄生している細菌 *Wolbachia* の有無、2) 生殖的隔離の調査を行い、遺伝子頻度と遺伝子型頻度を推定し、種の分布域拡大化と、雑種形成、種間の遺伝子移入の結果などから種分化の萌芽について研究をつづけて行う。

25. Na⁺/K⁺-ATPase 分子の新たな機能制御機構の探究

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
丑丸 真	医学部化学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
林 雄太郎	理化学研究所糖鎖構造生物学	客員主管研究員	ATPase 分子の単離と機能測定
原 諭吉	東京医科歯科大学医学部	名誉教授	ATPase 分子の制御機構解析
誉田 晴夫	医学部泌尿器科学	非常勤講師	各種組織からの ATPase 分子の単離と活性測定

キーワード

Na⁺/K⁺-ATPase、レクチン親和性クロマトグラフィー、オリゴマー構造、基質結合、酵素機能制御

研究分野

生化学

1. 共同研究の目的

あらゆる動物細胞に存在する Na⁺/K⁺-ATPase は、細胞膜に Na⁺およびK⁺の電気化学勾配を形成し、神経興奮、Na⁺再吸収、栄養素の吸収などの生理機能を担っている。また、本態性高血圧症や癌の発症に関与していることが明らかになりつつある。このことは、この ATPase 活性の制御機構の異常が、疾病に関わる可能性を示している。制御の分子機構の解明には、各種組織からの単離・精製が不可欠である。これまで精製が事実上不可能であった微量の組織から、林らは新しく、当該タンパク質の迅速単離を可能とする方法を開発した。この方法を用いて、各種組織からこの ATPase 分子を単離し、新たな制御因子の探索、新たな制御機構の解明および、それらの結果と疾病との関係を探究する。

2. 共同研究の内容・計画

ブタ腎を用いて整備されたレクチン・アフィニティクロマトグラフィー (LAC) 法を、種々の組織またはそのホモジネートを界面活性剤で可溶化したものに適用する。すなわち、この ATPase が糖タンパク質であることを利用して、LAC 法およびゲルろ過法によって、種々の組織からこの ATPase 分子の単離を可能にする。単離した ATPase 分子を用いて、1) ATPase 活性測定、2) 基質およびその類似体との結合能の測定、3) オリゴマー構造の同定、4) この ATPase 分子と共に単離される、制御分子候補の検出、5) 制御分子による制御機構の解析を行う。さらに、6) 疾病モデル動物の組織や培養細胞からの単離を行い、健康組織から単離された ATPase 分子との、上記の観点からの比較を行う。

3. 研究成果（経過）

まず、従来のレクチン・アフィニティクロマトグラフィー (LAC) 法で、ブタ腎から四量体 Na⁺/K⁺-ATPase (T) 分子を単離した。T 分子が安定に四次構造を維持できるか否かを調べるため、この四量体標品溶液中およびゲル濾過の溶出緩衝液中の Na⁺と K⁺の濃度比を変えて、ゲル濾過を行った。その結果、K⁺が優勢な場合は比較的良く維持されるが、Na⁺が優勢に、または Na⁺だけ (K⁺が存在しない) 存在する場合には、50%以上の T は解離し、二量体 (D) と単量体 (P) に変化した。この結果から、この T 標品は機能単位としての資格を欠くと判断した。そこで、P-P 間の親和力が最低になる Na⁺だけ存在する条件でも、安定に存在する T を得るため、LAC 法のさらなる改良を試みた。ブタ腎の可溶化およびクロマトグラフィーの条件を、種々検討した結果、ブタ腎髄質外層組織を直接可溶化した後 5 時間以内に、1 個のブタ腎から 4 mg の T 標品が得られた。改良法で得られた標品は最初から 90%以上の純度の T 標品で、Na⁺だけ存在下の条件のゲル濾過でも、ほとんど解離することはなかった。今後は、こうし

て得られた機能単位の T 分子を使い、制御機構の研究を行う。

26. カイコ Na⁺/K⁺-ATPase β 鎖の機能

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
丑丸 真	医学部化学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
菅田 晴夫	医学部泌尿器科学	非常勤講師	ATPase 分子の単離と活性測定
原 諭吉	東京医科歯科大学医学部	客員教授	カイコ Na ⁺ /K ⁺ -ATPase の培養細胞内発現

キーワード

Na⁺/K⁺-ATPase、カイコ、酵素機能制御

研究分野

生化学

1. 共同研究の目的

高等動物細胞膜に存在する Na⁺/K⁺-ATPase は、膜を介して Na⁺および K⁺の能動輸送を行う。その結果生じた Na⁺および K⁺の電気化学勾配は、神経組織における情報伝達、腸管における栄養素の吸収などの生理機能を担っている。しかし、チョウ目昆虫であるカイコでは Na⁺/K⁺-ATPase は神経組織にしか見られず、また酵素的性質も哺乳類の Na⁺/K⁺-ATPase とは異なっている。その原因は Na⁺/K⁺-ATPase を構成するサブユニットαおよび β 鎖のうち、哺乳類とのホモロジーが 30%以下である β 鎖にあるように見える。また β 鎖は、単独で、腸以外の臓器に普遍的に見られる。この研究では、Na⁺/K⁺-ATPase の酵素的性質に与える β 鎖の影響、また α 鎖のパートナー以外の β 鎖の機能について研究する。

2. 共同研究の内容・計画

カイコ神経組織から単離した Na⁺/K⁺-ATPase α および β 鎖 cDNA を、カイコ卵巣由来の培養細胞 BM-N (β 鎖のみ存在、Na⁺/K⁺-ATPase 活性はない) に挿入して発現させる。一方、ラット β 鎖 cDNA あるいはカイコ β 鎖 cDNA から作製した変異体 β 鎖 cDNA をカイコ α 鎖 cDNA と共に BM-N に挿入して発現させる。内因性と区別できるように、外来 β 鎖には Flag タグが付くようにしておく。このようにしてえられた Na⁺/K⁺-ATPase について、その酵素的性質について調べる。また α 鎖のパートナー以外の β 鎖の機能については、まず、発現場所を特定するために免疫組織染色を行う。

3. 研究成果(経過)

カイコ神経組織から単離した Na⁺/K⁺-ATPase α および β 鎖 cDNA を、カイコ卵巣由来の培養細胞 BM-N (内因性 β 鎖が存在、Na⁺/K⁺-ATPase 活性はない) に挿入して発現させた。その際、α 鎖および内因性 β 鎖と区別できるように、外来性 α 及び β 鎖にはそれぞれ Flag および HA タグを N 末端側に結合させ、それぞれのタグに対する抗体を用いて外来性 α 及び β 鎖の発現を確認した。

実験の結果以下の知見が得られた。

培養細胞に発現させた外来性 β 鎖の分子量は、SDS-PAGE 及びイムノブロッティングによる測定の結果、40K だった。これは内因性 β 鎖の分子量及び哺乳類 β 鎖の分子量、55K よりも明らかに小さかった。β 鎖は糖タンパク質であり、SDS-PAGE 上の分子量は、糖鎖を持つ場合 55K、糖鎖を取り除くと 35K になることが知られている。したがって、外来性 β 鎖には糖鎖が付加していない可能性がある。しかし、外来性 α 及び β 鎖を発現させた細胞から得られたミクロソームは Na⁺/K⁺-ATPase を発現し、その酵素的特徴はカイコ神経組織由来の Na⁺/K⁺-ATPase と同様だった。これらの結果は、Na⁺/K⁺-ATPase 複合体形成、Na⁺/K⁺-ATPase 活性発現に糖鎖は不要であることを示唆している。

27. 不化子宮内膜症細胞における ROS 生産能およびジェノゲストの影響

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
小林 陽一	医学部産科婦人科学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
橋場 雅道	持田製薬株式会社開発研究所	マネージャー	実験の遂行、統括
三田 静香	持田製薬株式会社開発研究所	主任	研究の遂行
市岡 誠之	持田製薬株式会社開発研究所	主任	研究の遂行

キーワード

子宮内膜症、ROS (reactive oxygen species)、酸化ストレス、ジェノゲスト

研究分野

女性医学

1. 共同研究の目的

卵巣子宮内膜症性嚢胞において、嚢胞内酸化ストレスの状態を reactive oxygen species (ROS) 副生能により評価する。また子宮内膜症治療薬であるジェノゲストによる、ROS 産生能への影響を評価し、ジェノゲストが嚢胞内酸化ストレス環境を改善するか否かを評価することを目的とする。

2. 共同研究の内容・計画

現在当大学産科婦人科学教室では、倫理委員会の承認の元、卵巣子宮内膜症性嚢胞に関する基礎的・臨床的研究を行っている。今回その一環として、卵巣子宮内膜症性嚢胞の内容液の刺激による不化子宮内膜症細胞の ROS 産生能を評価し、合わせてジェノゲストが ROS 産生能に及ぼす影響を検討する。また手術前にジェノゲストを投与された症例の嚢胞内容液中の酸化ストレス物質について解析し、術前治療を行わなかった群と比較検討し、ジェノゲストが酸化ストレスを抑制する可能性について検討する。

3. 研究成果（経過）

卵巣子宮内膜症性嚢胞内は繰り返し生じる出血から生じる鉄イオンにより高い酸化ストレスに暴露されていることが示唆されている。今回我々は、嚢胞内の酸化ストレスの1つである ROS 産生の実態を明らかにするため、卵巣子宮内膜症性嚢胞内容液の、不化内膜症由来培養細胞に対する ROS 産生能を検討した。その結果、嚢胞内容液添加により、不化内膜症由来培養細胞から高濃度の ROS が産生されることが示された。しかしながら内膜症治療薬であるジェノゲスト同時添加での ROS 産生抑制効果は今回の検討では認められなかった。

また有意差は認めなかったものの、患者年齢が 40 歳以上の症例においては 40 歳未満に比較して ROS 産生能が高い傾向を認めた。また腫瘍径が 5cm 程度でも 5cm 未満の症例に比較して高い ROS 産生能を有することが示された。以上のことから、年齢が 40 歳以上、もしくは腫瘍径が 5cm を超える症例における手術適応の妥当性が示唆された。

28. 消化管癌の幹細胞制御転写ネットワークの解明と大腸癌治療への応用

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
菅間 博	医学部病理学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
永井 良三	自治医科大学	学長	研究指導
仲矢 丈雄	医学部病理学	助教	研究遂行

キーワード

大腸癌、幹細胞、KLF5、転写因子

研究分野

病理学

1. 共同研究の目的

これまで転写因子 KLF5 が、幹細胞の維持・増殖を制御し、Wnt シグナルの活性化による幹細胞からの発癌が、幹細胞で KLF5 を欠損させると全く起こらなくなることを明らかにしてきた。本研究は、この研究成果を基に、どのような細胞内転写制御ネットワークにより、正常腸上皮幹細胞や大腸癌幹細胞の維持・増殖が制御されているかを *in vivo* で解明し、大腸癌幹細胞を標的とした新しい治療法の開発につなげることを目的としている。

2. 共同研究の内容・計画

KLF5、それと腸管上皮で相補的な発現を示す KLF4、c-Myc などの転写因子のダブルタグ付きノックインマウスを作成し、正常時と腫瘍形成時において、これら因子と *in vivo* で結合するタンパクを免疫沈降法により解析するとともに、DNA 結合領域の網羅的な解析を Chromatin IP 法で行う。その結果に基づき、正常幹細胞、癌幹細胞の維持と増殖を制御する転写ネットワークを解明する。解明された結果に基づき、癌幹細胞で活性化されている転写ネットワークを microRNA 等により阻害し大腸癌を幹細胞から抑制・死滅させる手法を開発する。

3. 研究成果（経過）

KLF5、それと腸管上皮で相補的な発現を示す KLF4 の転写因子のダブルタグ付きノックインマウスを作成し、KLF4 に関してはマウスが生まれてきて、腸上皮を採取し、腸上皮でタグ付き蛋白が発現していた。その後、タグに対する抗体を用いた免疫沈降により、組織からの蛋白抽出液から、タグ付き蛋白に対する免疫沈降が行えることを確認した。

現在、KLF5 に対するダブルタグ付きノックインマウスを作成しているところである。これらを、腫瘍形成モデルと組み合わせ、*in vivo* 蛋白複合体解析を行い、消化管・大腸癌の幹細胞制御転写ネットワークの解明とその大腸癌治療応用につなげていく。

29 アミノ酸トランスポーターLAT1 慢性阻害モデルの作出と解析

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
櫻井 裕之	医学部薬理学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
遠藤 仁	ジェイファーマ	社長	研究計画策定、データ分析
木村 徹	医学部薬理学	学内講師	生理学的解析
堅田 智久	医学部薬理学	助教	形態学的解析

キーワード

LAT1、癌、発達

研究分野

薬理学

1. 共同研究の目的

アミノ酸トランスポーターLAT1 特異的阻害薬 JPH203 を長期投与した場合に予測される副作用を、ノックアウトマウスを用いて解析する。

2. 共同研究の内容・計画

LAT1 阻害薬 JPH203 の抗腫瘍効果は、*in vitro*, *in vivo* の系で示されているが、同薬を長期投与して、慢性に LAT1 を阻害したときに生体に起こる変化については未解明である、LAT1 ノックアウトマウスは胎生致死となるため、LAT1 conditional ノックアウトマウスを作出し、生後遺伝子を除去することにより、長期にわたる LAT1 阻害の影響を評価することを計画している。

3. 研究成果（経過）

LAT1 ノックアウトマウスは胎生致死となるため、LAT1 conditional ノックアウトマウスを作出し、生後 LAT1 遺伝子を除去することにより、長期にわたる LAT1 阻害の影響を評価することにした。Cre-loxP システムにより、LAT1 遺伝子の除去を行うため、LAT1-floxed mouse の作出のためのベクターを設計、当該遺伝型のマウス受精卵を得た。

なお、実際の研究は、共同研究契約締結の関係から平成 26 年 7 月 1 日より開始され平成 27 年 2 月 14 日に終了した。

30. 左右両循環系（心室、動脈）血行力学の情報論的解析

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
赤木 美智男	医学部医学教育学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
阿波 彰一	太陽こども病院 (元杏林大学医学部教授)	非常勤講師	研究責任者、動物実験、データ解析、論文執筆
保崎 明	医学部小児科学	講師	動物実験、データ解析
中村 嘉宏	宮内庁	侍医	動物実験、データ解析

キーワード

体・肺各心室圧、大（肺）動脈血流量、周波数領域、伝達関数、線形性

研究分野

循環器力学

1. 共同研究の目的

イヌを用いて、全身麻酔・開胸陽圧呼吸下で、大・肺両循環系の圧・流量・心室容積の関係を異なる心拍数下で実測し、①心室流入量、心室圧、心室流出量、動脈圧等のフーリエ変換を用いた周波数解剖析値からこれらの関係の線形性を確認する。②これらの変数の関係を、周波数領域で定義する。③関係式におけるパラメーターを決定し両循環系の力学的特性を明らかにする。

2. 共同研究の内容・計画

リタイヤビーグル犬をベントパルビタールによる静脈麻酔で麻酔し、気管挿管して陽圧呼吸管理する。心電図および総頸動脈もしくは大腿動脈から挿入したカテーテルにより大動脈圧をモニターする。胸骨正中切開により心臓に至り、圧および流量（または流速）センサーを大動脈と左心室流入部に、左神経の計測終了後は肺動脈と右心室流入部に装着し、それぞれの部位における圧と流量（または流速）を同時記録（紙および AID 変換してコンピューターに）する。一方、thermal dilution 法により心拍出量を計測し、心室容量の変化と動脈への流出量の calibration とする。洞結節部の冷却および心房ペーシングにより、心拍数を変化させて記録する。また、ドブタミン負荷による強心時にも同様の計測を行う。データは自作のソフトウェアによりフーリエ変換し、上記①、②、③の解析を行う。

3. 研究成果（経過）

平成 26 年 5 月から、ポリグラフや計測器機などの点検を開始した。

平成 27 年 3 月 2 日から実験を開始し、3 月末までに 2 回行った。

麻酔・全身管理および大血管（大動脈・肺動脈）への電磁血流計の装着までの手術手技については問題なく実施できたが、心室への流入血流波形の計測がうまくいかないため、流入路へのフローカテーテルの挿入ではなく、心外からドップラー血流計を用いた計測を検討している。

31. 高齢ドライバおよび軽度認知症ドライバにおける安全運転支援の評価方法に関する共同研究

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
長谷川 浩	医学部高齢医学	准教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
関根 道昭	交通安全環境研究所 自動車安全研究領域	主席研究員	運転能力評価・運転支援方法の評価

キーワード

高齢者、認知症、運転能力評価、運転支援方法の評価

研究分野

高齢者安全運転

1. 共同研究の目的

自動車の安全運転支援システム（自動ブレーキ、車間距離維持装置、車線逸脱防止装置など）の開発が進んでいる。これらの技術は、運転が難しくなった高齢者や軽度の認知症患者において事故の予防やモビリティ確保の観点から特に有効であると考えられる。一方で、運転支援技術を利用するドライバの行動についてはまだ十分に解明されておらず、これらは国際的にも関心が高い現在進行中の議論である。本研究では、高齢ドライバ、特に軽度認知症ドライバにおける運転支援方法のあり方について解明することを目的とする。

2. 共同研究の内容・計画

杏林大学もの忘れセンターを受診し、正常から軽度認知機能低下と診断された患者さんの中で、本人の希望があり協力の得られた方につき、三鷹市内の交通安全環境研究所へ行っていただく。ここで定置型ドライビングシミュレータ用い高齢者や軽度認知症の患者が苦手とする運転場面を再現し、運転の様子を定性的、定量的に解析する。例えば、見通しが悪い交差点における飛び出してくる車両へのブレーキ操作や信号や歩行者など、複数の対象に対して適切に注意を向けなければならない場面などにおける運転行動を観察する。さらに、運転支援システムが導入された場合の運転の様子や支援システムが急に効かなくなった場合の対処方法などを観察する。

3. 研究成果（経過）

本年度は杏林大学において本研究参加可能な対象者候補の選出を行うこと、また、交通安全環境研究所においては、高齢者の運転特性に合わせたシュミレータープログラムの構築を行った。

追記：臨床疫学研究審査委員会承認日の平成 26 年 11 月 27 日から研究を開始した。

32. セツキシマブの局所浸潤・遠隔転移の抑制効果についての検討

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
松本 吉史	医学部耳鼻咽喉科学	助教	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
浅野 正岳	日本大学歯学部病理学	教授	動物実験
塩野目 尚	日本大学歯学部病理学	大学院生	動物実験

キーワード

セツキシマブ、頭頸部癌、局所浸潤、遠隔転移

研究分野

癌の浸潤・転移

1. 共同研究の目的

頭頸部癌におけるセツキシマブは、他の抗癌剤との併用で再発・転移症例に有効なことや、放射線照射に上乗せ効果があることが証明されているが、単剤における有効性は確立されていない。そこでセツキシマブの有効性は、局所浸潤・遠隔転移の抑制によるものではないかと考え、*in vitro* において局所浸潤抑制効果を証明した。さらに *in vivo* において同様の効果や遠隔転移の抑制効果が生じるかどうかを検討することが、本共同研究の目的である。

2. 共同研究の内容・計画

高転移性の細胞株を用いた *in vitro* での実験系は本学で施行する 予定である。同様の細胞株とヌードマウスを用いた *in vivo* の実験は日本大学歯学部病理学教室で施行することとする。本学で施行する実験はセツキシマブの細胞に対する増殖・遊走・浸潤抑制効果を検討する。日本大学で施行する実験は、ヌードマウスの舌に細胞を注射し、同所移植モデルを作成する。その後コントロール群とセツキシマブ、投与群の 2 群に分けて、局所浸潤の程度や遠隔転移について比較し、セツキシマブの浸潤・転移抑制効果を検討する。

3. 研究成果（経過）

頭頸部癌におけるセツキシマブは、他の抗癌剤との併用で再発・転移症例に有効なことや、放射線照射に上乗せ効果があることが証明されているが、単剤における有効性は確認されていない。今回の研究において、セツキシマブの有効性は、局所浸潤・遠隔転移の抑制によるものではないか、という仮説を *in vitro* において証明した。高転移性の細胞株を用いて発癌・転移動物実験モデルを作成した。ヌードマウスの舌の側縁に癌細胞を注射し、同所移植モデルを作成した。PBS 投与群とセツキシマブ群に分けて頸部リンパ節転移の有無を確認したところ、セツキシマブ投与群で有意に頸部リンパ節転移を抑制した。この結果により、セツキシマブ投与によって、遠隔転移の抑制効果があることを *in vivo* で証明できた。

33. 先天性内分泌疾患のメダカモデルの作製と解析

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
谷口 善仁	医学部衛生学公衆衛生学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
長谷川 奉延	慶應義塾大学医学部小児科	教授	臨床病理的研究
石井 智弘	慶應義塾大学医学部小児科	講師	遺伝子工学的研究
天野 直子	慶應義塾大学医学部小児科	共同研究員	遺伝子工学的研究
鳴海 覚志	慶應義塾大学医学部小児科	特任助教	遺伝子工学的研究

キーワード

先天性内分泌疾患、細胞周期、臓器形成、メダカ

研究分野

小児内分泌学

1. 共同研究の目的

慶應義塾大学小児科長谷川研究グループでは先天性内分泌疾患の新規原因遺伝子を単離した。これまでに、臨床症状や *in vitro* での実験結果から当該遺伝子が細胞周期や臓器形成に重要な役割を果たしていることが示唆されている。本研究は、脊椎動物モデルであるメダカを使用し、この遺伝子の *in vivo* での機能を調べることを目的とする。

2. 共同研究の内容・計画

これまでの研究成果として、新規遺伝子をヒートショックプロモーター下に接続したプラスミドを作製し、メダカ卵へ顕微注入した。この系統を用いて、ヒートショックの条件検討、さらに、ウェスタンブロットや蛍光観察などによる発現誘導されたタンパク質の検出法の確立を行う。ゲノムへの安定な遺伝子挿入を確認するとともに、高温下、および、一般的なメダカ飼育、繁殖に関する技術を習得する。最終的に、ヒートインダクションした個体の成長や病理組織像から、導入した遺伝子の *in vivo* での機能を解析する。

3. 研究成果（経過）

慶應義塾大学小児科長谷川研究グループでは先天性内分泌疾患の新規原因遺伝子を単離した。*In vivo* での影響を調べるために、メダカ胚でこの遺伝子を一過性に強制発現させたところ、初期胚の段階で発生に影響を与えたため、コンディショナルな系を構築することとした。新規遺伝子をヒートショックプロモーター下に接続したプラスミドを作製してメダカ卵へ顕微注入し、F1を得た。次世代への安定的な遺伝子の継代は PCR により確認した。遺伝子の発現誘導は IRES に接続した GFP でモニターしたが、数種類のヒートショックの条件下で GFP の発現を蛍光顕微鏡で確認することができなかった。さらに新規遺伝子の誘導を確認するためにウェスタンブロットを行ったが、有意な発現上昇を確認することはできなかった。そのため、より強力に遺伝子発現を誘導するために、 β -actin プロモーターに新規遺伝子を接続し、Cre-loxP によりコンディショナルに遺伝子発現誘導するプラスミドを作製した。今後はこのプラスミドを安定的に保持する系統を単離し、*in vivo* での機能解析を行う予定である。

34. 心不全、心肥大の慢性病態の分子制御機構の病理組織学的解明

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
菅間 博	医学部病理学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
仲矢 道雄	九州大学薬学研究院	准教授	標的因子探索、抗体分与
仲矢 丈雄	医学部病理学	助教	人体病理学的解析

キーワード

心肥大、心不全

研究分野

病理学

1. 共同研究の目的

心不全、心肥大の慢性病態の分子制御機構の多くは、依然未解明である。本研究では、心筋梗塞後、あるいは高血圧による心肥大時などの慢性的な病態に注目する。そして、マウスの心肥大モデル（圧負荷モデル）において、心肥大の病態で発現が上昇、あるいは減少しているか、かつ心臓の病態に重要と予想される候補分子群を選定する。それらが心肥大、心不全等の心臓でどのような変化が起こっているのかについて免疫組織染色などを用いて病理組織学的に検討し、心臓の慢性病態の分子制御機構の解明につなげる。

2. 共同研究の内容・計画

マウスの心肥大モデル（圧負荷モデル）において、心肥大の病態で発現が上昇、あるいは減少する分子を DNA マイクロアレイ等により同定する。この結果に基づき、発現に変化の認められる分子の中で心臓の病態に重要と予想される候補分子群を探索し、選定する。選定した分子に関して、ヒトの病理組織検体に対して免疫組織染色が可能な抗体を選定し、それらを用いて、心肥大検体、慢性心臓病態検体と正常対照群を用いて染色を行う。そのことで、これらの分子が心臓の慢性病態でどのように発現が制御されているかについて解析を行う。

3. 研究成果（経過）

マウスの心肥大モデル（圧負荷モデル）において、心肥大の病態で発現が上昇、あるいは減少する分子を DNA マイクロアレイ等により同定した。この結果に基づき、発現に変化の認められる分子の中で心臓の病態に重要と予想される候補分子群を探索し、選定した。選定した分子に関して、ヒトの病理組織検体に対して免疫組織染色が可能な抗体を選定し、それらを用いて、心肥大検体、慢性心臓病態検体と正常対照群を用いて染色を行った。今後、さらに心肥大検体、慢性心臓病態検体、正常対照群を用いて免疫染色等による解析を継続して行う予定である。

②保健学部

35. 子宮頸部における新しいハイリスク型ヒト乳頭腫ウイルスの再考

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
大河戸 光章	保健学部病理学	講師	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
笹川 寿之	金沢医科大学	臨床教授	総括・プライマー・プローブ設計
小田 瑞恵	こころとからだの元気プラザ	婦人科診療部長	検体採取
藤井 雅彦	保健学部病理学	教授	細胞診・組織診判定

キーワード

ハイリスク型 HPV、子宮頸部上皮内腫瘍

研究分野

病理学

1. 共同研究の目的

13 種類のハイリスク型 human papillomavirus(HPV) (HR-HPV13)による持続感染によって子宮頸部上皮内腫瘍 (CIN) が形成され、浸潤癌が生じる。しかし CIN にも関わらず、HR-HPV13 が存在しない症例がある。そこで我々は子宮頸癌および HR-HPV13 陰性 CIN 症例を用いて HR を疑う HPV (26,30,34,66,67,69,70,73,82,85 型等) を検出し、ハイリスク型 HPV を再考する。この研究によって新たなハイリスク型 HPV が加わり、より一層の異型細胞の検出感度向上に寄与すると考える。

2. 共同研究の内容・計画

本研究では共同研究者 (笹川) が子宮頸部から採取した細胞浮遊液を用いる。研究代表者および共同研究者 (岡山、藤井) は細胞診判定を行い、type specific primer による PCR 法を用いて HR-HPV13 を調べ、HR-HPV13 陰性症例に対し、HR を疑う HPV を同様の PCR 法で検出する。さらに、HR を疑う HPV 感染症例における細胞像の調査は行われていないため、細胞診標本をスクリーニングして、特異的な異型細胞の検出を行い、HR-HPV13 感染症例との相違点を調べる。そして、CIN2、3 に進展するかを経過観察する。なお、本研究は平成 26 年度から平成 28 年度 (平成 26 年 4 月 1 日から平成 29 年 3 月 31 日) の研究計画における 1 年目の計画である。

3. 研究成果 (経過)

子宮頸癌および HR-HPV13 陰性の上皮内病変 (SIL) および CIN 症例を用いて HR を疑う HPV (26,30,34,66,67,69,70,73,82,85 型等: HR-susp.9) を検出し、ハイリスク型 HPV を再考する目的で平成 26 年度は HPV genotyping 解析として以下を実施した。

- (1) HPV26、30、34、66、67、69、70、73、82 型を特異的に検出するためのプライマーおよびプローブを設計し、プラスミド HPV を用いて特異的反応であることを確認した。これにより HR-susp.9 に対するプライマーの準備が終了した。
- (2) HR-susp.9 および HR13 の感染率の調査: 約 3,000 件の子宮頸部細胞浮遊液 (NILM、LSIL、HSIL、SCC) を分注して DNA を抽出し、PCR 法によって β アクチンを検出し、HPV30、34、67、69 型を検出した。その結果、3549 件中 3544 件が β アクチン陽性で、HPV30 は 1.4%、HPV34 は 1.9%、HPV67 は 2.2%、HPV69 は 0.4% で検出された。
平成 27 年度は昨年に引き続き上記の (2) を行い、得られたデータに基づき
- (3) HR-susp.9 の型別リスク評価 (4) HR-susp.9 と HR13 の複合感染によるリスク評価解析を行う予定である。

36. LC-MS/MS による免疫抑制剤の定量法の開発

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
石井 和夫	保健学部臨床薬理学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
細田 香織	保健学部臨床薬理学	講師	LC-MS/MS によるタクロリムスの定量法の開発
柴崎 浩美	東京薬科大学薬学部 医療薬学科臨床薬学	准教授	LC-MS/MS によるシクロスポリンの定量法の開発
横川 彰朋	東京薬科大学薬学部 医療薬学科臨床薬学	助教	LC-MS/MS によるタクロリムスの定量法の開発

キーワード

LC-MS/MS, 免疫抑制剤, 体内動態解析, バイオマーカー

研究分野

臨床薬理学

1. 共同研究の目的

シクロスポリンやタクロリムスなどの免疫抑制剤は、自己免疫疾患患者や移植後の拒絶反応を抑制する目的で使用されている。しかし、これらの薬物の有効治療域は極めて狭い上に、吸収過程を含む薬物動態に大きな個人差が認められるため、一人ひとりに適した安全で有効な個別化投与法の確立が求められている。本研究では、免疫抑制剤の個別化投与法のバイオマーカーとして、*MDR1* 遺伝子多型や代謝酵素 *CYP3A* フェノタイピングの可能性を明らかにすることを目指し、体内動態解析に必要となる LC-MS/MS による血漿中シクロスポリンやタクロリムスの定量法を開発することを目的とする。

2. 共同研究の内容・計画

免疫抑制剤の体内動態を正確に解析するためには、低濃度までの正確な血中濃度測定が必要となる。特に、免疫抑制剤では全血中の濃度が測定されることから、適切な抽出法、精度および感度の良い分離分析法の確立が必須となる。

前年度は、MS/MS 分析の至適条件の検討を中心に検討した。ODS カラムと、メタノールおよび酢酸アンモニウムを主体とした移動相を用いて、全血中濃度を感度・精度よく測定するための至適条件を検討した。

平成 26 年度は、MS/MS 分析条件下にて、測定精度の検討などを行う。

マスマス分析にはポジティブイオンモードを、測定モードには MRM モードを用いて、測定精度の検討などを行い、分析条件を精査する。

3. 研究成果（経過）

本研究では、免疫抑制剤の個別化投与法のバイオマーカーとして、*MDR1* 遺伝子多型や代謝酵素 *CYP3A* フェノタイピングの可能性を明らかにすることを目指し、体内動態解析に必要となる LC-MS/MS による血漿中シクロスポリンやタクロリムスの定量法を開発することを目的としている。平成 24 年に確立した LC-MS/MS 測定条件のもとで、平成 25 年度には、全血液中からの抽出法を開発するとともに、良好なピークが得られるグラジエントを確立した。平成 26 年度は、測定感度を向上し、血液試料を 1 mL から 0.5 mL とすることで、患者負担の軽減を図った。検量線は、ミダゾラムを内標準物質として作成し、体内動態解析に必要な血中濃度範囲において良好な直性を示した。本法の精度を、タクロリムスでは 10.8 ng/mL と 15.2 ng/mL、シクロスポリンでは 84.56 ng/mL と 11.38 ng/mL において確認した結果、相対誤差と変動係数は、両物質ともに低濃度域では 15% 以内と大きかったが、高濃度側では 4% 以内と良好であった。今後、低濃度での精度を向上することにより、臨床応用が可能となる。

37. 重度心身障害児の治療的乗馬に用いる座位保持装置付き鞍の開発

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
森田 千晶	保健学部作業療法学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
望月 秀樹	保健学部作業療法学	講師	対象児の機能評価、騎乗姿勢評価
太田 光明	麻布大学獣医学部 動物応用科学科 介在動物学研究室	教授	乗馬療育の指導、セラピー・ホースの選 択・管理指導
要 武志	児童発達支援・放課後等 デイサービス すりーびーす	理学療法士	対象児の機能評価、騎乗姿勢評価
松田 靖史	川村義肢（株）・ 大阪大学大学院工学研究科	主席技師 准教授	ハードの開発、試作機製作

キーワード

治療的乗馬、座位保持装置、重度心身障害児

研究分野

福祉機器・装具の開発

1. 共同研究の目的

欧米諸国では作業療法士、理学療法士が治療的乗馬に関わっており、近年、我が国でも関心が高まっている。対象は一般的に重度心身障害児が主で、そのほとんどが自力での座位保持が困難な脳性麻痺児である。実際の騎乗時にはサイドウォーカーとして馬の両脇から2名のセラピストが支えることで安全かつ望ましい座位姿勢を保つ。この時に座位を保持しつつ、治療的なハンドリングを同時に行うが、側弯や異常筋緊張のあるケースではハンドリングのみでは十分にコントロールすることが難しい。また、治療的乗馬1セッションは馬の疲労を考慮して概ね20分で行われるが、この間、セラピストは動く馬の背にいる児を支え続けることになり、身体的に負担が大きい。これらのことを解決するために、鞍に座位保持機能をもたせることが必要と考えた。今回は様々な障害像に対応できる座位保持装置付きの鞍を開発することを目的とする。

2. 共同研究の内容・計画

（内容）麻布大学獣医学部動物応用科学科介在動物学研究室の協力の下で行われている、心身障害児を対象とした乗馬会の参加児に対して、それぞれの障害に合わせることでできる座位保持装置アタッチメント（体幹、骨盤、大腿、持ち手）の開発をする。

（計画）平成24年から25年度は毎月4～5回行われる乗馬会において、参加した児の乗馬時の座位能力および姿勢、筋緊張の状態、股関節可動域の評価とサイドウォーカー役のセラピストのハンドリングの評価および心拍・呼吸の観察から、各児、各障害、身体各部位ごとに必要なサポートを抽出しベースとなる市販の鞍（ウェスタン鞍の使用を予定）へのアタッチメントの試作を行った。試作機の試用を行った結果、修正と設計変更が必要となったため、現在、川村義肢にて試作2号機を製作中である。2号機完成後、再度、試乗を行う。また、側弯の強い対象児1名について、本人専用の体幹保持具を製作する。すべてが完成後、鞍使用の有無を動作分析を行い、結果をまとめ考察し、発表の準備に入る。

3. 研究成果（経過）

平成24年度に作製した試作1号機の体幹保持具と改造鞍を実際の対象児に試用した。

結果、体幹保持具と鞍との接合部分の固定性が不十分であること、および体幹保持の素材の強度が不十分であることが判明した。

ため、材料の再選定と設計の見直しをした。結果、試作 2 号機では対象児の側彎矯正と体幹保持を目的に全周囲型の体幹装具を作製し、その装具を鞍に固定するために、鞍後橋部に支柱を設置しベルトで固定した。試作 1 号機に比べると体幹の保持性が向上し安定性もました。しかし、サイドウォーカーによる補助は軽減したものの必要とする。馬の動きへの追随性は不十分であった。試作 3 号機では The SPIDER（身体から外に向かって張られたゴム紐が重力を軽減し姿勢制御を含む環境に適応する経験を用いた治療機器）の概念を利用する新たな発想のもと 3 号機を試作した。馬の動きを軽減することなく、サイドウォーカーのサポート無しでの乗り手の姿勢保持が可能なことを確認した。今後は試作 3 号機の完成と動作分析を行い、非装着との比較を行う。



試作 1 号機



体幹装具



試作 2 号機



試作 3 号機



試作 3 号機

38. 脳障害患者などに関わる腹壁筋低緊張と姿勢障害の病態解明

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
丹羽 正利	保健学部作業療法学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
佐々木 誠一	茨城県立医療大学 医科学センター	教授	共同実験者

キーワード

脳障害、姿勢障害、腹壁筋

研究分野

総合領域

1. 共同研究の目的

脳障害患者などの腹壁筋の障害は、上肢・下肢筋の過緊張状態に比べ、低緊張状態を呈し、その基礎となる脊髄神経機構の相違が予想される。また、座位・立位時の身体の平衡や姿勢の調節に主に関わると考えられる前庭神経核から腹壁筋運動ニューロンへの効果を調べた報告はほとんどない。そこで本研究は、脳障害後に見られる腹壁筋の病態を明らかにするために、その運動制御メカニズムを探究することが目的である。まず、腹壁筋運動ニューロンから細胞内記録をとり、脊髄反射機構の性質を電気生理学的に解析する。さらに、腹壁筋運動ニューロンへの錘体路の入力様式及び前庭入力様式を解析する。

2. 共同研究の内容・計画

実験にはネプタール麻酔下の成ラットおよび成ネコを用いる。腹壁筋運動ニューロンを細胞内記録により同定し、I 群線維を刺激することにより膜電位を解析する。それにより脊髄神経機構を解明する。

腹壁筋運動ニューロンを同定した後、錘体路を電気刺激し、細胞内記録より膜電位を解析する。それにより腹壁筋運動ニューロンへの運動性の下行路を解明する。

また、腹壁筋運動ニューロンを同定した後、前庭神経核を電気刺激し、細胞内記録より膜電位を解析する。それにより腹壁筋運動ニューロンへの前庭入力様式を解明する。

3. 研究成果（経過）

昨年度、外腹斜筋支配神経（外側枝）、腹直筋・内腹斜筋・腹横筋支配神経（内側枝）を刺激することにより、それぞれ同名筋運動ニューロンを同定した後、後根電位の刺激閾値をもとにI 群線維だけが刺激される刺激強度を確定し、その刺激強度を変えてガラス管微小電極で細胞内記録を行い膜電位を解析した。その結果、後根電位から計測した興奮性シナプス後電位の潜時から、これまでに観察された後肢筋のそれとは若干潜時が遅かった。その点をさらに調べるために、追加実験を行った。さらに、I 群線維から腹壁筋運動ニューロンへの入力単シナプス成果どうかを調べるために、Ia フィールド電位をとり解析した。実験にはネプタール麻酔下の成ネコを用いた。第6 胸髄から第3 腰髄の間で椎弓切除を行い脊髄背面を露出させ、ガラス管微小電極を胸髄・腰髄後索に刺入した。外腹斜筋支配神経（外側枝）、腹直筋・内腹斜筋・腹横筋支配神経（内側枝）を刺激することにより、運動ニューロン近傍からIa フィールド電位をとり、後根入口からの潜時を解析した。その結果、それらの入力は単シナプス性であることが明らかとなった。

39. 糖尿病における運動神経障害の病態生理

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
丹羽 正利	保健学部作業療法学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
村松 憲	健康科学大学	准教授	共同実験者
齋藤 利恵	保健学部作業療法学	学内講師	共同実験者
大城 直美	保健学部作業療法学	助教	共同実験者

キーワード

糖尿病、運動ニューロン、神経科学、リハビリテーション

研究分野

総合領域

1. 共同研究の目的

糖尿病性神経障害は糖尿病発症直後から観察される障害の一つで、初期の遠心性・求心性線維の伝導速度の低下に始まり、慢性期には神経線維の脱落が生じる事が知られている。筋力低下、筋萎縮などの運動障害は多くの場合慢性期まで観察されないために、運動ニューロンは糖尿病性神経障害に対して強い耐性を持つと考えられてきた。しかし、最近、脊髄運動ニューロンや脳神経細胞にも変性が生じることが報告されている。これらの点を明らかにすることを目的に、糖尿病ラットを用いて糖尿病性神経障害による神経細胞や線維の障害様式を調べる。

2. 共同研究の内容・計画

実験にはストレプトゾドシンの投与によって I 型糖尿病を発症した Wister 系ラット（糖尿病群）と健常な Wister 系ラット（対照群）を用いる。それぞれにおいて、脊髄運動ニューロンと脳神経細胞の形態を比較する。

運動ニューロンの標識はイソフルレン麻酔下で行う。麻酔下のラット腓腹筋筋枝・腹壁筋筋枝を切断して、その断端を 10%Dextran 溶液に 2 時間浸す。その後、Dextran の拡散を防ぐために神経断端をスポンゼルで覆い、術創を縫合する。必要に応じてラットには輸液、消炎鎮痛剤、抗生物質を投与する。2～3 週間の生存期間の後、ネンプタール麻酔による深麻酔下において 10%パラフォルムアルデヒド溶液による灌流固定を行い、脊髄を取り出す。後固定の後、腰髄から仙髄までの脊髄の連続切片（100 μ m）を作成し、蛍光顕微鏡下で標本を観察して Dextran によって逆行性に標識された運動ニューロン像をデジタルカメラで撮影し解析する。

脳神経細胞は、ネンプタール麻酔による深麻酔下において 10%パラフォルムアルデヒド溶液による灌流固定を行い、脳を取り出す。後固定の後、脳の連続切片（100 μ m）を作成し、ニッスル染色を施し、神経細胞像をデジタルカメラで撮影し解析する。

3. 研究成果（経過）

実験にはストレプトゾドシンの投与によって I 型糖尿病を発症した Wister 系ラット（糖尿病群）と健常なコントロールラット（対照群）を用いた。運動ニューロンの標識はイソフルレン麻酔下で行った。麻酔下のラットの腹壁筋筋枝を切断して、その断端を 10%Dextran 溶液に 2 時間浸した後、術創を縫合した。2～3 週間の生存期間後、ネンプタール麻酔による深麻酔下において 10%パラフォルムアルデヒド溶液による灌流固定を行い、脊髄及び筋組織を取り出した。後固定の後、腰髄から仙髄までの脊髄の連続切片（100 μ m）を作成し、標識された運動ニューロン像及び筋組織を解析した。その結果、糖尿病発症初期の腹壁筋の運動

ニューロンについて、細胞数と細胞体径はともに健常群より有意に減少していた。今後変化の傾向をみるため、糖尿病発症後長期生存させたラットについても形態の変化を調べていく予定である。

40. デジタル角度計（プロトタイプ）の信頼性と操作性に関する研究

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
八並 光信	保健学部理学療法学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
渡辺 一弘	創価大学工学部	学部長	解析ソフトの開発
佐々木 博幸	コアシステムジャパン	開発部長	解析ソフトの開発
前 錠一	北浦通信	技術部長	電子角度計のプロトタイプ製作

キーワード

角度計、関節可動域、被検者間信頼性

研究分野

複合領域

1. 共同研究の目的

リハビリテーション医学において、筋力と関節可動域の測定は、患者の残存能力を知る上で重要な指標となる。筋力に関しては、様々な定量的測定を可能にする機器が普及している。他方、関節可動域の測定は、30 年以上、金属製の東大式角度計で測定している。リハビリテーション医学の進歩にも関わらず、角度計はアナログの域を出ていないし、学生にとっても非常に使用しづらいものである。本研究は、プロトタイプのデジタル角度計を用いて、その信頼性や操作性を検証するものである。なお、利益相反との関わりはない。

承認番号 26・12（倫理審査委員会）

2. 共同研究の内容・計画

(1) 硬化プラスチック製で Bluetooth により、データをスマートフォンへ送信する機能を備えたプロトタイプの角度計を用いて行う。(2) 角度計の操作性および信頼性について、被検者 10 名、検者を 5 名のボランティアをランダムに検者と被検者に振り分ける。(3) 検者は、被検者の手指・体幹・下肢の関節可動域を測定する（角度表示窓はブラインドする）。(4) 1 容週間に 1 度測定して 5 週間行う。操作性に関しては、聞き取り調査を行い、プロトタイプの改良に役立てる。この手順を繰り返す。

3. 研究成果（経過）

(1) プロトタイプのデジタル角度計（電子角度計 Electrogoniometer）の製作は完了した。機器の構成は、基本軸、軸心、移動軸の 3 つのコンポーネントから成る。軸心部分は、CPU、角度検知器、Bluetooth 送信器から構成され、角度は Bluetooth で、スマートフォンやパソコンへ転送され、表形式の評価表へ転送される。ただし、この部分の開発は終了しておらず、現在も改良中である。

(2) 基礎的実験により、機器の操作性については、東大式角度計より電子角度計の優位性が確認された。特に、電子角度計は、目視する必要がなく、検者は角度計をあてるだけで良い。しかし、軸心部分が若干、大きく違和感があるとの指摘を受けた。この点は、技術的に縮小することは困難である。

(3) 信頼性に関しては、学生ボランティアを検者、被検者に無作為に割り当て、股関節の角度（屈曲、伸展、外転、内旋、外旋）を 3 回繰り返し測定した。その結果、検者間信頼性においては、東大式も電子角度計も低かった。検者内信頼性は、東大式より、電子角度計の方が優位であった。主な原因は、検者が学生であった点と考えられる。さらに検証を行っていく予定である。

③総合政策学部

41. 北タイにおける HIV 陽性者への保健医療福祉サービス提供のあり方に関する研究

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
北島 勉	総合政策学部	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
Malcolm Field	総合政策学部	教授	研究計画作成、データ分析
岡村 裕	総合政策学部	准教授	研究計画作成、データ分析
Saiyud Moolphate	チェンマイラチャパット大	講師	研究計画作成、データ収集
Chittima Katanyu	チェンマイラチャパット大	講師	研究計画作成、データ収集

キーワード

HIV、抗 HIV 多剤併用療法、高齢化、タイ

研究分野

国際保健

1. 共同研究の目的

近年、途上国においても抗 HIV 多剤併用療法の普及が進み、HIV 陽性者の余命は延伸され、HIV 陽性者の高齢化への対応が新たな課題となりつつある。しかし、途上国における高齢 HIV 陽性者の医療や介護ニーズに関する研究は少なく、高齢化が進む HIV 陽性者に適切に対応するために必要な情報が不足している。そこで本研究は、タイ国チェンマイ県において、高齢 HIV 陽性者に特徴的な医療及び介護ニーズを把握することを目的とする。

2. 共同研究の内容・計画

調査対象地域は、タイ国チェンマイ県サンパトン郡である。調査対象者は、サンパトン病院治療をうけている高齢 HIV 陽性者と同年代の HIV 陰性者である。調査対象者からインフォームドコンセントを得た後、質問票による面接調査を実施し、対象者の人口社会的属性、家族構成、健康状態、慢性疾患、日常動作能力などについて調べる。それらの情報について高齢 HIV 陽性者と陰性者の比較を行い、高齢 HIV 陽性者の医療及び介護ニーズの特徴を明らかにするとともに、今後の対応について検討を行う。

3. 研究成果（経過）

平成 25 年度から継続して、タイ国チェンマイ県のサンパトン郡において、地域病院で抗 HIV 多剤併用療法を受けている患者（病院群、n=132）と保健所で同療法を受けている患者（保健所群、n=66）の満足度や予後の違いについて調査をした。その結果、両群の全体的な満足度には差が無かったが、病院群の方が、医療水準、コミュニケーション、医療者との時間でより満足度が高く、保健所群はアクセスに関する満足度が高かった。CD4 については両群とも上昇しており、有意差はなかった。1 回の受診にかかる費用は、病院群が 8 米ドルだったのに対し、保健所群は 2 米ドルと有意に低かった。これらの結果は、2015 年 2 月に日本国際保健医療学会西日本大会で発表した。また、同年 7 月に開催される国際医療経済学会でも発表する予定である。平成 26 年度の後半は、サンパトン郡で抗 HIV 多剤併用療法を受けている 50 歳以上の患者を対象に、慢性疾患の有病割合、ADL、うつ状態についての調査も行った。これまで回答が得られた 136 人の平均年齢は 55.2 歳（±4.5）、男性 66 人（48.5%）であった。10 人（7.4%）が糖尿病に、36 人（26.5%）が高血圧症に罹っていた。ADL のスコアは高く、部分的に介助が必要な人は 1 名のみであった。また、軽度なうつ状態が疑われるのが 13 人（10.6%）、重度なうつ状態が疑われるのが 1 人であった。今後も、データ収集と分析を

継続する予定である。

42. 女性農民工の権利保護制度及びその実施に関する研究

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
劉 迪	総合政策学部	准教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
林 紅	アモイ大学（中国）	准教授	中国の女性農民工についての知識を提供する

キーワード

女性農民工、権利保護、高度成長、フェミニズム、比較政治学

研究分野

比較政治学

1. 共同研究の目的

今現在中国には2億人以上の農民工（農村戸籍の出稼ぎ労働者）が存在する。そのうち女性が30%以上を占めている。彼女たちは男性の農民工以上に過酷な生活環境・労働条件を強いられている。この研究は中国女性農民工の権利保護の諸制度を調査・整理したうえで、その実施状況を明らかにする。さらに、諸外国の女性労働者保護の精度を参照しながら中国女性農民工の権利保護制度のありかたをめぐって考察する。

2. 共同研究の内容・計画

本研究は以下の3つの内容をめぐって展開する。

- 1 中国の女性農民工関係の精度を研究する。
 - 2 中国の女性農民工の権利保護の実態を調査する。
 - 3 日本高度成長期の女性労働者の権利保護に関する調査、研究を行う。
- 研究代表者及び共同研究者はそれぞれ以下の役割を分担しながら研究を進める。
- 1 林氏は中国の女性農民工保護関係制度の知識を提供する。
 - 2 林氏は中国の女性農民工保護関係制度の実態を調査する。
 - 3 劉氏は比較政治学の視点から日本の女性権利保護関係制度の知識を提供する。
 - 4 二人は日本の女性問題の実務者にインタビューする。
 - 5 二人は日本の女性問題の研究者との意見交換を行う。
 - 6 劉氏は最終的なまとめを担当する。

3. 研究成果（経過）

1 中国の女性農民工関係の制度研究

目下、中国政府が制定されている女性労働権利保護関係の諸法律・政策は実際機能していない。その理由は以下のとおりである。
①性別、社会階層の差別②女性農民工への社会的支援の欠如（婦人連合会、労働組合、コミュニティ、ソーシャルワーク機関から無視されている）③女性農民工の個人能力の不足。以上の要因によって女性農民工の就職方式、職業次元、職業リスク、社会地位からみればますます弱い立場に追いやられてしまう。

2 中国の女性農民工の権利保護の実態調査

中国の都市化の発展につれて、農民工の数は大幅増加している。2006年、女性農民工の数は6000万人に達し農民工総数の36%に占められている。中国女性農民工は男性農民工に比べてより深刻な権利保護の問題を直面している。そのうち特に以下の問題が

突出している。①長時間残業②賃金の未払い③労働環境の劣悪④男女の賃金格差など。更に妊娠、生理期間中、出産期、哺乳期にも重労働が強られる。彼女たちは被害を受けた後、親族友人に支援を求める人は最も多かった（59.73%）、次は郷・県政府（15.24%）、最後は警察機関（15.24%）である。私的力による救済は主流であり、政府援助及び法律に則って利益を守る人は少なかった。

④医学研究科

43. Pregnancy-associated malaria の病態に関わる新たな宿主因子の探索

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
小林 富美恵	医学部感染症学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
新倉 保	医学部感染症学	助教	原虫感染動態、宿主免疫応答解析
峯尾 松一郎	医学部	大学院生	原虫感染動態、肝臓病理の解析
黒田 雅彦	東京医科大学分子病理学	教授	胎盤病理の解析

キーワード

重症マラリア、制御性T細胞、サイトカイン、複合感染

研究分野

寄生虫免疫学

1. 共同研究の目的

Pregnancy-associated malaria(PAM)は、妊婦の重症マラリアや胎児の生存率の低下、子宮内胎児発育遅延、低体重、乳児の高い死亡率を呈する重篤な合併症である。PAM の病態生理や発症機構をヒトの系で精査することは困難であることから、それらについては未解明な部分が多い。本研究では、妊婦における重症マラリアの典型的な病理学的・臨床的な特徴を再現するマウスモデルを用いて、妊娠マラリアの病態に関わる新たな宿主因子を明らかにすることを目指す。

2. 共同研究の内容・計画

以下の項目について解析を順次行う。

- 1) 妊娠中のマラリア原虫感染における母子マウスの病態と胎盤病理の解析
- 2) 妊娠中のマラリア原虫感染における免疫担当細胞とサイトカイン応答の解析
- 3) 妊娠マラリア発症に関与するサイトカインなど液性因子の探索
- 4) 妊娠マラリア発症に関与する細胞性因子の探索
- 5) 各種マラリア原虫複合感染における妊娠マラリアの病態とその発症機構の解析

3. 研究成果（経過）

これまでの研究成果によって、妊娠中のマラリアにおける肝障害には一酸化窒素（NO）が重要な役割を担っていることが示唆されている。本年度は、妊娠中のマラリアにおける肝障害と NO の関係を明らかにするために、野生型マウスを用いた妊娠中のマラリアモデルと一酸化窒素合成酵素（iNOS）欠損マウスを用いた妊娠中のマラリアモデルの血液生化学的および免疫学的な解析を行った。血液生化学的解析の結果、野生型マウスを用いた妊娠中のマラリアモデルにおいて血中グルコースの低下および肝機能障害を示す AST、ALT の増加が認められた。一方、iNOS 欠損マウスを用いたモデルでは、野生型マウスを用いたモデルと同様血中グルコースの低下が認められたが、AST、ALT の増加は抑制された。次に、炎症性サイトカイン IFN- γ と抗炎症性サイトカイン IL-10 の血中レベルを測定したところ、野生型と iNOS 欠損マウスを用いたモデル間で有意な差異は認められなかった。これらの結果から、NO は妊娠中のマラリアにおける肝障害の病態悪化に寄与することが示唆された。一方、妊娠中のマラリアにおける胎盤病理と NO の関係については明らかではない。今後、妊娠中のマラリアにおける胎盤の組織傷害機構の解明を目指し、病理学的・免疫学的解析を進めていく予定である。

44. ローデントマラリア原虫のマラリア薬剤耐性遺伝子の同定

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
小林 富美恵	医学部感染症学	准教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
新倉 保	医学部感染症学	助教	宿主免疫応答解析
井上 信一	医学部感染症学	助教	宿主免疫応答解析
本間 一	東京女子医科大学 国際環境・熱帯医学	助教	原虫感染動態、薬剤耐性原虫確立
遠藤 弘良	東京女子医科大学 国際環境・熱帯医学	教授	原虫感染動態

キーワード

マラリア、遺伝子改変原虫、DNA 変異

研究分野

分子寄生虫学

1. 共同研究の目的

遺伝子改変により DNA 変異頻度を高めたローデントマラリア原虫 (*Plasmodium berghei*) が突然変異率をどの程度高めているかを調べる。また、この原虫を用いて薬剤耐性株を確立し、マラリア薬剤耐性の機構を解明することを目的とする。

2. 共同研究の内容・計画

遺伝子改変により DNA 変異頻度を高めた *P. berghei* を、腹腔内あるいは静脈内接種によるマウス継代を長期にわたり行い、その後の解析に用いる。また、この原虫を用いて薬剤耐性株を確立するために、*P. berghei* を接種したマウスについて各種薬剤投与下での経過の観察を行う。マウスは感染動物飼育室で飼養される。ローデントマラリア原虫は *in vitro* 培養が不可能でありマウスを使用せざるを得ない。心採血時にはエーテルあるいはイソフルランによる麻酔を行う。心採血後のマウス、あるいは人道的エンドポイントに至ったマウスに対しては頸椎脱臼による安楽死処置を行う。

3. 研究成果（経過）

本研究では、DNA ポリメラーゼ δ への変異導入によりゲノムに高頻度に突然変異を蓄積するローデントマラリア原虫 *Plasmodium berghei* (ミューテーターマラリア原虫) について、その突然変異率や生じる塩基置換の傾向を明らかにする。本年度は、ミューテーター原虫、野生型の DNA ポリメラーゼ δ を遺伝子導入したコントロール原虫、そしてそれらの親株である *P. berghei* ANKA について、それぞれ 3 系列でのマウス継代を約 25 週にわたって行った。約 25 週間の継代の後、限外希釈によるクローニングを行い、ミューテーター原虫、コントロール原虫、*P. berghei* ANKA それぞれについて 3 クローンずつ (計 9 クローン) を得た。これらのクローンについてゲノム DNA を採取し、Illumina HiSeq2000 による大規模シーケンシングを行った。その結果、ミューテーター原虫とその他の原虫とでは、突然変異率が大きく異なっていた。また、ミューテーター原虫の塩基置換は一様に生じるのではなく、C/G>A/T の強い塩基置換バイアスが存在することが明らかとなった。本研究の成果は、ミューテーター原虫の突然変異体創出への利用など今後の応用研究のために重要な基盤的知見となる。

45. *Helicobacter pylori* 感染経路の解明のための家族分離菌株の遺伝子タイピング

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
神谷 茂	医学部感染症学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
大崎 敬子	医学部感染症学	准教授	動物実験
米澤 英雄	医学部感染症学	講師	細胞付着性実験
今野 武津子	札幌厚生病院小児科	主任部長	検体採取
小林 一三	東京大学大学院新領域創成科学研究科	教授	メチローム解析の実施

キーワード

<i>Helicobacter pylori</i> 、全ゲノム解読、家族内感染

研究分野

細菌学、遺伝学

1. 共同研究の目的

Helicobacter pylori は WHO により胃がんの definite carcinogen group1 として認定されている。しかし、わが国の *H.pylori* 感染源に関する研究は少なく、感染の実態は明らかにされていない、*H.pylori* 感染小児がいる家族で、感染調査を行って得た菌株の、全ゲノム解読を実施して、家庭内感染状況の実態を明らかにする。また、ゲノムの解読により、家族内の *H.pylori* 菌株間で行われた遺伝子の伝達等の現象について詳細な解析を実施する。

2. 共同研究の内容・計画

本研究課題は、杏林大学医学部倫理委員会（No.537）および札幌厚生病院倫理委員会（No.215）の承認をうけて実施している。家族内からの菌株は MLST 解析および全ゲノム解析を終えて、現在はデータ解析にはいつている。さらに、それらの菌株を使った動物実験の実施を計画している。結果については杏林大学と、東京大学においてデータ解析を実施し、札幌厚生病院を加えた 3 施設共同での研究発表を予定している。

3. 研究成果（経過）

H. pylori 感染陽性の子供とその家族から *H. pylori* を分離し、5 家族 19 菌株の multi locus sequence typing (MLST) 法により遺伝子型を決定した。その結果、家族内での母子感染、親子感染、同胞感染および夫婦間感染を示した (Osaki et. al., J. Med. Microbiol., 2015)。また次世代シーケンサを用いて、遺伝子の解読を全ゲノム配列に拡大し、MLST 法では近縁株と判定され家族内感染の順番が決定できなかった菌株の一部に、母子感染および同胞間感染を示すことが明らかにされた (Furuta et. al., PLoS One, 2015)。今後、近縁菌のメチローム解析を実施して、病原体のゲノム進化の過程について詳細な解析を予定している。

また、家族内で複数の遺伝子型が存在していた例から分離した菌株を用いて、動物実験等を実施して、感染成立時にみられる宿主病原体関係について検討する。

46. 上皮細胞における尿酸の paracellular 輸送

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
櫻井 裕之	医学部薬理学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
市田 公美	東京薬科大学	教授	研究取りまとめ
中村 真希子	東京薬科大学	助教	安定発現細胞の作製、輸送実験
塚田 愛	東京薬科大学	研究生	qPCR、プロテオミクス
木村 徹	医学部薬理学	学内講師	安定発現細胞の作製、輸送実験

キーワード

尿酸輸送、上皮細胞、paracellular 輸送

研究分野

薬理学

1. 共同研究の目的

上皮細胞における有機イオンや電解質の輸送ルートは大きく2つに分類される。1つは、細胞を横切って輸送される transcellular ルートであり、トランスポーターやチャネルを介する輸送である。もう1つが細胞と細胞の間を通る paracellular ルートである。種々の上皮由来細胞を用いた結果、いくつかの細胞で paracellular ルートによる尿酸輸送が見られた。本研究では、上皮細胞における尿酸の paracellular 輸送形式およびそれに関与する分子について検討を行う。

2. 共同研究の内容・計画

東京薬科大学薬学部病態生理学教室において、尿酸の paracellular 輸送を行う候補分子（claudin 等）の発現解析を qPCR、プロテオミクスにて行う。また、それらによって絞られた候補分子の安定発現細胞の樹立を行う。杏林大学においては、作製された安定細胞を用いて尿酸の paracellular 輸送実験を行う。

3. 研究成果（経過）

上皮細胞における有機イオンや電解質の輸送ルートは大きく2つに分類される。1つは、細胞を横切って輸送される transcellular ルートであり、トランスポーターやチャネルを介する輸送である。もう1つが細胞と細胞の間を通る paracellular ルートである。本研究では、上皮細胞における尿酸の paracellular 輸送形式およびそれに関与する分子について明らかにすることを目的とする。paracellular 輸送は、タイトジャンクションを形成する claudin の種類によって調節されていることが知られている。そこで、胎盤組織、BeWo 細胞、腸管由来の Caco-2 細胞にどの種の claudin が発現しているのか検討を行った。RT-PCR の結果、尿酸の paracellular 輸送が見られる BeWo、Caco-2 細胞と胎盤において、数種類の claudin mRNA が共通に発現していた。また、LC/MS による proteomics 解析の結果、そのうちいくつかの claudin タンパク質発現を確認した。今後、発現が確認された claudin に関して機能解析を行い、尿酸輸送に関与する claudin の同定を行う予定である。

47. 腸管神経系異常腸炎発症モデルマウスにおける腸内細菌叢の役割解析

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
神谷 茂	医学部感染症学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
幡野 雅彦	千葉大学バイオメディカル研究センター	教授	Ncx KO マウス系統維持と解析
藤村 理紗	千葉大学バイオメディカル研究センター	助教	Ncx KO マウス腸管細菌等試料の調整と提供
大崎 敬子	医学部感染症学	准教授	腸内細菌叢の解析

キーワード

腸管神経、一酸化窒素、粘膜傷害、腸内細菌叢、DSS 腸炎

研究分野

生理学、細胞生物学、細菌学

1. 共同研究の目的

共同研究者らにより作製された Ncx KO マウスは腸管神経細胞の増加と機能異常を認める (Hatano et al. J Clin Invest, 1997)。今回共同研究者は Ncx KO マウスに腸管炎症が自然発症すること、DSS 投与による実験的腸炎に対する感受性が高いこと、腸管神経細胞由来の一酸化窒素が腸管において増加していることを新たに見出した。本研究では Ncx KO の腸内細菌叢を細菌学的・分子生物学的に解析することにより腸管神経・一酸化窒素増加による腸内細菌叢への影響と腸炎発症機序への関与について明らかにすることを目的とする。

2. 共同研究の内容・計画

Ncx KO マウスおよび野生型マウス、さらにはそれらのマウスに nNOS 阻害剤を投与し、腸内細菌叢について量的・質的な差が認められるかを検討する。これまでに実施した腸内細菌叢解析、細菌属特異的な 16S rRNA 遺伝子をターゲットとした定量的リアルタイム PCR からは、数種類の細菌の小腸内菌数の差を認めている。そこで、腸内フローラの構成の変化を網羅的に解析するために、次世代シーケンサーを用いたメタゲノム解析を杏林大学にて実施する。また、データの多面的解析のために、同じサンプルを Terminal Restriction Fragment Length Polymorphism Profiling (T-RFLP) 解析を実施する。得られた結果をデータマイニング法で追加解析することで、炎症の程度に関連する菌種が同定されることが予想される。

3. 研究成果（経過）

腸管において、腸炎と dysbiosis は密接に関連しており、相互作用によって両者が悪化するといわれている。本研究では、腸管神経が過剰に存在する Ncx-KO マウスを用いて、腸管神経による腸内細菌の恒常性に対する影響および、腸炎との関わりについて明らかにすることを目的としている。

DSS 誘導腸炎モデルにおいて、Ncx-KO マウスは高い致死率と著しい体重減少を認め、高率に血便を呈した。しかし、抗生物質投与によって症状が改善されたことから、Ncx-KO マウスの腸管では、dysbiosis が起きていると考えられた。マウス糞便について、GAM 培地を用いて発育した細菌数は、野生型と Ncx-KO マウスでは差を認めなかった。一方で、MacConkey 培地を用いて発育した細菌数は、Ncx-KO マウスでは、野生型と比較して、10-1000 倍増加した。さらに、Ncx-KO マウスの糞便 DNA では、腸内細菌科の菌が 10-1000 倍増加した。以上から、Ncx-KO マウスの腸管では dysbiosis が起きていると示唆された。一方で、Ncx-KO マウスの大腸組織では、神経系由来 NO 合成酵素 (nNOS) の発現が亢進していることから、NO の腸内細菌叢への影響

が考えられた。NO 還元酵素 *norV* をもつ細菌は、脱窒反応を行い、ATP を合成し、嫌気条件において生育する。マクロファージは病原細菌を貪食すると、殺菌のために NO を産生するが、*norV* を持つ大腸菌は、マクロファージ由来 NO による増殖抑制を受けないことが報告されている。そこで、糞便 DNA を用いて、*norV* 遺伝子について解析し、Nex-KO マウスでは多くの個体が高い *norV* 遺伝子の含有を示した。今後はどの細菌が *norV* 遺伝子を有しているかを明らかにするために、16S メタゲノム解析を実施して検討する予定である。

48. オクタアルギニンによる高尿酸血症治療ペプチドの細胞内送達

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
田中 弦	医学部薬理学	助教	統括、ペプチドの設計、細胞への薬物送達

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
二木 史朗	京都大学化学研究所	教授	ペプチド合成、フォトクロスリンク

キーワード

膜透過ペプチド、ペプチド治療薬、フォトクロスリンク

研究分野

ペプチド医薬

1. 共同研究の目的

本研究では、ヒトの体内で尿酸を産生する酵素であるキサンチンオキシダーゼを選択的に阻害するペプチドの細胞内送達を試み、高尿酸血症の新たな治療薬の創出を目指す。膜透過性アルギニンペプチドであるオクタアルギニン (R8) を薬物キャリアとして利用することで細胞内にペプチドを効率的に送達する。また R8 の細胞内移行を促進する受容体をフォトクロスリンク法で同定しそれを刺激することで、細胞内送達のさらなる高効率化を目指す。

2. 共同研究の内容・計画

- 尿酸産生酵素を阻害するペプチド候補を設計する。(研究代表者)
- 膜透過性ペプチドであるオクタアルギニン (R8) と細胞表面で相互作用する分子をフォトクロスリンク法によって探索し、それが細胞内移行を促進する受容体であることを示す。また受容体の刺激による細胞内移行の高効率化を行う。(共同研究者)
- R8 配列を付加した阻害ペプチドを合成し、細胞内への移行能および細胞内における阻害活性を評価する。この際に 2. で同定された受容体を刺激することで細胞内移行を促進させる。(研究代表者)

3. 研究成果(経過)

本研究では尿酸産生過剰型の高尿酸血症の新たな治療薬の創出を目指し、尿酸産生酵素阻害ペプチドを設計しこれを膜透過性ペプチドであるオクタアルギニン (R8) を用いることで細胞内に送達する。R8 は他の様々な分子と結合することでそれらを細胞内に輸送できる。しかしその輸送効率は結合した目的分子の性質やターゲットとなる細胞種で大きく異なる。そこで始めに詳細が未だ不明である R8 ペプチドの細胞内移行機序の解明を行うこととした。

R8 ペプチドは種々のエンドサイトーシスを誘起することで細胞内に取り込まれることが報告されている。そこで細胞膜表面で R8 と相互作用し細胞内移行を促進する膜タンパク質の探索を行うため、ビオチンタグと切断リンカーを含む新規光反応性 R8 (Photo-R8) を設計、合成した。切断リンカーは還元剤で切断可能なジアゾベンゼンリンカーを用いた。Photo-R8 を細胞に投与、光架橋を行った後、膜分画を行い、質量分析装置を用いてタンパク質の同定を行った。結果、多数のタンパク質が同定された。膜分画を行うことで同定されたタンパク質のうち膜タンパク質の割合は 25%から 45%に上昇した。現在、同定された膜タンパク質が R8 の細胞内移行へ寄与しているか検討中である。

49. 百日咳菌Ⅲ型分泌機構の臨床分離株における発現

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
神谷 茂	医学部感染症学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
蒲地 一成	国立感染症研究所細菌第二部	室長	臨床分離株の提供および細菌学的性状の解析
大塚 奈緒	国立感染症研究所細菌第二部	主任研究官	臨床分離株の提供および遺伝学的性状の解析
花輪 智子	医学部感染症学	講師	Ⅲ型分泌装置の発現解析

キーワード

百日咳菌、Ⅲ型分泌機構、遺伝子発現、臨床分離株、病原性関連因子

研究分野

細菌学

1. 共同研究の目的

細菌のⅢ型分泌機構（TTSS）はニードル状の分泌装置によりエフェクターとよばれる蛋白質を宿主細胞に直接打ち込むものである。注入されたエフェクターは細菌の感染に有利となるよう宿主の生理機能を修飾するが、その作用は多様であり解明されていないものも多い。百日咳菌 TTSS は病原性に関連しており、その発現量は新鮮分離株では高い。しかし継代回数の増加と共に減少するため実験室株では極めて低い。TTSS 発現を制御する因子について詳細が明らかにされていないことから本研究では臨床分離株を用いてその制御機構を解析する。

2. 共同研究の内容・計画

[研究内容]

百日咳菌は炭素源として主にグルタミン酸をエネルギー産生に利用している。これまでグルタミン酸濃度を低下させることによりⅢ型分泌機構の発現が上昇することを見いだした。この応答が菌株特異的であるかについて複数の臨床分離株を用いて検討する。

[計画]

百日咳菌臨床分離株 5 株を通常の培地またはグルタミン酸の濃度を 20%に低下させた培地で培養を行い、菌体の除去および濃縮により培地中のタンパク質を回収する。それらを SDS-PAGE で展開し、特異抗体を用いて TTSS 発現量を比較する。さらに鉄欠乏またはアミノ酸欠乏等グルタミン酸以外の栄養枯渇による TTSS 産生量への影響について調べる。

3. 研究成果（経過）

グラム陰性の病原細菌に保存されているⅢ型分泌系は、宿主に細菌細胞内で合成されたエフェクターとよばれるタンパク質を宿主細胞内に直接打ち込み、その機能を攪乱させることから、宿主-病原体相互作用に深く関わっているとされている。これまで百日咳菌のⅢ型分泌系について、その役割および発現制御についての報告数は少ない。

本研究において、その役割および発現制御機構を明らかにする目的で、臨床分離株を用いた検討を行った。百日咳菌ワクチン株ではその発現が低いことが知られているが、臨床分離株で高いという報告がある。今回、臨床分離株 5 株を用いてその発現を検討した。

その結果、これまでの報告と同様、用いた臨床分離株全てにⅢ分泌装置タンパク質が発現していることが確認された。また、新

たにⅢ分泌装置の発現はグルタミン酸欠乏により顕著に増加すること、また、自己凝集率もグルタミン酸に依存していることが明らかとなった。

百日咳菌はグルタミン酸をエネルギー産生に必要な主たる炭素源として利用しており、栄養欠乏がⅢ分泌装置の発現の誘引となることが示唆された。

50. マラリア防御免疫におけるミトコンドリア活性酸素関連性

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
小林 富美恵	医学部感染症学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
林 純一	筑波大学生命環境科学系	教授	データ解析
中田 和人	筑波大学生命環境科学系	教授	マウス病態解析
井上 信一	医学部感染症学	助教	感染実験、免疫細胞の機能解析

キーワード

マラリア、ミトコンドリア、活性酸素、防御免疫

研究分野

寄生虫免疫学、分子細胞生物学

1. 共同研究の目的

生体が免疫機能を発揮する際に、免疫細胞内のミトコンドリアが産生する活性酸素種（ROS）がどのようにして関与しているのかを解明する。特に、マラリア原虫感染における宿主の免疫応答に注目する。①ミトコンドリア由来の ROS 産生がマラリア原虫感染に与える影響（過剰免疫病態）②ミトコンドリア由来の ROS 産生がマラリア感染防御免疫の獲得に与える影響（防御免疫）等がみられるのかを検討する。

2. 共同研究の内容・計画

筑波大学の林・中田教授より、ミトコンドリア活性酸素が過剰産生しているミトコンドリア DNA 変異マウス（A11 マウス）を譲り受ける。①ミトコンドリア由来の ROS 産生がマラリア原虫感染に与える影響をしらべるため、A11 マウスと野生型マウスに強毒株マラリア原虫を感染させて、過剰免疫による病態を比較する。次に、②ミトコンドリア由来の ROS 産生がマラリア感染防御免疫の獲得に与える影響を調べるため、A11 マウスと野生型マウスに非致死性マラリア原虫を感染させて末梢血中の感染赤血球の割合を経時的に測定し、比較する。上記の検討によって変化が見られた場合、順次、各種免疫細胞の機能解析（抗体産生・サイトカイン産生）をおこなう。

3. 研究成果（経過）

生体が免疫機能を発揮する際に、免疫細胞内のミトコンドリアが産生する活性酸素種(ROS)がどのようにして関与しているのかを解明することを研究目的とする。特に、マラリア原虫感染における宿主の免疫応答に注目する。

本研究を進めるにあたり、筑波大学の林・中田教授より、ミトコンドリア活性酸素が過剰産生しているミトコンドリア DNA 変異マウス(A11 マウス)を分与された。まず、ミトコンドリア由来 ROS 産生がマラリア原虫感染に与える影響をしらべるため、A11 マウスと野生型マウスに脳マラリア症状を示す強毒株マラリア原虫を感染させて、過剰免疫による病態を比較した。強毒株マラリア原虫感染によって、野生型マウスと A11 マウスは共に全個体が死亡したが、A11 マウスでの延命がみられた。

また、脳組織では血球細胞の浸潤がみられるが、野生型マウスに比べて A11 マウスでは浸潤する細胞数が低下していることが明らかとなった。今後は、野生型マウスと A11 マウスでのサイトカイン産生能の比較をする予定である。また、抗酸化酵素促進剤や抗酸化酵素阻害剤の投与の影響をみて、今回みられた現象が活性酸素産生によるものなのかを検証していく予定である。

51. 蛋白間相互作用阻害化合物による癌治療開発

研究代表者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
菅間 博	医学部病理学	教授	統括

共同研究者

氏 名	所 属	職 名	研 究 分 野
小路 弘行	PRISM BioLab	社長	化合物提供
仲矢 丈雄	医学部病理学	助教	研究遂行

キーワード

蛋白間相互作用阻害化合物、癌治療開発、癌幹細胞、 α ヘリックス

研究分野

病理学

1. 共同研究の目的

現行の癌の標準化学療法は多くは、正常の増殖細胞も非特異的に攻撃するために副作用が強く、癌幹細胞を維持増殖する分子経路の根幹に作用しないため癌を根治できないという問題がある。本研究では、癌幹細胞の根幹を担う分子経路に直接作用し、癌の維持増殖に重要な蛋白間相互作用を選択的に阻害し、生体の正常機能に重要な蛋白間相互作用を阻害しない化合物を、ペプチドの α ヘリックス構造を模した化合物ライブラリーからスクリーニングし、癌に対する治療効果を検証する。このことで、大腸癌をはじめとする癌を、癌幹細胞から抑制しかつ副作用の少ない新しい癌治療法開発につなげる。

2. 共同研究の内容・計画

癌の維持増殖、特に癌幹細胞の維持と増殖に重要な分子経路・蛋白間相互作用を選ぶ。PRISM BioLab のペプチドの α ヘリックス構造を模した化合物ライブラリーから、それらの蛋白間相互作用を阻害する化合物を選び出し、癌細胞と正常細胞の増殖を比較するなどにより、癌を選択的に抑制する化合物をスクリーニングする。選び出した化合物に対し、腫瘍モデルマウス、腫瘍移植マウスを用いて、腫瘍抑制効果を検証する。また、癌幹細胞に対する効果も検証し、癌幹細胞治療薬の開発につなげる。

3. 研究成果（経過）

PRISM BioLab のペプチドの α ヘリックス構造を模した化合物ライブラリーから、それらの蛋白間相互作用を阻害する化合物を選び出し、癌細胞と正常細胞の増殖を比較するなどにより、癌を選択的に抑制する化合物をスクリーニングする予定であり、準備を進めていた。仲矢の自治医科大学への移籍により、本学における共同研究を終了した。

研究費採択一覧

研究費採択一覧

科学研究費助成事業（文部科学省・日本学術振興会）研究代表者一覧

(1)科学研究費補助金

	部局名	研究者名	職位	研究種目	研究課題名
1	医学部	秋元 義弘	准教授	新学術領域研究	プラズマ照射による細胞、組織への影響の分子形態学的解析
2	医学部	栗崎 健	准教授	新学術領域研究	ショウジョウバエ脳における動くグリア細胞によるグリア組織網の再構築
3	総合政策学部	佐藤 美由紀	准教授	基盤研究(B)	南米南部共同市場原加盟国の非憲法裁判所型違憲審査と日本の付随的審査の比較検討
4	医学部	長谷川 浩	准教授	基盤研究(C)	近赤外線スペクトロスコピーを用いた認知症周辺症状の臨床評価
5	保健学部	谷口 綾	助教	研究活動スタート支援	緊急帝王切開を受けた女性の産後 3～4 か月までの心理的プロセスに関する研究
6	医学部	津田（井上） 愛美	特別研究員 (PD)	特別研究員奨励費	遺伝連鎖群解析法を用いた赤外期マラリア免疫の標的遺伝子の探索と免疫誘導性の検証

(2)一部基金（平成 24 年度以降採択の基盤研究(B)および若手研究(A)

	部局名	研究者名	職位	研究種目	研究課題名
1	医学部	赤川 公朗	教授	基盤研究(B)	シタキシシン 1 アイソフォームのシナプス伝達における機能分化
2	医学部	大野 秀樹	教授	基盤研究(B)	運動は白色脂肪細胞から褐色脂肪細胞への分化を誘導するか：肥満予防・治療への応用
3	医学部	塩原 哲夫	教授	基盤研究(B)	ヘルペスウイルスが引き金をひく炎症性疾患におけるパトロール単球の役割
4	医学部	中島 剛	助教	若手研究(A)	脊髄障害後の代償神経システム構築に着目する新たな運動機能回復戦略
5	医学部	木崎 節子	教授	基盤研究(B)	運動による炎症性老化予防効果におけるマクロファージ時計遺伝子の役割
6	医学部	呉屋 朝幸	名誉教授	基盤研究(B)	我が国の外科領域におけるノンテクニカル・スキル評価システムの構築
7	医学部	栗田 昌和	助教	基盤研究(B)	間葉系細胞から上皮細胞への直接転換による新規皮膚潰瘍治療法の開発
8	医学部	石井 晴之	講師	基盤研究(B)	骨髄異形成症候群に合併した続発性肺動脈硬化の国際共同研究

(3)学術研究助成基金助成金（平成 23 年度採択分）

	部局名	研究者名	職位	研究種目	研究課題名
1	総合政策学部	荒井 将志	講師	若手研究(B)	グローバル合理化段階における多国籍企業の国際的業際標準化と新市場形成の研究
2	医学部	渡辺 雅人	非常勤講師	若手研究(B)	細菌性肺炎で抗G-C S F 自己抗体が好中球機能を制御するメカニズムの解析
3	医学部	増田 正次	学内講師	若手研究(B)	蝸牛内完全埋込み型人工コルチ器作製へむけた人工シナプス形成を確立するための研究

(4)学術研究助成基金助成金（平成 24 年度採択分）

	部局名	研究者名	職位	研究種目	研究課題名
1	医学部	原 由紀子	講師	基盤研究(C)	J C ウイルス感染が誘導する PML-NB s の変化と、細胞腫瘍化の解明
2	医学部	三嶋 竜弥	助教	基盤研究(C)	シナプス伝達におけるシタキシシン 1 B 特異的な生理機能の解明
3	医学部	櫻井 拓也	助教	基盤研究(C)	新規脂肪組織リモデリング分子・デルマトポンチンに対する運動効果の解明
4	保健学部	岸野 智則	教授	基盤研究(C)	生活習慣病の病勢や発症の危険性を超音波の新技术により画像的・定量的に評価する試み
5	医学部	秋元 義弘	准教授	基盤研究(C)	糖尿病性腎症に伴う糸球体分子構築の変化の解析
6	医学部	本間 聡起	准教授	基盤研究(C)	高齢者慢性疾患のケアに対する汎用性の高いシステムを用いた遠隔診療の臨床的有効性
7	医学部	蔵田 訓	学内講師	基盤研究(C)	肺炎マイコプラズマ感染と続発する合併症の発症に関与する T h 1 7 細胞の働き
8	医学部	高橋 良	助教	基盤研究(C)	アトピー性皮膚炎患者は、なぜヘルペスウイルスに感染しやすいのか？
9	医学部	上野 貴之	講師	基盤研究(C)	乳癌治療における間質反応とエネルギー代謝に関する研究
10	医学部	丸山 啓介	学内講師	基盤研究(C)	仮想現実による頭皮投影型新規脳手術ナビゲーションシステムの開発

11	医学部	岡田アナベル あやめ	教授	基盤研究(C)	マイクロRNAを標的としたベーチット病における抗TNF抗体治療の分子機序の解明
12	医学部	蔵口 潤	助教	基盤研究(C)	口腔癌の顎骨浸潤抑制に対してmTOR・COX-2による新たな治療法の開発
13	医学部	米澤 英雄	学内講師	基盤研究(C)	口腔内細菌が及ぼすヘリコバクター・ピロリ定着への影響の解析と口腔内マーカーの探索
14	保健学部	中島 恵美子	教授	基盤研究(C)	放射線治療を受けるがん患者への看護支援モデルの開発
15	保健学部	角田 ますみ	准教授	基盤研究(C)	介護職における倫理教育の現状と倫理的問題の認識および対処との関連要因
16	保健学部	下島 裕美	准教授	基盤研究(C)	ケア提供者のための死生学教育ツールの開発
17	保健学部	門馬 博	助教	若手研究(B)	半側空間失認はメンタルプラクティスの適応となりうるか？
18	医学部	平井 和之	講師	若手研究(B)	受精に依存した胚発生開始の遺伝的制御機構の解析
19	医学部	新倉 保	助教	若手研究(B)	マラリアの病態重症化を制御する弱毒性原虫特異的宿主免疫賦活化機構の解明
20	保健学部	亀田 真美	講師	若手研究(B)	造血幹細胞移植患者の多職種連携がんリハビリテーションプログラム構築と効果検証

(5)学術研究助成基金助成金（平成25年度採択分）

	部局名	研究者名	職位	研究種目	研究課題名
1	医学部	荻田 香苗	准教授	基盤研究(C)	大学生の味覚と自律神経機能に影響を及ぼす要因・食生活・心身ストレスとの関連
2	保健学部	丹羽 正利	教授	基盤研究(C)	脳障害患者などに関わる腹壁筋低緊張と姿勢障害の病態解明
3	医学部	渋谷 賢	学内講師	基盤研究(C)	運動の楽しさを生むコントロール感：身体図式の変化が運動主体感に及ぼす影響
4	医学部	犬飼 浩一	准教授	基盤研究(C)	糖質制限食に対する生体反応～糖尿病モデルマウスを用いた遺伝子学的探索～
5	医学部	須賀 圭	講師	基盤研究(C)	ERストレス応答性 ERGA-SNARE のAD蛋白分解とオートファジーにおける役割
6	保健学部	相磯 聡子	准教授	基盤研究(C)	肺癌の早期診断を目指した血中miRNA定量に関する基盤的研究
7	総合政策学部	北島 勉	教授	基盤研究(C)	タイにおける抗HIV多剤併用療法の提供方法に対する患者の選好に関する研究
8	医学部	萬 知子	教授	基盤研究(C)	中心静脈カテーテル関連血流感染症撲滅のためのケアバンドル予防策徹底とその教育
9	医学部	神崎 恒一	教授	基盤研究(C)	大脳皮質下病変に関連する認知障害及び機能障害とアミノ酸トランスポーターの関与
10	医学部	長島 文夫	准教授	基盤研究(C)	高齢者総合的機能評価によるQOLに配慮した抗がん剤新規投与法の開発
11	医学部	佐藤 徹	教授	基盤研究(C)	肺動脈性肺高血圧症患者試料を用いた BMPR2 遺伝子のエピジェネティクス制御の解明
12	医学部	石田 均	教授	基盤研究(C)	2型糖尿病での膵ラ氏島内マクロファージ浸潤の分子機構の解明とその予防戦略の構築
13	医学部	狩野 葉子	教授	基盤研究(C)	重症薬疹の治療効果予測のためのバイオマーカーの確立
14	医学部	小林 敬明	助教	基盤研究(C)	大腸癌先進部におけるEMTに関する検討
15	医学部	鈴木 裕	学内講師	基盤研究(C)	膵粘液性嚢胞腫瘍の発生進展におけるエストロゲンレセプターの関与と役割を初めて解明
16	医学部	永根 基雄	教授	基盤研究(C)	悪性神経膠腫に対するDNA修復機構阻害による抗癌剤増感治療法の開発
17	保健学部	佐々木 裕子	准教授	基盤研究(C)	はじめて親となる夫婦のメンタルヘルス予防に向けたペアレンティングプログラムの効果
18	保健学部	原田 祐輔	助教	挑戦的萌芽研究	脳血管疾患患者の訪問リハビリテーションにおける自己実現の欲求の充足に関する研究
19	医学部	栗田 昌和	助教	挑戦的萌芽研究	動静脈奇形の発症・増大にかかわる病態生理の解明
20	保健学部	堀口 幸太郎	講師	若手研究(B)	プロテオグリカンによる下垂体前葉細胞の形態・機能調節機構の解明
21	医学部	青柳 共太	学内講師	若手研究(B)	膵β細胞における第2相インスリン分泌制御機構の解明
22	医学部	倉山 亮太	特任講師	若手研究(B)	ボドサイトの分化と機能維持を制御する新規エピジェネティック分子NSD3の役割

研究費採択一覧

23	医学部	菅 浩隆	助教	若手研究(B)	創傷治癒過程における単球・マクロファージ系細胞と線維芽細胞との相互作用の解明
24	医学部	今村 三希子	医員	若手研究(B)	癒痕形成における上皮間葉作用に関する研究
25	医学部	中山 玲玲	医員	若手研究(B)	線維芽細胞重集団の形質転換による新しい癒痕治療の開発
26	医学部	清家 志円	医員	若手研究(B)	遊離筋肉移植における神経二重支配のメカニズムに関する研究
27	保健学部	百成 香帆	助教	若手研究(B)	新人助産師のリアリティショックに効果的な職場サポート - 就職後 1 年に焦点をあてて -
28	保健学部	熊野 (大平) 奈津美	助教	若手研究(B)	軽度要介護高齢者と家族介護者、看護師が共同作成する退院時排尿ケアガイドの開発
29	保健学部	瀬野 晋一郎	講師	若手研究(B)	非接触体表圧刺激による知覚閾値評価システムの開発
30	医学部	千葉 知宏	助教	若手研究(B)	STAT3 によるグリオブラストーマ幹細胞化の解析とその応用

(6)学術研究助成基金助成金 (平成 26 年度採択分)

	部局名	研究者名	職位	研究種目	研究課題名
1	医学部	小笠原 準悦	助教	基盤研究(C)	身体運動は骨格筋前駆細胞の褐色脂肪細胞化をどのように誘導するか
2	外国語学部	高木 眞佐子	教授	基盤研究(C)	HM136 写本の成立から印刷までの過程
3	医学部	末弘 淳一	助教	基盤研究(C)	がん微小環境におけるアミノ酸トランスポーター LAT1 の役割
4	医学部	今泉 美佳	准教授	基盤研究(C)	妊娠期膵β細胞におけるインスリン分泌能亢進機構の解明
5	保健学部	大河戸 光章	講師	基盤研究(C)	子宮頸部細胞浮遊液を活用した HPV 持続感染予測と細胞診の検出感度向上に関する研究
6	医学部	花輪 智子	講師	基盤研究(C)	緊縮応答による百日咳菌の病原性発現調節機構
7	医学部	松井 敏史	准教授	基盤研究(C)	アルコール依存による認知症の責任病変の同定ー画像解析と ALDH2 遺伝子多型の関与
8	医学部	松島 早月	実験助手	基盤研究(C)	全ゲノム解析と質量分析による抗酸菌の新たな分類同定法の確立
9	医学部	吉野 秀朗	教授	基盤研究(C)	家族性大動脈瘤・大動脈解離の遺伝的背景と長鎖非コード RNA による制御機構
10	医学部	松下 健一	講師	基盤研究(C)	臨床データとエビジェネティックスの統合に立脚した急性心不全の病態解明と治療応用
11	保健学部	新江 賢	講師	基盤研究(C)	キチンによるアレルギー応答誘導機構の解析
12	医学部	和田 裕雄	講師	基盤研究(C)	環境曝露による気道炎症の解明：感染と喫煙
13	医学部	大塚 弘毅	助教	基盤研究(C)	EGFR germline 変異による遺伝性肺癌の臨床および分子生物学的研究
14	医学部	塩川 芳昭	教授	基盤研究(C)	中枢神経系悪性リンパ腫の病因遺伝子と予後因子の解明
15	医学部	慶野 博	准教授	基盤研究(C)	硝子体による眼内免疫寛容の作用機構の解明
16	医学部	渡邊 交世	助教	基盤研究(C)	眼炎症疾患における microRNA の機能解析
17	保健学部	加賀谷 聡子	准教授	基盤研究(C)	虚血性心疾患患者のリスク認識に焦点をあてたセルフマネジメントプログラムの開発
18	保健学部	大浦 紀彦	教授	基盤研究(C)	重症下肢虚血に対する創傷評価ツールの開発
19	保健学部	大金 ひろみ	准教授	基盤研究(C)	地域住民と専門職による「看取りのケアの縁側づくり」の協働型アクションリサーチ
20	医学部	中島 剛	助教	挑戦的萌芽研究	随意運動に関わる脊髄神経機構に可塑性を促す神経リハビリテーション法の開発
21	保健学部	村田 麻喜子	講師	挑戦的萌芽研究	ヤマトヒメミミズに見る有性生殖と無性生殖を転換する機構とその意義の探究
22	保健学部	橋立 博幸	講師	若手研究(B)	維持期脳卒中片麻痺者における簡便な教示による歩行練習の効果の検証
23	医学部	島田 正亮	助教	若手研究(B)	児童養護施設における措置変更に関する実証的研究
24	医学部	津田(井上) 愛美	研究員	若手研究(B)	マンソン住血吸虫感染は"赤外期"マラリア感染防御免疫を攪乱するか
25	医学部	三輪 陽介	助教	若手研究(B)	自動車事故と外傷の予防を目的とした反射性失神の危険予測

26	保健学部	長谷川 瑠美	助教	若手研究(B)	無毛部皮膚エクリン汗腺におけるニューロトロフィン作用についての組織形態学的解析
27	医学部	菊地 俊暁	助教	若手研究(B)	fMRI を用いたうつ病患者における認知行動療法の反応予測因子の探索
28	医学部	紅谷 鮎美	医員	若手研究(B)	新しい一時的人工肛門造設の基準の検討
29	医学部	鶴沢 康二	助教	若手研究(B)	重症病態における内皮細胞機能の解明
30	医学部	小柏 靖直	助教	若手研究(B)	頭頸部癌細胞に対する C e t u x i m a b の効果予測因子と浸潤メカニズムの解明
31	医学部	江藤 ひとみ	助教	若手研究(B)	扁平母斑メラノサイトの分子細胞生理学的解析と病態解明
32	医学部	井原 玲	助教	若手研究(B)	静脈奇形に対する加温生理食塩水注入療法の開発
33	医学部	多田 朋子	レジデント	若手研究(B)	静脈奇形の発症・増大にかかわる病態生理の解明
34	医学部	石川 智	助教	若手研究(B)	児童養護施設における性的問題の実態と対応に関する調査研究
35	医学部	北条 史	助教	若手研究(B)	H. pylori の原生動物を介した環境への分布に関する研究

科学研究費助成事業（日本学術振興会）研究分担者一覧（研究代表者：学内研究者）

	部局名	研究者名	職位	研究種目	研究課題名	研究代表者	
1	医学部	管間 博	教授	基盤研究(C)	JC ウィルス感染が誘導する PML-NBs の変化と、細胞腫瘍化の解明	医学部	原 由紀子
2	医学部	渡邊 卓	講師	基盤研究(C)	生活習慣病の病勢や発症の危険性を超音波の新技術により画像的・定量的に評価する試み	保健学部	岸野 智則
3	医学部	大西 宏明	准教授				
4	医学部	池田 哲也	助教	基盤研究(C)	口腔癌の顎骨浸潤抑制に対して mTOR・COX-2 による新たな治療法の開発	医学部	藏口 潤
5	医学部	吉田 正雄	講師	基盤研究(C)	大学生の味覚と自律神経機能に影響を及ぼす要因-食生活・心身ストレスとの関連	医学部	荏田 香苗
6	医学部	石田 均	教授	基盤研究(C)	糖質制限食に対する生体反応～糖尿病モデルマウスを用いた遺伝子学的検索～	医学部	犬飼 浩一
7	医学部	大西 宏明	准教授	基盤研究(C)	肺癌の早期診断を目指した血中 miRNA 定量に関する基盤的研究	保健学部	相磯 聡子
8	医学部	森山 潔	講師	基盤研究(C)	中心静脈カテーテル関連血流感染症撲滅のためのケアバンドル予防策徹底とその教育	医学部	萬 知子
9	医学部	吉野 秀朗	教授	基盤研究(C)	肺動脈性肺高血圧症患者試料を用いた BMPR2 遺伝子のエピジェネティクス制御の解明	医学部	佐藤 徹
10	医学部	犬飼 浩一	准教授	基盤研究(C)	2 型糖尿病での脾ラ氏島内マクロファージ浸潤の分子機構の解明とその予防戦略の構築	医学部	石田 均
11	医学部	正木 忠彦	教授	基盤研究(C)	大腸癌先進部における EMT に関する検討	医学部	小林 敬明
12	医学部	杉山 政則	教授	基盤研究(C)	膵粘液性嚢胞腫瘍の発生進展におけるエストロゲンレセプターの関与と役割を初めて解明	医学部	鈴木 裕
13	医学部	阿部 展次	准教授				
14	医学部	神谷 茂	教授	基盤研究(C)	緊縮応答による百日咳菌の病原性発現調節機構	医学部	花輪 智子
15	医学部	渡邊 卓	教授	基盤研究(C)	全ゲノム解析と質量分析による抗酸菌の新たな分類同定法の確立	医学部	松島 早月
16	医学部	大塚 弘毅	助教				
17	医学部	大西 宏明	准教授				
18	医学部	佐藤 徹	教授	基盤研究(C)	家族性大動脈瘤・大動脈解離の遺伝的背景と長鎖非コード RNA による制御機構	医学部	吉野 秀朗
19	医学部	渡邊 卓	教授	基盤研究(C)	EGFR germline 変異による遺伝性肺癌の臨床および分子生物学的研究	医学部	大塚 弘毅
20	医学部	藤原 正親	講師				
21	医学部	横山 琢磨	助教				
22	医学部	松島 早月	実験助手				

研究費採択一覧

23	医学部	大西 宏明	准教授	基盤研究(C)	EGFR germline 変異による遺伝性肺癌の臨床および分子生物学的研究	医学部	大塚 弘毅
24	医学部	近藤 晴彦	教授	基盤研究(C)	我が国の外科領域におけるノンテクニカル・スキル評価システムの構築	医学部	呉屋 朝幸
25	医学部	江藤 ひとみ	助教	基盤研究(C)	間葉系細胞から上皮細胞への直接転換による新規皮膚潰瘍治療法の開発	医学部	栗田 昌和
26	医学部	菅 浩隆	助教	基盤研究(C)			
27	医学部	皿谷 健	助教	基盤研究(C)	骨髄異形成症候群に合併した続発性肺胞蛋白症の国際共同研究	医学部	石井 晴之
28	医学部	島田 正亮	助教	基盤研究(C)	ケア提供者のための死生学教育ツールの開発	保健学部	下島 裕美
29	医学部	石川 智	助教				
30	保健学部	蒲生 忍	教授				
31	保健学部	蒲生 忍	教授	基盤研究(C)	肺動脈性肺高血圧症患者試料を用いた BMPR2 遺伝子のエピジェネティクス制御の解明	医学部	佐藤 徹
32	保健学部	藤井 雅彦	教授	基盤研究(C)	子宮頸部細胞浮遊液を活用した HPV 持続感染予測と細胞診の検出感度向上に関する研究	保健学部	大河戸 光章
33	保健学部	蒲生 忍	教授	基盤研究(C)	家族性大動脈瘤・大動脈解離の遺伝的背景と長鎖非コード RNA による制御機構	医学部	吉野 秀朗
34	保健学部	加賀谷 聡子	准教授	基盤研究(C)	放射線治療を受けるがん患者への看護支援モデルの開発	保健学部	中島 恵美子
35	保健学部	中島 恵美子	教授	基盤研究(C)	虚血性心疾患患者のリスク認識に焦点をあてたセルフマネジメントプログラムの開発	保健学部	加賀谷 聡子
36	医学部	塩川 芳昭	教授	基盤研究(C)	DPC 情報を用いた脳卒中大規模データベースによるベンチマーキングに関する研究	九州大学	飯原 弘二
37	医学部	岩下 光利	教授	新学術領域研究	プラズマによる細胞/組織の活性化・改善及び再生医療への応用展開	東京都市大学	平田 孝道
38	医学部	栗崎 健	准教授	新学術領域研究	グリアアセンブリ動作原理の解明	山梨大学	小泉 修一
39	医学部	大木 紫	教授	新学術領域研究	脳内身体表現の変容を促す神経機構	国際電気通信基礎技術研究所	今水 寛
40	医学部	森山 潔	講師	基盤研究(B)	グラム陰性菌の V 抗原及びその相同タンパクに対する血清疫学調査	京都府立医科大学	佐和 貞治
41	医学部	神谷 茂	教授	基盤研究(B)	ヘリコバクター属感染と膵がん・胆道がんのリスク	愛知医科大学	菊池 正悟
42	医学部	赤木 美智男	教授	基盤研究(C)	染色体異常のある子どもの保育—心疾患の影響—	東京家政大学	高野 貴子
43	医学部	東原 英二	教授	基盤研究(C)	多発性嚢胞腎の細胞マトリックス接着応答とエピジェネティクス修飾による治療法の研究	奈良県立医科大学	石橋 道男
44	医学部	横井 秀格	准教授	基盤研究(C)	癌・精巣抗原 TBX101 を分子標的とした頭頸部癌ミサイル療法の開発	順天堂大学	吉武 洋
45	医学部	菅間 博	教授	基盤研究(C)	神経内分泌肺癌における神経内分泌分化形質獲得メカニズムの全容解明と治療への応用	千葉大学	矢澤 卓也
46	医学部	原 由紀子	講師	基盤研究(C)			
47	医学部	藤原 正親	講師	基盤研究(C)			
48	医学部	下山田 博明	講師	基盤研究(C)			
49	医学部	山口 芳裕	教授	基盤研究(C)	ウェーブレット変換に基づく心電図波形の高精度識別システムの実用化に向けた検証	徳島大学	大屋 英徳
50	医学部	石井 晴之	講師	基盤研究(C)	吸入 GM-CSF は肺胞蛋白症病変をどのように改善するか	新潟大学	田澤 立之
51	医学部	神谷 茂	教授	基盤研究(C)	胆道閉鎖症術後と乳幼児の肝機能障害におけるヘリコバクター・ヘパティカスの役割解明	兵庫医科大学	奥田 真珠美

52	医学部	大崎 敬子	講師	基盤研究(C)	胆道閉鎖症術後と乳幼児の肝機能障害におけるヘリコバクター・ヘパティカスの役割解明	兵庫医科大学	奥田 真珠美
53	医学部	上野 貴之	講師	基盤研究(C)	乳癌ホルモン療法効果予測におけるメニンの可能性	(財)田附興風会	山内 清明
54	医学部	白土 健	助教	基盤研究(B)	亜鉛欠乏によるアドレナリン受容体・脱共益タンパク質遺伝子発現・免疫・ストレス応答	早稲田大学	今泉 和彦
56	医学部	中島 亨	准教授	基盤研究(C)	就労している成人2型糖尿病患者への睡眠ケアアセスメントガイド作成に向けた基礎研究	順天堂大学	近藤 ふさえ
57	保健学部	北林 蒔子	准教授	基盤研究(C)	労働者の蓄積疲労改善に資する食生活・生活習慣プログラム作成に関する研究	東京医科大学	高宮 朋子
58	保健学部	田中 浩輔	教授	基盤研究(C)	消化管系の運動運動の中核および末梢神経機構	首都大学東京	黒川 信
59	保健学部	橋立 博幸	講師	基盤研究(C)	有病者に対する医学的リハビリテーション適用度の指標化とサービス供給の分析研究	吉備国際大学	原田 和宏
60	保健学部	吉野 純	講師	基盤研究(C)	子育て支援の輪をつなぐ小児医療と福祉のネットワークおよびプログラムの開発	首都大学東京	飯村 直子

(研究代表者：学外研究者)

	部局名	研究者名	職位	研究種目	研究課題名	研究代表者	
61	外国語学部	八木橋 宏男	准教授	基盤研究(C)	通時的視点からのメタファ理論の検証	関西外国語大学	橋本 功
62				基盤研究(C)	国語科と英語科の連携による教員と学習者のための教科内容高度化プログラム開発	兵庫教育大学	菅井 三実
63	外国語学部	坂本 ロビン	教授	基盤研究(B)	教育イノベーションとしての「授業研究」の普及に関する事例研究	鳴門教育大学	小野 由美子
64	外国語学部	斉藤 智志	教授	基盤研究(C)	普遍主義と多元主義の相互検討－ショーペンハウアーとニーチェを中心に	龍谷大学	竹内 綱史
65	外国語学部	倉林 秀男	准教授	基盤研究(C)	「生活者としての外国人」支援のための公共デザイン（看板・提示物）調査研究	北陸先端科学技術大学院大学	本田 弘之
66	総合政策学部	久野 新	講師	基盤研究(C)	日中韓の制度的経済統合と TPP	環日本海経済研究所	中島 朋義
67	総合政策学部	木村 有理	准教授	基盤研究(B)	ポスト・コーポレーションとイスラーム的企業：企業の多元的展開の方向性に関する研究	中央大学	櫻井 秀子
68	総合政策学部	荒井 将志	講師	挑戦的萌芽研究	新興国の自律的ビジネス生態系と日系企業のソーシャル・ビジネスモデルに関する研究	国士舘大学	林 偵史

平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金 研究代表者

	部局名	研究者名	職位	研究事業名	研究課題名
1	医学部	有村 義宏	教授	難治性疾患等政策研究事業	難治性血管炎に関する調査研究
2	医学部	神崎 恒一	教授	認知症対策総合研究事業	病・診・介護の連携による認知症ケアネットワーク構築に関する研究事業
3	医学部	塩原 哲夫	教授	難治性疾患等政策研究事業	重症多形滲出性紅斑に関する調査研究

平成 26 年度治験推進研究事業 研究代表者

	部局名	研究者名	職位	研究事業名	研究課題名
1	医学部	平形 明人	教授	治験推進研究事業	治験の実施に関する研究 【ブリリアントブルーG250】

平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金 研究分担者

	部局名	研究者名	職名	研究事業名	研究課題名	研究代表者	
1	医学部	要 伸也	教授	難治性疾患等政策研究事業	進行性腎障害に関する調査研究	名古屋大学	松尾 清一
2	医学部	佐藤 徹	教授	難治性疾患等政策研究事業	呼吸不全に関する調査研究	千葉大学	巽 浩一郎
3	医学部	神崎 恒一	教授	長寿科学総合研究事業	高齢者在宅医療に関する多職種協働の阻害要因を克服する教育システムの構築に関する研究	国立長寿医療研究センター	鳥羽 研二

研究費採択一覧

4				認知症対策総合研究事業	認知症非薬物療法の普及促進による介護負担の軽減を目指した地域包括的ケア研究	国立長寿医療研究センター	鳥羽 研二
5	医学部	神崎 恒一	教授	長寿科学総合研究事業	加齢による運動器への影響に関する研究・サルコペニアに関する包括的検討	国立長寿医療研究センター	原田 敦
6				地域医療基盤開発推進研究事業	被災地の再生を考慮した在宅医療の構築に関する研究	国立長寿医療研究センター	大島 伸一
7	医学部	松井 敏史	准教授	長寿科学総合研究事業	高齢者の薬物治療の安全性に関する研究	東京大学	秋下 雅弘
8	医学部	菊地 俊暁	学内講師	障害者対策総合研究事業	認知行動療法等の精神療法の科学的エビデンスに基づいた標準治療の開発と普及に関する研究	国立精神・神経医療研究センター	大野 裕
9	医学部	杉山 政則	教授	難治性疾患等政策研究事業	難治性膝疾患に関する調査研究	近畿大学	竹山 亘典
10	医学部	荏澤 融司	教授	難治性疾患等政策研究事業	小児期発症の希少難治性肝胆膵疾患における包括的な診断・治療ガイドライン作成に関する研究	東北大学	仁尾 正記
11				難治性疾患等政策研究事業	小児期からの消化器系希少難治性疾患群の包括的調査研究とシームレスなガイドライン作成	九州大学	田口 智章
12	医学部	塩川 芳昭	教授	循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業	脳卒中急性期医療の地域格差の可視化と縮小に関する研究	九州大学	飯原 弘二
13	医学部	栗田 昌和	助教	難治性疾患等政策研究事業	難治性血管腫・血管奇形・リンパ管腫・リンパ管腫症および関連疾患についての調査研究	川崎医科大学 附属川崎病院	三村 秀文
14	医学部	平形 明人	教授	医療機器開発推進研究事業	読書が可能な人工視覚システム(脈絡膜上・経網膜電気刺激(STS)法)の実用化	大阪大学	不二 門尚
15	医学部	山田 昌和	教授	難治性疾患等政策研究事業	希少難治性角膜疾患の疫学調査	大阪大学	西田 幸二
16	医学部	原 由紀子	講師	難治性疾患等政策研究事業	プリオン病及び遅発性ウイルス感染症に関する調査研究	金沢大学	山田 正仁
17	医学部	神谷 茂	教授	がん対策推進総合研究事業	胃がん予防のための感染検査と除菌治療を組み込んだ成人および中高生に対するピロリ菌感染対策のガイドライン作成	北海道大学	加藤 元嗣
18	医学部	菊地 俊明	学内講師	特別研究事業	難聴高齢者への聴覚補助具による認知症予防の可能性を検討する研究	慶応義塾大学	小川 郁
19	医学部	要 伸也	教授	難治性疾患等政策研究事業	難治性血管炎に関する調査研究	杏林大学	有村 義宏
20	医学部	駒形 嘉紀	准教授	難治性疾患等政策研究事業	難治性血管炎に関する調査研究	杏林大学	有村 義宏
21	医学部	須藤 紀子	非常勤講師	長寿科学総合研究事業	高齢者の薬物治療の安全性に関する研究	東京大学	秋下 雅弘
22	医学部	正木 忠彦	教授	難治性疾患等政策研究事業	我が国における Idiopathic Slow Contipation の疫学・診断・治療の実態調査	横浜市立大学 附属病院	中島 淳
23	医学部	永根 基雄	教授	医療技術実用化総合研究事業	症候性脳放射線壊死に対する核医学的診断とベバシズマブの静脈内投与による治療	大阪医科大学	宮武 伸一
24	医学部	野村 英樹	教授	地域医療基盤開発推進研究事業	医師臨床体制の到達目標とその評価の在り方に関する研究	聖路加大学	福井 次矢
25	医学部	後藤田 貴也	教授	難治性疾患等政策研究事業	原発性高脂血症に関する調査研究	自治医科大学	石橋 俊
26	保健学部	大木 幸子	教授	エイズ対策研究事業	地域において HIV 陽性等のメンタルヘルスを支援する研究	ぶれいす東京	樽井 正義
27	総合政策学部	北島 勉	教授	地球規模保健課題推進研究事業	統一した分析フォーマットを用いた国際保健領域における官民連携事例の分析	順天堂大学	湯浅 資之
28	総合政策学部	マルコム ヘンリ フィールド	教授	循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業	若年就労者に向けた健康日本 21 普及啓発のためのエンターテイメント・エデュケーショントランスメディアプログラムの開発と評価	熊本大学	河村 洋子

平成 26 年度戦略的国際科学協力推進事業

	部局名	研究者名	職名	研究事業名	研究課題名
1	医学部	小林 富美恵	教授	医療分野国際科学技術 共同研究開発推進事業	三日熱マラリアの重症化における TLR の役割と重症化を 予知する早期診断技術の開発

平成 26 年度厚生労働科学研究費委託費 研究代表者

	部局名	研究者名	職名	研究事業名	研究課題名
1	医学部	古瀬 純司	教授	革新的がん医療実用化 研究事業	切除不能膵癌に対する標準治療の確立に関する研究
2	医学部	長島 文夫	准教授	革新的がん医療実用化 研究事業	高齢がんを対象とした臨床研究の標準化とその普及に関 する研究

平成 26 年度厚生労働科学研究費委託費 研究分担者

	部局名	研究者名	職名	研究事業名	研究課題名	研究代表者	
1	医学部	要 伸也	教授	難治性疾患等実 用化研究事業	慢性腎不全診療最適化による新規透析導 入減少実現のための診療システム構築に 関する研究	筑波大学	山縣 邦弘
2	医学部	千葉 厚郎	教授	難治性疾患等実 用化研究事業	免疫性ニューロパチ-の治療反応性予測 に基づく有効な治療戦略の構築	近畿大学	楠 進
3	医学部	石井 晴之	講師	難治性疾患等実 用化研究事業	肺蛋白症、遺伝性間質性疾患に関する 研究：重症難治化要因とその克服	近畿中央	井上 義一
4	医学部	古瀬 純司	教授	革新的がん医療 実用化研究事業	胆道がんに対する治療法の確立に関する 研究	国立がん研究センター 中央病院	奥坂 拓志
5				革新的がん医療 実用化研究事業	消化器神経内分泌癌に対する標準治療の 確立に関する研究	国立がん研究センター 中央病院	森実 千種
6	医学部	神崎 恒一	教授	長寿科学研究開 発事業	地域包括ケアにおける摂食嚥下および栄 養支援のための評価ツールの開発とその 有用性に関する検討	日本歯科大学	菊谷 武
7	医学部	正木 忠彦	教授	革新的がん医療 実用化研究事業	直腸癌側方骨盤リンパ節転移の術前診断 の妥当性に関する観察研究	国立がん研究センター 中央病院	志田 大
8	医学部	塩川 芳昭	教授	循環器疾患・糖 尿病等生活習慣 病対策実用化研 究事業	発症時刻不明の脳梗塞患者に対する静注 血栓溶解療法の適応拡大を目指した臨床 研究	国立循環器センター	豊田 一則
9	医学部	市村 正一	教授	長寿医療科学研 究開発事業	骨粗鬆症性椎体骨折に対する保存的初期 治療の指針策定	東京医科歯科大学	大川 淳
10	医学部	森井 健司	准教授	革新的がん医療 実用化研究事業	高悪性度軟部腫瘍に対する標準治療確立 のための研究	九州大学	岩本 幸英
11	医学部	塩原 哲夫	教授	難治性疾患等実 用化研究事業	重症薬疹における特異的細胞死誘導受容 体をターゲットにした新規治療薬開発	北海道大学	阿部 理一郎
12	医学部	原 由紀子	講師	難治性疾患等実 用化研究事業	プリオン病及び遅発性ウイルス感染症に 分子病態解明・治療法開発に関する研究	金沢大学	山田 正仁
13	医学部	長島 文夫	准教授	革新的がん医療 実用化研究事業	超高齢者社会における治癒困難な高齢切 除不能進行再発大腸癌患者に対する標準 治療確立のための研究	国立がん研究センター 中央病院	濱口 哲弥
14				長寿科学研究開 発事業	地域包括ケアにおける摂食嚥下および栄 養支援のための評価ツールの開発とその 有用性に関する検討	日本歯科大学	菊谷 武
15	医学部	永根 基雄	教授	革新的がん医療 実用化研究事業	標準治療抵抗性神経膠芽腫に対するペプ チドワクチンの第Ⅲ相臨床研究	久留米大学	伊東 恭悟
16				革新的がん医療 実用化研究事業	予後不良の神経膠腫に対する標準治療の 確立と希少癌組織のバイオバンクを目的 とした多施設共同研究	国立がん研究センター 中央病院	成田 善孝
17				革新的がん医療 実用化研究事業	中枢神経系原発悪性リンパ腫に対するテ モゾロミドを用いた標準治療確立に関す る研究	埼玉医科大学	西川 亮
18	医学部	正木 忠彦	教授	革新的がん医療 実用化研究事業	超高齢者社会における治癒困難な高齢切 除不能進行再発大腸癌患者に対する標準 治療確立のための研究	国立がん研究センター 中央病院	濱口 哲弥
19	医学部	呉屋 朝幸	名誉 教授	長寿科学研究開 発事業	地域包括ケアにおける摂食嚥下および栄 養支援のための評価ツールの開発とその 有用性に関する検討	日本歯科大学	菊谷 武

平成 26 年度がん研究開発費

	部局名	研究者名	職名	研究課題名	研究代表者	
1	医学部	古瀬 純司	教授	成人固形がんに対する標準治療確立のための基盤研究	国立がん研究センター中央病院	飛内 賢正
2				陽子線治療の有効性検証を目的とした多施設臨床試験の実施とその体制整備	国立がん研究センター中央病院	秋元 哲夫
3	医学部	長島 文夫	准教授	超高齢化社会における治療困難な後期高齢がん患者に対する標準治療の確立および個別化への応用に関する臨床研究	国立がん研究センター中央病院	濱口 哲弥

平成 26 年度長寿医療研究開発費

	部局名	研究者名	職名	研究課題名	研究代表者	
1	医学部	神崎 恒一	教授	日本人における大脳白質病変の老年症候群に及ぼす作用と危険因子の解明に関する研究	国立長寿医療研究センター	櫻井 孝
2				虚弱の進行に関わる要因に関する研究	国立長寿医療研究センター	佐竹 昭介
3				MCI 全国有症率調査と認知症診断補助ツールの開発	国立長寿医療研究センター	島田 裕之
4	医学部	長谷川 浩	准教授	高齢者の血管性認知症に対する心・脳連関に着目した新規予防法及び治療法の開発（副題：PDEⅢ阻害薬であるブレタルのもつ心拍数増加作用に着目した、高齢者の血管性認知症に対する新規予防法及び治療法の開発）	国立長寿医療研究センター	清水 敦哉
5	医学部	杉山 政則	教授	高齢者術後せん妄予防・治療のための標準化プログラム作成および術前 CGA/虚弱評価による高齢者手術の安全性評価に関する研究	国立長寿医療研究センター	深田 伸二
6	医学部	塩川 芳昭	教授	日本人における大脳白質病変の老年症候群に及ぼす作用と危険因子の解明に関する研究	国立長寿医療研究センター	櫻井 孝
7	CCRC 研究所	松井 孝太	特任助教	健康長寿を実現するのに最適な日常活動パターンの解明に関する研究	国立長寿医療研究センター	鈴木 隆雄

平成 26 年度循環器病研究開発費

	部局名	研究者名	職名	研究課題名	研究代表者	
1	医学部	吉野 秀朗	教授	本邦における HFpEF の実態に関する多施設共同調査研究	国立長寿医療研究センター	竹石 恭知

文部科学省 ナショナルバイオリソースプロジェクト(NBRP)

	部局名	研究者名	職名	研究課題名
1	医学部	松田 宗男	教授	ショウジョウバエ遺伝資源の総合的維持管理および提供（ショウジョウバエ近縁種突然変異系統の収集・維持管理・提供）

総務省消防庁 消防防災科学技術研究推進制度

	部局名	研究者名	職名	研究課題名
1	医学部	山口 芳裕	教授	福島第一原発での教訓を踏まえた突入撤退判断システムの開発

文部科学省 次世代がん研究戦略推進プロジェクト

	部局名	研究者名	職名	研究課題名
1	医学部	永根 基雄	教授	「分子プロファイリングによる新規標的の同定を通じた難治がん治療法開発」（悪性脳腫瘍克服のための新規治療標的及びバイオマーカーの創出）

独立行政法人環境再生保全機構（ERCA） 公害健康被害予防事業

	部局名	研究者名	職名	研究課題名
1	医学部	滝澤 始	教授	ぜん息患者の増悪及び未発症成人の発症の予測のための気道バイオマーカーの確立とその大気汚染物質の影響評価への応用に関する調査研究

文部科学省、日本私立学校振興・共済事業団 戦略的研究基盤形成支援事業

	部局名	研究者名	職名	研究課題名
1	医学部	古瀬 純司	教授	杏林大学におけるがん研究基盤の形成（遺伝性腫瘍の発症機序の解明）

日本私立学校振興・共済事業団 大学間連携等による共同研究

	部局名	研究者名	職名	研究課題名
1	医学部	永松 信哉	教授	ELKS ノックアウトマウス、及び妊娠マウスを用いたインスリン開口放出機構の解明
2	医学部	渡邊 卓	教授	JAK2 遺伝子異常をもつ先天異常症候群の発症メカニズムの解明
3	医学部	神谷 茂	教授	腸管神経系異常腸炎炎症モデルマウスにおける腸内細菌叢の役割解析

日本私立学校振興・共済事業団 学術研究振興資金

	部局名	研究者名	職名	研究課題名
1	医学部	渡邊 卓	教授	RNA 異常をターゲットとした新規抗悪性腫瘍薬の開発

杏林大学医学部 (共同研究プロジェクト・研究奨励賞)

【共同研究】

	部局名	研究者名	職名	研究課題名
1	医学部	吉野 秀朗	教授	難治性疾患に対する脂肪組織由来幹細胞を用いた画期的細胞治療の実現
2	医学部	楊 國昌	教授	メタボロームとプロテオームの癒合解析による糸球体硬化の病態解明と創薬化研究
3	医学部	今泉 美佳	教授	妊娠期膵β細胞におけるインスリン分泌亢進機構の解明

【研究奨励費】

	部局名	研究者名	職名	研究課題名
1	医学部	堅田 智久	助教	アフリカツメガエルを用いたアミノ酸トランスポーターLAT1 の初期発生における機能解析
2	医学部	吉田 正雄	講師	白内障、緑内障および高度近視のリスク要因と一時予防対策解明のための分析疫学的研究
3	医学部	井上 信一	助教	免疫細胞のミトコンドリア活性酸素がマラリア感染防御において果たす役割
4	医学部	伊藤 雄伍	助教 (任期)	ネフローゼ症候群における糖質ステロイド薬感受性に関わる遺伝子解析研究
5	医学部	森山 潔	講師	消化管穿孔術後患者における緑膿菌抗 PcrV 療法の可能性

学会等の研究活動に対する表彰者一覧

学会等の研究活動に対する表彰者一覧

学会等の研究活動に対する表彰者リスト

氏 名	学 会 名	賞 の 名 称	受 賞 年 月 日	研 究 課 題	(受 賞 時)
菅 浩 隆	日本形成外科学会	平成26年度 日本形成外科学会 学術奨励賞	2014年4月9日	Tracking the elusive fibrocyte: identification and characterization of collagen-producing hematopoietic lineage cells during murine wound healing.	医学部 形成外科学助教
山本 智朗	Section for Magnetic Resonance Technologists 23rd Annual Meeting	The 1st Place Research Focus Award	2014年5月10日	Non-Invasive Assessment of Ectopic Fat in Non-Alcoholic Fatty Liver Disease Using 1 H-MRS.	保健学部 診療放射線 技術学科教授
		The 2nd Place Research Focus Poster Award	2014年5月10日	Preliminary Investigation of the Optimal Slice Angle for Measuring Amygdala Activity in fMRI.	保健学部 診療放射線 技術学科教授
中村 淳史	日本体外循環技術医学会	The Japanese Society of Extra-Corporeal Technology in Medicine Award 2013 優秀論文賞	2014年10月11日	人工心肺中におけるリアルタイム血液粘度測定法の開発と有用性	保健学部 臨床工科学科 助教
新 倉 保	第43回杏林医学会	第 3 回 杏林医学会研究奨励賞	2014年11月15日	Development of severe pathology in immunized pregnant mice challenged with lethal malaria parasites.	医学部 感染症学 助教
吉敷 智和	第43回杏林医学会	第 3 回 杏林医学会研究奨励賞	2014年11月15日	Modified Glasgow prognostic score in patients with incurable stage IV colorectal cancer.	医学部 外科学助教 (任期制)
皿 谷 健	第43回杏林医学会	第 3 回 杏林医学会研究奨励賞	2014年11月15日	Hodgkin lymphoma with rapidly destructive, cavity-forming lung disease.	医学部 内科学 I 学内講師
井 上 真	第43回杏林医学会	第 3 回 杏林医学会研究奨励賞	2014年11月15日	Quality of image of grating target placed in model eye and observed through toric intraocular lenses. American Journal of Ophthalmology 155(2): 243-252, e1, 2013.	医学部 眼科学 臨床教授
高橋 和人	第43回杏林医学会	第 3 回 杏林医学会研究奨励賞	2014年11月15日	Endogenous oxidative stress, but not ER stress, induces hypoxia-independent VEGF120 release through PI3K-dependent pathways in 3T3-L1 adipocytes.	医学部 内科学Ⅲ 助教
花輪 智子	第43回杏林医学会	第 3 回 杏林医学会研究奨励賞	2014年11月15日	Role of Bordetella pertussis RseA in the cell envelope stress response and adenylate cyclase toxin release.	医学部 感染症学 講師
米澤 英雄	第43回杏林医学会	第 3 回 杏林医学会研究奨励賞	2014年11月15日	Impact of Helicobacter pylori biofilm formation on clarithromycin susceptibility and generation of resistance mutations.	医学部 感染症学 講師
石黒 晴久	第43回杏林医学会	第 3 回 杏林医学会研究奨励賞	2014年11月15日	Percutaneous transluminal pulmonary angioplasty for central-type chronic thromboembolic pulmonary hypertension.	医学部 救急医学助教 (任期制)
伊 波 巧	第43回杏林医学会	第 3 回 杏林医学会研究奨励賞	2014年11月15日	Pulmonary edema predictive scoring index (PEPSI), a new index to predict risk of reperfusion pulmonary edema and improvement of hemodynamics in percutaneous transluminal pulmonary angioplasty.	医学部 内科学Ⅱ 助教 (任期制)
岡本 博照	第79回 日本民族衛生学会総会	平成26年度 日本民族衛生学会 優秀論文賞	2014年11月21日	某市消防局の消防指令要員の職業性ストレス、燃えつきおよび抑うつについて	保健学部 健康福祉学科 准教授 (医学部兼任)
北 条 史	第12回 日韓ヘリコバクター シンポジウム	Young Investigator Award (若手研究者賞)	2015年3月21日	ヘリコバクター・ピロリのアカントアメーバ・カステラーニとの共培養時のトランスクリプトーム解析 (Transcriptome analysis of Helicobacter pylori in co-culture with Acanthamoeba castellanii)	医学部 実験動物施設 助教

学位論文要旨および審査要旨

杏林大学学位論文要旨および審査要旨

〔博士（医学）〕

氏名 中 里 徹 矢

〔学 位〕	種 類 博士（医学）	論 文 項 目	膵管内乳頭粘液性腫瘍における遺伝子メチル化異常の解析
	授 与 番 号 博甲医 第409号		
	授与年月日 平成26年5月21日	論文審査委員	主査 近藤晴彦 副査 大倉康男 高橋信一 高山信之 松村譲児
	授与の要件 学位規程第5条		

学 位 論 文 の 要 旨

【緒言】膵管内乳頭粘液性腫瘍（intraductal papillary mucinous neoplasm：IPMN）は組織学的に腺腫から上皮内癌まで進展し幅広い組織異型を有する腫瘍であり、浸潤癌に進展することがある。IPMNが腺腫から非浸潤癌、浸潤癌へと進行する分子生物学的背景については明らかではない。多くの悪性腫瘍の発癌・進展に遺伝子のメチル化など、いわゆるepigenetic異常の蓄積が関与している。これまでに網羅的な遺伝子のメチル化解析の報告がある。しかし、個々の遺伝子メチル化が癌の発癌や進展にどのように関連するのか、また腫瘍の型分類や組織型などの臨床病理学的因子との関連性については未だ多くが検討されていない。IPMNにおける各種癌関連遺伝子のメチル化状態と腫瘍の進展や悪性度などとの関連性を明らかにすることを目的とした。

【対象と方法】IPMN 37例を対象とした。MGMT, CDKN2A (p16), repressoの各遺伝子についてmethylation specific PCR (MSP) 法にてメチル化解析を行った。また、represso蛋白発現について免疫組織化学染色により評価した。腫瘍の異型度や組織型などとの関連について検討した。

【結果】組織型は腺腫29例、腺癌8例で、腺腫の異型度は軽度異型が18例、中等度異型が10例、高度異型が1例であった。MGMTのメチル化は2例（5%）、CDKN2A (p16) のメチル化は3例（8%）に認めた。MGMTのメチル化陽性例2例はいずれもMUC2陽性であった。repressoのメチル化は16例（43%）に認めた。軽度異型 / 中等度異型と高度異型 / 腺癌に分けると、高度異型 / 腺癌において9例中7例（78%）でrepressoのメチル化を認め、軽度異型 / 中等度異型の28例中9例（32%）と比較し高頻度にメチル化を認めた（ $p = 0.016$ ）。免疫組織化学染色でのrepresso蛋白陽性例は25例（68%）に認めた。軽度異型14例（78%）、中等度異型9例（90%）、高度異型1例（100%）、腺癌1例（13%）において陽性であり、軽度異型 / 中等度異型と高度異型 / 腺癌の2群に分けると、軽度異型 / 中等度異型で有意にrepresso蛋白の発現頻度が高い結果であった（ $p = 0.002$ ）。

【結論】represso遺伝子プロモーター領域のメチル化によるrepresso蛋白発現低下は、IPMNの組織異型度が進展するにつれ高頻度にみられた。represso遺伝子のメチル化がIPMNの進展に関与することが示唆された。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

【背景】膵管内乳頭粘液性腫瘍（intraductal papillary mucinous neoplasm：IPMN）は組織学的に腺腫から上皮内癌まで進展し幅広い組織異型を有する腫瘍であり、浸潤癌に進展することがある。IPMNが腺腫から非浸潤癌、浸潤癌へと進行する分子生物学的背景については明らかではない。多くの悪性腫瘍の発癌・進展に遺伝子のメチル化など、いわゆるepigenetic異常の蓄積が関与している。これまでに網羅的な遺伝子のメチル化解析の報告はあるが、個々の遺伝子メチル化が癌の発癌や進展にどのように関連するのか、また腫瘍の肉眼型や組織型などの臨床病理学的因子との関連性については未だ多くが検討されていない。IPMNにおける各種癌関連遺伝子のメチル化状態と腫瘍の進展や悪性度などとの関連性を明らかにすることを目的とした。

【対象と方法】IPMN 37例を対象とし、MGMT, CDKN2A (p16), repressoの各遺伝子についてmethylation specific PCR (MSP) 法にてメチル化解析を行った。また、represso蛋白発現について免疫組織化学染色により評価し、腫瘍の異型度や粘液形質などとの関連について検討した。

【結果】組織型は腺腫29例、腺癌8例で、腺腫の異型度は軽度異型が18例、中等度異型が10例、高度異型が1例であった。

MGMTのメチル化は2例（5%）、CDKN2A (p16) のメチル化は3例（8%）に認め、repressoのメチル化は16例（43%）に認めた。軽度異型 / 中等度異型と高度異型 / 腺癌に分けると、高度異型 / 腺癌において9例中7例（78%）でrepressoのメチル化を認め、軽度異型 / 中等度異型の28例中9例（32%）と比較し高頻度にメチル化を認めた（ $p = 0.016$ ）。免疫組織化学的染色でのrepresso蛋白陽性例は25例（68%）に認めた。軽度異型14例（78%）、中等度異型9例（90%）、高度異型1例（100%）、腺癌1例（13%）において陽性であり、軽度異型 / 中等度異型と高度異型 / 腺癌の2群に分けると、軽度異型 / 中等度異型で有意にrepresso蛋白の発現頻度が高い結果であった（ $p = 0.002$ ）。

【結論】represso遺伝子プロモーター領域のメチル化によるrepresso蛋白発現低下は、IPMNの組織異型度が進展するにつれ高頻度にみられた。represso遺伝子のメチル化がIPMNの進展に関与することが示唆された。

審査の結果、本研究はrepresso遺伝子のメチル化がIPMNの組織異型度、悪性化と関連することを始めて明らかにしたものであり、従来は画像のみでは困難であったIPMNの悪性度の判定、治療適応の判断に寄与する可能性があり、学位論文として価値あるものと考えられた。

氏名 坂 本 仁 美

〈学 位〉	種 類 博士（医学）	論 文 項 目	Clinicopathological significance of somatic <i>RNF43</i> mutation and aberrant <i>RNF43</i> expression in intraductal papillary mucinous neoplasms of the pancreas (膵管内乳頭粘液性腫瘍 (IPMN) における <i>RNF43</i> 変異と発現異常の臨床病理学的意義)
	授 与 番 号 博甲医 第410号		
	授与年月日 平成26年9月30日		
	授与の要件 学位規程第5条		
		論文審査委員	主査 大倉康男 副査 古瀬純司 川上速人 井本 滋 菲澤融司

学 位 論 文 の 要 旨

【背景・目的】 *RNF43* はユビキチン E3 リガーゼである ring finger protein 43 (*RNF43*) をエンコードする遺伝子である。最近の研究で膵管内乳頭粘液性腫瘍 (IPMN) において *RNF43* 遺伝子に体細胞性突然変異が認められることが報告された。また、*GNAS* は、IPMN の約半数に変異が認められており、G-protein シグナルの活性化、粘液産生に関係すると考えられている。本研究は IPMN における *RNF43* 遺伝子変異と *RNF43* 蛋白発現の異常の性状、頻度と他の分子病理学的因子や臨床病理学的因子との関連について明らかにすることを目的とした。

【方法】 対象は 2001 年から 2010 年の間に東京女子医科大学で手術を行った IPMN 176 症例である。それらのうち凍結標本が得られた 57 症例で次世代シーケンサーを用いた *RNF43* の全エクソン解析を行った。また、全 176 症例のホルマリン固定パラフィン包埋標本を用いて免疫組織化学法により *RNF43* の発現解析を行った。次世代シーケンサーにより検出された変異はサンガーシーケンスにより検証を行った。*RNF43* 変異および *RNF43* 発現異常と *GNAS* 変異、*KRAS* 変異、SMAD4 蛋白発現消失、TP53 蛋白の過剰発現、腫瘍の異型度、組織学的亜型、壁在結節の有無、肉眼的亜型、病期、再発、生存との関連について統計学的に評価した。

【結果】 *RNF43* 変異は 57 症例中 8 例 (14%) に認められ、その内訳は、フレームシフト変異が 5 例 (p.F69fs, p.S264fs, p.L311fs, p.R363fs, p.V490fs)、ナンセンス変異が 1 例 (p.Q153X)、ミスセンス変異が 2 例 (p.I164N and p.P310A) であった。*RNF43* 発現は、176 症例中 52 症例 (29.5%) おいて発現減弱が認められた。*RNF43* 変異は *RNF43* 発現減弱 ($p = 0.011$)、*GNAS* 変異 ($p = 0.020$)、壁在結節の有無 ($p = 0.038$) と有意に関連していた。*RNF43* 発現減弱は *RNF43* 変異との関連を除いて、分子病理学的・臨床病理学的因子との有意な関連は認められなかった。

【結語】 以上の結果より、*RNF43* 変異は *RNF43* の発現低下と関連していること、また、*GNAS* 変異と関連して一部の IPMN の病態に関与していると考えられた。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

【背景・目的】 *RNF43* はユビキチン E3 リガーゼである ring finger protein 43 (*RNF43*) をエンコードする遺伝子である。最近の研究で膵管内乳頭粘液性腫瘍 (IPMN) において *RNF43* 遺伝子に体細胞性突然変異が認められることが報告された。また、*GNAS* は、IPMN の約半数に変異が認められており、G-protein シグナルの活性化、粘液産生に関係すると考えられている。本研究は IPMN における *RNF43* 遺伝子変異と *RNF43* 蛋白発現の異常の性状、頻度と他の分子病理学的因子や臨床病理学的因子との関連について明らかにすることを目的とした。

【方法】 対象は 2001 年から 2010 年の間に東京女子医科大学で手術を行った IPMN 176 症例である。それらのうち凍結標本が得られた 57 症例で次世代シーケンサーを用いた *RNF43* の全エクソン解析を行った。また、全 176 症例のホルマリン固定パラフィン包埋標本を用いて免疫組織化学法により *RNF43* の発現解析を行った。次世代シーケンサーにより検出された変異はサンガーシーケンスにより検証を行った。*RNF43* 変異および *RNF43* 発現異常と

GNAS 変異、*KRAS* 変異、SMAD4 蛋白発現消失、TP53 蛋白の過剰発現、腫瘍の異型度、組織学的亜型、壁在結節の有無、肉眼的亜型、病期、再発、生存との関連について統計学的に評価した。

【結果】 *RNF43* 変異は 57 症例中 8 例 (14%) に認められ、その内訳は、フレームシフト変異が 5 例 (p.F69fs, p.S264fs, p.L311fs, p.R363fs, p.V490fs)、ナンセンス変異が 1 例 (p.Q153X)、ミスセンス変異が 2 例 (p.I164N and p.P310A) であった。*RNF43* 発現は、176 症例中 52 症例 (29.5%) おいて発現減弱が認められた。*RNF43* 変異は *RNF43* 発現減弱 ($p = 0.011$)、*GNAS* 変異 ($p = 0.020$)、壁在結節の有無 ($p = 0.038$) と有意に関連していた。*RNF43* 発現減弱は *RNF43* 変異との関連を除いて、分子病理学的・臨床病理学的因子との有意な関連は認められなかった。

【結語】 以上の結果より、*RNF43* 変異は *RNF43* の発現低下と関連していること、また、*GNAS* 変異と関連して一部の IPMN の病態に関与していると考えられた。

本研究は、IPMN の病態における *RNF43* 遺伝子変異の役割を明らかにしたものであり、学位論文として価値あるものと認められた。

学位論文要旨および審査要旨

氏名 小 沼 裕 寿

〈学 位〉	種 類 博士（医学）	論 文 項 目	The glucagon-like peptide 1 receptor agonist enhances intrinsic peroxisome proliferator-activated receptor γ activity in endothelial cells (GLP-1 受容体作動薬は、血管内皮細胞における内因性 PPAR γ 活性を上昇させる)
	授 与 番 号 博甲医 第411号		
	授与年月日 平成26年9月30日		
	授与の要件 学位規程第5条		
		論文審査委員	主査 佐藤 徹 副査 窪田 博 後藤田貴也 丑丸 真 要 伸也

学 位 論 文 の 要 旨

消化管ホルモンであるインクレチン（GLP-1）は、細胞膜上の特異的な GLP-1 受容体と結合し、cAMP を上昇させ、下流シグナルである Protein Kinase A（PKA）の活性化を介して、 β 細胞におけるインスリン分泌促進作用などの種々の作用を、標的臓器に対して発揮する。インクレチンの膝外作用の1つとして、血管内皮細胞に対する抗動脈硬化作用があると考えられているが、その詳細なメカニズムは未だ不明である。

本研究では、血管内皮培養細胞 HUVEC において、VCAM-1 や ICAM-1 などの炎症性接着分子が、核内受容体 PPAR γ アゴニストであるピオグリタゾンによって発現が強力に抑制され、また、GLP-1 受容体作動薬 Exendin-4 によっても、有意に発現抑制されること、さらに、この Exendin-4 による接着因子の発現抑制が、PPAR γ 抑制剤 GW9662 によって解除されることを示した。PPAR γ の活性化により、NF κ B などの炎症性関連転写因子の発現抑制することが既に知られていることから、Exendin-4 による接着分子の発現抑制機構が、PPAR γ の活性化を介して発揮されている可能性が示唆された。そこで Exendin-4 を 0.2pg/ml, 2pg/ml 投与下（0.2pg/ml が Exendin-4 の糖尿病治療域濃度）において、HUVEC における内因性 PPAR γ 活性をルシフェラーゼアッセイにて測定したところ、コントロールに比して、Exendin-4 濃度依存性に、約 20% の活性上昇を示した。Exendin-4 投与によって PPAR γ 発現量に影響を与えないことから、この活性化は、内因性 PPAR γ 転写活性を亢進させていることが示唆された。また、この活性化は、投与後 6 時間から有意な上昇を示し、12 時間の時点でピークに達した。Exendin-4 による PPAR γ 活性化は、PKA 抑制剤である H89 にて消失することから、GLP-1 シグナル下流の PKA シグナル活性化を介して PPAR γ を活性化することもわかった。

これらの結果から、血管内皮細胞において、GLP-1 が持つ抗炎症作用や抗動脈硬化作用は、少なくとも GLP-1 による直接的な PPAR γ 転写促進作用が関与していることがわかり、本研究結果は、動脈硬化のリスクの高い 2 型糖尿病患者における GLP-1 受容体作動薬の臨床的意義を説明する上で重要な知見と考えられる。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

消化管ホルモンであるインクレチン（GLP-1）は、細胞膜上の特異的な GLP-1 受容体と結合し、cAMP を上昇させ、下流シグナルである Protein Kinase A（PKA）の活性化を介して、 β 細胞におけるインスリン分泌促進作用などの種々の作用を、標的臓器に対して発揮する。インクレチンの膝外作用の1つとして、血管内皮細胞に対する抗動脈硬化作用があると考えられているが、その詳細なメカニズムは未だ不明である。

本研究では、血管内皮培養細胞 HUVEC において、VCAM-1 や ICAM-1 などの炎症性接着分子が、核内受容体 PPAR γ アゴニストであるピオグリタゾンによって発現が強力に抑制され、また、GLP-1 受容体作動薬 Exendin-4 によっても、有意に発現抑制されること、さらに、この Exendin-4 による接着因子の発現抑制が、PPAR γ 抑制剤 GW9662 によって解除されることを示した。PPAR γ の活性化により、NF κ B などの炎症性関連転写因子の発現抑制することが既に知られていることから、Exendin-4 による接着分子の発現抑制機構が、PPAR γ の活性化を介して発揮され

ている可能性が示唆された。そこで Exendin-4 を 0.2pg/ml, 2pg/ml 投与下（0.2pg/ml が Exendin-4 の糖尿病治療域濃度）において、HUVEC における内因性 PPAR γ 活性をルシフェラーゼアッセイにて測定したところ、コントロールに比して、Exendin-4 濃度依存性に、約 20% の活性上昇を示した。Exendin-4 投与によって PPAR γ 発現量に影響を与えないことから、この活性化は、内因性 PPAR γ 転写活性を亢進させていることが示唆された。また、この活性化は、投与後 6 時間から有意な上昇を示し、12 時間の時点でピークに達した。Exendin-4 による PPAR γ 活性化は、PKA 抑制剤である H89 にて消失することから、GLP-1 シグナル下流の PKA シグナル活性化を介して PPAR γ を活性化することもわかった。

これらの結果から、血管内皮細胞において、GLP-1 が持つ抗炎症作用や抗動脈硬化作用は、少なくとも GLP-1 による直接的な PPAR γ 転写促進作用が関与していることがわかり、本研究結果は、動脈硬化のリスクの高い 2 型糖尿病患者における GLP-1 受容体作動薬の臨床的意義を説明する上で重要な知見と考えられ、学位論文として価値あるものと認めた。

氏名 峯 尾 松一郎

〈学 位〉	種 類	博士（医学）	論 文 項 目	妊娠中のマラリアの実験動物モデル作出と病態発症機序の解明
	授 与 番 号	博甲医 第412号	論文審査委員	主査 岩下光利
	授与年月日	平成26年9月30日	副査	今泉美佳 大倉康男 河合 伸 滝澤 始
	授与の要件	学位規程第5条		

学 位 論 文 の 要 旨

妊婦はマラリア原虫に対する抵抗性が低下していることから、マラリアの病態が重症化しやすい。また、マラリア原虫に感染した妊婦では流産や死産、胎児の発育遅延が頻発することが知られている。妊娠中のマラリアにおける病態生理や病態発症機序は未解明な部分が多い。本研究では、マラリア流行地に住む女性が妊娠し、マラリア原虫に感染した場合の症状を反映する実験動物モデルを作出し、妊娠中のマラリアにおける病態発症機序を明らかにすることを目的とした。

弱毒株のマウスマラリア原虫*Plasmodium berghei* (*Pb*) XATに感染後治癒したマウスは、強毒株の*Pb* NK65に対する防御免疫を獲得する。そこで本研究では、*Pb* XATの感染・治癒により*Pb* NK65に対する免疫を賦与した雌マウスを非感染雄マウスと一晩交配させた後、*Pb* NK65を感染させ、まず、その感染動態について調べた。マラリア原虫に対する免疫を賦与した非妊娠マウスに*Pb* NK65を感染させると、原虫血症は低レベルで推移し、最終的にマウスは自然治癒した。一方、免疫を賦与した妊娠マウスに*Pb* NK65を感染させると、マウスは妊娠後期において原虫血症の増悪および貧血を示すことを見出した。この*Pb* NK65を感染させた妊娠マウスでは、炎症性サイトカインであるIL-10が著しく増加したことから、妊娠によるマラリア原虫抵抗性の低下にはIL-10が関与している可能性が考えられた。また、この妊娠マウスでは非感染の妊娠マウスと比較して死産仔が高率に認められ、胎盤にはヒトの妊娠中のマラリアで典型的な病態である多数の感染赤血球の蓄積と胎盤絨毛構造の異常が認められた。さらに、この妊娠マウスは妊娠後期に肝細胞内に脂肪蓄積を伴う重度の肝障害を発症することを見出した。肝障害を発症した妊娠マウスの血漿中のIFN- γ および一酸化窒素（NO）を測定したところ、非妊娠マウスと比較して有意な増加が認められた。そこで、誘導型一酸化窒素合成酵素（inducible nitric oxide synthase；iNOS）欠損マウスを用いてNOと肝障害の関係について解析したところ、妊娠したiNOS欠損マウスでは肝細胞中の脂肪蓄積が抑制されていた。このことから、妊娠中のマラリア原虫感染における肝細胞中の脂肪の蓄積には、NOが重要な役割を担っていることが示された。本研究によって妊娠中のマラリアの新規のマウスモデルが作出され、妊娠中のマラリアにおける病態、特に肝障害の発症機序の一端を明らかにすることが出来た。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

妊婦がマラリアに感染すると重症化しやすく、流早産、死産、胎児発育不全が頻発することが知られている。本論文は妊娠マウスをモデルに、妊娠中のマラリア感染の病態生理を明らかにすることを目的とした。弱毒株マウスマラリア原虫のpb XATに感染させた雌マウス（以下IM群）とpb XATに続いて強毒株のpb NK65に感染させた雌マウス（以下IM + NK群）につき、妊娠群と非妊娠群に分け感染動態の解析を行った。Pb XATに感染したマウスは強毒株のpb NK65に対する免疫を獲得し、IM + NK群の非妊娠マウスではマラリア原虫血症は低レベルで推移し、最終的に自然治癒した。一方、IM + NK群の妊娠マウスではマラリア原虫血症の増悪および貧血が見られた。妊娠マウスでは免疫能を抑制するIL-10が増加するが、マラリア原虫特異的IgGも減少しており、妊娠によるIL-10の増加がマラリア原虫特異的IgG減少に関与していると推測された。IM群の妊娠マウスは非感染の妊娠マウスと胎仔数ならびに胎仔重量は同じであったが、IM + NK群の妊娠マウスでは胎仔数と胎仔重量が有意に減少した。IM + NK群の妊娠マウスの胎盤を病理組織学的に解析すると、非感染マウスやIM群の妊娠マウスと比較し、絨毛構造が破壊され絨毛血管内に多数の感染赤血球の集合所見が見られ、熱帯熱マラリア原虫に感染したヒト胎盤と同様な病理組織学的所見を呈してお

り、胎盤機能不全から流早産、胎児発育不全、死産などを引き起こすことが推測された。妊婦が熱帯熱マラリアに感染するとHELLP症候群様の肝障害を引き起こされることが知られているが、本研究でも非感染妊娠マウスやIM群の妊娠マウスに比較し、IM + NK群の妊娠マウスでは高頻度に肝機能障害が認められ、病理組織学的解析でも広範囲に肝細胞の壊死および肝細胞内への脂肪蓄積が認められた。マラリア原虫感染における肝障害は炎症性サイトカインであるinterferon γ (IFN- γ) の増加によることが報告されているが、IM + NK群の妊娠マウスではIM群や非感染の妊娠マウスに比較し、著しく血漿中IFN- γ が増加していた。IFN- γ はiNOSを介したNO産生を促進するが、IM + NK群の妊娠マウスでは血漿中NOが非妊娠マウスや非感染妊娠マウスより高かった。一方、iNOSをノックアウトしたIM + NK群の妊娠マウスでは肝細胞壊死や肝細胞内への脂肪蓄積は見られなかった。しかし、IM + NK群の妊娠マウスでも胎盤組織の構造異常や胎仔数の減少と胎仔体重の減少が観察され、マラリア原虫感染における妊婦の肝障害にはIFN- γ とNOの増加が関与するが、胎盤の機能障害には関与しないと考えられた。

本研究は、妊娠におけるマラリア原虫感染の病態の一端を明らかにすることに貢献し、学位論文として価値あるものと認められた。

学位論文要旨および審査要旨

氏名 炭谷 由 計

〈学 位〉	種 類 博士（医学）	論 文 項 目	携帯型脈拍計を活用した糖尿病運動療法が血糖コントロールに及ぼす臨床的効果の検討
	授 与 番 号 博甲医 第413号	論文審査委員	主査 林 潤一
	授与年月日 平成26年12月17日		副査 古賀良彦 木崎節子 岩下光利 丑丸 真
	授与の要件 学位規程第5条		

学 位 論 文 の 要 旨

糖尿病における運動療法では、従来より運動強度として心拍数を指標とすることが推奨されている。しかしながら、わが国の日常臨床では現在のところ心拍数に基づいた運動療法の手段がないことから、最適な運動強度を維持するため、臨床において脈拍数の目安となるツールが求められている。この研究の目的は、食事療法および経口血糖降下薬により治療されている2型糖尿病男性患者23名を対象として、自己の脈拍数を指標として採用のうえ、携帯型脈拍計を活用した継続的な運動療法が、血糖コントロール、血管内皮機能、骨代謝に与える影響を臨床的に評価することである。被験者に対し、事前に心肺運動負荷試験を行い、嫌気性代謝閾値レベルの脈拍数（目標脈拍数）を設定した。さらに脈拍数を表示する携帯型脈拍計を活用して運動を行う群（脈拍表示群）、ならびに脈拍数を表示しない脈拍計を使用して運動を行う群（脈拍非表示群）の2群に無作為に振り分け、それぞれの群で1カ月間の運動療法を施行した。脈拍表示群では、脈拍計に表示された脈拍数を意識しながら目標脈拍数に達するような運動を常に行うよう指導した。一方、脈拍非表示群では、従来から行っていたボルグ指数や自己脈測定を行いながら、目標脈拍数に達するように指導した（従来法）。この研究に参加した被験者は、平均年齢 55.5 ± 11.0 歳、BMI $26.2 \pm 3.6 \text{ kg/m}^2$ であった。携帯型脈拍計の記録データから、目標脈拍数に達した平均歩行時間は、脈拍表示群 28.0 ± 16.1 分/日、脈拍非表示群 8.2 ± 4.7 分/日であり脈拍表示群において有意に増加した（ $p < 0.01$ ）。さらに2群間比較では、脈拍表示群においてグリコアルブミンおよび1.5AGの有意な改善効果を認め（いずれも $p < 0.01$ ）、一方、オステオカルシンは、脈拍表示群においてより増加する傾向を示した（ $p = 0.06$ ）。その他、BMI、空腹時血糖値、高感度CRP、血管内皮機能については、いずれも有意な変化を示さなかった。携帯型脈拍計を活用した糖尿病運動療法の、従来法と比べて目標脈拍数に達する時間を増やし、血糖コントロールを有意に改善させた。このことから糖尿病運動療法における携帯型脈拍計を活用することは、細小血管症だけでなく大血管症の発症・進展予防にも有用性が高い可能性が示唆された。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

糖尿病運動療法の効果は適切な運動強度を維持しつつ運動を継続して行えるか否かで異なってくる。糖尿病患者個々の最適な運動強度の指標としては運動時の脈拍数が有用とされてきたが、運動療法実施中に自己脈測定を行う従来法での運動療法の有効性は限られていた。本論文は、携帯型脈拍計を活用した継続的な運動療法が従来法に勝る効果を得られるかについて、血糖コントロール、血管内皮機能、骨代謝への影響を評価して、その有用性を検討したものである。

対象は食事療法単独あるいは経口血糖降下薬の併用にて3ヶ月以上外来通院加療の2型糖尿病患者の男性23例。全例に心肺運動負荷試験を行い、得られた嫌気性代謝閾値脈拍数プラス20%をもって目標脈拍数とした。登録順に2対1の割合で脈拍表示群と非表示群へ割り付けた単一施設非盲検無作為化比較対照試験を実施した。脈拍表示群（ $n = 15$ ）には携帯型脈拍計を装着し窓に表示される目標脈拍数を維持するよう歩行速度を調整しながらウォーキングするよう指導した。脈拍非表示群（ $n = 8$ ）には窓に脈拍数を表示しない同型携帯型脈拍計を装着し目標脈拍数の維持には自己脈の測定と自覚的な体感から運動強度を推定する方法（ボルグスケール）にて歩行速度を調整しながらウォーキングするよう指導した。全例に運動療法を実施した1ヶ月間において外

出時は必ず携帯型脈拍計を装着するよう指導した。

両群間に運動療法前の臨床的指標（年齢・BMI・血圧・脂質・高感度CRP・eGFR・グリコアルブミン・1.5-AG・オステオカルシン・アディポネクチン）に有意差はなかった。運動療法1ヶ月間の携帯型脈拍計の記録データを解析した。平均装着時間と平均活動時間には両群間に有意差を認めなかったが、目標脈拍数に達した平均歩行時間は脈拍表示群 28.0 ± 16.1 分/日、脈拍非表示群 8.2 ± 4.7 分/日と脈拍表示群において有意に増加した（ $p < 0.01$ ）。血糖コントロールの指標としてのグリコアルブミンは脈拍表示群において運動療法後に有意に低下（ $17.9 \pm 2.9\%$ vs $16.9 \pm 2.5\%$ 、 $p < 0.01$ ）し、1.5-AGも有意に改善した（ $p < 0.01$ ）が、脈拍非表示群ではいずれも有意な改善を認めなかった。その他の臨床的指標、血管内皮機能、骨代謝マーカーは両群とも有意な変化を認めなかった。

糖尿病治療における運動療法の重要性は指摘されているが、目標脈拍数に基づく運動強度を維持する効果的な手段に乏しく、日常臨床において目標脈拍数を維持できるツールが求められていた。本論文は、携帯型脈拍計の装着により目標脈拍数に達する運動時間数を増やしうることを明らかにし、糖尿病運動指導において携帯型脈拍計の活用が血糖コントロールの有用な手段となることを示すものとして高く評価され、審査の結果、学位論文として価値あるものと認めた。

氏名 北 条 史

〈学 位〉	種 類 博士（医学）	論 文 項 目	<i>Helicobacter pylori</i> と原生動物の相互作用に関する研究
	授 与 番 号 博甲医 第414号	論文審査委員 主査	高橋信一
	授与年月日 平成27年3月31日	副査	栗崎 健 河合 伸 木崎節子 楊 國昌
	授与の要件 学位規程第5条		

学 位 論 文 の 要 旨

*Helicobacter pylori*は急性・慢性胃炎および胃十二指腸潰瘍の起因菌であり、胃癌のリスクファクターとしても知られ、世界的な感染症として注目されてきた。しかしながら、その病態、治療に関する多数の研究報告に比較し、本菌の感染経路に関する研究報告は少なく、全容が解明されていない。一方で環境中に広く分布している自由生活性アメーバ等の原生動物は病原細菌の生存をサポートしていると考えられている。*H. pylori*もまた環境中における他の生物種と相互作用をして生存している可能性は否定できない。本研究では*H. pylori*の感染経路の一端を明らかにすることを目的として、自由生活性アメーバと本菌の相互作用について検討し、本菌の生存に対するアメーバの役割を明らかにするために解析を行った。蛍光標識した*H. pylori*と自由生活性アメーバである*Acanthamoeba castellanii*を共培養して細胞内への移行性を観察した結果、*H. pylori*が*A. castellanii*の細胞内に局在していることが明らかになった。共培養系を透過型電子顕微鏡で観察した結果、*A. castellanii*の細胞内ファゴソーム内に*H. pylori*菌体を確認し、*A. castellanii*が*H. pylori*を貪食していることが明らかになった。*H. pylori*細胞内での生存性を培養法によって検討したところ、培養開始後7時間まで*H. pylori*の生存性を確認したが、24時間後に*A. castellanii*内における*H. pylori*は検出できなかった。尿素添加や低温条件下で本菌の生存性の向上は確認されなかったが、微好気条件下に培養条件を変更すると*A. castellanii*細胞外に*H. pylori*の凝集塊が確認された。共培養系内での*H. pylori*の生存性を培養法で検討したところ、*H. pylori*単独培養系と比較して有意に生存性が向上した。*A. castellanii*と*H. pylori*の接触を阻害した場合や蛋白質を吸着して共培養を行った場合は*H. pylori*の生存性の向上が制限され、本菌の生存性の向上に*A. castellanii*との接触や蛋白質が関与している可能性が示唆された。また*A. castellanii*培養上清を用いて培養を行った場合、本菌の生存性の向上は部分的であり、生きたアメーバの存在も共に必要であることが示唆された。*A. castellanii*との共培養系内における*H. pylori*の蛋白質発現についてSDS-PAGE解析を行った結果、*H. pylori*単独培養系と比較して共培養において強発現する蛋白質が存在することが明らかになった。RNA シークエンスによって強発現した遺伝子を解析した結果、外膜蛋白質遺伝子の発現量が最も多いことが明らかになった。本研究により*A. castellanii*が*H. pylori*の生存に関与している可能性が示唆され、本菌の感染経路の解明の一助となる知見が得られた。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

*Helicobacter pylori*は小児期に経口感染して、その後排除されることなく長期感染となり、慢性胃炎を背景として胃潰瘍や胃がんを始め種々の疾患を発症させる細菌である。本菌については、基礎的・臨床的研究が世界的に進められているが、自然界にどのようにして生存し、ヒトに感染してくるのかについては詳しく知られていない。

一方、環境中に広く分布している自由生活性アメーバなどの原生動物が細菌の生存をサポートしているとする報告がある。そこで本研究では、*H. pylori*の感染経路の一端を明らかにすることを目的として、自由生活性アメーバが*H. pylori*の生存を助けるなどの作業仮説を立て、*H. pylori*と自由生活性アメーバである*Acanthamoeba castellanii*とを共培養し、以下の結果を得た。

「検討1」アメーバ体内での*H. pylori*の生存性：「結果1」①*A. castellanii*体内に蛍光標識した*H. pylori*を認めた。②透過型電子顕微鏡で、*A. castellanii*の体内ファゴソーム内に*H. pylori*菌体を確認し、*A. castellanii*が*H. pylori*を貪食していることが明らかとなった。③*H. pylori*の*A. castellanii*体内での生存性を培養法によって検討したところ、培養開始後7時間まで*H. pylori*の生存性を確認したが、24時間後には検出できなかった。

「検討2」アメーバ体外での*H. pylori*の生存性：「結果2」①微好気培養条件下では、*A. castellanii*体外に*H. pylori*の凝集塊が確認された。②共培養系での*H. pylori*の生存性を培養法で検討したところ、*H. pylori*単独培養系と比較して有意に生存性が向上した。③*A. castellanii*と*H. pylori*の接触を阻害した場合や、培養液中の蛋白質を吸着して共培養を行った場合は、*H. pylori*の生存性の向上が共培養と比較して制限され、*A. castellanii*との接触や蛋白質が生存性の向上に関与している可能性が示唆された。また*A. castellanii*培養上清を用いて培養を行った場合、本菌の生存性の向上は部分的であり、生きたアメーバの存在も共に必要であることが示唆された。

「検討3」*H. pylori*の遺伝子発現解析：「結果3」①*A. castellanii*との共培養系内における*H. pylori*の蛋白質発現についてSDS-PAGE解析を行った結果、*H. pylori*単独培養系と比較し強発現する蛋白質が存在することが明らかになった。②RNA シークエンスによって強発現した遺伝子を解析した結果、外膜蛋白質遺伝子の発現量が最も多いことが明らかになった。

本研究により*A. castellanii*が*H. pylori*の生存に関与している可能性が示唆され、本菌の感染経路の解明の一助となる知見が得られた。審査の結果、学位論文として相応しいものと認めた。

学位論文要旨および審査要旨

氏名 村上 華奈子

〈学 位〉	種 類 博士（医学）	論 文 項 目	MPO-ANCA 関連血管炎患者好中球の好中球細胞外トラップ（NETs）放出は抗MPO抗体刺激により増加し免疫抑制療法により減少する
	授 与 番 号 博甲医 第415号		
	授与年月日 平成27年3月31日	論文審査委員	主査 高橋信一
	授与の要件 学位規程第5条		副査 神谷 茂 狩野葉子 櫻井裕之 奴田原紀久雄

学 位 論 文 の 要 旨

【目的】 ANCA 関連血管炎（ANCA-associated vasculitis：AAV）は、血管炎のうち多臓器の小血管に血管炎をきたす難治性希少疾患で、ANCA の対応抗原により主にMPO-ANCA 関連血管炎（MPO-AAV）、PR3-ANCA 関連血管炎（PR3-AAV）に分けられる。最近、病態へのNeutrophil extracellular traps（NETs）の関与が報告されているが、MPO-AAV 患者の多形核好中球（Polymorphonuclear neutrophil：PMN）の放出するNETsについてはこれまで十分な検討がされていない。そこで我々は、MPO-AAV を対象とし、治療前の患者PMNのNETs放出能、抗MPO抗体の関与、NETsの形態および治療による変化、臨床所見との関連につき検討した。

【対象・方法】対象は治療前にPMNを採取できたMPO-AAV 患者6名、そのうち治療後のPMNも採取できたのは4名であった。対照は健常人13名とした。PMNを培養液のみで培養したもの、培養液＋PMA、さらに抗MPO抗体または抗PR3抗体でそれぞれ刺激した4種類の条件で誘導されるNETsを観察し、NETsの放出量を測定した。治療後のMPO-AAV 患者では治療による変化も検討した。

【結果】健常人、MPO-AAV 患者ともにfiber状の構造物（fiber-NETs）と細胞全体が膨張するような形態（round-NETs）の二種類のNETosisを認めた。fiber-NETsはMPO-AAV 患者では健常人と比し大きな網状を呈し、全細胞に対するfiber-NETs放出細胞の割合（% fiber-NETs cell）はPMA、PMA＋抗体のいずれの条件でも有意に増加していた。また、MPO-AAV 患者PMNでは抗MPO抗体を加えた群で% fiber-NETs cellが増加した。治療により網状のfiberは消失し、ANCA値改善とともに% fiber-NETs cellも低下した。

【考察】MPO-AAV 患者PMNは健常人と異なる形態のNETsを放出し、% fiber-NETs cellは有意に増加し、治療により低下したことから、fiber-NETsがMPO-AAVの病態に関与していることが示唆された。MPO-AAV 患者生体内では、易刺激状態であるPMNがMPO-ANCAによりさらに活性化され、過剰なfiber-NETsを放出し、血管を障害する機序が示唆された。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

ANCA（抗好中球細胞質抗体；anti-neutrophil cytoplasmic antibody）関連血管炎（ANCA-associated vasculitis：AAV）は多臓器障害性の小型血管炎で、対応抗原別に本邦に多いMPO（myeloperoxidase）-ANCA 関連血管炎（MPO-AAV）と欧米に多いPR3（proteinase 3）-ANCA 関連血管炎（PR3-AAV）に分けられる。最近AAVの病態にANCAによる多形核白血球（PMN：polymorphonuclear neutrophil）活性化およびPMNより放出されるNETs（Neutrophil extracellular traps）の関与が注目されている。しかし、AAVは希少性難治性疾患で、患者自身のPMNを用いたNETs研究は1報告（PR3-AAV3例、MPO-AAV1例）のみで、患者生体内におけるNETsの役割は明らかでない。本研究では我が国に多いMPO-AAVにつき、患者PMNを用いNETs放出能、抗MPO抗体の関与、NETsの形態および免疫抑制治療との関連につき検討した。

【対象・方法】対象はMPO-AAV 患者6例で4例は治療前と治療後で経時的に検討した。健常人13名を対照とし、末梢血より採取したPMNを①；培養液、②；培養液＋PMA（phorbol myristate acetate：NETs誘導物質）、③；②＋抗MPO抗体、④；②＋抗PR3抗体、の4種類の条件下で培養し、誘導されるNETsの放出量や形態を検討した。

【結果】①；健常人、MPO-AAV 患者のPMNはともに培養液のみではNETs放出は認めなかった。②；健常人、MPO-AAV 患者のPMNはともに、PMAおよびPMAと抗MPO抗体または抗PR3抗体刺激で、fiber状の構造物（fiber-NETs）と細胞全体が膨張するような形態（round-NETs）の二種類のNETosisを認めた。③；MPO-AAV 患者PMNは健常人PMNに比し、PMA、PMA＋抗MPO抗体のいずれの条件でも、全細胞に対するfiber-NETs放出細胞の割合（% fiber-NETs cell）が有意に増加していた。この% fiber-NETs cellは、PMA＋抗MPO抗体刺激で最も増加した。④；MPO-AAV 患者PMNはPMA＋抗PR3抗体刺激では、PMA単独に比し有意な% fiber-NETs cell増加を認めなかった。⑤；MPO-AAV 患者PMNからのfiber-NETsは健常人のfiber-NETsに比し大きな網状形態を呈した。⑥；免疫抑制治療で網状fiber NETsは消失し、% fiber-NETs cellはANCA値低下と共に減少し、ANCA値再上昇時に増加した。

これからMPO-AAVでは、易刺激状態にあるPMNがMPO-ANCAにより活性化され、大きな網状の形態を有する過剰なfiber-NETsを放出し血管を障害する機序が推測された。

本研究はMPO-AAVの病態にMPO-ANCA刺激によるNETs放出が関与することを、MPO-AAVの患者好中球を用いて明らかにした価値ある研究であり、審査の結果、学位論文として相応しいものと認めた。

氏名 横 矢 重 臣

〈学 位〉	種 類	博士（医学）	論 文 項 目	線維性被膜及びその周辺の細胞外マトリックス分解酵素の発現強度が頸動脈プラークの臨床症候に関与する
	授 与 番 号	博甲医 第416号	論文審査委員	主査 佐藤 徹
	授与年月日	平成27年3月31日		副査 川上速人 後藤田貴也 平野照之 布川雅雄
	授与の要件	学位規程第5条		

学 位 論 文 の 要 旨

アテローム動脈硬化性病変である頸動脈の不安定プラークは塞栓をきたし脳梗塞を誘発することが知られている。不安定プラークの組織学的特徴は線維性被膜の菲薄化やプラーク内血管新生などが挙げられ、プラーク不安定化に関連する物質として細胞外マトリックスを分解するマトリックスメタロプロテイナーゼ（MMPs）が重要な役割を担っているとされている。しかし、MMPsの発現局在と臨床症候の関係に関しては、未だはっきりしていない。本研究の目的はMMPsの発現局在と頸動脈プラークの臨床症候の関連を検証することである。

頸動脈内膜剥離術（CarotidEndarterectomy：CEA）が施行された内頸動脈狭窄症41症例（症候性21例、無症候性20例）から得られた摘出プラークを対象とし、病理学的所見の検討およびMMP関連酵素や血管新生のマーカーであるVEGF、MMPs、TIMPs、CD31（PECAM）に対する免疫染色を施行し、虚血イベント発症との関連について検討した。

プラーク全体について測定したMMPs、CD31の発現強度は症候性プラークと無症候性プラークにおいて有意差はなかった。一方、無症候性プラークと比較して症候性プラークにおいては、線維性被膜は薄い傾向があったが、線維性被膜及びその周辺部のMMP-9発現強度は有意に高かった（ $p = 0.003$ ）。また、MMP-9に対する免疫電顕では一部の泡沫細胞内のゴルジ装置や顆粒状構造に陽性を示した。プラーク内における部位ごとのMMP-9発現強度と血管新生との間には相関が認められなかった。

本研究にて、線維性被膜とその周辺部のMMP-9の発現強度増大が、頸動脈プラークの臨床症候に関与している可能性が示された。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

アテローム動脈硬化性病変である頸動脈の不安定プラークは塞栓をきたし脳梗塞を誘発することが知られている。不安定プラークの組織学的特徴として線維性被膜の菲薄化やプラーク内血管新生などが挙げられ、プラーク不安定化に関連する物質として細胞外マトリックスを分解するマトリックスメタロプロテイナーゼ（MMPs）が重要な役割を担っているとされている。しかし、MMPsの発現局在と臨床症候の関係に関しては、未だはっきりしていない。本研究の目的はMMPsの発現局在と、頸動脈プラークによる臨床症候との関連を検証することである。

頸動脈内膜剥離術（Carotid Endarterectomy：CEA）が施行された内頸動脈狭窄症41症例（症候性21例、無症候性20例）から得られた摘出プラークを対象とし、病理学的所見の検討および

MMP関連酵素や血管新生のマーカーであるVEGF、MMPs、TIMPs、CD31（PECAM）に対する免疫染色を施行し、虚血イベント発症との関連について検討した。

プラーク全体について測定したMMPs、CD31の発現強度は症候性プラークと無症候性プラークにおいて有意差はなかった。一方、無症候性プラークと比較して症候性プラークにおいては、線維性被膜は薄い傾向にあり、線維性被膜及びその周辺部のMMP-9発現強度は有意に高かった（ $p = 0.003$ ）。また、MMP-9に対する免疫電顕では一部の泡沫細胞内のゴルジ装置や顆粒状構造に陽性を示した。プラーク内における部位ごとのMMP-9発現強度と血管新生との間には相関が認められなかった。

本研究にて、線維性被膜とその周辺部のMMP-9の発現強度増大が、頸動脈プラークの臨床症候に関与している可能性が示された。審査の結果、学位論文として価値あるものと認めた。

学位論文要旨および審査要旨

氏名 李 政 勲

〈学 位〉	種 類	博士（医学）	論 文 項 目	中枢神経系原発悪性リンパ腫の予後因子に関する検討
	授 与 番 号	博甲医 第417号	論文審査委員	主査 高山信之
	授与年月日	平成27年3月31日		副査 菅間 博 高山 誠 古瀬純司 松村譲児
	授与の要件	学位規程第5条		

学 位 論 文 の 要 旨

中枢神経系原発悪性リンパ腫（primary central nervous system lymphoma；PCNSL）は稀少腫瘍であるが、近年高齢者を中心に増加傾向を認める予後不良な疾患である。PCNSLの予後因子として年齢とperformance statusは広く支持されているが、他に確立した予後因子はなく、また組織学的因子や新たな因子の検討は十分にされていない。今回、われわれはPCNSLの予後因子を検索するため、臨床的ならびに組織学的因子を用いて後方視的に解析を行った。当科でPCNSLと診断され、主としてhigh-dose methotrexate（MTX）療法と全脳照射を行った41症例（男性25例、女性16例、平均年齢62.8歳）を対象にした。臨床的検討因子として性別、年齢、Karnofsky performance status（KPS）、病変部位（深部病巣、脳弓前半部、中脳被蓋・上髄帆）、病変数、治療法を用い、組織学的検討因子としてMTX代謝関連因子（dihydrofolate reductase；DHFR, multidrug resistance protein；MRP, lung resistance protein；LRP）、B細胞subtype関連因子（CD10, BCL6, MUM1, CD138, GCET1, FOXP1）、細胞周期関連因子（Ki67, p27）、癌遺伝子産物（BCL2, cMYC, pSTAT3）、薬剤耐性因子（*O*⁶-methylguanine-DNA methyltransferase；MGMT, mismatch repair；MMR蛋白）を免疫染色法で評価し、無増悪生存期間（progression-free survival；PFS）、全生存期間（overall survival；OS）を基に予後因子を検索した。観察期間中央値は23ヶ月、PFSの中央値は29ヶ月、OS中央値は73ヶ月であった。検討因子間では年齢とKPSは逆相関（ $P=0.002$ ）を示し、Ki67と癌遺伝子産物（BCL2, cMYC, pSTAT3）は正相関（ $P<0.028$ ）を、MMR蛋白（MLH1, MSH2, MSH6, PMS2）間で正相関（ $P<0.012$ ）を示した。多変量解析の結果、独立した予後因子としてPFSでは病変数（ $P=0.018$ ）、中脳被蓋・上髄帆病変（ $P=0.024$ ）、地固め療法；high-dose cytarabine療法（ $P=0.024$ ）、p27発現（ $P=0.010$ ）、BCL6発現（ $P=0.057$ ）、MSH2発現（ $P=0.023$ ）を認め、OSでは脳弓前半部病変（ $P=0.037$ ）、中脳被蓋・上髄帆病変（ $P=0.050$ ）、MSH2発現（ $P=0.037$ ）を認めた。また単変量解析で予後に影響する因子としてOSにBCL6（ $P=0.055$ ）とcMYC（ $P=0.046$ ）を認めた。本研究の結果、以下の知見が得られた。①従来予後不良と報告された深部病変に比べ、新たな検討項目とした脳弓前半部および中脳被蓋・上髄帆病変は有意な予後不良因子であった。これらの部位はより限局かつ脳室に近い病変であり、上衣下浸潤しやすいことが予後不良の原因と考えられた。②PCNSLでは全身性diffuse large B cell lymphomaと比べ、予後不良とされるnon-GCB typeの割合が多かったが、予後との関連は明かではなかった。一方、GCB typeのマーカーであるBCL6発現は予後良好傾向を示し、PCNSLの予後因子である可能性が考えられた。③今回初めてMMR蛋白がPCNSLの予後因子であることが示された。MMR蛋白発現低下はMTX薬剤耐性に影響したため、予後不良の結果にも影響したと考えられた。これら研究結果は今後さらに前向き試験にてその意義を検証する予定である。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

中枢神経系悪性リンパ腫（primary central nervous system lymphoma；PCNSL）は、稀少腫瘍であるが、近年高齢者を中心に増加傾向を認める予後不良の疾患である。PCNSLの予後因子として、年齢とPerformance statusは広く支持されているが、他の予後因子については不明な点が多い。本研究は、PCNSLにおける様々な臨床的、組織学的予後因子について、自験例を基に包括的に検討したものである。

対象は、杏林大学医学部附属病院脳神経外科にてPCNSLと診断され、主としてhigh-dose methotrexate（MTX）療法および全脳照射を行った41例（男性25例、女性16例）。臨床的検討因子として、性別、年齢、Karnofsky performance status（KPS）、病変部位（深部病巣、脳弓前半部、中脳被蓋・上髄帆）、病変数、治療法を、組織学的検討因子としてMTX代謝関連因子（dihydrofolate reductase；DHFR, multidrug resistance protein；MRP, lung resistance protein；LRP）、B細胞subtype関連因子（CD10, BCL6, MUM1, CD138, GCET1, FOXP1）、細胞周期関連因子（Ki67, p27）、癌遺伝子（BCL2, cMYC, pSTAT3）、薬剤耐性因子（*O*⁶-methylguanine-DNA methyltransferase；MGMT, mismatch repair；MMR蛋白）を免疫染色法で評価し、Progression-free survival（PFS）、Overall survival（OS）に影響を及ぼす予後因子となり得るか否かについ

て検討した。更に、標準治療薬であるMTXの耐性に影響を及ぼす因子についても検討した。

多変量解析の結果、PFSの独立した予後不良因子として、病変数（ $P=0.018$ ）、中脳被蓋・上髄帆病変（ $P=0.024$ ）、地固め療法としてhigh-dose cytarabineの施行なし（ $P=0.024$ ）、p27低発現（ $P=0.010$ ）、MMR蛋白の一つであるMSH2低発現（ $P=0.023$ ）が認められた。また、BCL6低発現は、予後不良となる傾向を示した（ $P=0.057$ ）。一方、OSの独立した予後因子として、脳弓前半部病変（ $P=0.037$ ）、中脳被蓋・上髄帆病変（ $P=0.050$ ）、MSH2発現低下（ $P=0.046$ ）が認められた。更に、MTX耐性因子を多変量解析で検討したところ、MMR蛋白の一つであるPMS2の発現の低下が有意に予後と相関した（ $P=0.022$ ）。脳弓前半部および中脳被蓋・上髄帆は、脳室に近く、上衣下浸潤しやすいことが予後不良となる原因である可能性が考えられた。また、MMR蛋白の発現低下は、DNA mismatch領域が修復されずに残ることが、MTX抵抗性と関連して予後不良となる可能性が考えられた。

今回の研究により、PCNSLの予後因子について包括的理解が進み、特に、臨床的因子として脳弓前半部および中脳被蓋・上髄帆病変が、組織学的因子としてMMR蛋白の発現低下が、PFS、OSの予後不良因子であると同定されたことは、新たな知見として意義ある結果であった。審査の結果、学位論文として価値あるものと認めた。

氏名 牛 込 悠紀子

〈学 位〉	種 類 博士（医学）	論 文 項 目	重症薬疹におけるpatrolling monocytes (pMOs) と regulatory T cells (Tregs) の相互作用
	授与番号 博甲医 第418号	論文審査委員	主査 神谷 茂
	授与年月日 平成27年3月31日		副査 木崎節子 高橋信一 滝澤 始 山田昌和
	授与の要件 学位規程第5条		

学 位 論 文 の 要 旨

重症薬疹の中でも、スティーブンス・ジョンソン症候群 (Stevens-Johnson syndrome : SJS) / 中毒性表皮壊死症 (Toxic epidermal necrolysis : TEN) と薬剤性過敏症症候群 (drug-induced hypersensitivity syndrome : DiHS) はその病態が極めて対照的である。Regulatory T cells (Tregs) の機能低下により生じ、著明な表皮障害を生ずる SJS / TEN に対し、DiHS では急性期に免疫抑制機能を有する Tregs の増大に伴うヘルペスウイルスの再活性化を生じるが、回復期には一転して増大していた Tregs が機能低下に陥り、自己抗体産生の増強を認めるようになる。しかし、多くの研究は急性期のみの解析に終始しており、回復期まで検討した報告はない。我々は本研究において、重症薬疹、とくに DiHS におけるこのような経時的な Tregs の動態の変化をもたらす要因として末梢血中の単球分画に注目し、この分画が薬疹の経過中にどのように変化し、それが Tregs の機能にどのような影響を与えるかを検討した。単球の分画において、ウイルス感染の検知に関与する CD14^{dim}CD16⁺ patrolling monocytes (pMOs) が DiHS の急性期には選択的に消失することにより、CD14⁺CD16⁻ classical monocytes (cMOs) の相対的増加を招き、cMOs からの IL-10 が Tregs の増大をもたらすことが分かった。末梢血中の pMOs は、DiHS の急性期が過ぎるとともに急速に回復するが、この回復した pMOs から産生される IL-6 は Tregs の機能低下をもたらす一方、IL-17 産生性 CD4⁺ 細胞 (Th17) の増加をもたらした。このように、pMOs と Treg / Th17 の相互作用が薬疹の臨床型と予後に大きな影響を与えていることが分かった。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

重症薬疹のうち、スティーブンス・ジョンソン症候群 (Stevens-Johnson syndrome : SJS) / 中毒性表皮壊死症 (toxic epidermal necrolysis : TEN) と薬剤性過敏症症候群 (drug-induced hypersensitivity syndrome : DiHS) はその病態が異なることが知られている。SJS / TEN では制御性 T 細胞 (Tregs) の機能低下により表皮障害が生ずるのに対して、DiHS では Treg の増大が認められる。IL-17 産生性 CD4⁺ 細胞 (Th17) は自己免疫疾患発症に重要な役割をしていることが知られる。また CD14^{dim}CD16⁺ patrolling monocytes (pMOs) はウイルス感染免疫応答の中心的役割をする他、自己免疫疾患の発症にも関与することが知られている。本研究では重症薬疹の急性期および回復期での Tregs, Th17 および pMOs の動態を解析し、同疾患の病態への関連性を解析した。

杏林大学医学部付属病院皮膚科で入院加療を受けた DiHS 患者 52 例 (急性期 31 例, 回復期 21 例), SJS 患者 22 例 (急性期 12 例, 回復期 10 例), TEN 患者 11 例 (急性期 6 例, 回復期 5 例), 健康人 17 例から末梢血リンパ球を採取して実験を行った。リンパ球の CD 抗原等は特異抗体を用いたフローサイトメトリーにより解析した。pMOs および cMOs (classical CD14⁺CD16⁻ monocytes) は磁気細胞分離システムおよびセルソーターにより分取した。DiHS, SJS / TEN 急性期患者の皮疹部を生検して免疫組織染色により pMOs が発現する CD16 および PILR- α (paired immuno-

globulin-like type 2 receptor α) を調べた。

DiHS 急性期では回復期, SJS / TEN 急性期, 回復期, 健康人と比べて Tregs の割合が増大していた。増加した Tregs は iTregs (induced Tregs) のサブポピュレーションであった。一方, Th17 は DiHS 回復期に有意な増加を示した。重症薬疹における pMOs の変動を調べた結果, DiHS 急性期にはほぼ消失しており, 回復期では SJS / TEN 急性期, 回復期, 健康人と同レベルに回復していた。cMOs については上記群間で有意な差は認められなかった。また DiHS 急性期の皮疹部での pMOs の消失が免疫組織染色により確認された。DiHS 症例における Tregs, pMOs, Th17 の経時的変動を検討した結果, 急性期の Tregs 増加, pMOs 消失, Th17 減少と回復期の Tregs 減少, pMOs 増加, Th17 増加が認められた。加えて DiHS 急性期の cMOs 由来 IL-10 による Tregs の増加ならびに DiHS 回復期の pMOs 由来 IL-6 による Th17 の増加が共培養実験により明らかにされた。

本研究により DiHS と SJS / TEN の病態変化に pMOs, Tregs, Th17 が密接に関連していることが明らかにされた。すなわち DiHS の急性期においては pMOs の選択的消失の結果としての cMOs の相対的増加が iTregs を増加させる一方, DiHS の回復に伴い出現した pMOs が CD4⁺ 細胞の分化を Tregs から Th17 に向けさせる可能性が提起された。これらの結果は重症薬疹の発症病態の解明に新たな知見を提示するものであり, 審査の結果学位論文として価値あるものと認めた。

学位論文要旨および審査要旨

氏名 小 松 由莉江

〈学 位〉	種 類	博士（医学）	論 文 項 目	アトピー性皮膚炎の病態形成における発汗障害の関与
	授 与 番 号	博甲医 第419号	論文審査委員	主査 永松信哉
	授与年月日	平成27年3月31日	副査	山本 実 石田 均 小林富美恵 多久嶋亮彦
	授与の要件	学位規程第5条		

学 位 論 文 の 要 旨

汗はアトピー性皮膚炎（AD）の悪化因子のひとつとして以前より注目されていたが、汗には水分に加え保湿因子や抗菌ペプチドなどが含まれ、皮膚の水分の保持に重要な役割を果たしている。我々はむしろ適切な発汗ができないことがADの病態を進行させているのではないかと考えた。ADの発汗反応についての過去の検討結果は低下、正常、亢進のいずれの報告もある。その理由として、過去の報告では発汗反応の客観的で定量的な測定法が確立していなかったこと、ADの病態の進行による発汗機能の経時的な変化を評価していなかったこと等が挙げられる。本研究において、個々の汗腺・汗管からの発汗反応を定量的に評価するimpression mold（IM）法を用いて、ADにおける発汗反応が皮疹の変化に関連してどのように変化するかを測定し、発汗障害がADの病態形成にどのように影響するかを明らかにしようと考えた。

健常人とAD患者に足浴による温熱負荷を行い、15分後、30分後の発汗反応をIM法を用いて測定し、発汗滴の分布、大きさを計測した。対象患者は発症からの期間が5年以下の群をacute AD、5年以上の群をchronic ADとし、各々がどのような発汗パターンを示すかを比較検討した。

健常人では温熱負荷前、後ともに皮溝からの発汗が優位に見られるが、負荷後には皮丘からの発汗も増加し、皮溝からの発汗を補っている可能性が考えられた。Acute ADでは、負荷後の皮溝からの発汗が減少する一方で、代償性発汗と考えられる発汗滴が皮丘に見られた。Chronic ADでは、発汗滴数が著明に減少するとともに発汗量の少ない汗管が増加し、代償性発汗も見られなくなった。Acute ADでは発汗滴数が増えるほど皮疹の重症度であるSCORADも高い傾向を示す一方、chronic ADでは発汗滴数が減少する程SCORADが増加し、発汗の減少による乾燥が皮疹の増悪をもたらすと考えられた。免疫組織学的検討では、ADでは汗に含まれる抗菌ペプチドであるdermcidinが、汗管周囲の真皮に強く発現し、真皮内の汗の漏出と考えられた。この所見は、尋常性乾癬では見られず、ADの炎症の増悪に関与する可能性が考えられた。

ADの発汗障害は皮溝からの発汗低下から始まり、急性期は皮丘からの代償性発汗が生じるものの、徐々に全身性の発汗障害へ進展し、慢性期のADの病態をもたらすと考えられた。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

汗はアトピー性皮膚炎（AD）の悪化因子の一つである。汗には水分に加え保湿因子や抗菌ペプチドなどが含まれ、皮膚の水分保持に重要な役割を果たしているが、ADの発汗反応に関しては、客観的かつ定量的な測定法が確立していなかったため、現在まで低下、正常、亢進なのか、一定の見解は得られていなかった。従って、本研究においては、発汗反応を定量的に評価するimpression mold（IM）法を用いることにより、ADの病態形成における発汗障害の役割を明らかにすることを試みた。

健常人とAD患者に足浴による温熱負荷を行い、15分後、30分後の発汗反応をIM法を用いて測定し、発汗滴の分布、大きさを計測した。対象患者は発症からの期間が5年以下の群をacute AD、5年以上の群をchronic ADとし、各々がどのような発汗パターンを示すか、比較検討した。その結果、acute ADでは負荷後の皮溝からの発汗が減少する一方で、代償性発汗と考えられる

発汗滴が皮丘に観察された。Chronic ADでは、発汗滴数が著明に減少するとともに発汗量の少ない汗管が増加し、代償性発汗も観察されなかった。又、acute ADで観察された皮膚紋理の破壊がchronic ADでは更に進んでいることが明らかとなった。免疫組織学的検討では、ADでは汗に含まれる抗菌ペプチドであるdermcidinが、汗管周囲の真皮に強く発現していたことから、真皮内へ汗が漏出し、又、この所見は尋常乾癬では見られないため、ADの炎症の増悪に関与していることが示唆された。すなわち、ADの発汗障害は皮溝からの発汗低下から始まり、急性期には皮丘からの代償性発汗が生じるものの、徐々に全身性の発汗障害へ進展し、慢性的なADの病態をもたらすことが強く示唆された。

本研究は、ADの病期と発汗障害のパターンとの関連を明らかにしたものであり、このことはADの治療法の開発に結びつく重要な知見を示したものであることから、学位論文として価値あるものと評価した。

氏名 横 山 政 明

〈学 位〉	種 類	博士（医学）	論 文 項 目	Molecular analysis of biliary tract cancers identified <i>KRAS</i> mutation as a potential prognostic biomarker
	授 与 番 号	博甲医 第420号		（胆道癌における <i>KRAS</i> 変異の予後予測バイオマーカーとしての可能性）
	授与年月日	平成27年3月11日		
	授与の要件	学位規程第5条	論文審査委員	主査 高橋信一 副査 狩野葉子 菅間 博 近藤晴彦 佐藤喜宣

学 位 論 文 の 要 旨

【目的】

胆道癌に対する分子標的治療薬のターゲットとなる可能性のあるシグナル伝達系及び細胞周期関連分子の変異、蛋白発現について明らかにする。

【対象】

2005年～2011年の間に当院で手術を受け、病理組織学的に胆道癌と診断された患者63例（男／女＝38／25、胆嚢癌23例、肝内胆管癌7例、肝外胆管癌29例、乳頭部癌4例）。

【方法】

胆道癌63例において、*KRAS*、*BRAF*、*PIK3CA*、*FBXW7*の変異の有無、およびEGFR、TP53の過剰発現の有無をダイレクトシーケンスおよび免疫染色により評価し、分子学的特徴と臨床病理学的特徴との関連を後方視的に調査した。

【結果】

*KRAS*変異は9例（14％）に認められたが、*BRAF*、*PIK3CA*、及び*FBXW7*には変異は認められなかった。EGFRは5例（8％）に、またTP53は30例（48％）に過剰発現が認められた。*KRAS*変異症例は野生型よりも有意に全生存期間が短く（ $P = 0.005$ ）、多変量解析により*KRAS*変異（ $P = 0.004$ ）、リンパ節転移例（ $P = 0.015$ ）が、全生存期間を有意に短縮する因子として抽出された。

【結論】

*KRAS*変異は胆道癌患者において予後予測因子になる可能性が示唆された。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

胆道癌の多くは診断時すでに手術適応でない進行癌であることが多く、そのため分子標的治療薬の開発が期待されている。本研究では、この胆道癌に対する分子標的治療薬のターゲットとなる可能性のあるシグナル伝達系および細胞周期関連分子の変異、蛋白発現について、さらに胆道癌の予後予測因子について検討した。

【対象】

2005年から2011年の間に杏林大学付属病院で手術を受け、病理組織学的に胆道癌と診断された患者63例（男／女＝38／25、胆嚢癌23例、肝内胆管癌7例、肝外胆管癌29例、乳頭部癌4例）である。

【方法】

胆道癌63例において、*KRAS*、*BRAF*、*PIK3CA*、*FBXW7*の変異の有無、およびEGFR、TP53の過剰発現の有無をダイレ

クトシーケンスおよび免疫染色により評価し、分子学的特徴と臨床病理学的特徴との関連を後方視的に調査した。

【結果】

- 1) *KRAS*変異は9例（14％）に認められたが、*BRAF*、*PIK3CA*および*FBXW7*には変異は認められなかった。
- 2) EGFRは5例（8％）に、またTP53は30例（48％）に過剰発現が認められた。
- 3) *KRAS*変異症例は野生型よりも有意に全生存期間が短かった（ $P = 0.005$ ）。
- 4) 多変量解析により*KRAS*変異（ $P = 0.004$ ）、リンパ節転移例（ $P = 0.015$ ）が、全生存期間を有意に短縮する因子として抽出された。

本研究により*KRAS*変異は胆道癌患者において予後予測因子になる可能性が示唆された。今後、胆道癌に対して臨床応用される分子標的治療薬の選択において重要な新知見であり、審査の結果、学位論文として相応しいものと認めた。

学位論文要旨および審査要旨

氏名 大 石 知瑞子

〈学 位〉	種 類 博士（医学）	論 文 項 目	A NEW PITFALL IN A SENSORY CONDUCTION STUDY OF THE LATERAL ANTEBRACHIAL CUTANEOUS NERVE: SPREAD TO THE RADIAL NERVE.
	授 与 番 号 博乙医 第561号		
	授与年月日 平成26年4月16日		
	授与の要件 学位規程第6条		(外側前腕皮神経の神経伝導検査における新たな pitfall, 橈骨神経への波及に対する研究)
		論文審査委員	主査 岡島康友 副査 市村正一 大木 紫 塩川芳昭 松村譲児

学 位 論 文 の 要 旨

【背景】外側前腕皮神経（LAC）の感覚神経伝導検査（SCS）は腕神経叢障害の評価に用いられるが、感覚神経活動電位（SNAP）振幅には個人差、左右差が大きく、診断的価値が問題視されている。本神経のSCSの個人差・左右差の原因を明らかにし、それに対応することが求められている。【目的】健康者を対象にLACのSCSにおける肘部刺激が橈骨神経浅枝（SR）に波及する頻度と検査結果への影響を明らかにする。【方法】健康者80例（男性39例、女性41例、24-82歳）の両腕を検査した。肘部で刺激し12cm遠位の前腕部で記録するルーチンLAC SCSに加え、遠位で橈骨神経SNAPを記録した。刺激の波及の生じ方によって以下の3パターンに分類した。Pattern Aは橈骨神経へ刺激の波及が生じないタイプ。Pattern Bは弱い刺激で純粋なLAC SNAPが記録されるが、刺激を強くすると橈骨神経へ刺激が波及するタイプ。Pattern Cは弱刺激から橈骨神経へ刺激の波及が生じるために、純粋なLAC SNAPが同定できないタイプである。SNAP振幅の正常値と左右差を検討した。また、LAC SNAP振幅が最大となるのに必要な刺激強度と、橈骨神経へ刺激の波及が生じる刺激強度も検討した。Pattern Cの3例で、両神経の分離刺激が不可能な理由を、筋皮神経及び橈骨神経の近位部刺激を行って検討した。【結果】Pattern A, B, Cは、それぞれ160肢中87, 63, 10肢で見られた。見かけ上のLAC SNAPは、真のLAC SNAPの最大6.7倍にまで増大する場合があった。LAC SNAP振幅が最大となる刺激強度は $4.7 \pm 1.7\text{mA}$ (1.6-11.0)であったが、SRへ刺激の波及は63%の被検肢では10mA以下の弱い刺激で生じた。真のLAC SNAP振幅は $28.3 \pm 14.7\mu\text{V}$ (5.4-98.0)で、個人差が大きかった。またその左右差は（両側ともPattern AないしBの71例で測定可能） $26.8 \pm 18.1\%$ (0.4-76.3%)であり、8例（11%）では通常用いられる左右差判定基準の50%を超えていた。Pattern Cの少なくとも1例はSRの欠如による解剖学的変異、もう1例は、LACとSRが肘部で極めて近接して走行しているためであった。【結論】本報告はLACのSCSにおける刺激波及の影響を示した初めての報告である。刺激波及によってSRから混入したSNAPを誤ってLAC SNAPと解釈する可能性が高く、その確認のためには遠位での橈骨神経記録を行なう必要がある。なお、本報告はSRが欠如する変異を電気生理学的に証明し得た初の報告でもある。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

【背景】外側前腕皮神経（LAC）の感覚神経伝導検査（SCS）は腕神経叢障害の評価に用いられるが、感覚神経活動電位（SNAP）振幅には個人差、左右差が大きく、診断的価値が問題視されている。本神経のSCSの個人差・左右差の原因を明らかにし、それに対応することが求められている。【目的】健康者を対象にLACのSCSにおける肘部刺激が橈骨神経浅枝（SR）に波及する頻度と検査結果への影響を明らかにする。【方法】健康者80例（男性39例、女性41例、24-82歳）の両腕を検査した。肘部で刺激し12 cm遠位の前腕部で記録するルーチンLAC SCSに加え、遠位で橈骨神経SNAPを記録した。刺激の波及の生じ方によって以下の3パターンに分類した。Pattern Aは橈骨神経へ刺激の波及が生じないタイプ、Pattern Bは弱い刺激で純粋なLAC SNAPが記録されるが、刺激を強くすると橈骨神経へ刺激が波及するタイプ、Pattern Cは弱刺激から橈骨神経へ刺激の波及が生じるために、純粋なLAC SNAPが同定できないタイプとして、SNAP振幅の正常値と左右差を検討した。また、両神経の分離刺激が不可能なPattern Cの3例では、その原因を筋皮神経及び橈骨神経の近位部刺激を行って詳細に検証した。【結果】Pattern A, B, Cは、

それぞれ160肢中87, 63, 10肢で見られた。見かけ上のLAC SNAPは、真のLAC SNAPの最大6.7倍にまで増大する例があった。LAC SNAP振幅が最大となる刺激強度は $4.7 \pm 1.7\text{mA}$ (1.6-11.0)であったが、SRへ刺激の波及は63%の被検肢では10mA以下の弱い刺激で生じた。真のLAC SNAP振幅は $28.3 \pm 14.7\mu\text{V}$ (5.4-98.0)で、個人差が大きかった。またその左右差は $26.8 \pm 18.1\%$ (0.4-76.3%)であり、8例（11%）では通常用いられる左右差判定基準の50%を超えていた。Pattern Cの少なくとも1例はSRの欠如による解剖学的変異、もう1例は、LACとSRが肘部で極めて近接して走行しているためであった。【結論】本報告はLACのSCSにおける刺激波及の影響を示した初めての報告である。刺激波及によってSRから混入したSNAPを誤ってLAC SNAPと解釈する可能性が高く、その確認のためには遠位での橈骨神経記録を行なう必要がある。なお、本報告はSRが欠如する変異を電気生理学的に証明し得た初の報告でもある。

本研究は通常の臨床神経生理検査で行われているLAC SNAP振幅の評価の問題点を定量的に示し、その原因を探索・分類し、問題点への対処法を提案している。LACの神経伝導検査の臨床診断的価値を高める内容であり、審査の結果、学位論文として価値あるものと認めた。

氏名 辻 直 子

〈学 位〉	種 類 博士（医学）	論 文 項 目	Effect of prolonged ischaemic time on muscular atrophy and regenerating nerve fibres in transplantation of the rat hind limb.
	授 与 番 号 博乙医 第562号		（ラット後肢移植における虚血時間の遷延が筋肉の萎縮と再生神経線維に及ぼす影響）
	授与年月日 平成26年5月21日		
	授与の要件 学位規程第6条		
		論文審査委員	主査 市村正一 副査 赤川公朗 佐藤喜宣 千葉厚郎 渡邊 卓

学 位 論 文 の 要 旨

四肢切断後の再接着は術後の機能的障害が問題となることも多く、再接着までの虚血時間が長くなると機能的な成績も悪くなることが知られている。肢再接着における筋機能低下の理由である筋萎縮と神経再生について、切断し冷保存したラットの後肢を再接着する実験を行い虚血時間との関係を組織学的及び電気生理学的に検討した。

【方法】 実験には、Wild type（野生型）とGFP-Tg（緑色蛍光蛋白遺伝子導入）のLewisラット（雄、8-10週、250-320g）を用いた。Wild typeラットの後肢を大腿中央で切断し、切断肢を0、1、8、12、24、48、72時間4℃で保存した後に再接着した虚血後再接着モデル（Group A、各n=3）、大腿動脈とその枝を結紮した動脈虚血肢モデル（Group B、n=3）、坐骨神経を切断した脱神経モデル（Group C、n=3）を作成した。さらにGFP-Tg LewisラットにWild typeラットの後肢を0、12時間の冷却保存後に移植した（Group D、各n=3）。またコントロールとして非手術群のWild typeラット（Group E、n=3）とGFP-Tgラット（Group F、n=3）を用いた。評価はGroup A、B、Cの手術後2、3、4、8週時に手術側の腓腹筋の誘発筋電図を測定し、8週目に腓腹筋を採取して組織学的に筋線維の横断径を測定した。Group Dは再接着後2週目に縫合部を含む坐骨神経を採取し、蛍光顕微鏡で縫合部より5mm遠位部の横断面を観察し、発光している細胞数をカウントし再生神経線維数を評価した。

【結果】Group Aの虚血後再接着モデルでは虚血時間が8時間を超えると筋線維の横径が短縮し、さらに筋線維の壊死像を認めた。これらの所見は虚血が長時間に及ぶほど顕著となった。Group Bでは明らかな筋壊死、萎縮を認めなかった。Group Cの脱神経モデルでは筋細胞の壊死像は認めないが一樣に筋線維の著明な萎縮を認めた。誘発筋電図を用いた電気生理学的評価では、Group Aで8時間以上の虚血群において3週目の潜時が延長しており、8週目においても回復しなかった。Group Dでは坐骨神経1本あたりの伸長した神経線維数は12時間虚血群で10.7個であり0時間虚血群の96個と比較し有意に少なかった（ $p < 0.05$ ）。

【考察】 一般に四肢の再接着は冷保存で12-24時間であれば可能とされている。しかし本実験より、8時間以上の虚血後の切断四肢再接着は筋線維の萎縮と壊死をもたらす、その程度は虚血時間に比例していた。また、12時間虚血後の再接着では神経の再生数が減少しており、長時間虚血後の筋萎縮は筋線維への侵襲によるものだけでなく、神経再生の遅れや減少による神経原性の筋萎縮も加わっていることが明らかになった。以上から再接着後の四肢機能のためには8時間以内の血行再開が望ましいことが示唆された。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

四肢切断後の再接着の機能低下の主因である筋萎縮について、冷保存したラットの後肢を再接着する実験を行い虚血時間との関係を組織学的及び電気生理学的に検討した。

【方法】 Wild typeとGFP-Tg（緑色蛍光蛋白遺伝子導入）のLewisラットを用いた。Wild typeラットの後肢を大腿中央で切断し、切断肢を0、1、8、12、24、48、72時間4℃で保存した後に再接着した虚血後再接着モデル（Group A、各n=3）、大腿動脈を結紮した動脈虚血肢モデル（Group B、n=3）、坐骨神経を切断した脱神経モデル（Group C、n=3）を作成した。さらにGFP-Tg LewisラットにWild typeラットの後肢を0、12時間の冷却保存後に移植した（Group D、各n=3）。コントロールは非手術群のWild typeラット（Group E、n=3）とGFP-Tgラット（Group F、n=3）を用いた。評価はGroup A、B、Cの手術後2、3、4、8週時に手術側の腓腹筋の誘発筋電図を測定し、8週目に腓腹筋を採取して筋線維の横断径を測定した。Group Dは再接着後2週目に坐骨神経を採取し、縫合部より5mm遠位の横断面を蛍光顕微鏡で観察し、S100蛋白陽性の発光している細胞を再生神経線維として測定した。

【結果】 Group Aでは虚血時間が8時間を超えると筋線維の横径

が短縮し、さらに筋細胞の壊死像を認め、虚血が長時間に及ぶほど顕著であった。Group Bでは明らかな筋壊死、萎縮を認めなかった。Group Cでは筋線維の著明な萎縮を認めた。誘発筋電図では、Group Aで8時間以上の虚血群において3週目の潜時が延長しており、8週目においても回復しなかった。Group Dでは坐骨神経あたりの伸長した神経線維数は12時間虚血群で10.7個であり0時間虚血群の96個と比較し有意に少なかった（ $p < 0.05$ ）。

【考察】 一般に四肢の再接着では冷保存で12-24時間以内であれば可能とされている。しかし、本実験より8時間以上の虚血後の再接着は筋線維の萎縮と壊死をきたし、その程度は虚血時間が長い程著明であった。また、12時間虚血後の再接着では再生神経数が有意に減少しており、長時間虚血後の筋萎縮は筋線維への侵襲だけでなく、神経再生の遅れや減少による神経原性の筋萎縮も加わっていることが明らかになった。以上から、再接着後の四肢機能の温存には8時間以内の血行再開が望ましいことが示唆された。

本研究は再接着肢の機能低下の主因である筋萎縮には、筋自体の侵襲の他に神経障害が関与していることを明らかにし、さらに虚血時間も検討した結果冷保存でも8時間以内の再接合が望ましいことを証明したものであり、学位論文として価値あるものと認められた。

学位論文要旨および審査要旨

氏名 宮 内 洋

〈学 位〉	種 類 博士（医学）	論 文 項 目	微小神経電図法による血管周囲微小活動電位に関する研究
	授 与 番 号 博乙医 第563号	論文審査委員	主査 市村正一
	授与年月日 平成26年9月17日	副査	塩川芳昭 千葉厚郎 遠山 満 大木 紫
	授与の要件 学位規程第6条		

学 位 論 文 の 要 旨

救命救急センターに入室し、集中治療が必要な患者においては、血圧の変動や不整脈などの自律神経系が関与する循環器系の合併症が予後を左右することが多く、疾患の自律神経系への影響を明らかにすることは臨床的に重要な課題である。各疾患が原因となって生じた自律神経の失調をモニターする新たな手法を考案する目的で研究を行った。【対象と方法】健康ボランティア10名と著者3名、合わせて13名（男性11名、女性2名、年齢は26歳から50歳、平均35.3歳）を対象とした。被験者に十分実験の内容を説明し同意を得たあと、動脈の走行を確認し、Allen testにより血行障害や出血傾向などの問題がないことを確認した。被験者の手関節部掌側に皮下浸潤麻酔を行ったあと、観血的動脈圧モニターを留置する際の手技に準じて24ゲージの太さの微小電極を刺入し、研究者が保持し電極の先端を橈骨動脈壁に接触させ、微小な活動電位を検出した。被験者にValsalva maneuver, Tilt testを行うことで誘発される電位変化を記録した。また橈骨尺骨動脈周囲に肉眼解剖で確認可能な自律神経線維分布があるか解剖実習体によるSihler染色を用い検討した。【結果】実験を行った12名中8名で、安静時の微小な活動電位が検出された。高速フーリエ変換（Fast Fourier Transform, 以下FFT）波形では低周波数にピークがあり整数倍に漸減してゆく交感神経活動に特徴的な波形パターンが観察された。Valsalva maneuverまたはTilt testで7名に明らかに活動電位の振幅が増強した。これらの結果から今回検出された活動電位は、血管周囲の交感神経活動を検出した可能性が高いと考えられた。なお、施行後明らかな合併症の発生はなかった。橈骨尺骨動脈周囲の神経の走行は各々橈骨神経尺骨神経より分枝し、一方、解剖実習体による検討では、橈骨尺骨動脈周囲を伴走、実体顕微鏡ではその周囲で末梢神経が放散あるいは網目状に分布することが確認できた。【結語】臨床現場では、観血的動脈圧モニターの挿入・留置に橈骨動脈が汎用されるが、その血管周囲で交感神経活動と考えられる微小電位の検出に成功した。今後、自律神経系モニターの一つとして応用できる可能性を示唆した。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

救命救急で集中治療が必要な患者では、血圧の変動や不整脈などの自律神経系が関与する循環器系の合併症が予後を左右することが多く、重症患者における自律神経系の活動状況を明らかにすることは臨床的に重要な課題である。本研究の目的は自律神経の活動をモニターする新たな手法を確立することである。

【対象と方法】健康人13名（男11名、女2名、平均年齢35.3歳（26～50歳））を対象とした。被験者の橈骨動脈の走行や血行障害などの問題がないことを確認した後、手関節部掌側に皮下麻酔を行い、観血的動脈圧モニターを留置する際の手技に準じて24ゲージの太さの微小電極を刺入し、電極の先端を橈骨動脈壁に接触、保持し、血管周囲の自律神経の微小な活動電位を検出・記録した。さらに、Valsalva法、Tilt testで誘発される電位変化を調べた。また、橈骨および尺骨動脈周囲に肉眼解剖で確認可能な自律神経線維の存在をSihler染色により解剖実習体を用いて実体顕微鏡で検討した。

【結果】不整脈のため1名を除いた12名中8名で、安静時の微小活動電位が検出された。その高速フーリエ変換波形では、低周波

数にピークがあり整数倍に漸減してゆく交感神経活動に特徴的な波形パターンが観察された。Valsalva法で6名に、Tilt testで7名に活動電位の振幅が増強し、同時に記録した指尖脈波の振幅が減少した。以上の結果から本研究で検出された活動電位は、血管周囲の交感神経活動を検出したものと考えられた。また、検査後のしびれ等の合併症は観察されなかった。一方、解剖実習体による検討では、橈骨および尺骨動脈周囲の神経は、それぞれ橈骨と尺骨神経より分岐、動脈に沿って伴走し、その周囲で放散あるいは網目状に分布していることが確認できた。

【結語】本研究では、観血的動脈圧モニターの挿入・留置に汎用される橈骨動脈の血管周囲で、交感神経活動と考えられる微小電位の検出に成功した。従来の神経への直接穿刺法に比べCRPS（複合性局所疼痛症候群）の発生リスクが少なく、今後自律神経系モニターの一つとして安全に臨床応用できる可能性が示唆された。

本論文は臨床現場における自律神経系のモニターとして、橈骨動脈周囲の交感神経活動電位の検出を著者らが開発した安全な微小神経電図法で証明したものであり、学位論文として価値あるものと認められた。

氏名 加賀谷 優

〈学 位〉	種 類 博士（医学）	論 文 項 目	‘Real Angiosome’ assessment from peripheral tissue perfusion using tissue oxygen saturation (StO ₂) foot-mapping in patients with critical limb ischemia (重症下肢虚血患者における組織酸素飽和度足部マッピングを用いた末梢軟部組織血流による「real angiosome」評価)
	授 与 番 号 博乙医 第564号		
	授与年月日 平成26年10月15日		
	授与の要件 学位規程第6条		
	論文審査委員	主査 窪田 博	
		副査 石田 均 松村譲児 狩野葉子 遠山 満	

学 位 論 文 の 要 旨

【目的】

重症下肢虚血（critical limb ischemia以下CLI）は下肢動脈に動脈硬化性の狭窄、閉塞が起こる病態で予後不良の疾患である。CLIでは他の動脈硬化性病変と同様に血流評価を行い、早期にCLIの診断を行うことが重要である。現在、足部の非侵襲的血流評価法として足関節上腕血圧比や皮膚灌流圧などが行われているが、一長一短があり、足部の正確な血流が評価できるわけではない。そこで、救急や形成外科領域などで末梢血流評価に利用されている、組織酸素飽和度（tissue oxygen saturation以下StO₂）を計測し、軟部組織灌流の見地からCLIの血流評価および診断が可能であるかを検討した。

【方法】

CLI群20例と健常群20例を対象とし、足部の約60箇所においてStO₂値を計測し、StO₂値によって(1)0-30%、(2)30-50%、(3)50-70% (4)70-100%の4領域に分類するStO₂足部マッピング法によって、CLIと健常群を比較した。なお、この分類は過去のStO₂による末梢血流評価に関する文献を参考に設定した。さらにStO₂によって同定された虚血領域と創傷の位置との一致率と、血管造影とangiosomeモデル（足部各主要血管の軟部組織血行支配モデル）から推測した虚血領域と創傷の一致率との間に差があるかを検討した。従来CLIの虚血領域の評価には、血管造影とangiosomeモデルからの評価が広く用いられ、精度が高いとされてきた。

【結果】

(1)～(4)の各StO₂値領域の足部面積占有率を算出し、CLI群と健常群で比較すると(1)(2)のStO₂値領域（StO₂<50%）において、面積占有率はCLI患者で有意に高く、健常群はほぼ0%であり、虚血と健常組織の閾値としてStO₂値50%を設定した。設定したStO₂閾値を利用し評価した結果、創傷の位置とStO₂足部マッピング法における虚血領域と87.5%（14/16）で一致した。創傷の位置と血管造影・angiosomeモデルから評価した虚血領域とは68.8%（11/16）で一致した。

【結論】

StO₂足部マッピング法によってCLIの虚血領域を軟部組織の酸素飽和度の点から正確に評価することができた。本法は、従来から行われてきた血管造影とangiosomeモデルによる評価よりも精度が高いことが明らかになり、非侵襲的に「real angiosome（主要血管ではなく末梢微小血流により決定される、CLI患者足部における真の末梢組織血流分布）」の作成評価が可能であった。我々が提案する「real angiosome」は、重症下肢虚血（CLI）の診断と治療に新しい概念をもたらすと考える。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

【目的】重症下肢虚血（critical limb ischemia以下CLI）は下肢動脈に動脈硬化性の狭窄、閉塞が起こる病変で予後不良の疾患である。CLIでは他の動脈硬化性病変と同様に血流評価を行い、早期にCLIの診断を行うことが重要である。現在、足部の非侵襲的血流評価法として足関節上腕血圧比や皮膚灌流圧などが行われているが、一長一短があり、足部の正確な血流が評価できるわけではない。そこで、救急や形成外科領域などで末梢血流評価に利用されている、組織酸素飽和度（tissue oxygen saturation以下StO₂）を計測し、軟部組織灌流の見地からCLIの血流評価および診断が可能であるかを検討した。

【方法】CLI群20例と健常群20例を対象とし、足部の約60箇所においてStO₂値を計測し、StO₂値によって(1)0-30%、(2)30-50%、(3)50-70% (4)70-100%の4領域に分類するStO₂足部マッピング法によって、CLIと健常群を比較した。なお、この分類は過去のStO₂による末梢血流評価に関する文献を参考に設定した。さらにStO₂によって同定された虚血領域と創傷の位置との一致率と、血管造影とangiosomeモデル（足部各主要血管の軟部組織血行支配モデル）から推測した虚血領域と創傷の一致率との間に差があるかを検討した。従来CLIの虚血領域の評価には、血管造影とangiosomeモデルからの評価が広く用いられ、精度が高いとされてきた

【結果】(1)～(4)の各StO₂値領域の足部面積占有率を算出し、CLI群と健常群で比較すると(1)(2)のStO₂値領域（StO₂<50%）において、面積占有率はCLI患者で有意に高く、健常群はほぼ0%であり、虚血と健常組織の閾値としてStO₂値50%を設定した。設定したStO₂閾値を利用し評価した結果、創傷の位置とStO₂足部マッピング法における虚血領域と87.5%（14/16）で一致した。創傷の位置と血管造影・angiosomeモデルから評価した虚血領域とは68.8%（11/16）で一致した。

【結論】StO₂足部マッピング法によってCLI患者の虚血領域を軟部組織の酸素飽和度の点から正確に評価することができた。本法は、従来から行われてきた血管造影とangiosomeモデルによる評価よりも精度が高いことが明らかになり、非侵襲的に「Real angiosome（主要血管ではなく末梢微小血流により決定される、CLI患者足部における真の末梢組織血流分布）」の作成評価が可能であった。本法を用いて作成された「Real angiosome」は、重症下肢虚血（CLI）の診断と治療に新しい概念をもたらすと考える。

本論文は、末梢組織灌流指標として従来用いられてきたtcPO₂やSPPに代わり、StO₂ foot-mappingがその精度と簡便性において優っており、より「真の末梢微小血流」の表象に近いものが得られるとした。本法は臨床に即応用できる有用かつ発展性のある方法であり、救肢、救趾治療方針の決定に際する重要な指標になると考えられ、学位論文として価値あるものと認められた。

学位論文要旨および審査要旨

氏名 小野崎 正 修

〈学 位〉	種 類	博士（医学）	論 文 項 目	Detection and identification of genotypes of <i>Prototheca zopfii</i> in clinical samples by quantitative PCR analysis (定量PCR法による <i>Prototheca zopfii</i> 感染症の診断と遺伝子型の同定)
	授 与 番 号	博乙医 第565号		
	授与年月日	平成26年12月17日		
	授与の要件	学位規程第6条	論文審査委員	主査 永松信哉 副査 赤川公朗 塩原哲夫 河合 伸 渡邊 卓

学 位 論 文 の 要 旨

Prototheca 属は、葉緑体が退縮した藻類であり、真菌症に似たプロトテカ症を引き起こす病原藻類として知られている。その一種である *Prototheca zopfii* には、genotype 1 および genotype 2 の遺伝子型があり、genotype 1 による感染例は報告がない。一方、genotype 2 はヒトの皮膚および全身播種性の疾患やウシの乳房炎などを引き起こすことが知られている。現在、増加傾向にある本症は、治療にも難渋する為、早期の診断と抗真菌薬による治療を行うことが臨床上重要とされている。

そこで、我々は、*Prototheca* 属及び *Chlorella* 属の rDNA 各塩基配列のアラインメントに基づいて以前報告した *P. zopfii* 特異的プライマー対 “18PZF1 と 18PZR1” の増幅領域内側に、新規に TaqMan[®]MGB プローブ “PZP1” を設計し、定量性を持った遺伝子診断法を研究・開発した。さらに、その増幅産物を用いた熱解離曲線解析を行うことで、*P. zopfii* 遺伝子型の鑑別も可能とした。本法の評価の為、本藻の近縁種を含めた標準株28株と家畜臨床分離株140株、および家畜臨床検体92検体、さらに免疫抑制患者からの臨床検体1検体を研究に用いた。また、一部の代表菌株を用い薬剤感受性試験の検討も行った。

本法により、本藻標準株6株と家畜臨床分離株135株、および家畜臨床検体24検体に加え、ヒト臨床検体1検体が *P. zopfii* genotype 2 と確認された。本結果は、シーケンス解析による同定結果とすべて一致した。また、本研究に於いて、ヒト症例が、*P. zopfii* genotype 2 を起因藻とした本邦初のプロトテカ症であると診断されたが、その感染経路は不明であった。さらに、薬剤感受性試験の結果において、アムホテリシンBが特に良好な感受性を示すことが確認された。

以上の結果から、病原藻類 *P. zopfii* genotype 2 による感染症の診断法として、本法の良好な感度と特異性が確認された。これにより、抗真菌薬の早期の選択が可能になると考えられた。従来の検査法を補完する希少藻類感染症：*P. zopfii* genotype 2 の迅速診断・同定システムとしての活用が期待される。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

Prototheca 属は、葉緑体が退縮した藻類であり、真菌症に似たプロトテカ症を引き起こす病原藻類として知られている。その一種である *Prototheca zopfii* には、genotype 1 および genotype 2 の遺伝子型があり、genotype 2 はヒトの皮膚および全身播種性の疾患やウシの乳房炎などを引き起こすことが知られている。本研究では、*Prototheca* 属及び *Chlorella* 属の rDNA 各塩基配列のアラインメントに基づいて、*P. zopfii* 特異的プライマー対 “18PZF1 と 18PZR1” の増幅領域内側に、新規に TaqMan[®]MGB プローブ “PZP1” を設計し、定量性を持った遺伝子診断法を開発した。又、増幅産物を用いた熱解離曲線解析を行うことで、*P. zopfii* 遺伝子型の鑑別も可能とした。

本法により、本藻標準株6株と家畜臨床分離株135株、および

家畜臨床検体24検体に加え、ヒト臨床検体1検体が *P. zopfii* genotype 2 と確認され、本結果はシーケンス解析による同定結果と一致した。又、このヒト症例は、*P. zopfii* genotype 2 を起因藻とした本邦初のプロトテカ症であると診断され、薬剤感受性試験の結果から、アムホテリシンBが特に良好な感受性を示すことが確認された。

本研究で開発したとされるPCR診断法は、独創的とはいえないものの、従来の検査法を補完する希少藻類感染症：*P. zopfii* genotype 2 の迅速診断・同定システムとしての活用、すなわち、畜産業を中心とした新興感染症として発現した場合の重要なツールとして期待されること、これにより抗真菌薬の早期の選択が可能になること、更に本邦初のヒトにおけるプロトテカ症を診断したことから、学位論文として価値あるものと評価した。

氏名 上 田 明 子

〈学 位〉	種 類 博士（医学）	論 文 項 目	Histological Changes in Patients with Congenital Heart Disease: Impact of Overload Duration and Age on Structural Remodelling (先天性心疾患における組織学的変化：負荷の期間と年齢の構造的リモデリングへの影響)
	授 与 番 号 博乙医 第566号		
	授与年月日 平成26年12月17日		
	授与の要件 学位規程第6条		
		論文審査委員	主査 窪田 博 副査 菅間 博 近藤晴彦 秋元義弘 岡本 晋

学 位 論 文 の 要 旨

【緒言】

心房細動をはじめとする心房性不整脈は、心房の電氣的・構造的リモデリングを基質として発生する。このうち、特に構造的リモデリングの過程に対して、心負荷暴露の期間と年齢が及ぼす影響については、議論がある。その一因として、年齢と構造的リモデリングの関係を調査した過去の報告の多くが、後天的心疾患患者の組織学的解析に基づいており、年齢を心負荷暴露期間の代替としているものの、正確な期間の同定は実際には困難であることが挙げられる。

心負荷暴露期間及び年齢が、ヒト心房の不整脈基質に及ぼす影響について検討するため、年齢と負荷の期間とが一致すると考えられる、先天性心疾患患者において心房の組織学的解析を行った。

【材料と方法】

先天性心疾患に対する初回の心臓手術を行った患者65例（中央値18歳；患者群）を対象とした。左房負荷が主体となる疾患の患者は除外し、心房中隔欠損症、エプスタイン奇形など右房負荷に長期間暴露された症例を登録した。術中切除した右房心筋を用い、組織学的・免疫組織学的解析により、年齢をマッチさせた正常心（22例、中央値22歳；対照群）検体との比較を行った。また患者群の術前の心房性不整脈の既往、心臓超音波検査所見を調査した。構造的リモデリング指標として、心房線維化・心筋細胞径・脈管分布を計測するとともに、炎症の関与を調べるため炎症細胞浸潤を計測した。

【結果】

術前に心房性不整脈のある患者群で、最も高度に心筋線維化・細胞径拡大・炎症細胞浸潤が観察され、脈管は最も粗に分布した。次いで、心房性不整脈のない患者群、対照群が続いた。患者群では、全ての構造的リモデリング指標は年齢と相関したが、対照群では細胞径以外の指標は相関しなかった。患者群では右房径、面積は組織学的変化と相関を示した。

【結論】

先天性心疾患による慢性的な右房負荷は、経時的な組織学的リモデリングに関連し、心房性不整脈の基質となったと考えられた。対照群では年齢による心房リモデリングは観察されなかった点から、年齢よりむしろ、負荷の暴露期間が、心房の変性を来す主要因である可能性が示唆された。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

心房細動をはじめとする心房性不整脈は、心房の電氣的・構造的リモデリングを基質として発生する。このうち、特に構造的リモデリングの過程に対して、心負荷暴露の期間と年齢が及ぼす影響については、議論がある。その一因として、年齢と構造的リモデリングの関係を調査した過去の報告の多くが、後天的心疾患患者の組織学的解析に基づいており、年齢を心負荷暴露期間の代替としているものの、正確な期間の同定は実際には困難であることが挙げられる。

本論文は、心負荷暴露期間及び年齢が、ヒト心房の不整脈基質に及ぼす影響について検討するため、年齢と負荷の期間が一致すると考えられる先天性心疾患患者において心房の組織学的解析を行ったものである。

先天性心疾患に対する初回の心臓手術を行った患者65例（中央値18歳；患者群）を対象とした。左房負荷が主体となる疾患の患者は除外し、心房中隔欠損症、エプスタイン奇形など右房負荷に長期間暴露された症例を登録した。術中切除した右房心筋を用い、組織学的・免疫組織学的解析により、年齢をマッチさせた正常心（22例、中央値22歳；対照群）検体との比較を行った。

また患者群の術前の心房性不整脈の既往、心臓超音波検査所見を調査した。構造的リモデリング指標として、心房線維化・心筋細胞径・脈管分布を計測するとともに、炎症の関与を調べるため炎症細胞浸潤を計測した。

その結果、術前に心房性不整脈のある患者群で、最も高度に心筋線維化・細胞径拡大・炎症細胞浸潤が観察され、脈管は最も粗に分布した。次いで、心房性不整脈のない患者群、対照群が続いた。患者群では、全ての構造的リモデリング指標は年齢と相関したが、対照群では細胞径以外の指標は相関しなかった。患者群では右房径、面積は組織学的変化と相関を示した。

結果より、先天性心疾患による慢性的な右房負荷は、経時的な組織学的リモデリングに関連し、心房性不整脈の基質となったと考えられた。対照群では年齢による心房リモデリングは観察されなかった点から、年齢よりむしろ負荷の暴露期間が、心房の変性を来す主要因である可能性が示唆された。

本論文は、心房性不整脈の成因の一つである心負荷暴露期間が、心房の組織学的リモデリングに与える影響を明瞭にした点で優れた研究である。審査の結果、学位論文として価値あるものと認めた。

学位論文要旨および審査要旨

氏名 金 井 理一郎

〈学 位〉	種 類 博士（医学）	論 文 項 目	Impact of immunoreactive substances contained in apheresis platelet concentrate on postoperative respiratory function in surgical patients receiving platelet transfusion: a prospective cohort study (血小板輸血を受けた手術患者における術後の呼吸機能に対するアフェレーシス血小板濃厚液製剤に含まれる免疫活性物質の影響：前向きコホート研究)
	授与番号 博乙医 第567号		
	授与年月日 平成27年1月21日		
	授与の要件 学位規程第6条		
	論文審査委員	主査 木崎節子 副査 高山信之 岩下光利 栗崎 健 平野浩一	

学 位 論 文 の 要 旨

【背景・目的】輸血関連急性肺障害（transfusion-related acute lung injury：TRALI）は最も致死的な輸血合併症であり、血液製剤に含まれる抗ヒト白血球抗体や抗顆粒球抗体といった免疫活性物質が発症の大きな原因の一つとされる。赤血球液（red blood cell：RBC）に比べ、血漿成分を多く含む新鮮凍結血漿（fresh frozen plasma：FFP）や血小板濃厚液（platelet concentrate：PC）で発症の危険性が高い。これらの免疫活性物質は主に女性ドナー由来の血液製剤に含まれるため、FFPは基本的に男性ドナー由来となっている。一方で、PCは本邦では全て成分献血によりアフェレーシスで製造しており、安定した供給のために現状では女性ドナーを除外することができない。そこで本研究では、免疫活性物質を多く含むとされる女性ドナー由来のPCの危険性を明らかにして改善策へと繋げる事を目的とし、PC投与患者の術後肺傷害と免疫活性物質の関係を検討した。

【方法】手術室もしくは集中治療室でPC投与を受ける86人（男性56人、女性30人）の手術患者を対象とした。PC投与後6時間以内に得られた血液ガス分析結果から、54人が術後に呼吸不全（ $\text{PaO}_2/\text{FiO}_2 < 300 \text{ mmHg}$ ）の基準に至った。更に、呼吸不全を胸部X線所見と循環動態から、possible TRALI、輸血関連循環過負荷（transfusion-associated circulatory overload：TACO）、明確な原因を認めない呼吸不全（無気肺など）の3つに分類した。

【結果】5人がpossible TRALIと診断され、23人がTACOと診断された。多変量ロジスティック回帰分析では抗顆粒球抗体の存在がpossible TRALIの有意な予測因子として同定された（ $P = 0.023$ ；odds ratio（OR）；13.0）。また、TACOの有意な独立した予測因子としては抗ヒト白血球抗体class IIが同定された（ $P = 0.010$ ；OR；18.4）。

【考察・結語】今回の解析で、PC製剤に含まれる抗顆粒球抗体がTRALIの予測因子として、また、抗ヒト白血球抗体class IIがTACOの予測因子として抽出された。しかし、TACOと免疫活性物質との関連を示した報告はなく、本研究対象患者は水分過多となった重篤な手術症例が多かったためTACOと診断された症例にTRALIが含まれている可能性が考えられる。本研究結果から、PC製剤に含まれる抗顆粒球抗体抗と抗ヒト白血球抗体class IIがTRALIの発症に関連があり、PC輸血後の呼吸機能の悪化に寄与していることが示唆された。従って、PC投与後の肺障害を予防するために、PCを製剤化する際には抗体スクリーニングを行う意義が認められた。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

【背景・目的】輸血関連急性肺障害（transfusion-related acute lung injury：TRALI）は最も致死的な輸血合併症であり、血液製剤に含まれる抗ヒト白血球抗体や抗顆粒球抗体といった免疫活性物質が発症の大きな原因の一つとされる。赤血球液（red blood cell：RBC）に比べ、血漿成分を多く含む新鮮凍結血漿（fresh frozen plasma：FFP）や血小板濃厚液（platelet concentrate：PC）で発症の危険性が高い。これらの免疫活性物質は主に女性ドナー由来の血液製剤に含まれるため、FFPは基本的に男性ドナー由来となっている。一方で、PCは本邦では全て成分献血によりアフェレーシスで製造しており、安定した供給のために現状では女性ドナーを除外することができない。そこで本研究では、免疫活性物質を多く含むとされる女性ドナー由来のPCの危険性を明らかにして改善策へと繋げる事を目的とし、PC投与患者の術後肺傷害と免疫活性物質の関係を検討した。

【方法】手術室もしくは集中治療室でPC投与を受ける86人（男性56人、女性30人）の手術患者を対象とした。PC投与後6時間以内に得られた血液ガス分析結果から、54人が術後に呼吸不全（ $\text{PaO}_2/\text{FiO}_2 < 300 \text{ mmHg}$ ）の基準に至った。更に、呼吸不全を胸部X線所見と循環動態から、possible TRALI、輸血関連循環過負荷（transfusion-associated circulatory overload：TACO）、

明確な原因を認めない呼吸不全（無気肺など）の3つに分類した。

【結果】5人がpossible TRALIと診断され、23人がTACOと診断された。多変量ロジスティック回帰分析では抗顆粒球抗体の存在がpossible TRALIの有意な予測因子として同定された（ $P = 0.023$ ；odds ratio（OR）；13.0）。また、TACOの有意な独立した予測因子としては抗ヒト白血球抗体class IIが同定された（ $P = 0.010$ ；OR；18.4）。

【考察・結語】今回の解析で、PC製剤に含まれる抗顆粒球抗体がTRALIの予測因子として、また、抗ヒト白血球抗体class IIがTACOの予測因子として抽出された。しかし、TACOと免疫活性物質との関連を示した報告はなく、本研究対象患者は水分過多となった重篤な手術症例が多かったためTACOと診断された症例にTRALIが含まれている可能性が考えられる。本研究結果から、PC製剤に含まれる抗顆粒球抗体抗と抗ヒト白血球抗体class IIがTRALIの発症に関連があり、PC輸血後の呼吸機能の悪化に寄与していることが示唆された。従って、PC投与後の肺障害を予防するために、PCを製剤化する際には抗体スクリーニングを行う意義が認められた。

本研究は、PC製剤に含まれる抗体と術後肺傷害の関連を明らかにしたものであり、PC投与後の肺障害を予防するための改善策へと繋げる貴重な知見を提供し、審査の結果、学位論文として価値あるものと認めた。

氏名 藤 田 直 之

〈学 位〉	種 類 博士（医学）	論 文 項 目	Serum level and immunohistochemical expression of vascular endothelial growth factor for the prediction of postoperative recurrence in renal cell carcinoma（腎細胞癌における術後再発の予測に対する血清 VEGF と免疫組織化学的 VEGF 発現の比較に関する研究）
	授 与 番 号 博乙医 第568号		
	授与年月日 平成27年2月18日		
	授与の要件 学位規程第6条		
		論文審査委員	主査 正木忠彦 副査 丑丸 真 川上速人 楊 國昌 吉野秀朗

学 位 論 文 の 要 旨

淡明型腎細胞癌では、von Hippel-Lindau 遺伝子の不活性化から低酸素誘導因子（hypoxia-inducible factor）の分解が阻害され、恒常的に血管内皮増殖因子（vascular endothelial growth factor；以降、VEGF と記す）が誘導されることで、癌細胞の増殖、血管新生に関与していることが報告されている。免疫組織学的検討や血清での検討で、腫瘍組織での VEGF 過剰発現や血液中 VEGF 値の上昇、また両者ともに予後予測に有用であることが報告されている。しかし、免疫組織学的検討と血清での検討について比較した研究は少数であり、さらに転移のない淡明型腎細胞癌（以降、限局性淡明型腎細胞癌と記す）における術後再発の予測について両者を比較した報告はない。本研究では、限局性淡明型腎細胞癌における根治的腎摘出術後の再発の予測について両者の比較検討を行った。血清 VEGF 値が限局性淡明型腎細胞癌において術後再発の予測に有用であることを示した。

83名の限局性淡明型腎細胞癌患者の手術前に採取された血清検体を用いて VEGF 値を測定し、摘出された検体を用いて VEGF の免疫組織化学染色を行った。12例（14.5%）で術後再発を認めた。再発例の血清 VEGF 値は非再発例に比較して有意に高値であった（ $P = 0.038$ ）。血清 VEGF 値のカットオフ値を ROC 曲線により 416pg/ml と設定して検討した。VEGF 高値群における非再発生存率は VEGF 低値群に比べ有意に低かった（ $P = 0.003$ ）。26例（31.3%）は免疫組織学的染色で陽性と判定された。免疫組織学的染色の発現度と、血清 VEGF 値には関連を認めなかった（ $P = 0.378$ ）。免疫組織学的染色陽性群における非再発生存率は免疫組織学的染色陰性群に比べ有意に低かった（ $P = 0.044$ ）。T 分類、組織学的グレード、静脈浸潤、腫瘍壊死、UCLA Integrated Staging System リスク分類、性別、貧血、CRP を加えて多変量解析を行ったところ、性別（ $P = 0.004$ ）、術前の血清 VEGF 値（ $P = 0.013$ ）が独立した術後再発予測因子であった。術前の血清 VEGF 値は、術後の免疫組織学的発現度と比較して、限局性淡明型腎細胞癌の術後再発においてより有用な予測因子となる可能性が示唆された。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

淡明型腎細胞癌では、von Hippel-Lindau 遺伝子の不活性化から低酸素誘導因子（hypoxia-inducible factor）の分解が阻害され、恒常的に血管内皮増殖因子（vascular endothelial growth factor；以下 VEGF）が誘導されることで、癌細胞の増殖、血管新生に関与していることが報告されている。免疫組織化学的検討や血清での検討で、腫瘍組織での VEGF 過剰発現や血液中 VEGF 値の上昇、また両者ともに予後予測に有用であることが報告されている。しかし、免疫組織化学的検討と血清での検討について比較した研究は少数であり、さらに転移のない淡明型腎細胞癌（以降、限局性淡明型腎細胞癌と記す）における術後再発の予測について両者を比較した報告はない。本研究は、限局性淡明型腎細胞癌に対する根治的腎摘出術後の再発の予測について両者の比較検討を詳細に行った点が独創的である。

83名の限局性淡明型腎細胞癌患者の手術前に採取された血清検体を用いて VEGF 値を測定し、摘出された検体を用いて VEGF の免疫組織化学染色を行った。12例（14.5%）で術後再発を認め

た。再発例の血清 VEGF 値は非再発例に比較して有意に高値であった（ $P = 0.038$ ）。血清 VEGF 値のカットオフ値を ROC 曲線により 416pg/ml と設定して検討したところ、VEGF 高値群における非再発生存率は VEGF 低値群に比べ有意に低かった（ $P = 0.003$ ）。26例（31.3%）は免疫組織化学的染色で陽性と判定され、免疫組織化学的染色陽性群における非再発生存率は陰性群に比べ有意に低かった（ $P = 0.044$ ）。なお、免疫組織化学的染色の発現度と血清 VEGF 値には関連性を認めなかった（ $P = 0.378$ ）。T 分類、組織学的グレード、静脈浸潤、腫瘍壊死、UCLA Integrated Staging System リスク分類、性別、貧血、CRP を加えて多変量解析を行ったところ、性別（ $P = 0.004$ ）と術前の血清 VEGF 値（ $P = 0.013$ ）が独立した術後再発予測因子であった。以上の検討により、術前の血清 VEGF 値は限局性淡明型腎細胞癌の術後再発予測因子として免疫組織化学的発現度より有用である可能性が示唆された。本研究の結果は、根治手術が施行された限局性淡明型腎細胞癌患者の術後管理に大いに利するものであり、審査の結果、学位論文として価値あるものと認めた。

学位論文要旨および審査要旨

氏名 岡村 耕 一

〈学 位〉	種 類 博士（医学）	論 文 項 目	フリーラジカルスキャベンジャー，エダラボンを使った出血性梗塞抑制効果-高血糖ラットを用いて
	授 与 番 号 博乙医 第569号	論文審査委員	主査 佐藤 徹
	授与年月日 平成27年2月18日		副査 石田 均 川上速人 櫻井裕之 山田達也
	授与の要件 学位規程第6条		

学 位 論 文 の 要 旨

【背景】脳梗塞の治療においては、脳梗塞と虚血再灌流後の出血を抑制する脳保護治療の開発が待望されている。虚血再灌流後の出血は、脳虚血時に、内皮細胞、基底膜や周囲アストロサイトが破綻し、血液脳関門（生体内で特殊な毛細血管の形態を有する構造物）の機能である微小循環の透過性制御能力が障害されて発生する。この時増加するフリーラジカルはマトリックスメタロプロテアーゼの活性化を引き起こし、基底膜のコラーゲンを破壊する。それを防止するためフリーラジカルスキャベンジャーの使用が行なわれ、そのひとつであるエダラボンは出血性梗塞を抑制できる可能性があるのではないかと考えられている。実臨床で生ずる短時間虚血後の出血性梗塞を実験的に発現させることは難しいが、我々が作成に成功した高血糖ラットモデルにおいてはフリーラジカルの増加を助長させ、高い確率で出血性梗塞を作成しうる。

【目的】高血糖ラットモデルを使って作成した出血性梗塞に対して、エダラボンで脳梗塞および出血性梗塞の抑制ができるかを検討した。

【方法】高血糖ラットにグルコースを腹腔内投与し、中大脳動脈を1.5時間遮断した。エダラボンを中大脳動脈遮断直後、再灌流直後、再灌流1時間後に投与し、再灌流24時間後にラット脳の観察を行った。エダラボン投与群（12匹）とコントロール群（12匹）を比較した。TTC染色を行い（各群10匹）、梗塞体積と出血性梗塞体積を比較した。また、梗塞部位と出血性梗塞部位の脳の採取を行い（各群2匹）、各ラットにつき毛細血管を無作為に3箇所ずつ選定し、電子顕微鏡にて毛細血管における基底膜、内皮細胞の観察を行った。

【結果】梗塞部と出血性梗塞部の体積が、コントロール群に比べエダラボン群でそれぞれ有意に減少していた。出血性梗塞 / 梗塞体積の割合を比較しても、エダラボン群で有意に減少していた。電子顕微鏡での観察では、内皮細胞の障害程度に違いはみられなかったが、エダラボン群脳梗塞部で基底膜の形態損傷が少ない傾向であった。

【結論】エダラボンは、急性高血糖状態において脳梗塞および出血性梗塞の発現を抑制した。電子顕微鏡による観察で、血液脳関門の基底膜保護効果がある可能性が示唆された。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

脳梗塞の治療では、脳梗塞と虚血再灌流後の出血を抑制する脳保護治療の開発が待望される。再灌流後の出血は、脳虚血時に、内皮細胞、基底膜や周囲アストロサイトが破綻し、血液脳関門の機能である微小循環の透過性制御能力が障害されて発生する。この時フリーラジカルが増加し、マトリックスメタロプロテアーゼを活性化して基底膜のコラーゲンを破壊するため、フリーラジカルスキャベンジャーであるエダラボンが有効な可能性がある。実臨床で生ずる短時間虚血後の出血性梗塞を実験的に発現させるため、高血糖ラットモデルを使って作成した出血性梗塞に対して、エダラボンの効果があるか否かを検討した。

高血糖ラットにグルコースを腹腔内投与し、中大脳動脈を1.5時間遮断した。エダラボンを中大脳動脈遮断直後、再灌流直後、再灌流1時間後に投与し、エダラボン投与群（12匹）とコントロール

群（12匹）に対して再灌流24時間後にラット脳をTTC染色し（各群10匹）、梗塞体積と出血性梗塞体積を比較した。また、梗塞部位と出血性梗塞部位の脳の採取を行い（各群2匹）、各ラットにつき毛細血管を無作為に3箇所ずつ選定し、電子顕微鏡にて毛細血管における基底膜、内皮細胞の観察を行った。

梗塞部と出血性梗塞部の体積、出血性梗塞 / 梗塞体積の割合が、コントロール群に比べエダラボン群で有意に減少していた。電子顕微鏡での観察では、内皮細胞の障害程度に違いはなかったが、エダラボン群脳梗塞部で基底膜の形態損傷が少なかった。

本研究により、エダラボンは、急性高血糖状態において脳梗塞および出血性梗塞の発現を抑制し、電子顕微鏡による観察で血液脳関門の基底膜保護効果が示唆されたことより、今後脳梗塞・再灌流後の出血を抑制する有望な薬剤となり得る可能性が示された。審査の結果、学位論文として価値あるものと認めた。

氏名 滝 本 見 吾

〈学 位〉	種 類 博士（医学）	論 文 項 目	Sedation with dexmedetomidine hydrochloride during endoscopic submucosal dissection of gastric cancer（早期胃癌ESD時にデクスメドミジン塩酸塩を用いた鎮静法）
	授 与 番 号 博乙医 第570号		
	授与年月日 平成27年3月11日		
	授与の要件 学位規程第6条	論文審査委員	主査 杉山政則 副査 赤川公朗 有村義宏 大倉康男 山田達也

学 位 論 文 の 要 旨

【目的】早期胃癌に対する治療として内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）は広く実施されているが、いまだ標準的な内視鏡治療時の麻酔法は確立されていない。我々は、ESDにおける鎮静薬の有効性及び安全性を評価するため、デクスメドミジン（DEX）、プロポフォール（PF）及びミダゾラム（MDZ）の3剤を比較したprospective randomized studyを行った。

【方法】ESDを施行する胃癌患者を3群に分け、それぞれDEX（n = 30）、プロポフォール（n = 30）、ミダゾラム（MDZ）（n = 30）を用いて鎮静を行った。不穏出現時には適宜MDZを1mg投与した。検討項目は血圧、SpO₂、不穏発生率、追加MDZ量、適正鎮静率、一括切除率、治療時間、穿孔率とした。

【結果】DEX群において血圧上昇は30例中2例（6.7%）、血圧低下は5例（17%）で、PF群、MDZ群と同等であった。SpO₂ ≤ 90%は、PF群（8例、27%）、MDZ群（4例、13%）と比較してDEX群（0例）で顕著に低かった（P < 0.001）。不穏発生率は、PF群、MDZ群と比較してDEX群で有意に低く（P = 0.045）、MDZ平均追加投与量は、MDZ群に比べてDEX群で有意に少なかった（P = 0.001）。適正鎮静レベルを維持した割合はMDZ群、PF群と比べてDEX群で有意に高かった（P = 0.0021 vs. MDZ群、P = 0.014 vs. PF群）。ESDの平均施行時間は、DEX群で65分であり、MDZ群（80分）、PF群（90分）と比べて有意に短かった（ANOVA, P = 0.04）。DEX群では重大な術中偶発症は認められなかった。

【考察】ESD施行中の鎮静は、患者の苦痛を抑えるため深い鎮静が好まれる傾向にあるが、術後の麻酔管理を十分に行う体制が整わない施設では再鎮静、バイタルサイン変化などのリスクを伴う。本試験においてDEXによる鎮静管理は、意識下鎮静で安定した呼吸と循環動態を維持することが可能であった。また、術中の偶発症も認められなかったことから、小規模から中規模の施設においても胃癌患者のESDにおける鎮静法として有用であると考えられる。

【結論】ESDの鎮静管理において、DEXによる鎮静は有効かつ安全であることが示唆された。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

早期胃癌の治療法の1つである内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）は、治療に長時間を要するため鎮静が必要であるが、標準的な鎮静法は確立されていない。従来広く行われてきたプロポフォール（PF）やミダゾラム（MDZ）による鎮静法は呼吸循環抑制や不穏出現などの有害事象が多い。近年開発されたデクスメドミジン（DEX）は優れた鎮静効果と有害事象軽減が期待されていたが、内視鏡施行時の鎮静に用いた報告では必ずしもその有用性が示されていないかった。

本研究ではESD施行時のDEX投与方法を新たに考案し、その有用性を検証するために、PF群とMDZ群を含めた3群で無作為比較試験（RCT）を行った。ESDを施行した胃癌90例を対象に、30例ずつ3群に分けた。DEX群では初回に0.5μg/kg/10分を投与した（従来の報告例では1μg/kg/10分の投与方法が多かった）。3群とも不穏出現時にMDZ 1mgを投与した。各群の鎮静状態、有害事象発生率とESD治療成績を比較した。本試験は当該施設の倫理委員会で承認を得た。

適正鎮静レベル（Ramsay 2-3点）を維持した症例は、DEX群（93%）ではPF群（60%）、MDZ群（40%）よりも有意に多かつ

た。不穏出現率はDEX群（3%）ではPF群（10%）、MDZ群（27%）よりも有意に低かった。血圧低下の頻度は3群間で差はなかったが（13-27%）、血液酸素飽和度低下例はDEX群（0%）ではPF群（27%）、MDZ群（13%）よりも有意に低かった。ESD施行時間はDEX群（65分）ではPF群（80分）、MDZ群（90分）よりも有意に短かった。

ESD施行時の鎮静法として、DEXはPF、MDZと比べ、適正な鎮静レベルが得られ、不穏出現が少なく、呼吸循環抑制が少ないため、高い質のESDを施行できて治療時間の短縮につながった。DEXはESD施行時の鎮静法として有用であることが示された。

本研究の内容が2011年に発表された時点では、内視鏡施行時の鎮静法としてのDEXをRCTで評価した既報告は海外からの2つのみであり、いずれもDEXの有用性が認められなかった。本研究ではDEX投与方法を修正しRCTにより初めてDEXの有用性を証明した。本研究の発表後、内視鏡施行時の鎮静法としてDEXが国内外で広く用いられるようになった。本研究は高い臨床的意義を持つ重要な研究と考えられる。審査の結果、学位論文として価値あるものと認めた。

〔博士（保健学）〕

氏名 中 村 淳 史

〔学 位〕	種 類	博士（保健学）	論 文 項 目	電解気泡法による人工心肺回路内における微小気泡の基本的変動
	授 与 番 号	博乙保 第51号	論文審査委員	主査 嶋津秀昭
	授与年月日	平成27年5月20日		副査 村椿春博 小泉健雄 石山陽事
	授与の要件	学位規程第6条		

学 位 論 文 の 要 旨

人工心肺（cardiopulmonary bypass：CPB）の生体への侵襲の一つにガス状微小塞栓（gaseous microemboli：GME）があり、生体への影響は未だ懸念事項である。CPB回路の気泡捕捉能を評価し、その性能の向上を図るためには、回路内における微小気泡の基本的変動を明確にしておくことが重要と考えられるが、これらについての報告は見られない。そこで、本研究ではCPB回路内における気泡の変動について詳細な検討を行った。

通常、空気による気泡は、その大きさを制御することは困難であるため、回路内圧や温度、灌流量などの様々な条件下において微小気泡の基本的変化を明確にすることや、CPB回路の気泡捕捉能の定量的な評価は困難である。そこで、本研究はCPB回路内を流れる灌流液を電気分解させ灌流液中の水分子を電気分解することで、水素および酸素の微小気泡を回路内に発生させ、任意のサイズの気泡群を発生させることのできる気泡発生器を作製した。気泡発生器により灌流液を電気分解して発生させた気泡（Electrolysis Bubble：EB）と通常の空気による気泡（Air Bubble：AB）は、その成分の違いにより、回路内における気泡の収縮速度などが異なる可能性があるため、内径3/8inchのCPB回路内にEBとABの気泡群を発生させ、両者の気泡の収縮率の差について比較検討した。次にEBを用いて、異なる気泡サイズ、距離、温度、回路内圧時における、微小気泡の変動について検討した。

EB、AB両者ともCPB回路内において気泡は収縮し、同様な気泡径の減衰傾向が見られ、EB、ABのCPB回路内における気泡径の変動には差がないことが判明した。次にEBによる検討では気泡は小さくなる程、収縮速度が遅くなった。また、温度による気泡への影響は小さく、回路内圧が高い程、気泡の収縮速度が高くなる結果を得た。

本研究により今まで詳細な報告のなかったCPB回路内における微小気泡の基本的変動を把握することができた。その結果、CPB回路の気泡捕捉能の検討や設計を行う上では、気泡の大きさ、気泡の移動距離（血液流路長）、気泡の滞在時間、そして回路内圧による気泡の変動を考慮した設計・評価が重要であることが示唆された。また、EB法は任意の大きさの気泡群の発生が可能であり、CPB回路の気泡捕捉能の検討において有用な手法であることが確認された。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本論文は人工心肺を利用した手術時に発生する合併症の原因となるガス性塞栓の問題を解決するために必要となる重要な基礎研究である。論文では人工心肺装置回路内における微小気泡の基本的変動の解析を目的として、還流液流路内に電気分解によって任意のサイズの気泡群を発生させることのできる気泡発生器を作製し、気泡サイズ、移動距離、温度、回路内圧をパラメータとした微小気泡の変動について詳細に検討されている。実験は本法によって作成した気泡と空気による気泡の両者で同様の振る舞いをすることを確認し、本法により発生する気泡群の平均気泡径が50 μ m、150 μ m、250 μ m、350 μ mとなるようにサイズを変えて詳細な分析を行っている。気泡の個数と気泡径の計測は2MHzの周波数の超音波パルスを用いたBubble Counterを用いて、気泡径が直径5.0～500 μ mの範囲、毎秒200個までの気泡をカウントできる。

実験の結果、回路内に流れ出す気泡は次第に気泡径を減衰させながら縮小するが、気泡が小さくなる程、収縮速度は遅くなった。

また、還流液の温度による気泡への影響は小さく、回路内圧が高い程、気泡の収縮速度が高くなる結果を得た。本研究の結果より、気泡が時間経過と共に収縮するため、回路内のフィルタでトラップされた気泡は縮小した後に動脈フィルタを通過してしまうことが懸念され、空気塞栓を予防するためには、静脈リザーバに気泡を混入させないことが第一であることに加え、微小気泡が動脈フィルタのポアサイズ以下となる前に捕捉して除去を行うか、または微小気泡を集合させ、比較的大きな気泡として動脈フィルタで捕捉させる必要があることが指摘できた。

本研究により今まで詳細な報告のなかった人工心肺装置回路内における微小気泡の基本的変動を把握することができた。回路内の気泡捕捉能の考慮した設計には気泡の大きさ、気泡の移動距離（血液流路長）、気泡の滞在時間、回路内圧による気泡の変動を考慮した評価が重要であることが示唆され、本法による任意の大きさの気泡群の発生方法が有用な手法であることが確認された。

以上より、慎重な審査の結果、保健学領域の博士論文として価値あるものと認めた。

杏林大学学位論文要旨および審査要旨

〔博士（保健学）〕

氏名 大 貫 雅 也

〔学 位〕	種 類	博士（保健学）	論 文 項 目	完全人工心臓用カスケード血液ポンプのインペラに作用する偏心力の軽減に関する研究
	授 与 番 号	博甲保 第43号	論文審査委員	主査 四倉正之
	授与年月日	平成27年2月18日		副査 村椿春博 森田耕司 石山陽事
	授与の要件	学位規程第5条		

学 位 論 文 の 要 旨

本研究では、完全人工心臓用ポンプとして拍動流発生能力の高いカスケードポンプを応用することを目指している。カスケードポンプは、多数の小さな羽根の付いた円盤状のインペラを回転させることで、馬蹄形の流路に沿って渦を発生させながら、繰り返し加圧・移送するポンプである。ポンプ内の流体には多段的にエネルギーが付加されるため、流入口から流出口に向けて圧力を上昇させることができる。一方で、流入口と流出口の間に切欠き部を有するため、流路に沿って生じる不均衡な圧力分布により、インペラの回転軸を流出側から流入側に偏心させる力が働く。この偏心力は、軸受の耐久性を著しく低下させる要因となると考えられる。

そこで本研究では、偏心力低減のために、インペラ中央を中心点としたときXYZ軸すべての方向で圧力がバランスするようなポンプ形状を提案し、ポンプの試作を行った。試作したポンプは、一つの流入口から流入した流れを4本の流路（channel）に分割し、インペラ中央を基点として広がる圧力分布が3軸方向すべてで対称となるように配置することによって、径方向に作用する偏心力の相殺を狙ったものである（4-channelカスケードポンプ）。ポンプの外径はモータ込みで70mm、厚み27mm、流入・流出口の直径は20mmとした。また、ポンプの圧一流量特性として、回転数2,000rpmにおいて、揚程100mmHg、流量5L/minを達成できることを確認した。

想定通りにインペラの回転軸に加わる偏心力を低減させられているかを確認するために、ポンプ駆動中に回転軸に加わる偏心力の測定を試みた。中心軸をポンプ外まで延長し、二つのロードセルを使用して、中心軸に加わる力を測定した。中心軸は回転させずにポンプ外部のX-Yステージに固定し、ボールベアリングを介してインペラを支持した。インペラにはローダを内蔵させ、外周部のステータによって回転させた。貫通部からの液漏れ防止のために酢酸ビニル樹脂を用いた。4-channelカスケードポンプに模擬循環回路を接続し、圧力、流量を変化させたときに軸に加わる偏心力を測定した。偏心力を比較するため、4本の流路のうちの2本を閉塞することで圧力分布の対称性を崩したポンプ（Semi-occludedポンプ）を用いて同様の測定を行った。

Semi-occludedポンプでは揚程の増加とともに偏心力が増加した。一方で、4-channelカスケードポンプでは軸に加わる力は常に低値を示した。回転数2,500rpm、揚程150mmHgにおいて、Semi-occludedポンプの偏心力は5.9N、4-channelカスケードポンプの偏心力は0.6Nであった。このことから、流路を対称的に配置することで圧力分布に起因する偏心力が相殺され、インペラに加わる偏心力を約1/10に低減できることが示唆された。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

自己心を摘出しその機能代行として植込む完全人工心臓はすでに数機種が開発されているが、まだ改良の余地は多い。特に心臓移植が極端に少ない本邦においては完全人工心臓の果たす役割は極めて大きく、長期間の実用に耐え得る完全人工心臓の開発は急務である。

本論文は、今まで人工心臓には用いられていないが構造上容易に拍動流を発生させることができると考えられているカスケードポンプに着目し、これを完全人工心臓に応用することを試みた。その際の問題点のひとつに回転軸に加わる偏心力があるが、これを軽減させる方法として4-channel構造のカスケードポンプを考案、作成し、その性能および偏心力軽減について評価を行った。またその過程において偏心力測定装置も新規に作成した。

まず、アクリル樹脂を切削加工して4-channelカスケードポンプを作成した。大きさは外径70mm厚さ27mmで、インペラは30枚羽根とし、駆動には3相36スロット24ボールのインナーローター型ブラシレスDCモータを使用した。次いで模擬循環回路を用いて作成した4-channelカスケードポンプの水力学的特性を評価した。その結果、4-channelカスケードポンプはすでに臨

床応用されている遠心血液ポンプと同等の機能を有していた。すなわち血圧120mmHgで10L/minの流量を回転数2500-3000/minで得ることができた。さらに遠心血液ポンプより後負荷の変動に対して流量の変化が少ないという臨床応用に有利な特性を有していることが判明した。シミュレーション解析では4-channelカスケードポンプは2-channelカスケードポンプより偏心力が極めて少ないことが示された。また考案自作した偏心力測定装置により、作成した4-channelカスケードポンプの偏心力を実測した。その結果はシミュレーション解析と同じく偏心力は0.6Nと極めて低値であり、従来のカスケードポンプの1/10に軽減されていることが判明した。

本研究により新たに開発した4-channelカスケードポンプは完全人工心臓として使用できる十分な性能を有していることが示され、また4-channel化により偏心力の問題も克服できることが判明した。臨床応用に至るまでにはまだいくつかの課題が存在するが、4-channel化というアイデアによりカスケードポンプを完全人工心臓に応用可能なことを示し、さらに偏心力の問題を解決したことは高く評価できる。

慎重な審査の結果、本論文は博士論文としての価値を有していると認めた。

学位論文要旨および審査要旨

氏名 木 暮 英 輝

〈学 位〉	種 類	博士（保健学）	論 文 項 目	肺分画換気動態のモニタリングシステムと評価
	授 与 番 号	博甲保 第44号	論文審査委員	主査 川澄岩雄
	授与年月日	平成27年2月18日	副査	安井英明 丘島晴雄 石山陽事
	授与の要件	学位規程第5条		

学 位 論 文 の 要 旨

呼吸管理において患者の病態把握には換気機能の評価が重要である。換気機能はスパイロメータなどの一般的な生理検査でも評価できるが、自発呼吸、人工呼吸のいずれにおいてもベッドサイドでのリアルタイム評価が有用である。また、肺全体の機能としてではなく、肺の分画に応じた機能分析ができる方法や測定装置が、臨床で現れる種々の呼吸器疾患の病態把握、治療効果の分析などに役立つことは明らかであり、このようなシステムの開発が強く望まれている。本研究では、生体電気インピーダンス / アドミタンス法を利用して、肺を部分毎に分画した換気動態を簡便に取得できる実用的な計測システムを開発した。装置の試作と同時に肺分画毎の肺換気量の測定原理と電極の配置などを確立し、人工呼吸管理下の患者を想定して各種の呼吸モードでの実測結果に基づいて測定精度および実用性を実験的に検討した。

本法では4チャンネルの胸郭伝達インピーダンス (Z) / アドミタンス (Y) を計測し、呼吸に伴う変化量 ($\Delta Z / \Delta Y$) から肺各部の肺内気量の変化を計測する。システムはインピーダンス / アドミタンス計と絶対値較正用の呼吸流量計、dsPIC[®]を用いた計測パッケージを持つ本体、およびインターフェースと表示のためのパーソナルコンピュータにより構成される。電極配置の選択により、肺を4部位に分画して肺内気量を反映する Z 、 Y を取得して実測の呼吸流量と共にモニタ上に表示できる。

システムの評価を目的として健常者を対象に計測を行い、呼吸に伴う Z 、 Y の変化量 ($\Delta Z / \Delta Y$) と実測換気量 (V_T) の相関性、再現性を検討した。実験は自発呼吸下で行い、肺を分画する電極配置を決定し、不均等換気を模擬する種々の姿勢で計測を行った。さらに、人工呼吸器を用いて呼吸終末陽圧 (PEEP) の負荷を与え、計測値が肺を分画した換気動態を反映していることを検証した。

実験の結果、肺各部で得られた ΔZ および ΔY は、 V_T と高い直線相関を示し、全肺の換気量を誤差10-20%以内で計測できた。計測値から得られる換気比率は標準的な局所換気動態や体位変換に伴う不均等換気を反映していることを確認した。さらに、PEEPの負荷に伴う機能的残気量の変化も良好に捉えられた。これらの結果は、本法による換気動態の計測が肺を分画した機能として把握することが可能であることを意味し、本研究における計測システムはベッドサイドで使用可能な呼吸機能評価装置として有用な指標を提供できると考えている。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

呼吸管理下にある患者の病態把握を行うには、病床にある患者の換気機能をリアルタイムに評価するためにモニタリングできる計測システムが有用である。また、肺を前後左右、上下などの部分毎に分画して呼吸機能を分析することができる測定方法や測定装置があれば、種々の呼吸器疾患の病態把握、治療効果の分析などに役立ち、このような計測システムの開発が強く望まれている。

そこで本研究では、生体電気インピーダンス / アドミタンス法を利用し、肺を部分毎に分画した換気動態を簡便に取得・モニタリングできる実用的な計測システムを開発するとともに、肺分画毎の肺換気量の測定原理と電極の配置などを確立している。さらに、人工呼吸管理下の患者を想定した各種の呼吸モードにおける実測結果に基づいて、開発した計測システムによる測定精度、およびその実用性を実験的に検討している。

開発した計測システムは、4電極法を利用したインピーダンス / アドミタンス計、絶対値較正用の呼吸流量計、Peripheral Interface Controller (PIC) を用いた計測パッケージを持つ本体、およびインターフェースと表示のためのパーソナルコンピュータにより構成されている。また、肺を4部位に分画して肺内気量を反映する胸郭伝達インピーダンス Z 、その変化量 ΔZ 、およびアドミタンス Y 、その変化量 ΔY を同時に独立して取得し、これら

を実測した呼吸流量と共にモニタ上に表示できるようにするため、4部位の測定用各チャンネルにはアイソレーションアンプ、およびアイソレーション電源を設けている。

開発した計測システムを使用して測定した健常者の呼吸に伴う胸郭伝達インピーダンスの変化量 ΔZ 、およびアドミタンスの変化量 ΔY と換気量 V_T の間には高い直線相関があり、全肺の換気量を誤差10-20%以内で計測できることを示している。また、計測値から得られる換気比率は、標準的な局所換気動態や体位変換に伴う不均等換気を反映していることが確認でき、補助換気機能を付加した場合は、呼吸終末陽圧 (PEEP) の負荷に伴う機能的残気量の増加を明瞭に捉えることができています。

これらの結果は、開発した計測システムによる換気動態の計測が、肺を分画して機能を把握することが可能であることを意味し、本計測システムはモニタリングするためにベッドサイドで使用可能な呼吸機能評価装置として有用な指標を提供できることを示している。

以上のことから、本研究は、開発された計測システムの実用には、この計測システムを用いた臨床データの取得、解析等による精査・検討が必要であるが、簡便、非侵襲な肺分画換気動態のモニタリングの実用化の可能性を示したもので、博士（保健学）の学位を授与するに値する。

氏名 藤 澤 祐 基

〈学 位〉	種 類	博士（保健学）	論 文 項 目	三次元位置センサを用いた小脳性運動失調症の書字特性に関する研究
	授 与 番 号	博甲保 第45号	論文審査委員	主査 森田千晶
	授与年月日	平成27年2月18日		副査 黒木一典 大嶺智子 石黒友康
	授与の要件	学位規程第5条		

学 位 論 文 の 要 旨

書字運動は巧緻運動であるとともに、長年繰り返された結果、獲得された習熟運動でもある。なかでも小脳は巧緻運動学習の首座であり feed forward 運動の制御の中枢と考えられているが、その障害による運動失調症状の運動メカニズムは解明されていない。運動制御と小脳の関係についての先行研究は巧緻性、すなわち target pointing 運動や動的視標追跡運動における運動誤差（ズレ）に着目したものが多く、多評点の三次元解析した報告、とくに feed forward 運動としての書字運動で検証した報告は見当たらない。本研究は、巧緻運動学習の首座をなすと考えられる小脳の障害を対象に、習熟運動の代表例として書字運動に着目し、運動失調症の本態を明らかにし、多関節巧緻運動の運動学習、リハビリテーションに資することを目標とした。右利きの小脳性運動失調症患者8名の失調症群と17名の対照群を対象とした。Scale for the Assessment and Rating of Ataxia (SARA) を用いて運動失調症の臨床的重症度を判定した。左右の手の書字運動について観察し、書字に要する時間、個人の書字の速度プロフィールと形態の均一性、ペン先と他の評点との運動方向、速度プロフィール、軌跡形態の関係性を失調症患者と対照群との2群間で比較した。結果、利き手である右手書字では左手書字に比べて書字時間が短く、相関係数の平均値によって表されるペン先速度プロフィールの均一性と軌跡形態の均一性は高かった。さらに、右手書字ではペン先速度プロフィールは示指/手首の速度プロフィールとは有意に異なっていた。すなわち、利き手書字は速度の割にノイズが少なく、ペン先が指/手首に対して独立して動くことを示唆するものと考えた。失調症群では対照群と比較して書字時間は延長し、ペン先の速度プロフィールと軌跡形態は有意に不均一になった。加えて、失調症群ではペン先の運動方向は示指/手首の運動方向から逸脱し、ペン先の軌跡形態は示指/手首の軌跡形態とは有意に異なっていた。SARAにより示した上肢の運動失調症状の臨床的重症度はペン先と示指の方向変位の指標、ペン先と示指の運動軌跡の相似性指標と有意に相関した。とくに失調症の書字は示指/手首に対するペン先の一様でない不規則な動きが特徴的で、この近位部に対する無秩序な遠位の動きが運動失調症の臨床的重症度を表すものと考えた。四肢の運動失調症の運動障害のメカニズムとして、近位部と遠位部の運動の連係性の喪失が重要な要素と考えられた。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本論文は小脳性運動失調症患者の書字運動に着目し、小脳性運動失調における書字特性をあきらかにしたものである。書字動作分析の先行研究で確認されている書字時の書字時間、ペン先の速度プロフィールと軌跡形態それぞれの特徴と均一性、および運動学的指標としてのペン先（指先）と手関節の分離性指標について、小脳性運動失調症患者と対照群（健常者）の2群間で比較を行い、さらに小脳性運動失調症患者群では小脳性運動失調症の重症度を判定する Scale for the Assessment and Rating of Ataxia (SARA) を用いて分類した臨床的重症度との関係性について検討をした。結果、小脳性運動失調症患者は対照群と比較して書字

時間では延長、軌跡形態では不均一性、分離指標での運動方向の逸脱性を示し統計的に確認された。また、臨床的重症度と軌跡形態および分離指標との相関を認めた。書字動作分析のペン先の速度プロフィールと軌跡形態それぞれの特徴と均一性、および運動学的指標としてのペン先（指先）と手関節の分離性指標から小脳性運動失調症患者の書字動作特性を明確にすることができた。症例数およびSARAの評価項目との関係性に課題はあるものの、確認された特性は本邦では初めてであり新規性に優れており、今後、小脳性運動失調症患者のリハビリテーションにおいて発展性の高い研究であると考え、博士論文として価値のあるものと判断する。

学位論文要旨および審査要旨

〔博士（学術）〕

氏名 辛 奕 羸

〈学位〉種類	博士(学術)	論文項目	日英中「の、of、的」の対照研究
授与番号	博甲国第 31 号		
授与年月日	平成 26 年 9 月 30 日	論文審査員	主査 金田一 秀穂
授与の条件	学位規程第 5 条		副査 今泉 喜一 田中 寛

学 位 論 文 の 要 旨

日英中に見られる「N+の/of/的+N」のフレーズについての対照研究や個別の研究は、従来多くの研究者が関心をもってきた問題の 1 つであり、様々な成果が得られている。統語論の面からの研究、意味論の面からの研究、情報学の面からの研究、翻訳の面からの研究などがある。確かに、「N+の/of/的+N」についての研究は多いが、本研究では更に研究の余地があると考えている。

従来の多くの研究は表層の言語現象について研究してきた。このような研究では次のような問題に答えにくい。

①「の/of/的」は似た文法機能を持つが、なぜ、2 つの名詞を繋いだ後で、言語間に、対応と非対応 2 つの場合を生じるのか。②「の」、「of」、「的」3 者は本質的に、どのような違いがあるのか、また、③その違いは「N+の/of/的+N」の使用に、どのような影響を与えるのか、④文字の背後の認知メカニズムは何であるのかななどである。

実は、それらの問題は「N+の/of/的+N」の本質的問題である。それらの問題に答えることにより、「N+の/of/的+N」の本質的な異同点を明らかにして、言語の表層での対応と非対応の原因をよく説明することができるようになると考えられる。

言語の発展は人間の認知と大いに関係がある。言語は人間の認知を反映する、思惟の外在的な表現形式であるので、全ての言語の問題は人間の認知の問題であると言える。言語の本質についての研究は、つまり、人間の認知についての研究である。そのような研究によって、上述の問題(①～④、つまり、「N+の/of/的+N」の本質的問題)をよく説明することができるようになると考えられる。

また、「N+の/of/的+N」の先行研究において、認知言語学の面から、或いは前言語的構造の面から研究している論文は少ないので、本論文は、従来の研究の不足を補うために、認知言語学の考え方と前言語的構造の面から「N+の/of/的+N」の研究に新しい活力を与えたいと考えている。

本論文は、理論研究と各論の 2 つの部分に分かれている。第 1 章～第 5 章は理論研究であり、第 6 章は各論である。それぞれの内容は以下のとおりである。

理論研究(第 1 章～第 5 章)：

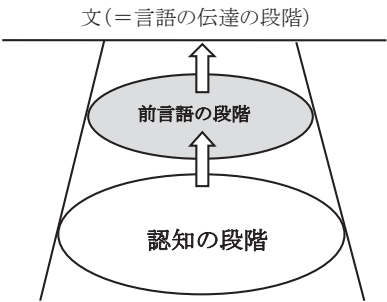
第 1 章は基本概念を扱う。本論文で扱う認知言語学、認知心理学、日本語構造伝達文法、語用論の基本概念について述べ、本論文で使用する新しい用語を説明する。

第 2 章は名詞の意味的な分類について論じる。日本語、英語、中国語での名詞の扱いには違いがあるので、対照できるようにするために、日英中の名詞の分類を限定的なものにして、本論文の基本的な立場を明らかにする。すなわち、本論文では、名詞としては人名詞、モノ名詞、場所名詞、時間名詞、動作名詞の 5 種類の名詞のみを扱うことにすることを論じる。

第 3 章は通時的な「の」、「of」、「的」の研究である。現代日英中「の/of/的」3 者は似た文法機能と意味を持つが、元来その 3 者はどのようなものであったのか、また、どのような歴史変化を通じて、似た文法機能を持つようになったのかについて考察する。通時面から、「の」、「of」、「的」3 者を考察して対照する。

第 4 章は認知文法の面から「の」、「of」、「的」を捉える。現代日英中「の/of/的」3 者は似た意味を表すが、それらの意味は「の/of/的」そのものの意味ではなく、「の/of/的」の前後の 2 つの名詞間に生じる論理関係だと考えられる。それで、「の/of/的」そのものの意味は何であるのかを明らかにする必要がある。この問題が本章の研究の中心である。

第 5 章はフレーズ「N+の/of/的+N」の前言語構造の対照研究である。本章では前言語構造が生じることを前提として、言語の伝達プロセスを考察する。「N+の/of/的+N」の前言語構造のフレームを明らかにして、異同を対照した。言語が文として伝達される以前には図要 1 のようなプロセスが存在するものと考えている。



図要1 文の産出(巨視的視点から)

各論(第6章):

第6章では第3章、第4章、第5章で得られた結論と仮説に基づいて、具体的な例を使って、「N+の/of/的+N」を対照する。最後に、意味と前言語的構造の2つの面から、表層言語で「N+の/of/的+N」を使用する原因、使用しない原因、多義を生じる原因などを考察する。

第6章では各論部分において25通りの名詞の組み合わせを設定するが、これは研究過程の現段階のものである。多くの要素を持つ名詞の組み合わせは膨大な数の体系となるはずであり、また個々の組み合わせの考察にも複雑な要素がからむはずである。これを正面から研究するには多くの時間が必要である。しかし、敢えて第6章を設定する目的は、第1章～第5章で得た仮説の有効性を確認し、今後の研究の指針を得ることにある。このため、研究対象の規模を極力小さくし、25通りというひな形を扱うことになった。各名詞の性質も、総体を捉えず、一側面のみを見ることにした場合も多い。

以上のような内容を持つ本論文は主に以下のような成果を得た:

- ① 日本語の「の」は格助詞であるか、名詞と名詞を繋ぐ別の助詞であるかについての問題を改めて考察し、後者であるとの結論を得た。第3章参照。
- ② 「的」の文法化の経路を明らかにした(「形容詞一名詞一副詞一助詞」)。第3章参照。
- ③ 通時的側面から、「の」、「of」、「的」3者の伝統文法での異同点を明らかにした。第3章参照。
- ④ 「の」そのものの意味を明らかにした。(ある名詞に心的な接触をするために、参照点となる名詞とその名詞の間にメンタル・パスを提供すること。)第4章参照。
- ⑤ 「of」そのものの意味を明らかにした。(1つの存在物における別の存在物との内在的な関係を表すこと。)第4章参照。
- ⑥ 「的」そのものの意味を明らかにした。(「的」と関係がある2つの部分のうちの1つを重点化すること。)第4章参照。
- ⑦ 認知言語学の「概念」を可視化した。(日本語構造伝達文法の「構造」モデルで可視化した。)第5章参照。
- ⑧ 「前言語構造」という概念を提出した。(日本語構造伝達文法の「構造」に当たる。)第5章参照。
- ⑨ 日本語構造伝達文法の考え方を認知言語学に導入した。第5章参照。
- ⑩ 「N+の/of/的+N」3者の前言語構造におけるフレームを明らかにして対照した。第5章参照。
- ⑪ 前言語構造の面から「N+の/of/的+N」の構文意味を明らかにした。第5章参照。
- ⑫ 「N+の/of/的+N」を前言語構造の面から考察して、表層での対応、非対応、多義の原因を仮説してみた。第6章参照。
- ⑬ 「N+の/of/的+N」3者は表現形式では対応するが、意味的に完全に対応することはないということを明らかにした。第6章参照。
- ⑭ 「N+の/of/的+N」を生じる十分条件と必要条件を提示してみる。第6章参照。

本論文では「日本語構造伝達文法」の考え方に基づいて、認知言語学の理論を援用しつつ、「N+の/of/的+N」において、「領有—被領有—R」と「行為者—対象物—R」の構文意味を伝える構造を考えた(構文意味は日本語を基準としてまとめる)。この構造をもとにして、日本語「N+の+N」と英語「N+of+N」と中国語「N+的+N」3者の対照研究を行った。

論文審査結果の要旨

日本語の「の」、英語の「of」、中国語の「的」は、名詞とともに使用されて他の名詞を修飾する機能を持つ。この3者は従来、表層にある文のレベルにおいて、主として翻訳上の関心から、2言語間で対応関係が研究されることが多かった。本論文は、この類似した機能をもつ3者をその本質において捉えて対照しようとしている。依拠する主要な理論は日本語構造伝達文法の深層構造理論と認知言語学の参照点理論である。この両理論に共通する特徴は、人間がある判断を表層の文で表現する前の段階で、事態をどのように認識しているのかを理論的に解明しようとするところにある。

本論文では、まず「の/of/的」3者それぞれの歴史的展開における特質を捉えて対照する。次に、認知言語学の参照点理論においてこの3者の特質を捉えて対照し、そのうち、日本語構造伝達文法の前言語構造においてこの3者の特質を捉えて対照する。この3種類の方法による対照研究の結果として、「の/of/的」3者に関する新しい仮説としての理論が導き出される。そして最後に、この仮説に従って25種類の名詞の組み合わせ事例の検討を行い、結論を得る。

[論文の構成]

目次
序論

- 1 表層と深層—深層の重要性
- 2 問題の所在
- 3 研究課題
- 4 本論文の構成

第一部 理論研究

第1章 基本概念

- 1.1 認知言語学について
- 1.2 認知心理学と「注意」
- 1.3 日本語構造伝達文法と「主体・客体」
- 1.4 語用論と「協調の原則」
- 1.5 本論文の用語について
- 1.6 まとめ

第2章 名詞の意味的な分類

- 2.1 日本語の名詞
- 2.2 英語の名詞
- 2.3 中国語の名詞
- 2.4 本論文で扱う名詞

第3章 「の」、「of」、「的」3者の伝統文法から見た 研究

- 3.1 日本語「の」について
- 3.2 英語の「of」について
- 3.3 中国語の「的」について

学位論文要旨および審査要旨

3.4 「の」、「of」、「的」3者の表層意味の対照研究	
3.5 まとめ	
第4章 「の」、「of」、「的」3者の認知文法から見た 研究	
4.1 日本語の「の」(連体修飾語を構成する用法)について	
4.2 英語「of」について	
4.3 中国語の「的」について	
4.4 「の」、「of」、「的」3者の本質的意味の対照研究	
4.5 まとめ	
第5章 日英中「N+の/of/的+N」の前言語構造と対照分析	
5.1 先行研究と本研究	
5.2 「N+の/of/的+N」3者の前言語構造の形成	
5.3 「N+の/of/的+N」の前言語構造の対照研究	
5.4 まとめ	
第二部 各論	
第6章 日英中「N+の/of/的+N」の対照研究	
6.1 先行研究	
6.2 フレーズ「N+の/of/的+N」の対照考察	
6.3 日英中「N+の/of/的+N」の対照研究(A～Y)	
6.4 A～Y のまとめ	
結論	
謝辞	
主要参考文献	

[論文各章の内容]

序論

日本語の「の」、英語の「of」、中国語の「的」3者の意味と使い方には似ているところがあるが、異なるところもある。これは文という表層での現象であり、このことについて論じるときは、「の」、「of」、「的」3者そのものが何であるのかについて深層構造レベルで解明しなければならない、とし、文という表層表現において異同が存在することについて、原因を深層の構造のあり方から研究する、という本研究の研究方針を述べている。ただし、本研究の設定する深層構造はチョムスキーの生成文法での深層構造とは異なるものである、としている。

続いて、「の/of/的」については日本、欧米、中国で盛んに研究が行われているが、なお研究の余地があるとし、以下の問題点について研究しなければならない、としている。

①辞書には「の/of/的」の意味が「所有」、「所属」、「材料」、「場所」などであると明示されているが、これは「の/of/的」そのものの意味ではなく、深層における「の/of/的」の2名詞をつなぐ機能から発生する表層的現象である。表層での意味が「所有」であるか「材料」であるかは構造のあり方が決定するのである。このことの解明がなされなければならない。

②「の/of/的」の従来行われていた対照研究は表層の言語表現での対照研究であり、表現における「の/of/的」の使用に異同があることが盛んに論じられた。しかし、なぜそのような異同があるのかについては適切に説明することができなかった。本研究では深層構造そのものの対照研究により、その説明が可能になると考える。多義発生の説明もできるようになる。また表層構造以前に前言語の段階の存在を設定することによりニュアンスの存在も説明可能となる。

この①②の研究を進めるに当たって8つの課題を設定することを

述べ、さらに本論文の構成を説明している。

第一部 理論研究

第1章 基本概念

本論文で扱う用語を説明している。認知言語学からは「前景と背景」、「メタファー」、「メトニミー」、「イメージスキーマ」、「プロトタイプ理論」、「参照点理論」について必要な説明を行い、認知心理学からは「注意」について、日本語構造伝達文法からは「主体・客体」について、語用論からは「協調の原則」について説明している。

また本論文で独自に設定する用語として、「重点化」、(文として発話された)「言語」があり、ほかに、「日本語構造伝達文法」の考えから設定した「前言語」、「前言語構造」があるとし、「前言語構造」は日本語構造伝達文法の構造モデルにより示される、としている。

加えて、日本語研究から生まれた「日本語構造伝達文法」の理論を他言語に適用するために、「主体」、「客体」、「属性」の用語の内容を若干変更したことを述べ、さらに「可視的動詞」と「不可視的動詞」について論じている。

本章は第2章以降における論述の理解を助けるためのものと位置づけられる。

第2章 名詞の意味的な分類

本研究では名詞が重要な位置にあることから、名詞をどのように扱うのが研究を進めるうえで現実的であるかについて考察している。日本語、英語、中国語での名詞の扱いには違いがあるので、対照できるようにするためには、日英中の名詞の分類を限定的なものにする必要があると判断し、本論文では、名詞としては人名詞、モノ名詞、場所名詞、時間名詞、動作名詞の5種類の名詞のみを扱うことにした、としている。

3言語の膨大な名詞をこのような形で整理して研究対象にすることができたことは一つの見識であると評価できる。

第3章 「の」、「of」、「的」3者の伝統文法から見た研究

現代語の「の/of/的」3者は似た文法機能と意味を持つが、その本質を捉えるためには、元来その3者がどのようなものであったのか、また、どのような歴史的変化を通じて似た文法機能を持つようになったのかについて把握する必要がある。この認識のもと、(伝統文法の中で)これまで行われてきた先行研究の成果に依拠する形で「の」、「of」、「的」の通時的な解明を行っている。

日本語の「の」については、まず歴史的に発生した「の」の各種の意味・用法について概観して、その全体像を把握している。続いて、本研究に大きく関わる「格」の定義について考察し、「格」は伝統的な国語学での定義ではなく、現代の日本語学研究者による定義のほうが適切であるとしている。ここから、「の」は格助詞には当たらず、格の関わる論理関係にある2つの名詞をつなぐ(名詞で名詞を修飾する)助詞であるとしている。

英語の「of」についても、まず通時面から考察している。もともと外形として強形「æf」と弱形「of」を持つ前置詞的副詞「af」が存在したが、これが「of」に統一され、のちに強形として生じた「off」が「of」の副詞としての用法を担うようになって以降、「of」は前置詞としての意味と用法を保ち、大きな変化がなく、主として全体と部分の関連を表す語として現代英語になっている、としている。

次に、所有格を表す「's」と「of」の異同を検討し、「's」の前に置かれる名詞が有情名詞に限定されることから、「の」、「的」に似て自由度の高い前置詞である「of」を本論文での研究対象にすることを述べている。

中国語の「的」については、中国語文法において重要な位置を占める語であり、先行研究も多い、としている。本研究ではそれらの先行研究に依拠しつつ、通時面から考察している。

まず、後に「的」に連体機能等をゆずることになる「底」について論じる。「底」の歴史的展開を述べ、代名詞から指示代名詞へ、さらに疑問代名詞、連体助詞へと発展したとしている。次に「地」にも触れ、名詞用法のほかに、助詞として描写作用と進行中のアスペクト表示機能があったとしている。

このうち、「的」について論じている。古代中国語においては「的」は形容詞、名詞、副詞、助詞として存在した。形容詞としての「白い」の意味での「的」は、名詞としての「弓矢のまと」になり、さらに名詞「遠く」「標準・目標」「音階の標識」「婦人の赤い装飾」「そびえ立つ山頂」へと意味を拡張した。また、名詞「弓矢のまと」である「的」は、副詞「確実に・的確に」へ、さらに「必ず・きっと」、「いったい」へと拡張した。これらの拡張はメタファーないしメトニミーによるものであるとしている。

宋代において、「底」は連体助詞としての機能とともに内容語としての多くの意味を持つようになっていたが、音声的に近似しており、内容語としての意味を失いつつあった副詞の「的」に連体助詞としての機能をゆずり、「底」自身は名詞に特化することになった。このとき、「底」の持っていた「地」の要素も「的」に引き継がれた、としている。

「の/of/的」3者の意味の対照について、以上の通時的把握から得られた情報に基づき、完全対応をする場合、部分対応をする場合、対応しない場合に分類して論じている。

第3章では伝統的文法研究の成果に依拠して研究を行った結果、「の/of/的」3者の表層での歴史的展開の異同点が明らかになった。すなわち、「の」と「of」は機能語として展開してきたことに特徴があり、「的」は内容語から機能語へと文法化の道をたどってきたことに特徴があることが判明した。これらの異同を捉えたことは、次章以下でこの3者について考察を進める上での理論的基礎を固めたものと評価できる。

第4章 「の」、「of」、「的」3者の認知文法から見た研究

現代語の「の/of/的」は似た意味を表すが、それらの意味は「の/of/的」そのものの意味ではなく、「の/of/的」の前後の2つの名詞間に生じる論理関係だと論者は考えている。そこで、そもそも「の/of/的」そのものの意味は何であるのかについて明らかにする必要があると論者は考える。この章では認知文法の面からこの3者の本質を捉えることになる。

日本語の「の」は、認知文法理論で考察すると、日本語の格助詞と共通する要素を持つ反面、異なる点もあることがわかる。「の」はメンタル・パスを提供することでは格助詞と共通している。しかし、格助詞が意味を持つので心的接触のターゲットを制限することができるのに対して、「の」は意味を持たないのでターゲットの範囲を制限することができない。この点が異なっている。ターゲットの範囲を制限できないため、「の」は多義を生じやすい、としている。

英語の「of」については、認知言語学のラネカーが、「2つの存在物における内在的な関係を表す」と述べている。これは2つの存在物間にある「内在関係」「外在関係」に視点を置いて「on」、「to」、「of」を考察した結果導かれた結論である。しかし、論者は「内在的な関係」という表現では曖昧すぎて、多くの例外を生じてしまうとしている。そこで、論者は現代英語の「of」が、原義である「分離」から派生したものであるとの理論を援用して考察し、ラネカーのいうその2つの存在物は、限定のない2つの存在物ではなく、1つの存在物、

1つの全体から生じる2つの存在物であると考えるべきである、との結論に至った。すなわち、論者は「of」の機能を「1つの存在物における2つの物の内在的な関係を表す」とする。

中国語の「的」が連体機能を持つようになったことは「的」の意味的な通時的展開とは関係なく、音声的な理由によるものであることが第3章で判明した。しかし、認知言語学的に考察すると、「的」がメンタル・パスを提供する場合の「参照点」と「ターゲット」が表層で「的」の前後の名詞となる際に「的」によりこのいずれかが重点化されるという現象があることから、「的」が歴史的展開において一貫して保持していた、あるモノ、ある部分を卓立化する機能がここで発現していると論者は考えている。すなわち、「的」は通時的意味の拡張とは関係なく「底」から連体機能を引き継いだわけであるが、その際「的」は自己に本来備わっていた卓立の要素を連体機能に付加した、と論者は考えている。

論者は先行研究で明らかにになっている「的」の現代中国語での5種類の意味それぞれにおいてこの「重点化」を確認している。

以上の個別の考察ののちに、「の/of/的」3者を参照点理論のモデル図で表し、その異同を形の上で把握できるようにしている。また対応関係も表に示している。

本章では、「の/of/的」3者を認知言語学理論で捉え、その異同について明らかにしたことが評価できる。

第5章 日英中「N+の/of/的+N」の前言語構造と対照分析

本研究では発話表現としてのことばを生じるプロセスは、少なくとも3つの段階から成ると考えている。すなわち、事態を構成する諸要素間の関係を認知する「認知の段階」と、認知した概念を論理関係の形で整理する「前言語構造形成の段階」と、文法と音声をエンコードして「言語として伝達する段階」の3段階である。

この「前言語構造形成の段階」を設置することが本研究の特徴の1つであるが、この段階の存在を確かなものとして表現するために、日本語構造伝達文法の構造モデルに基づいて設定した本研究の構造モデルを使用している。このモデルに基づいて「N+の/of/的+N」の前言語構造のフレームを明らかにする。このため、「隣人の子供が来る/the son of the neighbour comes/邻居的孩子来了」の例を中心に考察を進めている。

この章では、2名詞の関係が構造モデルの上で、第3章、第4章で得られた「の/of/的」それぞれの特徴に従って明示的に表現されるようになり、その異同が形として把握できるようになった。このことが評価できる。

第二部 各論

第6章 日英中「N+の/of/的+N」の対照研究

第3章、第4章、第5章で得られた理論に基づいて、25通り(5種類の名詞どうしの組み合わせで、 $5 \times 5 = 25$)の組み合わせのそれぞれにおいて具体的な例を使って、非常に精力的に体系的に個々の「N+の/of/的+N」を対照している。各例において、意味と前言語的構造の両面から考察を行い、表層言語で「N+の/of/的+N」を使用する原因、使用しない原因、多義を生じる原因を論じている。また、「N+の/of/的+N」を生じる十分条件と必要条件を考察している。

すべてのありうる事象について検証するためには膨大な時間と労力が必要となるが、本章では第2章で確定した名詞5種類に限定して考察することにより、これを可能とした。また多義の生じる原因には実にさまざまな要因が存在するが、ここではこの研究に関係のある要因にのみ限定して考察を行っている。

学位論文要旨および審査要旨

最後に「の/of/的」の対応関係を一覧表にし、「N+の/of/的+N」の意味での対応と非対応について論じている。

本章では、工夫して体系的に設定した多くの実例に当たり、理論研究で得られた理論に従って考察を行っていることが評価できる。

結論

巨視的に見れば、日本語「N+の+N」、英語「N+of+N」、中国語「N+的+N」3つのフレーズは類似の意味を伝えているように見えるが、微視的に見れば、「の/of/的」はそれぞれの意味・機能が違うので、異なる内包意味を伝えていることが判明した。

「の」は論理関係にある2つの名詞を直接つないでしまうので、「N+の+N」の意味はその論理関係を知らなければ決められない。英語の「of」は2つの名詞間に内在的な関係を要求するので、「of」でつながれたとき、内在的な関係があることが「N+of+N」の特徴になる。中国語の「的」そのものの意味・機能は「『的』と関係がある2つの名詞のいずれかを重点化すること」であるので、「的」で2つの名詞をつなげば、「N+的+N」の1つの名詞が重点化されていることになる。(それで、中国語の「的」を使わない「N+N」の形で伝える意味が日本語の「N+の+N」で伝える意味と近いと考えられる。)

つまり、言語の表層で見れば、日本語、英語、中国語3言語は対応するように見えるが、異なる言語には異なる言語特徴があるので、同じ「N+の/of/的+N」という形で表現しても、意味の上では100%の対応をすることがないという結論に至った。

[論文の特徴]

この論文には次のような特徴がある。改めて箇条書きにする。

- ① 日本語の「の」は格助詞であるか、名詞と名詞をつなぐ別の助詞であるかについての問題を改めて考察し、後者であるとの結論を得た。[第3章]
- ② 「的」の文法化の経路を明らかにした(「形容詞一名詞一副詞一助詞」)。[第3章]
- ③ 通時的側面から、「の」、「of」、「的」3者の伝統文法での異同点を明らかにした。[第3章]
- ④ 「の」そのものの意味を明らかにした。(ある名詞に心的な接触をするために、参照点となる名詞とその名詞の間にメンタル・パスを提供すること。)[第4章]
- ⑤ 「of」そのものの意味を明らかにした。(1つの存在物における2つの存在物の内在的な関係を表すこと。)[第4章]
- ⑥ 「的」そのものの意味を明らかにした。(「的」と関係がある2つの部分のうちの1つを重点化すること。)[第4章]
- ⑦ 認知言語学の「概念」を可視化した。(日本語構造伝達文法の「構造」モデルで可視化した。)[第5章]
- ⑧ 「前言語構造」という概念を提出した。(日本語構造伝達文法の「構造」に当たる。)[第5章]
- ⑨ 日本語構造伝達文法の考え方を認知言語学に導入した。[第5章]
- ⑩ 「N+の/of/的+N」3者の前言語構造におけるフレームを明らかにして対照した。[第5章]
- ⑪ 前言語構造の面から「N+の/of/的+N」の構文意味を明らかにした。[第5章]
- ⑫ 「N+の/of/的+N」を前言語構造の面から考察して、表層での対応、非対応、多義の原因を考察した。[第6章]
- ⑬ 「N+の/of/的+N」3者は表現形式では対応するが、意味的に

完全に対応することはない、ということを明らかにした。[第6章]

- ⑭ 「N+の/of/的+N」を生じる十分条件と必要条件を考察した。[第6章]

[今後の課題]

本研究で得られた理論は仮説的段階のものであり、今後多くの事例で検証し、必要とあれば修正を加え、より適正な理論にすることが課題である。また、特に日本語、中国語にある、直接対照の対象となりにくい現象も分析し、それらの扱いについても考察することが課題となる。

[研究史における意義]

機能的に似ていると考えられる「の/of/的」を2者ではなく3者において、しかも深層における本質的な特徴において対照させたことは新しい試みである。日本語構造伝達文法と認知言語学の理論から捉えていることも新しい。研究史においては、この2点が意義あるものとして評価できる。

[評価]

以上のように、本研究は「の/of/的」3者それぞれの本質を日本語構造伝達文法と認知言語学の理論から捉えて対照し、価値ある結果を導いた。この新しい試みとその成果を論じた本論文は内容的にも研究史的にも大きな意義の認められる論文であると評価できる。このため、審査者一同は、論者である辛突羸氏に博士号授与がふさわしいとの判断に至った。

〔博士（学術）〕

氏名 董 昭 君

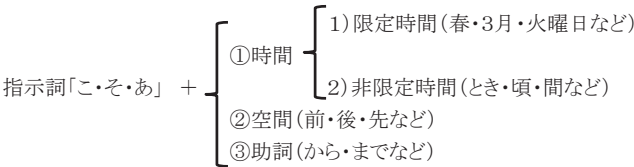
〈学位〉種類	博士(学術)	論文項目	指示詞と時間に関する研究		
授与番号	博甲国第 32 号				
授与年月日	平成 26 年 9 月 30 日	論文審査員	主査	今泉 喜一	
授与の条件	学位規程第 5 条		副査	金田一 秀穂 楠家 重敏 森山 卓郎	

学 位 論 文 の 要 旨

本論文では「日本語構造伝達文法」の考え方に基づいて、認知言語学の理論を援用しつつ、「N+の/of/的+N」において、「領有―被領有―R」と「行為者―対象物―R」の構文意味を伝える構造を考えた（構文意味は日本語を基準としてまとめる）。この構造をもとにして、日本語「N+の+N」と英語「N+of+N」と中国語「N+的+N」3 者の対照研究を行った。

先行研究では、指示詞「コ・ソ・ア」について、現場指示の研究や文脈指示の研究や照応の研究などが多数なされてきた。ところが、指示詞と時間に関する研究については、まだ進んでいるとは言えない。本稿は、時制の視点から、時間を示す指示詞の指示範囲（時制領域の分布）や使い分け、用法などを明らかにして、指示詞「コ・ソ・ア」の本質を解明する。

時間を示す指示詞の種類は多い。本稿では、時間を示す指示詞を次のような三つの用法から研究する。①「指示詞+時名詞」。②「指示詞+空間名詞」。③「指示詞+助詞」。①「指示詞+時名詞」の類は、さらに、1) 限定時間と2) 非限定時間に分ける。



本稿は、時間を指す指示詞の実例を集め、「現在・今」を発話時点にして、町田(1989)の時制についての定義を用いて、指示詞「コ・ソ・ア」を分類し、時制の視点から指示詞を指す時間と指示詞を指す事象・出来事と発話時点の関係をモデル化する。その上で、指示詞は時制によって使い分けがあるという見解を検証することを行った

1) 指示詞「この・その・あの+時間」「とき・春・曜日・ごろ・2010 年・3月など」の時間を示す指示詞を、限定時間の指示詞（この春）と非限定時間の指示詞（このとき）に分けた。限定時間の指示詞の時制の使用率と非限定時間の指示詞の時制の使用率を比較して分析を行った。そして以下のようなことが分かった。

- ・ 限定時間の指示詞と非限定時間の指示詞（「このごろ」などを除く）の時制の使用領域の分布は、いずれも主に「過去」で使われている。「この系」は「過去・現在・未来」の三つの領域で使われ、「その系」は「過去・未来」で使われる。「あの系」は、「過去」にしか使われない。
- ・ 限定時間の指示詞は、「コ系」は、「ソ系・ア系」より多く使われる傾向があり、それに対して、非限定時間の指示詞は、「ソ系」は、「コ系・ア系」より多く使われる傾向が見られる。

2) 限定時間としての「この春・その春・あの春、この3月・その3月・あの3月、この・その・あの+（日・月・火・水・木・金）曜日」の実例を集め、絶対時制・相対時制の視点から、使用領域の時制及び「コ・ソ・ア」の用法や区別などの分析を行った。改めてまとめると、以下の表のようになる。

表一 20「この・その・あの+春、この・その・あの3+月、この・その・あの+（日・月・火・水・木・金）曜日」の時制の使用領域の分布

指示詞	時制がある場合					時制がない場合
	過去		現在 ¹	未来		超時的なもの
	相対 テンス	絶対 テンス	絶対 テンス	相対 テンス	絶対 テンス	
この系 ²	○	○	○	○	○	○
その系	×	○	×	×	○	○
あの系	×	○	×	×	×	×

¹この+（月・火・水・木・金・土・日）曜日は、「現在」という時制の領域で使わない。

²この系は絶対時制で出来事を捉える場合は、「この」は、発話時点から限定された一定の期間（今年の・今週の・この近くの）を指し、その中の一時点を指示し、さらに、発話時点から、その指示した時点の出来事を見ている（例 1、4、5、10、13、128、131、132 を参照）。

学位論文要旨および審査要旨

- ・ 限定時間としての「この系・その系・あの系」の使用領域は、「この系」は、過去・現在・未来の三つの領域で使われている（「この+（日・月・火・水・木・金）曜日」を除いて）。「この系」は、現在の領域でしか使われない（「この+（日・月・火・水・木・金）曜日」を除いて）。「その系」は、過去・未来の領域に使われている。「あの系」は、過去の領域にしか使われない。
- ・ 限定時間の「この系・その系・あの系」の時制的な使用率から見ると、「この系」は、「その系・あの系」より多く使われている。
- ・ 限定時間としての「この系・その系・あの系」の指示詞「この・その・あの」は、絶対時制で出来事を捉えている。特に「この系」の「この」は、発話時点から限定された一定の期間（今年の・今週の・この近くの）を指し、その中の一時点を指示し、さらに、発話時点から、その指示した時点の出来事を見ている（例 1、4、5、10、13、128、132、132 を参照）。
- ・ 限定時間としての「この系」の指示詞「この」は、相対時制で出来事を捉えることもできるが、あまり使われない傾向がある（例 8、9、17、18、134、135 を参照）。

3) 非限定時間の「このとき・そのとき・あのとき」の実例を集めた。絶対時制・相対時制の視点から、使用領域の時制及び「コ・ソ・ア」の用法や区別などの分析を行った。改めてまとめると、以下のようになる。

表—21「このとき・そのとき・あのとき」の時制の使用領域の分布

指示詞	時制がある場合					時制がない場合	
	過去		現在	未来		超時的なもの	其の他
	相対 テンス	絶対 テンス	絶対 テンス	相対 テンス	絶対 テンス		
このとき	○	×	○	○	×	○	×
そのとき	×	○	×	×	○	○	○
あのとき	×	○	×	×	×	×	×

「コ」は絶対時制・相対時制の両方の視点から捉えることができるという結果を得た。「このとき」は発話時点から出来事を捉えることができ（絶対時制）、基準時から出来事を捉えることができる（相対時制）。「ソ・ア」は、「コ」と異なり、絶対時制でしか使用されないと考えられる。「そのとき・あのとき」は、いつも発話時点から出来事を捉えている。時制の使用領域では、「コ系」の時間を示す指示詞（このとき）は、過去・現在・未来の三つの領域で使える。「ソ系」の時間を示す指示詞（そのとき）は、過去・未来の領域で使える。「ア系」は、過去の領域でしか使われないことがわかった。

4) 指示詞「この・その・あの」+ 空間名詞（前・後・先など）の時間を指す指示詞の実例を集め、「現在・今」を発話時点にして、町田（1989）の時制についての定義を用いて、時制の視点から指示詞を指す時間と指示詞を指す事象・出来事と発話時点の関係をモデル化し、指示詞「この・その・あの」+ 空間名詞（前・後・先など）の時制によっての使い分けを確認して検証した。そして、その全体構造を明らかにした。次のようになる。

- ① 「指示詞（この・その・あの）+ 空間名詞」の時間を示す指示詞は、以下のような規則に従うことを確認した。
 - ・ 「コ系」は、絶対時制・相対時制の両方の使い方があがあるが、「ソ系・ア系」は絶対時制しか使わない。
 - ・ 「コ系」の時間を示す指示詞は、過去・現在・未来の三つの領域で使える。「ソ系」の時間を示す指示詞は、過去・未来の領域で使える。「ア系」は、過去の領域でしか使わない。
- ② 「指示詞（この・その・あの）+ 空間名詞」の時間を示す指示詞には、時間を示す方向性がある。
- ③ 「指示詞（この・その・あの）+ 空間名詞」の時間を示す指示詞（時制がある場合）は、指示詞が指す出来事と出来事の関係によって、いろいろに組み合わせることができる（例27と例28を参照）。「指示詞（この・その・あの）+ 空間名詞」の時間を示す指示詞は使用する際に、基本的な原則がある（図—10を参照）。
- ④ 「指示詞（この・その・あの）+ 空間名詞」の時間を示す指示詞（超時的なもの）は、本稿では③の時制がある場合の「指示詞（この・その・あの）+ 空間名詞」の時間を示す指示詞の使用原則（図—10）に対して、超時的なものの「指示詞（この・その・あの）+ 空間名詞（先・後・前）」の使用原則を提案した（図—11を参照）。

5) 指示詞「これ・それ・あれ」+ 助詞（から・まで）の時間を指す指示詞の実例を集め、「現在・今」を発話時点にして、町田（1989）の時制についての定義を用いて、時制の視点から指示詞を指す時間と指示詞を指す事象・出来事と発話時点の関係をモデル化し、指示詞「これ・それ・あれ」+ 助詞（から・まで）の時制によっての使い分けを確認して、検証した。次のようなことが導き出される。

- ① 「指示詞（これ・それ・あれ）+ 助詞」の時間を示す指示詞は、以下のような規則に従うことを確認した。
 - ・ 「コ系」は、絶対時制・相対時制の両方で使用できる。

- ・「ソ系・ア系」は、「コ系」に対して、絶対時制しか使わない。
- ・「コ系」の時間を示す指示詞は、過去・現在・未来の三つの領域で使える。
- ・「ソ系」の時間を示す指示詞は、過去・未来の領域で使える。
- ・「ア系」は、過去の領域でしか使わない。

- ② 「指示詞(これ・それ・あれ) + 助詞(から・まで)」の時間を示す指示詞は、時間を示す方向性がある。「指示詞(これ・それ・あれ) + 助詞(から・まで)」の時間を示す方向性は、対になる。時間の方向性について、どちらもある時点から未来の方向を指すが、「まで」は、時間的到達点を示す(図—14を参照)。「から」は、時間的出発点を示す。(時間の方向性を示すより、一語性が強い「過去・未来を含む幅のある「今」を示す「これから」と、未来を含む幅のある「今」を示す「これまで」など例外)。
- ③ 「指示詞(これ・それ・あれ) + 助詞(から・まで)」の時間を示す指示詞(時制がある場合)は、指示詞が指す出来事と出来事の関係によって、いろいろな組み合わせることができる(例47と例48を参照)。その出来事を除いて、変わらない基礎的なものはある(図—14を参照)。
- ④ 「指示詞(これ・それ・あれ) + 助詞(から・まで)」の時間を示す指示詞(超時的なもの)について、超時的なもの「指示詞(コレ・ソレ・アレ) + 助詞(から・まで)」の使用原理を提案した(図—15を参照)。

以上にまとめたように、指示詞「コ・ソ・ア」は時制によって、使い分けがある。「コ」が出来事について、絶対時制と相対時制の両方の視点で見ることができるのに対して、「ソ・ア」は、絶対時制の視点でしか出来事を見ないことがわかった。つまり、「コ」ではある出来事を述べる際に、人は、無意識に出来事の視点を移動させながら、話していると考えられる。

しかしながら、指示詞と時間に関する指示詞「コ・ソ・ア」が「真の時間・仮定の時間」によって、使い分けられる可能性があるという課題が残されている。つまり、指示詞「コ・ソ・ア」が指す事象の時間が、「真の時間」であれば、「コ」を選んで使う傾向があり、それに対して、事象の時間は、「仮定の時間」であると捉えるときには、「ソ」を選んで使う傾向があると考えられることである。この規則の考察は、今後の研究課題になる。

論文審査結果の要旨

指示詞の研究は、先行研究では、現場指示・文脈指示・照応に関する研究が中心で、時間に関する研究はほとんどなかった。本論文では、指示詞「コ・ソ・ア」の時間に関する研究に正面から取り組んでいる。指示詞を①「指示詞+時名詞」(限定時間と非限定時間)、②「指示詞+空間名詞」、③「指示詞+助詞」の3つの場合に分けて考察するが、考察に当たってはそれぞれの事例を、先行研究にない独自の時制図を用いて細かく分析している。

研究の結果、「コ」が絶対時制と相対時制の両方で使用できるのに対して、「ソ・ア」は絶対時制でしか使用できないということを始め、新たな知見が得られた。

[論文の特徴]

本論文には2つの特徴がある。その第1は指示詞を時間を指示する側面から捉えていることである。従来指示詞は空間的、心理的側面から研究されるのが普通であり、時間に関しては正面から扱われたことはなかった。本論文では指示詞「コ・ソ・ア」を、その関わる時間的な名詞や助詞との関係において、独自の適切な分類のもとに考察を行い、結果として新知見を得ている。

第2の特徴は時間の適切な図示である。従来の時間に関わる研究ではS(発話時点)、E(出来事)、R(基準時点)の記号を用いて出来事間の時間的関係を図示することはあったが、これでは3点の時間的前後関係が捉えられるにすぎなかった。本研究では時間関係を「日本語構造伝達文法」の時相(テンス・アスペクト)の把握法、図示法に学んで発展させた独自の時制図により、絶対時、相対時、出来事の相対的長さ、指示詞等を細かく示すことができおり、時間関係を直観的に把握できるようになっている。

本論文では、収集した事例に表現されている1つひとつの時間関係を分析し、図示による明示的な形でそれぞれの特徴を捉え、これに独自の適切な考察を加えている。

これが本論文の特徴である。

[論文の構成]

目次

1. 研究目的
2. 先行研究
 - 2-1. 指示詞に関する先行研究
 - 2-2. 時間と関係する先行研究
 - 2-3. 先行研究に対する本稿の見解
3. 研究方法
 - 3-1. 指示詞「こ・そ・あ」+ 時名詞についての研究方法
 - 3-2. 指示詞「この・その・あの」+ 限定時間(春・3月・曜日など)の研究方法
 - 3-3. 指示詞「この・その・あの」+ 非限定時間(とき)の研究方法
 - 3-4. 指示詞「この・その・あの」+ 空間名詞(前・後・先など)の研究方法
 - 3-5. 指示詞「これ・それ・あれ」+ 助詞(から・まで)の研究方法
4. 結果と分析
 - 4-1. 「指示詞+時名詞」の限定時間と非限定時間の時制の使用率の調査結果と分析
 - 4-2. 指示詞「この・その・あの」+ 限定時間(春・3月・曜日など)の結果と分析
 - 4-3. 非限定時間としての「このとき・そのとき・あのとき」の結果と分析
 - 4-4. 指示詞「この・その・あの」+ 空間名詞(前・後・先など)の結果と分析
 - 4-5. 指示詞「これ・それ・あれ」+ 助詞(から・まで)の結果と分析

学位論文要旨および審査要旨

5. まとめ
6. 今後の課題
資料
参考文献

[論文各章の内容]

1. 研究目的

指示詞「コ・ソ・ア」について先行研究でなされてきた研究は、現場指示・文脈指示・照応の研究などであり、時間に関する研究は進んでいるとは言えない、と述べ、本論文では、指示詞「コ・ソ・ア」の時間に関する指示範囲や使い分け、用法などを明らかにしつつ、その本質を解明する、とし、指示詞を①「指示詞+時名詞」(限定時間と非限定時間)、②「指示詞+空間名詞」、③「指示詞+助詞」に分けて考察する、としている。

2. 先行研究

指示詞に関する先行研究として、主要な6研究者の研究を取り上げ、本研究との関わりから論じている。次に、指示詞とは直接関係ないが、時間について研究した先行研究として2研究者の研究を取り上げて論じたのち、「今」についての3研究者の考え方に触れている。

指示詞と時制の関係について研究したものは、断片的なものは別として、1件あるのみで、決して多いとは言えないとしている。

本論文では基本的な理解は先行研究と異ならないが、正面から指示詞と時制の関係を研究するために、指示詞と時制の関係を独自の時制図で示して考察することを述べている。また、「現在・今」を扱うための必要性から、先行研究にない2種類のものに分けることを述べている。現実の発話時としての現在を「げんざい・いま」と表示し、それ以外の記録内現在や設定現在などを「ゲンザイ・イマ」と表示する。これとは別に、現在を点として捉える場合と時間的幅と捉える場合の2つに分けている。後者の幅と捉える場合はさらに、過去幅を持つもの、過去・未来幅を持つもの、未来幅を持つものの3種類に分けている。分けられたそれぞれが記号によって区別され、図示しやすくなっており、直観的理解もしやすくなっている。

3. 研究方法

研究データとしての時間指示詞使用例文を青空文庫、Yahoo のブログ、電子版朝日新聞から収集することを述べ、町田(1989)の時制についての定義に基づいて分類することをまず述べている。続いて、例文に見られる時制関係は例文ごとに独自の時制図で精密に示す、としている。こうすることで、指示詞は時制によって使い分けがあるという見解を検証する、と述べている。そのあと、論文において使用する文字・記号の意味を説明している。

次に、指示詞「こ・そ・あ」と組み合わせられる「時名詞」、「空間名詞」、「助詞」それぞれの場合の研究方法を述べているが、「時名詞」の場合は「限定時間名詞」と「非限定時間名詞」の2種類に分類するとしている。前者「限定時間名詞」は「春、日曜日、3月」のように客観的に時間的区切りが定まっている名詞であり、後者「非限定時間名詞」は「とき、ころ、間」のように主観的に時間的区切りが決められる名詞である、とする。

4. 結果と分析

4-1. 「指示詞+時名詞」の限定時間と非限定時間の時制の使用率の調査結果と分析

「指示詞+時名詞」のデータを過去・現在・未来という範疇におい

て分類し、「こ・そ・あ」の使用数と使用率を限定時間と非限定時間に分けて調査した。その結果、次の2つの結論を得た。

- ・ 限定時間の指示詞と非限定時間の指示詞の使用領域の分布は同じである。いずれも主に「過去」で使われている。「この系」は「過去・現在・未来」の三つの領域で使われ、「その系」は「過去・未来」で使われる。「あの系」は、「過去」にしか使われない。
- ・ 限定時間の指示詞は、「コ系」が、「ソ系・ア系」より多く使われる傾向があり、非限定時間の指示詞は、「ソ系」が、「コ系・ア系」より多く使われる傾向が見られる。

4-2. 指示詞「この・その・あの」+ 限定時間(春・3月・曜日など)の結果と分析

指示詞が限定時間名詞とともに使用される場合(「この・その・あの+春、この・その・あの+3月、この・その・あの+(日・月・火・水・木・金)曜日」)の実例を、絶対時制・相対時制の視点から分析・考察し、結果として、限定時間で使用される「この」は絶対時制の過去・現在・未来で使用され、「その」は過去・未来で、「あの」は過去で使用されることが明らかになった、としている。また、「この」は相対時制で出来事を捉えることも可能ではあるが、収集したデータの中になかったことから、あまり使用されないのではないかとしている。

4-3. 非限定時間としての「このとき・そのとき・あのとき」の結果と分析

指示詞が非限定時間名詞「とき」とともに使用される場合(「このとき・そのとき・あのとき」)の実例を、絶対時制・相対時制の視点から分析・考察し、「このとき」は絶対時制・相対時制で使用するが、「そのとき・あのとき」は絶対時制でのみ使用する等を明らかにしている。また、限定時間と同様、「コ系」は過去・現在・未来で使用され、「ソ系」は過去・未来で、「ア系」は過去でのみ使用されることが明らかになったとしている。

考察ののち、結果を3つの図(絶対時制図・相対時制図・反復図)にまとめている。

4-2, 4-3 では日本語構造伝達文法理論の時相図を参考にして独自に作成された時制図を用いて考察を行っていることに特徴がある。その図は、先行研究で使用している発話時と事態の関係を単なるS(発話時点)、E(出来事)、R(基準時点)などの記号で示した図よりかなり直観的に理解しやすい形で示すことができるようになっている。

このように時制図を用いて時間関係を理解しやすく論を進めていること、結果的に新知見を得ていること、結論を3モデル図に集約していることなど、先行研究にない特徴として評価できる。

4-4. 指示詞「この・その・あの」+ 空間名詞(前・後・先など)の結果と分析

指示詞が、時間の意味で使用される空間名詞「先・前・後」とともに使用される場合、つまり「指示詞(この・その・あの)+空間名詞(先・前・後)」の形になる場合について、収集した実例それぞれの時制を1つひとつ図で示し、その異同が形として把握できるようになっている。これらの形をとおして考察した結果、コ系は絶対時制・相対時制の両方で使用するが、ソ系・ア系は絶対時制でしか使用しないこと、また、コ系は過去・現在・未来の三領域で使用するが、ソ系は過去・未来の領域に、ア系は過去の領域に限定されることなどが確認できた。

最後に、時間としての「空間名詞」に伴う指示詞の使用の全体が一目で分かるよう、時制のある場合の4図と超時的な場合の1図、計5つのモデル図に集約している。

以上のような、図による分析、指示詞の時制上での使用の確認、モデル図への集約等は、いずれも独自の研究の成果として評価でき

る。

4-5. 指示詞「これ・それ・あれ」+ 助詞「から・まで」の結果と分析

指示詞(指示代名詞)が時間に関わる助詞「から・まで」とともに使用される場合、つまり「指示詞(これ・それ・あれ)+助詞(から・まで)」となる場合を扱う。それぞれの例文について分析し、図で異同を示したのち、最後にそれらの関係を時制のある場合と超時的な場合の2つの図にまとめている。これも先行研究にはない新たな知見を示す図であり、直観的に理解しやすいものとなっていて、評価できる。また、コ系、ソ系、ア系の指示詞の使用分布についてはすでに述べてきた傾向と同じであることを述べている。これは全体的に一貫しているものであることが判明したと考えられる。加えて、「から・まで」が時間的方向性を持つことについての考察を行っている。

5. まとめ

上述の内容を改めて簡潔にまとめている。本研究により、「コ」が絶対時制と相対時制の両方で使用できるのに対して、「ソ・ア」は絶対時制でしか使用できないことが明らかになったことなどを述べ、さらに、各種の時間指示詞の使い分け、用法などが明らかになったと述べている。

6. 今後の課題

今後の課題として、新たに獲得した仮説、「コ・ア」が「真の時間」を指示するのに対して「ソ」が「真の時間・仮定の時間」の両方を指示するという仮説を検証する必要があると述べている。

資料

4-2 の限定時間、非限定時間に関する事例を資料として集めている。

[研究史における意義]

先行研究では、指示詞は空間的、心理的側面から研究されるのが普通であり、時間に関してはほとんど扱われたことがなかった。本論文は指示詞の時間的側面を正面から研究し、成果を得ている。

また、先行研究の時間に関する研究では、S(発話時点)、E(出来事)、R(基準時点)の記号を用いた簡単な図示が行われていたが、本論文では独自の時制図により、絶対時、相対時、出来事の相対的長さ、指示詞等を細かく示すことができおり、時間関係を直観的に適切に把握できるようにしている。

研究史においては、この2点が意義あるものとして評価できる。

[評価]

以上のように、本論文は指示詞について従来ほとんど扱われることのなかった時間的側面を新しい方法で研究し、新知見を得ており、内容的にも研究史的にも意義の認められる論文であると評価できる。このため、論者である董昭君氏に博士号授与がふさわしいとの判断に至った。

学位論文要旨および審査要旨

〔博士（学術）〕

氏名 山 内 美 穂

〈学位〉種類	博士(学術)	論文項目	「並列」機能を持つ助詞の談話における働き
授与番号	博甲国第 33 号		ー「単独」用法に着目してー
授与年月日	平成 26 年 9 月 30 日	論文審査員	主査 鄭 英淑
授与の条件	学位規程第 5 条		副査 大堀 壽夫 金田一 秀穂

学 位 論 文 の 要 旨

本論では、「トカ」、「タリ」、「シ」など現代日本語の「並列」機能を持つ助詞が、談話において「並列」ではなく「単独」で使用される場合の機能を調査・記述する。

「並列」機能を持つ助詞は、二つ以上の語や句、あるいは節を対等な関係で並列して結び付ける機能を持つ。しかし、現代日本語の特に話し言葉において、これらのいくつかはしばしば二つ以上の語・句・節などを並列に結合せず、一つだけの語・句・節の後ろにつく形式で使用される。このような形式を本論では「並列」機能を持つ助詞の「単独」用法と呼ぶ。「並列」機能を持つ助詞が「単独」で使用されることにより、単なる「並列」されるべき要素の省略ということでは説明できない機能が談話中にもたらされている。例えば、(1)では「タリ」が「単独」で使用されている。

(1)結婚って、したいしたいって言うてる人に限ってなかなかできなくて、まだしなくてもいいとか、興味がない人が、突然結構しちゃうたりしませんか？(Yahoo!知恵袋)

この文脈で「結婚しちゃうたり」の他に「タリ」で並列できる要素があるだろうか。文頭で「結婚って」と主題が提示されているため、「結婚しちゃうたり」の後に「～たり」の横に「～たり」で並列できる要素は他に考えにくい。ではこれは「タリ」並列の省略用法だとはいえない。(1)のような「単独」用法が単なる「並列」すべき要素の省略だけでないとするれば、一体「タリ」の「単語」用法はどのような機能を談話中にもたらしているのであろうか。

上述したような「単独」用法については、これまでいくつかの研究で論じられてきた。しかし、いずれもそれぞれの助詞について個別に分析が行われているものであり、「並列」機能という枠の中で体系的に現象を捉えるという研究は見当たらない。また、「単独」用法は、談話の中でも書き言葉よりむしろ、話し言葉や話し言葉に近いスタイルの書き言葉で見られる現象であるにも関わらず、話し言葉データを分析に使用した先行研究は多いとはいえない。

本論では日本人母語話者 100 人分の自由会話データを使用し、「並列」という枠組みの中で体系的にこの現象を捉え、「並列」機能を持つ助詞の「単独」用法が談話中にもたらす機能を分析する。

本論の対象となる助詞は「トカ」、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」、「タリ」、「シ」である。これらの形式は「～トカ～(トカ)」などの形式で語・句・節を並列できる他、「～トカ」のような形式で「単独」用法が可能である。「ト」、「ヤ」、「カ」、「ニ」も同じく「並列」機能を持つ助詞だが、本論でいう「単独」用法はない。「トカ」、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」、「タリ」、「シ」と「ト」、「ヤ」、「カ」、「ニ」との間には結び付きの強固さという点で違いがあると考えられる。また歴史的に見ると、「ト」、「ヤ」、「カ」、「ニ」が早いものは 8 世紀から遅くても 12 世紀には既に「並列」機能を有していたのに対し、「トカ」、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」、「タリ」、「シ」は比較的長い間「並列」とは全く異なる機能を有しながら、「タリ」は、15 世紀頃、「ノ(ダノ)」は 16 世紀末、「ヤラ」、「シ」が 18 世紀、「ナリ」、「トカ」は 19 世紀になって「並列」機能を獲得している。

「モ」については、現代日本語の「並列」機能と、「一例を提示しながら同類を暗示」する機能とが、既に 10 世紀頃の文献に見られる。この「一例を提示しながら同類を暗示」する「モ」を寺村(1993)では「取り立て助詞」と呼び、その機能を「文中のある部分についてその部分を際立たせ、その結果生じる影の存在を暗示し、その「影」との対比によって、その文の表すコトに特別の意味をもたせることにある」としている。「モ」も「並列」機能を持つ助詞の一つであり、「モ」の「一例を提示しながら同類を暗示」機能は、本論で問題としている「トカ」、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」、「タリ」、「シ」の「単独」用法と深いつながりがあると思われる。

では、「トカ」、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」、「タリ」、「シ」は、話し言葉においてどの程度「単独」使用されているのであろうか。本論では、10 代～70 代の日本語母語話者 100 人による 2 人 1 組の自由会話データ(録音時間は平均 15 分)を使用し、調査を行った。表 1 は話者 100 人の「トカ」、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」、「タリ」、「シ」の全用例を抽出し、「単独」用法と「並列」用法に分け、それぞれが用例全体に占める割合を示したものである。表 1 からは、会話では「トカ」、「タリ」、「シ」は高い比率で「単独」使用されていることがわかる。一方、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」は会話で使用されることは少なく、ほとんどが「並列」用法であることが見て取れる。

表 1 「トカ」「ヤラ」「ダノ」「ナリ」「タリ」「シ」のトークン数と各用法が全用例に占める割合

	トカ		ヤラ		ダノ		ナリ		タリ		シ	
	トークン数	割合	トークン数	割合	トークン数	割合	トークン数	割合	トークン数	割合	トークン数	割合
単独	1537	88.7%	0	0.0%	1	25.0%	0	0.0%	165	80.5%	257	74.7%
並列	196	11.0%	3	100.0%	3	75.0%	5	100.0%	40	19.5%	87	25.3%
計	1733		3		4		5		205		344	

学位論文要旨および審査要旨

この調査結果について本論では次のような考察を行っている。

「トカ」、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」、「タリ」、「シ」は全て「モ」と同様に、「～トカ～トカ」、「～モ～モ」などの形式で要素を並列することができる。この形式において並列する要素をa、b、c…と表し、「トカ」、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」、「タリ」、「シ」、「モ」のそれぞれをXと表すとすれば、[a X b X …]という形式でこれら助詞の「並列」用法を示すことができる。さらに、これら助詞の「単独」用法は全て[a X]という形式で示せる。

Langacker(1987, 1999 他)は、語彙だけでなく語彙が結合した複合表現のレベルにも何らかの意味が結びついており一定の記号的性質が認められるとしている。本論では、「一定の形をもった文法上の構造が一定の慣習的な意味をもつ」という構文(Construction)の考え方にに基づき、[a X b X …]と[a X]をそれぞれ後述するような一定の意味が結びついている。

「トカ」、「ヤラ」、「ダノ」、「タリ」、「ナリ」、「タリ」、「シ」の現代語の「並列」については、寺村(1984, 1991)、森山(1995)が指摘しているように、いずれも「ある集合の成員の一部を二つ以上並べる」という共通した意味を持っている。つまり「aトカbトカ…」「aヤラbヤラ…」…では、aもbもc…も「談話の場における集合の成員の一部」である。この場合の「集合」は固定されたものではなく、談話の場に生じるアドホックな集合である。これらをここでは一つの構文と捉え、(2)のように記述する。

(2)[a X b X …]構文

音韻極:[a X b X …](X=トカ or ヤラ or ダノ or ナリ or タリ or シ)

意味極:[ある集合の成員の一部を二つ以上述べる]

「トカ」、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」、「タリ」、「シ」のうち「トカ」、「タリ」、「シ」は談話で使用される頻度が高い。談話で多用されるうち、一つを提示しただけで、情報の送り手と受け手の間に、「二つ目以降にも同じ集団に属する成員がある」という共通理解が働くようになり、二つ目以降を提示しなくてもよくなる。このことにより、既に安定した言語ユニットである[a X b X …]構文から、「ある集合の成員の一部を提示する」という共通するスキーマが抽出され、新たに(3)に示す[a X]構文へと拡張し、さらに「～トカ」、「～タリ」、「～シ」の使用事例の蓄積によって[a X]構文も定着したと考える。

(3)[a X]構文

音韻極:[a X](X=トカ or ヤラ or ダノ or ナリ or タリ or シ)

意味極:[aを含む「集合」の存在を含意し、aの他にも「集合」の成員が存在することを暗示する]

一方で、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」は今回の調査の結果からは会話ではあまり使用されないと考えられ、現状の使用状況が続く限りは上記のような[a X]構文の定着は起こりにくいと見ている。

「トカ」、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」、「タリ」、「シ」の「単独」用法は、(3)で記述した共通の構文の意味を持つ一方で、更に個別に見るとそれぞれ特有の機能が観察された。それぞれ、頻出するパターンと具体的な会話データを示し、「モ」の「取り立て」用法とも比較しながら考察を加える。

例えば、「トカ」は「並列」では「会話の場で話者の意識に浮かんだ「集合」から候補例を二つ以上あげる。」機能を持つが、これが「単独」使用されると、一種の婉曲表現を可能にしたり、「トカ」の前に置かれた要素が属するカテゴリを示したり、概数を示す機能も果たしている。

「タリ」は「並列」では「複数の事態や動作を並べて例示する」機能を持つが、これが「単独」用法になると、複数の事態や動作の中から一つだけを取り出し、その他の事態や動作を暗示することが可能になり、一種の婉曲表現の他、事態の発生可能性や意外性を示したり、冗談表現が可能になる。

また、本研究の会話データの分析を通して、これまで文レベルの分析では見えなかった「シ」の相互作用的な機能が確認された。本論では特に若い世代に多い「シ」の「単独」用法が会話の中でどのような機能を果たしているかにも説明を加える。その他、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」についても会話データや他の談話データを用いて、その「単独」用法の機能を考察する。

最後に「トカ」、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」「タリ」、「シ」の「単独」用法は、「並列」機能から拡張した新たな働きであり、現代日本語の対話における一つのポジティブな対人ストラテジーとなっていることを示す。

【引用文献】

Langacker, Ronald W(1987) *Foundations of cognitive grammar Vol.1:Theoretical prerequisites*. Stanford:Stanford University Press.

Langacker, Ronald W(2000) "A Dynamic Usage-based Model." In: Barlow and Kemmer, 1-63

寺村秀夫(1984)「並列的接続とその影の統括命題ーモ、シ、シカモの場合ー」日本語学 pp.67-74, 明治書院

寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版

森山卓郎(1995)「並列述語構文考ー「たり」「とか」「か」「なり」の意味・用法をめぐって」『複文の研究(上)』くろしお出版

論文審査結果の要旨

日本語の並列機能を持つと言われている助詞「モ」「トカ」「ヤラ」「ダノ」「ナリ」「タリ」「シ」が、現代語では単独で使われる場合があり、その現象に着目して、それぞれの機能用法について考察した。

【論文の特徴】

それぞれ並列の助詞は、規範的に、並列することとして扱われているのだが、それらが単独で使われている用例が現代語に溢れて

おり、無視できない。

山内は、レイコフ等の構文理論にもとづき、単独で使われるこれらの助詞の含まれる構文を仮定し、並列から単独への用法の説明を、個々別々に考えるのではなく、寺村[1991]などを援用し、統合的、全体的に説明しようと試みている。

現代語コーパスを資料として、理論を実証し、きわめてわかりやすく説得的な議論を展開し、妥当な結論を得ている。

学位論文要旨および審査要旨

[論文の構成及び内容]

全 114 ページ。

研究目的・先行研究・研究方法・結果と分析・今後の展望によって構成され、論理的、明晰である。

先行研究として、寺村秀夫[1984][1991]、森山卓郎[1995]、中俣尚己[2009]を挙げて、現代語における並列助詞の扱いについて研究の全体を概観している。また、此島正年 [1966]をはじめとして、岩田彩志、京健治などの通時的な研究にも目配りされている。

「トカ」「タリ」「シ」などの単独用法の個々の研究に触れた後で、山内は、並列用法を持つ助詞のうちで単独に使用可能なもの「モ」「トカ」「ヤラ」「ダノ」「ナリ」「タリ」「シ」を研究の対象にした。

用例は会話コーパスにかざられている。ホッパー[1998]の創発的文法の考え方、すなわち文法は日常的な使用によって形作られていく、という考え方に基づくものである。

データは、国立国語研究所[2008]『日本語話し言葉コーパス 2004・第 2 版』、宇佐美まゆみ監修[2011]『BTSJ』による日本語話し言葉コーパス(トランスクリプト・音声)2011 年版』さらに、山内の採集したデータが 6 会話ある。話者は 100 人、各世代に均等に分布しており、現代語データとして妥当性が高いと考えられる。

「モ」については、並列、累加、ぼかし、極限の機能を、日本語記述文法研究会[2009]に基づいて説明した。

「トカ」は、並列[集合の代表例]、概数、集合を示す、動詞の名詞化による例示、不確定引用があり、「モ」と同様の言語化されなかった「影」を含意するとした。

「ヤラ」は、並列[集合の代表例]、代表例以外の候補の暗示、対立する項目を上げる慣用的な用法、また「モ」と同様の言語化されなかった「影」を含意するとした。

「ダノ」は、並列[集合の代表例]、代表例以外の候補の暗示のほか、提示される要素が話し手や書き手にとって望ましくない、又価値がないものとして扱われる傾向があることを述べ、また「モ」と同様の言語化されなかった「影」を含意する。

「ナリ」は、会話の場で話者の意識に浮かんだ集合から候補例を二つ以上挙げる。集合の代表例とともに、ほかにもあることを暗示する。いずれにせよ、用例が極めて少なかった。

「タリ」並列、[会話の場で話者の意識に浮かんだ『集合』から候補となる事態、側面を取り出して二つ以上挙げる。]、[会話の場で話者の意識に浮かんだ『集合』から候補となる事態、側面をひとつだけ取り出して、それ以外の事態や側面の存在を暗示する。話者の伝えたい事態を言表しながら、同時にそれと相反する話者の概念も暗示する。この機能により「可能性」「意外性」「冗談」「控え目表現」などが生まれる。また「モ」と同様の言語化されなかった「影」を含意する。

「シ」二つ以上の節を並列し、前後の節を繋ぎ、話者自身又他者の直前か少し前の発話情報に別の情報を並列的に累加する。また単独でも話者の主張を補強する。単独では、その他の「シ」節や話者の主張の存在も暗示する。「モ」と共通のものとして、少し前の発話に、同類の情報を累加し、聞き手に影を浮かばせる。

それぞれの各論は、全体的な視野の中での位置づけが明確であり、理解しやすい。論点が整理されている。

さらに、これら並列助詞の、並列用法における同異、単独用法における同異をまとめて示した。

[研究史における意義]

並列助詞の単独用法については、今まで個別に取り上げられる

ことはあっても、このように全体的な取りあげられ方はされたことがなかった。全体的な視点に立つとき、個々を見ていたのでははっきりしない点が明らかになり、それぞれの相違点だけでなく共通点も明らかになった。

データを口語会話に絞ることで、生き生きとした現代語会話の文法が解明され、創発的文法の現場が示された。

「タリ」「シ」などの分析については、まだ不十分な点が残るが、いずれにせよ、今後並列助詞について分析しようとする研究は、本論文を無視して進むことはできないだろう。

[評価]

本論文は、すでに山内が、日本語教育学会、日本語文法学会また認知言語学会などにおいて、発表してきた論文に基づいており、外部での厳格な審査を通ってきたものである。

内容的には、それらをまとめ集大成したものと言える。これからさらに研究を進めるうえでも、この研究の経験によって得られた科学的な方法論をもとにして、確実に進めていくことが出来るだろう。

本研究科において博士号を与えるにふさわしい論文であると言える。審査者 3 名の全員一致の結論である。

〔博士（学術）〕

氏名 車 穎

〈学位〉種類	博士(学術)	論文項目	中日通訳活動におけるリスクベース分析	
授与番号	博甲国第 34 号			
授与年月日	平成 27 年 3 月 31 日	論文審査員	主査	塚本 尋
授与の条件	学位規程第 5 条		副査	塚本 慶一 修 剛

学 位 論 文 の 要 旨

本稿の序章では、中日通訳活動におけるリスクベース分析を研究する問題意識(切っ掛け)について説明した。中国人通訳学習者として、欧米の諸学説や理論研究をはじめ、更に中日両国における通訳研究文献を収集し、研究する中で、通訳活動は様々なリスクを伴う知的活動であると認識するようになった。但し、通訳活動におけるリスクの所在、そしてリスクの角度から通訳活動を評価する概念が成り立つかどうかについてほとんど論じられていない現状に気づいた筆者は本研究を通じて「リスク」の概念を取り入れ、「リスクベース分析」の評価理念と方法を提示したい。

第 1 章において、まず中国語における「翻译」の概念について欧米、日本と中国の諸観点を紹介し、更に「通訳と翻訳」の相関性と相違性を取り上げて説明した。続いて、本研究のテーマである通訳について「逐次通訳と同時通訳」の職業化までの歴史に触れつつ、より多くのリスクを伴う「同時通訳」に特化して中国通訳業界における諸先行研究を説明した。具体的に「同時通訳」の形式に関して三つのパターンに関する観点を紹介し、更に逐次通訳と比べて同時通訳の優位性、同時通訳向けの専用設備の使用、通訳の品質基準や同時通訳者が備えるべき資質などについて先行研究を説明しながら筆者の見解を論じた。後半の理論研究において、欧米、日本と中国の通訳研究を参照しつつ、中国における同時通訳研究の発展と方向性について論じた。その中に、「通訳者の記憶能力」、「(通訳者)発音のコントロール」、「通訳者の能力評価」のような通訳者自身と密に係る内容もあれば、「省略について」と「ミスについて」のような技術的な内容も含まれている。第 1 章の最後に、高彬と柴明頴(2010)が指摘した中国における同時通訳研究の特徴と問題点を挙げ、中国では欧米の通訳理論に対する研究はまだ発展させる必要があることと、通訳の技法とストラテジーの使用がだんだん通訳研究の主流となりつつあるといった点に注目したい。

第 2 章では、本研究で提唱したい「リスクベース分析」の基本的な考え方について説明した。一つ目は「利益関係(者)」に関する考え方である。通訳活動は通訳者のみならず、会議の主催側、発言者、出席者(聞き手)、機械の設置・修理業者、通訳者を手配するエージェント、マスメディアなど多くのセグメントからなっており、即ち通訳活動は通訳者を主体とし、多くの利益関係者を取り巻く活動であると指摘した。二つ目は経済学や経営学上での「リスク」という概念、また保険会社でのリスクマネジメントについて説明し、通訳活動にも「リスク」の概念を導入してみようと提案した。この第 2 章では新しい観点(リスクベース)から、通訳活動をどう評価すべく、時代と共にどういう点で改善していくかについて、大きな方向性を提示した。即ち、通訳活動に対して、リスクという概念の確立、リスクの洗い出し、更に定量的または定性的な分析、通訳者のプロフィール作成、通訳者のリスク選好などについて十分に継続して研究する価値があると指摘した。

第 3 章では、第 2 章で提示したリスクの概念に基づき、通訳活動におけるリスクの所在について論じてみた。リスクの所在について、すべての可能性を網羅して洗い出すことを目的とせず、いくつの代表的なリスク(種類)に絞ることに留め、リスクの観点から通訳活動を分析することに主眼を置いて説明した。リスクの種類と形態について、十分に検討する余地がある。本章では主に「同時通訳形式」、「非言語的情報」と「言語的情報」におけるリスク、更に「発言者のミス」によるリスクについて事例を挙げつつ説明した。そして、リスクの所在をはっきりと認識することが重要で、それ通訳者の責任のみならず、通訳活動を取り巻く多くの利益関係者にも理解してもらう必要があると筆者が指摘した。

第 4 章では、中国中央テレビ局が同時通訳を介して、東日本大震災の状況を生中継した際の通訳事例に対して、実際にリスクベース分析を実施してみた。通訳事例を分析する中で、重要なリスクを洗い出し、誘発要素とそれによる影響、リスク回避するためのストラテジーなどについて詳しく論じてきた。例えば 4.2 節で取り上げた冒頭 3 句における「追いかけ」で通訳者は突然に 13 秒間の待機時間に遭遇したが、結果的に有効なストラテジーを駆使して何とか無事に通訳(追いかけ)に成功した。リスクベース分析の観点からすれば、「13 秒間の待機」が引き起こすかもしれないリスクをはじめ、セグメント(利益関係者)によって誘発されたリスク、通訳活動への影響、通訳者によるストラテジーの有効性など多くの要素について論じ、様々なリスクの所在を洗い出すことに努めた。これらのリスクの洗い出しとリスクの度合いに対するアセスメントは通訳活動(特に通訳者)のパフォーマンスを向上させるのに役立つと確認している。更に、4.3 節の「ミスによるリスク」で通訳者が自ら犯したミスについてそれぞれ「ミクロ」と「マクロ」の角度から分析してみた。「ミクロ」分析では大きく二つの観点を論じてきた。一つは「問題の引き金」に関する論述である。もう一つは「集中心配分」という同時通訳の固有リスクに関する内容だ。

「マクロ」分析では「ミスを訂正するかどうか」と「ミスを訂正するために駆使したストラテジーの有効性」の観点から、独自の採点表を提案した。「ミクロ」分析は主に通訳者が犯したミスに対して、その内在的な要因(定性的な面)を突き止めることに注目していたが、「マクロ」分析は通訳者が犯したミスに対して、通訳者が取った行動を定量的に分析するものである。4.4 節と 4.5 節は同時通訳活動の中で通訳者が自ら取ったストラテジーによって被るリスクについて説明した。最後の 4.6 節は「理解の乖離」という大きなテーマについて論じてきたが、「自己モニタリング能力の低下」や「ロジック関係の乖離」などの要素は同時通訳活動の中で通訳者を交替させる重要な参考指標にすべきだと提示した。

今後の課題について、リスクの所在をより深く、より広く探求する必要がある。また、それ以上に重要なのは、このリスクベース分析を通じて、通訳者のパフォーマンスをより公正に評価できる体系づくりを実現していきたい。つまり、通訳者が通訳活動を終えた後、第三者によって評価される必要がある。その第三者の評価機関は当該通訳者のパフォーマンスの妥当性について監査とランク付けが実施できる。そして本稿で論じたり

学位論文要旨および審査要旨

リスクベース分析がそういった評価システムの構築において重要な参考になることを筆者が期待する。

論文審査結果の要旨

車穎氏より提出された博士学位請求論文「中日通訳活動におけるリスクベース分析」は、欧米の通訳理論研究の最新成果を踏まえて、同時通訳を中心に、中日・日中の事例を考察し、リスクベース分析に基づく評価体系の構築を提案しようとするものである。

[論文の構成]

本論文の構成は、論理的で分かりやすく、目次 3 ページ、本文 106 ページ、付表と参考資料 91 ページ、計 200 ページでまとめられている。論文は次の各章により構成されている。

序章

- 0-1 問題意識
- 0-2 同時通訳プロセス・モデルに関する仮説の提示
- 0-3 研究方法
- 第1章 通訳に関する先行研究
 - 1-1 中国語における「翻訳」とは
 - 1-2 「通訳」と「翻訳」
 - 1-3 通訳——逐次通訳と同時通訳
 - 1-4 同時通訳
 - 1-4-1 パターン
 - 1-4-2 優位性
 - 1-4-3 設備の使用
 - 1-4-4 通訳の品質基準
 - 1-4-5 同時通訳者が備える資質
 - 1-4-6 理論研究
 - 1-4-6-1 西欧研究文献に関する統計
 - 1-4-6-2 中日両国における同時通訳研究文献に関する統計
 - 1-4-6-3 中国における同時通訳研究の発展と方向性
 - 1-4-6-3-1 中国同時通訳研究が注目している西欧通訳理論
 - 1-4-6-3-2 「省略」について
 - 1-4-6-3-3 通訳者の記憶能力
 - 1-4-6-3-4 「ミス」について
 - 1-4-6-3-5 通訳者発音のコントロール
 - 1-4-6-3-6 通訳者の能力評価について
 - 1-4-6-3-7 中国における同時通訳研究の特徴と問題点

第2章 「リスクベース」分析の考え方

- 2-1 「利益関係」の考え方
- 2-2 「リスク」——言語面での意味合い
- 2-3 「リスク」——経済学・経営学における概念
- 2-4 リスクの洗い出し

第3章 通訳活動におけるリスクの研究

- 3-1 通訳形式におけるリスク—逐次通訳と同時通訳を比較
- 3-2 非言語的情報におけるリスク
 - 3-2-1 なまりが分かりにくい
 - 3-2-2 メリハリがつかない
 - 3-2-3 話速の速さ
- 3-3 言語的情報におけるリスク

- 3-3-1 語彙とそのロジック
- 3-3-2 センテンスとそのロジック
 - 3-3-2-1 「主語＋多数(目的語＋述語)」の構造
 - 3-3-2-2 主語前の修飾内容の情報量が大きい場合
 - 3-3-2-3 情報量が少ない・複雑な述語部分
- 3-3-3 段落とそのロジック
- 3-4 発言者のミスによるリスク
- 第4章 同時通訳事例(日→中)に対するリスクベース分析
 - 4-1 研究事例の選別および説明
 - 4-2 冒頭の3句における「追いかけ」
 - 4-3 ミスによるリスク
 - 4-3-1 リスクベース分析—「ミクロ」角度
 - 4-3-2 リスクベース分析—「マクロ」角度
 - 4-4 単一方向同時通訳活動における「ミス」リスク
 - 4-5 ストラテジーのオペレーションリスク
 - 4-6 SLテキストに対する「理解の乖離」
 - 4-6-1 自己モニタリング低下によるリスク
 - 4-6-2 漢字語彙によるリスク
 - 4-6-3 ロジック関係の乖離によるリスク

おわりに

参考文献

付表

添付資料

[論文の概要]

本論文は、中国における中日通訳研究に立脚し、日本や欧米において主流をなす研究を分析し、中日通訳に対する研究の現状と課題を論じ、たうえで、「リスク」をベースにした評価方法の構築を視野にいれて、通訳における「リスク」の分析をしたものである。

[各章の概要]

序章では、中日通訳活動におけるリスクベース分析を研究する問題意識について説明している。欧米の諸学説や理論研究や中日両国における通訳研究文献を渉猟し研究する中で、筆者は、通訳活動は様々なリスクを伴う知的活動であると認識するに至り、さらに、リスクの角度からの分析・研究が未踏の分野であると気づくに至った、と述べている。

第1章において、通訳に関する先行研究をまとめている。通訳翻訳の概念についての欧米、日本、中国の諸観点を紹介し、同時通訳についてはその優位性や設備の状況、通訳者に求められる資質などにも言及している。さらにここ数十年の研究成果について、現在の中国における同時通訳研究の特徴と問題点を指摘している。

第2章では、本研究で提唱する「リスクベース分析」の基本的な考え方について説明し、この観点から通訳活動の評価やその改善について方向性を提示している。通訳活動は通訳者のみならず、会議の主催者、発言者、出席者(聞き手)、機械の設置・修理業者、通訳者を手配するエージェント、マスメディアなど多くのセグメントを包括する。通訳活動は通訳者を主体とし、多くの利益関係者を取り巻く活動である、とみる。各セグメントの利益関係にマイナスの影響をもたらす「リスク」に係る分析を「リスクベース分析」と呼ぶ、としている。通訳活動に対して、リスクという概念の確立、リスクの洗い出

学位論文要旨および審査要旨

し、更に定量的または定性的な分析、通訳者のプロフィール作成、通訳者のリスクに対する選好などについて継続して研究する価値があると指摘している。

第3章では、第2章で提示したリスクの概念に基づき、通訳活動におけるリスクの所在について論じている。いくつかの代表的なリスクの種類に絞って提示し、この観点からの通訳活動の分析の有用性を指摘している。「同時通訳形式」「非言語的情報」「言語的情報」「発言者のミス」などの状況下でのリスクについて事例をあげて説明し、リスクの所在をはっきりと認識することが重要で、それは通訳者の責任のみならず、通訳活動を取り巻く多くの利益関係者にも理解してもらう必要がある点を力説している。

第4章では、東日本大震災発生時の状況を伝える NHK のニュース報道を、中国中央テレビ局(CCTV)が同時通訳を介して中国国内向けに生中継した際の通訳事例に対して、実際にリスクベース分析を実施している。さまざまなリスクの所在を具体的に洗い出し、それぞれのリスクに対する処理の方略が通訳者のパフォーマンス向上に役立つと論じている。

今後の課題については、リスクの所在をより深く、より広く探求する必要があること。そして、このリスクベース分析を通じて、通訳者のパフォーマンスをより公正に評価・監査・ランク付けできる「リスクベース評価体系」の構築へと発展させたいとしている。

[評価]

本論文は次の五点で評価できると考える。

1、論文の題目が明確かつ適切であり、課題意識が鮮明で、独自の研究視点をもち、中日通訳研究に資するものである。中日・日中の通訳翻訳研究はこれまでもそれなりの成果があったが、欧米の最新の通訳翻訳理論を応用しつつ、中日・日中の事例を考察して、通訳については同時通訳を研究しているものは少なく、リスクの概念を導入して研究したものはまだ見当たらない。通訳活動をリスクマネジメントの観点からの分析するという研究は、従来の中日通訳研究の理論を補完して、中日・日中同時通訳研究の空白を埋めるものといえる。

2、先行研究の把握が適切で、収集した資料が豊富である。中国の通訳翻訳研究、欧米の通訳翻訳研究の資料を最大限に収集し読み込んで纏めている。(第2章)

音声資料は、難度の高い事例を使い、丁寧に整理して分析に備えている。A: 香港・フェニックステレビの時事弁論会 2013. 9.14 「2013 探索中日大智慧(日中関係の大きな知恵を求めて)」の音声書き起こし資料(添付資料③68 頁分) B: 中国中央テレビ局(CCTV)の報道: 「東日本大震災発生後の NHK ニュースを同時通訳付きで生中継したもの」の音声書き起こし資料(添付資料④17 頁分)

3、論述にあたり、図による視覚化の工夫がなされている。同時通訳の分析の大前提としての「同時通訳のイメージ図」を、Robin Setton が提唱した同時通訳モデルを参考にしながら筆者独自のイメージ図にまとめている(p2 図 1)。通訳活動におけるリスク所在を論述する際に、通訳サイクルを示した図(p43 図 9、p50 図 10)を提示している。いずれの図も綿密に作成されたもので、巻末に拡大図をつけている。

4、研究方法・論文の構成のいずれも理に適っている。先行研究を正確にとらえ、その理論を応用して、しっかりとした実証研究をしている。データ、例文の選択も適切で、中日・日中の同時通訳の事例も、中国のトップレベルの通訳者のパフォーマンスの中から厳選した音声資料を書き起こし、定量、定性的な分析を通じて考察と分析を行っている。

5、結論は信憑性が高く、中日・日中の同時通訳研究と実践に大いに参考になる。研究はリスクの概念を導入したうえで、具体的な事例を分析し、リスクベース評価の必要性を力説し、その体系の構築を提案しようとしている。考察と分析はいずれも成功していると思われる。

以上の五点をもって、審査員一同はこの研究の学術的価値を認め、質の高い博士論文であると判断する。口頭発表ならびに口頭試問でも明晰に論旨を述べ、質問には的確に答えて、時間をかけて丹念に作成された論文であることが確認できた。本論文は博士(学術)の学位授与要件を十分に満たしていると判断する。

筆者の車穎氏は、厳しい実践訓練やインターンシップでの実地訓練・研修を経て、通訳者としての実感を持ったうえで、研究に取り組んでいる点も特筆に値する。今後の研鑽・研究によって更なる成果を出すよう期待するものである。